

---

# 世界最速の魔法使い

紅の豚野郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界最速の魔法使い

### 【Nコード】

N4001V

### 【作者名】

紅の豚野郎

### 【あらすじ】

見切り発進しました。

はい、何も考えてません。

ネギま！の世界で縦横無尽する元モトレーサー（合法シヨタな男の娘）の話です。

ひよっとしたらアンチ成分が含まれるかもしれません。

ホモネタ、レズネタがあるかもしれません。ごめんなさい。期待して見に来た人はもつとごめんなさい。大したことないです。基本的に気が向いたら更新方式をとっていききたい。

出して欲しいバイクがあれば排気量、年式に関わらずメーカーとバイクの名前を書いて送ってください。なるべく出すようにします。

### この小説の楽しみ方

?まず服を脱ぎます。

?「地球が百人の村だったら!!地球が百人の村だったら!!」と詠唱しながら先日痛めた腰をさすります。

?ブラウザを開きます。

?アフィリエイトや実験サイトを見て心を落ち着かせます。

?ブラウザを閉じます。

楽しみ方は他にもあります。自分に合った用法を心がけてください。

001 世界最速、死す。(前書き)

やっちゃった。ごめりんこ

001 世界最速、死す。

俺は白波麟<sup>しらなみりん</sup>。しがないモトレーサーだった。

だった、と過去形なのは死んじやったからだ。死んじやったぜ

まあいつかは死んじやうだろうと思ってたが、何故かサーキットコースにいて一般人避けた拍子に転倒した上に突っ込まれるなんて謎の死を遂げるとは。

今日で世界大会優勝したと思ったんだがなあ、などと考えてると、唐突に目の前に女の人が！

「ひゃあー!!」

いや、ビックリすんのは俺だろう。

つてか「あんた俺の前に出てきた!!」

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

「ヒヤッハー!!ここで合ったが100年目エエ!!水だ!!食料もたつぷりあるぜえ!!」

「ごめんなさい!!ほんとごめんなさい!!」

「と、ここまで実は嘘みたいな話ですが嘘です」

「ごめんなさい!!」

「静まれーい!静まれーい!

この紋所が目に・・・静まれーい!

皆の者、静まれっ！静まれっ！静まれーい！  
この俺をどなたと・・・静まれーい！  
ええい！静まれっ！静まれーい！  
さきのモトレーサー、白波の・・・し、静まれーい！  
静まれーい！皆の者、静まれーい！  
白波・・・静まれーい！静まれーい！静まれーい！  
「あわわわ」

……自分でやっついてなんだけど、何コレ？  
と、殺伐とした真っ白な世界にお爺さんが！！

「お主ら……、落ち着かんか」

「うわぁーん、神王さまー！！」

し、神王ー！！

「うわぁーい、おじいちゃんー！！おこずかいちょうだーい！！」

「ふむ、仕方ないのう、って何をやらすんじゃ！」

「おじいちゃんのそついうノリ、好きよ？」

「お主……／＼／」

「おげえええええ、え、え、頬染めんなよ気色悪い！！」

「……」

(俺の感覚で) 30分後

「で?どうしたのおじいちゃん、ごはんは昨日食べたでしょ?」

「毎日食わせる!いやいや、そうじゃなくてな?このミーノがお主の前に顕界したじゃろ?」

「ああしたよ!クッソー!あとちょっとで優勝だったのによおー!  
!チラッチラッ」

「うぜえ!そのお詫びにお主に、まあありふれた話、転生体験させてやるうかと思うての。うぜえ!」

「えっ?生き返るの?俺?マジ?うひょー!」

「とは言っても元の世界では無理なんじゃがの」

「何でさ」

「だってお主もう死んじゃってるし。それでもいいの?ゾンビだけど。あえて発音良く言うならZOMBIEだけど」

「いやん、スプラッタ じゃあ何、その言い分だと代わりの世界とかもあるの?」

「ネギまとか言ったかのう、そんな世界」

「何それ、焼き鳥?焼き鳥の世界?俺ネギはさんでない普通の焼き鳥(塩)が好きなんだけど」

「いや、漫画のタイトルじゃが、しらなんだか」

「俺……バイクと車の事しかわかんねえから」

「まあその世界しかないから嫌ならその魂フォームマットして適当な世界に出すだけだし」

「ったく、しゃーねえな!!」

「いくらこつちが悪いからってその上からはいったい何なの？能力付与とかできるけどどうする？身長伸ばす？」

「身長も体重も最低限あればいいんだよ。出来ることならあと5センチは減らしたい。体重も5キロは減らしたい。バイク乗るとき極限まで抵抗を減らしたい。あとできるなら視力3倍と動体視力5倍」

「じゃあ身長140cmで、体重は36kgと、ちっさ!!」

「この小ささがライダーとしての誇りを俺に与えてくれた。これでさらに世界最速」

「視力が6.6で動体視力は5倍」

「凄かるっ」

「で、魔法とかはいいのか？」

「なにそれこわい」

「漫画の話だから。じゃあ魔力は世界最強の二倍くらいあればいい



かの。その身長と体重だと身体能力も下がるから補強をかけて……」

「えーせっかくやるんだから魔力無限とか身体能力世界最強の50倍とか気前の良い事言えよな」

「まあ良いけど。他はいいのか？」

「ちょっと待って、バイクはあるよな？」

「そりゃもう。何だったらこれをやるっ」

「指輪？」

「知ってる物なら何にでもなる道具じゃ。複数の物にも出来るが一度に思い浮かべた数しか出来ないのと、素材から製法まで知ってる事が最低条件じゃがの」

「えー、俺バイクのことそこそこ知ってるけどそこまでマニアックじゃねえからなあ」

「そんなお主にオススメのあらゆるバイクの知識もやるっ」

「あと車と護身に使えるそうなのと魔法の知識もな」

「体重の99割が面の皮に集結しとんのか」

「ちょうどいよーおじいちゃん!!」

「仕方ないのう、ほれ、魔法発動体がいなくなる能力と不老不死ももっていけ」

こいつ孫とか近所の子供に甘いタイプだ！

「でも不死って……最強なんだから実質不死じゃん」

「それもそうかの。あとは、その身長で大人ってのはちょっと無理があるのう。見た目を10歳程度にしておいてやろう」

「わーい！じゃあもう行ってもいい？」

「うむ、じゃあ達者での」

「よしこーい！じゃあね、おじいちゃん、あとノーム？」

「ミーノです。ごめんなさい」

001 世界最速、死す。(後書き)

次から原作介入です。  
というのは嘘だ

002 世界最速、あと幼女。(前書き)

またもやっちやっただぜ！

原作との折り合いをどうつけるか……ゴクリ……

## 002 世界最速、あと幼女。

「なにこじ」

はい、毎度。白波麟です。

リンちゃんとも呼べよ。

せっかく漫画の世界に来たんだから、それなりに話の中心に居ると思う。

だって見るからに夜中だったのにさっそく30人ほどの農民に囲まれてるもん。

「おいお前、そいつから離れろ！」

「そいつ？」

なんだかちっさい黄色いのがみついていた。

いや、身長差はそんなないんだけど。

「おい、何か離れて欲しい感じだぞ、嬢ちゃん」

「や……助けて」

な、何コレ

「え、じゃあ何？おじさんたちネオロリコン集団はこんな見るからに年端もいかない女の子を一生懸命追い回す作業に忙しい感じ？いや、わかるよ。ちっさい女の子の方がいいんだよな？だってホラ、老けるとその……いろいろ不具合も出るし。」

まあその不具合も愛嬌って事でここは一つな、どうかその農耕具を

収めつつ平和的に話し合いで場を収めるってのはどうだろうっ。」

「ぶざけんじゃねえ！！」

「うわあ！許されないタイプのロリコンだ！！『YESロリータ・NOタッチ』って知らねえのか！びっくりだわ！お前にロリコンを名乗る資格は無い！」

「いいから、いや、よくないけど離れる坊主！そいつは吸血鬼だぞ  
！」

新事実発覚。吸血鬼なら合法ロリとして手を出してOKという事か。

「いやいや、ダメだろ。見るからにこの子の同意貰えてないじゃん。助けて〜ん って言ってたじゃん」

「そうじゃなくて、お前も殺されるっつってんだよめんどくせえガキだなチクショー！」

「え？何お嬢ちゃん、俺殺しちゃうの？」

「こっ、殺さないよ！」

「ホラ、この子もこっ言ってる事ですし、ね、ここは大人である私たちが折れるべきでしょ？ハイハイ、解散！」

「もういいじゃねえか、このガキごと殺しまえばよお」

「え〜？だーめ」

「うるせえ！くらえ！！」

外国の農家が持ってそうな青銅でできたでっかいフォークみたいなのを振り下ろしてくるおっさん。

「うわぁー！やめろよー！！」

そう言って手を振ると、パン！と風船が弾けるような音が鳴ってフォークの先が消し飛んだ。あと俺の服の袖も。

「何をするだアーツ！ゆるさんツ！」

「え？……うわぁー！化け物だぁー！！」

「落ち着け！全員でかかれば勝てる！行くぞ！！」

え？なに今の？世界最強の50倍？すっ。

というか、身体的有利が確定した今、0.001秒を見るレーサーの5倍の動体視力を持つ俺に負ける道理は無いぜ。

「よし、嬢ちゃん、俺の背中につかまれ」

「うん、どっするの？」

「何をする気だ！？」

「ふ、ふはははははは！！決まってんだろ？しっかり掴まってるよっ。」

一帯に緊張が走る。

農民達は手にそれぞれもった農具を構える。  
俺はそいつらをひと睨みした後に

「逃げるんだよオ！お嬢ちゃーん！んッ！  
どけーッ、農民どもーッ！！」

一目散に駆けていく。

「あっ！待てっ！っ！って速っ！！何アレ速っ！！！」

「あ〜〜ばよおお おお (ドップラー効果)」

「撒いたか？」

振り返るも追ってくる気配は無い。 気配とかわからないけど一度  
言ってみたかった。

ともかく、体感速度80km/hで30分も走ったんだから追って  
これるほうが気色悪い。

「お兄ちゃん、きぼぢわるい……」

「失礼な！お兄ちゃんは気持ちいいぞ！？」

我ながら意味わからん。





力を入れる意思がないか、考える余裕も無いくらいじゃないと物を壊すほどの力が入らないみたいで便利。

「恥ずかしいよう」

「うつせえ。しかしどうするかなー。お嬢ちゃん、家帰れる？」

「……」

ふるふると首を振る幼女。

「んーじゃあ今日はこのへんに野宿して、明日町でも探るか。ちょっと待ってな。家建てるから」

そう言っつて簡単なログハウスを思い浮かべて指輪を意識する。すると殺伐とした森の中にログハウスが……！

「すごい！」

「はっはっは！称えよ！」

で、服も乾いたしログハウスの中のベッドに腰掛ける。

「よっつ、んで、嬢ちゃんはどうしたい？」

「私は……もう帰るところが……いから……」

「……そうか。じゃあ……俺と来るか？」

「お兄ちゃん？」

「ああ。きつと、楽しいと思う。お前の辛い記憶を少しでも楽しいものに変えてやれると思う」

「う、うん。よろしく……ね？」

ふはは、頬染めちゃって！惚れたな。

「じゃあ今日は寝るか。おやすみ。えーっと……」

「エヴァンジェリンだよ。エヴァンジェリン・マクダウエル」

「そうか。俺はリンだ。シラナミ・リン。言っとくがシラナミが姓でリンのほづが名前だからな？よろしく、エヴァンジェリン」

「よろしくね、リンお兄ちゃん」

今日はとっても楽しかったね 明日はもっと楽しくなるよね ねっ  
バムート太郎

002 世界最速、あと幼女。(後書き)

誤字脱字、不思議な表現などあれば教えてください。

さて、……さて。

どうしたもんか。

まあ発進しちゃったからにはがんばります。

003 世界最速、助けられる。(前書き)

もうごめん以外出てこないわ。  
バイクについてはあとがきで。

003 世界最速、助けられる。

「何コレ？」

毎回こんな始まり方の気がする白波麟です。

ログハウスで寝て起きたら隣のベッドで寝てたはずの子猫キティがこちらのおふとんにスニークしとりました。

ちなみにもう夕方です。結局昨日寝たのは明け方だったしな。

「んむうー」

「おはよう、エヴァンジェリン」

「んー」

なんだこれが恋か。違うな。

「40秒で支度しなー!!」

「ひゃあ!……お、おはよう」

「うむ、おはよう」

「ほれ、外の湖で顔洗って来い」

まだ眠いみたいだ。

俺はちよっと近場で食べそうな感じのもの（果物とか）をもぎ取って帰ってくる。

「いやあー燃費いいわあー」

「燃費？」

「うん燃費。ほら、お互いちっさいから食い物がちよつとでも大して腹減らないし」

「うん、そうだね」

「あ、燃費といえば!」

「ん?」

食べ終わってからログハウスを指輪に戻してから知識でバイクを出す。

CR80(魔)改(造)。林道だからオフロード車。あとメットとグローブも。

改造箇所は本来レーサーのため一人乗りのところ、二人乗りできる構造に。あと二人とも身長が低いから車高も少し下げている。思い浮かべればできるなんて素敵!抱いて!!

あとは気になるガソリンだが、

「うん、ちゃんと入ってるみたいだな」

タンクキャップを開けて見てみるとガソリン、オイル混合かはわからないがしっかり入っている。

「お兄ちゃん、これ何？」

「これはお兄ちゃんの商売道具の一つだよ。コレに乗って町を探すから俺が乗ったら後ろに乗って全力でしがみついといて」

「また昨日のやるの?」

不安そうに見てくる。

「しかし大丈夫。いいかいエヴァンジェリン。いや、もう長いからエヴァって呼ぶけど、人の背中ってのは乗り物じゃない」

「うん」

「そしてこのCR80は乗り物だ」

「うん」

「要するに全力で走ってる俺の背中よりも乗り心地は良いと思う。少なくとも俺は大好きだ。」

「じゃあ頑張る!」

「あー、うん。くれぐれも全力で掴まっとけよ」

「でもそんな力いっぱい掴まったらお兄ちゃん千切れちゃうよ」

「どひいひいひい!!!そいつは困る!!!と言いたい所だが大丈夫。お兄ちゃん最強やから。ほら、これかぶって乗って」

「うん。よいしょっ」

普通のオフロードヘルメットを渡す。俺もかぶる。



「じゃあ何か話がある時は俺の太ももを叩いて。行くよ」

キックスターターを踏みこむ。

パパパパンと高く大きい音が鳴る。聞いたことも無い機関銃の音はこんなんだろうなと思って発進。

ちなみにエンジンがかかるまでは控えめにつかまっていたエヴァだが、排気音が鳴るなり思いっきり掴んできた。

幸い千切れはしなかったし、背中の中よとした膨らみと、そういえばスカートで乗ってんだよね……ゲヘｗｗｗｗという溢れ出るSP（紳士パワー）でノーダメージどころか一秒ごとに何か全回復してる。気がする。

一時間ほどゆっくり（時速80キロ程度）走ったら遠くに村が見えた。

今回はエヴァの体調も大丈夫そうだ。

あと2キロといったところだろう。バイクを停めて降りる。

タンクを見てもガソリンが全く減ってない。神様やるじゃん。

「楽しかったね！どうしたの？」

楽しかったのか。愛が国境を越えたな。

「ほら、あそこに村があるだろ？」

「え？どこ？見えないよお」

「ああ、お兄ちゃんすっごい目がいいから。とりあえずあるんだ。今晚はあそこで土人の哀れを誘って宿を借りよう」

「?よくわかんないけどお兄ちゃんが言うならいいよ」

お兄ちゃんみたいに穢れきつた子にならない事を祈るよ。  
と、ここで急に地面に横たわり転がりだす。

そして指輪を数本の矢に変えて、

「これで兄ちゃんのを背中を刺すんだ。さあ、早く!」

「お兄ちゃん、いつになく怖いよお」

「いいから!生きるためなんだ。お兄ちゃん世界最強だから大丈夫!  
!さあ、さあ!」

さすがの吸血幼女もドン引きである。

でもためらいがちに背中に矢を当ててゆっくり押し込む。

「あぁっ!一思いにっ!勢いよくやって!!--ゆっくりしないで!!--」

クソみたいなこと言いながら背中に二本と足と肩に合計四本の矢が  
刺された。肩と足は自分で刺したが。

「さて、エヴァ。肩を貸してくれ」

「何で?」

「お兄ちゃん矢が刺さりすぎて歩けない(という設定な)んだ。

そしてはやく村にたどり着いて治療してもらわないと死んでしまう

(という設定な)んだ」

「ええ！お兄ちゃん、死んじやだよお！！！」

「ああ。だからゆっくり行こうな。疲れたら言っただぞ」

「うん。ちょっとのどかわいちゃったな」

何この幼女、狂気を感じる。

とりあえずエヴァに血を与えて村へ向かう。

「あーもうあかん。間もなく死んじやう。これ死んじやうわ俺ー」

「うわあーん！お兄ちゃん！！死んじやだめえええ！！！」

村に近付くにつれ適当にエヴァを煽って泣かせる。  
もうすぐ到着するぜってところでやっと村人の誰かが気付いたのか  
松明をもってこっちに来る。

「おい、どうした！誰か居るのか！？」

「お兄ぢやーん」

「おいどうした！！ひどい怪我じゃないか！いったい誰がこんな事  
を！とりあえずこっちに来い。治療してやる」

「うう、すいま……せん」

「お兄ちゃん死なない？」

「ああ、大丈夫だ。おっちゃんが助けてやるからな！」

……なんか超ごめん、おっちゃん。

『こうして俺は、きこりのおっちゃんに助けられた』

003 世界最速、助けられる。(後書き)

HONDA CR80R2  
79.4cc

25.7PS/12,500rpm

前後ディスクブレーキ。

HONDAのオフロード車です。

競技用のため、ライト、保安用電装はありませン。  
ワインカーとかブレーキランプとか

当然一人乗り用です。

今回行った改造はシートの長さの延長とタンデムステップ(後ろの人が足を乗せる出っ張り)の追加、フレーム補強です。

孫に甘い神様がどんな扱いをしても絶対に壊れない仕様にしてくれるため、実は補強はいりません。

ちなみに、この豚野郎(作者です)が乗ってるCRは前後ドラムブレーキの走る骨董品仕様です。

また『CR80R“2”』と書いてありますが、無印との違いはさしてありません。

ホントはCR持ってるとは言え実は小排気量のロードバイク専門だから詳しくなんです、私。

で、あとがきですが、なんか自分で書いていながら下衆いですね。

人の良心につけこむあたり。このきこりのおっちゃんはひどい目にあわせられないね。

あとエヴァがアホっぽい。

まあ10歳だしこんなもんだろ。

ではまたそのうち。

004 世界最速、発つ。(前書き)

今のところそんな最速っぽくないよね。

これは言い訳ですが、バイト先で書いてその場で投稿してるので、あんまりビッグイベントとか起こすポテンシャルがありません。

鬼の定時退社後にちょっとええ話を入れたい。

## 004 世界最速、発つ。

よーっす、白波の麟でげす。

燐って書くとき急に猫っぽくなるよね。

異常に回復速度も旋回速度も速い俺だけど矢の一本が心臓に到達してました。

エヴァさんほんま容赦ないでえ。

今はきこりのおいさんに世話になってます。

「坊主、何があつたか、話してみる」

便箋上坊主って書いてるだけで俺フサフサだから。

ほら、そもそも日本語じゃないし。

もっと外語っぽい何とか語。限りなくイギリス英語に近い。

俺5ヶ国語ほど喋れるから。

日本語と関西語と英語とイタリア語。あとハナモゲラ語。

何で外国語話せるようにしておいてくれないんだよ神様ったら。

「家が賊に襲撃されて両親が殺されたんだ。妹と命からがら逃げきたんだけど、この村の2キロほど向こうで追いつかれて。妹が無事で良かったんだぜ！」

「苦労してんだなあ」

「たいしたことないんだぜ！」

ちなみにエヴァは騒ぐだけ騒いだらさっさと飯食って寝ました。

俺？マミーだよ。別名ミイラ男。

いまは客間っぽい所でおっちゃんと話してる。

「坊主、名前は？」

「ユナ・マクレーン。妹がエヴァ・マクレーンだよ、おっちゃん  
偽名だよ、おっちゃん。」

「よっしゃ、じゃあおっちゃんが大人になるまで育ててやるうー！」

「ええー！ー！！！！！」

僕たちブラザーズは大人にならないんだー！！  
そうです。ここがネバーランドです。

「気持ちはいがたいんですけどー、あのー、ちょっと困っちゃう  
っていうかー、俺こっに見えて25歳だからあんまり人の、えー、そ  
のーお世話になるってのもー、ホラあれなんで。それにこのくらい  
の怪我なら明日には治ってるから一晩泊めていただいただけで大感  
謝祭ものなんでー、あのー、ここは丁重に男割させていただきます」

「おいおい、目がバタフライしてるぞ。きらめく風になって今すぐ  
君に会いに行きそうな勢いで」

「いやいや、そんな訳が。この話は99割事実なんでホント大丈夫  
です。お礼はしますから。明日中に木とかもう森がなくなるくらい  
刈り尽くしますから」

「あんまりガキが遠慮するもんじゃねえ。今日は寝な」





起き抜けにおっちゃんに挨拶しようと思ったが日光が当たって死にそうになってるっぽいのでエヴァを部屋に置いたまま駆け出す。

「おっちゃんおはー」

「ああ、おはよう。なんだ、もう普通に歩けてるじゃないか」

「世界最強なんで回復余裕でした。今晚にも出ていくよ。迷惑かけたね」

「怪我が大丈夫ってんらいいし、どうしてもっていうなら止めやしないが、昼間に出たほうが安全じゃねえか？」

「いや、うちのエヴァが太陽に当たったら爆発する病気にかかっているからおいそれと昼間は動けないんだよ」

「ふーん。まあ今日一日はこの家も好きに使ってくれてかまわねえから、まあゆっくりしていけよ。妹さんについててやんな」

「ありがとう！おっちゃん超イケメン！」

「はっはっは。じゃあ俺あちょっと出かけてくるぜ」

「おお。あばよー！」

「おいーす！エヴァ生きてるー？」

「生きてるよー。お兄ちゃん」

「吸血鬼なんだから朝には弱いだろ。どこにもいかないからもうちよつと寝ててもいいんだぞ？」

「うん、そうするよ。おやすみー」

「そうじつしてるうちにもう日が暮れたとさ」

「誰と話してるの？」

「世界の意思」

「じゃあおっちゃん、俺たちもう行くよ」

「おう、そうか。この家の前の道をおうちのほうに行くところちょっとした町がある。次はそこで休むといいだろう。あと大したことはできないがこいつをやるよ」

「これは？お金？」

「ああ。久々に孫に会えたみたいだな。小遣い程度だが持って行きな」

「あんたって人は……また来るぜ！」

「おお。達者でな」

「ばいばい」

この世界のおっちゃんの孫煩悩率と達者率は異常。

一瞬きりがいいかなとか自分でもよくわからない事思ったけどバイクに乗らなきゃ始まらない感じの世界の意思がどうか。

「さて、行くか、エヴァ！」

「うん！」

そして無事とわかるやまったくこちらの体調を気にかけない狂気の幼女。

いや、別に文句もないんだけどな。

しかしホント世話になったな。

アンタのことは忘れないぜ、おっちゃん。

ちなみに他の村人は顔も見ませんでした。

という訳で、比較的静かなHONDAのリード90（ちょっと改）を出す。

具体的にいうとキャブレターを大径にして圧縮比を少し上げただけのやつ。

あとサスペンションも柔らかいのを入れてタイヤをブロックの  
いやつにしてるけど、こっちは改造ってほどじゃないしノーカウ  
ト。ノーカウトだから！

ちなみにリードは大きめなスクーターだ。  
荷物もいっぱい入る。載せる荷物無いけど。

「ほら、昨日のより速くないけど昨日のより乗りやすいよ。おいで  
ってちよつと待てキティ、前に座るな。後ろに座れ」

「えー」

「んええー じゃないの！お前そこだけ危ないと思ってるの  
よ。吹っ飛ぶわよ」

「はい」

「ほら、行くわよ」

ペペペペペーとゆっくり走り出す。

「あの……ねえ、お兄ちゃん……」

「どっしたー？」

「私、ね。……ホントに人を殺したんだよ？」

おいお前、そいつから離れる！

お前も殺されるっつってんだよ

「……ん」

「お……お兄ちゃん？」

クソツ！轢いたのか！？

あんまり気にかけるな。レースじゃよくある。ただの事故だよ、

麟

「……まあ、よくある話だ」

「……」

ベーーーーッッッッッッッッッッッッ……

## 004 世界最速、発つ。(後書き)

HONDA リード90  
89cc

8.4PS/6,500rpm

前ディスクブレーキ、後ドラムブレーキ

HONDAのスクーターです。

2stでなかなか速い。んで意外とパワフル。

巨大な車体だけど意外と取り回しが良い。

二灯式なのに妙に暗い。

特筆すべきはその収納性で、シート下のメットインにはフルフェイスとハーフのヘルメットを一個づつ入れてもまだ余裕がありそうな上に、フロントカバーにも鍵付きの小さな収納がある。

ちなみに隣の出したリードはライトのON/OFFスイッチが付いた骨董仕様です。

豚野郎はこのスクーターが一番好きです。

さて、あとがきです。

面倒くさくなってる感が否めない仕上がりになっちゃいました。

正直この話はいらなかったよな。

最後の方のリードの上での会話が若干シリアスっぽいですが、掘り返す予定は特にありません。

気が向いたときに覚えてれば。

ここからは巻きで進めていきたい。

今回は前回以上に見直しが無いのでかなりひどい内容になってると  
思います。

とは言っても、仕事の必要書類よりは見直してます。

まあ小銭をもらえるイベント程度に見ていただければ。

ではまた。



005 世界最速、布告する。(前書き)

僕は……僕は何をしたいんだろう。

帰宅したらちよつとええ話書きたいって言ってたけどまだ帰宅してないからええ話書かなくてもいいよね。

ってかひつどいサブタイだなあ。どんだけ焦ってるんだ。

005 世界最速、布告する。

お兄ちゃん、HIP HOPで食っていいことと思うんだ。  
白波(25)です。あ、麟の方です。

めっちゃふくらはぎかゆいけどがんばってエヴァの生い立ち的な話とか聞きながら走ってます。

「だから殺したんだ。私、もういい子じゃないんだね」

「そうか。悪い子も嫌いじゃないぞ、俺は」

「ホント？」

「まあ俺が悪い子だしな」

「んー」

「何それ」

べし、べし

「おい、叩くなキティ」

「キティって何？」

「キティは子猫キティだろ」

「知ってるよ！」

「ふはは」

「んむー」

「お、おっちゃんの言ってた町ってあれか。案外すぐ着いたな」

「うん！」

「御免！！」

宿屋を見つけたので扉を叩きながら叫ぶ。

「誰だ！」

「俺だよ！俺、俺！せめて扉開けて言えや！」

「何だガキがガキ連れて。お前にはまだ早いんだよクソっ！クソッ！俺だってなあ、俺だってなあ！！」

「うるせえ&うるせえ！宿泊客だよクソボケ！これで足りる？」

おっちゃんにもらったこづかい袋を見せる。

この世界の通貨とか知らないし。

「えー……マジ？こりゃパンくらいしか買えないわー。しかもカンパンのほう」

おっちゃんホンマにごづかいやないかー！

「まあガキにしちゃ頑張った方だと思っつよ？うん。ほら、今日はもう遅いから帰りな」

「帰る家ないもん……」

「エヴァア？」

「グスツ……帰りたいくても、帰れないんだもん」

うわあ、荒ぶる幼女。

「つつても俺も商売でやってんだしなあ。何があつたかしらねえけどさ……ん？コイツは……。おい、ガキ」

「んだよオッサン」

「うわ、利がないと分かれれば即この態度。怖いわー。何、ちよつとした手伝いしてくれるなら泊めてやってもいいって話だよ」

「何？」

「まあ入れ」

何ここ最近のハートフルコメディっぷり。すっごいやん。

「話は簡単だ。お前は明日この平原の先にある森の木を10本倒してこい。そこそこ太いやつをだ」

「倒すだけか？」

「ああ。たいして難しくないだろ？」

「まあそついう事なら」

「じゃあ今日はもう寝る。明日は叩き起すぞ」

「ああ」

「ねえ、お兄ちゃん」

「何だ？」

「私あの人あんまり好きじゃない」

「俺もだ」

「……おやすみ」

「あまりにナチュラルにこっちの布団に潜り込んでくる事にはもう突っ込まんぞ」

「おいコラ起きろクソガキ!!」

「いや、テンション高い所、申し訳ないけどもう起きてるから」

「じゃあさっさと木切ってこい。ほら、のこぎり」

「あいよ。ああ、妹は置いて行くぞ。日光に当たったら爆発するか  
ら」

「嘘にしてももう少しマシな嘘つけよ。じゃあな。いそがねえから  
ゆっくりしてこい」

……妙だな。つつーか分かっではいるんだけど、変に疑って何もな  
いとそれはそれでまずいだろうし、まあさっさと終わらせるか。

森までは5キロってところか。開けた所だから前の森の中から見  
た2キロよりはずっと見やすい。

バイク乗ってくほどの距離じゃねえけど急ぐからな。一応早いの乗  
ってこいこう。

HONDA NS250Rをネイキッドにしてまたがる。

杞憂だったらしいのにな。

と、もうついた。

さすがに速いわ。

「この辺りの木はまだ細いな。奥の方が太いか。さっさと終わらせ  
んべんべ」

「っと、待ちな坊ちゃん」

小汚い風貌の男が4人、木陰から出てくる。

「ん？なんだオッサンら。俺のケツはバイク専用だから」

「悪いがここで君の冒険はおしまい。お前は死んで1万ドルの賞金首が手に入るって訳だ」

「賞金首？」

「しらねえのか？お前といっしょにいたメスガキだよ  
なるほどなるほど。」

「どうした？命乞いしたら笑ってやるぞ？殺すけどな」

「ああ、残念、ホント残念だ。いい年してやっていい事とやっっちゃいけない事の区別もつかないなんてな……がっかりだ」

「なに言……」

一番近くの男を殴り飛ばす。

パン！という音とともに首から上が消し飛んだ。

「おい、おま……」

近づいてきた男の腹を横から蹴ると胴が上下に分かれる。

「ひ、ひいいいいい！！」

「ち、ちよっと待ってくれ、俺たちは別にこんな事したくなかったんだよ！」

2人の返り血を浴びた男は青ざめて命乞いを始めるが、クールな俺はそんな男に「俺だってしたくなかったよ！死ぬ！」と声をかけると、すぐに帰るためにバイクを出す。

HONDA NR500（改）。

アンダーカウルを外し、ロングスイングアームで直進安定化、及びワイリー防止を図る。

タイヤもブロックパターンのものにしてすぐにバイクを押し、エンジンをかける。

当然だが、草原で後輪が滑る。

気にするな。俺は世界最速だ。滑ろうが、振られようが、回すだけ。さすがに死ぬ前だったら、この車格だと身長も体重も低すぎて扱いにくかったが、今は視力も力も安定している。

焦ってはいるけど超乗れてる。いけるぜ。むしろいけてるぜ俺。

ともなれば2分もしないうちに着くのは当然。なんか30人くらいが宿屋の周りを囲んでいる。

胸糞悪い。

1人がこっちに気付いたみたいだけど、もう遅い。

進行方向の真横を向いて吼えるV型4気筒をそのまま人の群れに突っ込ませる。

みんな慌ててよけたおかげで誰も轢かなかった。

バイクを人殺しの道具には使いたくなかったし。結果論だけど。

「と、ここで殺伐とした宿屋にお馬さんに乗ったナマハゲが登場。

いい子も悪い子も無差別に干切って鼻毛干切って鼻毛まーす！！」



壁を突き破ってバイクを振り回す。

「おに、い、ぢゃあ、ああん!!!!!!!!!!」

「げぶおああああああああああああああ!!!!!!!!!!」  
「！」

ロリっ子に抱きつかれて俺は死んだ。スイーツ（株）

「リア充の100倍リア充な俺が迎えにきたけど大丈夫だったか？」

「宿屋のおじちゃんに縛られそうになって……怖かったよー」

「おーよしよし。で、おっちゃんは？」

「……」

「ア 倒れた壁の下

急いでおっちゃんを引つ張り出して動かないように踏みつける。  
宿屋の周りを囲んでた奴らが遠巻きに見てくる。気に食わない。

「で、俺のエヴァに何してくれようとしてた訳？」

「“俺”のだなんて……」

「へへ。照れるなよ。俺まで恥ずかしい。で、何しようとしてたの？」

「お……俺は別に何も……」

「お前がどうしようもなくクソみたいな脳みそしか持ってないみたいだからもう一度だけ聞いてやる。

聞き返したら殺す。黙っていても殺す。後でウソを言ったと分かったら、また殺す。逃げようとしても助けを求めても命乞いしても殺す。体の末端からインチ単位で削り落して殺す。

何で俺がここに居るか考えなかったの？馬鹿なの？死ぬの？お前のお友達は大した奴らだったよ。俺1人に5人でかかってきても10秒で終・わ・り

まあ、死んだのは2人だけだったけど。で、よく見たらわかるよな？お前の上に乗ってる足だよ。この足に着いている赤いのはいったい何でしょうか？あれ？もう黒くなってるわ。

で、俺のエヴァに何してくれようとしてた訳？」

「や、やめっ、ぎゃあああー！」

「はいペナルティ1個目。まずは足の指な。次はどこがいい？」

「そっ、そいつを……領主に差し出せば、1万ドル手に入る、から」

「何？1万ドルってそんな大金なの？そんな端金でこの宇宙1かわいい女の子にひどい目合わせていいと思ってるの？」

「お、お兄ちゃんつたら……」

「そ、そんな化けも」

グシャ……って？

ああ、踏み抜いちゃったぜ

あーあ、やっちゃった

まあ仕方ないよな。何かすっごい不快い話しそうな雰囲気だったし。

「お前一人を人殺しにしておけるかよ」

「そんな……／＼／」

「おいエヴァ、こい」

「うん、お兄ちゃん」

俺はエヴァを抱き込み叫ぶ。

「いいかクソども！俺の名前は白波麟だ。んで、こいつが俺の大切な家族、エヴァンジェリン・マクダウエルだ。

アレだ。とにかく広める。エヴァンジェリンを狙う奴はその悉くじつじつを白波麟が殺すと。わかったな？」

周りを見渡すが、全く反応がない。

俺は、俺より少し背が高い程度のガキを呼びつける。

「おい、そこのガキ！こっちに来い」

「ええっ……早く」は、はい」

助けを求めるように周りを見たが、そのガキを中心に人が引いていく。

諦めるような顔でこちらへ歩いてくるガキを超にこやかに迎える俺。

「俺が怖いか？」

耳元に顔を近づけて聞く。

「そ、そんな……」

「その恐怖を伝えて回れ。エヴァに手を出せば、白波が殺すと。いな？」

「は、はははいいいいいい」

「最低な返事だ。これをやるう」

ここを出る前に渡されたのこぎりをそのガキにあげる。

「ん？何？不満そうだけどいらないの？」

「いえ、まさかそんな……」

「ああ、そうなの？俺なら絶対要らねえわー」

「え、ええええええ！？」

「おいエヴァ、行くぞ」

「うんお兄ちゃん」

と、倒れたNRを見ると

「す、」

「す？」



005 世界最速、布告する。(後書き)

HONDA NS250R  
2st

249cc

45PS/9,500rpm

前後ディスクブレーキ(前は二枚)

えげつなく速いフルカウルのレーサーレプリカです。

レプリカだから公道走行可能。だけど全力のポテンシャルは街中では出ないだろうね。

本文中に『ネイキッドにして』とか書いてありますが、カウル外してタイヤをブロックパターンに変えただけです。

豚野郎<sup>わたし</sup>が次買おう、次買おうと思いついて買って買いついたバイク。

杉ちゃん様にリクエストをいただきました

HONDA NR500

水冷4st

499.49cc

128ps/19,000rpm

4気筒、90°V型、DOHC32バルブ、全シリンダツインスパーク

という男のロマンを詰め込んだ品。

実はすぐにでも出したいけど道路が舗装されるまで大分かかるし…

…という葛藤の未出た妥協点が「アンダーカウルレス」と「ロングスイングアーム」です。

ウィリー防止とか直進安定性とか本文では書いてますが、言い訳です。

ドリフトしたかっただけなんです。

エンジンは押し掛けなんで体力が要ります。きっと。

上記のステータスは1982年の最終型のものです。

あとがき

自分でも何したいのかわからない。

俺がわかんないんだから他の人はきつともっとわかんない。

戦闘描写って何だ。振り向かない事さ

バイクって何だ。ためらわない事さ

そんな感じで、ひよっとしたら大幅手直しをするかもしれません。

(多分しません)

次こそ家で書くので少しはましな文章に仕上げたいです。

追記

書こうと思って忘れてた。

今14世紀って設定だけど『ドル』って通貨単位が出るのは16世紀だから、文章中のドルは

「現在の価値に換算して3000万円である」

とかそんな感じに認識していただければ是幸い

さらに追記

本文にNRをV8とか書いてたけどV4なので修正しました。

ってかあとがきに4気筒って書いてンじゃないあたい。

超恥ずかしいノノノ

指摘してくださってありがとうございます、杉ちゃん様。

006 世界最速、魔法を覚える。(前書き)

逆にここまで魔法に触れなかったのはどういうアレなの？



006 世界最速、魔法を覚える。

「お兄ちゃんは、強いね」

「どうしたんだ？急に」

「私ははじめて人を、殺したとき、怖くてずっと逃げてた。しばらくは何もたべれなかったもん」

「ああ」

「でも何より怖かったのが、溢れ出てくる……血をみて……おいしそうなんて思う自分が一番……」

「イインダヨ。キニスンナヨ。俺だって初めて人を殺しちゃった時はそりゃもうびびったさ。アレはスプラッタだったなあ」

私のことを心配してくれるお兄ちゃんが好き。

「でもお兄ちゃんは昨日……」

「ああ、別にアレが初めてってわけでもねえし、それにホラ、俺みたいなのは多少狂ってないとまともじゃろうなんて思えないしな」

まるで自分のこと悪く言ってるのに自身満々なお兄ちゃんが好き。

「そうなんだ。ねえねえ、お兄ちゃんの仕事ってなんなの？」

「レーサーって知らない？」

「れーさー？」

「ああ、バイクでどれだけ速く走れるか競う競技なんだけどな、知らないか」

私の知らない事を知ってるお兄ちゃんが好き。

「うん。ごめんね、お兄ちゃん」

「あーあー、別に！別に気にしてませんですしおすしー！」

普段は大人の人みたいなのに急に子供っぽくなるお兄ちゃんが好き。

「ふふつ、お兄ちゃんかわいい」

「あつたりまえだろコノヤロー！子猫ちゃんのお兄ちゃんは世界一かつこよくて世界一かわいいんだからな」

私のこと、キティって呼ぶお兄ちゃんも好き。

「お兄ちゃん大好き！」

「バカお前俺のほうが俺のこと好きだし」

「そんなことないよお」

「いいや、そんなことあるね。んで俺のことが大好きな俺は、俺よりエヴァの方が好きだぜベイベー」

お兄ちゃん大好き！！

どうも、砂吐きそんな諸君。

ちっさいリア充代表の白波麟（裏声）だ。

昨日、アレからそこそこ走ったあと、またえげつなく良いタイミン  
グで湖があつたからログハウスを建設してお話してたらいつの間  
にかイチャラブ空間が出来上がった。  
ンッフｗｗｗｗ恐ろしい話です。

ちなみにここまでくっさいセリフを言えるのも普段の努力の賜物さ。  
ほら、レーザーってヒーローやん。ヒーローってかっこいいやん。  
要するに俺かっこいいやん。

まあそれでも童貞なだけ。

いや、ホラ。こっちにも選ぶ権利とかそんな話。

俺がロリコンだからとかそういう事実しか一切無い。

あれ？

ちなみに明日から魔法の修行でもするつもりです。

だって今まで「世界最速の魔法使い（どや顔）」とか言ってたのに  
魔法全然使ってない。

タイトル詐欺にも程がある。

明日から本気出す。（出展・未来訳聖書）

チュン……チュチュン……

チュチュチュチュチュン……

レーレデデデー

スズメかと思ったか？ インベーターゲームだよ。

「ハツ……なんだ夢か」

「んうー……」

寝る子は育つって言うけどどんだけ育つ気なんだろうねこの子は。

まあ吸血鬼だし朝に弱いのも仕方ないのか？

起きるまで待ってればいいか。

まあ俺も眠いしもう少し寝とこう

「んうー……っはあ」

「お兄ちゃん……寝てるの？」

「すー、すー、はー、すー、はー、はー、すー、はー（二重息吹）」

昨日一生懸命頑張ってくれたもんね。

私のために……なんて思っているのかなあ／＼／

「じゃあ私も……もうちょっと……」

「ふぁー……あ あ あ」

「あー、寝すぎて腰が痛い。つてもう夕方じゃん。おい起きろー、  
どんだけ大きくなるつもりですかー」

「うん……お兄ちゃん？」

「おはよう、キティ」

「おはよ、お兄ちゃん」

「って全然早くねえんだよお！魔法の練習どうすんだよ俺！今からやったらいいのか、そりゃそうだ！」

「ど、どうしたの、お兄ちゃん？」

「いやね、アレだよ。今日魔法の練習しようと思ってたんだよ」

「じゃあ私も練習いっしょにする！」

「いっしょにするつつつても俺魔法なんか使ったこと無いし何も教えられないと思うぞ？」

「え？でもお兄ちゃん魔法使いなんでしょ？」

「いや、当然、世界最強の魔法使いだけどな、でも使ったことは無い。まあ物は試しだよな。とりあえず外出るか」

「うん！」

セイホー。つつーわけで魔法の練習を始めます。

「お兄ちゃんの魔力ってすごいからきつと魔法も凄いよ！」

「何？そんなのもわかつちやうわけ？」

「吸血鬼だもん！」

「やっぱりエヴァはすごいな」

貰ってきた記憶からー何かお手軽っぽいのは……

お、魔法の射手か。あとは火よ灯れ？勝手に灯ってる。風よ？火よ？その続き何だよ？

「プラクテ ビギ・ナル 魔法の射手・光の一矢」

指先よりちよつと向こうから出てきた光の棒がえげつない光量と音量を撒き散らしながら着弾点から半径20mを焦土に変えた。魔法ってすっごいな。

「お、お兄ちゃん？」

「あ、ああ、エヴァ」

「多分お兄ちゃんが最強だからこんななってるだけで、普通はこ  
うはならないと思うよ?」

「……世界最強も良い事ばかりじゃないって事なんだろうな」

「落ち込まないで、お兄ちゃん」

「おちこんでなきゃ、おちんこもでてないよ。何言ってるんだい」

「?????」

「じゃあ次はエヴァやるか?」

「でも私杖なんて持ってないよ」

「ああ、そうか。ちょっと待ってな。えーと、杖、杖……って杖無  
くても魔法は使えるみたいだぞ?」

「ええ、そういえばお兄ちゃんも杖は使ってたよね」

「いや、吸血鬼は無くても使えるらしい。俺は吸血鬼じゃないけど、  
ほら、最強だから」

「お兄ちゃんだもんねー」

「ああ。じゃあやってみる……前にだ。エヴァは魔法を使えるよう  
になったら何をしたい?」

「私は……空飛んだり、お兄ちゃんと遊んだり、困ってる人を助け  
たりしたいかなー」

「うんうん、お兄ちゃん自慢の妹だな。でもお兄ちゃん独占欲も世界最強だから俺以外に優しくされると少し寂しい」

「ええっ！じゃあ困ってる人は助けないよ！！」

「それもどうかと思うけど、まあ状況により、だな。それも追々勉強してもらいたい所存です。まあ、使ってみない事には始まらないし、いっぺんやってみ？さっきお兄ちゃんの言ってた呪文そのまんまで」

「うん！ プラクテ ビギ・ナル 魔法の射手・光の一矢！」

ぼすん……

ぼすん……って……

「うう……」

「ちょっと待ちたまえ！！泣くにはまだ早いぞ妹様よ！！」

「うえ？」

「人には向き不向きがあつてな、光の矢が向いてなかったただけかもしれない。

がんばればがんばれできてる絶対できるがんばれもつとやれるって！！

やれる気持ちの問題だががんばれがなばれそこだそこだ諦めんな絶対にかんばれ積極的ポジティブにかんばれがなばれ！！

北京だつて頑張ってるんだから！！



「お兄ちゃん…… / / …… ペキン？」

一瞬で涙目幼女を笑顔にするなんて、さすが炎の妖精やでえ。

「だから一個づつ練習していこうな。大丈夫、エヴァなら出来て当然なんだから」

「うん！」

「じゃあさっきの光の矢を火の矢やら氷の矢やらに変えてやってみようか」

「はい！」

結果だけ言っならエヴァは氷の魔法が得意みたいだ。

でも俺が撃った魔法よりかなり弱い。

かと言って落ち込むでもなく、むしろ「やっぱりお兄ちゃんは最強だもんね！」と、頭おかしいんじゃないかってくらい誇らしげに、かつ可愛く言ってきやがった。

やっぱりうちの子猫が世界一可愛いわ。

006 世界最速、魔法を覚える。(後書き)

あれ？バイク……。

ども。紅の豚野郎です。

お気に入り登録してくださる皆様、評価をくださる皆様、感想を送ってくれる皆様はきつと神様に違いありません。  
愛しています。

今回はどうやってバイクに絡めようか考えている間になんかキリが良くなったのでひとまず終わっておきます。  
次もいつ投稿になるかよくわかりませんが、よろしく願います。

007 世界最速、500年分巻きで行って！。(前書き)

サブタイ何コレ

エヴァの名前にA・Kつけたかっただけなのに勢いで500年たった。

007 世界最速、5000年分巻きで行って！。

おうえっほ！！えっふ！！げっふ！！！！

最近タバコを吸いはじめた白波麟です。

ゲホウ！！

最近凄いことが判明しました。

実は今14世紀らしい。これにはさすがの俺もびっくらこいた。そらバイクもレースも知らんわな。

エヴァに魔法を教えてもう5年目になりました。エヴァも教えた魔法全部無詠唱で出せるようになったし。

始動キーは俺が考えてあげた。3年も悩んで。あの時の喜びようと言ったら、もうそのまま式場に駆け込む勢いだったな。

初めの2年くらいは強者も雑魚も問わず一週間に一回くらい賞金稼ぎが襲い掛かってきたりしてたけど、2人以上の時は一人を残し全員を殺した後残った奴を全力でビビらせるってのを繰り返してるうちに大分減った。

エヴァもこの5年間で結構スれてきたのか、「身の程を思い知れ」だの「その程度の力で私たちに勝てると思っていたのか？めでたいバカだな貴様は」などとDS化が進んでいるようです。

吸血鬼独特の光に弱いとか流水に弱いとかはほぼ克服してるし怖いもの無し。

俺に対しては相変わらず「お兄ちゃんあ〜ん」などと甘ったるい声を出して抱きついてきてるから安心。

いや、安心じゃないだろ。エヴァにゃんもう15歳だぞ。いくつになってもかわいいな。安心したわ。

「お兄ちゃんも老けないんだねー」

「ああ、世界最強の不老不死だから。不死殺しても死なんかもしれんね」

「Athanasia Racer（不死のレーサー）って奴かな？」

「リン・A・R・シラナミって何か締まらん。でもそういうお前はAthanasia Kitty（不死の子猫）って所か」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル？」

「様になってるじゃないか！それでこそ我が妹よ！！」

「えへへ」

「で、A・Rはいつたい名前のどこに入れるべきだろう……アタナシアレーサー白波麟……漫画のタイトルみたいだ。しかもあんまり面白くない方の。シラナミ・A・R・リンでいいか」

「別にそんな無理しなくても」

「何言ってるの。エヴァが考えてくれたのに名前に入れないとかバチが当たるの一周して俺がバチ与えるつつの」

「お兄ちゃんっ！」

「おいおい、そんなすぐに抱きつくなよ。うそです。1000年後も1000年後も変わらず抱きついて来い」

あはははは、うふふふ

「っと、悪いな嬢ちゃん、坊ちゃん。そこまでだ」

きやつきやつなんてエヴァと戯れていたら革の腰巻！って感じのおつさんが2人とポストロールが一匹出てきた。ポストロールの「ポスト」って何だよ。

「誰おっさん？」

「何だ貴様は？賞金稼ぎか？」

「賞金？何いつてんのか知らねえけど俺たちはしがない人売りさ。んで君たちは商品になるって訳だ」

「弁えろよ、クズが。お兄ちゃんと私に触れられると思っているなんて、見下げ果てたバカだな」

「口の減らねえガキだな。捕まえろ！」

「ふん、とりあえずこれはおはよしの挨拶だ」

そう言つて氷の矢を放ち男たちの足元を固める。  
じゃあ俺も。

「そしてこれがお休みの挨拶だ」

火の一矢で一帯を焦土に変える。  
挨拶するたび、友達増えるね

「あの世で会おう。最も、俺達があん世に行く日は来ないがな」

「お兄ちゃんかつこいいい!!」

be cool... .

... can't cool

「エヴァもかわいいぞおおおお!!」

火の海で二人で抱きつく。

何この構図。

くさらに数百年後く

ドドドドドドドツと低音を響かせて走る。テキサスからこんにちは。えげつなく足つきの悪いHONDA CB1300に一人で乗ってる。

エヴァは毎晩底なし魔力の俺の血を吸ってる間にもものすごい魔力になった。

300年ほど前に魔法世界で居城を構えていたけど、飽き際に城ごと瓶詰めにして持ち運んでいる。

魔法って凄いやね。

あとは闇の魔法とかも開発してたし、吸血鬼の弱点なんかも完全克服。天才。お前らにはやらない。

何より変わったのが、最近旧世界の都市部で、荒削りだけどバイクを見かけるようになってきた。

だいたい1900年台だろう。と思う。

今エヴァは「人形にばかり戦わせるのも飽きた」と日本でちっさいおっさんに合気柔術とやらを習ってる。

簡単な護身術くらいなら知識の中にあるから教えられると思ってたけど、いざ調べてみれば銃の構造、撃ち方やら剣の扱い方やらの道具があることを前提にする技術ばかりだった。

まあこの指輪があるからだろうけど。

ちなみに、バイクと車だけでいいって言ったのに飛行機や潜水艦、船などの乗り物の構造、及び操縦の知識もあるみたいで、意外と重宝してる。

ここ、アメリカから日本に数十分で行く事も可能な訳だ。 転移したら一瞬だけど。

あと、大した話じゃないけどエヴァの賞金が500万ドルになってるらしい。

そしてこっちは大した話で、俺の賞金は2億ドル。200億円ってアホか。何回宝くじ当たるつもりだ。

魔法世界から一国の軍が空飛ぶ戦艦に乗って来た時も魔法の射手だけで墜とした上に

「君らの戦力うーんこ」とかクソみたいな挑発したり、お城に絵の具でAHONDARAとか書いたりしたり、投石だけで軍隊潰してたら賞金が凄いことになってた。これ内定とかに影響すんのかな  
エヴァは「闇の福音」「人形使い」「悪しき音信」「禍音の使徒」  
「童姿の闇の魔王」「悪の妹」などと呼ばれてる。

一方、俺の方は「邪神」。いや、わかりやすくいいいけどさ。  
決して「邪神モッコス」で検索しないように。

そして、まあ、アレなんだが、エヴァとアレをソレ、にやんにやんして魔力パスを繋げたから、どれだけ離れてても魔力で会話できる。にやんにやんしても呼び方はお兄ちゃんだが。



と、ちょうどお呼びがかかった。

『お兄ちゃん、免許皆伝もらっちゃったよー』

『おお、そうか！ならば今日は宴じゃあああああああああああああ  
ああ！！！！！ちよつと待っててな』

空気を伝い、風を媒体に転移魔法を使う。エヴァの前にバイクに跨  
つたままドリフトで現れる。

「お兄ちゃん」

すかさずエヴァも抱きついて流れるようにタンデムシートに乗る。

「ちよりーっす 惣ちゃん、エヴァ回収に来たぜ」

惣ちゃんつてのがエヴァに合気柔術を教えた先生だ。本名は知ら  
ん。

「おお、麟か。随分強うなってもうわしも勝てんわ」

「ふはは。エヴァは天才だからな」

「白波様。そのけつたいな乗りもんで出てくるなと言ってるじゃな  
いですか」

こいつはエヴァの兄弟子の盛平。いいおっさんだ。

「まあまあ。じゃあ惣ちゃん、生きてたらまた合おうぜー」

「じゃあな。世話になった」

やっぱり普段はこの態度なんだ、エヴァ。

「ああ。お前らも達者でな」

はい久々の達者いただきましたあああああああああああ  
ぶるるん！ぶるるん！ぶるるるるるるるるる

「エヴァはどこ行きたい？」

「お兄ちゃんとならどこでもいいよ！」

「そうだ、京都行こう（言ってみただけ）」

「京都！？やったあ！！！」

「うわぁっ！すっごく食いつき！」

京都行きました。

007 世界最速、5000年分巻きで行って！。(後書き)

HONDA CB1300 SUPER BOLDOR  
水冷4st

1,284cc

74KW「101PS」/7,000rpm

CB1300って書いときながら、SFじゃなくボルドールという  
フェイントです。

あれ？初めての排気量4桁台だ。

普通に考えて身長140cmじゃ乗れない。

当然サスペンション交換とシートのアニコ抜きはしてあります。

豚野郎は昔これに乗った先輩とツーリングに行ったとき、RG250  
(RGVじゃないです)に乗ってたのに直線で置いていかれました。

無茶苦茶速いです。

あ・と・が・き

合気道の事に関しては突っ込まないでください。

全然知らないんです。

あと、面倒になったから500年飛ばしました。

これとってめぼしいイベントも無かったし。

隣に銃を使わせるかはまだ決めてません。

幸い身内にガンマニアがいるから資料には事欠きませんのであるい  
は。

008 世界最速の妹、バイクに乗る。(前書き)

あんまり詳しく書くとよくわからなくなるからそれほど一生懸命に  
ならないように書きました。  
チャチャゼロ初登場！

008 世界最速の妹、バイクに乗る。

どうも、白波麟です。

エヴァと京都行って奈良行ってと観光しとったんやけど、時が建つのも忘れて遊びほうけてたらいつの間にか戦争始まるいう話聞いたから魔法世界に逃げ込んだ所やねん。

「お兄ちゃん」

「どないしたん？」

「移ってるよ、京都弁」

「まあ奈良弁やねんけどな」

現地人以外には奈良弁も大阪弁も同じように聞こえるみたいやけど、ちなみに逃げ込んだのに旧世界より殺伐としているのはこれどういう事なんだろうね。

「見つけたぞ！邪神と闇の福音だ！！」

「見つかったちゃったZE」

「お兄ちゃんったら、お茶目なんだから」

前方に1000を超える魔法使いがいる。

「魔法用意！撃て！」

「エヴァ、下がってる。ここは俺が受ける！」

邪神が闇の福音を下がらせる。

どという訳か、魔法は全て邪神に着弾した。大きく土煙が上がり、標的が見えない。

「やったか!？」

「油断するな!次隊、構え!詠唱準備！」

「はい、隊長！」

ゆっくりと土煙が晴れていく。

奴が倒れていすシルエツトが見えるが、まだ安心する訳にはいかない。

いや、あれは……犬!?

倒れ伏した邪神の横に、犬がいるように見える。つてかいつの間にか闇の福音がない。

邪神は犬の頭に手を置き、

「パトラツシユ、僕もう疲れたよ……」

な……何か言ってるらっしゃる————!!!!!!!!!!!!!!

ええええええええええ!?

何!?!何コレ!?!どどういうことなの!?!?

えええい、意味の分からんことを。



ど、どういう事だ!?

犬だけなら確かに用意も出来ただろう。

しかし天使!?

何故、何故邪神の元に天使が……

天使が……邪神とパト……犬をつかんで空に飛んでいき、そして見えなくなった。

「隊長」

「……ああ」

「帰ったらフランダースの犬をもう一回読んでみます」

「ああ!」

帰って国王に報告したらフランダースの犬(書籍)が本体に配給された。

私は一生国王についていこうと思った。

「

『フランダースの犬』』

ネロ：白波 麟

パトラッシュ：指輪

天使(太)：指輪

演出：エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル



主題歌

明後日からの咆哮

作詞：ニイチエ

作曲：近所のおっさん

歌：G A M P R O J E C T O R

うん、超大作だったな、エヴァ。

お前の糸が無かったら成功しなかったぞ」

「えへへ。お兄ちゃんもカッコよかったよ」

「ふはは。しかしよくアドリブであんな上手く出来たもんだよ」

「そりゃそうだよ。もうお兄ちゃんとは500年以上一緒にいるもんね」

「一心同体だもんな」

「うん！」

さて、せっかく無意味に土地が広大なんだからエヴァにもバイクを乗る練習をしてみらうとするか。  
きっと楽しいはずだ。

エヴァは「お兄ちゃんの後ろが一番好き」なんて抱きつきながら言  
つてたけど。犯すぞ。

「エヴァ！エヴァ！！キティ！！おいチャチャゼロ、キティ見てな  
い？」

「ア？見テネーナア。愛想尽力シテ出テイツタンジャネエカ？」

こいつはチャチャゼロ。大昔拾った人形にエヴァが魂を入れた奴だ。  
なかなかイカれた性格をしてる。

何故か俺のことを「ニイサン」と呼ぶ。「ニーサン」じゃなくて良  
かった。

「碎くぞクソ人形」

『エヴァどこー？』

『あ、お兄ちゃん！今水浴びしてるんだ』

「水浴びしてるらしい」

「ソレヲオレニイ言ツテドウスンダヨ」

「乗り込んでくるぜー！！お前は来んなよ」

「頼マレテモ行カネー」

「エヴァー！」

「速エー！！」

「キティ……………」

「お兄ちゃん……………」

ふう……

え？ああ、うん。そうだよ。

「エヴァ」

「なあに？」

「エヴァもバイク運転してみたくない？」

「うーん……………。お兄ちゃんが教えてくれるなら」

「イヤッホオオオオウイ！！！」

とりあえずブロックパターンタイヤでスプロケットをロングに振ったHONDA NSR50を二台とスオーミーのエクストリーム)

ヘルメットだぜ！」をふたつ出す。

「このバイクちっちゃいね」

「オレヨリデカイケドナ」

「白波はバイクを選ばないんだよ。太公望もルアーを選ばないというしな。じゃあ各部名称からだ」

「うん！」

「イカれたメンバーを紹介するぜ！

キー！シート！タンク！ハンドル！アクセル！ステップ！前ブレーキレバー！後ろブレーキペダル！クラッチレバー！シフトペダル！キックスターター！スタンド！

以上だ！

これだけ覚えてたら何とか乗れる！」

ビシイイイイ！と一々指差しながら叫ぶ。

「わー」ぺちぺちぺち

「タンクは常に足で挟んでおくように！例外はあるがひとまずはこれで覚えよう！」

「そしてシフトペダルだが、クラッチを握りながら変速する。

これはリターン式と言って、かなり一般的に普及されてる変速方式だ。

他にも前出したSUZUKIのバーディーみたいなロータリー式、リードのような変速動作の必要ない無段階変速というものもある。

操作方法だが、1 N 2 3 4 5 6 速の順番で、一番下が1速だ」

ガシャンガシャンとシフトペダルを動かしながら説明する。

「とまあ口で言っても俺がどこまで説明したからわからなくなるから乗るのを見といて。」

左手と左足が重要だから特によく見とくように」

「はい」

「じゃあ次はバイクに乗るとき気をつけることだ！

エヴァがこけたら死ぬ！」

「私不死だよ？」

「俺が『エヴァをバイクに乗せてしまったばっかりに、いくら死なないとは言え転倒させてしまった』というストレスで死んでしまう」

「過保護モココマデ来レバ立派ナモンダヨ」

「しかし、バイクはこけて覚えるもんだ！（違います）なので俺は考えた。そうだ、エヴァって吸血鬼なんだから身体能力高いしいざこけそうになったら離脱すればいいじゃん」

「うんうん」

メモとってる。

そんな重要なこと言っていないと思うんだけどな。

「ソレデモコケソウニナッタラドウスンダ？」

「俺が助ける」

「お兄ちゃん……」

「キテイ……」

「オエエエエ！オイ御主人！イツノ間ニ砂吐ク機能付ケヤガッタ  
！」

「愛の成せる技だな、エヴァ！」

「付けた覚えないけどね」

「ちなみにブレーキかける時は路面が舗装されててタイヤのグリップが良い時は前強め、それ以外は後ろ強めだ」

「うん！今は後ろ強めだね」

「そうだ。さすがエヴァ！天才！愛してる！  
当然だがバイクごとにブレーキの効きや力加減が変わってくるから慣れる！」

じゃあひとまず乗ってみよう。エンジンはかけるから N 1 2

1 Nで停車だ。  
まだ曲がらなくてもいいぞ」

「うん！」

（30分後）

「よし、エヴァは天才だから俺の予想通り発進、停車は完璧だ！  
これを覚えればもう半分乗れたようなもんだ！」

「私もレーサーになれるかな」

「それはまだまだ先だな。そもそも一般道を走る乗り方とサーキットを走る乗り方は全然違う」

「御主人ヲ甘ヤカサナカタノツテ、コレガ初メテジャネエカ？」

「こればかりはな。でもいずれ全開で走る俺についてくれるようになるといいな」

「うん！」

「じゃあ次は旋回だ。ハンドルを曲げるんじゃない。心を曲げるんだ。嘘だ。走行中に車体を倒せば曲がれる。」

これも手本を見せるからちよつと見てな。次見ておくのは全部の手足だが、大丈夫だよな」

「当然だよ！」

「というわけで走ってきたけど、何かわかったか？」

「曲がる前にブレーキで曲がり終わる時にはアクセルだね」

「ああ。さすがエヴァ！」

「お兄ちゃんっ！」

「オエエエエエエエ！」

抱き合う俺達をみて砂を吐くな、チャチャゼロ！

エヴァが旋回してる。

「普段自分では絶対にしないような模範的な乗り方しといてよかった」

「ニイサンノ運転ハイカレテルカラナ」

「よし、エヴァ、もういいぞー！」



「どう？お兄ちゃん」

「宇宙ーかわいい！」

「もう吐ク砂モ残ッテネエヨ」

チャチャゼロの横に砂山が！

「じゃあ走ってみるか。この道沿いに行こう。エヴァが前走って後でフォームチェックするから」

「うん！」

エヴァと俺が続いて走り出す。

この時俺はこんな日常がずっと続くと思っていたんだ。あんなことが起こるまでは……。

言ってみたかっただけなんだ。

「オレヲ置イテ行クナヨ……」

008 世界最速の妹、バイクに乗る。(後書き)

HONDA NSR50

水冷2st

49cc

7.2PS/10,000PS

前後ディスクブレーキ

今回はギアを最高速寄りにセッティングすることによる、急加速の低減とブロックタイヤにすることによる路面対応のみになります。

中高生の三種の神器のうちの一つ。

後の二つはNS-1とエイプ50(豚調べ)。

通称Nチビらしいが僕の周りではN5(エヌゴ)。

50ccクラスではかなり速いほう。

未だに一部の峠では現役。

SUZUKI Birdie

空冷2st

49cc

多分2.4PSくらい(?)

前後ドラムブレーキ

3速ロータリー式ミッションとそのどう見てもカブにしか見えない風貌からスズキのカブ、略して「スズカブ」と(豚野郎に)呼ばれている。

2stなのに嘘みたいに遅く、ノーマルではギアの限界か、45キロあたりから体が液状化現象を起こしかねない振動と共にエンジンがうなる。

そのくせ燃費はしっかり2st。

現行のバーデーは4st50ccモデルのみとなっている。

マイナー国産車の中でも特にファンの少ないバイク。  
私はけっこう好きです。

SUOMY EXTREME

イタリアのヘルメットメーカーのフルフェイスヘルメット。

一つ8万円ほどするが、値段相応のかぶり心地。

今回出したのがピンク（エヴァ用）と赤（麟用）の一つづつ。

あとがき

エヴァをバイクに載せる計画！

麟はエヴァにバイクには乗って欲しいけどレースには出て欲しくな  
いと思っています。

俺はどっちでもいいと思ってます。

皆さんは安全運転で乗ってください。

チャチャゼロが出ましたね。

すっかり忘れてました。

赤き翼イベントは全無視してエヴァ、麟とナギをちよつと絡ませる  
くらいでいいかな。

009 世界最速、おちよくる。(前書き)

父さんが少しかわいそうな話。  
というか……バイク……。

009 世界最速、おちよくる。

言えない……

実はバイクに乗るより足で走る方が速いなんて口が裂けても言えない……

ああ、どうも。げんなりナリ。しらなみです。

腐った火星みたいな所の偉い人を散々脅したりからかいまくった拳  
句追っ手が面倒になって適当に旧世界とか魔法世界とか関係無しに  
逃げてる。

その過程で、魔力を隠せるネックレスとか売ってたからスピアに2  
本と俺とエヴァで一本づつ買ってつけてる。

今朝いい感じの湖があったからこの600年で、最早ログハウスと  
は呼べないレベルの木の豪邸で休んで、起きると来客があった。  
みたら赤髪の優男が扉の前にいる。

「すんませーん、誰かいるか？」

「うわ！イケメンだ！！おいエヴァ！逃げろ！！イケメンがうつる  
！……！」

「なあに、お兄ちゃん……誰だ貴様？」

「その落差にはちょっと傷つくな。俺はナギ・スプリングフィールド  
トってたんだ。君くらいのおレンジの髪の子供捜してるんだけど、  
見てねえか？」

「ちよっと待って。エヴァ、俺にイケメン感染ってない？大丈夫？」

「大丈夫。女の子に見間違えるくらい可愛いよお兄ちゃん！イケメンにはなってるよ」

「これは初めてされる反応だな……」

「そして、ナギ……ふふふんフィールド。残念ながら旅しまくってる最中の俺達も旧世界、魔法世界共にその情報だけで印象に残るほどのオレンジ色の髪を見た覚えはない」

「情報が少なすぎるんだよ、小僧。出直せ。死ね」

「んのクソガキどもが……ってかスプリングフィールドだよ！」

「もう少し短めの苗字で。よろしく」

「ナギ・スフィとかどうだ、小僧？」

「あーあー、わかったわかった。俺が悪かったよ。で、親御さんとかいる？」

「「「いない」」」

「要るか要らないかじゃねえんだよ！！居るか居ないか聞いてるんだよ！！」

日本語じゃないのにどうやってニュアンスの違いとかわかんדרうつ。この人怖……。

「親はいないよ。残念だったな」

「とうわけでナギ・サスペンションフィールド「スプリングだな」……ナギ・スプリング。お前はこの面倒なガキ二人をわざわざ相手したのに結局無駄だったって訳だな。かわいそうに」

「やめときなよ、お兄ちゃん。この小僧、お兄ちゃんのお尻狙ってるよ」

「狙わねえよ!!!」

「俺、後ろはバイク、前はエヴァ専用だから。お前に入ってくる余地はねえから!!!」

「いや、もういいわ。邪魔したな」

やっと諦めてくれたか。

俺はエヴァに目配せをして荷物を纏める。

「何でついてくる?」

ナギがこっちを見ながら言ってきた。

俺達は肩を寄せ合い、エヴァと耳打ち合う。

「お兄ちゃん、こいつ何か言ってるよ?」

「進行方向が一緒だからってついてこられてると思ってるんだよ。」

過去、よっぽどひどいストーカー被害に遭ったんだろう。そつとしいてやるっ」

「聞こえてるからな。というか聞こえるように言ってるだろ!!」

「まあまあ、そう怒るな。お兄ちゃんもこの通り、反省してるんだし」

「チツ、うつせえなあ……。反省してまーす」

「く……ハツハツハ!!いいぜ、このガキ。俺をここまでバカにした奴は初めてだ。

ちよつとキツイ灸を据えてやるから覚悟しな。

信じるか信じないかはわからねえが、俺は魔法使いつてやつでな。

まあ半日ほど怖い夢を見てもらうことになるが、覚悟しな」

「おい、聞いたか、エヴァ。可哀想な上に痛い人だ」

「怖いよ、お兄ちゃん」

この時“ブチツ”っと聞こえたのは多分気のせいじゃないと思う。

ナギは懐にさつきまで持ってたメモ帳か何かを仕舞ってこちらに杖を構えた。

「マンマンテロテロ……雷の斧!!」

何で怖い夢見せるのに攻撃魔法なんだよ!

とっさに元々攻撃範囲に入ってなかったエヴァを20mほど遠くに転移させて魔法を受ける。



「魔力は抑えたから死にはしてないだろう……が……」

そこには天に指を突き立てた仁王立ちの俺が!!  
あれ? ネットクレス割れてるじゃん。

あ、落ちた。

とりあえずエヴァに手を振っておこう。

「おい、何で立ってやがる!?! つつーか何だよその魔力!?!」

「そんな事よりナギ! お前……卑猥な始動キーだな」

「うるせえ! 英語圏じゃ別に卑猥でもなんでもねえよ!?! つつーか  
今お前妹に転移使ったよな! その有り余る魔力で!?!」

「ただいま、お兄ちゃん!」

「おお。おかえり!」

そう言いつつエヴァのネットクレスもはずす。

エヴァの魔力量にも気付いたようで、

「何者だ、お前ら……」

「こちらエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・シラナミ。俺  
の自慢の妹だ」

「そしてこの方がシラナミ・A・R・リン。私の自慢のお兄ちゃん  
だ」

「シラナミ……だと……!?!」

この反応……死神か！？代行の方か！？

「ふん、ようやく気付いたか」

「やっぱり今時車も走ってない未開の地出身の人って世間知らずだわー。麟ちゃんびっくり」

「闇の福音と、邪神？」

「誰がモッコスだ！！」

「お兄ちゃん、流石に言っていないよ」

「な……何てこった」

「という訳で、俺達にお前を殺す意思は無い。泣いて感謝しろ」  
ペンダント代をもらってスピアをつけた俺に死角はない。

「そっだ、お兄ちゃん」

「んあ？どっした、エヴァ……なるほど」

エヴァの目を見ただけで判断した。

「よし、ナギ、感謝しろ。俺達はしばらくお前についていく事にした」

「感謝しろよ？」

「ちょ、まてまてまてまて！！俺はそんな事頼んでないぞ！！」

「照れるな照れるな！！」

「いくらお兄ちゃんがかわいいからって手を出すんじゃないぞ？」

「出すかああああああああ！！！！！！」

ナギと行動を共にするようになったから側車付のバイクを出すか車を出すか迷っている。

「おい、ナギ。そのクソ長い杖折り畳め」

「無茶言つんじゃねえよ」

「オイ御主人、コイツ殺ツテモイイノカ？」

「暇つぶしの道具だ。一步手前で我慢しとけ」

「包丁で突いてくんじゃねえ！！」

「仕方ない。車で良いか」

指輪をHONDA Z TURBO（軽車）に変える。  
理由は後部座席が狭いからだ。

「？何言ってる……何だこりゃ!？」

「おい、早く乗れ」

そう言ってる運転席のシートを倒してやる俺マジ紳士。

「ちょ、狭、狭いぞ邪神!」

「隣だ、三千院ナギ」

「マジで出してくれ……」

「チツ、仕方ねえなあ!」

今のって俺が悪いのか？と嘆くナギを尻目にZを一旦指輪に戻して  
TOYOTAの3代目ウィンドムを出す。

「ほら、乗れ。エヴァは左から回ってな」

「……あいよ」

「はい」

「で、目的地どこだよ」

「あ？ああ、今は西に向かつてる所だが」

「ふーん」

鍵を回してエンジンをかける。

今日は少し暑かったからエアコンの風が心地いい。

「世の中にこんな乗り心地がいい車があったなんてなあ。さっきのはマジで地獄だったけど」

「ああ、まだ無えよ」

「何言ってるんだ？まあいいか。しかし聞いてたのと随分違うな。麟もエヴァも」

「フン、大方ろくでもない噂ばかりだったんだろうさ」

「そうだよな。普通に考えたら『超可愛い兄妹賞金首』としかならないもんな」

「いや、普通に考えた結果なら最もそうなるべきじゃないだろ」

「じゃあどんな噂だったのよ、ナギ助」

「ああ、相手の首をねじ切る兄と、その吹き出た血を啜る妹って聞いているぜ」

「マジかよ！！そんな奴いんの！？怖っ！！外出歩けねえよ！！！！」

「お兄ちゃん、私達の事だよ？」

「そんな事しねえよ！！！！」

「したなんて言っただろ。どんだけ自由だ、お前は」

「血も涙も無い殺戮兄妹だとか「殺戮人形ならお前の隣にいるぞ」名前を呼んだらその晩殺しに来るとか「そこまで暇じゃねえよ。暇だけど」」

人の車に「でもなあ」とか言いながら偉そうにふんぞり返ってる。何なのこいつ？

「いざ蓋を開けてみるとシスコンにブラコンだ」

「「すごかろう」」

「ってかちよつと待ってよ、Hey baby。ナギ・スツパム！チヨってどつかで聞いた事あんだよな。ごく最近」

「スプリングフィールドだ。千の呪文の男サウザンドマスターつつつてちよつとくらい有名なつもりだったんだがなあ……」

「ああ、それだ。サウザンアイランド。前潰した国の王がそいつが俺達を狙ってるつつつてたわ。狙ってるの？」

「狙つかよ。勝てる気がしねえわ、バーカ」

「誰が天パだ！！！！！！！！」

「言っ  
てねえよ……！！！！！！」

正直ちょっと楽しかった。

え？ナギとの掛け合い？

違う違う。ナギと話してる間つまらなさそうに外見てるエヴァ観察するの。

「おい、エヴァ」

「ん？どうしたの？お兄ちゃん……」

言葉の途中だがナギに見せ付けるようにキスしてやった。

「この際、兄妹なんだから、とかあんまり見せ付けるな、とか言わねえからせめて前見て運転してくれ！！」

009 世界最速、おちよくる。(後書き)

自動車のスペックはあまり詳しく載せません。

HONDA Z TURBO (四輪車)

4WD

軽自動車

後部座席が狭くて、意外と遅くは無い。

5000rpmあたりから申し訳ない気持ちになりそうな音と共にターボがかかる。

豚野郎の母が知り合いから無料でもらってきた。

3代目 TOYOTA WINDOM

FF

高級車然とした高級車。

乗り心地は最高で、車幅が広いため下手くそお断り仕様。

強いてあげるなら排気音が静か過ぎるため、走ってるのに気付かれないことが稀にある。

レクサスのESという車種と同系統。

エヴァと麟のイチャラブ物語 あとがき

毎回読んでいただいております。

今話の内容もスカスカになっていきます。

どうやって麻帆良に繋げるか考えた結果、原作沿いでこうなりました。

つてか麟にはちゃんと前が見えているんだろうか……。

細かなところに原作とのズレが生じているかも知れませんが目を瞑



つていただければ幸いです。  
では本日はこれにて失敬！

010 世界最速、麻帆良へ。(前書き)

トリゾーです。

010 世界最速、麻帆良へ。

オツスオツス!!

先週、海辺の塔を瓶に封印した。

600年前から今までで100回くらいしか髪切つてない白波麟だ  
じえ!

ナギが「俺もバイクに乗らせろ」などとクソみたいな事言つてたけ  
ど「お前にはニンバス2000があるじゃねえか」とか言つてほつ  
たらかしてたら拗ねた。(当然そんなものは無い)  
ウザい。

ちなみに、このネックレスの効果もあるだろうが、ナギという時は  
敵が襲つてこなかったから何かと旅が楽だった。

今朝はアルビレオ・イマとかいう優男に会つた。  
会つた瞬間に俺達の正体に気付いたいけ好かない好青年だ。

「次は日本にでも行つてみるか。俺の古い知り合いがいるんだよ」

「俺達の古い知り合いはみんな死んだなあ。お、盗賊か?潰してく  
る」

「お兄ちゃん、私も行く!!」

「やめろやめろ!!」  
「たく、俺の何十倍も生きててその落ち着きの  
無さか!」

「で、なにしに行くんだYO。日本人は生来毛塘には縁が無い生き  
物だけど、こんな極東に“件の姫”でもいると思つた?」

「いやいやいや、お前らが半月前から旅飽きたっつってたから仕事紹介してやるうと思つて連れて行つてやるんだろぅが！  
つたく、耳元で飽きた飽きたつて騒がれるこつちの身にもなりやがれよ……」

「うーんじっ、うんじ、うーんこーっ（フーワッ フーワッ）」

「オイ、……何だそりゃ……」

「うんこ組曲、第一章『イツヒ・フンバルト・デル・ウン』」

「バカにしてんだよな？それ俺に喧嘩売つてんだよな!？」

「まあまあナギ、リンはあなたが本気で戦つても勝てる相手じゃありませんよ」

「じゃあお前も手伝えよ、アル！」

「はっはっは、ご冗談を。隣に挑むなんて、命がいくつあつても足りませんよ」

激昂してるナギをなだめるフリしながらバカにしてるこいつがアルビレオ・イマ。

正直アルビオレだと思つてた。今でも思つてる。

「お前なら大丈夫とでも？」

「第二章『ヘーヒルト・ベンデル』もあるけど、聞く？」

「誰が聞くかクソバカ!！」

「しかし、見た目小さな女の子にしか見えないリンがそんな事言ってると思ったら、下卑た妄想が広がりますね」

「おい、アルビレオ・イマ。お兄ちゃんて気持ち悪い妄想をしていいのは世界で私一人だぞ」

「何、このテンション？ひょっとして俺がおかしいのか……？」

ナギがこのメンバーの会話を聞いてるとだんだん死にそうになってくる事が最近判明した。

そして会話に参加したら寿命が縮むことも。

かわいそうにwwwwwwww

「おちこんでるな。いや、おちんこでてるな、ナギ」

「出てねえ！放っておいてくれ」

「ふう、仕方ない。ナギ、一度しか言わないから良く聞け。

汝、求めよ。全て家に置いてきた」

数瞬、時が止まる。

「ごめん、ちょっともうホント何言ってるかわかんない。ホントごめん」

「俺にもわからんわ……！」

「威張って言うな……！」

「ふふ、ツツコミに回るナギというのは中々見れるものじゃありませんよ」

「小僧……お兄ちゃんに突っ込む気か？」

「俺どつちかという突っ込む方なただけど。突っ込まれるのはちよつと……」

「うるせえ！！お前ら俺にどうしてほしいんだよ！！」

「お兄ちゃんに突っ込まれていいのは私だけだ！！」

「もうホントヤダ。何コレ。帰りたい」

夜も更けたが、俺は今アルと飲んでる。  
隣とエヴァは「俺達良い子だから」とか言って先に寝に行っちゃった。

アルには久々に会った事だし積もる話も、と呼び出された訳だが、  
実際は酒の口実がほしかっただけみたいだ。  
他愛の無い話をしている。

「しかし、リンは本当にラカンに似てますね」

「んあ？そうか？」

「ええ。あのでたらめな力といい、何も考えてなさそうで本当に何も考えてない発言といい、始動キーが未だに初学者用のものなところといい」

「ああ、そっぴや。まあラカンには隙だらけに見えて実際はそうでもないけど麟はそのまんま隙だからな。努力とかしたこと無いんじゃないか？」

「何をされても絶対に大丈夫という自身の表れか、今まで本当に殺されるような目にあつたことが無いほどの強さ。あの最強種とすら呼ばれる吸血鬼にも倒す方法があります。同じく古龍でも、殺すとまではいなくても、ラカンのように倒す事は可能です。」

しかし、全く危機察知能力が無く、魔力や気も感知できないというのに、2億ドルの賞金がありながら今まで傷ひとつ負つたことの無いリンこそ真の最強種、というものでしょうか」

「ま、知らずに見てる分には、ラカンの兄弟とかいとこって言われりゃ信用しちまうね、俺は」

「見た目は天と地ですね」

「ハハッ、どっちが天でどっちが地なんだろうな」

「そりゃリンは天でしょう。このネコミミセーラースク水をラカンが着ている所なんて想像するのも口にするのもおぞましい」

「俺はその考えに至るお前がおぞましいよ。どっから出した」

「おぞましい、は酷いじゃないですか。せめておそろしい、止まり

にしてください」

「変わらねえよ」

いい朝だ。

今日もティウンティウンとスズメが男鳴きに鳴いている

「おはーーーーーウィツシュ!!!!!!!!!!」

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはようございます」

「おい、ナギはまだ寝てんのか？」

「いえ、二時間ほど前に『狩ってくる』と言って出て行きました」

「何やってんだよアイツ。9時には出発つつってたろ。今何時だと思っついていやる」

時計を見るともう11時過ぎだ。

「何だ、俺が寝坊してただけか！昨夜は随分頑張ったからなあ！！」

「もう、お兄ちゃんったらあ／＼／」



「ナギの気持ちが少しわかります……」

その時、閑静なログハウスの扉がイノシシを担いだナギに開けられた。

毎度の事ながら湖の際に建ててます。

こりゃもうアレだな。俺が休憩しようと思った所に湖が現れる能力だな。

「気持ちがわかった次は胃を治療するための魔法を覚えることになるぞ」

ちなみに俺達（俺の言う『俺達』の有効範囲は俺とエヴァのみだ）はおはよつのちゅーとおはよつのちゅーちゅー（吸血）をやってる。

「ナギが魔法を覚える！？……それはそれは、一刻も早く日本に行かなければいけませんね、ナギ。頑張ってください」

「おい待てアル、二重の意味でそいつはどついう事だ？」

「私には他に変えのきかない、実にやんごとなき用事があるので、頑張ってください」

「おい、待て！逃げるな！！……クッソー、アルの奴、転移してまで逃げるか！？」

ちゅーとちゅーちゅーが終わって見ると、息の荒いナギがこっちを見てる。

やめて、怖い。

「早く日本へ行くぞ。麻帆良のじじいにてめえら押し付けてやる。」

小学校にでも入学しやがれ」

「ちょっと待て、エヴァは中学生の制服でこそその本領を発揮するタイプだと俺は見ている。女学生エヴァ……、なるほど、日本に行くぞー！」

「お兄ちゃん、さすがに中学生みたいなアホのガキに囲まれるのはちょっとヤダよ」

「あ、そう？……さすがにエヴァのしたくないことをさせるのは俺も嫌だなあ……。女学生エヴァ……」

「ってちょっとだけ思った事もあるけど、私も学校行ってないし、その、行ってみたいな？」

「おい、聞いたたるナギ。さっさと準備しろ」

「もうホントやだ」

↳一週間後、麻帆良学園・学園町宰

「おいじじい！警備員欲しがってただろ。連れてきたぞ」

「おいじじ、って頭長っ！……！」

俺達が連れてこられた部屋に妖怪がいた。

後頭部とマユゲとヒゲと耳たぶが長い、神主みたいな服を着たぬりひよんだ。

しかしそんな事より驚くべきは『かんぬし』と入れて変換したとき『ZUN』が候補に上がったIME辞書の方だろう。

「ほっほっほ、久々じゃのう、ナギ。で、そちらのお二人は？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・シラナミだ」

「トリゾーです」

「……。600万ドルの賞金首、エヴァンジェリンと2億ドルの賞金首、白波麟だ」

「ほ？」

「愛と正義の魔女っ子、トリゾーです」

「そ、そんな冗談を覚えて来おつて。こんな少女二人を連れて来るとは……」

「あ、面白かった？トリゾー。じゃあ戸籍くれよ、戸籍」

「おい、じじい。さっさとお兄ちゃんに戸籍をよこせ」

「なんじゃろ、コレ」

「俺も一年近く思ってる」

「じゃあ本当にこの二人は『闇の福音』と『邪神』なんじゃな」

「はい。トリゾーです」

「そりゃもうええわ!!」

「はい。プロリー、です……」

「ホント、腕は確かだから。頼むよじじい」

「なんでお願いされてるのに呼び方はじじいなんじゃ……。ええけど」

「じじいは俺の戸籍用意！エヴァは中学に編入！俺はそれまで寝る」

「のう、ナギ、こいつら持って帰って」

「本気で断る」

「おじいちゃん、お願い」

「クツ、人心掌握とは、高難易度の術を!!（使っていません）」

俺の特殊スキル、「孫煩惱化」は健在のようだ。

「ホラ、俺生まれついでライダーだけどさ。戸籍無いとレースにエントリーできないじゃん。そうなるストレスで何やっちゃうかわかんないよ」

「とうとう脅しをかけてきおった！認めたくはないが仕方ないかの……。いいじゃろう。しかしこちらの条件も呑んでもらうぞ」

じじいは渋々と言った感じで条件を言ってくる。

- 1・エヴァを、外交的に配下に置いたとわからせるために『登校地獄』の呪いをかける。
- 2・その後エヴァの賞金を何とかして取り下げるからその間全力で身を隠す。
- 3・そして、なんとか自分で自分の賞金を取り消してから出直す。

この三つの条件で戸籍を用意すると言ってきた。

「いいだろう！お兄ちゃんの為なら『登校地獄』くらいいくらでもかかってやるわ！」

「エヴァアアアアアアアアアア！！！」

「なあ、抱きついてるみたいだし一人まとめてかけてもいいよな？」

「エヴァンジェリンならともかく、白波君にはかからんじゃろ」

「っーわけだ。さっさと離れてくれ」

「ぶーぶー」

「いくぜ。『登校地獄』!!」

「……何か変わった？俺魔力がどうとか全然わかんないんだけど」

「ちゃんとかかかってるみたいだよ、お兄ちゃん。おい、『千の呪文の男』。よくやったな」

「ナギっち見直したっち」

「お主よく耐えれたの……」

「そろそろ無理。じゃあ俺行くわ。二人とも元気でな」

「ああ〜ばよ、とつつあん！」

「ふん。そのうち遊びにでも来い。歓迎はせんがな」

ナギが手をヒラヒラと動かして出て行った。

エヴァは俺に抱きついている。基本的に描写されていない間はずっと抱きついている。

「……さて、じじい。俺からもいくつか話がある」

「……ここは禁煙なんじゃが。戸籍の事か？」

「20歳以上ならなんでもいい。そんな事よりエヴァの制服はどうなるんだ？」

「安心せい。購買部が売っておるわ」

「ちょっと行ってくるわ」「エヴァを引き離す。  
「買ってきた」「エヴァが再度しがみつく。

「速っ!!」

「さあ、エヴァ!この、指輪で作った便利な更衣室で着替えるんだ  
!」

「何で既にお主が入っておるんじや」

「うん、お兄ちゃん」

「普通に入って普通にカーテンを閉めた!!」

「あつ、ダメだよお兄ちゃん」

「ふはは、愛い奴よ」

「何をやっとするんじやあああああ!!」

「着替えに決まっているだろう。ボケたか?じじい」

「おじいちゃん、ご飯は昨日も食べたでしょ?」

「毎日食わせる!!」

更衣室のカーテンを開けてエヴァが一度その場で回る。

「どっ?お兄ちゃん」

「愛してるの言葉じゃ足りないくらいエヴァが好き。おいじじい、ここから近いホテルってどこ？なるべく高いホテルで」

「。」

片手で両目を隠しながら窓の外を指差すじじい。

「じゃあな。エヴァの賞金の件、頼んだぜ！」

お姫様抱っこでエヴァを抱えて窓から跳ぶ。

ちなみに、じじいがエヴァの賞金を取り下げるまでに新しい制服を20着買った。



010 世界最速、麻帆良へ。(後書き)

ば……バイクが不足してる……。

今日半年ぶりくらいにNSR50(後期)に乗りました。

前後BTにブレンボの4ポッドだからブレーキだけで死にそう。

あとがき

難産の割に読み返しても山もオチも無い。

エヴァが入学するのは原作と同じ時期です。

ここから14年間、色々します。

レースとか。

誰も興味ないと思いますが、麟が吸ってるタバコはピースの21ミリ。

お酒は『白波』を飲んでみたけどすぐに吐いたそうです。

## 011 世界最速、ジムカーナ出場。(前書き)

総合評価を140、お気に入り登録を53もいただいでしまいました。

本当にありがとうございます。

ただ登校するだけの呪いじゃ他の魔法使いを説得できないんじゃないか、と指摘いただいたので、慌ててこのえもんに結界を張ってもらいました。

指摘くださった Testament 様、ありがとうございます。

まさかの25歳説と23歳説が混在していたので25歳に統一しました。

011 世界最速、ジムカーナ出場。

このえもんが学園の電力を使って学園から出られなくなる結界を張ってから二ヶ月。

その間、魔法世界の偉い人が本当にエヴァが学園から出れないのかとか、魔力は弱くなってるのかとか見に来たりで一月。

誰を脅せばいいのかわかんなかったから賞金取り消しまでに一月。

結果だけ言うと案外あっさりいったわ。

2億ドルとか意味のわかんない賞金額になってたのは『どうせ邪神に勝てるような奴居ないだろうし』的な意味がふんだんに込められたクソみたいなブラックジョークだったらしいし。

あちら側からの今後一切の不干渉を約束させてきてやったじえ！  
そしてあちら側へは、エヴァに何かしてくる場合は一切の手心を加えないという脅しもしっかりかけておいた。  
俺に対しては好きにしろという素晴らしすぎる条件付で。

まあできるもんならやってみよ。絶対無理だろうけど。ハイハイポーイwwwwww

って感じの言い方だったけど。

「ぐぬぬ」って言った。

「おじーちゃああああああああん！！賞金消してっだから戸籍ちよーだああああい！！！！」

「うわあっ！急に出てくるな！心臓に悪いわ！！」

「戸籍いいいい！……！」

「ほれ、抄本じゃ」

「うお、25歳！無理あるわーwwwwおじいちゃん大好きー  
へいへーい」

「このかがこうならんように祈るばかりじゃ………」

「あ、家どっかその辺に建てるけどいいよな？」

「もう好きにして」

「エヴァ、今朝ぶり！」

「お兄ちゃん……！」

天下の往来で抱き合ってます。

え？一ヶ月？何言ってるの？ちゃんと毎日帰ってたよ。  
転移魔法で。

「世界中、全歴史中探しても魔法世界と旧世界を触媒も無しに転移  
魔法だけで行き来できるのはお兄ちゃんくらいのもんだよ」

「そりゃもう天才だからな。みんなに自慢しまくっていいぞ……！」

「嫌だよ。お兄ちゃんは私だけのお兄ちゃんなんだから」

「ほら、あの姉妹……」「でも今お兄ちゃんって……」「近親相か……」

「お兄ちゃん、みんなに見られてるよ？」

「バカ、見せてんだよ」

家は一カ月後に建ちました。

例の馴染み深い、湖の横に建てたログハウスと同じ形の建物で、それに地下室と電動シャッター付ガレージを増やしたタイプの。金はいくらでもあるから突っ込めるだけ突っ込んで作らせた。麻帆良すげえ！

「じゃあエヴァ、行ってくるわ」

「うん、行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

制服のエヴァとキス（ディープでないものとする）をして家を出る。

戸籍も手に入れた事だし、早々に免許を取ってジムカーナレースにエントリーした。

ジムカーナってのはアレだ。  
狭い所をちょこちょこ走るやつ。

大昔、レースにも出てた記憶が薄っすらとあるけど、あまり覚えていない。

駄菓子菓子、そんなものは関係ない。

ただ速く走るだけだ。

先日買ったばかりのフルノーマルなNSR80に跨り、調子乗って『変身』とか言いながら、既に着用してる状態で指輪をブーツ、グローブ、革ツナギ、ヘルメットに替える。

まさかの自走出場。

〈午前10時・会場〉

「よっすよっす!」

「ん?どうしたんだい、嬢ちゃん?お父さんといっしょに出場かい?」

「いやいや。、エントリーしてた白波(25)です。単独で出場」

「ああ、はいはい、白波さんね。って(25)!?」

「よく子供みたいって言われます」

「ああ、その、頑張ってたね」

「……あたぼうよ」

NN級（初参加の場合、ほぼノーマルの車輛のクラス）のゼッケンとコース図を受け取って立ち去る。

きつとこの兄ちゃん『やだ、かつこかわいい（かつこよくてかわいいの略）』と想っているに違いない。

下見もウォーミングアップも終えて端つこの方でタバコを吸っていると知らないおじさんに声かけられた。

「おいおい、子供がタバコなんて吸うもんじゃないぞ」

「625歳ですよ」

と言つて免許を見せ付けてくれるわ！

「おお、こいつは失礼。あまりに小さかつたもんだから」

「おかげで重量も抵抗も随分少なくて、けつこつ速く走れますよ。つと、もうすぐ俺だわ。行ってきます」

「おお。頑張ってたな」

ピッピッ……ポーン

という（他の車両の走行音とヘルメットの遮音性で全く聞こえない）音と共に出走する。

つてかつま先wwwwwwww無くなるwwwwww

バンクするたびにつま先が地面について切ない。

バックステップくらい組んでおくべきだったんだ俺。

バンク中はつま先とステップ、ロングストレートではウィリー、ゴール地点ではジャックナイフとサービスしまくった。

1分35秒622、とアナウンスが入る。

その瞬間歓声が上がったからさっきのおじさんに手を振りながら戻る。

今のところ、スコアはトップで1:35.622。二位との差はだいたい3秒か。

これは中々のスコアだな。

「凄いじゃないか！」

「いやあ、まだわかりませんよ。これだって80ccだし」

「にしても相当な速さじゃないか。と、次は俺だ」

「頑張ってください」

「おじー！」



さっきのおじさんが出走する。

車両はY A M A H A X J 4 0 0。改造箇所は多分バックステップとシヨートマフラーのみ。

なかなか怒涛の勢いで走ってるようで、スコアは1：40・223。今のところ俺に続き二位だ。

しばらく座つてるとおじさんが帰ってきた。

「いやー、走ってみてわかったけどホントすごいわ。それでNN級だもんな」

「大会初参加なもんだから、どうあってもNNかNO（走行自体に変化が出る改造をした車輛のクラス）しか出れないもんで」

「あれ？NL（女性用クラス）は？」

「え？俺男ですよ？」

「え？」

「え？」

割と滞りなく第一ヒート（午前の部）も終了。

今のところトップは俺のため、何かいろんな雑誌の編集者とかが話しかけてくる。

「白波・A・R・麟さんですよ？私、集楽社の月刊バイクライフ

の朝倉と申します。いくつか質問大丈夫でしょうか」

「ああ、毎週読んでますよ。時間は大丈夫です」

「初参加でトップですが、いやーお若いですね」

「こう見えて25歳なんですよ」

「25！成人じゃないですか。となるとお仕事は？」

「今は無職ですよ。求職中って訳でもないけど」

「なるほど、ではこの大会での意気込みは？」

「第二ヒートも低速全開で！あと意気込みというか、家の妹に優勝商品のファミコンを持って帰ってあげたいですね」

「なるほど。妹さんがいらっしゃるんですか」

「ええ、宇宙一かわいいです。写真見ます？これなんですけど、かわいいでしょ。この間も……」

「あ、もう第二ヒート始まっちゃったか」

「え、ええ。ありがとうございます」

何故か朝倉さんはしんなりしていた。

朝倉さんにはあんなかわいい妹がないからしょうがないな。

他の人のタイムとか見たりさっきのおじさんと話したりして俺の番、  
滞りなく1:35・100。

滞りなく一位入賞してファミコンを手に入れた。

なにこれソフトついてないんですけお。

あとは朝倉さんのインタビューにちよつと答えて自走帰宅。

帰りにマリオ買って帰ったらエヴァが一晩中やってた。

011 世界最速、ジムカーナ出場。(後書き)

HONDA NSR80

水冷2st

79cc

12PS/10,000rpm

前出したNSR50の80ccバージョン。  
速いです。

最近は見かけませんね。

昔もそんな見かけませんでした。

僕はエヌパチと呼んでいます。

YAMAHA XJ400

空冷4st

498cc

45PS/10,000rpm

前ダブルディスク後ドラムブレーキ

車体重量が重いためジムカーナには向かないと思います。

でも速いから大丈夫かな？

YAMAHAのバイクはホントわからないので大分苦労しました。

あとがき

ジムカーナですよ。

つま先が当たるのは大丈夫ですよね？

今回想定したコースは何の変哲も無い普通のジムカーナコースです。  
レースの入り口としては、クラスくらいしか制限は無く、いくつか  
禁止事項はありますが車輛のタイプは何でもよく、車輛に何か特別  
なことをしなくてもけっこう走れるので適切だと思い書いた次第で  
す。

バイクに乗っているみなさんも是非。  
作中のタイムは適当です。

ちなみにライディング中の麟はオートで働く身長、体重、視力、腕力以外一切チートしてません。あとは魔力くらいしか無いけど。元からレーザーだったわけだし、戦闘で世界最強でもバイクで勝てない事はあるかもしれません。

あと、僕の一番好きなキャラは茶々丸です。エヴァは1・0000  
0001番目。

どうしてこうなった。

こんな所で言う事でもないと思いますが、金土日曜は見たいアニメが多すぎて、更新が滞ります。

更新しないつもりは無いので多めに見てやってください。

012 世界最速、雑誌に載る。(前書き)

きつと小さくて可愛らしいから華があっただんでしよう。

ちなみに麟は、バイクに携わる時は話し方が丁寧になります。

「バイク乗りは紳士でなければいけない」という矜持があるのです。

012 世界最速、雑誌に載る。

と、学園長室に登場したのはこの俺、白波麟。  
何気ない顔でこのえもんに話しかける。

「エヴァの魔力を抑えたり学園内に留まらせる結界を破壊するけどよろしいですね!!」

「ひよ!?!いやいや、いかにきまつとるじやろつ。わしがどれだけ……」

「いいか、コノえもん。別に登校地獄を解呪する訳じゃねえんだ。認める認めないって話でもない。

確かにエヴァは魔力が封印されててもほぼ最強だろう。でもナギクラスになると封印されてる状態だと1京分の1程度は負ける可能性がある。

そんな可能性を全て取り払ってやるのが兄つてもんじゃないんだろ  
うかと」

「し、しかしのう……」

言い淀む学園長だが、ここで俺が顔を上げた!

(実際の音声)

「よし、このえもん。いい事を教えてやろつ」

「良い事?」

「俺は世界よりエヴァの方が大事だ」

これにはさすがの学園長も苦笑い。  
実はこの俺は、世界中を敵に回しても1人で立ちまわれるほど最強  
なのである。

説得（ ）を終え、結界を破壊する俺。

一ヶ月後、そこには元気に走り回るエヴァの姿が……！

「……これは何ですか？」

「まる見え」

「何が」

「今からひと月前」

白波ツス。

何が元老院だ。

わざわざ親切心から説明しに来てあげたら1人を残してみんな逃げ  
た。

今もクルト・ベンデル（？）とやらしか残っていない。

そして俺はありったけの兵士に囲まれている。

前来た時もこんな感じだった。



「まずは彼らを落ち着かせるのが第一だと考えました」

「それはもういい！それを我々に話してどうしようと言っているのか聞いているのですよ！」

「え？ああ、ほら、いざという時、どうしても困った事があれば俺に言つといい。」

他の元老院の方々はいけ好かんがベンデルさん「ゲーデルです」モーデルさんのお願い事なら気が向いたら聞いてやらんでもない。かもしれない」

「どちらですか。というかゲーデルです。「ミーデル」もういいです。」

いえ、お気持ちはありがたいのですがあなたに頼ることは無いでしょう。ではお引き取りください」

「いやん、い・け・ず。」

ああそれと、くれぐれも、“俺以外の”白波姓を持つ者に手出しをしないように。これは他の元老院の偉い人にも言っておくんだな」

「わかってますよ。あなたにだってとても手を出せません。では」

追い出された。

「おいじじい、そう嘆くな。見苦しいぞ。ねえ、お兄ちゃん」

「おつともＹＯ！見苦しいともＹＯ！」

お爺さんが白くなって窓から外を見ている。

ただでさえ長い後頭部の影が光を受けさらに伸びている。  
もはや妖怪どころの話じゃねえ。

「わしはもうやっていけんかも知れんね」

「そう落ち込むなよ。俺はお前の敵じゃないぞ。味方でもないけど  
な」

「そんな敵でも味方でも無い奴が麻帆良の結界壊しました、等と言  
って魔法世界の、しかもＭＭ元老院に殴りこむと麻帆良の信用が」

「ああ、そんなもんはじめっから無い無い。根拠は無いけどそんな  
気がするわ、俺」

「ひどい言いようじゃのう」

「そんな事よりエヴァ！前のジムカーナで受けたインタビューが載  
った雑誌が今日発売なんだよ。買いに行こうぜ」

「うん、お兄ちゃん！」

「行ってきまーす」

「ここはおぬしらの家じゃないぞ！」

KO - B A I !

「ほんとキティ、立てば白百合、座ればガーベラ、歩く姿はライラックだな」

「お兄ちゃんだって、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿はカリフラワーだよ」

「あはははは」「うふふふ」

ICHA ICHAしながら購買に突撃すると何やらこちらを見る女学生がいる。

「ほら、絶対あの雑誌の子だって」

「えー、でもそんな人がこんなところに居るわけ」

「エヴァ、お前世界的に有名なかわいさっぱいぞ」

「いや、あれはお兄ちゃん見てるんだよ。お兄ちゃんが世界的に可愛いんだよ。雑誌って言ってるし」

「あ、ホラ、こっち見たよ」

「あのー、すみません。白波さんですか？」

「そうです。私に変なおじさんです」

「やっぱりー！サインもらえますか？」

そう言っ出て出してきたのは月間バイクライフ。何故か俺とフルノーマルFNのN SR80が表紙になつてた。

そんな事より変なおじさんはスルーか。  
と思ひながら渡されたサインペンをポケットに仕舞つて、筆ペンでサインを書く。

「はい」

筆ペンと雑誌を渡して俺もそれを買つた。

「キヤー、ペンもらつちやつた！」

「かわいいー！」

「あの人絶対有名になるよー」

もう有名なんだけどね。

「ホラ、お兄ちゃんだつたでしょ？」

「エヴァの方がかわいいもん」

意味のわからない拗ねかたをしてサインペンを捨ててから帰つた。

「何で俺も買つてんのにエヴァも買つてんの？4冊も」

「保存用と観賞用とスクラップ用と装飾用だよ」

「装飾用!？」

「うん！」

「装飾シヨールームの増築する？」

「する！」

部屋が二つ増えました。

俺用エヴァのシヨールームとエヴァ用俺のシヨールーム。

何これ、もうお互いがお互いのオタクみたいになってるやん。

ちなみにこのえもんは、俺が別なレースに出てる間中新築した俺部屋や俺の自慢話を聞かされてげんなりと

「何とかしてくれんかのう」

とか言ってきたから、エヴァが学校行ってる間中エヴァ部屋やエヴァの自慢話を聞かせたらちよつと後頭部が縮んだ気がした。

今回これだけ少ししか書いてないのには大きな理由があります。豚野郎は、家で書く場合はサクラエディタを使っているので行数がわかるのです。

だから「だいたい200行でいいや」とか言いながら100行くらいしか書かなかつたり300行ほど書いたりすることもあるのです。しかし、仕事用のパソコンだと、一日中座ってるにもかかわらず共用なので、テキストエディタひとつ入れるのにもいちいち許可が要ります。

「あのー、小説書くからエディタ入れていい？」などと言うと、ただでさえ座りの悪い前歯が亡くなってしまふ事もありえるのです。抜けるんなら何故か20になってから生えてきた親知らずが抜ければいいのに。

ありがたい事に、ホントやる事のない暇なバイト先なんですけど、まじめな顔してパソコン打ってる分には何も言われないので姿勢よくこんなウンコみたいな文を打っています。

今もカタカタやっております。隣に主任が座ってるんです。

あとがきですが、特に書くこともありません。

少しだけ隣が有名になる話です。

これからどんどん有名になって行くかもしれない。

ホント何も考えずに書いてるのでこれからどうなるか豚野郎にも全くわかりません。

このような稚拙な文章ではありますが、これからもどうか世界最速と豚野郎をよろしく願います。

013 世界最速、妹にバイクを買う。(前書き)

エイプを出してえ。エイプを出してえよオ。  
いつも通り見直してません。

013 世界最速、妹にバイクを買う。

らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！  
らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！  
らほーい！らほーい！

隣だよ！

初ジムカーナからもう8年。

エヴァもずいぶんバイク慣れしてきた、そこらの走り屋くらいなら話にならないくらい速くなってきたんだ。

なので、今日はバイクを買ってあげるためにバイクショップに来てるんだぜ！

「おいさん大口の客やでー」

NSR80を買った店でふんぞり返る。他にも学生の客がいたが、ほっとく。

ちなみに、実を言うと他にもここで20台くらい買ってる。

おっちゃんも俺がレースやってるって知ってるから金の出所以外は特に気にもならないらしい。

「お兄ちゃん、どのバイクがおすすめ？」

「スーパーカブ」

「じゃあそれで」

当然だが、戸籍上、エヴァは13歳になっているため、公道は走れ



ないが、そこは私有地麻帆良。

コノイエモンにONEGAIして「麻帆良ならどこ走ってもいいよ」  
的な事を言わせたから買いに来たってわけよ。

「一台でいいの？」

「じゃあ他のおススメは？」

「んー……この中だと乗りなれてるNSR50も買っとくか」

「じゃあそれも」

「他はいい？」

「うん。二台もあれば充分だよ」

「ふーん。……おっちゃん、めずらしいバイク入ってない？」

「ああ。HONDAじゃねえけど新車のDB2が入ってきてな」

「DB……ビモータの？」

DB2。決してドラゴンボールとは関係ない。

ビモータのフレームにドウカティ900SSのエンジンを載せてあ  
る。

ドウカティ ビモータ の頭文字を取ったシンプリングな名前だ。

「おう。250で出そうと思ってんだが」

「それ買った」

もう一人いた客が「高っ!!」とか言ってた。  
ふはは、貧乏人め。(金持ちでも躊躇う値段です)

「言つと思つたよ。あとNS500もあるんだが、買つんだろ?」

「買うに決まつてんだろ。合計おいくらですか?」

「うーん……お得意だし680万でいいぞ」

学生が「ろっ、ろっぴゃく……ろっぴゃくぢゅー!!」と呟いて  
いる。

「どれだけ悪い事したらそんな値段で売れるんだよ!安っ!!」

「ええっ!?!」

とうとう立ち上がりやがった。

「なんだガキ!さっきから後ろで喚きおつて。お兄ちゃんが静かに  
買い物出来んではないか」

「ま、まあまあエヴァちゃん。普通の学生にしたら600万円なん  
て、本当に存在するかも怪しい金額なんだよ」

「お前のも買つてやるうか?」

「へ?いやいや、いいですいいです!」

「遠慮すんなよ。こいつホント腐るほど持ってるから。ほら、68



「フアック!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「何だ貴様?言いたい事があるなら言えばよかるつ?」

「いやいや、君ら小学生?だよな?」

「マザーフアッカー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ちよつと落ち着いて君、ホントお願いだから」

「誰が小学生だ、公僕が!」

「ここまでが、まるで嘘みたいな話ですが本当に嘘です。免許を持ってないのも嘘。バイクを盗んできたっていうのも嘘。俺がどう見ても小学生ってのはホント」

「え?え?どういう事?」

「ほれ、免許」

「え?嘘?ちよつと待っててね」

2人いたうち、背が高い方の青い服の怖い人が免許を持ってパトローリング・デスクヤッスルに入っていく。

白に黒の線が入った、別に死を運ばない、恐ろしいセダンだ。しかもだいたい高級車だ。

「お兄ちゃん、こいつら私たちの事馬鹿にしてるんだよね」

「おい、マジで？エヴァを馬鹿にしたら懲戒免職な」

「いやいや、しないよ、ってお兄ちゃん！？女の子かと思った」

「羨ましかろう。崇めよ」

「いや、別に羨ましくは」

「私のお兄ちゃんが貴様のお兄ちゃんじゃないのに羨ましくないと抜かすか、貴様……」

「先輩！！助けて！！俺もう無理っス」

後輩が何やら嘆いているっばいから棒でつついておこつ。

「アフアム！！！！痛、ちょ、やめてえ！」

「ああ、ごめんよ君たち。やめてやってくれないか？ちゃんと確認しておいたから」

「ホント。俺もう33歳だよ？」

「うつそ！？若々しいにもほどがあるだろ！！」

「エターナルシヨタとエターナルロリータですけんのう」

「ホントなんだよ、これ。免許書の覧全部埋まってたの見たときはこれやりたいがために偽造したのかと思ったくらいだ」

「これやりたいがために全部の免許取ったんだけどね」

「さすがお兄ちゃん！」

「天才だからな。じゃあお兄さんたちもパトロール頑張れ。超頑張れ。あと、ナチュラルに考えて、バイク盗むような奴がツーリングジャケットやらフルフェイスヘルメットやらを持つてはさすがない事も少し頭に入れておいてほしい。それじゃ」

「次は覚えておけよ。三下共」

「お兄ちゃん」

「え？どうした？」

「認識阻害の魔法かけたら止められないんじゃない？それに律儀に止まってあげることないのに」

「それはな、エヴァ。止められる事も楽しむのがツーリングってものな（訳がない）んだ。ホントはからかって遊びたいだけ？」

「お兄ちゃん、性格悪くて素敵！」

「あっはっは、ニーいつうー」

ホテル行ったら断られました。

013 世界最速、妹にバイクを買う。(後書き)

HONDA スーパーカブ50

4st空冷

49cc

3.4PS/7,000rpm

前後ドラムブレーキ

上記は現在のカブのスペックです。

言わずと知れたストリートバイク。

耐久性、燃費、価格、どれをとっても世界のHONDAの名前に  
相応しいバイクです。

最早語るまでもないでしょう。

Bimota DB2

4st空冷

904cc

76PS/7,000rpm

前後ディスクブレーキ

イタリアのバイク。

作中でも書いたようにDucati Bimotaの頭文字を取っ  
たバイク。

ドウカティの900SSというバイクのエンジンが載っている。

L型のエンジンをしているのでLツインドウカティと呼んでいます。  
でもL型してようが正しくはV型らしいです。

ちなみに、これは旧車ってほどでもないですが、豚野郎はイタリア  
の旧車が大好きです。

しかし遅いのでそんな出しません。

実は005の前から杉ちゃん様にリクエストいただいてました。



HONDA NS500

水冷2st

496.99cc

127.5PS / 11,000rpm

前後ディスクブレーキ

今まで黙ってましたが、省エネやらエコやらが蔓延するこの時代において、私、紅の豚野郎は、時代を逆行するかのように2st車が大好きです。

ちなみにRS500Rという市販できるようにした車両もあるらしいです。

走行シーンは遠からず入れます。

ついでに学生が買ってもらったバイク

SUZUKI 薔薇

空冷2st

多分49cc(うる覚えですが30cc台だったような気が)

4.0ps/6000rpm

セル付きとセルなしの差額がだいたい1万円。

所で新車の薔薇が近所で8万円で売られてたんですが、どうしまし  
よう。

アフアム

有名なスプロケットメーカー。

軽い。すごくいい。

あとがき

もう8年経ったよって言いたいだけの話。

キティにゃんのバイクも別にいらなかったね。

でもエイプが出る頃までに運転が上手くなっておいてほしかった。

麟がカブ勧めた理由は「カブに乗ってるエヴァもかわいいよ!」

時間軸的には多分1996年くらい。季節は考えてない。  
エヴァにゃんには戸籍があるけど、3年ごとにあの手この手でこの  
えもんが13歳に戻している。  
麟は公式にレーサー活動をしているため戸籍放置。  
では、今回もありがとございました。

014 世界最速、世界最速を証明する。(前書き)

「世界最速、もう走んのやめる。  
にしようかと迷いました。  
嘘です。」

## 014 世界最速、世界最速を証明する。

最終ラップ、今のポジションは二位、秒差は0.2。充分いける。1キロ以上あるロングストレートを抜け、速度を一気に90キロまで落とす。

スリックタイヤが少しずつ外へ滑るが、膝で拳動を抑えて抜け切る。すぐに次の左コーナーが迫るがクリア。同じくらいの距離で右も加速しつつクリア。

一位のスリップストリームに入り込み加速、第4コーナーで内側に並び、第5コーナーでインから抜く。

第6、7とこのコースでは比較的ゆるやかなカーブを過ぎ、スロットルを空ける。

第8はもうタイヤが限界だ。滑らせながら抜けて第9も滑らせながら突入。

途中、急にグリップが戻ってハイサイドを喰らいそうになるが、アクセルを開けて回避。膝を地面に叩きつけて回復する。

第10、11コーナーでさっきの失敗を全く生かさず、倒せるだけ倒して抜け切る。

第12コーナーで膝を磨りながらバランスを取ると、急にバンクセクサーの感覚が無くなる。右コーナーが多いコースでコーナーリング時は地面で擦りっぱなしだったから削れ切ってマジックテープに接触したみたいだ。

幸いにも、右コーナーは次で最後。

13コーナーを乗り切れば、左に回る第14コーナー。ここでも前輪、後輪、左膝の三点ドリフトで駆け抜けて、ハイサイドを無理に

立て直し、最後のホームストレートはタンクにへばり付いてスロツトルを回す。

どうも、イタリアはムジエロサーキットからこんにちは。世界中から歓声を受けてるカマ野郎、白波麟です。

ロードレース世界選手権、通称WGPと（現在はMOTOGPとも）呼ばれる2001年大会の250ccクラスで優勝しました。

主催者も観客もレーサーも死ぬほどビックリしてます。そりゃそうだ。

何せ、プライベーターがノンストップで一気に優勝しちゃったんだから。

つてか表彰台www

三位の奴と頭の位置が同じwww

二位の奴に至っては俺より高しwww

やーめーろーよーwww

トロフィーを渡され、マイクを押し付けられる。

「愛してるぜ……！」

とりあえず泣きながら叫んだけど、何コレ。

詳しいことは覚えてないけど、俺はここに立つために生まれてきた気さえする。

エヴァを抱きかかえて、俺はレースの退却宣言をした。

アレから3ヶ月

レース前から鬼のようにスポンサー契約やらレーサー契約やらをいろんな会社から迫られてたけど全部断って、HONDAのロードレーサーである規制カツカツまで改造したRS250Rに乗り、しかも優勝を果たした奇跡のライダーとして祭り上げられている。

実際、レースというのは金がかかるんだよ。

インタビューの以来も怒涛だったけど、「俺はアイドルじゃなければ、もうレーサーでもない」と言っただけ、ある一社の1編集者以外の取材は全部断っていた。

「白波さん、大拳ですね。まさかレースを辞めるなんて言うとは思いませんでしたよ」

「ああ、朝倉さん。お待たせしてすみません。しかし、俺らも中々の付き合いの長さですね」

インタビューはもう優勝した時点でげんなりするほど受けたから今日はプライベートで会っている。

どうやら、次々と名を上げる俺を追ってインタビューをしてたが、GP250の件でとうとう集楽社の副社長になったみたいで、

「副社長にもなっただけから取材に出るような人いませんよ！」などと部下に押さえ込まれているらしい。

お礼と恨み言を言うために俺を食事に誘ったという訳だ。

「ええ。初めて会った時の事を思い出しますよ。ってか全然見た目変わってないじゃないですか。どうしたんですか」

「童顔なもので。というか前会った時点で成長期は終わってたわけ

ですから、そう考えれば別に」

「不思議ですよ！何ですかそれ。すっごいなあ」

「でもこれからは会う機会も無くなりますね」

「いや、そうでもないんじゃないですか？白波さん、麻帆良ですよ  
ね？」

「というと、朝倉さんも？」

「いやいや、私の娘が麻帆良でして、来年には中学生ですよ」

「これはこれは、じゃあ俺の妹と同級生って事になるんですね」

「ああ、そうなりますね」

「ここでも認識障害はしっかりと働いてたか。いや、まあわかってるけど。」

俺との年の差に全く疑問を持たないようだ。

長くなるので簡潔に言うと、電力を使った学園結界は、エヴァの魔力を抑えるとともに認識障害を麻帆良全体、及び関わったことのある麻帆良関係者にかける結界だった。

何を言ってるのかわからねえとおm（ry

「しかし、白波さんのおかげで全く取材に出なくても良くなっちゃいましたよ。もう暇で暇で」

「トップが暇なのは会社が安定してる証拠ですよ。良かったじゃない

「いますか」

「ははは、嫁と娘にも言われてますよ。やっぱり私に変なのかな」

「まあまあ、老兵は去るのみですよ。あとは若い世代に任せましょ  
う」

「白波さんなんか全然若いじゃないですか」

「まさか。朝倉さんの100倍は長生きですよ」

「ははは！乾杯！」

「乾杯。水で失礼します。全くお酒は飲めないもので」

「ますますレーザーじゃないですか。本当に惜しいなあ」

エヴァが本を読んでたから後ろから抱きつく。

「エヴァー」

「なあにー？」

「お兄ちゃん、学校の先生になろうと思ってんだよ」

「ホント！？じゃあ私の中学校にも？」



勢い良く上を向いたもんだから俺のアゴにエヴァの頭がクリティカルヒットした。

「あべし！そうだなあ。教員免許取ったらじじいとOHANASHIしてエヴァの学校に行こうかな」

「うん、待ってるよ！」

「差し当たって、パソコンを買います。つてか買いました」

「おおー、流石のフットワークの軽さだね」

「元GPレーサーだからな。そして昨日ホテル行ってた間にLAN工事も済ませておいた」

「らん？とにかく、私も機械に強くなりたいといけなくなったからまさにグッドタイミングだよ」

「何で？」

「んーまだ秘密。でも新しい家族が増えるよ」

「やったねたえちゃん」

エヴァが俺に隠し事をするとは……  
悲しくもあり、うれしくもある。

さて、俺もさっそくじじいとOHANASHIして、大卒資格もらうか。

教員免許？それは流石にもらわないだろ。

だって人に物教えるんだぜ。

エヴァも朝倉さんの娘さんもエヴァもいるかもしれないのに中途半端な気持ちで教えるわけには行かないだろう。

エヴァもいるかもしれないのに。

大学はいいんだよ。

もうそろそろ戸籍上では40なのに他の大学生と一緒に勉強するのはちょっと個人的に切な過ぎる。

という夢だったのさ

お・し・ま・い

嘘です。

014 世界最速、世界最速を証明する。(後書き)

RS250R

水冷2st、V型二気筒

249cc

87PS/11,750rpm

前後ディスクブレーキ

HONDAのロードレーサー(公道走行不可車輛)。  
カツカツの改造と言っても詳しい内約は知りません。  
というのも、豚野郎はGPレースの事は全くの無知だからです。  
はたしてどこまで改造してもいいものか……。

あとがき

麟がレーサーを辞めてしまいましたね。

バイクはまだまだ乗りますよ。

麟がレーサーを辞めた理由としては、書いてても何やってるかよくわからない、というのと、きっと読んでるほうもそれほど面白くない筈。

という風に思っているからです。

あとは、豚野郎自身が鈴鹿とかスポーツランド生駒とかのホント近場しか走ったことがないのも大きな原因です。

ムジエロとか中継でしか見たこと無い。

ちなみに、もうわかるかと思いますが、麟は麻帆良の教師になります。

あまりネタバレはできないんですがね。ふふふ。などと言いながらホント何も考えてないだけです。

シラナミファミリー加入者候補は一応2、3人居ます。

茶々丸だけはどう転んでもシラナミファミリーに入れる！

では、本日もありがとうございました。

015 世界最速と、エイプ。その1（前書き）

エイプはHONDAが生んだ奇跡だと思います。

015 世界最速と、エイプ。その1

ガリ勉麟ちゃんやで。  
どもここにちは。

お兄ちゃんはめっちゃ勉強してる。元々頭いいほうじゃないし。  
普段は普通に勉強して、休日は教師の何たるかを。

指導員として新田先生とやらがついてくれている。やや愚痴っぽく  
酒の勧め癖がウザいが、いい先生だそうで。

周りの魔法先生どもは『邪神が改心』とかクソ以下のラップみたい  
な韻を踏んだ評価をしてくれてるおかげで何かと生暖かい雰囲気だ。  
このままいくと滞りなく来年の8月には教員免許もとれそうだ。

そんなこんなで待ちに待った2001年2月、俺とエヴァはまたも  
やバイク屋に来ている。

今回は無理やり二人乗り可能で公道走行可能な改造を施しに施した  
NS500で。

「おっちゃん、エイプ発売したんだろー売ってよー」

「おお、お前ら何か久しぶりだな。優勝したのにレース辞めたんだ  
って？っつか老けねえな」

「エイプー」

「はいはい。26万でいいよ。カラーリングは？」

新車価格より少し安めで売ってくれるらしい。  
いや、どうせいくらでも買うんだけどな。

「エヴァ、何色にする？」

「白にするー」

「白かー。限りなくクリーム色に近い汚い白ならあるんだが」

「全塗装……か……。全塗装やってよー」

「いや、俺ただの小売だからな。知り合いの塗装屋に頼んどくわ」

「じゃあとりあえず26万。オプションは全部無しで。どうせ来た瞬間から改造が始まるからな」

「バイク屋としては改造車なんて危ないもの乗るなどっておく」

「おっちゃんとしては？」

「いいぞもつとやれ」

「よし来た」

サムズアップにはサムズアップで返す。そいつが俺のルールだぜ。

「じゃあ出来上がったらまた家に頼んだぜ」

「頼んだぞ、店主」

「はいはい」

「あ、そうそう、慣らし運転とかやってくれないよね？」

「失せろ」

出来心で聞いたなら怒られちゃった

「じゃねー!」

「よし、今日はどっか行くか!」

「うん!」

「前のバイク、左に寄せて止まって下さい」

何これすっごい知ってる。

「サノバビッチ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「おお、ごめんごめん、久しぶり白波君」

「あれ?老けた?」



「そう言う君はどれだけ老けないつもりなんだよ」

「なんだ、また貴様らか。懲りもせずセコい真似をしているな」

「エヴァちゃんも久しぶり」

「ジーザスクライスト!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「落ち着いてください、先輩もわかってて停めましたから」

「許さん。マジで許さん」

エヴァに棒を渡し、二人でつつく。

「ブレンボ!!!痛、ちょ、やめてえ!」

「繰り返しはギャグの基本だからな、エヴァ」

「わかってるよ、お兄ちゃん」

「相変わらずだなあ、これからどこに?」

「さあ……。オススメのツーリングコースとか無い?」

「うーん……俺はバイク乗らないからな。定番は海か山じゃないの?」

「ん。まあいいや。エヴァ、海行こうぜ、海」

「うん、お兄ちゃん!」

「じゃあおじさんもパトロール頑張れ。超頑張れ。あと公私混同はどうかと思わないんだなこれが。あと最近大阪まで行って買ったんだけどこのジャケツトどう？黄色地に黒い矢印のワンポイントが超クールな逸品なんだけど」

「ああ。似合ってるぞ。じゃあ気をつけてな」

スリックタイヤで公道走るもんじゃないね。一気にスリップタイヤだよ。

二週間後にエイプが届いたからとりあえず二人でノーマルの乗り味を存分に堪能した。

「お兄ちゃん、これ思ったより遅いよ」

「そりゃそんな風に作ってあるからな。あ、3500回転より回すんじゃないぞー」

「はい」

慣らし運転しんどい。

## 015 世界最速と、エイプ。その1（後書き）

HONDA Ape50

4st空冷

49cc

3.7PS/8,000rpm

前後ドラムブレーキ

ちょっとHONDAさん、人がエイプ買った瞬間にタイプD発表とかホント勘弁してよ。で有名なエイプ50です。

遅くてすぐにステップが地面についてノーマルタイヤはうんこ、おまけにブレーキはほとんど利かないしフロントフェンダーはあってもなくても変わらないという伝説のバイクです。

更にキャブレターはまさかの16、エアクリナーボックスに謎のノズル（通称ブタ鼻）、マフラーは何をろ過してんだよというくらい詰まっています。

が、カスタムベース車輛としては世界最強だと思えます。

次話はエイプをいじる話にしたいですが、「このパーツはこの年代にはまだ出てない」という突っ込みは勘弁してください。

ブレンボ

有名なブレーキメーカー。

ものすごい止まる。

あとがき

教員免許のいかげんさについてですが、全然知らないのと調べる気がないのとどうせ麻帆良だし。という三種の妥協によってあのような仕上がり。（仕上がってない）

隣が教師になろうと思ったのは、

- 1・時間が余った
  - 2・エヴァと禁断の兄弟愛に加え禁断の教師、生徒の愛もしてみたい
  - 3・朝倉さんの娘の教師になって保護者説明会の時に死ぬほどビツクリさせたい
  - 4・エヴァかわいい
  - 5・エヴァの13年に渡る登校地獄（もはや機能していない）に彩りを
- というそんな感じのアレです。
- しかし今回のオチの弱さは一級品ですね。

いつも見てくださってる皆さんはありがとうございます。  
今日初めて見てくださった人もありがとうございます。  
愛しています。

016 世界最速と、エイプ。その2 (前書き)

やっと書けたー。

016 世界最速と、エイプ。その2

パーツもちよくちよく出始めたことだし、改造<sup>イジ</sup>るか。

白波・A・R・麟です。この『A・R』覚ええる人ってどのくらいいるんだろっね。

「kitty!」

「What?」

「can speak Japanese?」

「しゃべれるよ、お兄ちゃん」

「今日もかわいい。っと」

宇宙一かわいい！キティ天才！日記に今日の一行エヴァを書く。

「それ何?」

「宇宙一かわいい！キティ天才！日記」

「見せてー」

「はい」

日記を渡す。

「これ日付と『今日もかわいい。』しか書いてないよ?」

「ん？ああ、例えばこの日は  
『今日はレース前にエヴァと2分キスした。アメリカの雑誌編集者が英語で野次を飛ばしてきたから流暢なハナモゲラ語で返答。エヴァに「お兄ちゃんかっこいい！」と言ってもらった。エヴァもかわいいい』  
と書いてる。」

「お兄ちゃんすごい！じゃあこれは？」

「『昨晚、いつも俺が布団に忍び込まれるから今日はこっちから忍び込んでやるうと思ったらもうエヴァは部屋を出た後だった。そのまま布団で待つてたら半ベそかいたエヴァが帰ってきた。声をかけようとも思っただけどかわいかったから放置。今朝起きたとき俺が何でか全裸だった。』」

「あの日かあ。そんな事もあったね」

「ノートは書ける量が決まってるから、かさ張らないように俺が編み出した究極技法、『今日もかわいい。』法だ」

「お兄ちゃん、天才すぎるよ！」

「取り出だしたるはキティ号<sup>エイソ</sup>。んでこっちが今指輪で作ったキティ号とキャブが違うだけの同じバイク」





「お兄ちゃん……今日もうバイク乗れない……」

「よく頑張ったな、エヴァ」

「うん……お兄ちゃん」

「エヴァー……！！！」

必要なパーツをリストアップしてバイク屋を呼ぶ。

「おいおい、もう違うバイクじゃないか」

「いけるいける。じゃあ組み付けまで頼んだぞ」

「もう3台新車でエイプが買えるな。めんどくせー」

「バイク屋エ……」

一カ月後……そこには元気に走り回るエヴァの姿が……！

詳しいことは面倒なので省くけど

PE24

ファンネル

OVERレーシングアツプマフラー

ツインスパークヘッド

オイルシャワーヘッドカバー

5段オイルクーラー

F 14Tスプロケット

R 32Tスプロケット

前4ポッド後2ポッドディスクブレーキ化  
フレンボ

セパレートハンドル

ハンドルストッパー

バックステップ

アンダーカウル

KISS RACING アッパーカウル

ダウンフェンダー

泥よけ

タンクカバー

合わせて必要なパーツ各種も。

これを組み上げたイカレエイプの登場だ！

まあ100万近くかかったりもしましたが、財布は元気です。

そしてどう見ても違うバイク。

エイプ？ああ、エンジンの下のほうとフレームがたしかにエイプっぽいね。

って感じになってます。

タイヤはエイプ買った時点でBTに変えてるよ。

あとは各部にバカ魔力で強化魔法と防水、減音魔法をかけると完成！

魔改造（元）エイブ『キティ号』

バックステップ・セパン・タンクカバーによる……圧倒的……前  
傾姿勢

エヴァの低い身長が生み出す……奇跡……一体感……  
無理のないポジション……っ！！

そしてさらに……バンク角……っ！

以前のステップ位置では確実に擦っていた地面が、頑張らねばステップが届かぬ距離に！！

この話し方疲れるね。

んで高圧縮ツインスパークヘッドによって生み出されるトルク、高回転型マフラーの抜け。

吸気、圧縮、爆発、排気のバランスを極限まで（バイク屋が）整え、加速、最高速ともにバランスの取れたバイクに仕上がった。

50ccのままここまでやるのは俺の夢でもあったからな。

エヴァも「久しぶりー」などと言いながらほお擦りしている。

「お兄ちゃん、これすっごい乗りやすいよ」

「ははは、それが乗りやすいつてのはひょっとしたら一般的にはそんな良くないのかもしれないけどなあ」

今日も白波一家は平和です。

016 世界最速と、エイプ。その2（後書き）

バックステップ組んでもステップ擦るよね？  
紅の豚野郎です。

ここにエイプのスペックでも書こうと思ったけどそもそもそんなエイプ組んだことないからわからん。  
多分6馬力くらいはある。  
あと一日三回くらいセッティング要るんじゃないかな。魔法の力で何とかしてるってことで。

さて、特に後書くようなことも無いので麟のスペックでも。

魔力：無限

無限です。魔法の才能は普通。良くて中の上。

身体能力：世界最強の50倍

世界で一番足の速い奴の50倍の速度で走れて世界で一番力が強い奴の50倍力が強い。世界最強が更新されればそっちに自動で合わせられる。

頭脳：知識は上の中、知能は並以上、知性は上の上、理性は無いに等しい

よくわからない事にすごいポテンシャルを発揮することがある

攻撃力：魔法の射手一矢を本気で放つと大惨劇が起こる

防御力：その大惨劇が起こる一矢を受けても無傷

身長：低い。

体重：軽い。

顔立ち：女の子。

髪：4年切ってない。

声：高い

性格：嘘をつかない。身内に優しい。アホっぽい。

パソコンを買つと初めにOPERAを入れるタイプ。

017 世界最速、家族が増える。(前書き)

やったねたえちゃん!

017 世界最速、家族が増える。

もう少しで教員免許が取れそうな白波麟之助です。  
道具の名前と使い方はわかりません。

もう少しでとか言ってるけど努力値に比例するのではなく期間だけの話です。

必要な単位はもう取り付くしたし。

「よろしくお願いします。白波麟様」

「え？う……うわあああああああ！ロボットだあああああ  
あ！……！」

「ふふふ、びっくりした？お兄ちゃん」

「茶々丸と申します」

「キエエエエエアアアアアアシャアベッタアアアアアアア！！  
」！

「ちなみに、正確にはガイノイドです」

「なんだ、ガイノイドか……ロボットかと思いきや……ガイノイド  
……」

「それはそれで困る反応です。ロボットのガイノイドというわけで  
」す



「クラスメイトのハカセと超鈴音が大学部のロボット工学研究会で作ってきた凄い奴だよ」

この無表情でオロオロしてるガイノイド茶々丸が……  
ガシャーンガシャーンとか言ってるくく3 getしてくれるのか。

「くく3は任せた」

「何の話でしょうか？」

「ちなみに私と主従契約もしてあるよ」

「なんだと！ コラ茶々丸、エヴァと間接キスすんぞオラア！」

「そ、そんな、困ります……」

「キスじゃなくてドール契約だよ。チャチャゼロと同じやつ」

「アレみたいにくちく包丁を振り回すのか……はい、茶々丸、包丁」

「その……困ります……」

茶々丸がご飯も作れるというので作ってもらった。

ちなみに俺が死ぬほど甘やかしてるからエヴァは食事を作れない。

普段から俺が作ってる。

これからも作る機会は無いはず。

純和風に鰯の塩焼き、わかめしか入っていない味噌汁、白菜、大根などの浅漬けに白米。

シンプルながらスタンダードの味わいがある、和の心という奴だ。

「いかがでしょうか」

「うん、うまい。和食は作れないんだよな、俺」

「思ったより大した奴だ。ハカセと超も、それにお前もな」

「ありがとうございます」

「しかしアレだな。味噌汁って具材が2種類以上入るもんじゃないよな。100歩譲ってわかめと豆腐まで」

「それ以上入ったら味噌煮込みだって言ってるもんね」

「バランスを考えずにいれたらもう味噌煮込みからクソ煮込みにラックダウンだ。」

まあ味噌は魔法の調味料だからまずくなるって事はそうそうないけど、一定以上美味くしようと思っても至難ともっぱらの噂よ。

それをここまで美味しく作れるなんて茶々丸ステキ！」

「うむ、お兄ちゃんも喜んで、何よりだ。よくやったな茶々丸」

「はい、ありがとうございます」

「茶々丸は飯いらないの？動力とかどうなってんだよ」

「最近までは外部からの電力供給だったのですが、実用にあたり、頭部のぜんまいを魔力を込めながら回すことによって、機械と魔力による動力が得られるよう改造されました」

「混合給油式……か……」

「レーサーだね」

「うん、茶々丸はレーサーだな」

「??？」

茶々丸は何かわかっていないようだ。当然だね。

あれから一週間、茶々丸も大分こちらの生活に慣れたようだ。様式美。

ホントは初めから普通に問題なく働いてくれている。俺が魔力を込めてぜんまいを回したら一回暴走したけど。

「茶々丸にも白波を名乗る権利をやるうと思う。今日この頃」

「そんな、私が隣様の姓を名乗るなんて、おこがましい」

「遠慮はいらぬ……」

「お兄ちゃんもこう言っている事だ。とりあえず受け取っておけ。そうすれば裏には絶対に手出しされんようになるぞ?」

「それに魔法関係で危ない時……攻撃されそうな時なんかは、白波を名乗ればだいたい押し通せるはずだ。」

「ありがちな話だが、お前ももう俺の家族だからな」

「家族……ですか……」

「ん?どうしたの?うれしい?うれしいの?感動してんの??」

「……はい。これはうれしいのでしょうか……。うれしい……です」

「やだ、かわいい」

「お兄ちゃんもかわいいよ」

「マスターもかわいいです」

「何このトライアングルフォーメーション。じゃんけん?」

「白波茶々丸ってのはそんなにノらないんだよなあ。絡繰も名前の一部だし」

「私みたいに絡繰茶々丸・シラナミっていつのは？」

「呼びにくくね？いつそ絡繰・S・茶々丸とか」

「なるほど。お兄ちゃん天才」

「と言うわけだ。攻撃されそうになったらちゃんとシラナミの者ですと言うんだぞ、茶々丸」

「はい、お気遣い感謝します」

「うむ、苦しゅうない」

マスターには「茶々丸」と立派な名前をいただきましたが、マスターの兄である白波麟様に、危険がこの身に及ぶ可能性がある時は白波姓を名乗るよう命じられました。

このCPU内の処理が『うれしい』というものなのでしょう。

私はマスターの従者でありながら白波の家族にもしていただきました。

マスターは600歳にもなる最強の吸血鬼らしいです。

普段は誰に対しても尊大な態度ですが、兄と慕う麟様にだけは常に甘えています。

ハカセにインストールされた、『話し合いすら通じない敵』一覧の「滅ぶべきバカッブル」という項目に連ねられている行動にそのま

ま当てはまります。

ですが、兄妹なので問題はないのでしょうか。

麟様はよくわからない人です。ハカセがインストールした人格対応プログラムのどのパターンにも当てはまりません。

本当に、思ったことをそのまま口に出しているようで、秒刻みに主張が変わる事もあります。

ですが、マスターはもちろん、白波姓を名乗るようになってからの私に対しても優しく、というより甘すぎる接し方をされます。さすがにマスターに対するほど無条件で褒め倒されたりはしません。変わってはいますが、とてもいい人です。

たまに、何故か私をレーサーと呼びます。

私は、この家の家族になれて良かったです。

017 世界最速、家族が増える。(後書き)

アト・ガガ

遅くなりました。

今日はこれしか更新できないのか俺。

そんな事はないだろ？頑張れよ俺。

と無駄にハードルを上げてはみましたが、実際のところわかりません。

あと、8/10も新約禁書2巻が発売なので、更新がやや滞るかもしれません。

イヤッホー……ウ……!

茶々丸!!好きだ!!!

結婚してくれ!!!

ちなみに茶々丸をバイクに乗せるかはわかりません。

最低でも400ccクラスじゃないと厳しいんじゃないでしょうか。重量的に。

エヴァがエイプに乗ってる隣でCBに乗る茶々丸……なるほど。

多分実現しますん(?)

では、今回もありがとうございました。

018 世界最速、教育実習に行く。(前書き)

日付変更までに間に合った。  
いつも通り見直しかしてません。



018 世界最速、教育実習に行く。

超童顔の39歳、教師になる

1 : 02 / 07 / 06

再来週から教育実習なんだけどwww

2 : 02 / 07 / 06

<< 2 get

3 : 02 / 07 / 06

<< 2 ゲットオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

4 : 02 / 07 / 06

(・・) スンスン (・・) ハッ!

5 : 02 / 07 / 06

うp

6 : 02 / 07 / 06

おいおっさん、今日は『がいしゅつ』記念日だぞ。

7 : 02 / 07 / 06

<< 3 何やってんのこいつ

8 : 02 / 07 / 06

<< 3

バーカwww

<< 4

ほら <http://www.ikemenronda.co.uk/pp0026665.jpg>

9 : 02/07/06  
<< 1 up

1 0 : 02/07/06  
<< 8

かわいいiiiiiiiiiiii!!  
娘の写真載せてんなよおっさん

1 1 : 02/07/06  
<< 1

39で教育実習なんて・・・カワイソス

1 2 : 02/07/06  
<< 8

ちうたんに匹敵するかわいさ

1 3 : 02/07/06  
<< 1 2 匹敵しねえよハゲ市ね

1 4 : 02/07/06  
<< 1 3

どんだけレス速いんだよ  
必死すぎワロタ  
www  
www  
www

1 5 : 02/07/06  
<< 8

偽装.jpg

そんな事よりゴミ拾い行けよお前ら。  
凄いいことになってんぞ

1 6 : 0 2 / 0 7 / 0 6

< < 9

何で1アップしてんの？  
きのご捨てたの？

1 7 : 0 2 / 0 7 / 0 6

< < 8

こいつレーザーの白波じゃね？っておもってググったら白波だった  
w w w w w w w w w w w

白波です。

この混沌さが絶妙。

さて、ちうたんって誰だよ。

「ちうたん

」 「検索」

カチリコ

「ネットアイドル？」

「何見てるの？お兄ちゃん

「ちうのホームページ」を見てるとエヴァに声をかけられた。

「ネットアイドル」

「なにそ……茶々丸ー！」

「どうしましたか？」

「コイツ、アレだよな」

「ハイ。98.336%の確立で千雨さんでしょう」

「何？知り合い？」

「同級生だよ。地味なほうの。名前は長谷川千雨」

「いや、めっちゃキラキラしてるやん。地味の正に対角やん」

フリッフリの「あたい魔女ツ子 よろすくwww」って感じのプ  
リチーな少女の写真とか貼ってある。

「きつと『ちうたん』にも色々あるんだよ。何か学園結界の認識阻  
害が効いてないからストレスもあるんだと思うよ」

「ふーん、認識障害が効かないなんてことあるんだなあ。

……で、どじっ？」

「うん。いいよね」

「何の話でしょうつか？」

「いいか茶々丸」

「はい、何でしょう」

「このちうつたんに会ったとしても、『ちうつたん』だと知ってる事を悟られるなよ」

「はい。大丈夫ですが、何故？」

「それはお兄ちゃんがそのうち教師として学校に入った時、それをネタにからかえるからだ」

「なるほど」

「いいよねー」

「3Pとかしたいよねー」

「茶々丸も入れて4Pもあるいは……」

「うへへへへへへ」

「な……何でしょう、この空間は少し怖すぎます……」

茶々丸がマジ引きしてる。

「と、まあ冗談はこれくらいにしておいて、だ」

「うっ」

「じよ……冗談だったのですか」

思いつきりマジだけど。

「二人に言わなきゃいけないことがあるんだ」

「どうしたの？」

「俺は次の次の月曜、要するに22日から教育実習が始まるんだが」

「はい」

「……本当は、口に出すのも辛いんだが……」

「う……うん」

「俺は実習期間の3週間……帰ってくる……できない……」

「……」

「……」

黙り込んでしまった。二人とも、相当驚いているようだ。

「に、3週間も？」

「えっ？」

茶々丸が普段は絶対にしないリアクションまでする。

二人とも寂しいんだろう。当然、俺も死ぬほど寂しい。

「二人とも、寂しいのはわかる。でも、乗り越えなきゃ……いけな  
いんだ……ズビズボバビツチ（鼻をすする音）」

「お兄ちゃん……私、大丈夫だからね。お兄ちゃんが居なくっても  
心配……しないように……グスツ」

「あ、あのー、二人ともよろしいですか？」

「ん？なんら？」

俺にだきついてべそかいてるエヴァが茶々丸に返事をする。

「お二人の今まで生きてきた600年間と比べれば2週間程度は些  
細なものですよね？」

「そうだが、どうした？……ブボボ……モワツ（鼻をすする音）」

「え？いや、ですから、3週間くらい離れてても……」

茶々丸からすつごい不自然な言葉が聞こえてきたけど、何？幻聴？

「バカツ！茶々丸のポケロポ！！……ズズツ……お兄ちゃんと私は  
なあ、出会ってから24時間以上離れたことが無いんだよ！！」

「完全にお互いがお互いの一部なんだよ！！……ブリュンスタッド  
（鼻をすする）」

「えー……ええー……」

後で聞いた話だが、茶々丸はこの時『呆れ』という新しい感情を生

み出したそうだ。

「お兄ちゃん行ってくるからな。何かあったらこの一週間前三人で駅の近くの携帯ショップで買ってきた最新型の携帯電話に遠慮なくかけてくるんだぞ」

「うん、お兄ちゃん。その間学園の警護と食事はまかせて。もし何かあったらこのお兄ちゃんと色違いの値段も一番高かった高機能な携帯電話でえんりよなくかけるね」

「いつてらっしゃいませ、麟様。ご安心ください、元々学園の警護はマスターしかしておりませんし、食事も私がお作りいたします。ちなみに私の携帯もお二方と色違いですので、有事の際はこの麻帆良工業大の電子学部が開発したレスポンスのとても速い携帯電話で連絡いたします。」

「いつてらっしゃい、お兄ちゃん」

「うん、……いつてきまウィッシュ」

（駅の改札口）

あれ？俺電車の乗り方知らなくね？

「どうしたん、お嬢ちゃん？」



「電車の乗り方わからへんねん」

お嬢ちゃん？ああ、慣れてるから。間違われても特に何とも思わないから。

京都っぽいイントネーションだったから京都っぽいイントネーションで返す俺はきつと紳士。

「どこまで行くん？」

「あー」

目的地の表示を指でさす。

「ああ、それはなあ、とりあえず720円の切符買ってあっちに来る電車乗るねん。

しばらくしたら終点に着くからそこで乗り換えや。そこまで行ったらもう一回駅員さんに聞いてな」

「そうするわ。姉ちゃん、ありがとう」

「気つけてなあ」

（4時間後）

まさか電車に乗るのがこれほど重労働だったとは……。  
もう二度と乗らない。

特に急ぐことも無く、麻帆良学園外の普通の中学校に歩いて行く。

「すみません、白波ですう〜。超遅刻しちゃいました〜」

「遅いですよ、白波さん！大人が子供に与える……影響……を……  
どうしたんだい、お嬢ちゃん？どこの教室の子？」

このロリコンめ！

「いえ、実習生の白波です。電車の乗り方がわからなくて、気付いたら知らない所にいたんです。

割と（2割ほど）一生懸命戻ろうとしたんですけど、結局4時間もかかってしまって」

「ええ！？

ああ、いやその、まあどっちにしろ今日は顔合わせと校舎案内だから私が。

つていうか本当に実習生？どう見ても小学生くらいだけど……」

「一応こう見えても大人です。はい、免許証と新田先生に書いていただいた紹介状です」

「ああ、そうなんだ。ちょっと失礼……男！？つてさ、39歳！？

600歳以上でちゅwwwwwwしゅんましえんwwwwww

「確かに、拝見しました。じゃあとりあえず校長先生の所に」

「はあい」

コンコン

「教育実習の白波麟さんが到着しました」  
失礼しマースガラガラガラと校長室を開けると地味に見覚えのあるおっさんが。

「遅かったじゃないですか。ってやっぱりお前だったか！テレビでも見たけど全然変わってねえな！」

「え……あー、ジムカーナの時の……！」

そこにはジムカーナの時にちょっとだけ話したおっさんが……（011 世界最速、ジムカーナがなんとかかんとか参照）

「校長、お知り合いなんですか？」

「ああ。知らない？2年前、スポーツ新聞でもない普通の新聞で一回バイクの記事が一面に載っただろ？」

「え？あー、あの……えー！？なっ何で教師なんか？」

「ってかおっちゃん教師やってたんですね」

「あの時はまだ学年主任だったけどなあ。というか教師『なんか』とは随分じゃないか。いや、俺もそう思うけどさ」

「だってあのままプロレーサーになってたら教師をやる、下手したら100倍以上稼げるのに」

「いやあ、あの雑誌記者の朝倉さんっていたでしょ？あの人の娘さんが今中学生なんですよ。」

それで、あの人も恩があるもんだから俺が少しの間だけでも面倒を見たいと思ってるね」

「ああ、居たなあ。それに実力が伴っていたら立派だぞ。やってくれるか？」

「当然。白波に不可能はありませんよ。電車に乗るの以外は」

「電車……乗れねえのか？」

「遅刻の原因だそうです」

「ば、バイクがあるんで」

「……それもそうだな！」

「ここが体育館」

「なるほど」

「ここがグラウンド」

「ほーん」

「ここが大講堂」

「ヤイサホー！」

「で、担当してもらおう二年各教室がこのエリア」

「なるへそ」

「最後に、ここが職員室だ」

「よしてきた」

「おや、校長、実習生……転校生ですか？」

「こう見えて実習生だ。ほら、麟先生」

「白波・A・R・麟です。英語担当の実習で来ました。よろしくお願ひします」

「かつ、かわいいですね。じゃなくて!!」

この後も免許を見せたりレースの話をしたりでもう帰る時間になった。

「じゃあ麟先生、これから3週間、よろしくお願いしますね」

この人が職員寮内で隣の部屋になるという宮田先生だ。俺の受け持つ3組の担任でもある。男だ。担当は科学らしい。

「はい、よろしくお願いします」

「ああ、ここですよ」

「じゃあここは俺が出しときますね」

言うてはいなかったがタクシー帰宅だ。このブルジョワめ！俺は明日からバイク通勤だから全く問題ないけどな。

「いやいや、そんな」

「これからお世話になるんですから。それに俺、元No.1レーサーだからそれなりに持ってますよ？」

「あはは、じゃあ今日のところはお願いしますよ。また今度何かおごらせてくださいね」

「これはやられましたね。ああ、お釣りはいいです。募金にでも万札を出して懐の広さをアップルする俺に死角は無かった。」

「はい、これは鍵です。おやすみなさい」

「おやすー」

さて、部屋にも入った事だし、帰るか！

「うう……お兄ちゃん……」

「マスター、食事は「いらん！」かしこまりました」

マスターは隣様が居なくなつて完全に拗ねています。

私も少しは寂しいのですが。……寂しい？これも新たな発見ですね。でもこれはあまり『嬉しく』ありません。

「チツ、侵入者か。こんな時に！行くぞ、茶々丸！お前の力も見ておきたかつたしな」

「かしこまりました」

さて、俺は最強だ。

急に何の話だと思うかもしれないが、まあ聞いてくれ。ぶっちゃけ、何されても絶対に死なないし傷もつかない。

だから敵から身を隠す手段とか全く知らないし気配の消し方も知らない。覚える気も無かったし。

あとは殺気とかもわからない。

天地が返ろうが負けるわけが無い相手ばかりだから、そんな蟻んこに「ぶっ殺してやる！」なんて思われても何も感じないじゃん。蟻に殺気を向けられた経験はないけど。

で、殺気を出す方法も知らない。「絶対ぶっ殺してやる！」とか思うまでも無くちよつと速く近付いてちよつと勢い付けて殴ったら充分人を殺せるし、光の一矢でも適当に出せばそれでも充分。

これは余談だが、俺が無詠唱で使える魔法は『魔法の射手』と『転移』だけだ。いや、他の魔法は試したことがないだけでやったら出来るかもしれないけど。

要するに何を言いたいかというと、囲まれた。中学生くらいの一人と高校生くらいの一人に。

「何者だ！？子供？」

「油断するなよ、刹那」

「わかっている。貴様、名を名乗れ」

自分で言うもんじゃないかもしれないけど、銃と剣突きつけて見た目幼女に言うセリフじゃないよね。

「この名前はお前らにとつたら呪いみたいなもんかもしれないけど、



聞く？」

「早く答える！」

「おお怖い。『白波麟』って言うんだけど、知らない？」

「？何を言ってる……おい、どうした龍宮？」

「それは……本当なのかな？」

「本当。別に害意があつて入って来た訳じゃない。エヴァに用があるんだよ。だから引き下がってくれない？」

「何を言ってるやめろ、刹那！」何故！？」

ガングロお姉さんが龍宮、刀っ子が刹那と言うらしい。

「今の話が本当なら、お前の適う相手じゃない」

「そんな訳があるか！格闘をやっている歩き方でも無ければ鍛えてる風でもない！殺気だつて微塵も感じないぞ！それに……」

「それに、魔法は『魔法の射手』と無触媒の『転移』しか使っている所を見られた事は無い上魔法発動体は持つて居ない。

なのに発動体も無く放たれるその魔法の矢は本気ならこの県ごと、いや、ひよつとしたら日本ごとこの麻帆良を沈めることも可能かもしれない、そのあまりに桁違いの強さから、名前を呼べば来るといふ噂が流れ、政府から緘口令かんこうれいが布しかれるほどの強者。

どう見てもただの小さい女の子なのに、あの「闇の福音」の兄にしてその「闇の福音」よりも恐れられる、史上最強で最悪、元2億ド

ルの賞金首、『邪神』白波・A・R・麟だ」

「よおーくご存知で。10SPシラナミポイントあげちゃう」

「だが嘘かもしれないんだろ？魔力を全く感じない。何より、影も水も使わずに転移できるなんてバカな話聞いたことも無い」

「魔力を隠す魔法具だってある！それにもし本当だったら私たちは今かなりまずい事をしているんだぞ！！」

どう見ても小さい女の子を無視ですか、そうですか。別にいいけど。

ちなみに10SPでうまいBOWを100本プレゼントだ。

「じゃあさ、こういうのはどう？一発だけ刀の君に攻撃をして、外す。それで君らが、ってか刀持った君が勝てると思ったら戦闘開始で」

「いいだろう。だが外すなんて言っても敵の言うことな」

とりあえず刀の子の横の木を一発、強めに殴る。

パン！という音とともに、丁度手の形に抉れた木を見てから元の位置に立つ。

「ど信用……」

「刹那、隣の木をしてみる」

「な……何だ、これは？」

「俺の手形。なんなら合わせてみる？ぴったりだと思っけど」

「な……」

「刹那、私たちの負けでいいよな？学園長も相手が『邪神』だと聞いたら流石に許してくれるだろう。

正直、私は今すぐにでも帰って泣きながら布団に包まりたい気持ちでいっぱいだよ」

「だとしても、それでもウチは……」

「ハア……。ッ！まずい刹那、避ける！」

ナッパ！なんつつて

とかやつてる間に尻尾まいたお二方は20メートルほど離れる。と同時に、確か『こおる大地』とかいう魔法が俺に直撃した。今日暑いもんねwwwちようどいいクーラーだもんねwww

「よりもよつてこの私の期限が最高に悪いときに来るとは、つくづく運の無い……お兄ちゃん!？」

「おお、エヴァー!!会いに来たぞ!」

つくづく運の無いお兄ちゃんだけでも!

「お兄ちゃん!お兄ちゃん!!!」

「「え?」」

「エヴァンジェリンさん、彼は……」

「私の最愛のお兄ちゃんだ。貴様にはやらんぞ、刹那。そんなことより魔法直撃させちゃったけど大丈夫だった？」

「ああ、世界最強だから。全然大丈夫」

「な、刹那。あれがシラナミだ」

「悔しいが……全く勝てる気がしない」

ビクンビクンｗｗｗｗｗｗ

「それに敵じゃない事もわかったしな」

「敵？貴様ら、お兄ちゃんといったい何をしていた？」

「エヴァを待つてる間カードゲームしてたんだよ」

「なんだ、そっかぁー」

「まあ嘘なんだけどね」

「当然、わかってるよ、お兄ちゃん。

さあ、貴様ら。遺言があるなら聞いておくが？」

「まあまあ、許してあげようじゃん。こいつらにもきつと沢山の仲間がいる。決して一人じゃない。

信じよう。そしてともに戦おう。工作人員や邪魔は入るだろうけど、絶対に流されるなよ」

「お兄ちゃんの風が吹いてきそうな長台詞に免じて許しておいてやるが、次は無いと思えよ？」

「だから言つたる、刹那」

「……すまん」

家に帰って一通りにゃんにゃんした後声が漏れまくってたらしく（というか漏らしたことによって）辟易した茶々丸に見送られてバイク持って寮に帰ります。

「じゃあな。明日はどこかで外食でもするか」

「うん。心当たりがあるから一緒に行こうね！」

「おお、おやすみ」

「おやすみ、お兄ちゃん」

「おやすみなさい、隣様」

翌朝、隣の宮田先生は「いつの間にバイクを！」と言った後、「子供がバイクに乗るもんじゃありませんよ」とか言ってきた。  
あんた昨日俺がレーサーやってる大人だって話したよな？

018 世界最速、教育実習に行く。(後書き)

亞斗餓鬼

バイク乗りてえ！。

でも皆さん事故には気をつけてくださいね。

次はバイク出します。

大きいのにしようか、小さいのにしようか……

ではまた翌日。

今日のあとがきは短めで失礼します。

019 世界最速、教育実習に行く。2（前書き）

内臓の調子が悪すぎてこれだけしか書けませんでした。  
明日はがんばる。







「マイケルです」

「うるせえ、宇宙怪獣!!」

まともじゃ無いのはこの学校だった。

宮田先生だけじゃ無かったんだ!

「今日から私とイツシヨに英語をしてくれるリンさんです」

「よろスク水。トリゾーです」

「はい、よろしくおねがいます!」

みんな一斉に敬礼する。

なんで中学生が号令も無しにこんな統率されてんだよ。気色悪いなあ。

「私もエイゴあんまり知らないから助かるよー」

「……はい。もうなんでもいいです」

「リンさんに質問がある人は手を挙げてクダサイねー」

しーん……と、完全に静まり返っている。

いや、正確には、隣の教室から叫び声とか聞こえる気がするが、少なくとも教室内では完全に無音だ。

と、急にセンチメンタル(?) 先生が懐からベレー帽を取りだしてかぶった。

「注目！」

2-1部隊下士官兵に告ぐ！現在この教室は宮田技術中尉の管理下に無い。

よって、私、坂本マイケル少佐の権限によって、現状を、私が許可するまで教室内のみ『休み時間』と仮定し、行動する事を許可するものである！

繰り返す！！現在この教室は宮田技術中尉の管理下に無い。

よって、私、坂本マイケル少佐の権限によって、現状を教室内でのみ『休み時間』と仮定し、行動する事を許可するものである！

尚、『休み時間』内の権限もこの時復活するものとし、下士官兵内の上下関係も認めないものとする！

以上！状況開始！」

「「「はい！ありがとうございます！」「」」

もう嫌だ。俺、教師になれなくてもいい。

何で義務教育の中学校に陸軍階級が適応されてんだよ。

何よりここ認識阻害ねえだろ。

俺がおかしいのか？

「隣せんせー！！質問ですー！！」

女の子が手を挙げる。

「どうぞー」

「小学生ですか？」

「39歳のおっさんです」

えー！うっそだー

などと普通の中学生みたいな野次が飛ぶ。  
なんか、すごい疲れた。

「ダダ先生の本名知ってます？」

「知らぬ」

「はっはっは！私の本名は小室マイケルデスよー」

さっきおもつくそ流暢に日本語で喋っていたセンチメンタル坂本（？）が朗らかにカタコトでぼざいてる。  
こいつマジ何なの？死ぬの？

「麟先生って、確かプロレーサーですよね？」

「違う」

「でも新聞に出てましたよ？」

「オーウ、私も見ましたよー」

「プロレーサーってのはメーカーの支援を受けてメーカーの名前でレースに出て金を稼ぐ奴な。で、俺はドライバーだったって自分の小遣いでバイク買ってレース出たら優勝して帰ってきたの」

「おおー！すげー！

説得力あるな。

金持ちなんだねー！

説得力あるな。

とまたざわつく。

センチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生、略してセコムマサダ先生も嬉しそうに頷いている。

お前ホント上腕二頭筋の存在感エグいな。スーツはち切れるぞ。

「せんせーってバイク乗るの上手いの？」

「そりゃレーサーだからな」

「校長先生とだったらどっちが上手いの？」

その時、ガララと扉が開いて校長が入ってきた。

それと同時に緩みきった空気が一気に張りつめ、全員起立をし、一斉に校長の方を向き敬礼した。

「「「おはようございます！閣下！」「」「」

「構わん。この教室内の全権は坂本少佐と白波特殊指導官にある。いつも通りにしたまえ」

誰だお前は。

本当にジムカーナのおっさんか。

「「「はっ！ありがとうございます！」「」」

「白波特殊指導官、すこしいいかね？」

「はい、まあ」

くろつか！

「なんか、ホントごめんね。あのクラスの担任の宮田君が重度の軍事マニアでね」

「じゃあ宮田さんは自分が軍隊やりたいからあんな事に……？」

「いや、スタンド使いとスタンド使いは引き合っが如く勢いであるの教室には軍事マニアしかいないんだ」

「ホント何なの、この中学校」

「他にはガンマニア、ビブリオマニア、パソコンマニア、交通機械マニアが隔離された教室がひとつづつと、それ以外がまるっと詰められた混沌とした教室がひとつ」

「いくら私立とはいえ、それは……」

「でもみんな成績はいいんだよ。まあ、私立だから。ちなみに、う

ちの教員は全員、それぞれのクラスに完全対応できるように訓練されてるよ」

「気色悪い」

「俺もそう思うわ」

ちなみに、今日教えた教室は軍事の1組、パソコンの3組、交通機  
械の4組だった

パソコンの3組は、全ての机の上にパソコン完備で、しかもそれは  
学校の備品ではないらしい。

全部持ち込みか、自分で組んだそうだ。

英語と一緒にプログラム言語やタグや煽り文句が飛び交う気色悪い  
空間だった。

「ヒヤッハー」とか「俺のプログラムにうんこのスタンプ実装した  
奴出てこい!!」とかの叫び声も出してる。

1組で聞こえた叫び声お前らだったのかよ。

他の授業もパソコンでノートを取っているらしい。

一番熱気が異様だったのが4組だ。

中学生の割に詳しいどころじゃない。

専門大学生クラスの詳しさだよアレは。

英語の話とか1秒ほどしなかった。「英語担当の白波です」だけ  
それこそ、自転車から宇宙船まで何の話でもしていた。

バイク一台にしても、ブレーキキャリパーなどのパーツ1つから車体そのもの、更にはその風の抵抗まで気になって仕方ないような奴までいた。

バイクだけじゃなく車、飛行機、船舶の知識も持つてるのがこんな所で役立つとは。持つとくもんだなあ。

という訳で、俺は4組の神になった。

「疲れたでしょ」

「俺、もう教師いいかな」

「いやいやいや、明日のクズはもっとおとなしいので大丈夫ですよ」

「ハア、そうですか」

「では、お疲れ様です」

「お疲れさまでーす」

今日はおもう帰ってエヴァに癒してもらおうと意気揚々とDB2(0

13 世界最速、妹が今日もかわいい を参照)に跨る。

そして職員寮につくなり、家の近くに転移した。

「エヴァ、お兄ちゃん、アルティメットガンバ ルンバ」



「お兄ちゃん、何かあったの？」

「緊急の癒しが必要な事態が起こった。具体的に言うと、精神力がゴリゴリ削り取られる」

「よしよし」

「ってか茶々丸は？」

「さあ？」

いねえのかなあ。

とか言ってるよ」「ただいま戻りました」と玄関から声がした。

「おかえりなさいませ、茶々丸。どこ行ってたんだ？」

「そのー、猫に餌をやり……」

なぜだか申し訳なさそうにしてるからいつそホメ殺してやるよ

「猫に餌……だと……!？」

マズい、茶々丸の霊圧が消えた!？」

「も、申し訳「ありますー」……へ？」

「へ?だって、かわいー

なあ、キティ？」

「そうだね。中々かわいいところもあったんだな、茶々丸」

「いえ、その……」

「猫に餌あげる茶々丸かわいい!!」

「え?」

「怒られなくて戸惑ってる茶々丸かわいい!!」

「あ、あの……」

「褒められ慣れてない茶々丸かわいい!!」

「そ、そんな」

「コンビニとかで猫缶買ってる茶々丸かわいい!!」

「み、見てたのですか!?!」

「見てないけど言ってみたら当たってて予想よりもだえてる茶々丸かわいい!!」

「恥ずかしいです」

「新たな感情が芽生える茶々丸かわいい!!」

「お兄ちゃん」

「エヴァもかわいい!!」

「じはんいこ?」

「白波はみんなかわいい!!」

〈超包子〉

「来たぞ、サツキ、超鈴音」

「...こんばんは、エヴァさん...」

「よく来たネ」

「おーっす、さっちゃん、チャオリン」

「知り合いだったの!?!」

「...」「いえ、ぜんぜん」...」

「だと思ったよ。じゃあいつもの頼む。お兄ちゃんも同じので」

「...はい...」

「しかし、いつぞや話は聞いたけど、本当に随分可愛いお兄さんネ」

「チャオリンもいつぞやエヴァに聞いたけど、特に何も思わん」

「随分ネ。そう言えば、最近茶々丸の調子はどうカ？」

「随分と感情が芽生えてるようだぞ？さっきも恥ずかしがってたし。なあ、茶々丸」

「いえ、私はそんな……」

「何ト！？これはハカセに報告しないとネ！」

「…お待たせしました…」

「早っ！？さっちゃん超早いね！」

「…仕事ですので。それに、楽しいですよ…」

「いい子だなあー」

「幸せの化身とまで呼ばれてるからね。アホばかりのクラスメイトの中でも数少ない、私が認めてる人間だもん」

「すごいんだな、さっちゃんは……」

「…いえいえ。あ、呼ばれてるので行きますね…」

「なんか儂い<sup>はかな</sup>しゃべり方する子だったなあ」

「たしかに。お兄ちゃん、今日はもう行くの？」

「また明日帰ってくるから」

「当初言っていた3週間帰ってこれないという心配も無くなったよ  
うですしね」

「じじいに確認するように言っておいたからね」

「さすがエヴァ」

「うん。じゃあおやすみ」

「おやすみなさいませ」

「ああ、おやすみ」

寮の部屋に行ったら窓が開いてて襖が開けられてた。  
備品の机の上には「盗むものも無くてかわいそうだからあげる」と  
書い封筒の中に1000円入ってた。

大事なものは持ってきてないだけだよ。  
ほっとけ

019 世界最速、教育実習に行く。2（後書き）

泥棒に情けをかけられる麟の話でした。

ちよつと今日は本格的に内臓（主に胃と肝臓）がまずいので、明日はがんばります。

さっちゃんの話し方を考えるのに一番時間がかかった気がする。

総合評価312にお気に入り登録を132件もありがとございませす。

愛していると言っても過言じゃないでしょう。

では、本日はこれで失礼いたします。

020 世界最速、教育実習を終える。(前書き)

終わります。

注意

今回の話には、アガサ・クリステイ著『そして誰もいなくなった』の重大なネタバレが含まれて居ます。  
ご注意ください。

「……」

「……」

「……」

「……先生は本、持ってないんですか？」

「もっとらんどすばい」

「じゃあ、これ貸します」

「あ、どうも」

- - What Every Man Thinks About  
A part From Sex - -  
『男がセックス以外に考えてること』

「……」

「なにこれ」

「洋書です。英語の時間なんで」

「俺、こう見えても男なんだけど……」

「っ！っ！返してください！！」



「はい……」

「……代わりにこれどうぞ」

「はい……」

- - And Then There Were None - -  
『そして誰もいなくなった』

「ありがとうございます」

「ウォーグレイヴ判事が犯人です」

「……」

「……」

「静かだったでしょう?」

「2組こわい」

「?」

えげつない精神攻撃を受けまくっていた白波です。ホント何なのあ

の子。マジ怖いんだけど。  
ミステリー小説のネタバレ先にするとか、ガンジーでも助走つけて殴るレベル。

「今日は二教科だけなんですな」

「ああ、宮田先生」

「これからうちのクソどもに科学を教えに行ってください」

「……がんばってください」

「はい」

「じゃあ私たちも行きますヨ」

「……はい、坂本先生」

「小室マイケルですヨ」

ちなみにこいつ、ホントに英語ほとんど知らなかった。なんだよこの英語教師。

つてか何だよこのマッチョハゲ。

「ぐっもーにんえぶりわーん。小室ダヨ」

「ヘイカモーーーン!!」

「ちょっと、あたしの犬見てない?」

「太一ならさつきホフク匍匐前進で1組に逃げていきましたわ、お姉さま」

「ふーん。じゃあいいわ。カスミ、あなたが今日から私の犬ね」

「お姉さま……」

「誰!?携帯鳴ってるんだけど!!!あ、あたしだったわ。ゴメンゴメンゴ」

「3 . 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 ……続きなんだっけ?」

「2384」

「おお、そつだそつだ。6 2 6 4 3 3 8 3 2 7 9 5 0 2 8 8 ……」

「お帰りはあちらー!!!お帰りはー!!!」

「離れる……死にたくなかったら、早く俺から離れるオオオオオオオオオオオ!!!」

「フハハハハ!やっと覚醒しよつたか!!!」

「XPもう入れた?」

「様子見」

……無理。

「すみません、今日からおなか痛いんで帰り裂きます」

「ちょ、リンさん！リンさーん！！」

「校長先生！」

「ん？どうしたんだ？」

「教師、無理」

「そんな朗らかな笑顔で……5組か！！」

「いや、確かにとどめはそこだけど！全クラス！全クラスだから！  
！等しく無理！！」

「まあ……しょうがないか。いや、麟君は充分持った方だよ」

「マジかよ、まだ二日目だぞ俺」

「だいたい、適合性の無い人なら持って半日だからなあ。

正直、教師いなくてもやっていけるんだよね、生徒」

「いや、誰がいようがやっていけねえよ、あの混沌っぷりじゃあ」

「うーん、仕方ない。うちの一日は他の学校のひと月相当だからね。もう卒業検定、合格でいいよ」

「よしてきた。じゃあ帰ります。今までありがとうございました」

「また来てもいいんだぞ？」

「ああ こんなにお断りしたい気持ちになったのは初めてです」

「まあ仕方ないか。合格証明は？」

「後ほど麻帆良の桜ヶ丘4丁目29に」

「おお。じゃあまたいずれ」

「あいよ」

「エヴァあああああああ……！」

「お兄ちゃん！…どうしたの！？」

「ああ、三週間の予定だったのが、俺が天才すぎて3日で終わっちゃった。ってか学校は？」

「今日は休んだー。だってお兄ちゃんと居れないならどこにいても一緒だもん」

「あはは、そりゃそうだなー」

「「ねー」「」

「じゃあ久しぶりに走りに行くかー」

「うん、お兄ちゃん！…」

「今日は後ろ乗ってもいいぞ」

「わーい！」

信じられるでしょうか。この子、だいたい600歳なのです！

「じゃあ装備を整えたらガレージな」

「うん！」

くガレージく

「お待たせくってアレ？こんなバイクあつたっけ」

「ああ、指輪だよ」

「指輪？……ああ、そんな機能あつたね、そう言えば」

「全く使つてなかつたからなあ。まあいいや。乗るぞー」

S U Z U K I R E - 5

ロータリーエンジンと茶筒（メーター類のディスプレイ兼用）を載せたバイクだ。

うそ臭いほどの巨大なエンジン周り、妙な加速感が癖になる一品です。

鍵を回すと、電動とは思えない、ものすごい勢いで茶筒が開く。

半透明のカバーの中には、タコヤスピードなどのメーターが絶妙にレイアウトされている。

セルスターターボタンを押せば、不安定な低回転のアイドリングが始まり、不規則な排気音が聞こえる仕様だ。

「お兄ちゃん、コレホントに走るの？」

「不安な気持ちはわかる。でもスズキだから大丈夫！」

「そっかー。スズキだもんね」

「ああ。行くぞ」

ところで、回せば回すほど振動が減っていくのも奇妙な感覚だよね。

〈麻帆良 路の駅〉

「近隣ツーリングもたまには悪くないな」

「こんなところあったんだね」

「最近出来たってＹＯチエケラ」

「お兄ちゃん、タバコは体に悪いよ」

「大丈夫。俺だもん」

「そっだよなー」

「ああはははは、うふふふ」

などと、ベンチで談笑していると、変なメガネの黒人が話しかけてきた。

「ちょっと君、子供がタバコなんて吸うと……って、エヴァンジェ



リン・A・K・マクダウエル？」

「マクダウエル・シラナミだ。何の用だ？正義の魔法使い」

「ふん、君に用事はない。そっちの子も君の関係者か」

「リンリンです よろしくなくてもいいにょん」

「まあ君の関係者なら、訳有りだろうしあまり大きく言わないが、公共の場であまり堂々とタバコを吸わないでくれ」

「ふん。用がないならさっさとどっかいけ、ガンドルフィーニ」

「そうだしえ！ガングロフィーニ。優しげな目しやがって」

「……まあ、あまり目立たないでくれよ？」

「ふん」

「なんだったの、今の」

「ガンドルフィーニ。『魔法先生』をやっつて正義感溢れる男だよ」

「ほーん、正義、正義ねえ……」。

実は俺も正義の味方なんだけどね」

「お兄ちゃんはいつでも私のヒーローだよ！」

「アハハ、こーいつうー」

ヒュゴーンヒュゴーンと帰ったら茶々丸がオロオロしてた。

「ああ、マスター。どこに行ったのかと思ってました。麟様も、お  
かえりなさいませ。」

「なんだ、心配してたのか？」

「そうですね。少し……心配しました」

「W O O . . .」

「それで、明日はハカセに点検整備をしていただくので、家を空け  
る事になります」

「そうか。私たちは大丈夫だから行ってこい」

「あたしもいくー!!」

「お兄ちゃん!?!じゃあ私も行く!」

「マスター!?!じゃ、じゃあ私もいきます」

「」「」「」「」「」

「なんでもしょう、うね、うね……」

ほんとうでしゅう、いね

020 世界最速、教育実習を終える。(後書き)

何なんでしょう、これ。

SUZUKI RE-5

水油冷シングルロータリー

497cc

62PS/6,500rpm

前：ディスク 後：ドラムブレーキ

死ぬほどほしいです。

生産、出荷台数が約6000台という超希少車。

ロータリー大好きな豚野郎としては喉から手が出る逸品ですね。

SUZUKI再販しねーかなー。

こちらのバイクも杉やんさんに案をいただきました。

いつもながらありがとうございます。

作中のWhat Every Man Thinks About

Apartment From Sexですが、かなり最近の本だったと

思います。

こちらはネタバレしません。

原作キャラが誰も出ないにもほどがあつたんで、早々に教育実習編は打ち切りました。

これ以上続けると隣が普通の人になっちゃう！

では、今日もこのような拙作を読んでもらう、ありがとうございます。  
ます。

尚、11日(木)の夜、12日(金)は、私用で遠くに出るため、

更新できない可能性があります。  
申し訳ありません。

021 世界最速、ハカセとのコンタクト。(前書き)

バグレベルの主人公よりバグレベルのCPUがほしいんだよ！

## 021 世界最速、ハカセとの「コンタクト」。

「わかってないなあ。足を見せりゃいいってもんじゃないだよ。メイドってのはロングスカートが一番いい」

「でもミニスカートメイドさんだってなかなか捨てがたいものがありますよ。」

ハイソックスとスカートの間に見える生足がなんともいいんじゃないですか」

リン・アタナシアレーサー・シラナミです。

茶々丸にメイド服を着せて大学に行ったら、さとみんとロングスカートとシヨートスカートのメイドならどっちの方が、という話になりました。

「そりゃもうメイドさんじゃなくてメイドのイメクラだよ。だいたい、それじゃあドロワーズがはみ出るだろ」

「なるほど、ドロワーズですか。たしかに、普段無い日常を求めるならそれも外せませんね」

「でもさとみんなら膝下までのスカートが一番似合いそうな気がするな。ロングすぎず、シヨートすぎず」

「茶々丸ならミニも捨てがたいですよ。腿ももの接合部も見えるし、なにより熱が籠りにくいです」

「茶々丸の貞淑さは天地を揺るがすレベルだから、シヨート穿いたら宇宙が崩壊するかもしれない」

「あの、お二人とも、点検は……」

「とりあえず、ショートスカートの茶々丸を見てみない事には話が始まらない」

「それもそうですね。じゃあ茶々丸、とりあえずコレを」

そう言っ取り出だしたるはメイド服（イメクラ仕様）。

いや、好きだけど、違うんだよ。

和食を食いたいときに中華が出てくる感覚なんだよ。

「こ、ここででしょうか」

「ん、別にどこで着替えてもいいけど、何で？」

「その、ここだと隣様も見ていらっしやいますので、その、恥ずかしいんですが」

「恥ずかしい！？じゃあ超さんが言っただ事はホントだったのね？  
こうしちゃいられないわ！」

「茶々丸、俺はガン見するけど早く脱ごうぜ！」

「お兄ちゃん、久々に下種くてステキ！」

「エヴァさんが隣さんがやることなら何でも許しそうな雰囲気！  
！こんな所まで超さんの言っただ通り！」



「当然だろう。シラナミは全員がシラナミのやる事全てを赦すんだ」

「「ねー」」

「そんな無茶苦茶な……」

「ともあれ茶々丸、お兄ちゃんもこう言ってるのだ。脱いでもらおうぞ」

「は、はい」

茶々丸がゆつくりとメイド服を脱いでいく。

ぐへへへへへwwwwww

「いいなあー。このメカメカしい感じがステキだなー」

「そ、そんな……恥ずかしい……です……」

「俺もこんなになりたいなー」

「そつち!?!」

何故かさとみんなが嬉しそうに驚いてる。

「でも多分俺、日本刀も通らなければ地雷の上でタップダンス踊っても無傷なんだよな。注射針も入らないし。」

メカニカルになりたいきや外付けしかないんだよな」

「そ、そんなあ……。ってそんな非科学的な話が……」

「本当だぞ、ハカセ。因みにお兄ちゃんの時速200キロのバイクで壁に突っ込んでも無傷だ」

「前、私が暴走したときは自動スリープモードに入るまで取り押さえられていました」

「頑丈にできてるんです。でも心はガラスの10代」

「ちょ、ちょっとだけ解剖させて……ああ、でも刃物が通らないんなら開けないし……」

開きたくて仕方ないみたいだ。

ちなみに髪の毛はさらっさらなのに金切り鋏じゃないと切れなくて火の上を歩いても焦げすらない謎素材だ。

「あの、もう服を着てもいいでしょうか？」

「ああ、ごめんごめん、整備だったね。すぐ終わるからねー」

ハカセが茶々丸の首の後ろにケーブルを繋いで、なにやらものすごい勢いでカタカタやってる。

「はい、駆動部位は全身特に異常なしだよ。そう言えば、記憶ドライブの点検がまだだった。ちょっと待っててね」

「いえ、その、そこは別に」

「いいからいいか……ら…… / / / / / /」

「ん？どーしたん？」

ちよぬつとモニタを覗いてみたら、何やらエヴァと合体してる俺が映ってる。

「そ、そんな、兄妹でだなんて……あれ？でも茶々丸の基礎システムを作ったM.I.T.の日本人兄妹もかなりイチャイチャしてたって聞くし、でもこんな子供同士でなんてってそうじゃなくて、あわわ」

「何だ、茶々丸。見るものはしっかり見てるんじゃないか」

「か、鍵もかけずに、そ、そんな……ゴニョゴニョされたら……見もしますよ、マスター」

「ん？何したら？何したら見ちゃうの？隣ちゃん気になるー」

「す、すごいセクハラだわ……それにしても……」

「何だ、気になるのか？ハカセ」

「いつ、いえいえまさか。私は科学が恋人ですよ！？そんなんじゃないかって、私は茶々丸が気になってるんじゃないかなーって思ってるだけで、……親心……そう、親心なんですよ……」

ねえ茶々丸、ちよと兵装減っちゃうけどえっちにゃこともできるよ  
うにしてあげるよ……」

「いえ、そこまでは」

「いいじゃないか、茶々丸。やってもらえ」

「そつだそつだー！つてか魔法使えば兵装つて減らさなくてもよくない？」

「そんな使い方も出来るんですかー？」

「俺も家のパソコンに魔方陣描いた紙貼り付けて魔力通して強制冷却オーバークロックさせてるし。ペンティアムなのに5.6GHzを記録してるぜ」

「そつ、それだああああ！ねえねえ、何度くらい下げれるんですか！？」

「絶対零度までなら」

「よつしゃあああああ！！ちよつとひと月ほど時間をくださいね。」

ふふふ、茶々丸？あなたにはうちの最先端の科学をすべて注ぎ込んできたけど、未だ実現には至らなかったものが一つだけあるのよ。実際のCPUが完成すれば……冷却さえなんとかなればクロック数20GHzも夢じゃないのよ！  
もうこうしちゃいられないわ！ちよつと麟さん！その魔方陣、どれくらいあれば出来ます！？」

「5分」

「じゃあお願いします！うふふふ、魔法つてすごいですねー。いつか科学的に解明してやりますよー」

「いやいや、そんな事出来るのはお兄ちゃんだけだからな？」

「そんな事より服は……」

「はい、茶々丸」

「麟様……」

「ふんっ」

「はい、できたー」

「ああ、5枚もありがとうございます。ふふふ、これで茶々丸も……」

ミニスカメイドさん、茶々丸はさっきからさとみんと目が合ったびに半歩つつ下がってる（眼福）。

「でもこれ全然冷たくないですよ？」

「そりゃ魔方陣なんだから魔力流さないとクーラーにも使えないだろうさ。一応これからひと月分ほど魔力を込めるけど、間違っても低温設定時は素手で触らないように（迫真）。と、凍傷どころじゃ済まないんだからねっ！

あと、この枠があるだろ？ここに英数字で度数を書けば5度から273.15度までの温度調整が可能になってる。

機械制御にするんならチャオリンといっしょにやってくれ。お兄さんの約束だぞ」

「さすがお兄ちゃん！普通は絶対にどんな魔法使いにも出来ないような事を平然とやってのけるなんて！」

「そこにシビれる！あこがれるウ！」  
ズギユウウウン！！

「じゃあモノになったらまた連絡しますね。というわけで今日はもう帰って大丈夫ですよー」

そういつてさっさと帰って行きやがった。

「なあ、茶々丸？」

「何でしょう、マスター」

「私たちとやってみたくはないのか？」

「なっ、なな何をでででしょうかマスター」

「わかりやすい奴だな。まあ、保留って事にしといてやる」

「わ、わわ、私にはなんの事だが、さ、ささ、さっぱりです」

「ハンズノモクザイビーム！！！！」

「きゃあーり、隣様！やめてください」

「ジョインジョインジョインジャギィ！！！！」

「マ、マスター、助けてください！」

「シャバドゥビドゥバドゥバツバアツダツダア！！」

茶々丸のヒラヒラスカートを60rpm/秒の速度で叫びながらめぐりまわってたら顔押さえて走って帰っちゃった。

だってかまってくれなかつたんだもん。

021 世界最速、ハカセとのコンタクト。(後書き)

しまった!!

新約禁書の2巻が発売日だからって無印の最終巻から読んでたら日付が!!

そんな事より、シュレリア様とライナーが麻帆良に来ないかなー(チラッチラッ)

世界樹が何故か塔と同期してて、平行異世界だったんだ!!  
とかいうの誰か書かないかなー(チラチラリコ)

超さんって書こうとすると『ちやおsなn』になっちゃう。  
右手と左手の同期が甘い豚野郎です。

友人が飛び出した鹿を避けて事故しました。  
ほんま奈良は戦国やでえ……

では、明日もよろしくです。  
あさっては更新しない可能性が濃厚です。



022 世界最速、魔法先生と会う。(前書き)

戦闘とかしません。

022 世界最速、魔法先生と会う。

ちう > 今日も担任は出張だったよん！上司とか同僚と仲悪いの  
かな？（；；；）b

ちう > 担任が好きなクラスメイトが暴れてて動物園みたいだっ  
た（w

ちうファンHIRO > ちうちゃんの担任毎日出張だよ。こん  
なかわいいちうちゃんが見れないなんてかわいそ（w

りんりん > ダンディな担任っぽいのがオジコンの生徒を持つと  
光と闇が両方そなわり最強に見える。

りんりん > ショタコンの生徒を持つと逆に頭がおかしくなっ  
て死ぬ

ちうファンHIRO > ^ ^ ;  
福音 > 私の担任も居ても居なくても変わらん。

ちう > あはは、ありがとー！お礼に今からちうの写真のせちや  
うよ？

りんりん > 9枚でいい

「エヴァwwwwwwちうたんの担任とお前の担任wwwwww同  
人物wwwwwwww」

「ちなみに同僚との仲は悪くないよ」

ピピピピッ、ピピピピッ

このえこのえこのえもんにいざという時（ってどんな時かしらんが  
そんな時）のために渡されてた携帯電話が鳴る。

バックモニタにも『ぬらりえもん』などと表示されている。

通話ボタンを押したら、そこは一面の銀世界でした。

ピッ

「おお、すまんが「何よあなた！　こんなところにまで電話かけてくるなんて！　しつこいのよ、しつこいのよ！　あんまりしつこいと、自慢のアンデス空手でプチ殺し（小さく殺す・・・半殺しの意）てあげるんだからあつ！」

だってもダンテもないのよこのデビル野郎！　あなたの靴の裏で叩き潰したゴキブリのような後頭部も見たくないし、靴の裏でゴキブリを叩き潰すときの音みたいな声も聞きたくないのよ！

黙って、黙ってよこのフニヤチン！　私が言いたいのはただ一つ、あなたみたいなケツ穴ファシストなんて大嫌いつてことよ！

変わった？　そうよわたしは変わったのよ！　未知の宇宙エネルギー・マグネトライトロンの聖光を浴びて超越浄土世界への扉をくぐる資格を得たのが二つ前の仏滅の日のことよ！　そら変わるっちゆうねん！

そうよ私はさそり座のおかまになったの！　いい、わかった！？　わかったならあんたが伸ばしてきた後頭部今すぐ縮めなさい！

そうしないとあなたの自慢のケツの穴に炭酸浣腸ぶちこんでやるんだから！

ふぁつきゅーめーんっ！」「  
ピッ

「ぶっー」

「おおー、すーーいー！」

「声紋まで完全に変わっていました。最早別人の声ですね」

ピュピュピュッ、ピュピュピュッ

「ええい、中々骨のある奴めえ。ゲシユタルト崩壊に導いてくれようか」

ピッ

「この電話番号は、ただいま貴様のようないエラーモンキーに対しては一切使用されておりませーん！」

クソおかけになった電話番号を、もう一度そのミニマム脳味噌と節穴EYEでクソお確かめの上、クソ改めて「わしじゃわしじゃ！」

……って近衛君ではないか。いったいどうしたというのかね？」

わかってたけどね。

「ハア……お主「用がないなら切らせてもらうが」までーい！

お主の教員免許の発行に伴い、麻帆良での勤務の準備を進めておつたんじゃが、どうも反対意見が多くての」

原因はわからんが、解決策ならわかる。

「なるほど。……消せ、と」

「言うたらん！お主の存在は公にはなっておらんが、どうも『魔法先生』と少数の『魔法生徒』は、お主が『闇の福音』の関係者だと気付いておるらしく、どうも教員採用を渋っておつての。それに2月には……いや、とにかく説得せねばならんからお主が顔を出すのが一番早いと思って電話をかけたんじゃ」

「なるほどなるほど。……消「させはせんぞ！」……いつだ？」

「魔法先生の中でも一番強いタカミチが今日出張から帰ってくるか

らの。今晚がいいんじゃないが、どうかの？」

「ちょ、エヴァ W W W W W タカミチってお前の担任じゃね W W W W  
W  
」

「そつだよ、お兄ちゃん」

「で、その強制ボイコットのタカミチ君が帰ってきてからと W W W W  
W W 何時？ 汝、何時になりにか W W W W  
」

「……じゃあ 21 時に世界樹前の広場で待っておるよ」

「はい……プロ麟です……」

ガチャ……

切られた W W W W W W W W W W

「お兄ちゃん、私も行くー」

「学校には行かないくせに」

「学校にはお兄ちゃんいないもーん」

「「あはは、うふふ」

「ハカセ、超鈴音、今日もシラナミは平和です」

ちなみに、ちうたんは律儀に9枚アップロードしてくれました。  
やっさしー？

「こちら、世界樹の上です。現在、時刻は午後8時30分。20時半になります（小声）」

「エヴァに気配遮断の魔法をかけてもらってるため、絶対に見つかりません（鼻声）」

「お、どうやら一人目が来たようです。あれは……シスターですね。大中小と揃っております（裏声）」

「さてお次は……ピザが来ました。肉まんをかじっています。あれは……超包子！！（地声）」

「さて、残す所あと5分となりました。恐らく、全員来ているでしょう。いつぞやの、銃のたつみんと刀のせつちゃん、ガングロのガガ……ボブもいます（喉声）」

「さて、残す所一分となりました。しかし白波麟、現れない！どうしたんでしょうか？そうです。わたしです。私が白波です。」

ボブは腕時計を見ながら、随分苛立っているようです（金切り声）」

「ではカウントダウン。4・3・2・1（だみ声）」

世界樹から飛んで、魔法先生、生徒たちの前に降り立った。コマネチをしながらクールに最後のカウントを紡ぐ。

「ゼロ（猫なで声）」

「……」

「……」

「……」

「おまたせつく「言わせはせんぞ！」早すぎるのも遅すぎるのもマナー違反と教わってたんでぴったりに来ました」

「君はあの時の……」

「へーい、ボブ！」

「誰がボブだ！」

「黒人を見たらボブ、白人を見たらジョン、日本人なら太郎と思えと教わったもので……」

ボブ（仮）は あきれている！

「……まあいい。どういう関係かは知らないが、前に君とエヴァンジェリンと一緒に居るところを見たからね。一応進言させてもらったよ」

どや顔でこちらを見てくるボブ（仮）。

「学園長、聞いてませんよ」

「まったく、こうなると知ってたら来ませんでした」

「おお、せっちゃんにたつみー！」

「お主らも知り合いじゃったか……その様子だと」

「ええ。知っていますよ」

「だーれも知らない知られちゃいけないー」

「少し黙っててくれないか」

「ソーリー、ボブ」

「で、刹那君、彼女の正体は？」

「いえ、彼女というか……彼というか……」

「こつちをチラチラみてる。惚れたか？」

などと思っても無い所に、エヴァと茶々丸が手を振ってやってきた。

「あつ、エヴァ遅ーい」

「じゅめーん」

「良いって事よ。」

そう、この通り、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・シラ  
ナミの兄、白波・A・R・麟とは、あたいの事よっ  
「ミ」



「うぜえ！『闇の福音』に兄だと！？聞いたことがない！うぜえ！」  
「いや、待ってください、ガンドルフィーニさん。僕は一度聞いたことがある。エヴァンジェリンを遙かに凌ぐ残酷さに強さを持った『邪神』と呼ばれる兄がいると」

「高畑先生、兄って、彼女はどう見ても女の子じゃないですか。それに歩き方も体つきも全然なっていない。  
世界樹から飛び降りるくらいなら魔法を覚えたての10歳の子にも出来ますよ」

「アホめ。お兄ちゃんはな、そんな努力必要ないほど強いんだよ。  
ここに居る全員が一斉にかかろうが、怪我一つ負わんほどにな」

「お前らは一級廃人のおれの足元にも及ばない貧弱一般人  
その一般人どもが一級廃人のおれに対してナメタ言葉を使うこと  
でおれの怒りが有頂天になった

この怒りはしばらくおさまる事を知らない」

「 ^ ^ ;」

「仮にその話が本当だとしても、私たちは彼の妹であるエヴァン  
ジェリンには何とか勝てるつもりだ。なら彼に勝つことも」

「ガンドルフィーニ君、タカミチの言っている事もエヴァンジェ  
リンの言っていることも本当じゃ。おそらくわしら全員でかかろうが、  
下手すると東西合わせた日本の全員がかかろうと勝てる相手ではな  
い」

「ですが納得いきません、学園長！」

おや？話がおかしな方向に……

「お待ちください、皆様！！」

とりあえず敬語で喋って場を収めようと思ったが、あからさまに無視されている。

ビクンビクンWWW

「待て待て待て！待てーいー！」

「何だい？」

「おかしいやないか！何で教員やるっつー話やのに戦ったらどっちが強いって話になってんの？俺が強いけど」

「君がそういう事ばかり言うから！」

「落ち着けよ、ボブ「ガンドルフィーニだ」ランボルギーニ。「イタリア車！？」ほら、お互い社会人なんだからさ。そんな喧嘩の強い弱いで話するような年でもないでしょ？」

「その通りじゃ、ガンゲロフィーニ「ガンドルフィーニです」ガンドルフィーニ君。お主らは教師として、白波君がやっていけるのか気になったから連れて来いと言ったんじゃない？それを強いだの弱いだのという理由で文句をつけるんじゃない」

「で、本音は」

「適うわけないんだからさっさと諦めてもらいたい」

「学園長……。確かに、私は間違っていました。しかし、彼は本当に教員免許を持っているのですか？」

「はいさ」

ピラッと教員免許を取り出して見せる。

「教育実習も、新田君の同僚が校長をやっておる私立ボムボム坂中学で合格をしてきた、紛れも無い本物じゃ」

「あ、あのボムボム坂で……。済まない、麟君。私は君を誤解していたようだ」

そんな名前だったのかよ、あの中学。

「はい、この世の末みたいな所でしたが、なんとか合格してきました」

「これからよろしくな」

「ホッホッホッ、では他に何か質問のある者は……。どうしたのかね、刀子君？」

「話はわかったし、彼が先生になるのは、その（すごくかわいいし、）全然問題ないのですが、そのボムボム坂高校とはいったいどんな所なんでしょうか？」

んっふっふ、聞こえてますよお、刀子さん。

「刀子先生、あそこには興味を持つちゃいけない。あそこは、本当にこの世の終わりなんだ」

「ガンドルフィーニ先生……」

あんたも被害者だったか、ランボルギーニ。

「すみません、いいでしょうか」

「どしたん、せつちゃん」

「せつちゃん……。いえ、私たちの教師になるということですが……年齢はお幾つなんでしょうか？」

「書類上だと39、いや、来月で40だわ。実際は600歳くらい。エヴァより15歳ほど年上だよん」

「によん……」

刀子先生がもだえている。このキャラで行く気が。

「じゃあ麟さんも吸血鬼？」

「馬鹿者！お兄ちゃんを吸血鬼なんかと一緒にするな！」

「この人自分で“なんか”って言うっちゃってる！！じゃあ麟さんは何なんですか？」

「人間のつもりだったけど、何なんだろうね？新種族シラナミとでも」

「どついつ事かな？」

と、せつちゃんの問題をたつみんなが引き継ぐ。

「最強種にも殺す手段つてのは存在するだろ？吸血鬼にしる、古竜にしる。でも俺にはそんなもん無い。

だからバイクと教員免許取得の為の努力以外は全くしてこなかったし、かの英雄、サウザンアイランドのナギ・ふふんふんフィードの魔法でも傷一つ負わなかったぜ。すごかるう」

「ちよつと待ってくれ！それは本当なのかい！？」

今まで黙って爺ちゃんの隣に立ってたメガネダンディが急に詰め寄ってきた。

「え？どれ？どれのこと？冷蔵庫のプリンは昨日エヴァといっしょに食べたけど」

「ナギの所だよ！君はナギと知り合いだったのかい！？」

「ああ、一年ほど一緒に旅してたわ。旅に飽きたついたらここに連れてこられた」

「とうるかタカミチ、エヴァはナギに連れてこられたって話さんかつたかのう？」

「え？あ、ああ。すいません。取り乱しました」

「しかし何でそんな食いつくかねえ」

「知らないのかい？ナギは10年前に亡くなったんだよ……」

「なんだ、アイツも死ぬ事があるのか」

「不思議なもんだね、お兄ちゃん」

「ず、随分軽いね」

「いや、俺の知る限り3番目に強かったからな。俺>エヴァ>ナギの順番に」

「森の妖精の名前みたいな呼び方をしないであげてくれないか」

「そっかー。ナギ死んだかー」。

「じゃあ他の先生ももう無いかの？ん？その肉まん、増えとらんか、二集院くん？」

「え？ああ、私は麟君を先生にするのは全面的に賛成ですよ？」

「……白波君？」

「……ヒュー、ヒュー」

「しまった！俺、口笛が吹けない！！」

「……まあええじゃろう。日程が決まり次第、こちらから連絡するからの、ちゃんと出てくれよ」

「アーラホーラサッサー！」

「では解散じゃ」

その号令を合図にみんな散り散りに帰っていく。

「俺らも帰るか」

「うん、お兄ちゃん」

「実は私も居たんですよ？」

うん、見えてたから知ってるよ、茶々丸。

「しっかし、あんまり凄そうな人に見えなかったっすねー。魔力も私らより少ないんじゃないっすか？」

「馬鹿」

「美空は彼の首にかかったペンダントの事は知らないのですか？」

「ペンダント？あー、あったっすね。エヴァちゃんとおそろいの。シスコンにブラコンッスか」

「魔力隠蔽用の魔法具」

「ええ。それに能ある鷹は爪を隠すと言います。見た目に油断して狩られないよう気をつけなさい」

「か、狩られるって……そんな大げさな。脅かさなくてくださいよ、シスターシャークティ」

「あら、脅してなんかいないわよ。でもいざれあなたも知るときが来るでしょう。一応、心構えだけでもしておきなさい」

「何のツスか？」

「それは自分で考えること」

「ココネも厳しいなあ」

「あー疲れたー。嘘。言ってみただけー」

「お兄ちゃん、お風呂いっしょに入ろっ」

「オエエエエエエエエ」

「お久しぶりです、姉さん。家の中であまり砂を吐かないで……砂糖!？」



「御主人トニイサンヲ見セラレ続ケテ数百年目ニ初メテ砂ヲ吐イ  
タケドヨ、マサカ砂糖マデ吐ケルヨウニナルトハ……」

「姉さんも苦労しているんですね」

「ソノウチオマエモ吐ク事ニナルカモナ、我が妹ヨ」

「それは、……人形の姉さんもそうなるという事は、私にも少し  
ありえそうです」

二時間後、全裸のマスターを担いだ全裸の隣様がお風呂から出て  
きました。

ええ。何も聞こえてません。

でも、砂を吐きそうになりました。

022 世界最速、魔法先生と会う。(後書き)

このえもんから電話がかかってきた時の長台詞はエロゲの「家族計画」から。

ランボルギーニはイタリアの自動車メーカーから。

あとがき

皆さん、明日は更新できません。

楽しみにしてくれている方、ごめんなさい。

してくれていない方、さーせんwww

戦闘させるかどうか迷いましたが、それはまた次の機会に。

ちなみに、麟は『麻帆良の魔法先生』になるのであって、『関東魔法協会』に所属させるわけではありません。

ちなみに彼、朝倉さんの話からもわかる通り、結構義理人情に溢れています。

関係ない話ですが、彼がこんなお金を持っているのは、エヴァが賞金首を探す 麟が捕まえて突き出す。

というのを繰り返したり、喧嘩を売ってきた国を滅ぼして略奪してきたりしてたからです。

現在所持している資金がだいたい400億くらいですね(適当)。

実際は、レースをやるのにもお金がかかるから、という親心だったんです。

ホント、ちょっとしたレースでも数十万単位。

彼にはそんな苦労してほしくない。

では、本日もありがとうございます。

023 世界最速、少し寂しい。(前書き)

ほんとすいませんっしたー!!

ホントは昨日の朝には帰ってるはずだったんです!!

夕方には一本上がったはずだったんです!!

### 023 世界最速、少し寂しい。

白波（全力）です。

ぶちやいくに誘拐されそうになりました。

関係ないけど八カセがテンション高に電話をかけてきたので茶々丸をつれて大学に行ってきます。

「おいすーおいすー！！」

「ああ、麟さん！できたんですよ！！茶々丸の新CPUが！！

それにハードを作るにあたって、MITまでわざわざ出向いてかの天才兄妹に会ってきたんです！

いやぁー、いい収穫だったなあ。科学だけじゃなくてプログラムもやってて良かったって思いましたよ。

お兄さんの方が情けない感じなんですけどプログラミングは……」

顔を見るなり掴みかかってくるんです。すごい剣幕でまくしたてる。

無理無理。半分どころか半%も理解できない。

「待て待て待て、凄かったんだよな？」

「ええ！プログラミングはさすがの私もとてもかなうと思えませんでしたよ！そもそもプログ「OK！OK！」わかった！わかったから……」

本当にわかったんですか？」

「なんでやんわりと責められてるんだよ！わからねえよ！そしてどうでもいいんだよ！

車に乗ってるやつのは1%も車がどうやって動くか理解してないよう

に、茶々丸を使う俺も茶々丸をそこまで理解しなくてもいいだろうが」

「茶々丸を使うだなんて……その気なんですか？」

「その気はなくてもないけど、その生温かみを帯びた目はやめてください」

「何のことでしょうか？」

うえっへっへwwwwww初なおぼこじゃあるまいしwwwwwwいや、おぼこだったな。俺どうかしてたわ。つてかそうじゃなかったらそうした奴どうかする。

「そもそもそんな知識がなくても、茶々丸は俺の家族なんだから大丈夫！」

家族だからって脳の出来や形まで詳しく知ってるはずがなからう！でも実はCPUは気になってるんよ。どれ？」

「ああ、これです。見た目は少し大きな普通のCPUですが、麟さんにもらったクーラーによって28.7GHzのクロック数が出せるようになったんですよ！いやぁー、出力はケチるもんじゃないですなー。ちよつと前まで気を使いながら液体窒素をかけて18GHzを無理やり出してた時期がなつかしー！」

「すげー！！それ、適合するマザーある？」

「まさか！2055ピンですよ？茶々丸専用です」

「それはそれで凄いCPUだったんだな」

「でもそれを設計したプログラムはウィンドウズで作った代物……  
うふふ」

「なん……だと……」

「デバッグは完成時、死人を出してまでやったんで問題無いはず  
です」

「茶々丸の命は多くの死人の上に成り立ってたんだな」

「そ……そんな……」

「シヨックを受ける必要なんてないのよ、茶々丸。みんな笑顔で死  
んでいったわ」

「俺たちがそいつらの為に今できることは、生きていくことだ。そ  
いつらの分まで、な？」

「……はい！」

三回仕様を変えると死ぬと聞いていたが、変えなくても死んだんだ  
ろうか。

「じゃあ茶々丸は預かっときますね。完成したらまた連絡します。  
じゃあエヴァンジェリンさんにもよろしくお伝えください」

「んちゃー！」

「ではさようなら」

「プピーー！プペポーー！ー！」

「隣様、行ってきます」

「行ってらっしゃい（クルッピー、プペポパー！）」

エヴァはじじいと中将棋を打つてるとかでいなかったはずなんで近くのケーキ屋に突入する。

しばらくブラックで頼んだクソまずいコーヒーを飲んでいると白玉ぜんざいをのせたお盆を持つ、たつみに声をかけられた。よくそんなの売ってたな。

「あつ、隣さんじゃないか。どうしたんだい、こんな所で」

「俺がスイーツ（）を食ってたらおかしいか。和スイーツ（）」

「……まあ、なんと呼んでくれてもかまわないけど。ところでそれはケーキには見えないんだが、これから頼むのかい？」

「このコーヒーマグに見えるかもしれんがだいたい10リット

ルの砂糖が入るから充分飲むスイーツ（）」

「そうなのか。それは気付かなかったよ。相席いいかい？」

「嘘だけだね。別に俺の家じゃないし座りたいところに座れよ。白波のここ、開いてますよ」

膝の上を指してみる。

「向かい側が開いてるからこちらに失礼するよ」

「プピー！プポプペー！」

「かわいいと思ってやっているかは知らないが、かわいいけどやめてくれ。闇の福音とは一緒じゃないんだな」

「そんな常々いっしょにいて一時も離れないと思ったか？」

「思ってたよ。しかしつくづく不思議な話だ。あの邪神とこうしてお茶するなんてね」

「俺は邪神なんて名乗った事ないよ。誰がモツコスだ。共通点バイクに乗ってるくらいじゃねえか」

「誰も言っていないよ。しかし大変だね。私たちの担任になるんだろ？」

「え？初耳……何それ」

「先日の会合の時にそんな話をしていなかったかい？」



「でも俺エヴァの教室を、殺してでも担当するつもりだから」

「誰を殺すかは、あえて聞かないよ。しかし、エヴァンジェリンの担任ということは、私の担任でもあるということだからね」

「……ちゅうがくにねんせい（笑）？」

「なぜそこで今まで何も入ってなかった（ ）の中に“笑”が入るんだ！！」

「どう見ても大……高校生じゃんwww」

「なっ！！！」

「映画館とか中学生料金で入れないタイプだろwww  
いやいや、落ち込むなよ。俺も映画館大人料金で入れないタイプだ・  
か・ら？」

「効かないのはわかっているが、歯を食いしばってもらおう……」

言うやいなや、デザートイーグルをどこからともなく出して俺に向ける。

その瞬間、なぜか忍者みtain格好の女も現れた。

「助太刀いたすでござる」

「助かる、楓」

「忍者なら気付かれないうちに殺せよ。わざわざ出てくるって何な

の？老け顔なの？」

「はて、忍者だの老け顔だの……何のことでござるかな」

「やつべ、何この人たちwww俺も年齢相応に見られないんだから仲間じゃんwww切れんなよ。かわいい顔が台無しだぜ？」

「私よりかわいい男に言われても」「腹が立つただけでござるな」

ドン！ドン！カチツ、カチャツと足元に、一度俺に着弾した銃弾が落ちる。

楓も『マジで撃つかよこいつ』って顔でたつみんを見た後で『マジで全然効いてないじゃんwwwワロリッシュww』といった風に俺の方も見た。

「あれ？死ぬと思った？ふへへ、大丈夫なんだなこれが」

「せ、拙者はすこし大人っぽい顔をしてるからこれにて失敬」

「あ、おい！逃げるな楓！！」

忍者楓がにんにんとか言いながら走っていった。

お前の忍者観どこソースだよ。

「死んだらどうする！！」

「どうせ死なないだろうと信じてたよ。多少腹が立ったのは事実だが、事を大きくするつもりはない。周りも一応人払いは済ませてあるし、許してはくれないかい？ここまでやって許してくれるなら、だがね」

「『どうせ死なない』なんて後ろ向きに積極的な信じ方があるかよ。ちくしょう！俺のL96が火を吹くぞ」

「許してくれないのかい？私は次のあなたの生徒だよ？」

「俺、そんな事よりL96の話題を掘り下げてほしかった」

「……好きなのかい？」

「銃の中では。ボルトアクションじゃないライフルはライフルに非ずと言い張るくらいには。たつみんの次くらいに好きかな」

「本気にしてしまうぞ？私も、ボルトアクション銃は好きだよ。自動銃よりはね。One shot one killには、美学がある」

「わかってるじゃん」

L96に変えた弾倉が空の指輪をガシャガシャと無意味にリロードする。

それをたつみんが心配そうな目で見ている。壊れないから大丈夫さ。

「ところで聞いてもいいかい？」

「なんだぬ？」

「なぜ、銃を向けた相手になにもしない？」

「そりゃお前、赤ん坊にちょっと叩かれたくらいで目くじら立てな

いつつの。そんなぐらいで怒るかYO」

「あまり聞きたくは無かったね。どうあってもそれ以上の認識はなしかい？」

「人がどう頑張ったって象より重くはならないだろ？」

「圧倒的、と？」

「サウザンドマスターの京倍以上の魔力に、どこかの世界最強の50倍の身体能力だ。そんな奴が人間相手に本気で怒ってみろ。地球に人間の席ねえから！！」

「……それは流石に嘘だろ？」

「さあねー。嘘だと思えば嘘だし本当と思えば本当だし」

「なんだいそれ」

「しつかたないなあ。ネックレス外してあげる」

そう言つてネックレスを外しても特に反応がない。  
あれ？魔力下がった？

「今、大気中の魔力が倍くらいになったんだけど、まさかそれかい？」

「……知らないけど、それじゃない？」

「……いい、いい魔法具だね」

「エヴァとおそろいだからな。やらんぞ?」

「いや、もう何でもいいや。

これからはどんないい条件でも君やシラナミを名乗る人間がターゲットになる依頼は受けないよ。割に合わないにもほどがある」

「ゴクリゴクリコ、っはぁーまずかった。どうやったらコーヒーこんな不味く作れるんだろうな。麟ちゃん不思議」

「……飽きたのかい?」

「うん!」

「悪かったね、足止めして」

「いんだよ、帰ってもエヴァいないし、どーせ」

「……頑張ってくれ(?)」

「MAKASERO」

トコトコと歩いてるけど、全く人が居ない。営業妨害にもほどがあるじゃん。

「大源<sup>マナ</sup>の濃度が上がらんかったか？」

「あ、お兄ちゃんネックレス外したんだ」

「昔、宇宙空間にまで満ちていた大源の濃度が下がったと魔法世界で大きな問題になったことがあったが……」

「多分お兄ちゃんと私がネックレスを買った時だな」

「なんちゅう規格外キャラじゃ」

「なんたってお兄ちゃんだからな。貴様も下手に逆らおうとせんとだな。王手」

「誰が好き好んで逆らうと言っんじゃ。……待って？」

「断る。ここまでどれだけ時間がかかったと思っている」

「むう……！！ゲホツガハア！！持病のアレがあ！！」

「私の勝ちでいいな？」

「年寄りはおもつと労わらんかい……」

「じゃあお前の数倍生きてる私たちはもっと労わられて然るべきだな」

「ひいい、じじい虐待じゃよ」

「ハッ」

023 世界最速、少し寂しい。(後書き)

まさかこんなに遅くなるとは。

帰ってきたのが一時過ぎだから予定より半日以上遅く帰った事になるのか……

たつみんは誰かの依頼で麟の実力を測るように言われたんでしょうか。

いきあたりばつたりで書いてるのでわかりません。

急いで上げなきゃという気持ちが行先しすぎていい加減な仕上がりかもしれない。

どうか、どうかご勘弁を……!!

日曜は……日曜こそは……!!

024 世界最速の妹の従者、帰る。(前書き)

おかえWRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY  
YYYYYYYY!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!





魔がさして缶ピースを吸ったら勢いがつきすぎて葉っぱも食べちゃ  
うよね！

次回！「This is a pen（愛は世界を救う）」

See ya！

「俺もうセーブいらぬゲームしかやらない。マリオとかスペラン  
カーとかセクロスとか」

「今日も相当きてるね」

ピュピュピュッ、ピュピュピュッ

「あ、ハカセだ……どうした？ああ、そうか。じゃあ今から行く。  
ああ」

「茶々丸？」

「出来たってさ」

く　　だ　　い　　が　　く　　く　　

「我が麻帆良大の科学力はアアアアアアアア世界ーイイイイイ  
イイ」

ひとまずトリップしているさとみんを落ち着けてから話を聞く。

「こちらがその新生茶々丸です」

「茶々丸です。ひと月ぶりですね」

「なんと演算速度が以前の180倍！チップセットは耐震性能も考えてすこし大きくもなりましたが充分すぎる許容範囲です！そして隣さんのおかげで冷却効果も以前の比ではありませんよ！ほら、外部接続アダプタ経由で100台のXPパソコンを同時起動しても2秒です！ここまで来るのに20人以上の工学部の連中が死んじゃったんだけどね」

「死んじゃったんですか!?!」

おお、心なしか以前より表情豊かに（なっていない）……

「ほら、あそこ」

デスクの下に寝袋が敷いてあり、その上で無精ひげの男たちが死んだように眠ってる。

「新機能とかは無いのか？」

「当然、ありますよ！冷却のためのシステムが全部要らなくなったからその分武装に回したんですが、廃熱ダクトをジェットブースターにしてロケットパンチが従来の5倍のスピードに！そしてモーターもハイパワーのものを入れました。今なら砲丸だって握りつぶせますよ！」

「それで誰が得するんだ……」

「さらに完全防水、完全防塵にほにゃほにゃの機能も搭載!！」

「ほにゃほにゃ!? ハカセ、ほにゃほにゃって何ですか!? 私の体にいったい何が!！」

「ほう、それは……やったね、お兄ちゃん!」

「」

「どう発音したんですか!？」

「さらに色々な機能を搭載した結果!なんと重量が元の倍、だいたい400キロになっちゃったんですよ!！」

「いやったああああ!！」

そう言って茶々丸をお姫様抱っこしたら膝辺りまで埋まった。

「元々小さいのにもっとちいさくなっちゃったじえー」

「大丈夫!かわいいよお兄ちゃん!」

「その、恥ずかしいのであんまり……」

「その細い体のどこにそんな力が……非科学的な……」

「いや、科学的だぞさとりん」

「せめてさとみんにしてください。人の心は見えませんよ」

「棒に対して、横に力をかけるのと縦に力をかけるのではなんとらんたら  
かんたら」

「なるほど!」

「さらに遠心力で体の水分がどうたらこうたら」

「なるほど!」

「そして筋繊維の総合的な太さではなく一本一本の強度と量をハッ  
パフミフミ」

「なるほど!」

「ここまで全部適当」

「ええっ!」

「まあどうあっても俺の世界最強はここまででもこれからも揺るがな  
いから。それだけ、わかってほしい。うーんMK-2(セダン)」

「ああっ、生物学は専門じゃないのに調べたい!!物理とかに応用  
できそうっ!」

「よーし、茶々丸、帰るか」

「はい、隣様。ではハカセ、また」

「筋繊維に代用できそうなゴムを作って……でも強度の問題もある  
し、骨も合金だと重すぎるしそもそも……」

「ただいまー！」

「ただいまー！」

「ただいま戻りました」

「「おかえり」「

みたいな皆が得する茶番劇をくり広げて、久々に茶々丸をエンジョイする。

「茶々丸う〜」

「茶々丸ー」

二人して茶々丸に飛び乗った瞬間、メゴン！とか言っつて床が抜けた。

「あわあわ、す、すすすいませんー！」

「これが400キロの重圧か……」

とか言っつて引っ張り上げる。

重力低減の魔法は……これか

「プラクテ・ビギ・ナル……」

「おお、お兄ちゃん、久々の魔法だね」

「おうよー！」

あ、始動キーに『おうよ！』が挟まった。まあいいや。強行しちゃえ

「ああ、体が軽くなりました！」

「いけるもんだなあ」

「お兄ちゃん、体重計持って来たよ！」

何も言わなくても持つてくるエヴァの頭を撫でて茶々丸の前に差し出す。

「ほれ」

「失礼します……ああ！」

「80キロか……魔力少なかったかな？」

「気の使いすぎだったんだよ」

「まあ元よりだいぶ軽いし、いつか！」

「ありがとうございます。各駆動部も、重力による抵抗が低減されて動作が軽くなりました」

「いいつてことよう！茶々丸う〜！」

「茶々丸ー！」

メゴンー！！

「とりあえず、修理してからやるか」

「そうだね、お兄ちゃん」

両親の不在を異様に気にするおっさんが一週間かけて修理してくれました。



024 世界最速の妹の従者、帰る。(後書き)

一方通行が麻帆良入りするやつ書きたい  
こちらが終われば書くかもしれません。

?あとがき?

最近uniccodeの多用が過ぎます。

紅の豚野郎でございます。

最後の一文は何の伏線でもありません。

ただの人妻好きのおっさんです。

今日は頑張って更新しちゃうぞーとか言ってた記憶があるけど、他の人の作品が面白すぎてそれ所じゃないんです。

あと、クーラーが効きすぎて風邪をひいたからクーラーを切ると汗が出る。なのでクーラーをつけると汗で体が余計冷え、風邪が悪化する。

コレを死の螺旋デス・スパイラル連鎖といえます。今適当に考えました。

では、今回もありがとうございました。

See ya!

025 世界最速の妹、メシがまずい。(前書き)

東京のうどんには本当に墨汁が入っていると信じてた時期がありました。

025 世界最速の妹、メシがまずい。

【うどんに】妹のメシがまずい【墨汁】

「エヴァ、これ何入ってるの？」

「うどんだしと墨汁とたまごと醤油と……」

「待て待て待てえーいーいーいー！」

入らないよー！！うどんに墨汁は入らないよー！！！！ってか、墨汁  
食い物じゃねえよー！！！！

当然飲み物でもねえんだよー！！！！関東のうどんが黒いのは、昔こ  
いくち醤油しかなかったから！

こいくちは色は濃いけど味は薄い！だからいっぱい醤油を入れて味  
を濃い目につけた！ドゥー ユー アンダスタンソンドゥー！

ギリギリ使って竹炭だよおおおー！！」

「じっ、じめんねっ。うぐっ、じめんなさいい」

「いいってことよ」

妹が何を考えたか、料理を作るなんて言い出したへたれのりんです。  
ってかあの顔で泣かれてそれ以上言えるかよ。

この墨汁うどんも慣れてきたら案外……まずっ！！！！慣れない！ま  
ずい！！！！

「今度一緒に料理しような」

「うん！」

「これ、水分の9割が墨汁ですね」

茶々丸が何か言っているが、不死身の俺も死ぬかもしれない。しかも何故か俺の分しかない。

いや、これをエヴァに食わせるわけにもいかないが……。

「うえーっぶ！じゃあ食材を買いに行おうえーっぶ」

「うん、お兄ちゃん！」

「和食は高難易度から低難易度まで幅広くあるし、低難易度とされるものでも極めれば他の追隨を許さない味になります」

「はい！」

「でもこういう時に作るのはカレーって相場が決まってるからとりあえずカレーの材料を買いにいこう」

「うん！」

「トマト、りんご、鶏肉、レッドペッパー……」

「お兄ちゃん、これは？」

「そのチョコレートは隠し味に使わないし当然カレールウでも無い

から返してきなさい。でも個人的に食べたいならかごに入れればいいよ」

「返してくるね」

隠し味つてのは、その料理がまともに作れるようになってから入れるんだよ、エヴァ。

「ターメリックとコリアンダーと……」

「カレールウは入れないの？」

「俺が今まで作ってきたカレーにカレールウを使った事は、実は一回も無いんだ」

「なんで？」

「ガーリックが入ってることがあるからな」

「お兄ちゃん大好き!!」

ん？あれはエヴァちゃんと、麟さん!？

じゃあ麟さんの妹ってひよっとしてエヴァちゃん？

そう言えばエヴァちゃんの名前にもシラナミって入ってたような…

…。

うわぁー抱きついちゃってるよ！！しかもすっごい笑顔！  
学校じゃ見れないねえー。とりあえず撮っとこ。  
あ、エヴァちゃんと目が合った。声かけるか……。

「玉ねぎと鶏肉も入れてやるぜツベイヴェー！」

「どーもー」

「朝倉か……」

「お？かずみんじゃん」

「「知り合い？」」

「麟さんはお父さんの友達でエヴァちゃんはクラスメイトだよ」

「なんか久々だな、かずみん。背伸びた？」

「伸びた伸びた。麟さんは相変わらずちっさいねー。今日は二人でデート？」

「今日はお買い物。毎日がデートだね。このイチャラブっぷりで世界を狙えるな」

「熱いねー、お二人さん！」

「貴様にはやらんぞ？」

「あらら、これはいよいよもってラブラブだねー」

「記事にしてもかまわんぞ?」

「残念、うちはゴシップ誌じゃないからね。じゃあまたお二人さん、いずれ」

「ふん」

「お父さんによろしく」

「いやあー、お父さんに聞いてはいたけどすっごいシスコンっぷりだったなあ。」

「うちの兄貴もあの半分くらいシスコンだったらなあ。兄貴とかいないけど。」

「別にシヨタコンって訳じゃないけど、ちょっとだけエヴァちゃんがうらやましかったりして。」

「あとはフェンネルにジンジャーっと。うん、これだけあれば充分だな」

「本格的ー」

「そらエヴァのためなら一流シェフにもなるわ」

「うふふ、お兄ちゃんったらあ」

「でも今日はいっしょに作るからな。」

「うん！世界ーおいしいカレー作ろうね」

「うえへえへえへへｗｗｗｗ世界ーおいしいに決まってんじゃ  
んｗｗｗｗ」

「つかいけー、ごーセツスお会計は5000円になります」

「うーーい。（オライツ、オライツ（丁度ありました）」

「ぎーツス、おこしゃさいツス（ありがとございました。またお  
こしくださいませ）」

「さっきのって何語？」

「DQN語」

「私も600歳超えてるのにまだわかんないことだらけだなあ」

「一兆年生きてもわかる必要のないことだらけだよ、世の中（オラ  
イツ、オライツ」

「じゃあシラナミ流、カッルエーの作り方だ。  
とりあえず鍋に油を突っ込んで測量したスパイス類をこれだけ入れ  
ます」



「うん！」

「で、適当にませつつ、俺がものすごい速さで刻んだ玉ねぎ10個分を入れて炒めます」

「ジュー！と、それはそれは勇ましく水分が蒸発する。」

「エヴァも一生懸命混ぜているが、実はそんなに混ぜまくるもんじゃない。」

「あめ色になったりしたような感じになったと思わんでもなければ、皮を剥いで刻んだトマト達を入れてくれよう」

「はい！」

「さっき入れなかったスパイスを全てぶちこんでくれるわ！」

「よし」

「そしてエヴァ、その買った覚えのないチョコレートをゆっくりとテーブルに置くんのだ。いいか、ゆっくりとだ」

「入れないの？」

「あれ？入れるって言ったっけ？」

「テレビだったら……入れるって……」

「いいか、見る分にはいいけど、信用するもんじゃないぞ。テレビの料理人よりお兄ちゃんの方が料理暦長いから」

「それもそうだね！」

「うむ。じゃあすりおろしたりんごと鶏肉を入れて蓋を閉めた後弱火で煮込む。」

これからはしばらくやること無いからエヴァはゲームでもしるとい  
いんじゃないかと思うのですよー！」

「うん！」

鍋の近くに座ってたまに鍋をかき混ぜる。

本を読んでも横に立って茶々丸が声をかけてきた。

「麟様はよろしいのですか？」

「けっこう長い間火を通すから。ゲームやると玉ねぎ君の焼死体が  
出来上がるから」

「私が見ていきましょうか？」

「いや、いいよ。お前も食えたら良かったのにな」

「今後ハカセにお願いしてみます」

「ああ、きつと喜ぶぞ。変態だから」

「ふふふ」

「最近良い顔するようになったな」

普通の笑顔をしてる茶々丸に何気なくそんな事を言った。

「そ、そうでしょうか……」

「そうだとも！さとみんなちやおりんも褒めて遣わす」

「今度伝えておきますね」

「おーい、エヴァー！」

良い具合に火が通ってきたのでエヴァーを呼ぶ。  
トトトトと、軽い音を立てて走ってくるエヴァーを抱きとめてひと  
まずちゅーして降ろす。

「どうしたの？」

「ああ、本来はこのまま一晩寝かすんだけど、まあ今日はいいや。  
ヨーグルトを500ml入れてかき混ぜる」

「よいしょっ」

「で、最後に塩で味付けをしてみるんだが、とりあえず小さじ1/  
4だけ入れてから混ぜて味をみる」

「んむっ、ちょっと薄いかな」

「で、少しずつ足して行って、こんなもんか」

「あ、いつものカレーだ！」

「で、またしばらく煮込むと完成だ。頑張ったな」

「えへへー。ん〜……ちゅっ」

「姉さん、最近、砂を吐くより先に録画を始めてしまいます。何なんでしょう、これ」

「知ルカヨ……オヴェエエエエ」

「いただきまーす」

「いただきまーウィツシュ」

「んー、おいしい」

「ハムツ　ハフハフ、ハフツー！」

「キメエヨ、死ネ」

最近、シラナミになったチャチャゼロとサムズアップを交し合う。手を握って親指を上げるアレだ。

茶々丸は羨ましそうにみている。気がする。

完全に俺の主観だが。

これは、次のステップに進むのもそう遠くない話だな。

「ハムツ　ハフハフ、ハフツー！」

「キメエヨ、死ネ」

今日もシラナミは平和です。

025 世界最速の妹、メシがまずい。(後書き)

本突入するまえに整えておきたい事が……そんなに無かったはずなのに、まだネギの麻帆良入りくらいしか決まってる……

エターナルネギフィーバーで死ぬほど笑わせてもらいました。家から全く出ないため色白な紅の豚野郎です。部屋に機械がいっぱいあるから冬でも暖房要らず。

パソコンが3台あっても俺は一人しかいないんだからどうあっても一度に一台しか使えないよ。

夏は言う必要ありませんね。

また懲りずに茶々丸の改造フラグを立てて、この子ったら。次回、早急にやります。いえ、やるかもしれないです。

……やる可能性もあります！

では、今回もありがとうございました。

026 世界最速の妹の従者、現行最終型。(前書き)

濡れ場は全面カットです。

アニメのR-15も白い巨大な帯で隠してるしいいかなと思って…。

026 世界最速の妹の従者、現行最終型。

おなじみ、大学です。

前もって言っていた嗅覚と味覚のデバイスが出来上がったと報告を受けて。

ついでに軽量化も打診してみたら案外すんなりいった。

丁度試作機も出来上がったと言っていたしね！とか言っ

あ、R・A・R・S、麟・A・R・白波です。

「基本的に外骨格頼りだったんだけどねー。動きに少しずつ無理が生じてきちゃうんですよ。

一応、内骨格は指だけになるんだけど、他の部分も外装はしっかり作ってあるからね。明日には出来上がってますよ」

「重畳」

などと話しているとじい様から連絡が。とうとう本採用日が決まったか。

「やっと決まりやがったかこの×××野郎！」

「いきなりなんじゃ、お主は。2月の第一月曜日、来月からじゃの

「……何で知らせるのが今更なんだよ。もっと早くから知らせるよ

「す、すまん」



「具体的に言うと022 世界最s「な、何を言ってるかさっぱりじゃが、必要書類は用意してある。取りにきてはくれんかの」

「今回だけやで？」

ピッ

「どこか行かれるのですか？」

「がくえんちよのところに」

「あら、いってらっしゃい」

なに良妻気取ってるの？シラナミに入りたいの？

「行ってきます」

「おお、来たか」

「呼んどいて来たかもクソもねえよ。で、書類とやらはどこ？」

「それはこれじゃ」

「ほいさっさ。2・Aでタカミチのクラスだよな、エヴァとかずみんがいたのって。帰っていい？」

「いやいや、ちょっとお願いがあつての」

薄べつたい封筒を引つ手繰つてさあ帰ろうと勇み一步を踏み出すとなにやら面倒な話になっているようだ。

「ONEGAI?」

「ナギ・スプリングフィールド……覚えておるじゃろ?」

「ああ、サスペンドな。覚えてる覚えてる。死んだんだつて?」

「おお、そうらしいの。そんなスタンバイしそうな名前じゃなかつたんじゃが……その息子が今度麻帆良に教師として来るんじゃよ。お主のクラスの担任として」

「なにそれ。息子いたの。てかいくつよ。アイツあの時まだ15くらいじゃねえの?」

「ネギ君というんじゃが、もう9歳だったかの」

「何」

「9歳」

「じいちゃん、あんた充分頑張つたよ。後の麻帆良は新田先生に任せて、もう隠居しろ。つてか死ね」

「ひどつ！わしだって考えあつての事じゃよ」

「ほざけ。何をどう考えたら小4が教師になるんだよ。後頭部長すぎて脳みそまで血液回ってねえんじゃねえの？」

「そこまで言うかの……いいか、これは魔法関係の話じゃ。」

ネギ「スプリングフィールド。英国のメルディアナ魔法学校を二年飛び級した上に主席で修業した天才少年。当然、人にモノを教えるわけじゃからな。オックスフォード卒業級の知識はある。」

この子を正しく育てるのが我々大人たちの務めではないじやろうか。しかし、卒業後も修行があつての。ネギ君の場合は」

「大方、麻帆良で教師でもやってこいつてか。クソにまみれた話だな。いいか？俺はこれでも、教師はちゃんとやるつもりだ。そのネギ先生がクソにも劣るゴミ野郎で、もう矯正のしようもないと思つたら何がなんでもやめさせるゾ」

「まあ殺さないだけマシなのかの……」

「一応顔見知りの息子だからな。それに俺が今まで殺してきた奴らだつて殺したくて殺した訳じゃねえし」

「もう耐えられないと思つたら先にわしに言うんじゃぞ？」

「ケツ、わかつてますよ、上官」

「うむ。ではもう帰つてよいぞ」

「ABAYO」

つてか書類上は40の俺より360度どこから包囲しても9歳のガキが担任っておかしくない？

「ナギのガキがお前の担任だったさ」

「らしいね」

知ってたのかよ！！！！

ってか、何で生徒のエヴァが知ってて次担当するはずの俺が知らねえんだよ！！！！  
びっくりだよ！！

「お兄ちゃん、もしかして聞いてなかった？」

「なにも聞かされてなかったよあのじじい！！！！  
絶対面倒だと思って今まで黙ってやがったな！」

「ごめんね、お兄ちゃん。まさか聞いてないとは思わなくて」

「エヴァはなにも悪くないからな。あのじじい、張っ倒してやるんだからねっ！」

「おや、今寒気が……若いつもりでおっても年かのう」

「翌日」

「いやぁー、兵装と骨格の軽量化でまさか200キロも落ちるとは  
思いませんでしたよ。チタン合金にカーボン皮膜で軽量化+剛性も  
アップですよ！」

「というわけで、元の200キロです、麟様」

「まあそれでも軽量化魔法はかけるんだけど。さつとみーん」

「シャランラーと手に持っていたモンキーレンチを振って魔法をかけ  
た。」

「確かに、前より軽くなったように思います」

「むむ？茶々丸、ちょっと」

「ちよいちよいと茶々丸を重量計に乗せると随分驚いたようで、」

「よ……40キロになってる……！」

「と、さとみんビックリ。」

「シラナミの魔法力はアア！」

「世界一い！」

「キティったら、ナイスアシスト」

「一心同体だからね」

「やっぱり魔法はすごいなあ。今度検証させてくださいねー」

「おつともよ（？）。じゃあいこっか、茶々丸。せんきゅーさとみん」

「いえいえ。ではお元気で」

「じゃあな」

「お世話になりました」

「ふへへへ、茶々丸う」

「茶々丸」

「じ……これはもしや」

「ヒヤッハー！我慢できねえー！！やっちまえー」

「わーいー！」

「ああ！楽しい！楽しいけど困ります！姉さん、どうしたら…！」

「イヤ、ソレコソドーデモイーワ」

「うひゃあつ！アンテナはあ、首筋はあ！」

「なんだなんだ、随分敏感サラリーマンじゃねえかYOちえけら」

「ふふふ、お前もこちらの道に引きずり込んでやるわ」

「セクサロイドですう！セクサロイドですう！…！」

「ひゃああああ！ダメ！ダメです！」

「ぎえひゃひゃひゃひゃ W W W W W W W W」

「ハーツハツハツハツハ！」

「ダメダ。俺デモ引クレベルダ」

「……姉さん、私の胸取れてません？」

「ドンダケ全身ヌメツテルンダヨ。見タクモ無エ」

「そつ、そんなー!」

「……ふう、どうした、茶々丸?お兄ちゃんがカレーを食べさせてくれると言ってるぞ?」

「いくらマスターや麟様でも、そんな事で私をどうにかできると……」

「おいひい!おいひいれす!!カレーがこんなにおいしいなんて!」

「泣きながら食べて……。なんか不憫な子みたいになっちゃったぞ、茶々丸」

「まあ今まで何も食べてこなかったみたいだし、仕方ないのかな?」

「しかしかわいいなあ、茶々丸も」

「うう……、一生ついていきます、麟様あ」

「マスターである私はどうなんだ?」

「マスターも麟様についていきます」

「いや、ついていくけどそうじゃなくて」

「安心しろよ、チャチャゼロ。お前も連れて行くからサ?」



「頼マレナクテモ憑イテツテヤルカラ安心シナ」

「「「「あはははは、うふふふ」「」「」

茶々丸は【嗅覚】【味覚】【えっちなおもいで】【だいなおもいで】を手に入れました。

026 世界最速の妹の従者、現行最終型。(後書き)

あとがき

らほーい！豚野郎だよ！

ついに本編に関係ありそうな話になってきましたね。

おじさんもびっくら！

今回はちよつとシリアスかなと(書く前に何の根拠も無く)思ったけど書いてみたらやっぱり尻assだった。いつもの事です。

性描写についてはご勘弁を。童貞の限界法界大殺界でげす。

ひとまずコレで、僕の考えたさいきょうの茶々丸は一時終了となります。

なお作中の、チタン合金とカーボンのアイディアは杉ちゃん様にいただきました。

いつもありがとうございます。

誰か茶々丸オンリー同人誌書いてください。買います。

ほぼ固定の一人称視点のため、事実が正確に伝えられる可能性は限りなく低いです。ごめんなさい。

力量不足を嘆きながらも、今日もずんどこ更新できたのは皆様のおかげです。

明日は普通に更新できますが、明後日はひよつとしたら忙しいかもしれません。

では今回もありがとうございました。

ミスタースカーレットピッグ

027 世界最速、顔合わせ。(前書き)

瀬流彦先生は、小心者だと思います。

027 世界最速、顔合わせ。

来週から教師の白波どす。

アニメの関西弁のイントネーションが気になって仕方ないんです。

準備をしに来るようにとじじいに言われて来ました。

俺はなあ、正規雇用教師なんだよ。アルバイトじゃないんだよ。年下のくせに顎で使いやがって。

「来ましたー 白波でえす？」

「おお、来てくれたか」

「ひょっとしてテンプレートでもあんの、そのセリフ？」

「ではしずな先生、タカミチ、あとは頼んだぞ」

無視されたwwwwwwくやしいwwwwwwでも……ビクンビクンwww  
www

「はい、よろしくお願いしますね、白波先生」

「よろしく、麟君」

「うむ、苦しゅうない」

「ははは……」

朝礼前、僕が職員室でお茶を飲んでたら彼はやってきた。  
いや、そろそろだつて聞いてたから別に不思議じゃないんだけど、  
やっぱり流石に怖い。

聞いた話によると、“あの”闇の福音より何倍も強いって言うじゃないか。僕なんて一瞬だよ。  
ここは気付かれないように極限まで影を薄くしておこう。

「お久しぶりです、新田先生」

「おお、麟先生！ここに居るといふことは」

「はい。おかげさまで、教員試験、合格しましたよ」

「それは良かった。今夜は久々に羽目を外しますかな」

あれ？意外と礼儀正しい……僕の勘違いだったかな？  
それとも、新田さんにだけか……。

「新田さん、麟君とは？」

「ああ、新田先生に指導してもらったんだよ、タカミチ」

新田さんにだけだつたー！

義理と人情に篤いタイプの人だああー！！  
身内には優しくそれ以外には厳しいってまんまヤクザじゃん！

「あら、そうだったんですか」

「瀬流彦くんも、久しぶり」

やっべ、声かけられた！返事くらいはしとかないとマズいよなあ。

「はっ、はい！お久しぶりです！！」

「何だ、瀬流彦君も知り合いだったか！君も今晚付き合えよ？」

ひいひいひいひい！！

「よろしく、瀬流彦きゅん」

この人絶対怖がられてるの知っててやってるよ！！  
こえー！！

いや、待てよ？ここで僕も味方のポジションを手に入れておいたら  
安泰じゃないかな？

よし、それでいこう！

死ぬより100倍はマシだ！

「よ、よろしくお願いひましゅー！！」

「さて、もう職員朝礼も始まる。その時に自己紹介でも。白波先生  
の席は、私と瀬流彦君の間だな」

「改めてよろしく申し上げます。瀬流彦君も、ヨ・ロ・シ・ク？」

「ッよよッよよろっしいくいおねっがあいしますすっつっ」

Unicodeならドクロが見えてる!!

いったいどういう意味が……。

やめて欲しいよ、学園長も……。僕は限りなく一般教員に近い魔法教諭なんだよ？

多分学園の魔法使い最弱だよ!？

「ほっほ。じゃあ職員朝礼を……と言っても白波君の紹介だけじゃ  
がの。じゃあよろしく」

「来週から正規雇用される白波麟、40歳です」

「」「よっ、40歳いいいいいい!!!!???」「」「」

まあ、そうなるよね。

「これこれ。ちなみに3年前までバイクのレーサーをやっておった。  
これが写真じゃ」

なんで持つてるんだろう、この人。

「変わってない……」

「レーサーだったんだ」

「あーん、やっぱりかわいいー!!!!どうやったらその若さが保てる  
の!!どうやったら!!」

刀子さん、落ち着いてください。言わないけど。

「ちなみに、こう見えても彼は男じゃ」

「「男！！？？」」

「ちくわ大明神！」

誰だ今の！！！！

顔合わせは無事に終わった。

いやあー、良かった良かった。

「やあ、さっちゃん。失礼するよ」

「へいさっちゃん！久しぶり」

お久しぶりです。こちらへどうぞ

「とりあえず一杯……麟先生はお酒は？」

「このナリ通り、全く飲めませんよ。エヴァはそつでもないんですけど」

ちなみに今晚、エヴァはじじいに酒をせびりに行っているらしい。

「ふむ、じゃあウーロン茶でいいかね？ジャスミン茶もあるようだが」



ウーロン茶とジャスミン茶のブレンドもありますよ

「じゃあそれで」

「」「乾杯！」「」

ちびちびと口をつける。

新田先生はそこに、瀬流ピコは勢い良く煽ってる。

「ツハア！さっちゃん、もう一杯！」

「瀬流彦君、今日は随分飲むねえ」

「飲まなきゃやってられませんよ！だって……ああ、いえ、なんでもないんです」

こつちをチラチラ見ながら言う。

何だ、久々にケツの危機か？

「やあ、やっていますね」

「おう、タカミチ。空いてるぞ」

「ああ、邪魔するよ。僕も一杯もらえるかな」

「しかし、さっちゃんは随分料理が上手いな。和食では茶々丸に及ばず、中華ではさっちゃんに及ばず」

「そういえば麟君はエヴァのお兄さんだったんだね」

「おお、そうなのかい、麟君？」

「そりゃもう、俺が生まれた瞬間から俺はエヴァの兄ですよ。あの頃は随分可愛かったなあ。いや、当然今も変わらずかわいいですよ？昔からバイクに乗ると大喜びでねえ。300キロも出したときなんかはキヤーキヤー騒ぎながら……」

「それは言んでいるのか……。瀬流彦君、何を飲ませたのかね」

「そんな恐れ多い！！」

「恐れ多い？」

「彼は極度のシスコンで、素面でこれですよ。思えば昔、共学制だった頃エヴァの家にプリントを持って行ったら彼に殺されそうになつてねえ。ははは」

「昔の話を蒸し返すなよ、タカミチイ」

「いやいや、マッチ棒でもあの速度で投げたら人が死ぬよ」

「いったい何があったのか……」

「おっと、もうこんな時間か。邪魔したねさっちゃん」

「じつそーさん」

「瀬流彦君が完全につぶれてるぞ」

「はは、僕が職員寮まで運んでおきますよ」

「ああ、頼んだぞ、高畑君。では麟先生も、来週からよろしくな」

「はい、よろしく願います」

「うえーあ！ただいまスカンク！」

「おかえりなさいませ、麟様」

帰ったらエヴァがいなかったから茶々丸の背中に抱きついて寝た。

「録画したいけど背中から降ろしたくない！姉さん、どうすれば！？」

「死又ホドドーデモイイ」

027 世界最速、顔合わせ。(後書き)

紅のです。

次回こそはバイクを出したい。

けど次回はネギ先生が……来る……ざわ……ざわ……

ちなみに副担任のしずな先生は高等部の英語教員に、タカミティは出張天国に。  
なります。

では今回もありがとうございました。

028 世界最速と、魔法先生。(前書き)

よっしゃ長かったー！

今日、初顔合わせ&初授業らしく、下仁田葱・スプリングフィールド氏が来訪なさるともっぱら。

つてか当日にいきなり授業なんて、先方にも準備つてもんがあるだろうに、何考えてるんだらうね。

まあテンポよくていいけどさ。

つつーわけでおなじみ白波・アスカ・ラングレーではなく白波麟です。

ぐーてんもるげん！

朝からじじいと他愛ない話をしながらそのネギ助を待つてるって訳だ。

ヘイカモーン！！

コンコンしつれーしまーす

返事を聞く前にガチャリコと扉を開けて三人入ってきた。

一人はいつぞや会った駅前のお姉ちゃん、一人は頭に鈴付けてるジヤージのバカっぽいガキ、最後の一人が、絵本でおばあちゃんがかけてるメガネみたいなんをつけたちんちくりん。

このちんちくりんがネギだらう。と思う。

「あら？お嬢ちゃん久しぶりやねー。あの時はちゃんと着いた？」

「ああ、着いたぜ！ありがとうなんだぜ！」でも結局遅刻したんだぜ！

「でも何でここにおるん？」

「その子はのう、そう見えてもう40歳じゃ」

「またまた、嘘いうてー」

ハンマーで……殴った……!!

俺もやりたい!

「いやいや、これが本当でのう。で、今日からおぬし等の副担任じや」

「すらなみりんだすwwwwwwよろすくwwwwww」

「なんか無性にウザいわねえ」

「これで40歳かあー。不思議な事もあるもんやねー」

認識障害ってすごい!

「でもそつちのネギ君は、正真正銘10歳の天才少年じゃ。

まずは、これから3月まで教育実習生として働いてもらう事になるのじゃが、この修行はおそらく大変じゃぞ。

ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスは無いが、その覚悟はあるのじゃな?」

「は、はい!やります!やらせてください!」

「うむ、わかった!では今日からさっそくやってもらおうかの。2

- Aの担任になるんじやが……」

「そ、そうよ！ちょっと待ってください！」

「ど、どうしたんじゃ、アスナちゃん？」

「こいつらが「おいおい、こいつらって何よ。俺は一応正規雇用だぞ？」……ごめん、こいつが教師をやるのは100歩譲っていいとして、担任ってことは、高畑先生は……」

「まあまあ、タカミチは今まで通り出張&帰省のヒットアンドアウェイ野郎として麻帆良の外を駆け回るよ。今までと何も変わらないって」

「それもそうか……って、でも……」

「ああ、そうそう、しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてくれんかのう？まだ住むとこ決まってないんじゃよ」

「げ」

「ええよー」

「もっつ、そんな何から何まで！学園長ー！！」

「かわえーよ、この子。こっちの子もかわえーけどな。日本人形みたいや」

「ガキは嫌いなんだってばー！！」

「仲良くしなせよ」



「「うぐっ」」

え？それで収まるの？

「じゃあみんな、行きましようか」

いつの間にかいたしずな先生が三人を引き連れて出て行った。

「……さて、何でお主に残ってもらったのかは他でもない、ネギ君の魔法が、極力他の者にはれんようにしてもらいたいんじゃないか……」

「極力？完全にじゃなく？」

「そこまで目くじらを立てて見張る事もあるまい。バレてしまうのならそれがかまわん」

「はぁん。なんだ、思ったたより悪人じゃないの、お代官様も」

「ふおふおふお、お主ほどじゃないよ。いや、本当」

「まあいいや、俺も行くぜ」

「うむ、頼んだぞ……」

教室の前に着くとすでに入る直前だったようで、黒板消しの挟まっ



「キヤーかわいいー!!」

「40歳って嘘だよね!嘘って言ってよ!」

「二人とも持つて帰りたいー!」

「まずい、任せた、ネギ先生!」

と言って早々にネギくんを差し出し、エヴァの隣に座る。

「おはよーモーニング」

「おはよ、お兄ちゃん」

「おはようございます、麟様。今朝ぶりですね」

「うむ。しかしアレだな。予想以上にバカっぽいな」

「……わかる?」

「わかるわ、そらわかるっちゅーねん」

などと話していると向こうの方ではさっきの鈴を頭につけたツインテール、たしか明日菜とかいったっけ?あすにゃんと呼ぼう。あすにゃんがネギボーイに詰め寄ってる。ワロスwww

「何故あなたがここに?」

「え?ああ、せつちゃんか」

「……答えによつては」

「答えによつてもお前におにいちゃんをどうこうできる訳なからう？引つ込んでろ」

「べつに何もしないって。してくれって頼むなら話は別だけど」

「クッ！」

「おい、またやってるのか。すまないね、刹那も悪気がある訳じゃないんだ」

「たつみんか。別にいいよ。どうでも」

「そういう事だ。お兄ちゃんには責様ごとき、視界の隅にすら残らない程度の雑魚なんだよ」

「落ち込むなよ、せつちゃん。俺からしたら世界中の人間がそうだからさ。そんな事よりアレ何やってんの？」

視線の先ではあすにゃんと雪広あやか……ゆっきーがつかみ合っている。

「あれは、まあいつもの事です」

せつちゃんもため息をついちゃうくらいいつもの事が。

「はいはい、みんな、時間もおしてるし、授業しますよー。じゃあネギ先生、白波先生、私は高等部があるのでお願いしますね」

しずな先生も流石に飽きたのか、そう言って教室を後にした。

「じゃあネギ先生、俺はサポートに回るから頼んだぞ」

「は、はい！まずは128ページの、の、……の……、届かない」

「その高さでいいんじゃないか？見えないほどじゃない」

「は、はい！あでっ」

座席の方から消しゴムが飛んできたようで、ネギ君の頭にあたった。

「わるいな、あすにゃん。丁度消しゴムが無くなりかけてたんだ。

でもちぎってくれるくらいなら丸ごとくれないか？」

というと下を向いてしまった。いじめがいの無い奴だ。

ひとまず滞りなく授業は終わったが、どうも教え方が良くない。

アレはわかる奴がわかってる事をそのまま言ってるだけで、勉強を教えるとは言いにくいかもしれんね。

知ってる奴が知らない奴に教えるのは大変なんだよ。

まあエヴァには魔法教えたときもバイク教えた時も何にも苦労しなかったけどな。エヴァ天才だし。

ちなみに、他の時間も授業はあったが、どういわけかネギ先生は3-A以外の授業は無いらしい。

じじいに聞いたら、「まだ10歳じゃからのう」と言ってた。

意味わからん。9歳じゃなかったのかよ。

「あ、いたいた！隣さん！」

「おろ？かずみんじゃん。どうしたの？」

「いやあー、驚いたよ。まさかうちの副担任だなんてねえ。いつの間にか教員免許とったのさ」

「前スーパーで会った時にはもう持ってたよ。それにホラ、俺免許大制覇目指してるから」

そう言っつて全欄埋まつてる運転免許証を見せる。

「ハハハ。そう言えば昔も言っつたねえー。っつて、そうそう、この後歓迎会があるんだよ。エヴァちゃんも参加するし、今から行く」

「うむ、良かろう」

「あはは、変わらないねー。っつてアスナとネギ君じゃん。おーい！」

「あれ？朝倉と隣先生？どうしたの？」

「どうしたのっつて……そこまで脳が……ほら、歓迎会！アಂತも買っつてんじゃん」

「ああーそっか！忘れてた」

言っつて、扉を開けると、

「ようこそぞ？ネギ先生！リン先生！」

と、クラッカーの音と共に迎えられた。

「うむ、苦しゅうない」

「ほらほら、主役はまんなか」

「わあー、嬉しいなあ」

「H A N A S E」

「センセ、私からもコレを……」

「うわー！先生たちの銅像！」

「何だソレー！」

「もらっちゃったZE」

「喜んでいただけで何よりですわ」

「よくやったな、雪広あやか」

「エヴァンジェリンさん？何であなたが？」

「タカミチ、向かい側、空いてるな」

「ああ。お疲れ様、どうだった？」

「どうもごうもねえよ。実質ほとんど俺だけが英語教諭じゃねえか」

「まあまあ、お、ネギ君もおつかれさまだったね」

「あ、タカミチと麟先生」

ネギ君か。まあがんばれ。

ん？あすにゃん何やってんだ？

とりあえずシラナミイヤーを……『説明しよう！シラナミイヤーは地獄耳！ちなみにシラナミウイングはない！故に空を飛ばない！』  
といいつつ、実はただの読唇術だったのだ！』

「チャンスよチャンス！！わかってるわね！」

「ハ、ハイ！読心術ですね！」

ここまで言うとタカミチに向き直る。

「ところでタカミチ、アスナさんのことどう思ってる？」

そして読心術を始めやがった。

「ど、どうって、うーん……。毎朝バイトがんばって……すっかりしてるし……」

「ふむふむ……」

「ちょｗｗｗｗｗｗタカミチｗｗｗｗｗｗ」

「しーっ！しーっ！」

「心読まれても動じないクールな男ｗｗｗｗｗｗ」



トトトト「ノーパンって思ってます」

「ブフアツWWWWWW無理WWWWWWもう無理WWWWWW  
WWW離脱WWWWWWエヴァ、行こうぜWWWWWW」

「うん、お兄ちゃん。」

つくづくバカだな、タカミチも小僧もな」

「うーん、手厳しいなあ」

「じゃあ先に帰るわ。みんなはよろしくやっといてくれ」

「えー？もう帰っちゃうのー？」

「まだ仕事が残ってるんだよ。あんまり遅くなるんじゃないぞ」

「はい。さよならー」

「あれ？エヴァにゃんも？」

「当然だろ？私とお兄ちゃんは愛し合ってるんだからな」

教室を後にする。

直後、教室が揺れたが、残念！もういないんだな、コレが。

「朝倉顔見知りだったよね！！」

「ちよ、勘弁してよー」

などと聞こえてくるが、まあいいや。  
こんな教室居られるか！俺は明日の分のプリントを作るぜ！

「ふうー、終わったー。これ初日にやる仕事じゃねえよな。タカミ  
チは何をサボってやがるんだか」

「お疲れ様、お兄ちゃん」

「おお、帰るかー」

「うん！」

「あれ？今日は徒歩？」

「そだね」

「じゃあ茶々丸も先に帰ってるし、タンデムでいいか」

「うん！」

NSR80に二人で跨り、スターターを踏む。  
軽快な滑り出しで回しながら走り出した。

「は、ハクシューン!!」

「きゃ!またかお前はーっ!」

「う、ごめん!」

またネギにやらかされた。

今日は一日散々だったなあ。

高畑先生も担任じゃなくなっちゃっし……。

「なあ、アスナ、アレ」

「ん?何よこのか」

見てみると、物凄い速度で二人乗りのバイクが走ってる。

確かに珍しい光景ではあるけど、わざわざ見るほどの……ん?アレよく見ると……。

「エヴァちゃんと隣せんせーちゃん?」

「言われてみればたしかに……って速っ!」

割と遠くの方から見てたけど、パーン!!とか音を出しながら物凄い速度で横を走っていった。

ってかバイク乗れるんだ……そう言えば40歳だったわ……ってアレ?そうなるってエヴァンジェリンさんって同い年だから14よね?30歳以上の開きがあるの?あの兄妹……。

「まあ、いろいろあるわよね」

「なあ、速かったなー」

「僕の杖でもあれだけは「ってバカ!」「ご、ごめんなさい!」

「どないしたん?」

「なっ、何でもない!!何でもないわよ!」

「んー?」

「このかノーパンとかパイパンとかをあんな目にあわせられるわけないわよね。  
そっと心にしまっておこじ……。 」

028 世界最速と、魔法先生。(後書き)

A H O G A K I

深刻な描写不足です。

初めは3人称視点で書くことと思ってたんですが、どうにもナレーシヨン部分にキャラの心情とか書いてしまいそうになるので、いっそ一人称視点で！と思い立ったのが凶事でしたね。

実際、事実と違うことでも麟が思えばそれが文章上の真実となってしまう訳なんで、多少おかしなこと書いてもいいけんだろ！などとタ力をくくってました。

試しに少し書いてみます。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

日本人形のような少女に見えるだろうか。

薄手の英語の教科書持った、彼女ではなく彼なのだが、白波麟は教卓に立つ同僚を呆れたような目で見ている。

先程も黒板の上のほうまで手が届かない彼に、その高さで充分じゃないかと進言したばかりなのだった。

彼が急に頭を抑えて後ろを振り返った。

それを見た麟は、彼の後ろで物を拾うような動作をした後、口を開く。

「悪いな、あすにゃん。丁度消しゴムが無くなりかけてたんだ。でもちぎってくれるくらいなら丸ごとくれないか？」

見ればその手には消しゴム、その欠片が握られていた。

話に上がったあすにゃんこと神楽坂明日菜も、まさか見られているとは思わなかったのか、気まずそうに顔を伏せている。彼はすこし呆れたように笑い、また教卓を眺めるのであった。

.....

極端すぎましたかね。

毎回1000行越えとかしちやいそうです。  
でも隣も僕もアホなんで、結局

.....

「その高さでいいんじゃないか？見えないほどじゃない」

「は、はい！あでっ」

座席の方から消しゴムが飛んできたようで、ネギ君の頭にあたった。

「わるいな、あすにゃん。丁度消しゴムが無くなりかけてたんだ。でもちぎってくれくらいなら丸ごとくれないか？」

というと下を向いてしまった。いじめがいの無い奴だ。

.....

となつてしまつんです。

こんな壮大な言い訳したのは初めてです。  
すいません、僕の力量不足でした。

もっと鍛え上げます。

では皆様、長くなってしまいました、今回もありがとうございます。

一回言った気もしますが、明日は多分忙しいので更新がどうなるか……。  
なるべく上げれるようにがんばります。

029 世界最速、特に何もしない。(前書き)

見直しもしない。

見直ししなかったが故にみんなチート使って進級してた。

3 - A から 2 - A に修正しました。

ご指摘くださったザンレイさん、ありがとうございます。



029 世界最速、特に何もしない。

み・ん・な・の・白波ー！！

エヴァは俺の嫁、俺はみんなの嫁。白波です。

はい、授業もなんとか滞らず。

ネギ先生は相変わりもせず2-Aの相手ばかりしてる。  
なにこれ。

じじいが「2-Aはネギ君がおるから行かんでも大丈夫じゃよ」  
とか言つてたからピアス穴を1号拡張してやった。

「ひいひいひい、じじい虐待じゃよ」

うるせえ、パワハラじじい。

授業内容に差がでるからテストにも差を出すつてののか？そりゃ学年  
一位にもなるっちゅーねん。

「俺はもう授業だから行くぞ。2-Aのな」

ちなみにネギ先生には、わかるような授業の方法を教えてやったが  
いまいち理解してないみたいだ。天才は人に対して、もの教えるの  
に向いてないな。

「じゃあ今のところ誰に訳してもらおうかなー……」

みんなびっくりするくらいペン回し上達したな。先生、悲しいぞ。そしてネギ先生。はい訳して！でぱっと訳せるような奴に授業は必要ないぞ。

一度もやってない事をやらせようとするんじゃない。

「んーじゃあアスナさん」

ペン回し過ぎてペン先が唸ってたあすにゃんを指名とはいいいセン  
スだ。

「な……何で私に当てるのよっ!？」

フツーは日付とか出席番号で当てるでしょ!」

「でもアスナさん、ア行じゃないですか」

「アスナは名前じゃん!」

「あと感謝の意味も込めて」

「何の感謝よっ!？」

それを雪広あやかことゆつきーが挑発してあとは売り言葉に買い言葉だ。

訳を始め……れてねえー!

ジエイソンさんをなぜ殺した……。

「アスナさんって、英語ダ「おい、ネギ先生?今ならまだ日本語が  
“ダメ”だったって事にして許しておいてやる」

何て言おうとしたのかはわからんが、ちょっとフォローできなさそうな事を言おうとしたので、ひとまず止める。

ネギ先生も、自分が何を言おうとしたのか気づいたようで、少し顔を青くした。

「え?.....あつ、ごつ、ごめんなさい!..!」

「俺じゃないだろ」

「アスナさん、ごめんなさい」

「な、何がよ」

「わかんなくつても謝らなきゃいけないときつてのがあるんだよ...  
...男つてのは、悲しい生き物なんだよ」

「いいんでしょうか?」

ネギ先生が聞いてくる。

何言ってるんだこいつ、年相応のバカだな。

「いいも悪いもねえよ。何でお前は言わなかった」

「そ、そうですね。じゃあ授業を続けます。ここの訳し方は.....」

ちょっとはマシになったかな?

まあ、後で授業をつけてやるか。

「ネギ先生、今日君をここに呼んだのはほかでもない。君にちょっとした授業をつけてやるためだ」

「は……？え、でも僕先生なのに」

「そう言うな。考えあつてのことなんだZE！」

「はあ。では、手元に資料はあるな？今日は、というか今日限りだが、エンジンについてだ」

「はい」

「エンジンの中でも最もメジャーなレシプロエンジンってのがあがあるが、ピストン運動でガソリンを吸気、圧縮、爆発、排気のプロセスを経て回転力を生み出す機構と考えてもらってかまわない」

「はあ……」

「これを二度の回転で賄うのが4ストロークエンジンだ。ではここで問題、この回転を一度で賄うのは何エンジン？」

「え？あ、わ、わかりません……。でもいったい何の関係が？」

「そりゃわからねえわな」

「へ？」

「いや、勘のいいやつならわかるだろうが、これは2ストロークエ

ンジンだ。ちなみに、4stの場合上死点でやることは圧縮と排気。2stの場合は？」

「いえ、その……」

「あれ？わかんない？」

「はい……」

「恥じるな。別にバカにするためにやってるんじゃないぞ？」

ネギ先生は天才だからな。天才は天才なりに苦手な事ってのがあ  
るもんだ。で、天才だったばかりにその苦手なことが何か気づきに  
くい

「はあ」

「ネギ君は賢いけど、正直に言って、中学生ってのはだいたいバカ  
だ」

「そ、そんな……」

「いや、バカだね。間違いなく。いや、14程度のガキがみんな賢  
かったらそれこそ気色悪いが。で、バカだから当然予習なんてして  
こない。だから、さあ訳せ！なんていざ言われても訳せる訳がない。  
当然、俺らがそこまでフォローしてやる謂れは無いかも知れんが、  
まあそこは義務教育だ。一応、やってない事をやらせるのはよくな  
いな。せめてまとめてから訳させるべきだったんだ」

「そ、そうですよね」

「で、ここに一枚のプリントがある。はい」

「あ、どうも」

「それを適当に読んでくれ。……もう読めたか。早いな。キモいで、ローターハウジング内でローターを回転させることによって吸気、圧縮、爆発、排気を行うエンジンだが、こいつの名前は？」

「あ、これかな？ロータリーエンジン、英名はヴァンケルエンジンです」

「ハイ正解！！」

「射命丸ノ、射命丸ノ、射命丸ノ」

と、こんな風にちょっとしたプリントを用意してやるだけで、教科書のみで授業を進めるよりよっぽどわかりやすくなる訳だ」

「はい。僕、間違っていました」

「何、子供は間違って大人になっていくのさ。」

「ロータリーエンジンってすごいんですね！」

「いや、すごいよー！すごいけどさあー！そっじゃないんだよー！」

「え？ええ？」

「あ、いや、もういいわ。ロータリーの凄さがわかっただけで充分だよ」

「へへっ」

勉強はできるけど理解力があげつなく低いな、こいつ。

「だーだーいゝまゝー」

「おかえり、お兄ちゃん」

「おかえりなさいませ、麟様」

「うむ」

エヴァと茶々丸が抱きついてくる。  
お前もか……。

「お疲れだねー」

「ケケケ、ニイサンデモ疲レル事ナンテアルンダナ」

「いや、精神的にな。下手にバカ相手にするより疲れるよ、ありゃ」

「ネギ・スプリングフィールド?……殺す?」

「バカ、そんなん殺さなきゃいけない状況になった時俺が真っ先に殺すっつーの」

「俺ノ分モ残シテオイテクレヨナ。近頃人ヲ殺シタリナイ」

「姉さんったら、麟様とマスターの教育に悪い事を言わないでください」

「茶々丸、お前最近言うようになったな」

「改造と教育のたまものやね」

「はい、皆様のおかげです」

なぜか誇らしげに言うてくる。

「もっとロツクに」

「皆様のおかげだぜ、べいべー（棒）」

「京美人で」

「皆様のおかげさんどす」

「英語で」

「This is an apple」皆様のおかげです」

「俺がお前に教えることは何も無い……グフツ！」

「お兄ちゃん!!」



「麟様！！！」

白波は今日もシェイソンに花の上に落とされる事によって春がきま  
す。

029 世界最速、特に何もしない。(後書き)

英語のえの字もわからない紅の豚野郎です。

第二外国語はヒュムノス語なんです。

職場で書いたため、資料となる原作はありません。

あと、ネギきゅんに対する授業とかかなりいいかげん。

ロータリーへの愛情のみで押し切りました。

RX - 8ほしいよー！

では、今回もありがとうございました。

030 世界最速、出席を取る。(前書き)

中途半端に終わってますが、頭が頭痛で痛い(?)今の僕にできる  
精いっぱいがこれです。

見直しながら、無いんだよ。

030 世界最速、出席を取る。

「要するに、ロータリーエンジンはレシプロエンジンに対して、遙かに優れるわけです！」

「それはどうかと思うぞ。確かに、まったくロスがなければという前提で話すなら4stエンジンの6倍の出力があつて然るべきだが、ロスの大きさと燃費の悪さはロータリーの永久課題だ。確かにRENEISSで重量は従来より10キロも落としたのは大きな成果だが、それでもレシプロの汎用性には敵わない。パワー至上主義者がよく陥る勘違いさ」

「西洋人だからつて米国人と一緒にしないでください。イギリス人は効率主義者なんです」

「どおりで美味くもない飯いつまでも食つてられる訳だ。あんなクソでかいフィンをついた燃費の悪いエンジンに効率もクソもあるかっつもの」

「何ですか？ひよつとして喧嘩売ってるんですか？買いますよ？」

ネギ先生がこうなったのはきつと俺のせいじゃないはず。

白波げんなり。

いや、俺もロータリーは好きだよ。愛してる。でも他のエンジンも同じくらい愛してるんだよ。

それをこのブリティッシュが、「ロータリー以外は大したことないね」とかしたり顔で抜かすもんだから、そりゃ喧嘩腰にもなるっつの。

「ちよ、ネギ君、落ち着いて！麟君もあんまりいじめないでくれよ」

「タカミチもロータリーが一番だっと思うよね！」

「おい、普通に考えて2stエンジンだろ！？」

「え？うーん……僕はリニアモーター機関がいいかな」

一瞬だけ空気が凍った。

「はっエコテロリストが。行きましよう、麟先生」

「ケツ、お前にはがっかりだよ。エコ気取ってエコ押しつけやがって」

「僕が何をしたって言うんだ……」

白くなったタカミチをおいて職員室を出ると、しずな先生に声をかけられた。

「つてかあんたよく見るけど、もう高等部の教師だよな？」

「あら、ネギ先生。学園長先生がこれをあなたにつて」

「ホントですか？どれどれ……えっ！？僕への最終課題！？」

「ねぎ君へ」

次の期末試験で、

二・Aが最下位脱出できたら

正式な先生にしてあげる



「うるせえクスレッドが！てめえ含む5人のクソレンジャーが全員  
の足引っ張ってんだよ！ゴミどもめ！悔しかったら勉強してみろ！  
ってわけで、はいコレ。みんなの分のプリント。せんせー夜なべし  
てがんばっちゃったぞ？」

「あのかわいさは卑怯でござるな」

「ううゝ、あんなに言われたのに許しちゃうアル」

「許す許さねえは俺が決める事なんだよ！いいか、ネギ先生はな、  
このクラスが次のテストも最下位だった場合は「ピー」ちょんぎつ  
て坊主にした上で日本からの永久追放だ！その他、お前らにもえげ  
つないペナルティが待っている」

「くくええゝ!!!??」「くく」

うむ、しつかり驚いてるみたいだ。  
ちなみにネギ先生が一番驚いてる。

「ほ、本当なんですか、麟先生？」

「当たり前だろうが。俺が言えば黒いクラスも白くなるっつーの」

「ひ、ひいゝ」

「せんせー、プリントの上に名前書いてあるよー」

「それぞれのレベルに適したカリキュラムが組んである。これをや  
つときゃケツはない筈だ。わかんないことがちゃんと聞きにくるの

「よっ」

「「「は〜い!」「」」

「うるせえ!小学生か!Fuck you ブチ殺すぞ……ゴミめら……」

「「「ええ〜!?!」「」」

「はーい?提案提案」

「ほい、しーちゃん!」

「椎名桜子でしーちゃんかあ……」。

お題は『英単語野球拳』がーと思いまーすっ!」

「死ね!」

わあ〜!!

じゃねえよ。

どうにも収まらない。

で、何故かネギ先生が魔法を使おうとしたから武力介入しようと思ったら、あすにゃんが止めた。

もう気付かれてんのかよ。仕事速えな、ネギきゅん。



〜つぎのひ〜

「ハア！？行方不明！？」

「は、はい。図書館島に入ったつきり連絡が……」

「何で図書館島に？」

「その……頭がよくなる魔法の本が……」

わあーお！バカ発見www

「ちょっと待ってろ」

「は、ひゃい！ごめんなさい！」

何謝ってんの？

まあいいや、じじいに聞いてみよう。

「おお、白波君。丁度電話をかけようと思ってた所だったんじゃ」

「……」

「実はネギ先生達が図書館島で勉強しておっつ。その間授業を  
お願いしたいんじゃが」

手近な50×50cmくらいの石をつかむ。

「かまわんかの？」

それを学園長室に向かって投げた。

「ああ、いいぜ。ただしそのころにはお前は八つ裂きになってるけどな」

「ほ？何を言ってる……ぎゃあああああ……！」

何だ、電話を切りやがった。まあいいか。

「あわわわわわ……」

「おい、のどつち」

「ひゃわい……！」

何をビビってるんだか。ああ、アレか。怒られるとでも思ったのか。

「教室行くぞ」

「は、はい……！めんなさい……！」

「きにすんなよ」

~~~~~

「せんせー！せんせーが行方不明って！！」

「ど、どどどうしましょう！わたくしはどうしたら！」

「静まれーい！静まれーい！

この紋所が目に・・・静まれーい！

皆の者、静まれっ！静まれっ！静まれーい！

この俺様を誰だと・・・静まれーい！

ええい！静まれっ！静まれーい！

さきのグレイトティーチャー、白波の・・・し、静まれーい！

静まれーい！皆の者、静まれーい！

白波・・・静まれーい！静まれーい！静まれーい！

「で、でも！」

「いろいろあつて来れないと聞いているが何の問題もないな！」

「そ、それでしたら……」

あ、やっぱり納得しちゃうんだ。

「じゃあネギ先生がホントアホみたいにバカ引き連れて合宿行っちゃったんで、出席をとりまーす」

「ア、アホみたいにつて……」

「ネギ先生に向かって何という！！」

「春日にゆっきー、いるのはわかってるから呼ばれる井でじっじとしてね」

「じゃあ一番から点呼な。えーさよっぺ」

『あ、はい…』

「いるな」

「「「ええっ！」「」」

『ええ！？』

あ、お前も驚くんだ。

「ゆづちゃん」

「ゆづちゃんか……ちょっと恥ずかしいな」

「かずみん」

「はいはい！」

「ゆえぴよん……はいねえんだな」

「……ゆえぴよん？」

「あーりん」

「ちょっと恥ずかしいなあ」

「AKIRA」

「何かかつこよく言われた!？」

「ミサミサ」

「はい」

「バ神楽坂あすにゃん、いないつと。

春日エ

「私何かしたつすか!？」

「茶々丸」

「はい、麟様」

「りん……さま?ちょっと、朝倉」

「ハイ来た!これはスクープだよ!！」

そう言つてCameraを取り出す。

そうはい神裂!

「かずみんは後でパパと一緒に呼び出しな」

「何故つ!？」



「しーちゃん」

「はい」ガタタッ

「座ってる。マナっち」

「それは、私のことかな？」

「うん。」

チャオ リン

「切るト」そ「じゃないヨ」

「知ってるわ。」

楓忍法帖もないと。

ちづねえ

「はい」

「双子」

「「はーいつ!」」

「お前ら小学生だろ。」

さとみん

「はい。そう呼ばれるのは初めてです」

「ふはは!」





「うん、……お兄ちゃん」

教室がフットーしそっだよおっ

「すっげえ心に毒だったよ」

「なんだ、ちうたん？羨ましいの？」

「長谷川千雨ならお兄ちゃんとキスしてもかまわんぞ？」

「ちうたんじゃねえ！ってか、べっ、別に羨ましくねえよ！」

「長谷川さん、クールだと思ってたら案外……」

「くうっ……」

ちうたんは机に顔を埋める。

ふははは、無駄よ！！耳まで真っ赤だわ！！

「のどPはいるな」

「ひい！は、はい！いますう！」

「それは何より。」

なつみん

「な、なつみんかあ」

「ゆっきー」

「おりますわ

「さっちゃん

「はい

どうやって喋ってるんだろう。

「X a a a X i . (ザジ)

「

手を上げている。

ちなみに、当然だがこれでザジと読む事はそうそう無い。

そして気になった人は「X a a a C i .」で検索するのもまた一つの道であるだけで。

「よし、じゃあ居ない奴以外は全員いるようなんで、あちらはあちらで勉強してるだろうしこっちもこっちで勉強しておいてくれるわ

「おー!

「とは言っても英語は3時間目だからそれまで貴様らは各自その教科の勉強に励むこと。もしちゃんとしないう奴がいたらそいつの前で俺リストカットするから」

「怖っ！！」

「そして重っ！！」

「じゃあひとまず解散！号令はいらん」

なんかボムボム坂中学を思い出すなあ。

特に1組。

030 世界最速、出席を取る。(後書き)

もうホント、頭痛がえらいことになってとります。

豚野郎です。

今回はいつもより自由な麟くんを書いてみました。

しかし何故ネギがロータリーフリークになってるんだろう……。

私はロータリー大好きですよ。

ちなみに麟はコーヒー派なんでもうひと悶着ありそうですね。

無いかもしれませんが。

これからは薄っぺらい学力の底上げをします。

では今回もありがとうございます。おやすみなさい。

031 世界最速、授業をする。(前書き)

031 ちうたん、焦る。

### 031 世界最速、授業をする。

（3時間目）

昨日渡されたプリントを少しやってみたが、かなりわかりやすくなってる。

要点だけ簡潔に纏められて、所々パソコン用語と関連付けられてるから教科書で勉強するよりまだわかりやすい。

ちなみに、那波のプリントを少し見たけど、何書いてあるのか全くわからなかった。

本当に全員分作ったらしい。

大した気力だよ。

ちなみに、どう見ても小学生の麟先生だが、朝倉に聞いたところ本当に40らしい。

10歳の先生のほうがまだまともに見える。いや、対外的な話で、授業の中は麟先生のほうがかなりわかりやすいし、そういう意味じゃあ本当に40歳かも知れないけど。

あのわかりにくいガキの授業よりよっぽどしつかりやってってくれる。やってってくれる、けど。

今朝私のこと『ちうたん』つつつてたよなああああ！！！

バレてんのか！？ひよつとしてバレてんのかあああああ！？

いや、バレてるわけねえ。『千雨』で『ちう』って読んでるだけだろ。

他の奴らもまともな呼び方されてねえし……。

そうであってくれ！！

クッソーなんでもっとわかりにくいハンドルネームにしなかったんだよ私！！

つて来たか。平常心だ、私。  
二枚の仮面を使い分ける……。クールになれ！

「授業を始めます。号令はいらねえ。俺はテストの問題と回答完全  
に知ってるけどお前らに教える訳にはいかないから頑張つて欲しい。  
お前らにできねえ訳ねえんだから。ちなみに赤点とつちやった奴は  
リストカットな。俺が、目の前で」

「えー、先生教えてくれないのー!？」

「テストの回答教えてよー!」

無駄に重いことを言ってる先生に双子がぶーぶー言ってる。  
バカか。普通に考えて教えるかつつーの。

「Fuck You ぶち殺すぞ……ゴミめら……!」

おまえたちは……。大きく見誤っている……

この世の実体が見えていない

まるで3歳か4歳の幼児のようにこの世を自分中心……

求めれば……。周りが右往左往して世話を焼いてくれる

そんなふうにもまだ考えてやがるんだ 臆面もなく……!

甘えを捨てる お前らの甘え……。その最たるは

今 口々にがなりたてたその質問だ

質問すれば答えが返ってくるのが当たり前か……?

なぜそんなふうを考える……?

バカがつ……!

とんでもない誤解だ 世間というものは とどのつまり

肝心なことは 何一つ答えたりしない

住専問題における大蔵省 銀行

薬害問題における厚生省

連中は 何か肝心なことに答えてきたか……？  
答えちゃいないだろうが……！

これは企業だから 省庁だからってことじゃなく

個人でもそうなのだ 大人は質問に答えたりしない

それが基本だ お前たちはその基本をはきちがえているから

今朽ち果てて 2年の最下位にいるのだ

無論中には 答える大人もいる

しかし それは答える側にとって

都合のいい内容だからそうしているのであって

そんなものを信用するってことは

つまりのせられてるってことだ

なぜそれがわからない……？

なぜ…… そのことに気付かない……？

ざわ……

ざわ……

クツソー！突っ込みてえー！

どんだけ自由なんだよ！

ってか完全にこっち側だろ、あの先生！！

「無駄話はこちらまでだ。泣き言をいう暇があれば勉強しろ。お前ら  
みんなやれば出来るんだから。俺はそんなお前らを愛してる。

じゃあ昨日渡したプリントでも出して。忘れた人は予備の分も刷っ  
てあるから死ぬ。じゃなくて取りに来て。さとみんとちゃおりん、  
ゆっきーは好きなこととして」

「」



「ん？どうした、ザジ」

え？今こいつ何か喋ってたか？  
ってか完全にノーモーションだったよな！？  
あんたはこのピエロから何を感じ取ったんだよ！！

「」

「いや、それは『完全な』で合ってる。ちょwwwウムラウトは  
英語だからいらぬwww」

会話が……成立してる……。

「」

「あ、ホント？じゃあさよっぺといっしょにやっついて。だからド  
イツ語じゃなくてwwwじゃなくてwww」

「ハイ」

しゃ、喋ったあああああ！！！！！！  
どんな内容だったんだ！？

耳打ちとか全然してなかったし表情の変化も全く無かったよな！？  
そこから何を感じ取ったんだ！？  
いいんちよも『あらあら』みたいな顔してやる！？  
何でだよ！？

お前らいつたいピエロの何を知ってるってんだよ！！  
ってかさよっぺって誰なんだよ！！

「あ、そうそう、ちうたん」





何抜こうとしてんのよ。怖いわね！

「返せ！」

「うるせえ！俺を切るより勉強したほうが有意義ってわかんないかな。あんたもウルトラバカ。はいこれ。いらないから返すね」

「覚えていろ！」

何で棒切れ返してあげたら恨み言言われなきゃなんねえんだよ。お前がバカなのは俺のせいじゃないっつもの。

「やっぱやーめた」

は？みたいな顔してやがるな。フヒヒWWW

「お前がクソみたいな点取ったらこのちゃんの前でリストカットしよっと！」

などとニヤニヤしながら言う。

「下衆が……！！」

「じゃ、勉強がんばってね」

「ふん」

あららWWW

「っと、あと10分か……。じゃあ一旦しまつて！。ひとまず小テストなんぞ作ったからコレをやってみようか」  
そう言つてプリントを配る。

「じゃあ適当に初めて！。制限時間は5分。フオイ！」  
困惑しながらも始める一同。そういうとこ、好きよ。

「終わった？じゃあ5分間好きなことしていいよ」  
回収して物凄い速度で採点を始める。  
うん、恐らくは全員多少なりともレベルアップしてるようだ。

「ん？何だよそんなに見て」  
「先生……すっごい仕事速いね……」

「天才だからな。ほい採点終わった。ちなみにこのテスト、4点以下の奴はちよつと死ぬ覚悟しといたほうがいいかな。4点以上の奴は自惚れるな。10点満点だ。じゃあ置いとくから勝手に持つて帰つて。今日の英語はここまで。授業もこれで最後だから勝手に帰つていいよ。号令はいらん。じゃあお疲れ」

ちなみに4点以下はいなかったよ。

031 世界最速、授業をする。(後書き)

テストまであと2日

がんばれみんな!

勉強なんかできなくなっただって何とでもなる!

032 世界最速、勉強会を開く。(前書き)

世界最速、食事会を開いた。  
そんな感じ。

032 世界最速、勉強会を開く。

授業を終えたとし職員室に戻るバツクトウザ白波（直訳：白波に帰る）です。

教室を出たら、ちうたんにつかまった。

「ちよ、先生！」

「あら、どうしたのかしら？」

「カマ言葉に躊躇いがねえな。じゃなくて、い、いつ知りやがった！誰が知ってる！！！」

「ん？なあにが？」

「おや？ちうたんの様子が……」

「おい、B連打しとけwwwまだ進化させる訳にはいかぬう！！」

「うの……ページ」

「え？何？聞こえない」

「ちうのホームページだよお」

「涙目いただきましたーあーりゃっす！  
んでゆえあばほー！！」

殴られちゃった



「クソッ、なんで、うぐ、しつてやがる、うう、言つなよな。ぜっ……、ぜつたいあいつらに、言つなよな……」

「ちょ！マジ泣きもらっっちゃったじえ！落ち着いてちうたん！言わないから！言わないから！」

「ほ、ほんとあか？」

「う・そ？」

「え、う、ふえ……」

「あああいやいや、冗談！ホント！ホントいわなる！ドMの俺にドSのような事をさせようと世界の意思がどつたら」

「や、約束だからな！言ったら、……ひ、ひどいことするからな！」

なんだろう、これは言った方がいいんだろうか。  
ひどいことをされてみたい。

「参考までに聞くけど、そんなひどいことすんの？」

「え？……あ」

「俺のオススメなんだけど、櫛の棒で俺のケツを叩きまわすとかどうっどやさ？」

そういつて木刀（お土産仕様）をポケットから出す。

「……何期待してやがんだよ。……そんなことされたら……ホーム

ページを閉じる」

「どひいひいひい！我ら兄妹の数少ない楽しみがああああ」

「え？ちよつと待て、兄妹つてもしかして……」

その瞬間、ちうたんの後ろにスポットライトが照らされる。

「『福音』とは私の事だ。長谷川千雨」

「なっ！マクダウエル!？」

「私も貴様のホームページは楽しみにしているからな。閉じられるのは困る」

「へ？」

「私もいますよ！」

「あんたは絡繰!？」

ちうたんを中心に正三角形が出来上がった。

「……何だコレ」

「ごめん、ちうたん。俺にもわかんない……」。

「ま、まあ何だ、その、言わねえってんなら、テストもがんばるぞ。ファンの期待には答えてやらないとな」

で、デレた!!

おい茶々丸!

目配せをすると茶々丸の方もまかっていますと言わんばかりにカシヤカシヤ言ってる。

後で焼き増しな。

「お兄ちゃん、にやけてるよ?」

「フヒヒwwwいつもにやけてるさ。そういつエヴァだって」

「ふふふ」

「な、何だこの兄妹……」

「慣れれば快適ですよ」

「お前は何を悟ったんだよ」

「あ、そうそうちうたん」

「ちうたんって呼ぶんじゃないねえ。何だよ」

「明日と明後日、11:00から教室で勉強会するから。自由参加だけど同級生見かけたら声かけて?」

「なんで私が……」

「おねがぁい？」

「クツ、わかつたよ！」

〈勉強会〉

教室に入ると異様な熱気が飛び交っている。  
まさか全員来るとは。

「来てくれたんだな、ちうたん」

「私が言って回ったのに私がないのはおかしいだろ」

「言って回ってくれたんだ。ありがとー？」

「ま、回ってねーよ！」

赤くなっちゃって、かーわいー！

「ネギ先生をクビになどさせませんわ！ 皆さん、しっかり勉強するんですよ！」

「私別に今さら勉強なんかしなくても問題無いネ」

「帰って研究したいんですが」

「だまらっしゃい！私たちは皆さんに勉強を教える役目ですわ！皆さんも、粉骨碎身、ネギ先生のために頑張っていただきますからね！」

「いいんちよ、いつになく燃えてるなあ」

「よし、全員いるな。自由参加なのに元気なこつた！俺が貴様等を見る限り、貴様等、絶対最下位になれるなどと思うなよ！泣いたり笑ったりできなくしてやる！」

「勿論ですわ、麟先生！」

「いい返事だな！ネギが帰ってきたらファックしていいぞ！では新たなプリントだ！わからない事があつたら頼めるか？」

「はい、先生！私と超さんと葉加瀬さん、のどかさんで教えて回りますわ」

「いい返事だ！しかしそれ以外のときはお前らも勉強をしておくといいんじゃないかな。では開始！」

そして俺は席を外すがしばらくしたら戻ってくる！あまり動き回るなよ」

〜一時間後〜

「やっとするかね〜」

「せんせー、お腹すいたー」

「すいたですー」

双子が手を上げて主張してる。

「せんせーそう言うだろうと思っておひるごはん作ってきたんだ。ほれ、みんなの分」

そう言うとメイド服に着替えた茶々丸が台車を押して入ってくる。台車の上にはカポターナ、リゾット、ピザ、スパゲティなどのイタリア料理の定番が！  
しっかり人数分の取り皿まで用意してある徹底っぷりだ！

「わぁー、これ全部先生が!?!」

「当たり前だろ。俺は世界最強だぞ!」

「せんせーすごい!」

「はっはっは。じゃあ焦らずゆっくりと迅速に良く噛んでちゅちゅ時間をかけて食べ」

「先生無茶苦茶ー」

「当然だろ。世界最強だからな!」

いただきまーす！と号令して食事を始める。  
頭を使って腹がへったか。そうかそうか。どうでもいいわ。

とてもおいしいです

「ありがとうございますー ー ^o^ ー さっちゃんにそ  
う言ってもらえるなら白波家は安泰だな」

「いやホント、大したもんネ」

「ええ。うちのシェフにも劣りませんわ」

「ふはは。そうだろう！お兄ちゃんは天才だからな！」

「エヴァちゃん、麟先生大好きだもんね」

「いいなー。私も麟くんみたいなお兄ちゃんいたらなー」

「逆に麟先生の妹になれば……」

「「「それだ！」「」」

「ふん、妹枠はもう私のものだ。貴様らにはやらん」

「えー、エヴァちゃんずるーい！」

「ずるくない。ちなみに今開いてる枠は恋人、親、姉、妻、妾、娘、  
その他妹以外だ。妹はどうあってもやらん」

「まるで俺が甲斐性の塊みたいになっちゃってるじゃないか、エヴ

ア  
」

「でも普通お兄ちゃんとキスなんかしないよね？」

「え？私お父さんとキスするよ？」

「あんただけだよーゆーなー！」

「お父さんがいいなら私は何だって……」

「ぎゃー！ー！」

おいてけぼ麟。

みんな自由に盛り上がってくれてるみたいで何より。  
スローフードは体にいいしな。

「あまり腹いっぱい食いすぎると眠くなるからなー。寝たら死ぬぞ。  
つてか俺が頃す」

「「「「「ちこそーさまでしたー」「」「」

「うむ。ちなみにデザートもある」

「よしきたー！」

「ねえエヴァちゃん、本当に麟せんせーちようだい！」

「ぶっ飛ばすぞー！」

「んおいしー！アイスクリーム？」



「これはジェラートですわね」

「さすがいいんちよ！」

「作り方教えてー！」

「テストが終わってお前らが生き残ってたらまた作ってやるし作り方も教えてやる」

「よっしゃー頑張るぜー！」

「「「おおー！！」「」」

「麟先生」

「何だたつみん」

「あんみつは作れないのかい？」

「日本の食べ物茶々丸の仕事」

「そうか。……うん、うまい」

「じゃあいい時間だから今日はこれまでな。明日も11:00からだ。  
家帰って勉強すればいいが徹夜はするなよ。やるなら早起きしてやれ。いいな」

「「「ありがとうございますー!」「」」

「号令はいらないうって言ったのに!」

走って教室を飛び出した。

ちなみに号令がいらない理由は特に無い。

「お兄ちゃん、お疲れ様」

「まあ好きでやってるんだけどな。ちよつと前まで最下位だったクラスが一位取ってみろよ。笑えるぞwww」

「お兄ちゃんが教えてるんだもん、取れるよ!」

「まあ精々明日も頑張るさ」

「マスター、麟様、夕食の用意ができました」

「うむ、しこ苦勞」

今日はとつてもなんとかかんとか。  
あしたはもっととどうたらこつたら。  
ねっ、バハムート！

032 世界最速、勉強会を開く。(後書き)

— ^ O ^ — < オレンジジュース おいしいです

それは オリーブオイル です > — —

紅の豚野郎です。

今日は洋食に強い麟の話です。

あとちうたんにメキメキフラグを立てたい。

20・21・22日あたりに出かける用事が出来たしまったので恐らくこの三日は更新できないものと思われる。

全国2億人の読んでくださっている皆様には申し訳ない限りです。すいません、調子乗りました。

クオリティなんぞ端から無いようなもんなので更新速度が強みだったのに3日も開けるなんて！あたいのバカ！

では今回もありがとうございました。

033 世界最速、勉強会を終える。(前書き)

第一話「書き間違いがあった、ような……」  
嘘です。

食事会その2

033 世界最速、勉強会を終える。

はいはい、よしこーい。

白波11:00だよ。

ドーンー！

「今日もみんな来てるなー。はいプリント。全教科分あるから。ん  
じゃ昨日と同じ感じで。俺はメシ作ってくる」

あ、手伝います

「ダメ 今は勉強に集中してね。今度また食べに行くから」

はい。あの、頑張ってください！

「お互いな」

言ったらさっさと出て行っちゃった。

私のプリントは15枚ほどだけど、ロボのプリントは50枚ほどある。

どーなてんだ？

……JavaScript?

「麟先生は凄いねー」

「まさか全教科分もプリントを作ってこられるとは……」

「いいんちよちよつと見せてー。わーホントに全員違う内容だ」

マジかよ……麟先生の睡眠時間とかどうなってんだ？

「当然だろ。普段全く努力をしないお兄ちゃんが珍しく努力して作ったんだからな。ありがたく勉強しろよ」

「いや、普段全く努力しないってどうなんだ？」

「努力なんて必要ないほどの天才だからな。私の知る限り、バイクと料理以外に努力したのは教師になることくらいだ」

はあー、いるもんなんだな、天才つてのも。

でもバイクつて何なんだ？

「麟先生つて、せんせーやる前はレーサーだったんだよね」

「うちのお父さんが昔、麟さんがレースやってた時に取材しててね。世界一になった瞬間にレース辞めたつてさ」

思ったよりずっとすげえじゃねえか!?

何で教師なんかやってんだ？

「わあー、かつこいいい!」

「で、その直後教師になるために勉強を始めたんだ。私のためにな

「！」

「わーシスコン！」

マクダウエルのために、なあ……。別に羨ましくなんてないが……いや、少しくらい羨ましいかな。

「ほらほら、始めますわよ」

さて、たまには勉強もしてやるかな。

「おいすー！みんなやつちよるばってん！ってどこの方言やねんな。つつーわけでご飯出来たわよー。」

今日はマズイと評判のイギリス料理の中でも割と美味い部類の代物を用意したから安心して食べて欲しい」

「わーい！」

今日の献立はローストビーフ、ヨークシャープディング、ジャケツトポテト。食後にアッサムの紅茶とトライフルを。

「高級レストランみたいー」

「うなぎゼリーは？」

「死人が出るから作ってない。ってか作りたくない。そんな時間も



無い」

「思ったよりおいしー」

「UKに旅行行ってもがっかりするなよ」

「UK?」

「United Kingdom of Great Britain and Northern Irelandの略でイギリスと呼ばれるのがこれだ。

ちなみに、イギリスという国はイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四国で主に成り立ってる。ネギ先生の祖国、ウェールズは南西の方にある」

「へえー、先生詳しいんだね」

「俺は天才だからな！」

「お兄ちゃんは天才だからな！」

「隣様は天才ですのぞ」

「な、なんとという!!なんとという溢れ出る自信!!」

「これが世界一の風格というのか!?!」

「ありがたやー」

「ありがたがってないでさっさと食べ。アフタヌーンティーも用意してあるぞ」

「これがいいんちよの普段の生活かー」

「イギリス料理なんて、ネギ先生がいらっしやるまで全く食べたことがございませんでしたわ」

「まあ好き好んで食う裕福層はいねえだろうな」

「へえー」

「「「ごちそーさまでしたー」」」

「はい、お粗末さん。今紅茶入れてるからな。はい、デザートにトライフル」

「わー、なにこれー。プリン？」

「ケーキ？」

「まあそんなもんだ。ほら、全員分入ったぞ」

「すごい手際ですね」

「天才だからな。」

落ち着いて飲め。集中力が捗るぞ。ミルクと砂糖は置いてある。

「コーヒーも一応用意してあるから言ってくれば入れる」

「しかしはたしていいんちよの合格点をもらえるレベルの紅茶か！

「？」

「これは……アッサム産の、ファインティップーゴールデンフラワ  
リーオレンジペコーですわね」

「流石はゆつきー、お目が高い……」

「なんかわかんないけどすごそうー！」

「ゆつくりのんどこ……そんなおいしくないー」

「ミルクを入れるとよろしいですわ。しかし麟先生……いったいど  
こでこれを？」

「ひ・み・つ」

「そんなすごいもんなの、いいんちよ？」

「10g6000円、あるいはそれ以上しますわ。それにお金を出  
せば買える類のものでも無い。これをこの人数分用意するとなると  
……」

「じゅ、10グラムろく千円!？」

「ヤバイ薬とかじゃないよね!？」

「満足してもらえれば何よりだ。では30分後より授業を始める。  
それまでゆつくりしとけ」

「はーいー」

俺もタバコ吸いに出るかな。

「っふー」

「なあ先生」

「ん？ちうたんか」

「うわっ、タバコ吸ってんのかよ！」

「大人だから。だいじょび。で、どしたん？」

「いや、どうしてそこまでしてくれんのかと思ってな。普通はしないだろ。他の教師にもバレたらまずいんじゃないかねえか？」

「いやいや、全く。じじいを脅せば済む話だし。それに見てみたいじゃないか。うちにあのクソ気色悪いトロフィー置かれてる景色を」

「そんな事のために？ってか学園長を脅すって……」

「そうそう。そんな事のために。あとはエヴァとかかみんとかちうたんとか、ガキの笑顔見たさか。ちうたん全然笑ってくれないよな」

「私の笑顔は安くないんだよ」

「モニター越しならあんな笑顔なのに」

「っせえ」

「あ、笑った！」

「わ、笑ってねえよ」

「笑いましたしおすしー！俺の脳内に永久保存な」

「ちょ、やめるよ」

「やーめーなーいーｗｗｗｗ」

「クソ、私は戻るからな！」

「やあん、怒らないでよお？」

「アレは40のおっさん、アレは40のおっさん……」

「ひでえｗｗｗｗ」

俺も戻るか。

「よしクソども！明日から実演に入るが、しっかりと休養をとり、明朝より復習すること！徹夜は俺が許さん！貴様等カスどもがやってきた事が無駄じゃないことを証明してみる！全員2 - Aに食券10枚かける！」

「……はい、先生！」

「いい返事だ！貴様等クソどもは明日からのテストによってクソを卒業する！いつぱしの中学生を名乗りたいなら結果を上げる！」

「……はい、先生！」

「じゃ明日がんばってね。りんちゃん応援してるから？  
じゃあ解散！号令はいらん！」

「せんせーさよならー」

「ごはんおいしかったよー」

「テストがんばるね」

「おおそうか、そうしなさい」

「お兄ちゃん、帰ろ」

「おおそうか、そうしなさい」

エヴァと帰りましたが、

茶々丸にもバイクを買ってあげようとおもいました。

033 世界最速、勉強会を終える。(後書き)

「おおそうか、そうしなさい」

マザー2のヒーラーです。

次はいよいよテストですね。わくオラオラしてきたぞ！

では、今回もありがとうございます。

追記

紅茶のことなんて何も知りません。

コーヒーの事なら少しは……知りません。

034 世界最速の妹、拘ねる。(前書き)

本当はテストの結果発表だけで一話出来てたんだけど、完全にアツ  
ブロードした気になってて間違っつて消しちゃったから適当に纏めま  
した。

悔しいです！



034 世界最速の妹、拗ねる。

おはりん。

今日は結果発表だぴよん。

「みんな頑張ったから当日来てなかった8人を除いた平均点が92点だ。やるじゃん。バカレンジャーが多少惨めな点取ろうが1位は確定ですね」

「せんせー、そのバカレンジャーは？」

「ネギ先生もろとも、昇降口のモニターで結果発表待ってるとき。まあ今日の朝礼は自由参加だからな」

「それでも担任の先生が来ないってどうなんだ？」

「ほれほれ、お前らも気になってるだろ。好きに見て来い。じゃあ今日は解散な。おつかれー」

『おおっと、今回はすごい事になってるぞ！これは……第一位！2-A、平均点なんと87.3だあ！！  
万年最下位なのは牙を隠していたのか！！』

おおおおお！！

「100枚賭けてた食券が450枚に！！！！」

「すげえよ、麟先生!!」

「うっ、ぐすっ、やったな!」

「ほらほら、泣くなよ」

「超りん何点だったの?」

「私もハカセも全教科満点ネ」

「お、お二方から後光が!!」

「明日は『学年トップおめでとうパーティー』だね!」

「おー、そりゃいいねえ!」

「俺900枚も食券入ってきたからあした皆で使おうぜ」

「いええええええ!!」

今日は帰ったら和食が食いたいなあ。

「おはよびございます!えーと……長谷川さん!」

ん？

「んー？2-Aでも特に目立たない方の千雨ちゃんまで覚えてるなんて、教師の鑑っ」

「いえ、あの……」

ムカつく。

つてか遅刻でもないのに何元気に走ってるんだ、あいつら。ガキ……。

ん？随分騒がしいな。バイク？

何だアレ、あんなバイク映画でしかみねえぞ……つて麟先生か。髪長えし背低いからすぐ気付くな。

うわっ、でっけえ音……つて、すげえー！

アレ何て言うんだ？後ろタイヤ上げてターンしやがった。たしか、ジャック……何だ？

つてこっち向かって手振ってやがる。

「ちうたーん！乗ってくー？」

「乗ってかねえよ！声かけんな恥ずかしい！」

「あっそう」

そう言やレーザーだったんだな。忘れてたわ。

うわ、前上げっぱなしで走っていきやがった……。

今日も麻帆帆良は非常識だな。

「フオフオフオ、皆にも一応紹介しておこう  
新年度から正式に本校の英語科教員となるネギ・スプリングフィー  
ルド先生じゃ」

なっ………何い~~~~~!!

「そして先月より正式に英語科教員として働いてくれておる白波・  
A・R・麟先生じゃ」

「ベイベイベイ、ベエイベエー……!!」

ベ、ベいベ……

「本日をもって貴様らはウジ虫を卒業する

本日から貴様らは立派な中学生である

姉妹の絆に結ばれる

貴様らのくたばるその日まで

どこにいようと2・Aは貴様らの姉妹だ

多くはエスカレーターで高校へ向かう

ある者は二度と戻らない

だが肝に銘じておけ

2年は進級する

進級するために我々は存在する

だが2 - Aは永遠である

つまり 貴様らも永遠である！」

「Sir, Yes Sir!」「」

なんだよ、この軍曹みたいな挨拶は……。  
で、こいつらも随分ノリがいいな。  
どこで練習したんだ。

「じゃあネギ先生、あとは頼んだ」

「は、はい……」

では2 - Aの皆さん！3年になってからもよろしくおねがいしま  
す！！」

「よろしくー、ネギ先生！」

「ほら、見て見てー！学年トップのトロフィー！」

「みんなみんなネギ先生のおかげだねー！」

んなわきやねえだろ！

全部麟先生ががんばったからだろうが！！

バン！

と、後ろで机を叩く音がした。

……マクダウエル？

「行くぞ、茶々丸」

「はい、マスター」

「エヴァやーい、俺も行くぜー」

「り、麟先生も！？」

ま、そりゃ怒るわな。

私だってけっこうギリギリだったし。

「ど、どしたアルか？」

「ああ、バカレンジャーは知らないんだね。みんながいなかった間に麟先生、全員違う内容で、全教科分のプリントつくって勉強教えてくれてたんだよ。  
で、エヴァちゃんもすごくうれしそうだったし、それにすごいブラコンだからさ……」

「そ、そうだったの……」

「知らないんだから仕方ありませんわ。それに、今こうしてネギ先

生が働けるのも、ネギ先生はもちろん、麟先生のおかげでもあるのですから」

「でもすこし軽率だったよ。今度ちゃんと謝らないと……」

「僕も麟先生にちゃんとお礼言わないと」

「ま、そりゃ怒るわな」

「ちょ、ちよつと長谷川……」

「そのトロフィー、きつとマクダウエルが一番……いや、いい。私も帰るわ」

「長谷川さん！」

ちよつと頭冷やさないとな……。

ん？ありやマクダウエルとロボと麟先生か？

「うう、お兄ちゃんが、一番、グスツ、がんばったの……」

「んなことねえよ。俺は天才だぞ？頑張る必要なんかないんだ」

「麟様、マスター……」

「あいつ等誰のおかげで……グスツ、うう、一番になれたか、わか  
ってない」

「みんな頑張ったから一番になったんだよ。勿論エヴァも茶々丸も  
な。

俺まだ仕事残ってるからもう少し学校居るけど二人で帰れるか？何  
だったら早退するけど」

「ん、大丈夫だよ、お兄ちゃん。茶々丸と帰るから。頑張ってるね」

……まるでデバガメじゃねえか……。

行く……。

エヴァも帰れるって言ってたし、少し心配だけど

「おーい、何葬式みたいになってんだよ。せつかくのナンバーワン  
だぜ？」

「り、麟先生！エヴァちゃんは！？」

「あ？体調悪くなったから帰るってさ。昔から日光に弱くてな」

「そっなんだ……」



「ほら、景気の悪い話はこのまでだ。なんとかパーティーするんだろ？早くいこつずー！」

「いこつずー！」

「そ、その、麟先生！」

「何だ、ネギ先生？」

「その、僕がない間、ありがとございました」

「お前一人のクラスじゃないだろ。気負うな」

「は、はい！」

あークツソー、イライラするぜ！！

何なんだよあのガキはよお！

実際何にもしてないのにいつの間にか担任になってやがるしよー！！

だいたいアイツテストの成績に何にも関係してねえじゃねえか！

その間ずっと麟先生が勉強教えてくれてたつーの。

それが何であのガキのおかげになつてんだよ！！

だいたい10歳の担任って何なんだよ！！

性格はそれなりにまとも……じゃない、外見が10歳程度なのに実年齢40の麟先生も意味わかんねえけどよ！



ガチャ

「失礼しまーす」

「あ、あんた……どうやって!？」

「あ、すみません、鍵が開いてたもので」

鼻歌を鼻ずさんでる白波・of・リンリン・サーフェイサー（下地塗装）です。

機嫌を直したエヴァといっしょにお気に入りのネットアイドル、ちうたん（）のチャットに返信してから打ち上げ？か何かの会場近くまで転移。

「ちよ、ホントやめろよ先生!」

「ん？ちうたんじゃん。何やってんの？野外露出的な？」

みるとフワッフワなバニースーツを着たちうたんがネギを追っかけてる。

「ぶっ飛ばすぞクソガキ!!そうじゃなくてネギ先生にこの格好で連れてかれてるとこなんだよ!おい、メガネ返せよ先生!」

「ふん。まあ止まれ、ネギ先生。そしてそのメガネを置いて頭を後ろ手に組み伏せるんだ。次は懺悔をしる。今までの行いを悔い、来世に期待するんだな。市ね」

「なんだ、麟先生じゃないですか。ちょっと手伝ってくださいよ」

「素無視か。で、何を？」

「千雨さんが、こんなかわいい服着てるのにみなさんの所には行きたくないって。だから一緒に連れて行ってくださいよ」

「それも楽しそうっちゃ楽しそうなんだけどさあ、断る」

「何ですか？せつかくこんなかわいい服着てるのに。みなさんに見てもらえないなんて勿体無いですよ」

「お前勿体無いって言いたいだけだろ、外人。あとネギ先生のそれは、親切じゃねえんだ」

「そんな、親切だなんてつもりは……。僕は千雨さんの事を思って……」

「まあ聞け。例えばな、俺は『人を思いつきり殴るのがとても親切で真摯な挨拶』の国から来たんだよ」

「え？どういっごぼげるめられーッ！」

「ちょー！」

振りかぶらず、本当に弱い力でネギを殴る。

このままッ！！親指を！こいつの！目の中に……………つつこんで！殴りぬけても良かったんだけど、さすがにやり過ぎるのもよくないからね。

やっぱ親切で真摯だわ。

「な、何をするんですか！？痛いじゃないですか！」

涙目でこっちを見てくる。ふひっwwww

「挨拶だよ、挨拶！！ネギ先生のことを思った、親切で真摯な。」

「そ、そんな挨拶なんて聞いたことありません」

「（そりやそうだろ。俺も聞いたことねえよ。）いいか、ネギ先生。お前が良かれと思ってやってる事が全ての人間に対して正しい事だと思ってるのなら、死ぬ。」

じゃなくて、『俺の』親切で真摯な挨拶が、『お前にとっても』親切で真摯だったんなら、俺からは何も言う事はねえ。いや、やっぱあるわ。このDMが！！

そう思わなかったんならな、お前がちうたんにやった事は俺がお前にやった事と同じことなんだよ」

これを聞いたネギがあ！！

こちらを睨みい！！

しかし立ち上がらない！！

「じゃあ、じゃあ隣さんは、千雨さんがみんなと分かり合えなくても、それが千雨さんの幸せだって言うんですか！？」

「えー、そのー、あーごめん、ちょっと何言ってるかわかんないわ」

「ですから！」

「あのな、……幸せって何？」

「え？」

「だから。え？何で？何でみんなといたないと幸せになれないの？てか幸せって何なの？振り向かない事？躊躇わない事？」

「何を言ってるんですか？」

「ちうたんの「ちうたんって呼ぶな」幸せとお前の幸せが一緒だと思っなよ。」

皆を幸せにしてあげるのが僕の幸せですって感じのその態度はホント立派。3SP（白波ポイント）あげる。10SPでうまいBOWが100本だからとっつけよ。

でも、今のお前はまさに『皆を幸せにした気になるのが僕の幸せ』状態なわけだろ？

そうするとき、ホント、『そつとしておいてあげようよ』レベルの偽善のほうが一億倍ありがたいわけよ」

「そんな……僕はそんなつもりじゃ」

「わかってんだよんな事。だからこれから勉強していくんだろつが。間違ったってやりなおせるんだろつが。ホラ、立てよ」

ネギに手を差し出してやる。

そしてその手を掴み立ち上がった。

「麟さん……。はい！じゃあ千雨さんも行きますポリレル又ロロ！  
！！」

「死ね！！！！」

そりゃ殴るだろ。ホント何聞いてたの？

さすが天才は違うわ。超天才の俺にも理解できない。

「おいおい、麟先生……」

「アイツは駄目だわ。すつげえ馬鹿だ。いたよね、昔から。勉強はできるのに最っ高に馬鹿な奴。知識は知性と違う。アイツまさにそれだよ」

「けっこう容赦ねえんだな」

「そりゃな。ネギ先生のクラスではあるけど、俺のクラスでもある。それに生徒ありきの教室だ。誰かが嫌な思いをしなきゃいけないんならそれは俺たち教師がするべきなんだよ。それを10歳だからなんて理由で生徒に押し付けていい道理なんてねえよ」

「ちよつと良いこというじゃねえか」

「深良い〜。気が向いたら着替えて来いよ。着替えなくてもいいけど」

「ま、考えとくよ」

俺はネギ先生を引き摺って行った。

妙にあすにゃんが絡んできてウザい。

お前だってシヨタコンじゃねえか。

「ほらよ、食券大散財じゃあー!!」

「麟先生男前ー!」

「天才だからな!」

「あはは、麟先生かわいいー!」

「あ、千雨ちゃんだ!」

「長谷川さん!」

「……やれやれ」

「白波のココ、開いてますよ」

「あれ? 僕は何を……夢?」

「おお、起きたか、ネギ先生。急に眠ったからどうしようかと思っ  
たよ」

「あ、そうだったんですか? すいません……」

何謝ってんだコイツ。



くいえ！く

「今日ちうたんと話した」

「えー、いいなー」

「じゃあなんとかぱーちー出れば良かったじゃん。そもそもエヴァ学校で話せんじゃん」

「あんなアホガキの群れに飛び込むような真似したくないよ。私はまだあいつ等を許した訳じゃないし。」

それに学校では話しかけられないくないオーラ出てるんだもん」

「そのオーラのせいだつて。じゃあさ、どうせだからこつちに引きずり込めばよくね？認識障害も効いてないみたいだし、シラナミの方が安全だろ」

「なるほど、さすがお兄ちゃん！！天才！大好き！！」

「へっへっへ」

「姉さん姉さん、レスレスに見えなくもないですよ！」

「オマエモ高性能ニナルタビニ、バカッポクナルナ。妹ヨ」

034 世界最速の妹、拘ねる。(後書き)

麟の乗ってたバイクはNSR-80(二人乗り仕様)です。ちうたんはフルカウルのバイクなんてそうそう見ないタイプの子です。

逆にフルカウルのバイクを頻繁に見る女子中学生って何なんだ？

ああ、消しちゃったぜ。紅の豚野郎です。

俺のバカ……。

次回は茶々丸にバイクを買ってあげる話になる！といいなあ。

では、今回もありがとうございました。

035 世界最速の妹の従者、バイクをもらおう。(前書き)

オレンジカウンティチョツパーズで検索だ！

ってか自分で書いておきながら、申し訳ない話、本当に面白くない。  
今回。

035 世界最速の妹の従者、バイクをもらっ。

「no problem .ok .ok .700000\$?」

「H A H A f u k n i c e b i k e . l i g h t ! s e  
e y a」

ブツッ

「お兄ちゃん、誰と話してたの？」

「ああ、バイク屋。茶々丸のバイクが無いだろ？」

「なるほど」

「そんな、申し訳ないです……」

「遠慮しなさんなよ。知れてる値段だつて。ねー」

「ねー」

「ケケケ、仲イイコッタ」

「なんだ、羨ましいのか。仕方ないな」

「オイオイ、ナンダヨ……」

「チャチャゼロにも買ってやるか、バイク」

「良かったですね、姉さん」

「イヤ、別ニイラネ「良かったなチャチャゼロ」ソウダナ御主人。ダカラ俺ノ腕ヲサツサト返シテクレ」

英語だつて何とか話せるしらなみん。

ネギと話す時も他に誰も居なかつたら普通に英語だぜ。

ちなみに、白波姓を持つのはこの世界では俺たちだけらしい。大昔から『白波を名乗るな』という言い伝えがそこかしこに。でも酒の名前にはなつてんだよな。不思議！

「今日は趣向を変えてドライブにでも行くか」

「そうだね、お兄ちゃん」

「ええ、是非行きましょう」

「前の車、左に寄せて止まって下さい」

「kick ass!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「白波君、俺、来年で定年なんだよ……」

「死ぬほどどうでもいいわー!!」

「先輩も年ですからね」

懐かしの警官たちだ。

完全に使い捨てキャラだと思ってたのに……。

「久しぶりだな、貴様ら。相変わらず精を出して、今横通って行った原付、ノーヘルだったぞ」

「君も老けないね。どうなってんだい、この兄妹……そちらは？」

「絡繰茶々丸と申します。お見知りおきを」

「礼儀正しいね。……ロボット？」

「ガイノイドです」

エヴァと茶々丸に棒を渡し、三人でつつく。

「ベリアル!!!痛、ちょ、やめてえ!」

「貴様も変わらん、後輩!」

「私は別に突きたいわけではないのですが……」

「おいおい、そんな所まで相変わらずかい。今日はバイクは？」

「今日はドライブの日だから。山行ってくる」

「ふーん。気をつけてな」



「イタリアかぶれのモトレーサーだって」

「タイヤの細いチョッパーがいいとさ」

「自転車くらい？」

「親父さんの横幅くらい」

「それは細いな」

「おい、何だこれ」

「ターミネーター見た？」

「見てない」

「いかしてるだろ？」

「リックの趣味はわからんな」

「おい、ホイールが届いたぞ」

今までで一番大きいタンクだ。いや、2番目かな？とにかく大きい。これまでに無いタイプのチョッパーを作れっつてさ。フレームの下をくぐらせるタイプだからエンジンとの距離もネックだ

「完璧だ。OCCのエンブレムも入れておこう」



親父さんも重い腰を上げた

「おい、フロントフェンダーをリアにつけるのか？」

「これはリアフェンダーでいいんだよ」

「未来的だな」

「ピッタリだ」

シートにピッタリつくフェンダーの角度に苦勞したよ。でもはまってみれば、これ以外はなかったね

「タイヤはこれでいいのか？」

「メルセデスより太いぞ」

「俺より細いだろ」

「フェンダーの幅が合っていないな」

「それはフロントホイールだよ」

「いいな」

「完成だ」

「かつこいいな」

「色は？」

「機械らしくていいだろ」

「ガンメタリックだ」

「出来ましたか？」

「ああ、リンだな」

「モトレーサー？」

「始めまして」

「見てくれよ。できたてホヤホヤだ」

「これはかつこいいね」

「そうだろ？」

「俺、あんたをテレビで見た事あるぜ」

「黙ってる」

怒られちまった

「じゃあ確かに渡したぜ」

「じゃあな、レーサー」

「はは、ありがとう」

ピッ、とビデオを止める。

「以上だ」

「何でしょう、これ」

「俺がバイクを頼んだときの話が編集されたんだよ。来月には放送されるらしいぞ。アメリカで。で、そのバイクがこれ」

「こんな素晴らしいものをもらっても良いんでしょうか？」

「そのためにお兄ちゃんがアメリカまで行って買ってきたんだから、ありがたくもらっておけ」

「ありがとうございます………ごさいます。大事にします」

「これどこのバイク？」

「Orange County Choppersっていったな。  
ニューヨークにあるバイク工房だ」

「へえー」

「長工ナ」

「ホイールベースが2・5メートルあるからな」

「ちょっとまたがってみろ、茶々丸」

「はい。……どうぞしょう」

「うむ、似合ってるぞ」

久々にやるか。

「チョッパーにのる茶々丸かわいい!」

「えっ」

「困ってチャチャゼロを見ちゃっ茶々丸かわいい!」

「あ、あの」

「思わずあたふたする茶々丸かわいい!」

「は、恥ずかしいです」

「茶々丸かわいい!」

……………

「では少し走ってみますね」

「ああ。行つてらっしゃい」

「はい」

……………

「けっこう速いね」

「馬力はそれほどでもないけどトルクがあるからな。排気量もだいたい1600ccだ。V2なのに」

……………

「どうだ？」

「はい、楽しい……………のでしょうか」

「よしこーい！行こうぜエヴァー！チャチャゼロは茶々丸の前にも座つてろ」



「嬉シソウダナ」

「はい、姉さん」

「じゃあ帰ろつぜー！」

「うんー！」

帰りに瀬流ピコ君に見つかったけど別に怒られなかった。  
怒られるような事してないけどね。

035 世界最速の妹の従者、バイクをもらつ。(後書き)

OCC

1600cc

V型2気筒

120PS / 9500rpm

10.5kgm / 8500rpm

OCCはディスカバリーチャンネルで放送されてる『アメリカンチヨッパー』の舞台となっているバイク工房の名前です。

いつかはほしいですね。

ちなみにステータスは適当です。

作中では書かれてませんが、チャチャゼロにはポケバイを買ってあげました。

30cc

5.0PS / 8000rpm

あまり気に入ってないようです。

今回は特に描写が無かったなあ。

ベリアル

チャンバーやサスペンションなどを作っている。

豚野郎は結構好きです。

では、次回もよろしくお願いします。



036 世界最速、取り持つ。

Y2Kを2000万円で買った……白波です……。  
世界一速いなんて言われたらそりゃ買うだろ。  
走る場所ないけど。

悔しいからGSX1300R隼、通称ブサも買ったぜ。  
ぬっへっへwwwwww速い速いwwwwww

フロント上がりっぱwwww

麻帆良市内を超高速巡回中です。  
法定速度と書いて徐行と読む……！  
うわっほっほい……！

ん？アレは……このちゃんや！

フォーウンフォーウンと近付いて  
ジャックナイフで半回転  
こいつが俺の、ルールだぜ……。

「へいこのちゃん！随分おされして、どないしたん？」

「びっくりしたー。麟先生かあ」

あんまりびっくりしてないように見えるのは仕様なんだろうな。

「木乃香さまー！？」

「どこですかー！」

「黒服？」

「あつ、あかん！ウチ逃げな！」

「乗ってくかい？」

「ええん？乗せてー」

「はいヘルメット」

指輪をヘルメットに変える。俺はもうどこのメーカーのかもわからないシステムメットがぶつてるからいいんだよ。

「おおきに。どっから出したん？」

「バイク用品は常に心の中に。男ってのはそういうもんだぜ」

「そつなんやー」

アホだなあー。

「着物やから跨りにくいと思っけど我慢してな」

「はい」

「出すで。しっかり掴まっときやー」

ゆっくり発進する。

自転車ほどの速度で。  
逆に難しいわ。

「あ、いたぞ！」

「危ないので降りてくださいー！」

「えへ 見つかっちゃったっ？」

「もつと飛ばしてー」

太ももをぺしんぺしんしながら訴えかけてくる。  
そら時速8キロなんかすぐ追いつくわな。

「ええー。仕方ないなー。せーのっ」

パアアアアアアン！！

「ひゃああああ！止めて！止めてー！！」

「え？何？聞こえない」

スロットルを限界まで回して速度を上げていく。  
とはいっても200キロほどしか出さないから運転ミスもなし。見  
通しいいし。

そのまま世界樹前広場まで一気に走っていく。

「ふうーい、おつかねー。このちゃん、ぱんつ丸見えやで」

よっこいと抱え降ろす。  
着物の裾を整える。  
ああ襦袢まではだけて。

「お、おおきに。死ぬかと思ったわー」

「うわああああん！死んじゃやだあああああ！！」

「わ！泣かんといてや。堪忍やで」

「泣いてへん泣いてへん。俺もう40歳やで」

「あ、そーいえばそーやったなあ」

「で、何で逃げてたん？がくえんちよが借金のカタに売ったん？」

「もう、ややわ」

ハンマーで叩かれた。誰にでもやってんのか。  
アルティメットバイオレンスやな。

「そんなんやなくてな。お見合いの写真撮らされるとこやってんけど、途中で逃げてきてもうたんや」

「アーハン。富豪の娘も大変ネ」

「せやる？ウチ、まだ子供やのに、将来のパートナー決めるなんて早すぎやと思わへん？」

「せやな（裏声）」

「こんなおじさんらパートナーにするんやったらウチ、麟先生がパートナーになつてくれたほうがええなあ」

「素敵じゃねーの？でも俺40歳じゃねーの？充分おじさんじゃねーの？」

「そう言えばそうやったなあ。ネギくんもおるからすっかり忘れてもーてたわ」

「あ、ガスの元栓閉めてたっけなあ」

「なあ、麟先生？先生はウチみたいなおじさんは好きじゃない？」

「……？」

俺こんなフラグ立ててたっけ？

つかしーなあ。ちうたんにしかフラグは立ててなかったつもりだったんだけどなあ。

ああ、からかってんのか。からかい返しちやお。

「……お見合いがイヤなんやったら、逃げてきてもええねんぞ？こんな、合つたことも無い奴に取られんのは、悲しいやろ？」

「ちよ、先生？」

よっしや、顔も近づけてみよう。

「なあ、いつでもこのちゃんの事を一番に考えてる奴がおるつてのを忘れんといて欲しいねん。」

どんな事があつても、何があつても、このちゃんを守るつて誓つて

んから」

「そんな、あかんつて。うちら、先生と生徒やで……」

「なあ、せつちゃん」

「ひゃわあ！な、なんで気い付いたん!？」

「せつちゃん!？」

居たのか。

流石だな、公式ストーカー！

「うわ、ホンマにおったんや。言ったら出てくるんちゃうやるか、  
思て言うたら……ホンマに出てきおった。随分なストーキング精神  
やの。」

ほな後は任せたで、せつちゃん?」

「そ、そんな!私も」

「待って、せつちゃん!」

「お嬢様……」

ポテトチップス食いながら見てよう。

「お嬢様なんて呼ばんといて。昔みたいにこのちゃんって呼んでく  
れな嫌や」

「ですがお嬢様、そういう訳にはいきません」

「せつちゃんは……ウチの事嫌いなん？」

ペリポリポリ……

「そんなわけ……」

麟先生、少し静かにしていただけませんか？「へ。すんまへん」  
……そんなわけありません！」

「ほな何でウチのお願い聞いてくれへんの？」

ウチ、ずっとせつちゃんに嫌われた、思て……」

「そんな言い方……ずるいわ……このちゃん」

「せつちゃん……せつちゃん！せつちゃん……」

「このちゃん……うう……」

ポリポリポリ……

梅味にしとけばよかった。

抱き合ってるみたいだけど、どんな野次飛ばせばいいの？

とりあえず口笛ふいと」。

「……キュー、キュー」

しまった！俺、口笛が吹けない！！

「麟先生、ありがとうな。ウチ、せつちゃんと仲直りできたわ」

「私も、その……ありがとうございます」

「おお、未永くお幸せにな。国によっては女同士でも結婚できるみたいよ?」

「そ、そこまではさすがにまだ、その……」

「もう、ややわ先生」

誰?この子にハンマー渡したの。  
つてかハンマー考え付いたの。

「ほなな、せんせ」

「失礼します」

「ああ、じゃあね」

ふうー、と煙を吸い込む。

「でもせつちゃんの子供ならウチ、ちょっとだけ欲しいかもしれへんわ」

「お、お嬢様……」

「このちゃんってよんで!」

「じ、このちゃん……」

「せつちゃん!」



ふうー……っ……

「レスレスじゃのっ……」

036 世界最速、取り持つ。(後書き)

感動系の話なんて書けない豚野郎です。

MTT Y2K タービン スーパーバイク

ターボシャフト型

ロールス・ロイス PIC製250 C18型エンジン

軽油燃料 324ps/5200rpm

ジェット燃料 424ps/5200rpm

58.8kg-m/52,000rpm

5200rpmってなんやねんと。

知る人ぞ知るジェットエンジン搭載バイク。

最高400km/hを超えるキチバイクです。

乗りたくはないけど見てみたいもんだじえ。

スズキ GSX1300Rハヤブサ

1299cc

水冷4ストロークDOHC直列4気筒

175ps/9,800rpm

14.1kg-m/7,000rpm

最高時速312km/h

前後油圧式ディスクブレーキ

鈴菌産乗りやすいリッターバイクの皮をかぶったモンスターマシン。国内で走行可能なバイクの中で一番速いバイクでした。今もそうかな？

街中でも比較的よく見る部類の代物ではないかと。

ちなみに、コレを買った先輩が「今日は160キロ出した」とかいふ死ぬほどどうでもいい自慢をします。

では、今回もありがとうございました。  
ポーナステージ的なものでしょうか。  
いつも通り何も考えずに書いています。

では、今回もありがとうございました。

037 世界最速の妹、魔法先生を虐める。(前書き)

隼の人気にびっくりです。

エヴァは神様じゃないので使徒 使い魔に修正しました。  
ご指摘くださった たまご様、あちがとうござります。

037 世界最速の妹、魔法先生を虐める。

「3年A組！！ネギ先生ーっ？リン先生ーっ？」

「らほーい！みんなお久々！元気にしてたー？」

「「「はーい！」「」「」

「げんきそうで何より。じゃあネギ先生」

「はい！」

改めまして、3年A組の担任になった……」

眠い。春眠暁を眠い。寝ます。リンです。

「あれ？麟先生寝ちゃってる」

「あはは、僕が保健室に連れて行っておきますね。うわ、軽い。では皆さん、身体測定ですので、準備しておいてくださいね」

「「「はーい！」「」「」

よいしょっと……あれ？『魔法の力』？

とにかく保健室で詳しく見てみないと……。

間違いないや。

でも何で？ 僕の他にも魔法を使える人がいる……？

図書館島以外でこんな力を感じたことは無い。……穴？ 噛み傷……  
もしかして！

「ネギ君、麟先生大丈夫なん？」

「あ、はい。すみません。ただの寝不足だと思います。あと僕、今日帰りが遅くなりますので、晩ご飯いりませんから」

「そうなん？」

「ああー！ んっ、っはあー。あら？ 寝てたのか。まあいいや、始業式だけだし」

もう日が暮れ始めてんじゃん。びっくリンリンだわ。

「おはよ、お兄ちゃん」

「おはよございませす、麟様」

「もしかして吸いすぎちゃったかな？」

「いやいやそんなじゃなく、春になったら常に眠いよなあ」

「あはは、そうだねー」

「じゃ、帰るかー」

「血圧高いのかなー。寝て起きたら吸ってもらわないと安定しない。ちよつといい？」

「うん、お兄ちゃん。いくね」

「ばつちこーい」

んっんっ……お兄ちゃんの血……おいしいな。

「待てー！ぼ、僕と同僚に何をするんですかー！  
ラ・ステル マ・スキル マギステル……」

んのクソガキが。いい所で邪魔しおつて。

「氷楯」

「僕の呪文を全部跳ね返した！？」

「ちよ、ネギ先生。放せ」

「当然だろう。ナギにも勝てるんだからその息子に勝てねば笑い話だ」

「な……何者なんですか、あなたはっ！僕と同じ魔法使いのくせに何故こんな事を！？」

めでたいな。世界には正義と悪しかないと思ってるタイプだ。

「ふん、正義が無くとも地球は回るぞ？氷結・武装解除」

「うわぁ！」

「抵抗したか。まあいい……」。

いこ、お兄ちゃん」

「合点承知の助」

合いの手もかわいいなあ。

どうして麟先生が血を？

エヴァさんの言うことなら何でも聞いて……、それにあの常人離れた身体能力……。

もしかして吸血鬼の使い魔！？



「何や、今の音!?!」

「ネギ?」

「明日菜さん、木乃香さん……」

あつ、待て!?!」

「ちよつとネギ!?!」

「僕は大丈夫なんで先に帰っておいてください!」

正義が無くとも地球は回るなんて……世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろつ。

それに『ナギにも勝てる』って、あの人、僕のお父さんの事知ってるのかな……。

「追ってきてるよ、お兄ちゃん」

「マジで?うわ、マジだ。めんどくせ。もう帰ろつぜ。俺空飛んだ事ないんだよな。」

アルシエル(唯一つの偉大なる大地)にタイヤを這わせて生きるために生まれてきたから」

「じゃあ私、久々に運動でもしてみるよ。お兄ちゃんは見えて」

「危なくなったら助けに入るからな」

「多分大丈夫だけど、その時はお願いね」

「MAKASERO！」

「迎えに来たぜ、茶々丸」

「おや、どうしたんですか？」

「エヴァが暴漢に襲われてる」

「またまた、ご冗談を」

「まあおっかけっこしてるのは本当だ。茶々丸も行こうぜ」

「ええ。従者ですからね」

「ん。転移」

「風花 武装解除！」



茶々丸かつこいいじゃん W W W W W W W  
惚れてまうやる W W W W W

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがよい」

偉そうに言ってるけど働くのは茶々丸だけなんだなあ まつを

「新手!? ラ・ステル マ・スキル マギステル …… サギあ  
たっ!」

で、デコピンやあー!  
さぎあたって何のまほー?

「き、君はうちのクラスの!」

「紹介しよう。私のパートナー、出席番号10番“魔法使いの従者”  
”絡繰茶々丸だ。」

パートナーのいないお前では私には勝てん」

「な、パ、パートナーくらいなくなっちゃって!風の精霊……」

「茶々丸。もういい。飽きた」

飽きてる W W W W  
だから帰ろうよって言ったのに W W W W

「すみません、ネギ先生。マスターの命令ですので、恨むならマ  
スターを恨んでください」

「お、おいおい……」

「どうします、マスター？とりあえずこのアホ毛刈りますか？」

最近良いセンスだな、茶々丸。

「うわあ〜ん！誰か助けて〜！！！」

「コラーツ！この変質者どもー！！！」

やべｗｗ

エヴァと茶々丸を退避させて、あすにゃんの着弾点にネギを配置して、「転移」

「ウチの居候に何すんのよー！」

「ちにゃあー！」

おお、滑る滑る！

「ぬべえっ！あべし！うわらばー！」

「つてネギ！？」

「いたたた、明日菜さん！？」

「何だなんだ、愉快的事を行っているじゃないか、神楽坂明日菜？」

「あんたたちうちのクラスの……それに隣先生！？どーゆーことよ！？」

「ふん、どつでもいいわ。お兄ちゃん、茶々丸、帰ろ」

「はい、マスター」

「おつとま」

「あ、ちよつと！……「」8Fよ……？」

こ、怖かったあ

「うっうっ……」

「ネ、ネギー！さっきはごめん。痛かったわよね？」

「い、いえ。大丈夫です。ありがとございます、明日菜さん。助かりました」

「私は別に……ってそうよ。何でエヴァちゃんと茶々丸さんと麟先生が！？」

「は、はい。これは僕の考えなんです……」

・・・

「じゃあエヴァちゃんが吸血鬼で、茶々丸さんがパートナー、で、麟先生がエヴァちゃんにかまれたしと？っていう操り人形になってるってわけ？」

「はい。多分それで間違いないと思います。うう、僕はどうしたら……」

「うーん、ま、悩んでも仕方ないじゃない。そのしとってのにさ、それでも死ぬ訳じゃないんでしょ？」

今日は帰る。あんまり遅くなっても木乃香に心配かけちゃうわよ」

「はい……」

「茶々丸はあのアホ毛刈ってどうするつもりやったん？」

「庭に植えたら玉ねぎが生えるかもしれないと思って……」

「バロツシユｗｗｗｗｗｗｗｗ」

037 世界最速の妹、魔法先生を虐める。(後書き)

明日菜に蹴られたとき「き、きぼぢいい」とネギが言わなかったのは豚野郎の最後の良心です。

ネギの勘違いがおもろげな方向に伸びるといいな。  
ブラックラグーンネタは使いどころが難しいです。

では、今回もありがとうございました。

明日は多分1本しか更新できません。もうしわけございません。  
何とか二本更新できればいいんだけど……。



038 世界最速、キレる。(前書き)

ほんと一瞬だけキレます。  
キレる600代です。

おはりん。趣味は嫌いな奴の家の庭に琵琶を植えることだよ！  
もう予鈴鳴ったんだけどネギ先生職員室にも来てない。

昨日のアホ毛狩りがそんなに怖かったか。

しかしこのクラス、狩れそうなアホ毛がいーち、にー、お、はるな  
っち二本も生えてるじゃん。一粒で二度おいしいな。

「みんなおはよー！」

「アスナ、ネギくん、おはよー！」

「ひい！麟先生！！エヴァンジェリンさんに茶々丸さんも！」

なんだ失礼な奴だな。居て当然ナンダロ、ソウナンダロ。

「あれ？俺ここで泣いたらネギ先生どうなの？」

「とりあえず、理由も無く怖がられた私は泣いていいですよね、  
麟様？」

「大いに困らせ……困らせるため泣いてやれ」

「えーん。えーん（棒）」

「ちょ、何で言い直したのよ！？」「どもった」そんなわけあるかー！  
だいたい、理由も無く、なんてよくも言えたもんね！」

「え？何かしたっけ、俺ら」

「ううん、何もしてないよね、お兄ちゃん」

「私のログには何もありませんね」

してても言えないよなあ W W W

オコジヨは嫌だもんなあ W W W

「いけしゃあしゃあと！昨日まほ……」

「だ、ダメですよ、アスナさん！」

い、言うのかと思った。

驚きのバカさ加減だな。

「あ、そっか。とにかく、昨日の事、忘れたわけじゃないからね！」

「アスナさん。麟先生は使い魔なんだから、本当に何も覚えてない  
かもしれませんよ？」

そんな教室で堂々と……あこがれるやん。

「はあ……」

「ネギ先生、授業」

「はっはい！ごめんなさい！えーと、このhazardousですが、これには“冒険的な”の他に“危険な”といった意味もあり、と、とても危険なのでその、吸血鬼には気をつけ……」

「ネギ先生？」

「ひーは、はいいいいい！！」

「保健室で休んでおけ。体調でも悪いんじゃないか？」

「は、はい。そうします……」

「ちよつと大丈夫？付いていくわよ？」

「ネギ先生は大丈夫じゃないかもしれないけどあすにゃんの成績も大概大丈夫じゃないからあこりん行ってあげて」

「ええよー」

「ちよ、私は大丈夫だから！」

「もう何だったらヴァッカレンジヤイ以外全員ついてってあげてもよかばい。でも5db以上の声出したら焼き土下座な」

「ひいー！」

「つーわけで授業を引き継ぎます。ここの意識は、

『ボブ：前にジョンが勢いよくモニターを殴ったら画面の中のやる

夫が血を吐いたんだよ！

ユミ：それは本当？ガンドルフィーニ先生！』

となる。このポイントは、私には黒人がみんな同じ顔に見える！  
というユミの悲痛な叫びが聞こえるかどうかだ。

俺には全く聞こえん」

.....

.....

.....

...

「もう終了五分前だな。先生は五分前行動が基本だからもう終わるわ。  
でも5分前に授業始めると思ったら大間違いだからな。じゃああば  
よ！また放課後！」

.....

ん？侵入者か？

ま、どうでもいいか。

「どーした、エヴァ？」

「大したことじゃないよ、お兄ちゃん」

うん。大したことじゃない。

お兄ちゃんさえいれば世は太平だ。

- - - - -

翌日！

「なア〜に落ち込んでんだよ？相談に乗るぜ、兄貴！！」

落ち込んでたらカモ君が声をかけてくれた。

やっぱり優しいな。カモ君は。

「カモ君……。実はうちのクラスに問題児が……」

「や八っ！刻みネギ先生！さわやか&クールな朝だね！」

「先生がボイコットなんて笑えん話の二度目はいらんど？」

「おはようございます。玉ねぎは生えないそうですね」

「くっ……！！！」

「おっと、勝ち目はあるのか？今後関わらないのが身のためだと思うがな？」

「それにここは学校だ。そんなあっさりと杖を抜くのに賛成できぬうー！」

麟先生一家だ！

思わず杖に手をかけたけど、確かにここじゃ被害が大きくなりすぎる。

それにエヴァンジェリンさんの言ったとおり、とても勝てるとは思えない。

「己の無力を嘆き、恥じ、修練を積むが良い。されどお前が私達に勝つことは無いがな。」

と、マスターが言っています」

「いや、言っていない」

くっ！バカにして！！

僕だって、ぼくだって！！

う、ううう……

「うわああーん！！！」

「ネギー！」

「何をやっとなるんじゃ、アイツら。」

確実に茶々丸の発言がトドメだったな」

「マスターの意思を代弁したまでです」

「思つたらん。それにしてもあのオコジヨ……」

「尻愛？」

「昨日侵入者があつただけど、きつとあのオコジヨだよ。まあどうでもいいかと思ってほつといたんだ」

「そうだな。どうでもいいな」

「ええ」

ネズミは満場一致でどうでもいい判決が下された。

くほう かご

「麟様、マスター、猫に餌をやりに行きます」

「む、そうか」

「俺も行くー！」

キティに餌付けしてた頃を思い出しながら猫に餌を押し付けたい。

「お兄ちゃんも行くの！？ああ、でも今日はお兄ちゃんがレースに



出たときの映像がDVDで発売されるから……っうゝ」

「9枚でいい」

「わかった！行ってくるね」

「おゆうはんまでには帰るのよー」

「麟様、普通に考えてわたし達のほうが遅くなります」

「ですよねー」

「お気をつけて、マスター」

「うえーん！うえーん！」

「ハアハア、お、おじょうたん、ど、どうしたんだい？」

「あたしのふーせん！あたしのふーせんー！」

風船が木にひっかかっているようだ。

バシユツ！と茶々丸の背中からジェット噴射機みたいなのが出てきてそらに飛び上がった。

ゴチンと桜の枝に頭をぶつけながら風船を取って、それを幼女に渡す。

「わー？お姉ちゃん、ありがとー！」

「いいってことよ」

「あなたは違うもん」

「へえあ」

「バイバイ？」

「あ！茶々丸だー！」

「リンもいるぜー！」

「ハイ、クソガキども！なんかのキノコと百円やるから帰れ」  
「ヤロー！」

「あははー！」

「空飛んでよ！」

クソガキがウザイ。  
シヨタ需要とかねえんだよ。

あれは……

「ばあさん、乗りなよ」

俺の広大な背中に、歩道橋を登ってたばあさんが乗る権利をやるう。

「あらあら、ありがとうね。でもお嬢ちゃんにはちょっと厳しいかな」

「隣様、私が」

ああ、俺小さいんだった。  
別に忘れてなかったけど。

「茶々丸がまた良いコトしてるぞー！」

「リン情けねー」

「お前も蠟人形にしてやるつかあー!!」

デندنデーデーデーデンデンデンデンデーデー

「わー!!」

「逃げろー!!」

「いつもありがとうございます、茶々丸さん」

「いいってことか」

「お嬢ちゃんもありがとうね。これあげる」

「わーいわーいありがとうおばあちゃん大好き」

腹筋はもらえなかったけど酢昆布をもらった。  
イヤッホオオオオウ!!

ん？橋が騒がしいな。

「警察に連絡を……」

「仔猫がドブ川の真ん中に……」

ダンボールにインしたリトルキャッツがリバーを流されている。

「マズイ、茶々丸！コレを使え!!」

つ　　金魚すくいのアレ

バサンバサンと川の中に入ってダンボールごと仔猫を救出してきた。

金魚すくいのアレはもう指輪に戻したよ。  
無視されたもん。

「麟様、教会の横で待ってますので猫缶をそのコンビニで買って  
きてください」

「……はい」

パシらされるんだ、俺、一番偉いんだぜ？

猫缶を買ってさっさと行こう。

フンフラーラー太巻きララー

あれはネギ？

それにあすにやんと、  
に茶々丸……。

まさか尾けられていたとは……油断しました。  
なんとか麟様が戻られるまでに勝たないと、二人があぶない。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

追尾型魔法・至近弾多数 避けられない。

「マスター、麟様……」

「呼んだな？」

「麟様!？」

もう当たる、と思った時には、麟様が前に立ちふさがって全弾受け止めてしまいました。

「嘘っ！」

「麟先生!？」

皆さんも驚いているようです。

私に、麟様が止められるでしょうか。

「今、何してた？」

「いえ、あの……」

「俺以外のシラナミに対して、何してた？」

「し、シラナミだって!？」

あのオコジヨはシラナミについて聞いたことがあるそうです。ならばもう、何をやっても無駄ということはわかるでしょう。

私も一度しか聞いたことがありません。

麟様を倒すためにマスターを人質にとろうとした者の末路は……。

「プラクテ ビギ・ナル……」

「詠唱!？」

「魔法使いだっただの!？」

「麟様!おやめください!！」

「魔法の射手 連弾・光の30011矢」

私の声は届きませんでした。

麟様の魔法は突き出した手の先から、最早光とっていいのかもわからないほどの力の壁が絶え間なくネギ先生達を貫いています。

恐らくもう、原型も残っていないでしょう。

ネギ先生たちの後ろにある教会の分棟が、跡形も無く削れ飛んだのですから。

「ぐう、ガハツ……」

「な……何者よ……アンタ……」

麟様の魔法の後、後ろにあった建築物は軒並み円形に抉れ、地面は10メートルほど削れていました。その底に生きている二人が確認されます。

神楽坂さんは欠損無し、その後ろにいたネギ先生は、左手の肘から先が無くなって、二人とも体のいたる所に擦り傷や打撲痕がありません。

杖とオコジヨは無事でした。おそらく神楽坂さんは魔法無効化の持ち主なのでしょう。

「シラナミ」

「うっ……なぜ……あなたは操られてただけだったんじゃないかな……」

「ネギ！あんた手が！！ネギ！ネギ！！」

「ま、待ってくれ……アンタ、リン・シラナミだろ？」

今回このロボの嬢ちゃんに攻撃をするようけしかけたのは俺っぢだ

……。

俺っぢはどうなったってかまわねえ。だから二人を見逃してくれ！

頼む！！」

「麟様。私にも異常はありません。ですから、どうかおやめください！！」

その時、麟様の影からマスターと高畑先生が転移してきました。

「マスター！麟様を止めてください！！」

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

「ネギ君！アスナ君！！」

「エヴァか。いや、こいつらが俺の不在に茶々丸を攻撃してたからな。シラナミを甘く見たツケを払わせてやってるところだ」

「そうだったの。茶々丸、調子は？」

「問題ありません。ですから、もうおやめください、麟様」

「僕からも頼む。気が済まないようなら僕も殺してもらってかまわないからどうか二人は……」

「そんな！高畑先生！！」

「黙っててくれ、姐さん！！」



オコジヨと高畑先生が麟様に土下座し、アスナさんは気絶したネギ先生を抱きかかえて泣いています。

「何だよ。俺が悪者かよ」

「そのへんにしておいてあげたら？お兄ちゃん」

「ああーもう、しゃーねえな。次やったら日本とその周り半径1万キロごと沈めるんだからねっ  
ほら、ネギ先生こっちよこせ」

マスターの言うことにはやけにあっさりなんですな。  
少し悔しいです。

「誰があんななんかの言う事なんて信用するもんですか！」

よこせと言われたアスナさんはネギ先生を強く抱きかかえています。  
もうこの実力差なんですから、あっさり渡してしまえばいいのに。

「じゃあ一生引っ付いてろ、クソボケ。“治癒”」

麟様が治癒魔法をかけて二人を治療する。

ネギ先生の腕もみるみる回復し、千切れ飛んでいたアホ毛も生えてきました。無限アホ毛ですね。

アスナさんも、治癒魔法は無効化しないのか、体中の怪我の痕が消えています。

「何で……直してくれるのよ……」

「そりゃエヴァに許してあげてえ？つて頼まれたし、シラナミに何かしてこない限りはお前みたいなヴァカでも生徒だからな」

「麟君……すまない。ありがとう……」

「俺つちからも、もう二度とアンタには逆らわないよう、二人にはちゃんとやっておきませぬ」

「きにすんなタカミチ。事後処理はまかせた！」バリバリ！

「そしてネズミよ。別に俺に何をしてくるのかもかまわないし、何とも思わないが、俺以外のシラナミに手を上げる時は、世界で最も残酷な自殺をしたい時だけだって、ちゃんといつとくんだぞ」

「そういえばアンタ、そういう人らしいっすね。お任せくださいませ」

「どうやら麟様も落ち着いてくれたようです。」

「じゃあ帰ろうぜ。今日メシどうする？超包子行く？」

「そつだね、お兄ちゃん！」

キヤツキヤツと二人でいちゃつきながら歩いて先に行ってしまうした。

私も行くとしましょう。

「では神楽坂明日菜さん、ネギ先生によろしくとお伝えください。

お待ちください！マスター、麟様！」

俺っち生きてる！？生きてるよな！！

こ……怖かったぁー……。

「すごい魔力反応があったから来てみたら……。まさか、結界内部で相当押さえられてるだろうに、あれほどの被害が出る魔法を使うなんて。」

二人とも無事かい？それに君は……。」

「ああ、オコジヨ妖精のアルベル・カモミールっす」

「高畑先生！麟先生はいつたい？」

「ああ、それについてはネギ君が起きてから話そう。アルベル君も何か知ってるみたいだし、ね。」

ああ、もしもし、学園長。ええ。麟君でした。教会前の人払いと修復をお願いします。

はい。死人は出てません。それでは。

ああ、すまないね。じゃあ行こうか」

知ってるつつつても御伽噺レベルのことぐらいしか知らねえんだけどなあ。

038 世界最速、キレる。(後書き)

なんか取り返しのつかない事をしちゃった気がします。

紅の豚野郎です。

30011矢って何やねん……。

一発適当に撃つても半径20mだから……

何本も同じところを通過していったってことにしてください。

前方に半径50mほど。

ちなみにこの後もう一話続く予定です。

恐らく短めで。

今日中によげないと次上げれるのが早くて22日、遅くても23日

……。

ドキがムネムネします。

では今回もありがとございました。

039 世界最速、仲直り(?)する。(前書き)

みんなで行った、千葉！滋賀！佐賀！

「まずは君達の考えと事実の差異の調整からだ。君達は麟先生の事をどういう風に思ってる?」

ネギの兄貴は、その後すぐに目が覚めた。なにがあったかは覚えていないらしい。

姐さんともども、痛みは全く残っていないし体調も全く悪くないらしい。

「麟先生は、いい先生だよ。僕達が図書館島に行っている間もみんなに勉強を教えてくれていたみたいで」

「うん、そうだね。麟君とネギ君、二人の力で前の期末試験は学年一位だった」

「エヴァちゃんとすっごい仲がいいって聞きました。教室で、その、キス……とか、するくらい」

姐さんも乙女だねえ。

ってか何をやってんだ、あの兄妹。

「はは……何をやってるんだ、麟君……」

「あと、たまに怒られます。最初の授業のとき、アスナさんにひどい事を言いそうになった時も怒られました」

「あんだ前もそれ言ってたわね。いったい何を言いそうになったのよ?」

「いえ、それは……」

「お・し・え・な・さ・い・よ!」

「ひいひい!」

姐さんが兄貴の頭を拳で挟んでグリグリやってる。  
あれ痛えんだよなあ。

「ははは、アスナ君、その辺で勘弁してやってくれないかな?」

「あつ、その……はい……」

はぁーん、なるほど。アスナの姐さんはこの高畑先生にラブっすねえ。

「ここまで話だと隣君は、まあちょっと不思議だけどいい先生だ」

「うん。普段からずっと助けられてるよ」

「でもあんな魔法使って、私達に、ネギにあんなひどいことしたんですよ!」

それはちよつと暴論だぜ、姐さん。まあけしかけた俺が言うことじやねえけどな。

「じゃあその前はどつだった?」

「その前?」

「麟先生が僕らに向かって魔法を使った時の前？」

兄貴も思い出したのか、震えてる。そりゃそうだ。30011矢なんて聞いた事もねえ。

普通の魔法使いなら一年分魔力を溜めれたとしても撃てる量じゃねえからな。

「そうだ。それまでに、麟君を怒らせるような事をしたんじゃないか？」

彼はたしかにやりすぎる事もあるし、人殺しに対しても何も思っていない。事実、彼が殺してきた人の数は裕に10万人を超すとも言われている」

「そんな……」

「とんでもない極悪人じゃないですか!!」

「そうだ。でも、“ある事”をされない限りは絶対に理由無くあんな怒ったりしないんだ。

ただ、その“ある事”をやってしまったえば、男も女も、大人も子供も、村でも国でもあっさり殺してしまう」

「そうだ、僕は麟先生がいない間に、茶々丸さんに……」

「それに麟先生が操られてないんだったら私たち、とんでもない事しちゃったんじゃない……」

二人とも何かに気付いたみたいになつた顔をした。  
なんだか居心地が悪くなつてきたぜ……。



「きつとそれだね。出席番号10番、絡繰茶々丸、本名は、絡繰・S・茶々丸。このSはシラナミの事なんだ」

「そういえば、さつきも言ってたわね、あんた。シラナミがどうとかって。白波って麟先生の苗字じゃないの？」

「ああ、俺っちも御伽噺くらいの話でしか知らないんだけどな。シラナミを名乗る者には、絶対に何があっても手を出しちゃいけない。」

もし手を出したら『邪神、リン・シラナミ』に殺されるって話だ。本国でも、いくつもの国が潰されたことがあったらしいが、その邪神一人の仕業だってな。

やけに生々しい話だったから今でも覚えてたが」

「な、何よそれ……」

「でもあれだけの魔法が使えるなら、本当に国のひとつやふたつくらいは……」

「カモ君が言った事は本当だよ。」

正確には数百年前に本国でつけられた二つ名が『邪神』なんだ。かつて2億の賞金首だったんだよ、彼は」

「あれ？でもエヴァちゃんが6億円ですよ？じゃあ麟先生は確かに多いけど……」

「ドルなんだね、タカミチ」

「ああ。2億ドルの元賞金首だ」

「え？に、2億ドルって事は、いちじゅーひやくせん……20億円！？」

「……………」

「……………」

「え？え？何よ！？」

「……………200億円だぜ、姉御」

「……………続けてください。グスッ」

泣くほどの事かよ……………」

「そんな彼だが、確かに行き過ぎた所もあるけど、それは全て自衛、というかエヴァを守るためだったんだ。

大昔、エヴァは吸血鬼ってだけの理由で迫害されててね。麟君は、立ち向かうのもバカらしくなるくらい強ければ家族に何かされる事は無いだろうと思って、敵対する人や組織や国を潰していったんだ。中にはよくわからないコントをされた国もあつたらしいが」

「そうだった……………んですか」

「僕はなんてひどいことを……………」

「まあ、だからといってあそこまでの事はなかったと思うけど、この世の中に彼より強い人間なんていないだろうからね。謝るときは誠心誠意謝るしかないんだよ。主にエヴァにね。さあ、着いたよ」

なんて読むんだ？  
ちようほうし？

「え？」

「じじって……」

「あれ？さっきぶりじゃん。ココ空いてんじえ」

超包子でシューマイ的なものを貪りながら話をしている。  
エヴァは桂花陳酒をロックで飲んでいるが、俺はえげつなく酒が弱いからファントムグレープ味を飲んでる。

「DVD6枚しか残ってなかったんだ」

「また買いに行けばいいじゃん」

「帰ったら見ましようね、マスター、麟様」

何の話ですか？

「お兄ちゃんが優勝した時のレースのDVDが出たんだよ」

そうなんですか。私も見てみますね。あ、DVDプレイヤーがありませんでした

「じゃあ買ってあげるぜよ。レーザーやってたリンちゃんもよろしく」

「私もビデオでしか見た事が無いので楽しみです」

「あのお兄ちゃんはホントにかっこよかったなあ。普段が一番かわいいのにその上一番かっこいいなんて凄すぎるよ」

「ふはは、当然であろう」

「「んーちゅっ」」

「何だ茶々丸、そんなじつと見て」

「混ぜてほしいんだよ。なあ、茶々丸？」

「い、いえ、私はそんなむっ！……っはあ……うう、二人ともえっちです……」

わ、私は何も見てませんよ

「ふうははあ」

「え？」

「……」

後ろから声が聞こえたもんだから振り返ってみるとさっきの面子がいた。

「あれ？さっきぶりじゃん。」「空いてんじえ」

「ん？貴様らか。もうバカな気は起こすなよ」

どつぞ。開いてますよ

「ああ、邪魔するよ。さっきは悪かったね」

「どつぞでもいいわこのヒゲメガネ野郎」

「「え、ええー！？」」

「何だ？さつさと座れ」

「よし、今日はリンちゃんみんなの分おごっちゃつぞー」

「あ、あの、麟先生、さっきはすいませんでした」

「チッ」

舌打ちしてネギの頭を軽く殴る。

「あでっ！」

「俺じゃねえだろ」

「あつ！茶々丸さん、さつきはすいませんでした！」

「わたしも、ごめんね、茶々丸さん」

「いえ、かまいませんよ。ところでそのアホ毛、肉体の一部だったりするんですか？」

「い、いえ……普通の髪ですが」

「そうですか。はーん……はぁーん」

最近茶々丸がやるようになってきて嬉しい限りだ。

「ああそつだ、坊や」

「ぼ、僕ですか？」

「お前なんぞ坊やで充分だ。ナギの情報を知りたがってただろう？」

「な、何か知ってるんで……」

「ああ、さつちゃん、僕もエヴァと同じのを」

はい、餃子と炒飯と桂花陳酒ですね

「シューマイあるヨ、高畑先生」

「ええいめんどくさい！メニューにある食いもん片っ端からもってこい！」

「あはは、ごちそうになるよ、麟君」

「金は投げ捨てるもの……。というのは嘘だ。まあ持ってるから好きにやっちゃってよ。」

ほら、ネギ先生も。もういいつつってんだからいつまでもいじけてんじゃねえ！ゲロカス野郎が！さっさと食べ」

「ええ！？いえ、父さんの話が……」

「別に話は逃げん。お兄ちゃんが勧めてるのに食べんと言っのか？ 貴様もだ、神楽坂明日菜」

「え？あ。いただきます」

「おいしい！これほんとにおいしいですよ！！四葉さん、お料理の天才ですねー」

「相変わらずおいしいわね」

いえ……。まだまだ勉強中ですよ。中華以外は麟先生に全く敵いません

「麟先生も料理の天才だったんですか！？」

「料理は秀才だ。そう何でも天才だったら他の奴らがかわいそうだろうが」

他はだいたい天才だけど。

「はぁー、すごいんですねー」

「俺は」「お兄ちゃんは」「麟様は」「」「天才なんで」「」

「すごい息の合いつぶりだなあ」

「愛の成せる技だな」

「で、貴様の父親、ナギ・「サスペンション」フィールドについてだが……」

「ちょ、ちょっとまってください、今おかしなことになってませんでしたか!？」

すんまそんｗｗｗｗ

「気のせいだ。で、奴は10年ほど前に死んだ。その先は知らん」

「え?で、でも父さんに呪いをかけられたんですよね?タカミチに聞いた話だと……」

「こんなもんいつでも解ける。お兄ちゃんが教師をやめる時が、私が生徒をやめる時だ」



「制服エヴァの写真コレクションもここ15年でアルバム150冊分になったしな」

「ちなみに鏡にも映れるぞ」

「へえ……じゃなくて、僕父さんに会った事があるんです。その時にこの杖をもらって……。だからきつと、父さんは生きています！」

「はあくん、どうでもいいわ」

「ひどっ！ちよつと麟先生！それはひどいんじゃない!？」

「だってどうでもいいもの。ああ、そう言えば京都にあいつの隠れ家があったな。うちのクラスの忍者なみに忍んでない忍び家だけどねっ。ちなみに俺の書いたノートが50冊ほど貯蔵されてる。っつかいらなから押し付けたわ。

次の修学旅行先も京都だし、自由行動の時にでも行ったらいいんじゃないかね。何か手がかりが無いかもしれん」

ちなみにノートのタイトルは『ぼくのかんがえたさいそくのバイク』だ。

男の子なら誰でもやるよな！

え？やらない？うそおーん!？

「そつ、そうなんですか!？あの日本の有名な!？ああ、楽しみだなあ」

久々に外人だな、こいつ。

「ちなみに、しらがネギ先生は日本に来る前は日本の街ってどこ知ってた？」

「それはもう、日本の三大都市、京都、奈良、アキハバラの名前はよく聞いてましたね」

「いかにも外人らしい偏向放送だ!!」

京都、奈良、キヨナラ

ってフラッシュが学生達に大人気らしい。

誤字とかあったらごめんなさい。

では明日から(っ)ってかもう今日だけ(三日間鳥取に行ってくるの  
で更新できませぬ。

くやしいのう、くやしいのう。

僕、海がものすごい嫌いなんですよ。

肌はべたつくし機械は錆びるし喉は痛めるしで。

でも友人と行ったら一番引かれるほど楽しんでます。

ちなみに、別に海に行くわけではありません。

奈良県民らしく山へばりついて生きたいです。

そんなことより、次回から修学旅行の準備回とか修学旅行回とかで  
すね。

懐かしいなあ、中学の修学旅行。

と言いつつも、修学旅行先は東京でした。

マッキーミウスの楽園とか行きましたね。ホントは京都に行きたか  
ったんです。いえ、いつでも行けますが。

では、今回もありがとうございます。

040 世界最速、バカ笑う。(前書き)

私は帰ってきた!!

今回の話はホント読まなくても大丈夫です。

素の自分のテンションで書いてるので意味わからない代物になるはずですよ。

そんな事より、ホントにアルポータル終わっちゃうんですね。

私のトウコウは結局一回しか採用されませんでした……。

精進不足ですね。

040 世界最速、バカ笑う。

おひさ白波。

昨日はあの後、結局12時くらいまで騒いでからかえりました。何ですにゃんに『あんた』とか呼ばれなきゃなんないんだよ。

で、もう眠いからすぐ寝てたら危うく遅刻する所だった。

毎日出発の2時間前には起きて準備するもんだから、あと一時間15分しかないとわかった瞬間、エヴァの別荘に勢い良く逃げ込んだの。

「一日も時間できちゃった。もうひと眠りしようぜ、エヴァ」

「う、こんな朝早くから？でもいいよ、お兄ちゃんなら……」

「うるせえ、俺は眠いんだよ！おやすみー」

「うん、おやすみー！」

「OHAYOOOOOO!!」

「おはようございます、隣様」

「うむ。何時間寝ておった？」



とか、正式書類なのに話し言葉で書かれたクソ以下の紙の裏に

『ああ、こんなにお断りしたい気持ちになったのは初めてです。死ね』

と殴り書いて油污れのついた茶封筒に丸めて入れ、ガムテープで封をしたものにロイヤルミルクティーをこぼして、鞆の中にグシャグシャになるように詰める作業だ。

この間わずか10分!!

「終わったー!」

「お兄ちゃん遅いー」

「あはははははははは!でも下の方は早いから大丈夫!いや、あんまり大丈夫じゃないのか!?しかし回数は無限回。ふむ、大丈夫!」

「うふふ」

「あはは」

「ふふっ」

シラナミヌクモリテイ!!

「エヴァー!オセロやるっぜ!」

「うん！」

唐突だがオセロがやりたくなつた。

とりあえず普通に初めの四枚を置いてその次に四隅に黒を置く。

「俺が黒だが負ける気がしねえ」

「お手柔らかに」

「審判は私、絡繰・シラナミ・茶々丸が勤めさせていただきます。  
ではどうぞ」

「初めはここだな」

白の下に黒を置いて白をひっくり返す！

「じゃあ私はここ！」

「ふん、斜めだど？その程度か！」

10分後



「勝者、マスターです」

「やったあー!!」

「ど、どうしてこうなった……」

逆にこうはならないだろ！エヴァが強いのか！？いや、まさか、俺が弱いのか！？

「クソっ！こうなったら将棋で勝負だ!!」

「うん!!」

王 麟

金 エヴァ

歩 エヴァ

「勝者、マスターです」

「グボオア!!……!!」

俺の墓には……稀代の棋士と……ゲボツ!!」

「お、お兄ちゃん!!死なないで!!あと嘘でもそんな事書けない!!」

「正直な子に育ってくれてうれしい。でも将棋とか強いのは悲しい」

「いや、お兄ちゃんが決定的に下手なだけだと思うよ」

「……茶々丸!」

「はい、実際、麟様はえげつなく下手くそです。50年前のパソコンにも勝てないレベルです」

「いや、50年前のパソコンも今のパソコンも指先一つでダウンだから。俺との愛を守るために旅立ちかねない勢いだから」

世紀末で救世するから。

「なあ、今すっごい面白いこと思いついた」

「何なにー?」

「気になります」

興味津々か! いやしんぼめ!!

「この混沌とした世の中に破滅という救いの手を、歌です」

「ブフッ!」

デデーン

「マスター、アウトー」

「なっはっはwwwwww」

デデーン

「麟様、アウトー」

「ちょ、ちょっと待て！茶々まあんっ！..！」

「いやいやいや、今の無しやっつて、やめ！や.....アフィン！..！」

「エヴァ、俺の腕な、取れんねん」

「どっしたの？急に」

「いや、指輪で作った剣なら切れるねん。腕」

「ふふっ.....っ、腕だけ？」

「いや、あと足もな、取れる」

「そうなんですか？」

「ほら、見てて」

指輪で作った日本刀を出して腕を落とす。

ポトツ……

「な？（どや顔）」

「ふっ……ふふふっ W W W」

「ふ W W な？つて……麟様……ふっふふ」

「ただな、こっちの腕落としたからもう一方落とせへんねん」

「ふはははっ！お、おに、おにいちゃん W W W」

「それは落とせないでしょう W W W」

「でも前は落とせたようなブツッ！気がしてんけど……ぶははは W W W」

「ブフウ W W W W 落とせないよ W W W」

「りん W W W W 麟様 W W W W」

「んで落ちた腕ひっつけたらな、引っ付くねん W W W W」

「あっはっは W W W W 何でそんな事しようと思ったのよお W W W W」

「ひっひっひ W W W W いやな、取れるやろ思てやったら取れたかな W W W W つくやろう思てつけたらついてん W W W W」



「10年に一度、見れぬか見れないかのテンションだったな」

「それだと一回も見れないね」

「いつもの笑顔もいいけどたまの笑い顔もかわいいよ」

「お兄ちゃん……」

「ベッドはメイキング済みです」

「ふはは、よくやったんだぜ！茶々丸」

「そつだ、お前も来るか？」

「いえ、私は……」

「そつか、茶々丸も参加か」

「引つ張らないでください！なんで人間の30倍のパワーがある私をこんな平然と！」

「最強だからな！」

「うう……」

「というわけで、暫定一週間分、茶々丸のポジション決めをしたい  
と思います」スパー

「わー」ぱちぱちぱち

「楽しみです」

「現在空いてるポジションは……キティ！」

「うん。」

母親、姉、娘、叔母、伯母、姪、祖母、妻、嫁、妾、友達、彼女

の12こだよ。ちなみに妹は満席。

友達の中には『お前は今朝登校中にぶつかった食パン女!』とか『  
隣くんの事……小学生の時からずっと見てたんだよ?』とか『別に  
お前の事好きでも何でもねえよ!』『本当に?』『そんなわけ……  
ほっ、本当だよ!』とかのパターン分けがほぼ無限に可能よ」

「そんな中から茶々丸はどうする!?!」

「えっ?え?あの……」

「じゃあ俺達で決めようぜ!」

「そっだねお兄ちゃん!」

指輪で回るダーツボードとダーツを作る。

「ちなみに真ん中に当たるか外れるかしたら茶々丸のポジションニングは『たわし』な」

「ええっ！？そんなの無かつ……………」

「ほいさあー！！！」

威勢のいい掛け声と共にダーツを軽く投げた。  
ストンと小気味いい音が刺さった事を主張する。

「さて、どこに刺さっているのか！！普通に見えてるしお前らも余裕で見えてるだろうけど止まるまで待つのはお約束だ！！！」

「あ、もう止まるよ、お兄ちゃん！」

「ど、どうなるのでしょうか……………」

ピタ……………」

「決まったー！！！！おめでとー！！！」

「ふはは、どうやら貴様はお兄ちゃんの『姉』らしいな？」

「かと言って別にエヴァのお姉ちゃんになる訳じゃないけどな」

「そ、そんな、困ります……………」

「何だ、嫌なのか、茶々丸？」

「いえ、嫌とかそんなのでは……………」



「お姉ちゃんは俺みたいな弟はいらないの？」

「お姉ちゃ……むしろウェルカムです」

「よろしくなお姉ちゃん」

「はい……麟くん……」

「とりあえず鼻から出てるオイルの滝を止める」

現世の大瀑布やー！

！ 茶々丸 は 特技 油符「機械の潤滑大瀑布」 を 手に入れた

040 世界最速、バカ笑う。(後書き)

何だこのオチ……何だ……？

今回の話は本筋とは何も関係ない話です。パラレルワールドです。なので次回からも茶々丸の呼び方は茶々丸だと思っています。麟の事なんで、急になんと呼び出すかは責任をもてませんが。

鳥取に行つて腰を痛めました。

20歳の豚野郎です。100m以上も歩いたのは久々。帰つて30分で書き上げました。

(僕の)息抜き回です。

鳥取の蚊は奈良の蚊の20倍くらい凶悪。

背中の中とか指の先とか平気でさしてきます。まさに人非人。

このポテンシャルで本筋を更新するのは諦めました。

明日はちゃんと書きます！

真面目にふざけます！

くまのプーチン

ごめんなさい、言ってみただけなんです！

皆様も、数々のご感想ありがとうございます。フラッシュ世代が多くてうれしかったです。

兄貴イ！……って何だ？

まわれMeらわない事さ！

では、今回もありがとうございます。

041 世界最速、お泊まり会、前編。

「おいクズども！我々3-Aは来週からキヨナラに修学旅行に行くが、準備は済んでいるのか！！」

「……はい？」

「うるせえ！！ピーチクわめきやがって！小学生か！ブチ殺すぞ！！準備が終わってるなんて勘違いも甚だしいわ！ちゃんと荷物の再確認を行え！衣類は一着分余計に持って行け！かさ張ると疲労の元になる。なるべく小さく纏め上げる！

いいか、修学旅行は修学しに行くんだよ！遊びに行くんじゃない！嘘だ！遊びに行くんだ！携帯ゲームはワンダースワン以外を持って来たら叩き割るからな！」

「ゲームボーイカラーはー？」

「黙ってる妊娠！！」

「京都楽しみだね、お兄ちゃん！」

「京都も奈良も全く興味無いがエヴァの楽しんでる姿を奉って納めるために80万円する一眼レフを買った俺に隙は無い」

「あつ、いいなー麟さん！」

「じゃあかずみんなにあげる。まだあるし。でもエヴァの写真は頼んだぞ」

「へへっ、任せてよ」

この後も京都を選んだ理由とかで盛り上がりたりゆっきーがネギに求婚したりとカオスな話になってたので知らないフリを決め込んでた麟です。

危うく挨拶忘れるとこだった。

「ネギ先生、麟先生、学園長がお呼びですよ」

「あ、はい！！」

しずな先生、あんたホントは高等部の教師やってないだろ。

「ええー！？し、修学旅行の京都行きは中止〜！？」

「誰を殺せば行けるんだ？」

「こ、これこれ……」

まだ中止とは決まっておらん。ただ、先方がかなりイヤがってのう

「……詠春を殺せと？」

関西呪術協会の長である詠春とはちょっとした顔見知りだ。

以前、麻帆良に住み着く前、京都を遊園した時に会った。

無理やり酒を勧めてくるもんだからそれを全てエヴァにトスしながら障子に穴を開けまくってたら巫女さんに怒られた。詠春が。

「いやいやいや、そんな事は言うておらん！今年魔法先生が一人おると言つたら難色を示してきおつたのじゃ」

「だから殺せばいいんだろ？つてか一人つて誰の事よ？」

「いや、一人つて言つちやつたけど、そう言えば一人じゃなかったのう。まあええか」

「あの……何の話ですか？」

「お、おお。すまんの。実は……」

じじいがネギに説明をするが何も考えずにタバコに火をつけて肺に吸い込む。

「ここは禁煙なんじゃがのう」「もう！ダメですよ、麟先生」などと幻聴が聞こえてきたが適当に無視して二人の会話を聞く。

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。

ただ道中むこうからの妨害があるやもしれん。彼らも魔法使いである以上、生徒や一般人に被害が及ぶような事はせんじゃるが……」

「わかりました、任せてください学園長先生」

「白波先生も、ネギ君のサポートを頼めるか？」

「何の？」

「親書を渡す……」

「おことわりします」

「な、なぜじゃ？」

「生徒の事なら任されても良かったんだけど？何？おつかいのお手伝い？じゃあ誰が3-Aを見るの？他の先生に皺寄せるの？つてかそんなくだらない事に俺を使おうと？」

「う、うーむ。じゃあ白波先生には通常通り生徒の監督を……」

「ああ、任せておけ」

「じゃあ白波君は帰ってもよいぞ。で、ネギ君、孫のこのかの事じゃが……」

退出……！

駐輪所まで歩いてるとちうたんに合った。

「おーすちうたん。買い物かね？」

「ん？ああ、そうだよ。先生は帰りか？」

「んー帰ってもいいんだけど俺も買い物行こつと。ついてっいい？」

「まあ別にかまわねえけど、面白い事も無いとおもっぜ？」

「やつほうういー!!エヴァー!買い物行こうぜ！」

と言ってみると茶々丸に乗ったエヴァーが茂みから出てきた。

「うん、お兄ちゃん!よろしくな、長谷川千雨」

「ど、どっから出てきてんだ！」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「よろしくお願いします、長谷川千雨さん」

看板に『ファッションセンターしましま』と書かれたパチモンくさい店の前にいるが、かなり人が多い。  
お前ら他に行くところねえのかよ。

「ほらほらちうたん、これとかかわいいよー！」

「着てみる、長谷川千雨」

「嫌だよ!私はもっとおとなしい色の服が好きなんだ！」

「……ビブリオンの服はさすがに無いな」



「ぎゃー！てめえそれ以上言ってみろ！！」

「あ、お兄ちゃん、このスカートかわいいよ！お兄ちゃんはいてみて」

「ふはは、まかせろ！」

「おいおい、あんた男だろ」

「隣様はかわいいので何ら問題無いかと」

試着室を開けっ放しでズボンをぬいでスカートを穿く。

「いや、閉めるよ！」

「赤くなっちゃって、かわいー」

「クッ、連れてこなかったほうがよかったのか！」

「似合っ？」

「きゃー！お兄ちゃんかわいいー！」

「うむ、じゃあ買おう。で、ちうたんにこっち買っておそろい」

「な、何で！？」

「あー、お兄ちゃんずるいー、私もちうたんとおそろいがいいー」

「じゃあみんなの分買っちゃう！」

「え？おいあんた今私のこと何て!？」

「やったー！お兄ちゃん大好き！」

「って何だ、長谷川千雨？」

「え？ん？気のせい？」

「マスターは隣様用とそれ以外の全て用の性格があつて、家で隣様と話している間はずっと『ちうたん』と呼んでおられます」

「何だ、普段からそう呼んで欲しいならかまわんぞ？」

「いや、いい。あんたはまともだと思つてたんだが……」

「いやいや、あの変人ぞろいの3-Aの中でも俺ら3人は特にイカしてるよ？俺ら600歳以上だし、茶々丸は<<3ゲットロボだし」

「ガシャーンガシャーン。ガイノイドです」

「……私はこの服にする」

俺達の話は聞かなかつた事にされる。

「タイトでいかしたジーンズじゃん（タイトとかわからないけど言つてみた）」

このメーカーあれだろ？あの、ブリジストン」

「いや、普通にしましま製だよ。タイヤとか作ってねえよ」

「なんだ、作ってないのか」

女物の服いっぱい買った。これもう、しばらく女装してうるつきまわろう。

って言うとエヴァが満面の笑み。

脳内エヴァフォルダ（約4000ヨタバイト）に保管。

「なあ、あんたロボなんだろう？」

「ロボじゃなくてガイノイドです。ロボットです」

「いつしょだよ！」

「ガイノイドなのでこうやってプロジェクター機能を使い壁にちうたんの写真を映し出す事も……」

「ぎゃー！やめろ！……！」

「なあなあ、ちうたん」

「ちうたんって呼ぶな。何だよ？」

「魔法ってあると思っ？」

「……は？」

何言っただお前って言われた（言われてません）。  
お前って、俺先生なのにお前って……（言われてません）。

「いや、ねえだろ。流石に魔法つてのは無しだろ」

「でも俺魔法使いですしおすし」

「ハア？じゃあ魔法使ってみるよ」

「いや、ここでは使えない」

「何だよ！使ってみるよ！！」

「いや、ここでは使えない」

「だからっww使えって！ぶはww」

「デデーン！千雨、アウトー」

そう言った茶々丸がちうたんを捕まえてエヴァがしりを叩く。

「何だよそれ！ちょ、ずるいじゃねえか！魔法使えよお前！あうん！  
何で私がケツ叩かれなきゃなんねえんだ……」

「あうん！つてwww」

いやホント、使いようが無いんだよ。エヴァなら大丈夫だけど」

「うん。魔法の矢、氷の一矢」

氷の矢を木に放って、その幹を半分ほど抉り、凍らせる。

「は、はは、どんなトリックだ、こりゃよお……」

「まほー」 A 4

「まほー」 D 4

「まほー」 F 4

「「信じるか信じないかはあなた次第です」」 A 5 / D 4 / F 4

「バカみたいな話だな……」

「この完璧な和音を無視してそんなドライな反応をなさるとは……」

「大物だな」

「うるせー！こっちは必死に纏めてるんだよ！ってことはアレか！  
？ここで度々起こる謎の不思議現象は全部魔法使いが？」

「んなわけあるか。ここは素でおかすいよね」

「あの木とか初めて来たとき『へし折ろうか』ってお兄ちゃん言うてたもんね」

そんな事言ってたのか、俺。

「なんか無茶苦茶だな……。魔法使いつてのはみんなこっつなのか？」

「まさかー俺が規格外なだ、け？  
さて、ここまで来れば大丈夫だろ」

あたりは結構な広さの森だ。  
歩いてたらついた。

「ど、どこだよここ！まさか魔法で!？」

「いや、普通に歩いてたらついた。茶々丸、ここどこー？」

「家の裏です」

後ろを見てみるとマイ・Shirana miハウスがあった。

「おお、これは奇遇な!」

「じゃあ茶々丸とエヴァは俺の今日乗ってたバイク取ってきてくれない？」

「いいよー。いってきまーす」

というわけで。

「ココまで来れば魔法を使っても大丈夫だから、見せてあげよう!  
ラピ ユタの雷を!!」

阿呆の射手 光の一矢!」

あ、間違った。

矢はそのまま飛んで行き、一本の木にささった。

しばらく見ていると突然その木が光だし、下から火を噴いて空へ飛んでいく。

ただのタイプミスがこのような効果をもたらすとは……。魔法を知らなかったちうたんは普通に驚いてる。ごめんね。

「今のも……魔法か？」

「……今のは阿呆だった」

「は？」

「再チャレンジなり！」

魔法の射手 光の一矢！」

これも一本の木に当たり、爆発音とともに着弾点から半径10メートルが削がれた。

「いやあーこれでもかなりコントロールできるようになったのよ。昔は何も考えずに撃つたら半径10m〜100mほどランダムに焦土と化してたからなあ」

「……そんな嘘みたいな話……」

「あるんだよ。ただいま、お兄ちゃん」

「おお、お帰り。テンキユー！」

「どづいつ事なんだ？」

「ちうは今日もかわいいぴょーん！」

「ぶつ殺すぞ!!」

「お兄ちゃんはかつて、魔法使いで知らぬものはいないほどの大魔法使いだったのだ。」

「だいたい15年ほど前までの話だな。世界最強の魔法使い、白波・A・R・麟とお兄ちゃんの事だ!」

「すごかろう」

「いや、言われても凄さがわかんねえよ。ってか15年前って、あんたまだ0歳じゃねえのか?」

「は?600歳以上と言っただろう。私は真祖の吸血鬼でな。不老不死って奴だ」

「先生もか?」

「いや、俺は何だろうな?人間でも悪魔でも鬼でもないっぽいし、新人類ヴェルダースオリジナルとでも名乗ろうかな」

「そんな甘くてクリーミーそうな……ってか二人とも人間ですらないのかよ!」

「「「えへへー」」」

「3人だったか……。ってか何で私に話した?」

「だって」「なんだか」「だって」「「「「だってなんだもん」」」」



ててーてー

「息が合ってるのは充分わかったから!!」

「うむ、この麻帆良には認識障害の結界があつてな」

「ああ」

「結界とか言われてわかるの？」

「いや、普通に生きてりゃ普通に聞くだろうが」

「で、麻帆良の中で多少おかしい事が起こつても大して気にならない訳だ」

「でもそれはお前に対して、何の効果も成してなかった。

何も知らずに巻き込まれるのはかわいそうだと、お兄ちゃんが貴様に情けをかけてやったのだ」

そ、そうだったのか……。

何にも考えてなかった気がしてたけど、俺そこまで考えてたんだな……。慧眼だな。

やるじゃん、俺。

「そうだったのか……じゃあ、私は変じゃなかったんだな……」

「辛かったんだろっな……」

「うっ……」



「はい、麟様」

「さて、じゃあすつかりあたりも暗くなってるけどお待ちかね、質問タイム！と言っても知らん事は答えられないのよ？」

「魔法つ「質問するときには手を上げる！嘘です、言ってみたかっただけです。続きをどうぞ」……魔法使いつて何なんだ？」

「え？魔法……つかう人だけ……大丈夫？」

「うるせえ」

へえあ

「貴様にも素質はあるぞ、長谷川千雨。魔力量はそこそこあるようだしな」

「魔力量？」

「名前の通り、魔力の量だ。多ければ強いという訳でもないが、まあ無いよりある方が有利だな。

参考までに、私の魔力量はかなり多い。日本全土を凍土にできる程度だな。同じ魔法を使ったとしたら、普通の魔法使いでは一都市で限界だろう」

「なんかすげえ危険人物だな……。先生は？」

「さあ？地球に氷河期を再来させるくらいなら余裕だと思うけど、  
やった事ないしなあ」

「……」

「お兄ちゃんの魔力量は測定しきれた事ないもんね！」

「最強だからな！」

「「「H A H A H A ! ! !」」」

「アメリカのホームドラマか！」

「ってかそんなに強くて狙われたりしないのか!？」

「いや、別に？」

「かつては狙われもしていたがな、お兄ちゃんは冗談抜きで世界最強だ。いや、史上最強だな。

魔法においても、身体能力においても。当然、相手が世界中の魔法使いだらうとお兄ちゃんには勝てん。

更に言うと、お兄ちゃんは『シラナミ』を持つ者、自分に懇意なものに敵対する者以外には何も手出しはせん。

だから賞金も取り消され、こんな所で教師もできる」

「最強より最速の方がいい。最速だけど」

「その『シラナミ』ってのはあんたらの名前じゃないのか？」

「ああ、そうだ。そしてこの名前が持つ意味は『絶対手を出しては

いけない者』。

お兄ちゃん以外のシラナミに手を出したのものは皆お兄ちゃんが殺した」

「ころっ……」

「大量殺人犯でえす」

「そんな引くな。貴様が生徒で、シラナミに何もせん限りは、お兄ちゃんは絶対手出しをせん。」

そもそも、向こうから手を出さねば何もしなかったんだよ」

「あらやだわ、こんな美人に向かって漢だな・ん・て？」

「誰も言っていないよ、お兄ちゃん」

「まあ、そうか……。少しショックだったただけだ」

「気にするなよ！」

「ちなみに、今シラナミの名前を名乗るのはここにいる4人と、魔法世界のひとつの国だけだ」

「四人？魔法世界？」

「私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・シラナミ」

「私、絡繰・S・茶々丸」

「俺、シラナミチャチャゼロ」

「俺、佐藤裕也（、エ、）ピャー」

「……」

「しらなみ、えー、あーる、りんでしゅ……」

「ってか待て待て！人形！！」

「チャチャゼロダ。御主人、コイツ引キ裂イテモイイノカ？」

「そんなことしたらお前の腕を引き裂くからな。  
こいつは大昔、魔法で動けるようにした人形だ」

「私の姉さんです」

「魔法なら仕方ないな」

見事な思考停止だ。

「ってか魔法世界？国って？」

「こことは別に魔法世界ってのがあって、その町を救った時、町に『シラナミ』って名前つけられた。

いや、良いつていったけど。で、その町が発展して今や一国家」

「いや、すげえじゃねえか」

「ちなみに常に国王不在だ」

「あんたが国王なんだろ!？」

「ソ〜ナンダロソ〜ナンダロ」

「そつだ。お兄ちゃんが国王だ。「スルーか」

だから他国は『シラナミ』に対して強く出れない。

とは言つてもただの農耕国家だから、領土は広いが取るものも無い、平和な所だよ」

「じゃあもしシラナミを騙った奴が犯罪でも起こしたら?」

「姓にシラナミが入らない者が重罪を犯した場合は死刑だ。

本国、魔法世界の連中は、シラナミ姓を持つてる奴を把握している」

「へー便利にできてんだな」

「お前が言つなよ!」

怒られちゃった

関係ないけど着替えよう。

スカートとか一回はいてみたかったんだよな。結構はいてるけど。

「つてか私にも魔法が使えるつて?」

「何だ、使つてみたいのか?女子中学生だな」

「悪いかよ」

「いや、悪くないぞちうたん、しかし俺の地獄の特訓に耐える事ができるならな」

「上等じゃねえか。どんな特訓なんだ？ってかいつの間に着替えた！？」

どんな特訓なんだ？

「なあエヴァ、どんな特訓なんだ？」

「さあ？茶々丸、どんな特訓なんだ？」

「わかりかねます。どんな特訓なんでしょうか、姉さん」

「イヤ、知ラネエヨ」

「よし！魔法とか使ってもらおう！！」

「いや、それをどうすんのか聞いてるんだよ！！」

「んなもんアレをあーしてこーする感じで出来るんだよ！！」

「実際はそんな簡単なものでもないから私が教えてやる。それでできるのはお兄ちゃんだけだよ」

「天才だからな！！」

「なんかそればかりだな」

「何、生まれ持ったものの違いさ。俺にだって出来ない事くらい、ある」



「ボードゲームが死ぬほど弱いもんね」

「あれは手加減に次ぐ手加減の末の結果だよ！！本気でやったら一瞬だから！碁石とか粉々だから！」

「砕いてどうする……」

粉にして飲む。

「さて、もう質問も無いようなので、泊まってく？」

「いや、どうなんだそれ？生徒が教師の家に泊まるって」

「学生が同級生の家に泊まるわけでもあるかな」

「ちなみにパソコンとネット環境は整っております」

「いや、別にそういう事じゃなくて……」

「じゃあばんごうはん作るよー」

「よろしく、お兄ちゃん」

「ご飯出来たわよー」

「わーい」

「わーい」

「わーい」

「ってかロボと人形！お前らメシ食うのか！？」

「ひ、ひどい！千雨さ……ちうたんは、ガイノイドには食事を取る権利さえ与えてくれないのですか！？」

「おい、何で言い直した、ボケロボ」

「テカ、魔力ニ変換出来ルカラ喰ウ事ニモ意味ハアルンダケドナ」

「……いただきます……」

「え？あ？い、いただきます」

「おいしい？」

「おいしいよ、お兄ちゃん」

「はい、やはり洋食はとても適いません」

「まあ、確かにかなり美味しいな」

「俺八味ワカンエケドカナリノ魔力量ガアルナ」

「あ、指切っちゃったからかな。」

「鱗も指を切るって諺にならない？」

「ならないってか先生の血とか入ってるのかよ」

「何だ、そんなにうれしいか。」

「お兄ちゃんの指切れるほどの包丁なんてあつたんだ」

「いや、最近調理器具一式指輪で作ってるからなあ。そりゃ切れるわ」

「指輪？」

「ああ、また後でな」

「」「ちそうさまでした」「」

「食細っ！いや、その体型だとそんなもんか？」

「燃費いいよな」

「いいよねー」

「別に残してもいいぞ？二人が食う」

「一人目です」

「何デ俺ガ二人目ナンドヨ」

「魔力変換機構搭載だからな」

「便利なもんだなあ、それを一番先に使えるようになりたいわ」

「肉体改造すれば或いは……」

「やっぱいい！」

良い考えだと思ったんだけどな……。

041 世界最速、お泊まり会、前編。(後書き)

間に合え!!

追記

23日に間に合わなかった豚野郎です。

昨日あんだだけ大きな事を言っときながら更新できなかったって何よ。

ちうたんの魔法バレ回です。

ホントすぐに長谷川・S・千雨にしたい。

では、今回もありがとうございました。

明日はひよっとしたら忙しいから更新できないかもしれません。

ゴメナサイ

042 世界最速、お泊まり会、中編。(前書き)

らほーじい！

042 世界最速、お泊まり会、中編。

「ちうたん、俺らといっしょに寝る？多分グチヨグチヨになると思  
うけど」

「……帰る」

「では千雨さんはマスターの部屋で寝てください」

「和室に布団を人数分敷けばよからう」

「ちうのホームページ更新しなくてもいいの？」

「別にそんな毎日更新してるわけじゃねえよ。ってか話聞かないな  
お前ら」

一家全員人の話を聞かない白波です。

「ってかあんたら実の兄弟じゃないんだな」

「ハア？」

「何言ってるんだ、ちうたん。シラナミは全員家族だから」

「でも血は繋がってないんだろ？」

「はたして血の繋がりにどれほどの意味があるのか、血のつながり  
というのはそれほど大切なものなのか？」

「俺はシラナミが何より大切だ。それで充分だろ」

「そういうもんなのか」

「羨ましいのか？」

『羨ましいのか？』と『羨ましかろう』は俺の決め台詞みたいなもんだ。

ちなみにネギの決め台詞は『うんこ食べたいんだZE』だ。今決めた。

「ちょっとだけ、な」

「言質取ったどおおおおおおおおお！……！！！」

「茶々丸、再生」

「はい。」

ジー……

『羨ましいのか？』『ちょっとだけ、な』

以上でよろしいでしょうか？

「でかした。」

そしてこれは即ち要するに、ちうたんが『シラナミ』に入りたいたい事に他ならない！！」

「え！？いや、別にそんな事言っただけ……」



「そう遠慮するな、長谷川千雨。それとも何か？シラナミなどいら  
んと言っのか、貴様は？」

「そっという訳じゃ……」

「ならば良かるう！貴様は今、これからシラナミの者だ。誇りを持  
つて名乗るが良い！」

「ちょ……！ちょっと整理させてよお……」

……

「まずい、茶々丸がオーバーヒートしている！！エヴァも鼻血を出  
している！！増血鬼にもなれたのか！

クソ、この場で無事なのは俺とチャチャゼロだけ……グボオア！」

「ニイサン！クソ、何テコッタ！史上最凶トマデ呼バレタシラナミ  
ガkonozamataハ！！」

「俺の墓には……『おちんちんランド、入り口はコチラ』と……  
書い……て……」

「ニイサン！ニイサーン！！」

国家錬金術師ですwww

「危ない危ない。何て攻撃力だよ、ちうたん」

「う、うるせえ！そんな事で騒ぐなよ！」

「で、整理はできたのか、長谷川千雨。返事はハイかYESで答える」

俺はエヴァの鼻血を拭いている。

「うわっ、選択肢ねえ！まあ別にいいんだけどよ、名前変えるのは嫌だぜ。これでもけっこう愛着があるんだからな」

「何、みんな名前に足してるだけだ。お前も『長谷川・S・千雨』とでも名乗ったらどうだ？」

「緊急時はそう名乗るとよいでしょう。“こちら”の人間にはわかります。更に、普段から名乗っておけばその緊急時さえ来ない可能性が高いです」

「なんかすっげえ便利だな。それならみんな欲しがったりしないのか？そのシラナミの名前」

「欲しがらないなあ。やっぱ評判悪いしな」

「でも魔法世界にはお兄ちゃんのファンクラブもあるぞ。隠れファンの人数は知らんが表だってファンだけで120万人だ。

ついでにいうと、こちらの世界にも数十万人規模のファンクラブがあるぞ。50万だったかな」

「どんなチートキャラだよ！」

「モテモテやん、俺。(ファンクラブあるとか今初めて聞いた)まず欲しがっても俺が好きな人にしかあげない」

「好きって……」

「ちうたんの大ファンダカラー！結婚してもいいくらい」

「けっ……！！」

よく赤くなってるみたいで、麟ちゃん血圧がしんぱい。

「わたしもちうたんと結婚したいー！」

「私もです」

「俺ハイイカナ」

「何だ、冗談かよ」

ちよつと拗ねてるみたいだ。  
かわいいんだから。

「え？本気だけど？」

「私とちうたんと茶々丸で三股だね！」

「近親相姦ですね」

「トテツモナイ節操ダナ」

「いやいや、まずこんな短時間で私の常識に大穴を空けにくるのやめろよ」

「えー、そんな信用ならない？」

後で結婚指輪買ってこよう。

今の給料の30倍くらいの値段の。

これから就寝です。

「ごめんね、ちうたん、俺全裸じゃないと寝れないんだ……」

「私も全裸じゃないと寝れない」

「ちうたんは服着ててもいいから」

「今からでも帰る」

「そんな事したら次の授業は全裸でやる」

「そして私は、お兄ちゃんが長谷川千雨に脅された！と言っ」

「やーめーろー！」

「どうぞ、千雨さん。客間のベッドメイキングが終わりました」

「命拾いしたな」

「うるせえ!!」

「怖い話しようぜー!!」

「中学生か!なんて落ち着きのない600代だ!」

「じっ、ごめんね、ちさめおねえちゃん。迷惑……だったよね?」

「い、いや、別に……」

「やーい引つかかったー!」

「寝る!!」

あ、出ていっちゃった。

「今のかわいかったよ、お兄ちゃん!」

「り、麟様、出来れば私にも今のを……」

「だめだよお!お姉ちゃんわがままばかり言って!どっちがお姉ちゃんだかわかんないよう!」

「グハア!!マスター……地球は……青かったです……」

「意味わからんが、その映像、後で出力しろよ」

茶々丸がサムズアップして沈んだ。

「じゃあ結婚指輪買ってくる。転移」

「いつてらっしやーい!」

「ませー」

茶々丸の挨拶がかつてないいい加減さだった。  
何この。

というわけで、魔法世界についたった。1ドラクマがだいたい62  
円ほどだから、このあたりで見繕うか。

「ちょっと、その町民よ」

犬とサツマイモのカメラみたいなおっさんに意気揚々と話しかける。

「ん？何だ嬢ちゃん？」

「このあたりに魔法の媒体を売っている店を知らんかね？」

「何だ、大仰な喋り方だな。それならその骨董屋にあるんじゃないか？しらねえけど」

「ほう、すまぬな。これは例だ。取って置け」

するめイ力をわたす。

「……」

「たのもー!!」

カランカランカラーン!!

「うおっ!!なんだ、客か」

おにぎりの獣人みたいな店主が驚いてる。

あ、ちがつわ。おにぎりじゃなくてパンダだこれ。

「魔法発動体の指輪を買いだいたいんですがよろしいですねッ!!」

「いや、指輪はねえなあ。杖ならあるが」

「いらねえんだよおおおおお!!指輪じゃないとヤダヤダー!!」

「つつてもねえもんはねえからなあ。あ、王都シラナミの魔法専門マジックシヨ店ツブならあるんじゃないか?」

あこの鉱山はいい石がよく取れるらしいからなあ」

「俺あそこ嫌いなんだけど他にしらないの?」

「いや、しらねえな。メセンブリーナまで行けばあるかもしれねえ

が、バカみたいな距離だし」

「うーん。仕方ないか。テックユーおっちゃん。これいくら?」

「ああ、2ドラクマだが、ってか何で嫌いなんだ?」

「ほいよ、2ドラクマ。そりゃいつの間にか人を国王に祭り上げるキチガイ国家なんて好きなわけねえだろ。きつといつつも居ない国王とかも頭おかしいぜ」

「はは、確かにな。なんたってあの……っつと、言ったら役人さんに睨まれらあ。じゃあな、嬢ちゃん。名前何ていうんだ?」

「ナンパか?俺は男だぞ。シラナミ・リンだ。じゃあな、おっちゃん」

「……は?」

かっこつけたかっただけなんだよ。

ちなみにさっき買ったのはナスの形したはし置きだ。

「コンビニいてくる!」

今のってるこれは

ライドチェイサー アディオン というらしい。

<http://ncode.syosetu.com/n0578>





「あばばwwwすんまじえーんwww」

「すんまじえーんって何だよ！王様コノヤロー！」

何コレ、国王の扱いじゃなくね？

「今日は何しに来たんだよ」

「てめえらに用はねえんだよ！！クソどもが！！どけ、ハナクソ」

「ハナクソって言った方がハナクソだし、この下痢便王様！」

「てめえ様つければ何言ってもいいと思ってるの？オデノココドハポドポドダー！」

「何言ってるんだよん国王様」

「うんこ食おう様！？」

とんでもねえクズやでえ……

「おばちゃん、魔法発動体売ってよー、指輪型な」

「はいはい、いらっしや……なんだ、王様かい。はい、260万ド  
ラクマ」

「何で俺こんな扱いなのか？税金とか一円も取っていないのに。何故か  
王城がジャンボリーテントなのに。はい、260万」

ちなみに今の教師の給料がいろんな謎手当がついて月50万円だ。

「別に嫌っちゃいないよ。みんな親しくしてるんだ。いいじゃない  
か王様。ちょうど貰ったよ。じゃあね。さっさと帰りな」

「あばよクソババア！」

「ボつ殺すぞ王様てめえ！！！」

髪とか縦に伸びるのか。怖いな。

「ただいまー」

「おかえり、お兄ちゃん！」

「ちつたん寝てる？」

「そりやもうぐっすり。晩御飯にませたアレが効いたかな？」

「悪い顔してますよ、マスター」

「お前だつてな、茶々丸。でも一番悪いのは晩御飯にアレをませた  
お兄ちゃんだよ？」

「「「ふっふっふ……」「」」

「よし、じゃあ茶々丸はちつたんを連れて地下室へ。くれぐれも起こすなよ?」

「了解です、マスター」

「お兄ちゃんと私はすぐに地下室に向かう」

「よっしゃ、行くうぜ」

ちなみに料理にまぜた『アレ』はメラトニン。  
米とかに含まれるリラックス効果があるホルモンだ。  
当然俺もエヴァも食った。

042 世界最速、お泊まり会、中編。(後書き)

ライドチェイサー アデイオン

<http://ncode.syosetu.com/n0578w/>

のミッション・0.5話で豚野郎がリーゼ様にもらいました。

これでコンビニ行った時、免許不携帯で切符切られました。

元ネタはロックマンX4。

超高性能すぎてXとかゼロくらいしか乗れないはずなのに何故か麟が乗れてる……。

レプリロイドかよ、麟……。

さらつと1ドラクマ=62円とか言ってますけど独自設定です。

そんな遠くないよな……。

あっさり王都シラナミに触れましたが、こつ見えても(？)農国です。鉱山とかもあるけど。

次回でお泊まり会終了か……。

纏められるきがない！

では、今回もありがとうございました。

043 世界最速、お泊まり会、後編。(前書き)

お泊まり会編、終了！  
じゃないんですよねこれが。

1 ドラクマ＝62・26円かよと。適当です。

043 世界最速、お泊まり会、後編。

「うっ……ん……」

朝か。

この部屋は？

……ああ、昨日は先生ん家に泊まったんだっただな……もっかい寝るか。

って「あれ？この部屋昨日の部屋と違わねえか？」

辺りを見回したら、いた。

麟先生とマクダウエルが同じベッドで寝てる。

ってというか私もそのベッドで寝てる。いや、寝てた。

「って待て待て！……！」

「あ、おはようございます。ちうつたん」

「ちうつたんじゃねえよポケロボ！ってか何でこいつらここで寝てやがる！そもそもここはどこなんだよ！？」

「うーん……お兄ちゃんうるさいー」

「うへえあおっぱそももみもみ」

……おっぱそももみもみって何だよ。

「かわいいですよ。千雨さんも口元が緩んでいますよ」

「は！？緩んでねえよ！！」

「いえいえ、間違いなく緩んでいました。この通り」

壁にさっきの私の写真が映し出された！

「消せー！ー！」

「うーん……」

言い合っていると先生が腰に抱きついてきた。ちっさいな。それに暖かい。

「って起きろ起きろ！！」

先生をゆすって起こす。

「ん〜……おはよー」

「何で同じベッドで寝てるんだよ」

「そりゃ同じベッドで寝たからじゃねえの？その点トッポってすげえよな、最後までチヨコたっぷりだもん」

「いや、意味がわからない」

「俺チヨコって好きか嫌いかで言うと大嫌いなんだよな」



「ホントどうでもいいわ。ってかここだよ！どこなんだ！？」

「別荘」

「は？別荘？」

「一時間を24倍に引き伸ばせるダライラマ魔法球」

「おはよ、お兄ちゃん。そんなチベット仏教の名跡みたいな名前じゃなくてダイオラマ魔法球だよ」

ダイオラマ？ジオラマか？

「というわけで、今起きた所でも外に出た時には、まだ一時間しか経ってないという計算だ」

「便利だなそれ。」

で、何で私はそのダイオラマ魔法球の中に居るんだ？」

「そりゃ色々やる事もあるから……」

「やる事？」

「はい、これあげる」

「何だこれ、箱？」

先生から手渡された、濃い紅色の高級感がある箱を少し見てみる。箱の上面には金色のプレートがあって何か彫ってある。

『Marriage』

こんばんりんりん。

ちうたんに指輪をプレゼントしたんだって言ってんでしょーが！！

「なっ！ななな！！おま、これ！」

「マリッジじゃないか。大切にしろよ、長谷川千雨」

「な、何言ってるんだよ！！こんなもんもらったら、私はどうすりゃいいんだよ……」

「結婚」

「というか長谷川千雨、それは魔法世界にある魔法具店の、商品グレードの名前だぞ？」

「へ？」

「王都シラナミにある魔法具店、『Engage』・エンゲージ・『』の中でも『Silver Engage』から始まってゴールド、プラチナ、ダイヤ、マリッジの順にグレードが上がっていく。金地に『Marriage』としか書かれてないそれは最高グレードの商品だ」

「な、何だ、そういうものか……焦って損した」

「と言ってちうたんが飲んだそれは俺のモーニングおコーヒー!!  
砂糖入れちゃだめえええ!!」

「ちなみにキャッチコピーは『愛する人と共に』だ。良かったな」

「ブーーーーーッ!?!」

朝シャン（砂糖入りコーヒー）の隣です。

「お兄ちゃん、いくらだったの?」

「260万。あの国の商品は安くはないけど品質がいいからな。口はクソ悪いけど」

「お兄ちゃんにだけだよ」

「って260万!?!」

「何だ、魔法世界の通貨単位でだが?260万ドラクマだ」

「ってことはレートも日本円とは違うんだな。焦ったー」

「そうだな、日本円に換算すればだいたい……一億六千万円くらいか?」

「ブーーーーーッ!?!?!」

朝シャン（二回目）の隣です。コーヒーでキレイキレイしましょ?

「そ、そりゃ流石に嘘だろ……」

「正確には一億六千八百七万六千円ほどだな」

「給料（月給約50万）の300倍だぜ！まあ、持ってるから」

親指と人差し指で丸を作る。

「やだー、お兄ちゃんやらしー。うわっ、ベットベット……」

「傷つく。」

「ちょ、ちょっと待て！！流石にそんなするもん受け取れないって  
！！」

「遠慮するな。ホント持つてるから、俺。それに魔法やるなら発動  
体は要るし」

「お兄ちゃんは金を火の焚き付け代わりにできるほど持つてるぞ？  
したことはないが。それに、このダイオラマ魔法球とは別の魔法球  
があるが、そっちは500万だ。端金なんだよ、お兄ちゃんからす  
れば」

別にそこまで端金じゃねえよ。まあ、あるけど。持つてるけど。

「とりあえずおふるはいつてきていい？」

「あ……悪い」

「何をしているんだ、長谷川千雨。」

いってらっしゃい、お兄ちゃん」

「ちうたんの口に含まれたコーヒーレロレロWWW」

「その幼女顔で言うな！きめえ！！」

んふひひひひひひひひひひWWW

えげつなく高いが、もらったもんなら一応見ておくかと思って箱を開いてみると

「これは指輪？」

銀色の指輪が入っていた。

先生のセンスはよくわからないが、ゴテゴテしてなくてシンプルな細身のリングだ。

細かい金色の柄が書かれている。けっこう好きなタイプだな。

「そうだな。左手の薬指にはめてやる」

「ちょ！やめろ！！」

「ん？そうか、お兄ちゃんにはめてもらいたいのか。欲張りな奴だ」

そ、そんな事言っただけ！

「麟様は今お風呂に入ってるしやいますからね。行きますか？」

「行かねえ！」

「そんな事より茶々丸、言っただけの物は？」

「ええ、当然。今見ますか？」

「そうだな、せっかくだ。貴様にも見せてやろう」

「何の話だ？」

絡繰の目が光って壁に写真が写される。

これは……

「ちょ！何写してんだよ！！」

ビブリオ ルーランルージュコスの私の写真が！

「……あ、いつけね。まちがった（棒）」

「わざとなんだろ！？」

「ホントはこちらです」

「麟先生か？」

壁には髪の毛の短い麟先生が映し出されてる。  
結構な美少年じゃねえか……。

「ひゃああああ！お兄ちゃん〜？」

「うわっ！人が変わりすぎだろお前！」

「会ったばかりの頃はこんな感じだったんだよねー。ほらほらちうたん。これもすごいかわいいでしょ！？」

今のお兄ちゃんもかわいいけどこの頃のお兄ちゃんもかわいかったなあー」

「はい、今のマスターも非常に愛らしいです」

「ってかお前その言葉のベクトルもかなり定まってないぞ！？」

「お兄ちゃんあ〜〜ん？」

「呼んだ？」

「うわっ！…！」

突然後ろから長襦袢姿の麟先生が出てきた。

なんか盛り上がりすぎてるっばいから声かけたらちうたんにめっちゃび

びられた。俺がびびるわ。

「あれ？俺髪こんな切った事あったっけ？」

「ああ、コラージユ画像ですよ。麟様の写真を加工して短髪にしました」

「何だ、言ったら切ったのに」

「ダメだよ」

怒られちゃった。

「この写真見てちうたんも『美少年じゃねえか』って言ってたよ」

「え！？声出たのか!？」

「適当に言ったら当たってたパターンだな」

「たまにあるよね」

「チクショー！」

「そしてようこそ、シラナミへ！」

「……フン」

あれ？これはいいの？ダメなの？

あ、エヴァが満足そうに頷いてる。いいんだ。



「そうそう、指輪つけた？」

「え？いや、まだだが？」

「じゃあつけたげる。手」

「何だよ」

「出せよ。手出せよおおおおお！！！！」

「出すからそんな勢い良く泣くな！！！！」

「ちよつとまって、この指輪左手の薬指にはめないと効果薄いから左手出して」

「一応聞くが、何でだよ」

あ、信用してないな。

本当なのに。本当に嘘じゃないことくないのに。

「魔力が体を循環するよね。その時、魔力を送り出す機能が血液にもあるんだよ。で、外から取り込んだ血液が一番初めに通るのが心臓。で、全部の指の中で一番心臓に近いのが左手の薬指なの。だから左手の薬指じゃないとダメなの」

俺の猛攻でちうたんはへのへの（？）だアーツッ！！

「そ、そーなのか？」

「だから、手」

「それでも、その、こういうのは一番大事な人に……」

「おい、貴様お兄ちゃんがこれほど……」

「いやいい、エヴァ」

「先生？」

「どこの指につけても合うように出来ているから好きな指につけていいよ。」

その代わり俺の事が一番になったら言えよ？左手の薬指につけてやるから」

ひいー！

このセリフめっちゃヒーローやでええええええ！！

俺かっけええええええええええ！！

ちうたんも赤くなってるしよ！！！！

これ大勝利やる！！

「まだ……ここだな」

そう言った真っ赤なちうたんは左手の人差し指にマリッジをはめる。

敗北を知りたい……



043 世界最速、お泊まり会、後編。（後書き）

左手の人差し指の意味は積極性。

王都シラナミがどんどん万能になっていく。

次回はちうたんの教育的なアレです。

いや、豚野郎の事なんで、正確にそうなるとは言えませんが。

はあ、アルポータル……。

この小説終わったら次は謳魔法持って別世界入りしようかな。

まだ終わる予定全くないけど。

ごぞいます と書こうとしたら ごあじます になる右手と左手の同期が取れていない豚野郎ではありますが、これからもよろしくお願ひします。

では、今回もありがとごあじました。

追記 機能が昨日になってました。魔力を送り出す昨日っていつだよ……

044 世界最速のロノマーク。(前書き)

画像はありません。





「ふはは、貴様如きがこの俺様に勝てると思うなよ？」

.....

「もう……てく……んだよ……。」

もう許してください！つってんだよオオオオオオオオオオ！！！！！！

「うわっ、先生ホント弱いんだな」

「お兄ちゃんはボードゲームなら運まかせのゲームだろうが敗率100%だからな！」

「ふふっ、どうしたんですか、麟様？どうやったら二人で遊んで借金2兆円とかになるんですか？」

「……俺、死ぬ」

「あぁっ！白星！！！」

「負けたのに往生際が悪いですよ、麟様」

「うるせー 死ぬつつってんだろ つか何でちうたんここに居るんだよ 練習してたんじゃないのか」

などと喚きながらジタヴァタと寝転んで暴れまわる。

「うぎっ！さっき一個魔法使えるようになったんだよ。うぎっ！

「火よ灯れが使えるようになったんだよ！」



「マジ？見せるべき。死にたくなければやく見せるべき」

「プラクテ ビギナル 火よ灯れ！」

ぽっ……と、かなり優しい火が指の先に灯った。

「クッ……やるじゃねえか……タバコにも火がつけれるレベル」

「いやいや、たかだかあの程度の魔法でああなるお兄ちゃんがおかしいんだよ」

「どうなるんだ？」

「こうなる」

ゴオオオオツ！などという音と共に火柱が上がる。

「……そっちの方がすげえじゃねえか……嫌味か？」

「いやいや、こういう魔法じゃないからね！そのちっさい火が本来あるべき姿だから！火柱が上がる魔法じゃないから！！」

「お兄ちゃんは非殺傷魔法を殺人に使えるからね」

「求めちゃいねえ！！」

「ところで先生がつけてるその指輪、それもそこで買ったのか？」

あ、そう言えばこんなあったな。

あれ？誰かにもらったんだっけ？

「それはお兄ちゃんと初めて会ったときからつけてるよね？どうしたの？」

「いやあ、誰かにもらったような気がするけど全然覚えてないわあー。むしろ良く覚えてたな、エヴァ」

「そりやお兄ちゃんの事だもん」

「「ねー」「」

「で、そりやどついうもんなんだ？」

「ああ、何にでもなる」

「は？」

「だから何にでもなるんだよ。ほれ」

そう言っつて調理道具を作る。

「あとはこんなんも」

調理道具一式を消してCR80を作る。

「便利なもんだな。それも魔法具か？」

「さあ、魔法具なの？」

「魔力は全く感じられないから魔法具じゃないと思うんだけど、なんだろ？」

「って持ち主が知らないのかよ」

「いや、覚えてないだけだ」

「威張るところじゃないな」

へっ！

「これから教えるのはとても大事な事だからしっかりと覚えておくよ  
うに！」

「はい！」

「はい！」

「はい」

「エヴァと茶々丸はいい。  
まずは足を肩幅まで開く」

「二つつか？」

「で、服の袖をつまむ」

「ふんふん」

「引っ張りながらこう言っ

「……」

「チャッチメントディスノ!!」

ズコーー!!

ってこけないで!!

「なにやらすんじゃー!!」

「やっぱり一目でシラナミってわかる目印がほしいよな……」

「無視すんじゃねえよ!!」

「よし、解散解散!!これから俺はシラナミのロゴを作る!!」

「コラー!!」

「ほら、行くぞ、長谷川千雨。いや、もう家族だしちつと呼ぶべきかな?」

「そうですね、行きましょう、ちつたん」

「もうどつどつ言わねえからせめて千雨って呼んでくれ……」

ちうたんが引つ張っていかれた。あふん？

「さて、この『闇の福音』、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・シラナミの教えを受けるからには、貴様には人間最強の魔法使いになってもらうぞ！と言いたいところだが、どうせお兄ちゃんが守ってくれるからそれほど強くななくてもいいだろう。少しくらい自衛ができれば良しとする！

そして名前のA・Kはお兄ちゃんにつけてもらった『アタナシア・キテイ』の略だ。羨ましかろう！！」

「あ……ああ」

何だコレ……

「ちなみに始動キーだが、魔法がある程度のレベルに達したら考える。何なら一緒に考えてやってもかまわんが、普通は自分で考えるものだ。」

そして私のリク・ラク・ラ・ラック・ライラックはお兄ちゃんに考えてもらったんだ。羨ましかろう」

「そうだな。」

でも今使ってる始動キーは先生のもんならどろ？」

「いや、あれは魔法学<sup>ヒキナー</sup>童児用の始動キーだぞ？」

「じゃあ何でそんなもん先生が使ってるんだよ？」

「私が聞いたときは、『別に魔法とかそんな使わんしのつ』と言っていたぞ」

「そうなのか？」

「魔法など使わなくても充分強いからな」

そんなもんなのか。

「では他の魔法を覚えてもらおう事になるが、見るからに闇の魔法が得意そうな顔をしているな」

「どつという意味だよ」

「そのまんまの意味だ。魔法の射手を使ってみる。呪文は『魔法の射手 闇の一矢』だ。

さっきも言った通り、発動体が自己と外を繋ぐ扉、橋である事を意識しろ」

目を閉じ、意識を指輪に集中させて呪文を唱える。

「プラクテ ビギナル 魔法の射手 闇の一矢」

人差し指の指輪に力が集まる感覚がある。……が

「ダメだ……」

「目は開けていいぞ。射手というくらいだ。目を閉じていては普通当たらん」

「そりゃそうだな。絡繰は魔法を使わないのか？」

「私のことは是非茶々丸、とお呼びください。」

私は魔法が使えません。ですが魔力を使ってこういう事が出来ます」

そう言つて背中辺りからガシャン！と鳴つたと思えば空を飛んでいった。

わかつてても慣れないもんだな……。

「ちなみに茶々丸の兵装には魔法を使ったものも多くあるぞ」

「そりゃ便利なもんだ」

「肉体改造すればあるいは……」

「それはもういい！」

結局、魔力が集まる感覚はあつたものの、その日は魔法を撃てなかった。

「そんな一朝一夕で身につく訳がなかつ。皆苦労して覚えるものだ」

「ま、そりゃそうか。一つ使えるようになっただけでも万歳って訳だな」

「ただいま戻りました、麟様」

あ、みんな帰ってきたか。

「まじか。わかりやすそうなシラナミのマークできたけどどう？」

ドラッグレーサーマシン風にアルファベットを並べたロゴマークだ。我ながらいかしてる。

「素敵だよ、お兄ちゃん！」

「かつこいいです」

「悪くないんじゃないか？」

「横に伸びすぎた。これもドラッグレーサーだわ。アリだな。これをワッペンか何かにしよう」

「そうだね、お兄ちゃん」

「ところで、そろそろこちらに来て24時間が経過いたしますが、帰りますか？」

「おお、帰ろう帰ろう、そつしよう！」

「もうそんな経ったのか。って、そつという言い方するって事は24時間経たなきゃ帰れないって事か？」



「そついですね。ちあ、そろそろです、行きましょ」

「わあい！」

帰った。

#### 044 世界最速のロゴマーク。(後書き)

『帰った。』って何やねん。  
どんだけ手抜くねん。

ちうたんが魔法『チャツカマン』を覚えました。

前書きの通り、ロゴマークの画像はありません。  
考えてもいません。  
つくろうかな？

なんとか日が変わる前に投稿したいので、この辺で失礼いたします。  
明日はえげつないハードスケジュールのため更新できるかわかりません。

では、今回もありがとうございました。

045 世界最速、メタ発言。(前書き)

これはひどい

045 世界最速、メタ発言。

「夜じゃねえか」

「一時間って言ったじゃん。まだ夜中の3時じゃん」

真夜中の隣です。

「寝ようぜ」

「そう言いながらナチュラルに同じ布団に入ってくるお前らを見るとどんな顔すればいいのかわからなくなるな」

「笑えば……いいと思うよ?」

「うるせえ」

一緒に寝ました。

（朝）

「おはピース 隣によん」

「お兄ちゃんウザかわいい!」

「隣様、臭カッコイイです」

「先生キモめんどくさい」

「あれ？ちうたんのだけパーフェクト悪口じゃね？

いいの？俺のワイングラスより薄いガラスのハートが粉々に砕け散  
つちやうよ？」

「散れよ」

「もう食事が出来ますよ」

顔を洗って食卓に着く。

「うえへうえあーい！！（いただきます）」

「「「いただきます」」」

「うまっち、うもっち（とてもおいしいですね）」

「本当ですか？ありがとうございます」

「今先生何て言ってたんだ？」

「うまっち、うもっち と言っていました」

「ペペペペペ（あははは）」

「もう意味がわからん」

「お兄ちゃん、お行儀が悪いよ」

「往生際も悪いです」

「性格と態度もな」

「そつだ、俺死ぬ（そつだ、俺死ぬ）」

「送っていかなくても大丈夫？」

「大丈夫だつて」

「私もついていきますのでそんな心配しないで下さい」

「しっ、心配とかしてねえし！！別に何かあってもかまわねえし！！」

「茶々丸、涙目お兄ちゃんブロマイド」

「ほいきた」パシヤ

「さつさと帰っちゃえ！！」

「いや、だから帰るつつつてんじゃねえか」

「ジャアナ」

「エヴァ、何でチャチャゼロ機嫌悪いん？」

「ここまでほとんど全く出番が無かったからじゃない？」

「むしろ、私たちの出番の多さによって姉さんのキャラがぶれない事に感謝してもらいたいくらいですね」

「チョット何言ッテンノカワカンネエナ」

「また来い。貴様なら歓迎してやる」

「ああ。じゃあな、エヴァ」

「おっばいばい」

「先生はまれに死ね」

「まれに死ね！？？どういうこと？ねえ、ねえ！？？ああ、無視して去っていくちうたんの背中が凜々しい！！」

日の丸を背負う幻影が見えました。

「ひ〜まひまひまひ〜まひま〜」

3日に一回カラオケに行かないと死ぬ。嘘だよ。

「お兄ちゃん、囲碁やるうよ〜」

「チャチャゼロとやれ。俺は寝転びながら歌を歌うのに忙しいんだ」

「じゃあ仕方ないね。おい、チャチャゼロ、囲碁やるぞ」

「妹トヤレヨ。俺ハニイサンノ歌ヲ聴クノニ忙シインダヨ」

「おい茶々丸、囲碁やるぞ」

「あ、すみません、マスター。今姉さんの関節の掃除中なんで後でいいですか？」

こいつどんどんふてぶてしいな。

「む〜!!」

ふくれっ面エヴァを脳内SSDに保存。

保存した画像を脳内D、E、F、Gドライブにコピー。

左手に持ったスケッチブックに鉛筆で出力。

出力したふくれっ面エヴァを額に入れて飾る。



「この間なんと3秒!」

「ほらほら、見て」

「なんと、これは素晴らしい。私にも一枚いただけませんか？」

「ちょっとまってな、ほれ」

「ありがとうございます。シラナミ家の家宝にします」

「もうなってる」

「タイシタモンジャネエカ。ニイサン何デモ出来タンダナ」

「何でもじゃないわよ。出来ることだけ」

後ろにネコの幻影を浮かばせる。

「お兄ちゃんは声も変えられるしね」

「そう言われてみればそんな話もあったな。022あたりで」

「今日はメタくさいね」

「いつになくバイト先の雰囲気にならされてるんだろうな」

「バイト先……ですか？」

「あれ？俺今何か不思議なこと言ってたな」

「才前ラ本当ニ今日ハ好き放題ダナ……」

「あ、そうそう、3-Aに幽霊がいるって階段な」

「怪談だよ、お兄ちゃん」

「麟様はおつちょこちよいですね」

「何で会話なのに漢字の違いがわかるんだろっな？」

「さよっぺがさあ、さよっぺがさあ。俺にとり憑こうとしてんのよな」

「あの色白幽霊が？何でまた」

「ナチュラルに話しかけてもつたんよ。で、いつその事取り憑かせようと思っつてね」

「ふんふん」

「所で、そのさよっぺ？というのはどなたでしょうか？」

「例のクラスメイトの幽霊。コイツ一人でクラスの平均点を大幅に下げるとんでもない奴さ。」

「で、思ったから超と八カセにさよたんのBODYを作ってもらったんだよ」



「はあい」

「イツモ以上ニ今日ハ意味ガワカンネエ」

疲れてんだな。今日は寝よう。

045 世界最速、メタ発言。(後書き)

ほんとごめんなさい。

思考能力に著しい障害があるようです。

一時的なものだと思います。

昨日、結局帰ってきたら日が変わっていて、今朝からレクリエーションと言つ名の拷問を受けていました。

バトミントンなんですが、まさかラケットを振ったくらいで筋肉断裂とは……。

<http://3858.mitemin.net/i30017/>  
ロゴです。ホイールベース長いです。

では、次回はちゃんとやりますのでどうかお願いします。  
今回もありがとうございました。

046 世界最速、Ghost Wife。(前書き)

遅れました。

046 世界最速、Ghost Wife。

『……………うらめしや……………』

「ほーん、やっぱりバカだわネギ先生」

「そ、そんなあ……………」

「『すおーんぬえあー』じゃねえんだよ！クソボケ！」

「そ、そんな事言っていないですよおー！」

やっぱり気付いてもらえないですよ……………。この前出席を取った時に呼んでくれたのもきつと気のせいなんですよね……………。

『あのお……………うらめし……………』

「うるせえ！…！てめえに怨まれる謂れも覚えもねえんだよ！すつこんでろ！…！」

『ひいっ…！ご、ごめんなさい、ごめんなさい！…！』

「わあっ！ど、どうしたんですか、麟先生！？」

「あ？何でもねえよ！何でもねえんだよ！…！」

あれ？

今……………私に言ってたんですよね？

『ねえ、見えてるんですか！？聞こえてるんですか！？』

もう少しだけ……頑張ってみます！

『ね、ねえ、見えてるんですよ！聞こえてるんですよ！先生  
！……』

「見えねえ聞こえねえ」

『なんだ、聞こえないのか……ハア……。って返事できるって事は  
聞こえてるってことじゃないですかー！……』

「ぬむぬぬーん！！聞こえぬったら聞こえぬーん！！」

『ぬ、ぬーん？』

「そして貴様に体をくれてやらん事も無い」

『ほっ、ホントですか！？』

「ウッソー　とうのはウッソー　とうのがウッソー　ウッソー  
もウッソー　さあ、どっち？」



『え？あ、えーと、えーと！』

「正解はあ・げ・る・でしたー！ハイ残念 タイムアップー！！というわけで、このデコイに入るんだよさよっぺ！時間が無い！さあ！早くしろ、間に合わなくなっても知らんぞ！！ハリーハリー！！」

『は、ひゃいつ！』

さよっぺを急かす隣です、こんばわ。

実は、夜中の学校に忍び込んでいます。

そしてこのさよっぺ用の体、なんと人工筋肉と人工血液、及び強化ゴム製人工皮膚にカーボン製骨格を使用した完全オーダーメイド製だ。

人間と何ら変わらない挙動が出来るようになっていた。

人間用の体じゃないから、脳移植したって動かないけど、幽霊ならなんかいけそうな気がする。

なんとたつてこの日のためにオカルト板で知り合った大学生に凄腕の霊能力者を紹介してもらって、その霊能力者からイタコさんを紹介してもらって、そのイタコさんに大学生を紹介してもらって、大学生に凄腕の……

とにかく、もらってきた霊媒用のステキなロープが脊髄を通るように通してある上に、なんかいけるかも知れない(?)から魔力を溜めれる指輪を心臓部にブチブチ込んだからね。

「……気分はどうだ、BABY？」

「す、すごい！触れる！机にも椅子にも先生にも！！」

「ひつふあるなよさよっふえ」

「ひゃあ！す、すいませんべっ！！」

「慣れない体ではしゃぎ回るからそんな事になるのよ、情けないわね」

「す、すいません、ごめんなさい。私、幽霊のときもよく転んでたんです」

「リンケージきたら浮くからシュレリア様でさえ転ばないっつーのに器用なGHOSTやでえ」

「しゅれりあさま？」

「さあ、誰だろ？」

誰かシュレリア様を知りませんか？

「そんな事より全裸で走り回るのはトレンドなの？目のやり場に困るんだけど、胸を見ればいいの？股を見ればいいの？ケツを見ればいいの？」

「ひ、ひゃああああ！そ、そんな見ないでください……」

「うなじもええのうwwwおお、髪で隠すか！その背骨もえろいwww座ったときに地面に押し付けられる尻もwww」

「ひーん！ひーん！！」



「グスツ……ひぐつ……ひつ、ひどいですよ……。もうお嫁さんに行けません」

「フウハハー！なら俺がさよっぺを嫁に貰えばいいんだな！！」

「わあ、お兄ちゃん大胆」

「男は度胸、何でもやってみるのさ」

「きつと気持ちいいぜ」

「「いえー」「パンツ」

「あのう……」

「何だ、相坂さよ」

「その、私をお嫁にもらってくれるって……ホントですか？」

「ならば問おう！お嫁になってくれるんですか？」

「えっ！？あ、あのう、そのお……、会ったばかりですし、お互いのことをもっとよく知ってから、あのう……」

「そんなもん、これから知っていけばいいんじゃないか。な？それとも、さよは俺のこと……嫌いなのか？」

「い、いえ！そんな事ありません！！」

「ならば良いではないか。お兄ちゃんの嫁になれ、相坂さよ」

「は……はい！よろしく願いします！！」

お嫁さん、ゲットだぜ！！

「わあ、ホントに歩いてる！うれしいなあ！」

アハハンウフンとさよっぺが憑いてくる。  
いや、もう嫁になるんだし、さよっぺもないよな。

「おい、さよ」

「あ、はあい」

「お前は俺の嫁になるんだし、これからはさよって呼ぶわ」

「は、はい。じゃあ私は麟さん……と」

「んへへー」

「おい、帰ったぞ」

「お帰りなさいませ、マスター、麟様。そちらの方は、相坂さよさんですね。」

私からは一応、初めましてでしょうか。出席番号10番、絡線・シラナミ・茶々丸です」

「あ、これはご丁寧に。1番、あいさ……白波さよです」

「ん？もう名乗るのか。なら私も、貴様をいつまでも相坂さよとは呼べんな。よろしく、さよ。これから貴様も白波（しゅう）の家族だ」

「そつだそつだー！」

「ふふつ。よろしく願いしますね」

この後、チャチャゼロの紹介とか、そんなもした。

「ナンカ才前、俺ト似テル気ガスルゼ」

「へ？そつなんですか？」

この人はチャチャゼロさん。

3人目の『シラナミ』だそつです。

シラナミって麟さんの苗字ですよね？

「ソレ、才前ノ体ジャナカッタンジャネエカ？」

「そつですね。今日いただいたばかりです」

「フーン。マ、頑張ンナ。砂ト力吐ク事ニ……ツテ、才前八ニイサンノ嫁ダツタナ。ジャア才前モ吐力セル側力……」

「へ？何ですか？」

「何デモネエヨ。デモ、コレカラ色々大変ダト思ウガ、ニイサンに愛想尽カサナイデヤツテクレ。

ニイサンハ、節操ガ甲斐性ノ100ブンノ1モナイガ、イイ人間（？）ダカラナ」

「浮気性つて事なんでしょうか……」

「イヤ、アリアアソンナモンジャネエヨ」

「も、もしかして、チャチャゼロさんも麟さんのお嫁さんなんですか？」

「ブーッ!!」

ワインをかけられちゃいました。お酒くさい……。

「ソンナワケアルカ！ニイサンガ人形ニ手エ出ス訳……」

「出す訳？」

「……………アルカモシレネエナ。何セ、妹ニモ手ヲ出ス位ダシナ……………」

「え、ええ〜!?!い、妹つてエヴァさんですか!?!」

マクダウエルさんって呼んだら「他人行儀だから貴様もエヴァと呼べ、さよ」と言われてしまいました。

「イヤ、確力ニ御主人ニモ手ヲ出シチャイルガ、俺ガ言ツテルノハ、俺ノ妹、茶々丸ノ方ダヨ」

「じゃ、じゃあ麟さんは、ご友人の妹さんにも手を出すほどの……」

「イヤ、マア本人モ悦ンデルミタイダシ別ニイインダガ……」

麟さん……あなた一体!?

「えくちっ!」

「お兄ちゃん、くしゃみまで可愛すぎるよお!」

「んあれー? 誰か俺のこと噂してんな」

「ベタだねー」

「せやねー」

同衾は籍を入れてからですっ! お母さんが言っていました!



って言われたからエヴァと同衾してまっまっ。  
通常営業やねんな。

「まあいいや、寝ろっぜ、エヴァ」

「うん、おやすみ……んちゅっ……」

余は満足じゃ。

046 世界最速、Ghost Wife。(後書き)

KCNの代理店なのにインターネット繋がらなくなるって何事なん？  
つてのが昨日の話です。

さよっペシラナミ計画。

修学旅行に連れて行ってあげたかったです！！

はあ、清水寺行きたい……。

奈良とかホントいつでもいけますからね。

つてか、ここが奈良です。

そういえば今日、バイト先の裏にもすごい大量の毛虫が群生して  
ました。

マジで毛虫の絨毯。

夢に出ます。

では、今回もありがとございました。

047 世界最速のお嫁さん。(前書き)

タイトル考えるのに一番時間使ってる気がする。

追記： とか言いながらタイトル入れ忘れてたWWW  
あたいのバカ！アホ！ボケ！

麟がぬめぬめとヒュムノス語を使ってるシーンがありますが、気のせいでしょうか。

047 世界最速のお嫁さん。

白波さよです。

今日は旦那様の家に暮らし始めて一日目の朝なんです。

とは言っても、まだ籍を入れていないので一緒には寝れないんですよ。

お母さんも言っていました。

コンコン……

「隣さん、起きてらっしゃいますか？」

「ん〜」

とってもかわいらしい声が聞こえます。

私よりも背の低い、私よりかわいらしい、とっても博識な、私の旦那様。

「失礼します」

そう言っただけで部屋の中に入ると、隣さんはまだお布団に包まって寝てました。

「んうー……んちゅ……」

親指をくわえて体を丸める隣さんは……

「かわいいでしょう?」

「あひゃあつ!!茶々丸さん!?!」

「んんう……」

「お静かに。」

……さよさん、ひとさし指を出してみてください」

「は、はい。こつですか？」

人差し指を立てます。

すると茶々丸さんが麟さんの口から親指を出して、私の指を麟さんのお口の中に……

「んちゅう……」

「んひゃっ」

すると、麟さんは私の指を吸い始めちゃいました。

「うん……んじゅ、ちゅ」

「やぁ……はぁ、ん……」

「すごいでしようっ？」

「んっ……離して、くださいい、麟さぁん……」

「ふふふ、無駄ですよ」

「んー……何だ、さわがしい」

「おはようございます、マスター」

お布団の中から裸のエヴァさんが出て……

布団が取れたら、辛うじて下まで見えないものの隣さんも裸で……

「なっ、なな、なんで……」

「なんだ、さよも居たのか。私たち兄妹は全裸じゃないと寝れんのだ。っん〜！」

「い、いっしょのお布団に！？そう言えば昨日チャチャゼロさんも……！」

「兄妹なんだから別に不思議でもなからう。お兄ちゃん、起きて〜」  
そう言ってエヴァさんが隣さんをゆすります。

「んぢゅっ……」

「あ……」

隣さんのお口からよだれが……

「もう、また指吸って、お兄ちゃんったらあ。んちゅっ……んむっ  
……じゅるっ……」

え、エヴァさんが隣さんに……きっ、キ……

「きすうー……」

「おい、どっし……！ちよ……お……」

「んふぁー……ん？どないしたん？」

なんか起きたらさよがもたれかかってたりんだほい。

「さあ？」

「きつとこの朝だけで起こったあまりの事に、脳の容量をオーバーしてしまっただんでしょ？」

「あまりの事？何があつたんだよ？」

「さあ？」

「今日も平和ですね」

色々準備も終え、食卓についた。

さよは椅子に座らせてある。あれから2時間も経つのにまだ寝てるなんて、将来有望じゃん。

「ん……うーん……」

「おお、起きたか」

「お、おあよーございまふう……」

「ちなみにもう朝食だ。いただきマツソオオオオウウ!!」

「「いただきます」」

「へ？あ、い、いただきます!」

「ぺちこぬーん!と両手を合わせて威勢良く挨拶をするさよ。」

「おいしい!おいしいです!」

「そうですか?そう言っていただけなら作った甲斐があります」

「ホントに……ぐすっ、こんなおいしかったんだあ……」

「涙腺緩っ」

「おいしい……うう、おいしいよあ……」

「私の奈良漬をやるっ」



「わたしの沢庵もどうぞ」

「俺のポークビッツも……そんな目で見ないでください……」

「あ、そうそう、間に合うかわかんねっけど、早けりや今日中に転手続きやら何やら終わらせるから心構えだけしといて」

「え？て、転入ですか？」

「いや、復歸にしとくか？……まあじじいに相談して決めるか。とりあえず、今は朝だから相談する相手は牛乳な」

「学校に行けるんですか!？」

「あア!？当たり前だろオが!！」

「ひい!す、すみません!！」

「ああ、気にするな、さよ。お兄ちゃんは発作的に叫ぶ病気にかかってるんだ」

なにそれこわい



そう言っ指したのが真つ白のVespa 125 GT-R。  
先々月くらいにバイク屋に行ったら、もうすぐ入ってくるとか聞いて、予約してまで買った最高の下駄だ。  
ちなみに30万円だった。

これを選んださよはなかなかいいセンスだと思う。遅いけど。

「なんでアレがいいと思ったん？」

「かわいらしかったから、つい。……ダメでした？」

「んなわけあるかアアアアアアアア！これをかぶるんだ、さあ、早く！そしてグローブをはめる！」

指輪を防具一式に変えてさよに押し付けるツ！！

「は、はい！でも何で？」

「いいか、俺は絶対にこける事は無いし、事故も起こさない。でも、もしさよが何を考えてかバイクから飛び降りるような事があった時、それが命を守るんだよ！でも本音を言うと何があっても怪我してほしくないからな。ほら、サポーターもつけて」

「麟さん……はい！」

「……先に行っておきましょうか」

「……そうだな。お兄ちゃんならアレで二人乗りしてても追いつく  
だろ」



防具を指輪に戻す。

「わわっ！どうやったんですか？」

「気合だ」

「へえー、すごいんですねえ」

アホだなあ。

「じじい！いるんだろ？入るぞー！」

「い、いいんですが、勝手に入っちゃって」

「いいのいいの」

「いや、ようないわい。そちらの娘さんは、……相坂さん？」

「ひいっ！ぬらりひよんさんに知り合いません！ごめんなさい  
「！」

「いやいや、わしじゃ！近衛じゃ！」

「ん？お尻合い？」

「近衛？……近衛くん？」

「おお、覚えてくれておったか……」

おいてけば鱗。

「やだあ、懐かしいなあ……何でぬらりひょんなんでやってるんですか？」

ワロタｗｗｗｗ

「いや、別にわしも好きでこうなった訳じゃないんじやが……、一応、ワシが今の麻帆良の理事長じゃよ。相坂さんの方こそ……てっきりもっ……」

「ハイハイ、ストッププー！」

知り合いみたいだから単刀直入に言うけど、さよの戸籍を用意して欲しい。いや、無いなら無いで別にかまへんけど、とりあえず……  
- - Aに入れさせる」

「ん、おお！すまんすまん。おぬしがおった事をすっかり忘れとったわい」

「ひでえ」

「わ、私は忘れてませんでしたよ！」

「ええ子やお。

つてかアレか？知り合いか？」

「はい。昔クラスメイトだったんですよ」

「うむ。懐かしいのう……あれはまだワシが……」

「いや、そういうのはいい」

「つまりらん奴じゃ。」

では、病氣かなんかの療養から復帰とかそんな感じでええかの、相坂さよ君」

「はい。よろしくお願いします、近衛くん」

「それはそうと……、何で白波君といつしよに来たんじゃ？」

「え？そ、それは……私が隣さんの……お嫁さんだから……ぼっ  
「いやんいやんしながらさよが言ってる。  
この表現伝わるの？」

「ブーーーーッ!」

「うわっ!汚え!」

「な、なな何と、お主……!」

「全て事実だ!じゃあ頼んだホィ。行くぞ、さよ」

「お願いしますねー」

「転校生だゴルア!!!」

ぼふん……

と黒板消しが頭上に落ちてきた。

「……」

「「「……」」」

「いくら……ホントは転校生じゃなくて……病気から復帰してきた子の紹介だからってこれはひどいんじゃない?」

「じ、ごめんなさいです」

「xO yorra hYImOmOrO ayulsa Nar  
Utaki / .」

「い、意味はわからないけど物凄い憎悪だ……!」

黒板消しを頭に乘せたまんま教壇に立つ。

「俺の頭上にある悲しみのチョンマゲには触れない方向で、長期休養を終えた生徒を紹介します。」

カモーンさよ!!!」



「はい。失礼します……って隣さん、どうしたんですか、そんなの頭に乗つけて！」

「俺の意思じゃない。強いて言うなら世界の意思」

「ふふ、おつちよこちよいなんですからあ」

うれしそうにハンカチで頭をパタパタやってる。喜んでるみたいだから俺のチヨーク美白の事はまあいいかな。

「隣さん、その子は？」

「ああ、つい最近まで『しゃばだばらったん病』で療養してた相坂さよ」

「……何そのふざけた名前の病気」

「あれ？知らない？物凄い存在感と見た目が薄くなってなかなか人に見えなくなる病気」

多分嘘は言っていない。

まあ嘘平気をつくけど、俺。

「いやいや、幽霊じゃあるまいし」

「ふふふ、そいつはどうか……。ちなみにさよの席はそこな。わかってるだろうけど」

「はあい」

ちなみに、こつから例によってさよにウルトラマシンガンな質問攻めがあったけど、ネギとあすにゃんが遅刻してきたのをはやし立ててうやむやにした。

ティウンティウンティウンティウン……

これは校内放送の合図であって、べつに死んだ時の音じゃないんだからねっ！

『3 - A 相坂さん、3年英語科 白波先生、至急学園長室までお越しください。繰り返します……』

「……呼ばれたな」

「……呼ばれましたね」

ちなみに、今ものすごい会話が少ない。  
というのも……

5分前、教室

「ヒヤッハーアー！！世界最速だアー！！」

ブーンブーン!!」

修学旅行の用意でいたいみんな帰ってしまったって、教室には俺しか居ない。

俺は、教員用のローラーがついた椅子に跨って教室内を縦横無尽に駆け回ってた。

「フォーーーーン!!ブーンブーン!!!!」

「えへへー、忘れ物しちゃいましたー」

「フォーーブブブブブ (レブリミットの音)」

ガラガラ っと、さよが扉をスライドさせて入ってきた。

「ブー……ん……よし、椅子には異常なしだな」

「その……「じめんなさい」……」

「何がさ……」

「その、椅子の……点検を見ちゃって……」

「今は知らないふりする所だろオーツ!!!!」

明日って今って明日さ！要するに今さッ！

「きた」

「きました」

「何かあったんかの？」

「ええ、さっき「言うの？」何もなかったんです」

「……まあええわい。ハアー……、言っておった戸籍じゃがの、用意できたぞ。ハアー……」

「うん。ありがとう」

「ありがとうございます」

「ハアー……」

「抄本持って行く」

「失礼しました」

「うむ……」

後で（タカミチに）聞いた話だが、さよはじいさんの初恋の相手だったそうだ。

ちなみに幽霊やった事は知ってたらしい。

それであんなテンション低かったんか

ホンマどうでもいいわな。

「とうわけで籍を手に入れました。そして（魔法世界的に）籍を入れました。晴れて白波を名乗るが良い」

「は、はい！」

「良かったな、さよ」

「拳式はまた追って、俺の国でやるうぜ」

「麟さんって外国の人だったんですね！」

それにしても、お嫁さんって夢だったんですよ。うふふ、嬉しいなあ……。ありがとうございます！」

あれ？そうなのかな？

確かに日本語使ってる期間がトップクラスに少ないけど。

「かわいらしい夢じゃねエかア！！」

「ならば私がウェディングドレスを仕立ててやるう」

「ありがとうございます！」

ちなみに婚前交渉はダメなんだってさ。  
でもそういつの悪くないと思うよ、俺は。

047 世界最速のお嫁さん。(後書き)

Vespa GT-R VNL2T  
2st単気筒

123cc

7.8ps/5000rpm

前後ドラムブレーキ

みんな大好きベスパです。

この名前聞くとGS美神を思い出すのは私だけじゃないはず。

ホントは160GS Mk1を出したかったんですが、びっくらするほど資料が少なかったのでこちらに。

さよたんにはベスパが似合うと思います！

ちなみに、もしこれの資料も見つからないようならリードに乗せてました。

リード大好き！

部屋を掃除していたらファミコンが出てきたのでドラクエ4をやっていたらこんな時間になった豚野郎です。

アリーナ仲間にしたらレベル80でした。何やってたんだよ、過去の俺……

ちなみに、部屋掃除をする前にバイク屋さんに行ったらスオーミーのエクストリームが39,000円で置いてあって、思わず買います。うになってしまいました。

もう持つてるのに。

ここいらでひとつ、調子にのってアンケートなぞを。

別にハーレムものにするつもりなんて無かったのに妙な雲行きになつてきたんで、いつそハーレム物語でもやったるかと。

誰かいい人いませんか？

あすにやんとどか以外で、『こいつを麟の毒牙にかけてやるんだぜ！』って相手を。

全員ハーレムに加えられるわけではないと思いますが、がんばります。

では、今回もありがとうございました！



048 世界最速、お買い物。(前書き)

最近そんな最速っぽくない。

048 世界最速、お買い物。

「うっっっっアイスアイス」

今 アイスを求めて全力疾走している俺は  
女子校に通うごく一般的な男の娘（？）

強いて違うところをあげるとすれば

ふ菓子に興味があるってところかな

名前は白波麟

そんなわけで帰り道にある

駅前の駄菓子屋にやって来たのだ

ふと見ると

ベンチに一人の若い女が座っていた

ウホッ！いい女……

ハッ

そう思っていると突然その女は

俺の方を見ながら

手を振りながら近付いてきたのだ…！

「麟くんやん。原宿まで来て何してんの？」

「ふ菓子」

「こんなとこに無いと思うけど、帰ったら私が買ったるか？」

「ほんまに？わーい！」

「その代わりウチの買いもんに着いて来てよ」

「たかだか30円やそこらであつかましい女やの。とか思てへんからええよ」

「もう、ややわあ」

俺の頭ハンマーがハマリそうなへこみかたしてない？  
ごめ！とか聞こえたんだけど。

「何を買ったのよ」

「アスナの誕生日プレゼントやねん。皆には内緒やで？」

「へえ。あすにゃんのねえ。何買ったかは決めてへんの？」

「それもこれからやねん」

「別に、女の何買うか決まってへん買い物モン付き合っつってクソめんどくさいねなあ。とか思てへんから行こか」

「うぬー」

苦っ！正直ゴーヤをなめてた！！  
ってアレは……？

「ん？」

「どしたの柿崎」

「いや、アレ麟くんとこのかじゃない？」

「ホントだ。何やってんだろ」

「てかこう見るとあの二人、完全に姉妹ねー」

「でも麟せんせいって男だよね？」

「あれ？そうだったっけ？」

「そうだよ、だってあのエヴァちゃんも『お兄ちゃん？』とか言っちゃうくらいだよ。教室内でキスとかしちゃうくらいだよ。間違いなく男だよ」

「それが判断基準になるかどうかは置いて、エヴァにやんのブラコンっぷりからして、二人のあの距離はマズいんじゃない！？同じグラスからジュースとか飲んじゃってるよ！？」

「あ、麟先生、電話かけてるよ？」

「なになに？』今日、帰り、遅くなるよ』？こ、これってすごい事

言っていない!？」

「むしろアンタの耳がすごいわ!」

桜子の耳はどうなってんのよ!？」

「と、とにかくエヴァちゃんに連絡しないと!」

「柿崎、あんたエヴァちゃんの番号知ってるの!？」

「連絡網に書いてあった。携帯のほうと家のほうがね」

「ちよ、まちなよ柿崎!そんな事したらエヴァちゃんがダークサイドに堕ちてこのかを刺し殺しちゃうよ!？」

『ん?誰だ?』

あ……考えてなかった……。

「な、なななんでもないよ!？」

『その声……柿崎美砂か?先程お兄ちゃんからも電話があったが、もしかして一緒にいるのか?』

「あ、あーその、一緒にいるっていうか居ないっていうか……」

『煮え切らんな。はっきり言え!』

こ、怖え……。3-Aの中でもおとなしい方だと思ってたエヴァちゃんが電話越しでもド迫力だよ。

「そ、その……」

『もういい。貴様等、今どこに居る?』

「ひゃい!原宿のCECIL McBIEWってお店の前でしゅ!  
!」

『今行く……ブチッ、ツッ、ツッ、ツッ』

「ど、どどどどどーしよぉー!」

「何があったのよ、柿崎!」

「え、エヴァちゃんが……かつて無い迫力で『貴様等、今どこに居る?』って聞いてきたから思わず……」

「ちょ、エヴァちゃん何て!?!」

「『今行く』ってすっげー低い声で言っただけで電話切った……」

心なしか膝が武者ブルってんよ……。

「じっ、じっのかー!」

桜子が大声でこのかに声をかける。

「ん?桜子に美砂にまどかちゃん。どないしたん、そんな慌てて?」

「ん？桜子に美砂にまどかちゃん。どないしたん、そんな慌てて？」

「敵襲かぁー！！ものども、であえい！であえい！！」

「このか、逃げて！！」

あ、今回も無視の方向ですか。最近快感です、又フヒｗｗｗｗ

「え？逃げてって、何から？」

「さ、ささ、刺されるよ！？」

「何だ貴様等、そんな慌てて」

「だからエヴァちゃんが痴情のもつれでこのかを……って、ひいひいひいひいひい！！」

「速っ！エヴァちゃん速っ！！」

「あれ？エヴァじゃん」

「お兄ちゃん！」

あはは、急に抱きつくとはこやつめ。

「で、私が痴情のもつれで近衛木乃香に何をするんだ？柿崎美砂、ん？」

「い、いえその、もしかして気にしてない？」

「は？何をだ？」

「先生がこのかといっしょに買い物してるのを……」

ここに芋を植えよう。

「何で私がそんな事を気にしなければならんだ」

「だ、だってエヴァちゃん、あんな隣先生にべったりなのに、先生がほかの女の子と仲良くして気にならないの？」

じゃがいもとさつまいもあるけどどっちにしようかな。

「別に、どうでもいい。お兄ちゃんが誰に手を出そうが、誰とやろうが、最後に帰ってくるのは私の所だからな」

「か、漢だ……！！」

長芋にしよう。

「とうるか私もお兄ちゃんが手を出した女には手を出すつもりだしね、お兄ちゃん」

「え？ああ、うん。やっぱり里芋にするわ。俺里芋嫌いだけど」



「だよー?」

「え?今の会話の中に何があったの!?  
ってかエヴァちゃんホントに男らしいな!」

「なあんだ、あたしらの勘違いか」

「娘が明日誕生日だからこんな殺人犯がいるかもしれない部屋にいられるか!俺はこの仕事を終えたらまとまった金が入るから田舎で畑仕事でもして暮すんだ!」

「ちょ、何をすごい勢いで死亡フラグ建ててるんですか!」

「やったか!」

「やってない。」

「やってないそうです。」

「でもそついう事なら、アスナの誕生日会、応援しちゃうよ!せつかくだしさよちゃんの歓迎会も兼ねてさ!」

「むしろ参加しろよ。はい、資金。俺若者の感性とかわかんないか

らこれでプロデュースしてあげて」

と、内ポケットからお金を出して渡す。

「うわっ！札束！！」

「これ一千万くらいあるんじゃない!？」

「いや、普通に100万だから。余ったらクラスのレクリエーションとかそんなのに好きに使えよ」

「太っ腹あ」

「せやろ?惚れるやろ?」

「ややわ隣くん」

「ごぬ！」

……できれば傷害罪で捕まってほしくないんだけど、どうするべきなんだ?

「カラオケボックス貸し切りじゃああああい!！」

「クラスのみんなも呼ぶよー!」

「うん、頑張れ。超頑張れ。じゃあ行くつぜいのちゃん」

「そつやな、行こか。エヴァちゃんも来る?」

「別に神楽坂明日菜の事なぞどうでもいいが、お兄ちゃんが行くなら付いていくぞ」

「ほな行こな。せつちゃんも来るんやろ？」

「な、なぜ私がここにいと!？」

うわっ、出た!

「うわっ、出たな桜咲刹那！」

「せつちゃんはウチのストーカーやさかいなあ」

「こ、このちゃん……」

「本人からも公認になってしまったストーカーは最早ストーカーと言えるのか？」

「わ、私はストーカーなどではありません」すん!!! ってちよつとお  
!!!」

「よし、行こうぜー」

「うん、お兄ちゃん！」

「何買うたるかなあー。ホラ、せつちゃんも行くでー」

「あ、はい!今行きます!」

「お、コレなんかどやさ」

そう言ってバーベルを手に取る。

「うわぁ、麟くん、ようそんなん持てるなあ」

「最強やから!」

「何キ口あるんですか?」

「さあ。やっぱりこんなん欲しがる女子中学生なんぞおらんわな。はい、せつちゃん」

「あ、どうむうお!」

「どうむうお W W W W W W W W W W」

「アハハ!せつちゃん、そら卑怯やわ。ハハハ!」

「ちょー!これホントおもっ……。麟先生!なんとかしてください」

「いや、置けよ」

「お兄ちゃん、コレを神楽坂明日菜に着せるのはどうっ..」

エヴァはフリッツフリのドレスを持ってる。

「アスナってこんなんはそれほど好きちゃうみたいやねんけどなあ」

「知るか。着せる。店員さん！これいつこちよーだいつつてんだろーが無視すんなやゴルア！」

「お、おお、おちついてくださしいお客さままー！..！」

「いや、むしろ貴様が落ち着け」

ラッピングしてもらったにょん！

「あ、このオルゴール.....」

「どうしたのですか、お嬢様？」

「ん？あんた誰？」

「ど.....どうしたのですか、こ.....このちゃん」

ごつつええ笑顔でひどい事を言われたせつちゃんが真っ赤になって  
涙目で「こ.....このちゃん.....だと!？」

「こ、これが萌えか……!!」

「あやうく私も持ち帰るところだったよ」

「あかんで、このちゃんはウチのモンやねんから」

「そんな……『ウチのモン』だなんて……」

「カーツ！ペツ！で、何？そのオルゴールへシューツ！！！アメ  
リカンバトルドーム！！」

「……」

そんな生臭い目でこっちを見るなよせつちゃん。

「ああ、これなあ。アスナの好きな曲やねん」

「ならばコレを貰おうそうしよう」

「そうやな。きっとアスナも喜ぶで」

「ほな明日の楽しみやな。時間とかどないしよか？」

「昼からだろ。午前中は修学旅行にもってく荷物の確認も要るしな」

「そうだね。じゃああたしから皆に連絡しとくよ。アスナとネギ  
くんにはこのかから頼める？」

「うん。ええよー」

「じゃあまた明日なー」

「はいはい」

「ばいちゃー！」

「修学旅行の準備じゃオルルルルア！！！！」

「はい！」

「下着！ぱんつ！ドローズ！そしてたまには思い出してあげてください。禪！！」

「わあ！！！」

パチパチパチ

「俺は越中より六尺の方が好きです」

関係ない話だけど、海水浴場に普通の水着で行ったら警備員に止められて「わしは男じゃー！」とか言いながら引き摺られていったアイツは元気なんだろうか。

「勝手がわからないだろうから、ある程度は俺が荷物を纏めて置い





「はい、大丈夫ですよ。何かあるんですか？」

「ひ・み・つ？明日になってからな」

「はあい」

あ、さよ用のプレゼントトゥ買ってないやん、俺。  
明日の朝買おう。

048 世界最速、お買い物。(後書き)

ちよつとKCNさん、僕の休みの日に回線工事するのなんとかして。

豚野郎です。

昨日のヒロイン募集のアレ、まだやっていますよ。

素晴らしき紅マグロの世界 を聴きながら書きました。

そんなもん挟む余地も無いのに何度『マグロード』と書きそうにな  
ったか……。

というわけで、今回もありがとうございました。

049 世界最速、街道レース。(前書き)

前話の夜の話です。

049 世界最速、街道レース。

あ、呼ばれてたんだ。  
呼ばれてた麟です。

「今何時？」

8時だよ、お兄ちゃん

「行ってきたアアアアアアアアす！！！」

「どこに？」

「ホラ、レース。あの野郎、メコモメッコールしてくる」

「あ、麟さん、行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませ」

「私たちもすぐ行くからね」

「マアアアアアアアアアアアアア！！！」

フオウーンフオウーン……

「待たせたな！」

持っている中で一番速いバイクに乗って来いなどと言われて、さすがにY2K(036参照)は無しだと隼に乗って来た。  
今夜中だぜ？

「いや、それほど待つてないよ」

「そこは、『僕も今来た所だよ』だろ？これだからオッサンは」

「ははは、手厳しいね。君のほうが年上だろうに」

「しかし俺に挑戦なんて随分余裕こいてるんじゃない、タカミチい」

そう、タカミチだ。

クライスラーのダッジバイパーに乗って意気揚々とタバコをふかしている。

「確かに君は世界最速かもしれない、でもこの麻帆良において、はたして僕に勝てるかな」

「ハッ、ほざきやがれ。250で優勝したからって1300に乗れないなんて道理はないんだぜ？

四輪が必ずしも二輪よりも速いって訳じゃないんだぞ」

「井の中の蛙はどっちだったか、思い知らせてあげるよ」

「年期が違っただよ。後でべそかいても頭なでてやんねえ」

「そう来なくっちゃね。じゃあルールの再確認だ……」

学園長公認、麻帆良街道レースのルール

麻帆良中等部をスタート後、露天街を通り商店街に。

大きく回って高等部校舎周辺を旋回、図書館島でターン。

最後に大通りを通って中東部前。

これを3周して中東部の校門前でゴールだ。

3周で37.8kmある。

ちなみに、さつきからタカミチと話している内容は一種のマイクパフォーマンスだ。

かずみんが録画しているが、一応ライブでローカル配信もされている。

事の始まりは1週間前、DB2(013参照)に乗って巡航してる時にタカミチが張り合ってきて引込みがなくなつた所をじじいに止められた。

その後、今日ゲリラ的にレースをする事になつたけどなぜかじじいに知られてしまい、安全対策のために公認にされてしまった流れだ。

「どつちが速いか決めるのはチェッカーフラッグと結果だけだ。ここで言い合っても仕方ない。

大人気ないと言われてもここを譲ってやる訳にはいかねえな。全力で行くぞ」

「望むところだよ。さあ、行こうか」

タカミチも幌と窓をを閉じ石灰で引かれたラインに並ぶ。

観客に手を振りながら辺りを見渡すと、エヴァ達も来てたようで、こっちに手を振っている。

俺も手を振りかえしてエンジンをかける。

前を見るとザジとその他不思議生物が旗を持っている。

『さあて、間もなく始まります！司会は私、朝倉和美が！』

『解説は絡繰茶々丸がお送りします』

『『よろしく願います』』

『革ツナギにフルフェイスヘルメットの白波麟教諭！知る人ぞ知る数年前の世界大会を優勝した時の格好だ！』

『絶対に負けないう意志の表れでしょうか。対する高畑教諭も不適な笑みを浮かべています』

『左右で座席が違うようですが、アレは？』

『フルバケットシートですね。走行中に体がブレるのを防ぐため、そしてシートの剛性強化と軽量化のために装着されます。』

『また、車体が以前見たときより4cm近く下がっていますね。サスペンションも少し固めのセッティングを施されているようです。』

『なるほど、詳しいですね。さて、そろそろスタートでしょうか。』

心なしかエンジン音も先程より大きくなっているように思います！  
観客の熱気も司会席まで伝わってきますよ！』

『はい。中々見れないカードですからね。まさか誰が予想したでしょう。麟様と高畑先生の真剣勝負です』

『さて、ここでザジ・レイニーデイさんがスタートフラグを振った！！双方物凄いスタートだ！！前輪が浮きっぱなしだが、麟さんの方がややリードか！？とにかく、ものすごい音だあ！！』

『……そんな……？』

あ、はい。車体重量、空気抵抗、エンジン性能などの闘ぎ合せめいの中  
で、麟様の方がリードしたんでしょう。さて、間もなく最初のコー  
ナーに差し掛かります』

『おっとお！間もなくカーブだというのに双方全く減速しません！  
！ってか大丈夫！？アレヤバいんじゃない！？』

つて、曲がったあ！！いやあ、早速冷や汗をかいちゃいましたよ。  
茶々丸さん？』

『へ？あ、ええ。そうですね……』

『ん？どうかしたんですか？』

『いえ、恐らくですが、麟様はかなり……手を抜いていらっしや  
います』

『……へ？』

『高畑先生のクライスラー ダッジ・バイパーですが、だいたい5』



10馬力です。対する麟様のGSX-1300R隼ですが、こちらは改造によつてだいたい500馬力なんです』

『アレ？でもそれだと麟さんのバイクのほうがちっさいよね？』

『当然、馬力が速度とは言いませんが、麟様の隼は280kg、高畑先生のバイパーは、恐らく1500kg前後です。さらに言うなら、自動車とバイクでは当然風の当たる面積も大きく異なります』

『そ……それは……』

『しかしまだ短いストレートでしたから、それほど差が無いのも当然かもしれませんがね。』

と、もう高等部を一周し終えたようです。このまま図書館島の橋を走行することになりますが、現時点での差は0.1秒ですね』

『この差はどれくらいのものなのでしょう？』

『コースによりますが、ここで言うならだいたい50mほどでしょう？』

『はあ。私にはその差が広いのか狭いのか全くわかりませんが、とうとう双方図書館島の橋に差し掛かりましたよ！』

『はい。あ、アレは……！』

『ど、どうしたんですか茶々丸さん！』

『はい、恐らくですが、このキャプチャーで高畑先生がスイッチを上げていますね』

『ええ。コレは?』

『恐らくNOSでしょう。ナイトロス・オキサイド・システムの略で吸気性能を強化し、さらにエンジン内部を冷却することによって約1・1倍の圧縮比を出すことが可能です。これによって、通常のエンジンの排気量の150%の性能を引き出せます』

『とにかく凄いですね！確かに、麟さんと高畑先生の差が少しずつ埋まっていつています！

おおっとお！！陸橋も半分を超えた辺りで高畑先生が抜いた！！』

『目が離せませんね』

『そして完全に渡り切った所でターン！あれ？なんか麟さんのバイクさつきより速くないですか?』

『アレは何でしょうか……』

『茶々丸さんもわからないなら私にわかる道理は全くありません！つと、ここで高畑先生、またもスイッチを入れた!!』

『そんなに安いものでもないはずなんですが、流石は高畑先生と言った所でしょうか』

『しかし麟先生もどんどん距離を詰めていきます！つてか速過ぎない!?!』

『やっぱり手を抜いていたんでしょうか。それとも出せない理由が?』

『うーん……私にはわかりませんねー。っと、麟先生が抜き返したあー!!速い速い!!怒涛の速さです!!』

まあまあ速いけど、俺の敵じゃあ無かったわ。こっからツーリイングでもするかな。

って、随分着いてくるなあ。

あんな力ニ走りしてww。今なら周りに民家もないし、3秒くらい離しとくか。

『まっ、まだ加速したあー!!麟選手、後ろを振り返ったと思えばさらに急加速だ!!』

『データが入ってきました。今の高畑先生の速度が280km/h』

『に、にひゃくはちじゅうー!?!?』

『対する麟様の速度が350km/hですね』

『……レースって凄いなだね。』

ともあれ、流石の高畑先生もレーサーである麟さんには全く敵わな

いのか!！」

「間もなく両選手、こちらを通過します。少しずつ音も近付いてきています！」

撮影班は危険ですのもう少し下がってください!！」

「このままのスピードで10秒後にはここを通過します」

おっ、集まってるなあ。  
ちよっとサービスするか。

「おおっとお!!間もなく隣さんが通りますが!!前輪が浮きつぱなしたあ!!なんとというサービス精神!!ってか見てるほうが怖いぞ!!..!」

「流石は隣様ですね」

「って、シートに立ち上がったあ!!おい誰か止めろ!!思いっきり手を振ったまま通過して行きます!！」

「高畑先生も通過して行きます。現時点での差は2.86秒、かなりの差ですね」

『もう高畑先生の勝ちも絶望的なのか!?!』

「そんなこと無いわよ!?!」

「そうですね! タカミチが負けるわけない!?!」

「何だ、貴様等? ガキはさっさと返って寝ろ」

「麟さんが負けるわけないじゃないですか」

「言ったわね!?! だいたいエヴァちゃんだってガキじゃない!」

「何だ、もう一度あんな目にあいたいのか? お勧めはせんがなあ」

『観客席もヒートアップしてきています!』

『ちょっと待ってください。麟様が勝つに決まってるじゃないですか、アスナさん』

『せめてあなたには中立でいてほしかった! かなり混沌としてきています!』

麟さんは早くも図書館島でターンだ! それに高畑先生も続く!?!』

「あんたら表に出なさいよ!」

「ふん、ここが既に表じゃないか。さすがバカレットは言う事が違うな」

『負け惜しみはみつともないですよ』

『せめてマイクを切って話せ!!おっと、隣さんが何かを出したぞ!!』

『アレはペットボトルですね』

『ああ、お帰りなさい茶々丸さん。でも何でペットボトルなんか?』

『大方パフォーマンスでしょう。さて、もう帰ってきますよ』

『隣さんがペットボトルのフタを開けて……ええっ!?!』

『カウルの間から流し込んでますね』

『いったい何の意味が!?!ってものすごい煙だあ!!まさかマシントラブル!?!』

『あれは水蒸気ですね。この道沿いに蒸気の流れが出来上がりました』

『パフォーマンスとしては少し弱いですねってペットボトルを投げた!?!』

『見事にゴミ箱に入りました。余裕のアピールですかね?更に加速して行きました』

最早タカミチはミラーにも映ってないな。

ふはは。じゃあこのラップで本気を出してくれるわ!

『両者タイヤのところがすっごい赤くなってますよ』

『ブレーキの熱ですね。鉄も焼けるほどの温度です』

『凄いですねー』

『ええ』

『ってかバイクってあんな倒して大丈夫なんですか？』

『ええ。参考までに、麟様の優勝試合の画像を用意してみました。どうぞ』

『いや、こけてるこけてる！！最早倒すとかの次元じゃない！！！』

『当然今回は、路面とタイヤの違いを考慮してこのバンク角なんだと思われませう』

『いや、私にはどう違うのかさっぱりです。そういうしてる間にもどんどんその差は離れて行きますよ』

『麟様はもうターンを終えています。高畑先生は今橋に差し掛かったところですね。すれ違いざまにサムズアップをしていました。そういう性格が悪いですね、麟様』

『あ、あんたがソレ言っちゃうんだ』

「なんたつてお兄ちゃんだからな！」

「ちょ、全然誇らしげに言う事じゃないじゃない!!」

「は？」

「へ？」

『そうなんですか？』

「いやいや、こいつ等完全に盲目だから何言っても無駄だよ、神楽坂」

「千雨ちゃん!？」

『さて、こちらレースとは何の関係もない事がヒートアップしています!そしてもうすぐ麟さんが帰ってきますよ!!』

『決まりましたね』

『ゴォール!!チェッカーフラッグが振られました!』



キキィーッ！とスキール音を鳴らしながら停車。

そしてスタンドを起こしてバイクから降りる。

「明日って今さあ！」

『意味がわかりませんが、麟さんの勝利だあ！！なお、麟さんの倍率は1.7倍！！受付はこちらではありませんのでお間違いないきようお願いします！！』

『おかえりなさい』

『と、高畑先生も戻ってきました！』

ふぁうーんふぁうーんとエンブレを効かせながら減速、停車する。

「いやあ、完全に負けちゃったよ。僕もまだまだ修行不足かな」

「何、なかなか走れてたぜ。もし俺のバイクが125ccだったら負けてたのは俺だったな」

「こんなボデイに来る嫌味は初めてだよ」

「ぬははwww」

「お兄ちゃん！」

「おお、エヴァ、ただいま」

「おかえり！かつこよかったよ！」

「はい。凄かったです」

「世界最速だからな！」

「なかなかやるじゃないか」

「ちうたんも「ちうたんっていうな」来てくれたんだね！」

「高畑先生……」

「アスナ君。いやあ、かつこ悪いトコ見られちゃったな」

「そ、そんなこと無かったです！かつこ良かったです！！」

「そうだよタカミチ！負けちゃったけどすごかったよ！」

「ありがとう、二人とも」

なにこのホームドラマ。胸が熱くなるな。

後ろのほうでは「クソー、デスメガネが負けたかあー！」とか「あの子かわいいな」とか聞こえる。  
そうだろ、かわいいだろう。

『さて、じゃあ勝者の麟さんからコメントをいただきます！』

ちよ、マイク押し付けるな！

俺『あー、ふえんどうるぶるっとうんすびゅーぬべ』

茶々丸『今日は見に来てくれてありがとう。みんなの思い通りの結果になったかもしれないし、ならなかったかもしれない』

俺『すっぱねるーとうんむりよろべっつ、かもーすぱねっそーる』  
茶々丸『でも、僕が勝てたのはみんなの応援があったからだ。ここに感謝の気持ちを表したい』

俺『い、さもぬーると、ぐらっつえ、あすぶるーのくとむ、のびーのびそだつよ』

茶々丸『明日は学校がある人もいるだろうから、今日は早く帰って明日の準備をしてほしい』

俺『へぶぬーで、さめつーのぶ、すべれっついえ、鯖の味噌煮』  
茶々丸『教科書、ノート、宿題、鯖の味噌煮』

俺『忘れないように学校に持って行く』  
茶々丸『まあどうでもいいけどな。じゃあ解散！』

『……あ、ありがとうございました！』

茶々丸、最近高性能すぎるわ。

「じゃあな、タカミチ」

「ああ。また勝機があれば挑戦するよ」

「ないない。じゃあ帰ろうぜ」

「いや、私たち転移だからお兄ちゃんだけバイクで帰るんじゃないの？」

「ハア！？俺も転移するし！」

「ふふ、じゃあ行きましょうか、麟さん」

「ちうたんも送っていいこうか？」

「ああ、頼めるか？」

タイヤの溝が完全に無くなっちゃった。

スリックタイヤみたいだけど、その実天然のスリップタイヤなのだ！

そしてかなりの倦怠感があるが、これでもまだ9時なんだぜ……

「ところで、インタビューのアレ何だったの？」

「俺のファーストシングル、『おにんにんもみもみするだ』のB面の歌詞」

もみもみするだ。

049 世界最速、街道レース。(後書き)

コースと長さについてはけっこういい加減です。

初めはいい勝負をさせようと思ってたんですが、街道レーサーがGPレーサーと張り合っつてのがどうも想像できませんでした。いや、もっとRG500とか低い排気量のバイクを持ってこさせたら良かったのかも知れないけど、それだとタカミチが納得しないだると、勝手に彼の人物像を書き換えてる僕の脳に戦慄します。

ってかえげつなくオチが弱いな。

さよと魔法と千雨の関係については、色々あつたんです。

ちなみに千雨はまださよが隣のお嫁さんって事を知りません。

にしても眠い。おやすみなさい。

今回もありがとございました。

050 世界最速、パリイパリイパリイ!!! (前書き)

めるとだうなーがおそつてくるんだよ  
おお、息子よ。あれは柳の枝だよ

050 世界最速、パリイパリイパリイ！！

よし、行くぞう！

俺あカラオケボックス行くだ。隣でぬ。

タカミチに電話をかけます。

「おいコラタカミチコノヤロー」

『ど、どうしたんだい？』

「アスナ、今から、誕生日会、駅前、カラオケ」

『言いたい事はわかるけど、なんで吹き替え版の原住民みたいになつてるんだい？』

「いいから来いっつってんだよヒゲ」

『わ、わかった、い k ブツン……』

来るみたいだから切った。

「おいコノヤロー行くぞ」

「へ？どこ行くんですか？」

「黙って俺について恋」

男つてのは背中で語るもんよ。



あんま関係ないけど言ってみたかった。

「はあい」

ちなみにエヴァと茶々丸はもう出てる。

俺も隼に跨ってさよを催促する。

「後ろに乗りな！」

ちなみに、昨日帰ってからすぐにマスターシリンダーのエア抜きとタイヤとブレーキパッドの交換をした。

その際、「ヒヤウ！！！！バイクのタイヤ交換死ぬほど面倒くさいぜエー！！」とか叫びながら作業していたってのは俺と君達との秘密だ。

パァン！パァァン！とエンジンを鳴らしながら走る。

ちなみに、昨日手を抜いてたように思われてたらしいけど、手を抜いてたんじゃなくて、ホラ、8時とは言え、夜だからそんな喧しくもできないじゃん。

改造に改造を施して、16000回転まで回せるけど、そんだけ回したら近接で130Dbもの大音量。

暴走族なんて騒ぎじゃないぞ。

フォォーンフォォーン……

とか言いながら着いた。

もうだいたいみんな集まってるようだ。

「隣くん？」

「へいこのちゃん！」

「あつるえー？タカミチさんじゃないツスカあ  
WWWおはつすWWW  
WWWおはつすWWW」

「うざっ！こんにちは、隣君」

「さあて、残るはアスナとネギ君だけだねえ」

「まだ来てないのかYO！」

「いや、実際待ち合わせまであと5分ある訳だし」

「ホラホラ、アスナさん、こっちですよ」

「もう、何だつてのよ……みんな？」

「へエアー！！」

「うっ、アンタ昨日はよくも！！」

「まあまあアスナ君。真剣勝負に負けたんだ。また次勝てばいいさ」

「ヤイサホー！！ヤイサホー！！！！」

H A H A H A、納得できないなら500ccで出直さん事もないぜ

?アレうるさいから夜向きじゃないんだけど」

「昨日のアレよりうるさいってどういふ事なのよ……」

「ホラホラ、ええから入る、アスナ」

「っていつかどうしたのよ、みんな集まって……」

カラン コロン アハン?コラン !!!とベルのついた扉を勢い良く開ける。

「頼もー!おねげえしますだwwwwwwおねげえしますだwwwwwwww」

「いらつしゃいませ。34名ご予約の白波様ですね。御連れの方々は先に案内させていただきました。こちらへどうぞ」

「はい」

ぬるぬる案内されてお部屋の前に到着する。

「さて、どうぞ、お二方」

「ちょ、押さないでよー!」

「ひゃあ!おしり触らないでください」

「げへへwwww」

二人の背中とおケツを押して扉を開けさせた。

パァン！

「……アスナ、誕生日おめでとー！そしてさよちゃん、3-Aにようこそー！」「」「」

「へ？……え？」

「は、はわー」

「ふん、別にあなたの誕生日なんてどうでもいいんですけど、さよさんの歓迎会も同時に行うと聞いて来たんですわ！」

「またまたー。いいんちよだってこんな大きなケーキ用意してたくせにー」

うわっ！ウエディングケーキかよ。ってかよく入ったな

「いいんちよ、ネギ、みんな……わ、私……私うれしいよっ」

おや？さよの様子が……

「ふ、ふぐっ……うわあああんー！」

「おおっ！どうしたのさよちゃん！？」

「あああんー！うれしいですうー！」

「ちよ、落ち着いてさよちゃんー！意外と強いわね！？」

さよがあすにちゃんに抱きついて号泣してる……

「さよたん泣いてるん？！……？」

「さよちゃん……」

「よっしゃあ！騒ぐよお！……！」

「その前に、一応プレゼントを渡しておきますわ。はい、アスナさん」

「いいんちよ、ケーキだけじゃ飽き足らず……！！……！」

「うるさいですわね！！はい、アスナさん。せいぜい大事にしなさい」

「うん。ありがとね、いいんちよ」

「っ！！べ、別にかまいませんわよ……！」

「あはは、ラブラブやなあ。はい、アスナ。私とせつちゃんからやで」

「ありがとう、二人とも……」

「なっ！何で私とアスナさんがラブラブしなきゃなりませんの！！はい、さよさんも」

「ええ！？私にもあるんですか？あ、ありがとうございます……！」

「私たちからもあるよー!!」

「拙者も用意してるでいぢるよ」

「私たちもネ!」

「みんな……ぐすっ……」

「よっしゃあ!んじゃ歌うかあ!」

「おおー!!」

「おいゴルア!!俺に酒飲ませようとすんじゃねえタカミチ!!」

「ハハハ!君も電車で帰ればいいんだ!!」

「ソレを俺に飲ませたらリバーズカード『リバーズ』がリバーズさ  
れるぞお!!」

「茶々丸、酒」

「はい、マスター」

「エヴァは一応中学生なんだからそんな堂々と僕の前で酒を飲まないでくれよ」

「次隣さんの番だよー！」

「おっしや来いやあー！」

「何入れたのー？」

「甲賀忍法帖！！！！」

「ん！？拙者は忍者ではないでござるよー！！！！」

「すっこんでろ！！！！！！」

「かえで姉、この妖花忍法帖っての入れなよー！」

「しっ、知らないでござる！陰陽座なんて聞いたこともないでござる！！！！」

「ぬはあー！歌ったあー！！」

「んじゃ各自解散って事でー」

「あ、あすにゃんあすにゃん」

「何ぞ？」

「いやあんた先生に対してその態度はどうよ？」

「かまへんかまへん。これ、誕生日プレゼント」

「へ？ありがと。一応もらっとくわ」

なにこれひでえ

「ああ、アスナ君。僕からも、目覚まし時計なんだけどね」

「あ、ありがとうございますっ！高畑先生！！」

なにこれひでえ

「じゃねー」

「A B A Y O !」

じゃあさよも乗って

「はい」

「また後でね、お兄ちゃん」

「うむ。じゃあ」



ぶお〜んぶお〜ん

「麟さん！家はこつちじゃないんじゃないですか！？」

「いいんだよ。着いたぞ」

「こつって何屋さんですか？」

宝石店だよ。

「いいから入るんだよ！」

腕を引つ張つて連れ込む。

「いらつしゃいませ」

「白波だ」

「はい、白波様ですね。こちらにご用意させていただいております」

「へ？え？」

「お掛けください」

「あ、はい。失礼します。

ねえねえ麟さん、なんでこんな凄そうな所に？」

「黙って座ってる」

「あ、ごめんなさい……」

「べ、別に怒ってなんかなかったんだからねっ!!」

なんか言っていたら白い手袋をはめた店員さんがやってきた。

「お待たせいたしました。こちらになります」

アメジストのネックレスを高級感溢れるガラステーブルにのせる。  
プラチナ地に、ダイヤモンドカットを施された薄紫のアメジストが  
乗せられた2センチ程度の小さめのネックレストップに、4.5cm  
のプラチナ製小豆チェーンを合わせたおとなしいネックレスだ。

「俺からのプレゼントだ。ようこそ、さよ」

「り……麟さんっ!!」

「ハッハハ、こやつめ、店内で抱きつくんじゃない」

「あう、ごめんなさい」

「つけて帰る」

「かしこまりました。……はい、大変お似合いですよ」

「わあ……ありがとうございます!」

「じゃあまたそのうち頼むわ」

「はい、ありがとうございました」

ちなみに、もう金は払ってある。  
あんまり野暮な事するもんじゃないもんな。

「一生大事にしますね!!」

「はは、死なないから永遠に大事にしないと。あれ？もう死んでるのか？」

「詳しい事はわかりませんが大事にします！」

「んっふふwwまあがんばれ」

「はい!……っふふ」

さっきからチラッチラ見てはにやけてる。

「じゃあ帰るか。エヴァたちにも自慢してやれ」

「えへへー？」

「あーかわいいなこいつー!!」

「え……っふふ、麟さんもかわいいですよ」

050 世界最速、パリイパリイパリイ!! (後書き)

ちなみにあすにゃんにあげたのはメリケンサックです。

でもアレ? オルゴール買ったのつて麟とこのかじゃね?

まあ色々あったんですよ。

きつと僕らにも計り知れない何かがある……

さよ回でしたね。

え? 違う?

ちがうかもしれません。

もしかしたら無意識下で『あすにゃん』を『あずにゃん』と書いてしまっているかもしれません。

『麟さん』を『燐酸』ひいては『火焰猫燐さん』などと書いているかもしれません。

そうだったらごめんなさい。

ここで丁度50話目ですね。

一ヶ月と少し、ここまで書けたのもみなさんの応援のおかげです。

初めはバイクで暴れまわるだけの話にするつもりが、着々とハーレム化が進んでおります。

これも愛ゆえに……。

というか、麟はロン毛でバイクに乗って邪魔にならないんだろうか

……

タンデマーとか死んじゃうような気がしますよ。

そしてとうとう次から修学旅行です。

京都の事はそんな詳しくないんですが、頑張ります。  
じゃあ奈良の事は詳しいんか？つつつとそついつ訳でもなく、まあ  
アレです。灯台下暗しというヤツです。

では、今回もありがとうございます。

一年のうち364日間はお腹を壊してる豚野郎でした。

051 世界最速、皆でなら電車に乗れるもん！（前書き）

一人だとホントどこ行くかわかんないよ、コイツ。

というか一話丸まる使って電車出発する手前って何だコレ。

051 世界最速、皆でなら電車に乗れるもん！

「お兄ちゃん、起きてー!!」

「起きてください、隣さん!」

「んー……今何時い?」

「4時45分だよー!」

「消し飛ばすぞ」

二度寝りん。

「お兄ちゃん!はやく起きないと遅刻しちゃうよお!」

「おっはよお!ごいままあああああああああああああああす  
!.....!」

飛び起きて時計を確認、午前6:08!!

煙草に着火!一気に吸う!

「ゲブブベエアアアアアアアアアア!」

「今日も元気だ煙草でむせる!スパーツ!スパニーツシュ!」

「お兄ちゃん、早く行かなきゃあ」

「そ、そそそうですよ麟さん!!」

「落ち着け……。まだ慌てるような時間じゃない……」

生徒が9：00集合、教員は7：50だ。要するに間に合いまくってる。

「お前らが急かすから俺はもう行くがな、ホントはまだまだ余裕なんだからな!」

「待たせるより待つ、そんな人間になりたいんだ」

「私もそんな人生を歩みたいです」

「おい、吸血鬼に幽霊」

「おはようございます」

「おっ、おはよう、麟君」

「お、おおおおはようございます……」

「おはようございます、新田先生。そして落ち着け瀬流ピ」



「あつ、麟さん！おはようございます！」

「馴れ馴れしい！うぜえ！テンションを下げろ！」

「だって京都奈良ですよ！日本の古都なんですよ！楽しみだなあ！」

「いや、田んぼと山しか無いから」

「え……」

田舎のほうはな。つっても全土田舎だけど。

この後日程の確認やらエヴァの相手やら班の確認やらエヴァとさよの相手やらエヴァの相手やら挨拶回りで時間を使い、その後集合時間になり、点呼、注意事項の確認を行い車両に生徒を押し込む。

1班

柿崎・釘宮、桜子・和泉・まき絵

2班

さつちゃん・忍者・葉加瀬・古・超

3班

なつみん・千鶴・あすにゃん・このちゃん・せつちゃん

4班

双子・ゆな・たつみん・アキラ

5班

のどか・ハルナ・ゆえ・ゆつきー・春日

6班

エヴァ・さよ・茶々丸・ちうたん・かずみん・ザジ

こんな感じ。

とりあえず、出発まで時間はあるし見て回っとくか。

1班

「うち、奈良って初めてやねんなあ」

「亜子って大阪？」

「え？うちはうちやけど……？」

「あんたちよつとアホだったんだね……」

「ええっ!?!？」

うん。

アホだよね。

2班

肉まんいりますか？

「ここ校外だけどそんなナチュラルに販売してもいいの？2個ください」

「先生も肉まんの虜になるといいネ？」

「あいあい」

「まだ眠いですー」

「靴下ズレてるアルよ」

ホントにアルって言うチャイニーズはじめて見た。今までも言ったのか？言ってたのに俺はスルーしてたのか？

3班

「なあせつちゃん、眠ない？うちのひざまくらいらん？」

「こ、困りますー！」

「むー。ほなせつちゃんのひざまくらで寝るもん」

「そ、それは……」

「座り」

「でもお……」

「座り」

「……はい」

「このか、あんた……」

「ひゃあっ」

「あらあら？夏美ちゃんにはまだ刺激が強かったかしらね」

「今日も平和ヒンです。」

4班

「キャハハハー！」

「お、落ち着いて……」

「まるで保護者みたいだね」

「むー！ひどいです！……」

「座ってる、双子のバカの方」

「せんせーヒドっ！……?」

「元気だよるしい。」

5班

「ささ？ネギ先生」

「そのー、自由行動日を……」

「頑張るですよ。易々といいんちよにネギ先生を渡すなです！」

「あ、あたしゲームボーイアドバンス持ってきたんだよー」

春日エ

「ボツシュートです！」

「ひ、ひいいいいい！？麟先生！ご勘弁をおおお」

「ええいならん！！代わりとしては何だがコイツをやるう！」

「ワンダースワンじゃないっすかあ！！」

「クソボケが！スワンクリスタルだよ！ソフトもあるし電池もくれてやる！！」

「くう……。で、何ッスか、このソフト？」

「テラースとマリー&エリーとミスタードリラー」

「何でゲンペイが無いんすかー！」

「まあ、うつせえなあ、そんだけ言うなら返してやるよー！」

「あ、ありがとうございます！ってソフトが全部ロックマンゼロになってる！？

何でっすかぁ！！発売日4日後じゃないっすかぁ！！それに私ナム  
「派なんすよぉ！」

ぬはははwww

6班

「わぁー！電車って広いんですねー！」

「おい、茶々丸！パンフレットを出せ！！」

「落ち着けよ。ってかつるせえ」

「どうぞ、マスター」

「はい、チーズ！っておお！びっくりしたあ、麟さん急に入ってくるんだもん」

「ほっほっほウー！！」

「……」

「え？いや、その連結の所にあると思うけど」

「……」

「のっぶおうww帰っていただきなさい！」

「……」

「んー、じゃあ今回だけよ？」

「……ん」

「隣さんとザジさんの会話は、毎回どう成り立ってるのか不思議で仕方ないよ」

「……天才なんで」「……」

「おおっ！？一人増えてる！！」

「……」

「んーむ。まあ自由行動だし、みんなバラけるだろうから着いて行くのも吝かではないかな」

口数の少ない子だ。

「んじゃー出発するからな。座ってる」

「……はい？」「……」

「車輛は貸切だけど電車自体は貸切じゃねえから静かに座ってるよ。72Db以上の音を立てた奴はOHANASHIな」

「お兄ちゃん！いつしよにすわるー！！」

「こつち禁煙車輛だから、むしろエヴァが来い」

「いきなりさっきのルールガン無視したエヴァちゃんの声量をガン無視してるー！！？」

「うるせえ……テスト前の再来来るぞ」

「え？ホント？」

なんで嬉しそうなんだよ。そうですね、至れり尽くせりでしたね。

と、こんな幕開け。



051 世界最速、皆でなら電車に乗れるもん！（後書き）

用事があったはずが、台風パワーで結局どこにも出かけなかった豚野郎です。

一話まるまる電車に座っただけで終わった。

明日は鬼の連続更新をしたいなあ（希望）

でも、今日の予定は明日に押し出されるんだらうか（絶望）

何故かザジフラグを押し上げて行きたい豚野郎です。

では、今回もありがとうございました。

あ、当然、まだヒロイン候補を募集しております故、奮ってご参加ください。

現在は刹那に一票

以上だ！

052 世界最速、闇のゲーム。(前書き)

遊戯王回です。

僕はもうやってないので最近すぎるのは詳しくないです。

あと、時代設定的にシンクロ召還は無いだろと思いつつも、まあアレの話なんで華麗にスルーしてください。

## 052 世界最速、闇のゲーム。

「隊列を組め！現刻より本隊は東京駅ホームを移動する！荷物を纏めよ！5分後、一〇一六より状況を開始する！猶予は四分も無いものと思え！」

「Sir Yes Sir!!!」

「いい返事だ！隊列を乱さず新田先生に着いて行け！俺は乗換えが死ぬほど苦手だからお前らのケツを引つ叩きながら後ろに続く！」  
電車が減速を始める。

「いいか、東京駅は魔境だ！自分達以外は全員敵だと思え！もう一度言おう！隊列を乱さず新田先生に着いて行け！ここを超えれば勝ったも同然だ！誰も死ぬ事無く、滞りなく『ひかり213』に乗ること！では、状況を開始する！」

「Sir Yes Sir!!!」

何故か変なクラスになってしまった。

びっくりするくらいの統一性で2列に並び黙々と新田先生に着いて行く。

ええ。このクラスをこんなにした隣です。

この混雑の中で一切列を乱さない事に、新田先生は泣きそうになっている。

「全員欠ける事無く無事に乗車出来た事を誇りに思う！貴様らも誇れ！これでこそ3-Aだ！！」

「Sir Yes Sir！！！！」

「では各自いつも通りにやればいいんじゃないね」

「わーい！！」

「カードゲームやるーぜー！！」

「お菓子賭けなー」

騒がしいクラスだ。

「隣くん……私はかつてこれほど感動した事が無いかもしれんよ……」

……

「みんなOHANASHIすればわかってくれる、いい生徒ですよ」

「君は本当に教師に向いているのかもしれないな」

「ふはは、褒めても大根の葉しか出ませんよ？」

「何でそんな物が出て来るんだ？」

調理方法によってはけっこうおいしいんだけどな。葉っぱ。

『お兄ちゃん、魔力反応があるけど』

『え？マジ？全然わかんねえわ。抵抗レジストしといたほうがいい？』

『そつだねー……』

『ん。レジストしといた』

「特にケガには気をつけ……あぶっ！」

「えーお弁当……あっ、すみません」

「ぬははwwwお姉ちゃん、今は良かったwww」

「え？え？ありがとうございます？」

『ってかアレか？このちゃんのか？詠春の娘だしじじいの孫だし、ミラクルキーパーソンだろ』

『さあ……まあどうでもいいけどね』

『せやな』

何で俺らは隣に座ってんのに念話なんかしてんだ？

ああ、魔法の秘匿か。

どうでもいいから忘れてたぬん

どういう事や？

呪術が全く使えへん……

ここでは警告程度で済ませとくつもりやったけど……そっちがその気ならやったるうやないか、西洋魔術師！

「ぬははwww禁煙生14分目だwww」

「麟さん、いつもはどんだけ吸ってんのよ」

「一日一箱」

「……多いの？」

「タカミチの1/4くらい」

「全然わかんないわ」

「そ？ちよっと他の班に攻め入ってくる」

「いつてらっしやーい」

「お、やってんじゃん」

「知ってるですか？」

なんか皆の衆でカードゲームなんぞやってる。

「ライトロードの『グラゴニスグナの鱗ウニ』っつーとちょっとは有名なつもりなんだがな」

「ま、まさか先生が!？」

「確かに同じ字だ!！」

「そしてこれがそのデッキだ、と言ったら？」

「ふ、ふふ、やりますか？お菓子を掛けてもらうことにはなりますが」

「……闇のゲームか……面白い！はたして俺のハッピーターン（のカップタイプについてる『合法麻薬』ハッピーパウダー）を奪うことが出来るかな？」

「ネギせんせー!」

「あ、面白そう。何の遊び……」

「ガロスを生贄にケルビムを召還!!!」

「クツ！無駄です！ケルビムに速攻魔法『月の書』！裏側守備表示

「なっつてもらうです！」

「それこそ無駄無駄ア！！オルクスの効果によりライトロードと名の付くモンスターを魔法、罨、効果の対象にはさせはしないイイツ！！」

そしてデッキから墓地に4枚送り……クハハ！その『暁のシロツコ』と裏側を向いている『魔法の筒』をBreak Out！！」

「な、何故これが魔法の筒だと！？」

「甘いぜ……『BFの映』……」

「その名を知っていたですか……！」

しかし、シリンドラーを撃破しようとおなたが次のターンにモンスターの効果で捨てるカードは5枚……このターンさえ凌げば私の勝ちです！私はモンスターカードを一枚伏せ、ターンエンド……！！」

711

「ひい！？な、何ですか亜子さん、この禍々しい空間は！？」

「ネギ君か。下手をすれば命さえ失うという……『闇のゲーム』……私も見るのは初めてや」

「命！？止めないと！！」

「ダメだよ、ネギ君！！」

「ゆうなさん！？でも命を奪い合うなんて、ダメですよ！先生とし



て！担任として止めないと！！」

いや、奪い合ってるのはお菓子だけどね。

「仮にそれで『決闘者』<sup>デュエリスト</sup>が死ぬ事になろうともだよ。

途中で止めてしまうのは決闘者として、絶対に許されない行為なんだ。それこそ殺されようと文句も言えない」

「あわわわ……！！」

何で……なんで仲間なのに命を奪い合わないといけないんですか！！」

いや、奪い合ってるのはお菓子だからね。

「クツ……カケコクキコカカケケクカカツ！！」

「なっ……何がおかしいですか！？」

「ケココクツ！！『凌げば』？ハハッ！！出来るもんならな！！  
現在墓地にあるライトロードと名のつくモンスターは13枚だ……」

「急に何を……ハッ！！」

「気付いたか？だが遅い！！『裁きの竜』特殊召還！！そしてライフポイントを1000払い、ジャッジメント！！このカード以外の全てのカードは破壊される！！」

「クツ……しかし私のライフポイントは残り6000!どうあっても攻撃力3000の『裁きの竜』に私の撃破は不可能!」

「ギャヒャヒャハッ!」

俺は……『裁きの竜』を生贄に……」

「なっ何イ!?」「『裁きの竜』を生贄だと!?」「ま、まさかアシを……真のライトロードの頂点として恐れられた、そしてその二つ名に冠する『奴』を!」

「《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》召還!」

こいつの攻撃力は2000だが……墓地にいる『ライトロード』と名の付くモンスターカードの“種類”×300ポイント攻撃力がアップされる!」

「ふ、ふっふっふ、アッハッハッハ!確かに一瞬焦ったのですが、その程度だったですか、麟先生!?やはりシンクロなしのデッキだとそれで限界でしょう!何故なら私のライフポイントは6000!そして、その馬もどきの攻撃力、いくら上がろうとも5900!あなたの負け!絶対的……敗北!そして私の勝利!合法麻薬、ハッピーパウダーはこの私のモノです!」

「……いい夢は見たか?」

「何!」

「ならお別れだ……。装備魔法『ライトロード・レイピア』……。これにより我がグラゴニスの攻撃力は」

「「「6600……」」」

「バ、バカな……！この私が負けるなんて……！！！」

「……行け、グラゴニス……」  
ダイレクトアタック  
『直接攻撃』……」

「ぐわあああああああ……！！！！！」

「勝利とはいっても虚しい……。敗北を、知りたい……」

「夕映さん……夕映さああああああん！！！」

麟先生……僕は……僕は許さないぞ……！！！」

「何ですか、騒々しい。はい、麟先生。負けたのでどうぞです」

「勝ったのならば貰わぬ方が礼に背くというもの。ありがたく頂いておこう。」

ぼんち揚げ、ゲットだぜ」

「え？……ええ？」

「というか、何だコノヤロー、ネギ先生コノヤロー」

「え？いえ、僕にもさっぱり……」

「アハハ、ごめんな、ネギ君。場の雰囲気の様さから思ってもない事口走ってたわ」

「何で修学旅行行く前から死人出すんだよ。みんなのトラウマメーカーか俺」

「私も、柄にもなく熱くなってしまったです」

「僕も……あまりの異様な闘気に当てられてしまったみたいです。そつですよ、カードゲームで人が死ぬわけないですもんね」

ふふふ。そりゃあ、ね？

「ところでその『大豆メソッド』って奴わざわざ持ってきたん？」

「いるですか？」

「ちゅー……まずい」

「かつ！間接っ！！」

「ん？直接の方が良かった？」

「なっかなな！しっ、失礼するですっ！」

豆乳とガラナとドクターペッパーを混ぜて炭酸抜いた所にマックスコーヒーの糖分突っ込んだような味がした。

「あ、隣くん!」

「このちゃんじゃん。いーな」

声を掛けてきたこのちゃんはせつちゃんに膝枕している。  
結局押し切られたんか。あすにゃんの顔が引きつってるぞ。

「そ、そんな見ないでください……」

「隣くんはウチとせつちゃん、どっちが羨ましいん?」

「いや、せつちゃんのスパッツが羨ましい」

「なっ!」

「ブーーーーッ!!ゲホッ!ちょ、ちよとアンタ!」

「あーすにゃんがむせたーむせたーむせたー(メリーさんの羊のメロディで)」

「んふふ、隣くん分かってるやん」

「お、お嬢様……」

「……お嬢様?

でもせつちゃんな、女の子同士やからあかんって言うねん」

「い、このちゃあん……」

「ふふ、そんな泣きそうな顔せんでもええやん、ウチのせつちゃん

「？」

「どんだけやん。全盛期の俺とエヴァにも勝らんと劣るわ」

「あらあら、師匠にまだまだって言われてもうたで、せつちゃんのせいやわ」

「そ、そやかて、そんなん、女の子同士やねんから」

「あ、そうや、ほな間に麟くんが入ったら女の子同士ちゃうやん。なあ、せつちゃん？」

「ウチは麟くん好きやで？せつちゃんと同じくらい。だって、麟くんがおらんかったらウチ、まだせつちゃんに避けられてたやろ？」

「このちゃんは……ズルいわ……。そんなん言われたら断れへんやん、ウチ。それに、私も麟先生がおらんかったら……」

「あれ？謎の乱交フラグ？」

「らっ！？せ、先生！！！」

「もう、ややわ」

ぬぼす！

「ねえ、あすにやん、あすにやんもこれ喰らうの？このハンマー」

「は、話しかけるんじゃないわよ！エロがつづるじゃない！」

「いや、ねーよ」

……ねーよな？

052 世界最速、闇のゲーム。(後書き)

大根は根っこより葉っぱの方が好きな豚野郎です。

カエルは犠牲になったのだ……

犠牲のための犠牲、その犠牲にな……

遊戯王知らない人には何も面白くなかったかもしれません。

知ってる人にも何も面白くなかったかもしれません。

ごめんなさい。

この指が勝手に、勝手に書きやがったんです!!

「勝利とはいっても虚しい……。敗北を、知りたい……」

書いている最中は「大当たりやでえ」とか思っていたのですが、読み返してみると調子乗りすぎやろ……。などと呟いてしまうレベル。

麟はもう少し言葉を選ぶべきだろ。

いや、書いている僕が言う事でもないですね。

では、ヒロインメンバーはまだ募集中ですので是非に。

そして今は刹那が2票です。

では今回もありがとございました。寝ます。



053 世界最速、迫る関西呪術協会の影。(前書き)

仮面ライダーのサブタイトルみたいやねんな。

053 世界最速、迫る関西呪術協会の影。

「京都だー!!」

「わーい!!」

京都駅に着いた麟と愉快的仲間達。

「ふははは！京都タワーの意外なシヨボさにびっくりするがいい！」

「別に京都タワーを見に来た訳じゃないからね」

「じゃあクラスごとにバスに乗ってけっつってんだろ!!クソが！市ね!!!!」

「「「はい?」」」

「これが噂の飛び降りるアレ!!」

「誰か!!飛び降りれ!!」

「いいだっぺの法則とは 言い出したやつがやれよという戒め。どうぞ、鳴滝のバカの方」

「うわー！お姉ちゃんを放してください!!!!」

「やめてー!!」

「おやめなさいっ!!」

「有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉どおり、江戸時代に234件もの飛び降り事件が記録されていますが生存率は85.4%と意外に高く……」

「ふふふ、見直したぞ、綾瀬夕映!

ちなみに明治5年に政府が飛び降り禁止令を出して柵を張るなどの対策によって飛び降りが下火になったのは知っているよな?」

「エヴァンジェリンさん!?!」

「エヴァちゃんが妙なオーラを!」

「ふふ、エヴァンジェリンさんもなかなかやるですね」

「じゃあ撮るよー!」

「いえーい!!いえええええええい!!!!」

「麟さん落ち着いて!」

「京の街が一望ですねー」

「お土産に何か買ってこようと思ったんだけど、良く考えればチャチ

「ヤゼロくらいしかやる相手いないからなあ」

「アイツには酒さえ飲ませてればなんとかなるよ」

「ああ、そうな……ぬわーーーーー！！！」

カエルのいっぱい入った落とし穴に落ちた。

「何でや……」

「お兄ちゃん、そのギャグは新しすぎるよ……」

あと参道にその仕掛けはさすがにダメだよ」

「俺じゃねーよ」

「大丈夫ですか、麟先生！」

そう言って手を差し出してくれるせつちゃんの優しさが沁みる

「せつちゃんのふとももが絶景すぎてヤバイ」

「っ！知りませんっ！」

「ああ！途中で離れたからもつと良くない体勢で落ちちゃったじゃないのよおー！」

「お兄ちゃん何やってるの？」

「俺ヤード（説明しよう！俺ヤードとは、ビリヤードが如く穴に俺を突っ込む遊びである！卑猥な意図は無い！……）」



「お酒ですね、そうですね」

なぜお酒が降ってくるんだ！？  
降ってこなくちゃならないんだ！！

「おや、麟くん、体調が悪そうだがどうしたんだい？」

「ああ、新田先生、音羽の滝にお酒が。警察に連絡を……あとクン  
又シさんにも……」

そして瀬流ピコ……お前はあそこのお土産屋さんでどこにでも売っ  
てそんなものを買ってこい」

「あ、ああ。任せてくれ」

「え？何でそんなものを！？とにかく行ってきます」

「3-Aに告ぐ！これより当クラスはネギ先生のみ指揮下に移る  
！他の観光客に迷惑をかけぬよう、我らが3-Aに相応しい振る舞  
いを見せること。いいな」

「」「はい……」

「じゃあ俺は事情聴取のために残る」

瀬流彦はコーラを買ってきました。

「えー……じゃあ第一発見者はあなたなんですね？」

「第一かはわかんないね。てか普通に見えるだろ。皆気付いててスルーしてたんだろ」

「っていつか白波麟さんですよ？私、ファンなんですよ。サインもらえませんか？」

「ほいほい」

さらさらーっと

「ありがとうございます！オークションで売ります！！」

「ぶっ殺してやる」

〓 ホテル嵐山〓

「ひどい目にあっただんだけ！」

「あらあら、お疲れ様です」

あ、いたんだ、しずな先生。

「やあ、麟君は災難だったね。全く酒を飲めないんだからなあ」

「ええ。瀬流ピコ君がコーラを買ってきてくれなかったら即死でしたよ。買ってきたのがファントムオレンジだったら人死にがたましたね」

「あ、危なかったあ」

「買いそうになってたのか？」

「どっちのほうかより『どこにでも売ってる』か考えた『結果コーラを買いました』」

「……見直したぜ」

「麟先生、よろしいでしょうか……」

夕食後、せつちゃんが声を掛けてきた。

「絶対らめっ？」

「そうですね、なら他を当たります」

「やあん、嘘だつてえ？ねえせつちゃん」

「……今日の昼間の話なんですが」

「スパッツの？」

「それはいいです！

落とし穴と滝の酒です」





「あつ!?!このちゃん!?!、これはその、違くて!?!」

「いやん、冗談やん? それに、麟くんならええねんで?」

「いや、そういうアレやなくてな、このちゃん、関西呪術協会に狙われてるんやて」

「ちょ、先生!」

「関西?じゅじゅつ?きよーかい?」

「え?詠春の娘だろ?日本の魔法使いの」

「まほー?」

「ちょ!先生!このちゃんには言うてへんのやからそんな……ハッ  
!?!」

「え?マジ?やっちゃったぜWWW」

「言うてへん?せつちゃん、魔法って何なん?」

「い、いえ!これはその、じよ、冗談で……」

「せつちゃん?」

「その……あの……」

「……ウチ、せつちゃんのこと好きやで。せつちゃんは?」

「じ、実は……」

言うんかい。

まあそら言うわな。俺でも言う。

あれは仕方ないわ。

「へえー、そんなんあつてんなー」

「なんかごめんね、せつちゃん」

「いえ、いずれは知る事だったんですから、仕方ないですよ」

「じゃあ麟くんも魔法使いなん？」

「え？俺はライダーだけど？」

「麟先生は世界最強と恐れられる不死の魔法使いですよ」

「阿呆使いだけど？」

「そうなん！？麟くん凄いやん！不死っていくつなん？」

「永遠の10歳」

「600歳以上だと聞いています」

「ああん、ひどい」

「ほえー、びつくりやなあ」

「麟先生、教員は早めにお風呂済ませてください」

「はあい……」

そうして俺は歩き出したのだ、お風呂への道、『おふろード』へと

……

最近オフロードバイク乗ってないなあ。

053 世界最速、迫る関西呪術協会の影。(後書き)

ネギさんは何もしてなくて完全に日和ってます。

そしてこれから出かける用事が出来てしまいました。  
台風行ったらすぐコレか。

このちゃんがどんどんDSやでえ。

そしてせつちゃんを白波に引き入れる際、このちゃんも引き込まざるを得ない。

せつちゃん2票

ザジしゃん1票

です。

ちなみに、1000票集まったってヒロインにならないものはないし1票もなくてもなるものはあります。

要するにあんまり意味無いんです、ごめんなさい。

かなりその場のノリで話が進んでいくので、もう伏線とかフラグとかあったもんじゃない。

では、今回もありがとうございました。

054 世界最速、お風呂にもゆっくり浸かれないこんな世の中じゃ ポイズン

サブタイお前いいかげんにしろよ。

みんな騒ぎすぎだろ。

いくら中学生だからってすぐ体力尽きるぞ。

とか思ってた麟です。

今はお風呂だよ。

俺「誰が一番長く潜ってられるか競争な」

俺「俺が一番やしな」

ネギ「麟先生とお風呂なんて緊張します……」

俺「何で？ ああ、美少女顔だから。デモ大丈夫。俺の股間にはしっかりと穢れたバベルの塔がついてるから」

京都まで来て何やってんだろ。

お風呂はエヴァ達と入りたかったつつつてんだよ！！

「がぼぼぼ」

飽きた。出よう

「ぶはあー、脅威の肺活量」

「誰だっ!？」

急に出てきたせつちゃんに首とちんこつかまれた。

あれ？ネギは？

「何者だ？答えねばひねり潰すぞ」

「せつちゃんのえっち……／＼／」

「あれ？せつちゃんどないしたん？

……隣くん？」

このちゃん。

あすにゃんと千鶴さんとなっちゃん（オレンジ）は？

「ちなみにこれは、逆レイ……」

「い、いえあの、コレは！仕事上急所を狙うのはセオリーで！  
というか何でいらっしやるのですか！？」

「え？もしかしてもう生徒の入浴時間なん？じゃあ15分も潜って  
たんかwwwワロタ……」

「ど、どうしたんですか？」

「ああ、ちんちん放してえ。そして急所攻撃なら竿より玉握ったほ  
うが効くよ」

いつまでにぎにぎしてんだよ。びっくりだわ。

「ひわあ！……ごめんなさい……」

「せ、せつちゃん……いくらあんな事言っただからってそんな、大胆  
すぎるわあ」



「あぁっ！このちゃん！ちゃうねん！」

立ち上がるうとしたんだろうけど、滑って抱きつかれた。

「抱きついたまんま言うなよ。俺の乳首とせつちゃんの乳首が接触して変な気分」

「麟先生！大丈夫ですか！？」

「だからアイツが溺れるわけないじゃんか」

「あれ？ここでネギとあすにゃんが来るの？」

「あ、いや、これは……これは違うんです……！」

何が違うと言うんだ

「え？こ、これはどんな？」

「ちょ！あんたら……！！え？そ、その……行くわよ、ネギ！」

あすにゃんがネギを引っ張って出て行かれた。

「このちゃん、フォロー頼める？あとせつちゃん、立ってきた」

「あん、待ってーなー、アスナあ」

「ひっー！」「ごめんなさい……！」

「いえいえ、ありがとうございました」

なんぞこれ。

せつちゃんとおフロ、じゃねえわ。お風呂に浸かっています。タオルは巻いています。

「おつきかった？」

「しっ！知りません！！」

まあ別に大きかねえんだけどな。

「ひゃあああーっ！！」

「お嬢様！？」

「せつちゃん？」

脱衣所に向かって駆け出す。

「あれ、関西の？」

「恐らくそうです。くっ、私が目を放さなければ！

大丈夫ですか、お嬢様！」

「タオル放してえ〜！」

「ちよ、このおサル下着を！」

駆け入ってみればおさるに下着とタオルを剥かれそうになってる――

人と、あたふたしながらうつろついでるネギが！  
なんでナチュラルに女子更衣室に居るんだよ、あすにゃんに連れ込まれたんですね、そうですね。

「この小猿ども……斬る！！」

「おサル斬ったらかわいそうですねよ！！」

とか言いながらネギがせつちゃんに飛びつこうとしてるから叩き落とした

「どけ」

「へぶにゅ！！」

「兄貴い！！」

あ、居たんだ。

「おいおい、このちゃん攫われてる攫われてる！！  
任せさせつちゃん！！」

「はい！」

百烈桜華斬！！」

このちゃんを担ぎ上げたサルが紙に戻っていく。

「このかー！！」

「麟さん！術者が！！」

「え？どー？」

「チツ、逃がしたか」

え？俺やつちやった感じ？

「お嬢様……良かった」

「せつちゃん」？

「こ……このちゃん」

「ちよ、大丈夫だったの？ってか刹那さんも関係者！？」

「はい。このかお嬢「せつちゃん」？このちゃんの護衛をしています。」

あと、この場に居るのが関係者だけだったから良かったものの、あまりそういう発言は……」

「あ、ご、ごめん……。ってかアンタ！なんでネギにあんなことしたのよ！？」

「ハア？顔洗って出直して来い。もう一回『アレ』やんぞ」

「な、何よ！脅したって無駄なんだからね！！」

ダメだこりゃ。

ホールわきの休憩所みたいな所に、さっきのメンバーが集まっている。

ネギは水をかけたら目を覚ました。

俺が溺れたと思って助けを呼びに行ったらしい。

仮に本当に溺れてたら助からないよな。引き上げるよ。

「急にあんなことするなんて、ひどいですよう!」

「そうよ!」

「え?俺なんかやったっけ?殺すぞ。あ!ごめん。ハイこれ」

「な、なによ、コレ?」

「アレだろ?二人とも温泉行ったらシャンプーなかったんだろ?替えのやつ買つといたから。」

「いやあ、髪長いから結構使うんだよ。俺は切りたいんだけどな」

「いやいや隣先生、ネギ先生とアスナさんが言いたいのはその事ではなくて、ネギ先生を叩き落した事についてじゃないですか?」

「え?マズかった?」

「そりゃそうじゃない!何であんな事したのよ!」

あすにゃんは鼻息荒いけどネギはさっきの『殺すぞ』で完全に縮こ

まってる。

「それについては私から説明させていただきます。というかネギ先生、何であんな事しようとしたんですか?」「訴えますよ」「いえ、別にそんなつもりはありませんが……」

「だ、だって本当に斬ったらおサルがかわいそうじゃないですか!」

「え?いえ、アレはただの式神で斬っても紙に戻るだけです……」

「なんだ、そうなんだ。じゃあネギも知らなかったんだし、仕方ないわよね」

「そうやなあ」

「良かったあ」

「ハア?仕方ない訳ないし良かった訳ないじゃん」

「え?」

「いや、仮にアレが本当に生きたサルだとしよう」

「はい……」

「でも殺す」

「ちょ、ちょっと!……!」

「麟先生、端折りすぎです」

「どづいう事なん？」

「これはこのちゃんの今後にも関わる事なんで、今は聞いておいてください」

「う、うん」

「いやな、サルが襲ってくるだろ？」

で、ここは関西な。ネギ先生は聞いただろうが。敵の掌の上だ。で、そんな所で、襲われててみる。そりゃ殺すっつーの。良くて身柄拘束」

「だからって、何もすぐに殺すなんて事しなくてもいいんじゃない？悪い奴かどうかもわからないだし」

「……」

このちゃんは黙って話を聞いている。

ネギはネズミといっしょに青くなってる。

せつちゃんは目を閉じてる、寝てんのか？

「……このちゃんが二ホンザルに囲まれてました。」

『まあ握力が30kg程度のサル四天王の中でも一番のザコ、二ホンザルだしほっといてもいいか』

で、このちゃんがつれてかれて精神ぶっこわされて魔力タンクに使われちゃいました」

「な、何言って……」

「『知らなかったからしょうがないよね』」

「っ!」

「う、ごめんなさい、このかさ……」

ネギペアは半泣きだー!

「ええんよ。何もなかったんやし。それに隣くんも脅かしすぎやで」

「えっへへ 怖かった?」

「まあ私も、疑わしきは罰せよとまでは言いませんが、何かあつてからでは遅いので多少は強硬な手段に出ることもあります。

それに私たちは一応普通の生き物と式神、一般人と術者を見分ける術を持っていますので、それほど気負わなくても大丈夫ですよ。

ねえ、隣先生」

「え?ああ、うん。わかるよ!

当たりのやつは製造日時の印刷がちょっとだけ濃いんだ」

「……何の話ですか?」

「え?ブタメン?」

「アンタ普段からどんだけ人の話聞いてないのよ」

「そんな震える声で言われても……」

おい、ネギ先生もなんか喋れよ。居ること忘れちゃうだろ」



「あ、じゅめんなさい。」うんこ食べたいんだZ E 「」

「……」

「……」

「……」

「……」

「じゅめん……」

あんなに完璧に声似せてたのに。ばれてる。

この決め台詞はもっと言っても違和感の無いタイミングで使おう。  
いつだよ、違和感の無いタイミング……。

今日はこれで解散らしいッス。

いやあ、身が縮まる思いッスよ。

「あ、そうそう、ネズミ」

「な、何ッスか!？」

「おまえ、この前ネギたちが茶々丸に攻撃したから反撃した後な」

「は、はひひひひ!?!?!?」

ま、まだ怒ってらっしやるんスかあああ！？

「けっこうカツコよかったぜ。じゃあな」

け、結構いいお人なんじゃねえか？

あの時は必死だったからなあ……。

でも兄貴は完全に縮こまっつちまってるなあ。

「そうよ、カモ。あんた、あの時はありがとね」

「姐さん……」

「な、何かあったの？」

「いや、大したことじゃねえッスよ」

「いや、あの時ね、コイツ自分はどうなってもいいから私たちは助けてって」

「カモ君……カモ君！！」

「アハハ、やめろよ兄貴。俺っちはあん時の返しきれねえ借りをほんのちよつと返したただけだぜ」

「アンタ……かっこいいわね」

て、照れるじゃねえか……。

カモ 回です。

他は、早くも何書いたか覚えてません。

前頭葉エ……

私が「連続更新したい」と言った日の日付を見て欲しい。

そう、今日なんです。

今日はなんの予定も無いんです。今のところ。

半無職なのに何でこんな忙しいんだ。

そして、連続更新などとほざいておきながら寝ます。

おやすみなさい、良い夢を。

では、今回もありがとうございました。

055 世界最速、救出。(前書き)

“今日”はこれからだ！

055 世界最速、救出。

「何やってんの？」

「式神返しの結界を布しいているんですよ」

「はーん、がんばって。俺は帰るとくわ。なんかあったら連絡して」

「はい。ならコレを。念話用の符です」

「あ、こらどうも」

「いたいた、桜咲さん」

なんか来たけど俺は行くぜ！！

隣様が部屋にいらっしやいました。

なんだか久しぶりな気がします。

別に全然久しぶりじゃないんです。

浴衣がすごく似合ってます。持ち帰りたい所ですが、家が同じなのでその必要もありません。

ちなみに、さよさんは浴衣の右側がまえになっていました。日本だと左前は故人の着方だと知識にはあります。

ああ、そう言えば幽霊でしたね。

ちなみに、そのさよさんはもう寝ています。

「寝れるっていいなあ。おやすみなさあい」と言っていました。

「お兄ちゃん？」

「麟様あ？」

「ってちよつと待った待った！！脱ぐな！！」

「いやあ、なんか久しぶりに会ったような気がしたからさ」

麟様との甘い夜を過ごそうとしたら朝倉さんに止められてしまいました。

千雨さんは外を眺めながらお茶を飲んでいらっしやいます。

「というか何だ、朝倉和美。私達とお兄ちゃんの愛の営みを邪魔するんじゃない」

「あ、愛のって、最早セクハラだよ！？」

「っーかもつ何も言わねえから、せめて誰も居ない所でやってくれ……」

「んもつ、ちうたんったらスレちゃってえ」

「ちうたんって呼ぶんじゃないっ！」

「何ですよ。別に、よっ、呼ばせてくれたっていいじゃない……」

「千雨さん、麟様を……泣かせましたね……」

「いくら家族であろうと赦せん事もあるんだぞ。少し、スケールのでかい姉妹喧嘩をしようか……?」

「いや待てよ。思いつきり『ポツキリ成功』って書いたプラカード掲げてるじゃねえか。ポツキリって何だよ」

「って、家族!? 千雨ちゃんアンタ……大人になっちゃったのね……」

「おい、お前さつきセクハラがどうか言ってたよな」

そんな事をやっていると思えば懐から一枚の紙を取り出しました。

「あ、ちよつと待って。何々? え? マジで? 場所は? あちゃー。行くわ」

「っわけで行ってきます。ごめんな」

そう言うとマスターと私にキスをして出て行かれました。うふふ、キス……。

「何、今の小芝居! ?」

「っていうかキスなんかされちゃって、もしかして茶々丸さんも!? ああー!! どうすんのよ! ?」

「何がどうするんだ?」

「私だって隣さんのこと昔から……な、なんでもないよ?」

「ふふふ、なあ茶々丸、いい事を聞いたな?」

「ええ。まさか『そう』だったとは」

「ちょ、別に取ったりしないからさ！ね？」

「当然だとも。愛は奪うものではない」

「分けるものです」

「ち、千雨ちゃん……助けて」

「諦める。別に取って食われる訳じゃねえよ」

「さよちゃん……寝てる！ザジさん……いない！」

「そんな怖がるな。お兄ちゃんの話を共有したり」

「いつから好きなのか、何故好きになったのか話し合っただけだ」

「そ……それならまあ……」

「おい、千雨も来い」

「ハア……仕方ないか」

この後、途中で起きたさよさんも交え、3時間に渡り麟様の話で盛り上がりました。

あと、職員の部屋は別らしく、麟様と会ったのは結局翌朝の事でした。



T20改『サイクロン号』に跨り夜を駆ける俺はさながら仮面ライダー。

カフェレーサー風のフルカウルが似合う渋い奴だよ！

あれ？転移したほうが速くない？

「せつたnいまどこなn!!??」

『京都駅の長い階段です!』

「転移」

〓京都駅ビルのなんかでかい階段〓

「クックドゥードゥー！クックドゥードゥー！クックドゥードゥー！  
ドゥー！！（マツハGO！GO！GO！って感じで）」

「うわあ！！何や何や！？誰やねん嬢ちゃん！！」

「麟先生！！このちゃんが！！」

「貴様かあああああ！！貴様がこのちゃんをおおおおおお  
おお！！！」

「新手かい。まあかまへんわ

お札さん お札さん ウチを逃がしておくれやす

「

「お札「だが断る」」

「喰らいなはれ！」『三枚符術 京都大文字焼き』！！」

大の字に炎が広がる。  
断るって言ったのに。

「うあっ！」

「桜咲さん！！」

「ホホホ、並の術者ではその炎は越えられまへんえ。ほなさいなら」

「ラス・テル マ・スキル マギステル！ 吹け 一陣の風」

「待て、ネギ先生。飛ばした炎がこのちゃんにあたるかもしれんね」

「じゃあどうすれば……」

「下がってる。んじゃ、いつてきまー君」

「そんな、いくら先生でも無茶です！」

「元気があれば何でもできる！」

T20改サイクロン号で階段を駆け上ろうと思ったけどロードバイクだからカウル擦りまくるし、仕方ないから指輪に戻して普通に階段をのぼる。



「ぬわー!!」

「え？嘘やる!？」

「う・そ？じゃあこのちゃんは返してもらっよ」

そう言っつてロン毛メガネのお姉さんに近付いたら上から剣で叩かれた。

「ぬわー!!」

今日はパパスの日やでえ……ゴクリ。  
ちなみに斬ってきたのは俺好みの女の子でした。  
なんか勝手にゴロゴロ転がって行った。

「あいたた。何で斬れてませんの？」

「天才だから」

「絶対に当たったと思たんやけど、強い人なんですなあ。私、強い人は好きですよ」

「俺に惚れるとまっ逆さまに堕ちてでざいあ」

「ほな、私も本気で行かせてもらいますわ」

「甘く見てるとケガしますえ。ほなよろしゅう、月詠はん」

「無駄」

とりあえあず刀は二本とも折っておこう。

「わあ〜！何しますの！ひどいわあ……グスッ……」

「ええ〜！？嘘やろ！？」

「嘘じゃないんだな、これが。うっとおしいから動きを封じておこう」

指輪を手錠と足枷に変えてツクヨミたんとお姉さんにつける。

「ああん！」

「ってウチも！？いつの間に！？」

「麟先生！！」

「おお、せつつちゃん。はい、このちゃん。じゃあ転移」

「え！？ちょ、ま……」

せつつちゃんとこのちゃん、他2名を旅館に転移させる。

「さあて、楽しい尋問タイムの始まりだ。パーリナイツ！！」

「開放してもらおうとかそういうのは考えなくても大丈夫だから。ほら、俺浴衣の似合う紳士だし」

「クツ！何が目的や！」

「ウチの刀」

「尋問だつつつてんだろ。あと刀は消耗品な。後で買ってあげるからおとなしくしなさい」

「そんな事誰が信用できるか！」

「ほんまですか？『ひな』が折られた訳ちゃうし、まあそれやったら……」

「って待ちいな月詠はん！！」

「まあ落ち着けやこの脳みそド腐れゲロ豚ビツチ娘が」

「ビツ……！！うちはまだ処女や！！」

「オウフｗｗｗｗ思わぬ情報を手に入れてしまいましたぞｗｗｗｗデユクシｗｗｗｗデユクシｗｗｗｗ」

「っ……っ……！！」

「そんな赤なるんなら言わへんだらええのに」

「はい、じゃあまずはお二人の名前と職業を」

「ふん、天ヶ崎千草、陰陽術師や」

「月詠、傭兵？です」

「じゃあ趣味は……」

「何でそんな言わなあかんねん!!」

「趣味は人斬りですかね」

「なるほど、人にとても言えないような趣味と、えー人斬りって事は仕事が趣味って訳ね。真面目な子は好きよ？」

「ちやうわ!!」

「褒められてまいました」

「あんたら自由すぎやろ……」

「んじゃ次の質問はー、このちゃんを攫った理由は？」

「私は雇われたからです。まあ攫ったんは私ちやうけど」

「……なんでアンタなんか言わなあかんねん」

「うーん、拷問は好きじゃないんだけどなあ。とりあえず指落とせとくか？」

「ハッ！結局あんたも下衆やないか！やりたいなら好きにすればええ。でも覚えときや!!」

「でも別にそこまでしないとダメなほど気になるって訳でもないしなあ……どうしたもんかなあ？」

指落とす手段なんか無いしなあ……  
下衆なんて……ゾクゾクしますwww

「彼女達を返してもらえないかい？」

「今尋問中だから待って」

「ってフェイトはん!？」

「あ、どうも」

え？誰？

白髪の子がなんかこっち見てる。

「君は……シラナミだね？」

「シラナミ!？あの史上最悪の大災害の!？」

「誰が大災害だ！俺は史上最高にプリチー？な紳士だぞ」

「やっぱり、それならこちらの分が悪い。なるべく彼女達に危害を加えないでほしいんだけど……」「あとうんこ食べたいんだけど……」  
「……やめてくれないかな」

「ごめん。やめるし危害も加えないからそんな目で見ないでください」



「あかん、相手側に邪神がおるなんて……。もう仕舞いやないか……」

「誰もが夢破れ大人になっていく。世知辛い世の中だ」

「知った風な口利くなや！！あんたがウチの何を知つとるんや！！」

「え？ちよつと待って、シリアスな流れにするつもりなのかもしれないけど、ロイヤルノーサンキューだから！

目的聞いても答えなくせに何でそんな、そういうアレなの？そして俺は何を言いたかったの！？」

「フェイトはん、助けて〜」

「我慢して、月詠さん。僕じゃ彼には敵わない」

「ほな言つたら何とかなるんか！？ウチのお父さんとお母さんは帰ってくるんか！！」

「知るか！！んなもん後で考えるんだよ！！！！」

急に大きい声だされてびっくりしたんだよ！

「天ヶ崎千草さん、ここで彼を怒らせるのは得策じゃない。ひとまず質問に答えて」

「クッ！！ほな言つたるわ！私の両親はなあ、あんたらに殺されてん！！！！」

千草が涙ながらに語った内容は、ちよつと衝撃的過ぎた。

「え？……俺ここ40年くらい誰も殺してないけど……いくつ？」

「そ、そついつ事ちやうわ！あんたら西洋魔術師が大戦の時……ウチの……」

「ああ、そついつアレ？で、何で両親殺されたらこのちゃん攫うの？」

「このかお嬢様は、ウチら関西魔術協会の長の娘や。ウチらから言うてみれば、関東魔法協会が攫ったようなもんや」

「はあん、なるほど。そう言えば、詠春はアレだったな。関西の長なのに関東の婿養子だ」

「そつや。今の長は東の傀儡かいらいに成り下がった。

長はウチらに、ウチの両親をコケにして、戦争行つて死んで来い言つた西洋魔術師に頭下げて生きろつて言うとのんや。……誰が救せるか！

それにお嬢様の魔力は強大や。その魔力を使えば、封印されとるリヨウメンスクナノカミを呼び出せる。こいつを使って日本に我が物顔で居座つとる西洋魔術師を追い出すつもりやった……それをお前が！！」

「ダメだ、天ヶ崎千草さん」

「何でや！西洋魔術師は殺したいほど憎い！！けど、もうウチらに関わらへんだらそれでええのに……！！何で謝罪のひとつも無しに我が物顔でウチらに偉そつに命令してきよんねや！！どの面下げて

使われなあかんのや！！！何で………なんでウチらが………」

涙なしには聞けへんやろ。

「グスツ……千草はん………そんな事あつてんなあ………」

「そりゃ仕方ないわ………」

「何が………何が仕方ない言うんや！！！！」

「そりゃそこまでやられたんなら、ちょっと国が傾くくらいの嫌がらせやったって、仕方ないわ。な」

「君………まさか？」

フェイトさん、ほんまシリアス顔が似合うでえ。

「その嫌がらせ、俺も手伝うわ。何でそのリヤンメンノ神呼び出したら追い出せるのか全くわかんねえけど、そのくらいの魔力なら足りるだろ」

「あんた………ええんか？あんたは関東の者やろ？」

「え？いやいや、俺は教師よ。麻帆良学園中等部3-Aの副担任。要するに、シラナミ、生徒、教育機関の三つに影響が無い限り何やってもいい」

「そうなんか。でもあんさん、見る限りそこまで魔力があるように見えへんけど」

「ふ。じゃあ見てろ。必殺！！」どや顔ネックレスはずし！！！」  
説明しよう！！」「どや顔ネックレスはずし」とは！！  
どや顔で魔力隠蔽用ネックレスをはずす技だ！！  
これにより最悪死ぬ！！

「な、なんやこのバカ魔力！？」

「やっぱり、戦おうとしなくて正解だったよ」

「あんさん、凄いなんなあ……」

「凄かろう 敬え」

「それさえ無かったらなあ」

んへっ！

055 世界最速、救出。(後書き)

SUZUKI T20 (外装カスタム)  
のスペックですが、全くわかりませんでした。  
ごめんなさい。

見た目は完全にサイクロン号です。  
提案くださったもみじ様、ありがとうございます。

更新宣言をすると用事が入る。

父が働いていないかもしれない紅の豚野郎です。

父「メンテナンス入ったから行ってこい」

私「なぜ私が行かねばならぬのでしょうか」

父「(オンゲをやりながら) わし忙しい。整備料金やるから行って  
こい」

私「いらぬから行きませぬ」

父「メシ抜きな」

私「行ってきます」

父「ゴミ袋も買って来い」

今回はちょっとシリアスし過ぎたかもしれん。  
気をつけます。

麟はちょっとバカなので、あんまり難しい話はわかってません。  
要するに

関東が悪いけど関西に謝らない、ひどい。千草はやさしい。

とか思ってるんじゃないですか？知りませんが。

では今回もありがとうございました。

大丈夫、今日はあと6時間もある……！！

056 世界最速の居ない夜。(前書き)

まるでシリアスみたいなたイトルですね。

ちなみに尻assです。

麟が出かけてる間何があったのか、まあ大した事は書いてませんが。

056 世界最速の居ない夜。

修学旅行。

生徒達からすれば体のいい旅行だが、本当の目的はその名前の通り、普段触れない文化と触れ合い見識を深めるためのものである。

とはいっても、そのような事を意識して修学旅行に臨む中学生など、いるかどうかは怪しいが。

彼女達も、“そちらの方の意味”で修学旅行を楽しんでいる所である。

金髪の、10歳程度にしか見えない、肌の白い少女が立ち上がり宣言する。

「さて、ではまず、『いつからお兄ちゃんの事が好きか』についてだ」

彼女の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・シラナミ。場合によっては『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』とも名乗るが。

この場に居ない、白波麟の妹にして不老不死の吸血鬼、さらには魔法使いでもある。

「エヴァちゃんは？」

「600年以上前に命を助けてもらって以来の仲だ」

「いや、無い無い」

そんなエヴァンジェリンに突っ込みを入れる彼女は朝倉和美という



『一般人』だ。

当然、エヴァンジェリンが寿命を失った吸血鬼であることも、その兄であり、昔から親しい仲の麟が不死で、なおかつ世界最強であることなど知りもしない。

和美の突っ込みは無視され、エヴァンジェリンの従者、ガイノイドの絡繰・S・茶々丸が続く。

「私は……思い返してみれば017の終わりあたりからです」

「な、何を言っているんだ!？」

「私には全くわからんな」

「そういうお前はいつからだ？」

「いつからって、私は別に……」

エヴァンジェリンにつつかれて冷や汗を流す彼女は長谷川千雨。一応シラナミだが、まだ名前に入るまでは至っていない。

魔法使い見習いといった所だろうか、使える魔法は少ないが彼女の通う麻帆良学園の異常性に気付いた数少ない人物でもある。

「気付いてないとも思ったか？」

「って事は……?」

「あーあー、わかったよ!043の最後の方で既に惚れてたよ!」

「ヒューッ!お熱いねえっ!」

「盛り上がるのはかまわんが、次はお前だぞ、朝倉和美」

「げ、っそっかぁ……」

まあいいや。私は昔からお父さんの付き合いで知り合いだったからなあ。

麟さんには全部見られた事あるし……」

「ブツッ……！」

「ちょ、嘔き出さないでよ千雨ちゃん！子供の頃だって。オムツ変えてもらってたらしいし、私が10歳の頃あたりまで、たまにお風呂も入ってたし」

「な、何だ、そういう事が……」

「ふむ、で、肝心のいつ好きになったかって話はどうした？」

「あ、やっぱりばれちゃう？」

でも、いつって記憶に無いんだよなあ……。意識したのは私が中学校に通うようになった一昨年の今頃だなあ。その前まではたまに会ってたけど、会えなくなっただけで分かる大切さもあるって言うの？あはは、照れるなあ」

「なんだ、結構乙女じゃないか……！」

「ちょ、私も結構恥ずかしいんだからあんまりからかわないですよ！」

このように姦しく健全に騒いでいる訳だが、当然寝ている者も居るわけで、ここまで騒げば当然起きてしまう。

「ん〜……朝ですかあ？」

彼女は相坂さよ、いや、今は白波さよか。かつては60年以上幽霊として過ごしていたが、今は麟に与えられた体に憑依してその嫁として過ごしている。

「あ、起こしちゃった？ごめんね、さよちゃん」

「おお、丁度いい、お前も参加しろ！」

「ん〜……何の話ですかあ？」

「いつから麟様の事が好きか、という話です」

「私は麟さんが大好きですよ〜……くうー」

「……もう少し寝かせておくか」

「そうですね、マスター」

「いやいやいや、ちよ、今の発言はどうなんだ！？」

「そつよー！ゴシップは別に好きじゃないけど、コレは気になるじゃないー！」

「いや、気になるも何もさよはお兄ちゃんの嫁だぞ？」

「ハア！？アイツ私に求婚してたじゃねえか！ー！」

「ええ！？ちよ、ええ！？」

「いや、貴様らの前提条件、要するに生活基盤が違うがな、お兄ちゃんの国は重婚しても大丈夫なんだよ」

「あ？ああ……魔法世界まっちの話だよな」

「麟さんって日本人じゃないの？ってか千雨ちゃん知ってんの？」

「お兄ちゃんは、アレでも小国の王だぞ」

「え、ええ……！？」

「お、おい、そりゃ流石に私も知らなかったぞ！？」

「なんだ、そうか。まあそういう話もあるが、別に変わらず接してくれ」

「ま、まあそういう事なら……」

「では次の話だ！お兄ちゃんの好きな仕草！！」

「はい！マスター！」

「茶々丸！」

「全てです！」

「正解！！」

「なんじゃそらー!!」

「ええいなおれ!その腐った根性叩きなおしてくれるわ!」

「何でそんな事」

「わかりきった事であろう!お兄ちゃんの仕草がいかにかわいらしいか!!茶々丸!!」

「はい」

壁をスクリーンに寝姿の麟が映し出される。

長襦袢を身に纏い、体を丸めて指を咥える姿を見た彼女らは光源がどこかを気にする暇も無く。

「ちょっと千雨ちゃん、ティッシュ取つて。鼻血出た」

「私も両手が塞がってるんだ。他に頼め」

「もう、二人とも仕方ないですねえ、はい」

そんな二人にポケットティッシュを渡すさよだが……

「いつから起きてたとか、なんで袂からポケットティッシュが出るのかとか聞かないけど、さよちゃんも鼻血出てるよ」

「あら」

「ふはは、さよもたいがい抜けているな」

「滝の如く鼻血を出してるお前には言われたくないだろうよ」

そんなこんなで時間は過ぎてゆく。  
ちなみに、現在かなり大きな声で騒いでいる。  
当然教師にも気付かれる訳で……。

「あのー……悪いんだけどもう少し静かに……」

「悪いと思っているなら黙ってる」

「はい、すみませんでした」

先ほどの男は瀬流彦。姓なのか名なのかは分からないが、とにかく瀬流彦なのだ。

ちなみに、なかなかの苦勞人である。合掌。

そんなこんなで時は過ぎていくが、先ほどから話に参加せずに外を眺めている少女が居る。

色黒で、顔に刺青なのかペイントなのか分からないが模様のかかれた、髪の高い少女だ。

ずっと外を眺めながら、ペットボトルでジャグリングしている。

！！

今日が合った気がしま……うわなにをするやめ！！

056 世界最速の居ない夜。(後書き)

今回誰視点だよ。

はい、僕視点です。

こついつのを巷では「打ち切りEND」といっつらしいですね。  
え？違う？

今回の話は(僕の)息抜きです。

では、今回もありがとございしました。

057 世界最速と、魔境奈良。(前書き)

大仏よりも見るべきところは無いかもしれません。

なら大仏は見るべきものかというところでもないように思います。



057 世界最速と、魔境奈良。

「じゃあ作戦はこうだ……」

「ふむふむ……」

「それは……」

「ここはこうしたらええんちゃいます〜?」

「僕としては、かの英雄サウザンドマスターの息子も」

「そいつ10歳なんやろ?それに西洋魔術師みたいやし、俺も戦つてみたいねんけど」

「ああ、ネギなら、まあ多少どうなってもいいかな」

「なら僕も直接出る必要は無いかな」

「それならやっぱりここはこの方が……」

「じゃあ追っ手があるようならここで何かすごいのを召還して……」

「親書の件は……」

「それでネギをおびき出すと……」

「じゃあ決行は明後日でいいかな?」

「せやな、準備もあるし」

「俺は別に無いねんけどなあ」

「ウチも斬れるならなんでもいいですー」

「生徒を斬るのはまあ、赦さん。斬りたいなら俺を斬れ」

「麟さん斬れませんやん。いけずっ」

「とりあえず連絡先は渡しておく。じゃあ俺先生だし、帰るわ」

「あ、麟はん!」

「ん?どうした、ちーちゃん」

「ちーちゃん?いや、その……おおきにな」

「……犯すぞ」

「何でや!」

「転移」

ただいま、麟だよ。

からころこからから……

「あれ、みんな寝たのか？」

「……」

「ああ、そうなん。ありがとう、おやすみ」

「おやすみなさい」

「かわいい声してんじゃん」

「……」

しゃーない、部屋戻って寝よう。  
ちなみに、なぜか一人部屋だ。

「OHAYOOOOOOOOOO!!!!!!!!!!」

……

「……知らない天井だ」

寂しくなんかないもん!!

「お兄ちゃん？」

「隣様あ？」

「……俺は絶対殺させたりしないからな」

「？」

「どうかしたんですか？」

「家族は大切だよな、うん。」

「つーわけだから、俺関東魔法協会に反旗を翻すわ」

「え？どういっ？？」

「いやな、昨日こういう事があったんだよ」

「〜〜こういこと〜〜」

「で、俺ももし家族の誰かが殺されたりしたらって思ったらさ、協力しないのも人非人が過ぎるだろ」

「お兄ちゃん……」

「家族の誰かが死ぬとか考えるだけで俺が死にそうになるわ。という訳だから俺も手伝う」

「そういう事なら私も協力しますよ」

「わ、私もだよ！」





「捕まえる!!」

「外車で帰るぜ!!」

「危ない所だったあ……」

里芋はさよが食べました。

「麟先生、昨日の事の説明を……」

「麟くん、ウチも?」

「うむ。苦しゅうない。あの後な……」

〃〃あの後〃〃

「ってな事があったからな、ほな俺も手伝つやんけっつーことだな」

「そんな事が……」

「えぐつ、ズズツ……うつ、ウチも謝る……」

「このちゃんは何も悪くありません!!」

「それでもウチのお父様の事なんやろ！？そんなん聞いて知らんフリなんて、ウチにはでけへん！」

「このちゃん……」

「その心意気や良し。まあ、コレを期に関西の内部同士の摩擦が納まるといいよな。

と耳障りの良い事を言っておこつ」

「いや、それは思っただけにしておいてください」

今日は3・5・6班が奈良か。地味に忙しくなるな……

「お兄ちゃん、行こつ？」

「そうだな。貴様らも充分気をつけること！何かあれば修学旅行のしおりの最終ページに俺の番号があるから電話して来い。でも意味無く電話した奴は一晩中スクワットな」

「「「はい！」「」」

「解散！」



「奈々良」

「お兄ちゃん、あとのくらい？」

「リバティシティみたいな走り方していいなら三分」

「待て待て!!」

「麟さん！普通に走ってくださいね!!」

現在、レンタカーでバスを借りて運転している。

一応奈良メンバー全員乗せて。

「ちよつと、朝倉。あなたの副担任かわいいしバスの運転できるし  
凄すぎでしょ」

「いいでしょ、あげないわよ」

「ちえっ」

「ちなみにこっから一度も道を反れずにまっすぐ走るとそのうちど  
こ掘っても遺跡が出てくる恐怖の町橿原につくけど行く？」

「橿原神宮ですか……そちらも興味深いです……」

「運が悪ければ生で遺跡を掘ってる所が見れるぞ」

「悪ければ？」

「まあ行くつつつても奈良市にしかいかねえけどな。着いたぞ。降

りろ」

「はい？」

「ありがとね、麟先生？」

「気が向いたらうちの担任になってねー」

「おい、瀬流彦が泣くぞ」

というわけで、奈良だ！

「えー、注意事項！鹿は凶暴だからつかつに近付きすぎるな。あいつ等マジ暴徒」

「えー、かわいいよー？」

「ホントに道歩いてるー！ー！」

「しかせんべいをやろうー！」

「まあ泣くなよ」

「先生！！助けてー！！」

「だから言ったんだよ！手を放せ！！」

「でもパンフレットが！」

「そっち行っただとこにいくらでも置いてある！」

鹿がむっそむっそとパンフレットを喰らっている。  
それ食いモンじゃねえから！！

「麟先生、鹿せんべい食べていいですか？」

「無害だから勝手に喰ってろ！！」

ゆえに言ったらマジで喰った。

「む、けっこうな……」

「まじか、ポリパリポリンクス……特筆してマズイとう訳でもないが、味は無く決して美味くはない。ちなみに主な原料はぬかと穀類だ」

「麟先生！鹿せんべいってどうやってあげるんですか？」

ちなみに聞いてきたのはネギだ。びっくりだわ。

「そこに150円で販売されてるからそれ買って一枚づつくれてや

れ。ちなみに帯も食うぞ」

「ええ！？大丈夫なんですか？」

「パンフレット食うくらいなんだから大丈夫だろ」

「わわ！頭突きされました！」

「早く寄こせつつつてんだよ。言わせんな恥ずかしい」

「せんせー！なんか変なにおいがするー」

「ぶっ飛ばすぞ。それは鹿のにおいな。フンとかの。そこかしこに落ちてる黒いツブツブがそう」

「ひゃあー！ー！」

「お兄ちゃん！大仏殿行こー！」

「はーい？」

「わあ、おっきー」

「台座も含めてだいたい18mくらいか？」

「ちなみに重量は約250tと、相当重いです」

「おお、ゆえさんではないか！」

「お嬢ちゃん、ここは一応飲食禁止やからあつちで飲んでな」

「ごめんなさいです」

連れて行かれた。

「アイツは何をしに来たんだ？」

「重さを言いに来たんじゃないの？」

「ああー疲れた。全員乗ったか？」

「「「はい？」」」

「おい、ネギ先生の魂抜け切ってるぞ」

「い、いいから出して！早く！！」

「うお！何だよハルナっち！まあいいや、出発〜」

純粹に疲れた。

057 世界最速と、魔境奈良。(後書き)

奈良の鹿ですがね、アイツらは本当に暴徒です。

以前飛び出してきた鹿を避けた友人の車が全損になりました。

恐ろしいでえ………

ちなみに檀原の「運が悪ければ遺跡の発掘」がどつとかいうのは、本当にどこ掘っても遺跡が出てくるんです。

そして、うかつに出てきてしまった日にはそこから発掘が始まります。

その土地が借り土地だった場合でも借り賃は借主持ち。

恐ろしいでえ………

という訳で、魔境奈良編でした。

皆さんも一度はお越しく下さい。本当に何も無いところです。

では、今回もありがとうございました。

明日は多分、白百合の方を更新します。

間に合え、日付の境界線!!



「うーん、うーん……」

ロビーに煙草啜えて行ったらネギが転がってた。

「何やってんだ？ノミでもついたか？」

「い、いやあの、別に何も……誰も僕に告ツたりなんか……」

「えー！？コ、告った！？」

「それホント、ネギ君！？誰からされたの！？」

「HOO！びっくりした。ゆっきーとまっきーか」

そしてネギが口を塞ぐ。

「おい、ネギ先生？口を塞いでも、言った言葉は戻ってこないゾ」

「いえ、あのっ、告った……じゃなくて、ココツココクさんがココクのあるココクリさんのスープを……」

「ほ、僕しずな先生達と打ち合わせがあるので、これでー！！」

「何だアレ、シャブやってんのか？」

「ってか打ち合わせとか無かったよな」

「まあいいや、6班のトコ行こ？」



「エヴァあ〜ん？」

「お兄ちゃん？」

「茶々丸う〜？」

「隣様あ？」

「そよお？」

「隣さあん？」

「ちうたあん？」

「ちょ、やめ……………」

「かずみいん？」

「は、恥ずかしいからさ……………」

「ザジ〜？」

「……………」

「一々、一人ひとりに抱きついていく。」

「ハーレムやでえ……………」

ひとまず全員適当にはべらしてると急にふすまが開いた？

A・急や

「ちょ、ちよっと朝倉、大変だよ!!」

「スクープスクープ!!」

「そうですわ!教師と生徒が淫行を!!」

「え?.....」

「おい、何だよかすみん」

「.....で?」

「え?いえいえ、淫行ですわよ!淫行!!」

「いや、何を今さらって感じだけど。.....」  
「応聞くけど誰と誰が?」

「ネギ先生に誰かが告ったねえ。別に淫行でも何でも無いじゃん」

「いーえ!これは許されざる事ですわ!!」

「俺もいけないと思っ」



ともカオス。

何でネコって車が来てるのわかってんのに止まるんだろっな。聞いた話だと対決するらしい。ネコ科は相手の大きさがわからないんだとか。

真偽のほどは定かじゃない。

「死んだー!？」

「いや、ダメだね。強制転移」

別名バシルーラ。

相手は死なない。

俺のところにネギとネコとカモを転移させる。

「おい……おい」

「あ、麟先生！助かりまし……た……朝倉さん？」

「……へ?……何今の？」

「俺、俺。俺がやった。褒めて」

「別にネコだけ助ければ良かったのに」

「いや、修学旅行中のかずみにトラウマ植えつけるとか何モンだよ、すげえな」

「……まあ……麟さんだしね、何出来たって今さら驚かないよ」

俺だけど驚けよ。ほめろよ。

「お兄ちゃんえらいえらい？」

「せやろ？」

「俺っちまで助けていただいて、ありがてえッス、リンの旦那！」

「いやいや、流石にオコジヨが喋っちゃうのはマズイでしょ……」

俺がウルトラフォローするから寝ろ。

と言ってネギを寝かしつけた。

「さて、どっから話したもんか、って一度言ってみたかった。かずみんよ、この世は愛と憎しみと非日常に溢れている！」

「え？いやいやいや、そんなところに転がってないよ！？」

「おい朝倉、愛と憎しみは知らんが、魔法はホントにそこらじゅうにある。気付かないか？」

あんな学園のどこから見てもわかる大きさの巨木が堂々と学園の真ん中に鎮座しても誰も不思議に思わない、

生身の攻撃で石を粉々に砕ける中学生がいるのに、まだ10歳の教師が来ても、学園長の頭が後ろに伸びまくっても誰も疑問に思わない

「え？千雨ちゃんも魔法使い？」

「んな化け物連中と一緒にすんな。まだ魔法に使われてるよ」

「そ、そうなんだ……」。

でも言われてみれば世界樹とかくーふえとかネギ君とかぬらりひよんとか……ひよっとして魔法であんなことに!？」

「いや、私の話の何を聞いてたんだ？魔法であんなんが居たりあつたりすんのを隠してるんだよ」

みんなでポーカーしようぜ!

お、いいねお兄ちゃん

なら私も参加いたします

私もポーカーってやってみたいです

……  
せやる？

「って事はあの世界樹とか学園長とかは素で“ああ”な訳？」

ウルトラミラクルハイパースーパーロイヤル1ペア!

フォーカード

スリーカードです

ふらっしゅ?です

……  
ろ、ロイヤルストレートフラッシュユー!!

「まあそっちの方がおかしな気もするけどな」

ま、今のは勝ちをくれたやつただけだ!今回はツーペア、2と6だいや、2のツーカードなんて最早ブタ超えだよ。QとKのツーペア

あ、ふるはつすです！

……  
なんだ、Aとジョーカーのフルハウスか……ってファイブカードや  
ないかい

「はあ、なるほど……ちなみにコレ記事にしても大丈夫かな？」

「検閲で消されるんじゃない？」

「俺が消されるわ！！何でカードゲームも弱くなってんだよお！！」

「お兄ちゃんはザコかわいいね」

「いや、何やってんだよ」

「P o - P o - P o - P o k e r f a c e , P o - P o - P o - P o  
k e r f a c e」

「レディ！！ガガか！？」

「というかこのタイミングで止められたのは初めてだ。そして奇跡  
も魔法も、あるんだよ。

不満なら耳元でWelcome to underground . . .  
と囁くのも辞さない覚悟」

「いや、そんな痛々しいコピペみたいな展開はいらんだけど、  
魔法……魔法かあ……ねえ隣さん、私も使えるのかな？」

「奇跡も魔法も、あるんだよ……」

「お兄ちゃんは魔法を教えるのが死ぬほどヘタクソだからその類の質問は何の意味も成さないぞ」

「まあそういうことだな。いい兵士がいい指導者たりえない、という昔の偉い俺が言った言葉があつてな」

「このタイプの自画自賛を見るのは初めてだよ。ある意味自虐ネタっぽいけど。ハアー、魔法使いたかつたなあ」

「おい、エヴァンジェリン、私と一緒に教えてやったらどうだ？」

「しかしシラナミでないものに……そうだ、お兄ちゃん」

「うむ。ならばかずみんよ、俺の所に来い」

「え？ええ？」

「ああ、始まったよ。私は出とくわ」

なんだよちうたん。言いたい事があつてもはつきり言つと切ない。

「知ってしまったからには仕方あるまい。幸い、俺はかずみんがかなり好きだ。結婚しようか」

「へえええ！？そ、そんな……冗談だよな？」

「本気だ。シラナミとして迎え入れて等しく愛すると誓おうじゃないか」

「そ、その……ぐずっ……麟さあん……」



「かずみん……」

え？いやいや、俺の手はそこまで早くねえよ。速いのはバイクくらいだよ。

「ちなみにこれが先ほどの和美さんの写真です。

コレを 乙女かずみん と名づけようかと」

「採用」

「ちょ、ちょっとお！！」

「終わったか？」

「ああ、そうだよちうたん」

「って事はライバル発生か、うかうかしてらんねえな」

そう言ううちうたんは俺に向かって左手を出してきた。

マリッジを人差し指から外して薬指につけなおしてあげる。

「今日から白波千雨だ。んで、これからはライバルじゃなくて共闘だ。よろしく」

「よろしくねん。でも負けなよ、千雨ちゃん」

嫉妬のない関係はいいよな。

ちなみに何があったのかは知らないけど、俺の知りえない所でいるあつてのどっちとネギがパクティオーしてたらしい。どうでもいいな。

058 世界最速、Poker face。(後書き)

出身高校が十津川高校なんです。

豚野郎です。

今回は魔法バレ回ですかね？そうなんですかね？

違いますね。

ではあとがきは簡素に。

ありがとうございました。

059 世界最速、交差しない思惑。(前書き)

すぐく久々の更新な気がします。

平行線どころか思惑が一本しかないから交差しようもありません。

059 世界最速、交差しない思惑。

「さあ、話し合いだ!!」

「やってやりましょう、麟様!」

「えーと、彼女達は協力者でいいのかな?」

「“俺の”協力者だ。安心しろ、エヴァンジェリンは俺の次に強いし俺より賢い!

そしてなんと茶々丸はロボットで、しかもガイノイドだ!! 凄かろう!」

「あんさんらも協力してくれはるんか?」

「そうだ、エヴァと茶々丸が協力してくれるっつってんだよ!!」

「麟さんにはきいとらへん」

「しょんぼ麟」

しょんぼ麟でっー。

「どうやらお前らクソどもの考えたゴミにも劣る作戦に大きな穴があるそうだから、それをエヴァが修正してくれるそうだ!」

という訳だ。

修正案を出していき、より良い方法を提案する。

さすがエヴァ! 天才!!

ちなみに参加者は俺、エヴァ、茶々丸、ちーちゃん（千草）、つっきー（月詠）、フェイト（運命）の6人だ。  
犬耳のイマイチ萌えないバカガキは留守番だ。

「まあ殆ど麟さんが考えたモンやけどな」

「ぐうわ！ぐうわ！ぐうわ……」 K・O・

「一つ目、ネギを途中で襲うのはいい考えだ。そのコタローとかいうガキには全力でやってもらおう。死にそうなら助ける」

「それで、その次はどないします？」

「ナギの息子、ネギの親書は一時的に東の長に渡す」

「理由はなんですか？」

「恐らくあのじじいの事だ、クソにも劣る文を書いているに違い無い。コレを証拠物件として確保」

「それは可能かな？」

「そんなもん貴様等の力量次第だ。」

そして次に貴様が屋敷を襲う話だが、ここでは怪我人を出さない方法を取ってもらう。捕縛魔法は？」

「捕縛はともかく、石化ならそれなりの自信だよ」

「でも何で怪我人を出したらあかんですか？」

「東に付け入る隙を与えてしまう。そんなもん1mmもいらん。向こうと話し合いをしようとしたが、先に手を出してきた。これが理想だな。可能ならあのガキに手を出させる。西の者が手を出すよりやりやすい」

「確かに……」

「で、スクナの件だが、コイツの召還までは問題ないが、やはり東までとか無理だ。脳みそ腐ってるんじゃないか？」

「いやいや、あんさん酷いな」

「思った事を言っただけだ。コイツはある程度遊ばせてから圧倒的火力で消す。東への宣伝だ」

「なるほど……それはあんさんがやってくれますの〜？」

「そうだな。状況により、だ。」

「で、重要なのはここからだ。まず……」

飽きた。

いや、ホントに。

俺頭良い方じゃないからホント飽きてきたんだ。

ここまでの半分も覚えてない。

「……と言っわけだ。いいな？」

「任せい！」

「斬ってもいいんですやろ〜？」

「いや、月詠君、ダメだって」

「え？うん、大丈夫大丈夫。かなりの確立で可能を不可能にできるっし」

「お兄ちゃんはその都度言っから安心してね」

「うっ」

（～翌朝～）

「………という方法を取る事になる。異論があるなら手を上げる」

せつちゃん、このちゃん、ORE、エヴァ、茶々丸  
がいる。

異論はないそうだ。

「では質問があれば私に言うように」

「はいはいエヴァちゃん！」

「何だ、近衛木乃香？」



「私たちはどうしたらええん？」

「基本的には班行動だけど、一般人にバレたら目も当てられんからな。適当に理由をつけて再編成させる。恐らく図書館探検隊？何かと同じ班になるはずだ。あとはなるべくように行動し、適当に実家に向かえ。変わりは私が用意するから心配は無い」

「魔力提供は俺な！俺が魔力提供な！！」

「頼もしいなあ、せつちゃん」

「そうですね」「そう”です”ね？」「そ……そうやね、このちゃん」

このちゃんこわい。

「では、私たちは一時別れますが、何か御用がある場合はこちらの番号か札をお渡ししますので大事がある場合至急お願いいたします」

「はい、ありがとうございます、絡繰さん」

「よろしくなー」

では行動まで時間があるから修学旅行のしおりでも見ておこう。

- - - - 1 - - - -

- ・教師に逆らった者は、殺す。
- ・教師以外で権力を行使したものは、殺す。
- ・教師を自分の都合良く解釈したものは、殺す。
- ・煽り叩き潰しを他の班にした者は、殺す。
- ・クラス同士の対立煽りを仕掛けた者は、殺す。
- ・修学旅行を楽しめない者は、殺す。
- ・京都や奈良・大阪などより遠くに特攻した者は、殺す。
- ・修学旅行中の教師公認の活動を妨害した者は、殺す。
- ・修学旅行に関係の無いお土産を欲しがる者は、殺す。
- ・飲酒・喫煙などの不良行為は、殺す。
- ・公然わいせつ・強制わいせつをした者は、殺す。
- ・修学旅行費を払わない者は、殺す。

- - - - 2 - - - -

### 修学旅行の流れ

気合で

乗り切れ

- - - - 3 - - - -

持って行くもの

己が心に聴け。

それで解らぬなら教師に聞け。

それでも解らぬなら悩め。

悩んで、悩んで

悩みぬいて

死ね！

-  
-  
-  
-  
-  
4  
-  
-  
-  
-  
-

歴史的建造物の案内

1・京都府

寺とか。

2・奈良県

神社とか。

3・大阪府

ビルとか。

-  
-  
-  
-  
-  
5  
-  
-  
-  
-  
-

最後に

辛い事、泣きたい事があつたら死ぬ。

なんだこの……なんだ？

エヴァのしおりを見たら普通のだった。  
どういう事なの!？」

「エヴァ!! ゲイ セン 行こうぜ!!」

「そんなところより金閣寺行こうよ!」

「よーし、ジェラートみんなの分奢っちゃうぞおー」

「というか、まさかこっから歩いていくとか言わないよね?」

「安心しろ、こんな時の為に現地妻ならぬ現地車庫が世界中の至る所にあるぜ!」

こっから一番近い7人乗れる車がある車庫は……出た。歩いて6分

！即ち這つて15分つて所だ！」

「這つて行く必要がどこにある！！」

「ああ、最早車庫には突っ込まないんだ。そりゃ麟さんだもんね」

「麟様は」「」「」「天才だから！」「」「」

「うん。もついい」

くく？ 毘古社くく

「よっしゃ、見事に掛かったな。アホばっかしや。じゃあ小太郎、好きにしていええで」

「ああ。行ってくるわ、千草姉ちゃん」

「治してもらえる、言つたかて、怪我しなや」

「ふん、俺を誰やと思てんのや。そんなへマはせんわ」

〜映画村〜

「このちゃん、こっちです!」

「敬語はやめてって言うてるやんかあ」

ふふふ……

茶番やって解ってても楽しみやなあ

「よろしく頼みますえ、刹那センパイ？」

などという感じでみんなちゃんとやってくれてるだろう。

俺はどっちに合流しようかなあ〜〜。

まあ適当に特攻すりゃいいか。

「お兄ちゃん、早くう」

「アハハハハ、ウフフフフ」

「平和だな」

「……」

「平和ね」

「平和ですね」

アハハハハ、ウフフフフ

059 世界最速、交差しない思惑。(後書き)

ぬはあー!!!

めっちゃ久々の更新やん

すみません、テディベア作ってたら遅れました。

淫乱テディベアじゃない方です。

というか、修学旅行編飽きてきました。

もう和解しとんねんから襲撃とかいらんやろ、と思わんでもない感じですよ。

スクナ戦とのどかの読心だけが楽しみですよ。

多分麟の用意した車はハイエースとかエステイマとかだと思えます。そんな気がする。

明日は明日で地味に忙しいっばいなので、更新できるかは危ういです。半ニートなのに自営業の父より忙しい。

では、今回もありがとうございました。



060 世界最速の視点変更。(前書き)

ぼいんぼいんと視点が変わります。

なんか、カモさんがええとこ全部持つて行きました。

060 世界最速の視点変更。

麟のねえ……兄ちゃんにはなるべくネギをいじめてやってってくれって頼まれとるけど、どうも弱いもんいじめは好かんねなあ。  
まああの大战の英雄「サウザンドマスター」の子供らしいから、んな弱いつて訳でも無いんやろうけど。

とか思いながら眺めとつたら一緒にあった、多分式返し能力がある姉ちゃんが魔力強化で岩を蹴り砕きよつた。

多少は楽しめそうやけど……関西のもん勝手に壊すなや。  
これやから西洋魔術師は。

「そこまでやで西洋魔術師」

千草姉ちゃんの用意した蜘蛛の式神に乗って下におりる。  
あ、めっちゃ荒らしてもうた……人の事よう言わんわ。

「な！？君は！？」

「ネギ・スプリングフィールドやったか？あんま大したことなさそうな奴でイマイチおもしろないけど、俺と戦ってもらおか」

「急に出てくるなり失礼な奴だなあ、兄貴、どうすんだい？」

「このタイミングで出てきたって事は、君が結界を？」

「そうや。出たかったら俺を倒してけつてな。ま、回避不可能イベントや思て倒されてくれや。当然話はここで終いやけどな……！」

小太郎君につけておいた式神から交戦の合図が来た。  
さて、じゃあこちらこそそろそろか。

「綾瀬さん、早乙女さん、私はこのちゃんと二人で行く所がありますのでここで別れましょう!」

「愛の逃避行やなあ」

「じ、このちゃん……」

「すごいラブ臭を感じる。今までにない何か熱いラブ臭を。  
風……なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、木乃香と桜咲さんのほうから。」

中途半端はやめよう、とにかく最後までやってやるうじゃん。  
探せば麻帆良だけでも沢山の同性愛者がいる。決して一人じゃない。  
信じよう。そしてともに戦おう。

両親の反対や偏見は入るだろうけど、絶対に流されるなよ。」

「ハ、ハルナ……すごい鼻の穴です!」

「もう、行きますよ!」

「はあい」

私はこのちゃんを抱えて飛び上がった。

コイツ、できるな。

今の兄貴や姉さんじゃマズイ。このままじゃ負けちまう！

「姉ちゃんにもろた式神は返されてしもた時から思ってたけど……  
やっぱりお前は全然大したことないな、チビ助！」

「！」

「女に守ってもらって、恥ずかしいと思わへんのか？これやから西洋  
魔術師は嫌いなんや」

「前衛のゴキちゃんやられちゃたからって負け惜しみね、ボク！」

「いや、待ってくれ姉さん！奴の様子がおかしい！！！」

「ほう、そつちのイタチはなかなかやるやないか？そつや。俺は術  
師とちゃうー！」

奴はそう言つと姉さんの前に立って、振り回すハリセンを避けてる。

「ハハッ、当たらない意味ないな」

「ラス・テル マ・スキル マギステル！風花……」

奴が兄貴の懐に潜り込んだ。  
あ、あの手に持つてるのは!?

「武装解除!」

「避ける、兄貴!!」

「枯山水はいいなあ……」

「詳しい事はわからんがこの時期だとまだ桜が見えて中々風情のあるもんだな」

「そうだろう、千雨。貴様もこの美しさの虜になるがいいわ」

「あれ?石一個足りなくね?何回数えても14個なんだけど。俺盗つてねえよ。マジ」

「これは初めからそう見えるようになってるんですよ、麟さん」

「日本人凄すぎだろ。どんだけやり放題だ」

「本来無い物をそこに見る。日本人の美意識が垣間見れるいい場所だよ」

「なるほどー、なるほどー」

よくわかってない麟です。今日はこのまま出ないんじゃないかとちよっと焦ってた。

「さっきの西の庭も良かったけど、やっぱり龍案寺に来たら万丈庭園は見えておかないとね」

「……」

「せやな」

「左です、先生ー！」

「！」

「あんたはさっきの姉ちゃん!？」

さすがにマズイな、一般人を巻き込むのは……。大人しいしとけて言ったのに。

「おい、チビ助!一時休戦や!」

「な!?!なんでよ?」

「やっと諦める気になってくれたの？」

「アホか！どう見てもさの姉ちゃん是一般人やろっが！こっちの世界に気軽に巻き込んでも良い思てんのか！

アホやとは思ってたけどおまけにクズとはな！ホンマ気分悪いガキやで。」

「そ、そんなつもりじゃ……」

「一時休戦言っただけど、もうええわ。お前なんか戦う価値もあらへんクズや。結界は解除するから勝手に出て行け！」

「鏡容池は四季で景色が大きく変わり、春は桜、夏は睡蓮、秋は紅葉や楓、冬は雪景色がそれぞれ外せないよ」

「何で行った事ないのにそんな詳しいのか不思議」

「マスターはそりゃあもう季節の変わり目には怒涛の検索マシンですからね」

「そんな事ならもつと連れてきてやればよかった」

「お兄ちゃん……」

「つーか俺蓮の種？っていうの？あれ死ぬほど怖いんだけど」

「アレねえ。私も怖いよ。なんていうか、混ぜたらかなり取り返しのつかない事になりそう」

「お前ら間違っても蓮コラで検索すんなよ。私も一回見たけど……」

蓮コラ見た時は思わず画面を殴り抜いたもん。  
ホント怖い。一ヶ月パソコン触れないレベル。

「そんな事より一回見てどうなったの？布団から出れなくなったの？」「何で私だけ一人部屋なんだよお」って泣きながら音楽を鳴らしてたの？」

「な、何で知ってやがる!？」

「知らなかった」

「知らなかったんだ……」。

「なんだろう……あの稚拙な尾行は……」

「せつちゃん、せつちゃん……?」

「はい?」



「じゃ〜ん？」

私の天使がそこにいた……  
じゃなくて

「ど、どないしたん、その衣装？」

「その更衣所で貸してくれるんよ。  
どう？、似合とる？」

「は、はい！天の羽衣を拾い忘れた天女が降りてきたのかと！！」

「もう、ややわあ？」

お嬢様おかわいとお嬢様美しいお嬢様お綺麗お嬢様麗しいお嬢様  
清楚お嬢様いじらしいお嬢様愛おしいおじよ……

「はっ！？私はいつの間にこのような格好を！？」

気付いたら夕凧が死ぬほどそぐわない男物の扮装をしていた。

「うわー？すごい美少年剣士とお姫様だー？」

「写真撮って良いですかー？」

「え？」

「はい？」

「ま、まあこついうのも……いいかな？」

「あの、今の写真のデータもらっていいですか？」

「あんな、すごいこと気いついたんよ」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「ここな、映画村じゃなくてな、シネマ村やねん……」

「え？……う、うん。……どうしたの？」

「前回どや顔で映画村って書いたバカがいてな」

「いや、ねーだろ。流石に間違えないだろ」

「という訳でシネマ村だ。いいか、映画村じゃないぞ。シ・ネ・マ村だ」

「そんなに気になるなら修正すればいいのではないのでしょうか。……何を修正するのでしょうか？」

「なあ？」

「うう……僕は先生失格だあ……」

「ちょっとネギ、どうせ逃げるための口実よ。そんな落ち込まないの」

「そ、そうですねー」

「うわああああん！」

「どうもー、神鳴流ですー」

「つておいおい！」

「じゃなかったです。そこの東の洋館のお金持ちの貴婦にございませ〜」

「そこな剣士はん、今日こそ借金のカタにお嬢様をもらい受けに来ましたえ〜」

「そ、そうはさせんぞ。お嬢様は私が守る」

「キヤー、せつちゃん格好えー？」

「お、おおおお嬢様!？」

「そーおすかー。ほな仕方ありまへんなー。  
えーい？」

そう言うつと月詠は手袋を投げてきた。  
ここまででは手筈通りだ。

「このか様を賭けて決闘を申し込ませていただきますー。  
30分後、場所は「映画！！」村正門横『日本橋』にて  
誰ですの〜？」

「キノコ狩りの男！！スパイダーマ」

り……麟先生！？」

「やる事あらへんと暇やなあー」

「そつだね。彼らは上手くやっってるんだろつか？」

そんな事を言いながら隠れ家でフェイトはんと将棋をしとった。

「ただいまー」

「お疲れさん、どうやった？」

「どうもごつもあらへんで！アイツ自身は大したことないわ、女に守らせるわ、おまけに一般人巻き込むわで碌な奴やあらへんだわ！西洋魔術師いうんはこれやから好かんのや！」

「そんな事があつてんなあ……いや、待ちや？これは使えるで」

「？どういう……ああ、そういう事が」

「わかったか？」

「そりゃあね」

「な、何やなんや、二人して？」

「ええか、小太郎こつからウチらは……」

さて、もう一仕事や！

「麟先生！？」

「地獄からの使者から来た男に情け無用のモンスター退治の専門家に命をかける約束の冷血動物マシーンベム殺しの専門家、血は人間の絆。愛の証し。愛の為に血を流す情け無用の亡き兄に復讐を誓う姉弟に心打たれる野生の少女の男の為に戦う希望を見た大切な心を粉碎する少年の友達、100メートル先に落ちた犬笛にむせび泣く

男キラー、スパイダーマ！」

「長いし意味わかんないし主にポーズがキモい!!！」

「麟さんかつこいいです!!！」

「さよちゃんの美的感覚が!!！」

「お兄ちゃんかつこいい!!！」

「麟様かつこいいです!!！」

「もう駄目だなこいつら

ひどいよちうたん。

「……………」

「ね? そつ思つよね?」

「……………」

「ぬははwww」

「あの〜?」

「あ、ごめんつきー。忘れてた」

「んっ、んん〜。ほなお待ちしておりますえ。お友達は連れてきてもええけど、助けにしようと思たらダメあきませんえ。逃げたらイ

「ヤですよ、センパイ？」

ゴロンガラゴロン口と馬車？に乗って走っていった。  
何やってんだ。ああ、作戦か。忘れてた。

なんかいろんなところから出てきた生徒どもがキャツキャウフフとこのちゃん&せつちゃんに集り出した。  
軍隊アリか。ちなみに軍隊アリって世界でもかなり恐れられてる虫。気をつけて。日本には居ないけど。

「ンハハハWWWよくぞ逃げずに来たなあ！！」

「それは私のセリフですえー」

「言ってる！！貴様如きでこの桜咲刹那様に勝てると思いか！バ  
ーカバーカ！！」

「せ、先生……」

「あほー！ゴスロリ似合あにてんじゃボケーー！！」

「うふふ……そつですかー？」

「せつちゃん、後は頼んだ」

「投げっぱなしですかー!？」

「ほな始めましょか、センパイ……?」

「このか様も刹那センパイもうちのもんにしてみせますえー?」

「せつちゃん、負けてもええ。私はどうなってもかまへんから、怪我せんといてな」

「このちゃん……。そのお言葉が何より私を奮い立たせます。負けませんし、このちゃんに手は出させませんし怪我もしません。ご安心を!」

「せつちゃん……欲張りやねんから?」

パチ……

パチ……

パチ……

パチ……

のどか嬢ちゃんはトイレに行ってる。  
話すなら今のうちだが……

「僕はもう駄目なんです……」

「ネギ……」



「僕なんて……僕なんて……」

「おい、いい加減にしろよ、兄貴」

「カモ？」

「カモ君？」

「確かにあのヤローの言った事も一理ある。でも劣勢だったあの時、そんな事を気にかけてるような余裕は兄貴には無かったんじゃないか？」

「それでも僕がやった事は……」

「兄貴、後悔なら充分だ。まだ目的が終わってない以上、今やる事はそれじゃねえだろ。前を見るよ！やる前から諦めてどうすんだ！」

「カモ、あんた……」

「それでもまだ後悔するってんなら勝手にしてくれ。俺っちの知ってる兄貴は、俺っちの恩返しが終わる前に死んじまったとも思うさ……」

「カモ……」

「カモ君……ごめんね、ごめんね……」

「わかってくれましたか！兄貴……」

「カモ君……」

俺っちは信じてやしたぜ!!!

060 世界最速の視点変更。(後書き)

イツケメエエエエエエエエエエ

安定のカモさんやでえ……………

実はここまで書いてから本編を書き始めてます。

先にあとがきを書いておけばそれを道しるべに文が書けるとい  
う物凄いい力技ですね。

なんかカモさんがどんだん男前。

何だこのポジション。

僕はやめようって言ったんですが、ゲームボーイアドバンスと  
もにロックマンゼロシリーズが押入れから出てきたから……

やってたんだよ。言わせんな恥ずかしい。

すみません。

今回は視点変更が多くて書きにくいしわかりにくい。  
ひどいもんです。

では、今回もありがとうございました。

ダーマッ!!

061 世界最速、Ninja(ニンジャ)。(前書き)

農耕機みたいな音がしない方です。

061 世界最速、NinjaJiji。

「で、これがその契約の魔方陣でさあ」

「へえ……すごいな、カモ君」

「いやあ、照れますぜ」

隣の旦那もいらっしやるし、あんまり派手に動くのは申し訳ねえとは言え、兄貴に強くなってもらうからには覚えという損は無いだろ  
うと契約の魔方陣の説明をしてたところでさあ。

「ネギ先生」

「あ、はい。綾瀬さんと、み、宮崎さん」

ああ、昼間兄貴に告白した。

「あの……お昼のことなんですけど……」

青春だねえ……。

このまんま契約とかしてくんねえかなあ……ってマズい！魔方陣消  
してねえっ！？

「と、友達から、お友達から始めませんか？」

「……」

はいッ？」

「えーと、じゃあ……も、戻りましょうか」

「は、はい」

あーあぶなかつ……夕映さああああああアッアアアアアアアアアアアアアアアあああああん……！！

なんでのだか嬢ちゃんの足を引つ掛け……いったああああああ！！！！

終わったああああああ！！！！

そんなパクティオーカードまで出てきて……

終わりだ……よりもよって仮契約の魔方陣の上でキスしやがって。

「わわっ、何ですか、このカード？」

「あ！え！あ、あの、その……き、記念品です……！？」

兄貴エ……

『兄貴、兄貴、複製カードだ。こいつを渡しな』

『え？っ、うん、ありがとう』

「ど、どうぞ宮崎さん、その、お、お友達の証に……」

「ネギせんせー……」

「世話が焼けるです」

あんだだよおおおおおあああああ！！

少し、本気出させてもらいます？

「楽しいですなあ〜？」

「おい、月詠！演技じゃなかったのか！？」

「ややわあ、センパイ？こんな熱いひと時を演技で済ませようなんて、酷いお人やで。いけず？」

「クッ」

せつかくこんな楽しいのに、いけずやわあ。

「戦闘狂か！付き合わんぞ」

「まあまあ、そう言わんと〜？」

『月詠はん、聞こえとるか？』

『あら、千草はん、どないしはったん？』

『引き上げや。はぢう帰ってき』

『ええ、今楽しんできてきたトコやのに』

『わがまま言いな！ってか何でガチバトルなんかしとんねや！』

『はあい……』

「クツ、やりますなあ、刹那センパイ。ウチ、もういかなあかんよ  
うになってしまいましたわ」

「ふん、見たか。このちゃんはそう易々とくれてやらんぞ」

「せつちゃん？」

「妬けますなあ。その愛情だけはウチの負けや。ほな末永くお幸せ  
にな〜？」

「つ、月詠／＼／」

また今度試合ってもらえるやるか？

「さて、そろそろ行くか」

「ええ。神楽坂さんたちもそろそろ着く頃でしょうからね」



「ほな行こかー」

・  
・  
・  
・

・  
・

・

「どうしてこうなった……」

「いえ、私にもさっぱり……」

6班のみんなとゆえ、ハルナ、のどっち、あすにゃん、せつちゃん、このちゃんの12人という大所帯だ。

「ふふ、こんな事もあるうかとね」

「パル？」

「桜咲さんの荷物の中にGPS携帯を仕込んでおいたのよ!!」

「せつちゃん ああん!!」

「すみません、お嬢さ、あいたっ!ご、ごめんな、ごめんなこのちゃん!」

「ひい!このかが黒い!？」

「というか何でのどかがここに？」

「そ、そのー……」

なんか頑張れ。俺は頑張らんけど身代わりは送るところ。

「「「お帰りなさいませ、このかお嬢様ーッ」「」」

「うむ、苦しゅうない」

「いや、お兄ちゃんどう鼻真目のに見ても近衛木乃香より小さいよ」

「そんな事より詠春はどこだよ。詠春！！えーいしゅーーん！！！！」

「はいはい。そんな大声で呼ばなくてもここに居ますよ。久しぶりです、麟、それに木乃香」

「久しぶりやなー、お父様。麟くんと知り合いやったんや」

「あ、あなたが関西呪術協会の長ですか？」

「ええ。そうですよ」

「ネギ先生、その話は後でな」

「え？は、はい」

「おい、詠春、人払いしろ」

「あなたは昔から自由な人ですね……」

「詠春老けたなあ。碇ゲンドウに似てる」

「どうぞ、こちらです。お嬢様方はうちの者に案内させますので、少々お待ちを」

「さて、どんな話でしょうか」

「ああ、お前の下の奴らの暴走な」

「はい」

「俺が煽ってる」

「は……え？」

「んで今晚な……」

「ま、待ってください！—どういふ事ですか？」

「だから、いつまで土下座外交してんだっ—話よ。大体西と東の関係が悪い理由もお前が知らん訳じゃねんだろ」

「ですが……」

「いいか、婿養子だからある程度向こうの顔を立てるのもわからんでもないけどな。」

東に戦争行つて来いつて言われた奴らにも家族はいたんだよ」

「……確かに私も婿養子になったと言えども、お義父さんのやりくちは気に入らない所がありました。ですが、関東に逆らうのはあまりにデメリットの方が大きい。もし戦争にでもなったら絶対に勝てませんもそれに、そんな事になったら『本国』も動くでしょう……」

「だから俺がいるんだよ。強制召還」

千草とエヴァを転移させる。

「え？え？何で？つて長!？」

「久々だな、詠春」

「な、何故あなたの方が？というか謀反を企ててたのはあなただったんですか、天ヶ崎さん？」

「あ、いえ……」

「Ninja」

「かまわんぞ、お兄ちゃんが呼んだという事は、そういう事だ」

「では失礼ながら……」

そこから、ちーちゃんが氾濫を企てるに至った理由やらなんやらの

説明の後、詠春にどういう対応をして欲しいかとかそんな話。

「……確かに、いくら当時内政から放れていたとは言え、あなたの両親を亡くならせてしまったのは完全に私の落ち度です。本当に申し訳ない……」

「そんな、長。土下座なんて……」

「もし麟が来なければ、あなたを唯の裏切り者として処罰してしまっていたでしょう。」

私も長として、どうすればより関西の皆が生き残れるか、苦勞を強えずに暮らせるか、という事を考えなければなりません、わかりました。

麟も協力してくれるのなら、こちらの負けは無いでしょう。関東には徹底抗戦の意志を伝えます」

「という事は……?」

「Ninja」

「私も……いえ、関西もあなた方に協力します。そもそも、あなた方も関西の一員です。仲間の為に力を出し惜しむ必要がどこにありますしょう」

「長……、ありっ、ありがとうございます……ありがとう……」

「さて、では作戦の修正はこちらで行っておく。お前はさっさとこのクラスのバカどもの所へ行け。そろそろ取り返しのつかんとこまで暴れていてもおかしくないぞ」

「Ninja!」

「はい、エヴァンジェリンもありがとうございます……麟、障子に穴を開けないでください!」

「え?」

「もう!またですか、長!!あれほど障子に穴をあけさせるなって言ったのに!」

「い、いや、私はやめると言っていたのですが!」

「Ninja!」

Ninja!ということか言いながら指をれろんれろんして障子に穴を開けまくってたらまた怒られてやんのwww

061 世界最速、Ninja(じ)。 (後書き)

程よい所で一旦切ります。 全然ほどよくない

今回は31人中12人が旅館から失踪するという大事件の話です。詠春は仲間にする予定じゃなかったのになんかこっちに来てた。

はい。オッサンキャラが好きなんです。性的な意味じゃなく。

では、そろそろ無双回が来ますね。何故か僕がかなり楽しみだったりします。

では、今回もありがとうございます。

062 世界最速、鬼神召還。(前書き)

リヤンメンスクナノカミさんはバカキャラっぽい顔してるね。  
見直したら負けだと思っている。

エヴァが

「さつがに死んだ方がいいと思うよ、お兄ちゃん？」

などとほざいてたので修正しました。

もみじさん、ありがとうございます！

さつがって何やねん……





「確かに承りました、ネギ君。大変だったようですね」

「い、いえ」

詠春が親書を読む。

「ふむ……、ふん……。どう思いますか、千草さん」

「あの、そちらの方は？」

「ああ、『ついさっき雇った』相談役の天ヶ崎千草さんですよ」

「よろしゅう」

「あ、はい、よろしくお願いします」

「ふうん……。この一枚目の私信は別な封筒に分けるべきでしょうな。とは言つても、まあ長土士のルールです。私には関係ありません。

で、この二枚目からの親書の方ですが、これはホンマに親書ですや  
るか？ウチにはとてもそうには見えせんわ」

「そうですね……」

「え？ええ？」

お、ネギも気付き始めたか？

「あくまで、『ウチが長なら』、とても好意的な返事は返せません

なあ。ましてや、こんなふざけた文やと」

「ええ。私も同意見です。」

東の長の意見はわかりましたが、その前にするべき事があるだろう。東西の仲違いの非はこちらには無い。よってそちらの意思には添えないとお伝えください。

任務ご苦労、ネギ・スプリングフィールド君」

あんな普段どおりの笑顔でエグい事言うなあ、詠春。

内政のスキルは無いと思つてたのは改めるべきですか、そうですね。

「ええ？あ、ありがとうございます？」

「え？ちょ、ちょっと待つてください、長さん！」

「何ですか、アスナ君？」

「納得いきません！親書はちゃんと受け取ったじゃないですか！」

「はい？何を言いたいのか解りませんが……、確かに親書は受け取りましたし、返事もお願いしましたね。それに、ネギ君の任務も成功。良い事ばかりじゃないですか？」

うわあ、このちゃんの親父やでえ……

「で、でも……！」

「んん……アスナ君はこう言いたいんでしょうか？『せつかくわぎわぎ苦労して東から持ってきた親書なので、もう少し熟考した上で、なるべく好意的な返事がほしい』と？」

「え？た、多分そうです！」

恐ろしい女やお……。一言で言えば「逆らうな」「つーことやない。」

その程度の言葉をあんだけ引き伸ばす詠春も詠春だけ。

「ふむ。確かにこれは東西の意志を分かつ大切な話ですので、私の友人方の意見も聞いてみましょうか……」

おねがいできますか、麟？」

「ナレーションだけで飽きてた所よ。『強制召還』」

「やっと出番ですか。暇で暇でしゃーなかったんですわ」

「お呼びがかかったようだね。雇われの身だけど、来たよ」

「ん？何や何や？ああ、長の屋敷か……って、お前はあん時のチビ助？」

「き、君は！？」

「何でアンタがここに！？」

「クズに喋る言葉は持ち合わせとらん。話しかけんといってもらえるか。」

「ぐっ……！！」

いいぞ、煽れ煽れ。

「んで姉ちゃんな。アンタは気に入つとんねんで。ここに居る理由は簡単や。俺らが関西呪術協会の一員やからやな」

「な、それって!？」

「少し落ち着いて。親書はこちらです」

「ふん……僕は傭兵だから、中立の立場からになるけど、これはマズイね。下手すれば戦争にもなりかねないよ」

「お義父さんの率いる関東とは戦争をしたくないのですが……まあ仕方ないですかね」

「そ、そんな!！」

「ウチも傭兵やけど、元々関西の人間ですからなあ。これは気分悪いわあ……。ウチら、舐められてるんやろか」

「俺から見てもわかるくらいアホ丸出しやな。クズのお上はクズ言うこつちや」

「あんだ、いい加減にしなさいよ!！」

「ああ、何や姉ちゃん?手え出すんか?ここやで、外すなよ?んでそのチビ助はまた姉ちゃんに守ってもらえや」

自分のほっぺをツンツンしながら小太郎がすごいいい仕事してる。その年でその極悪面は勲章もんやの。

「バカにするなあ!!」

ネギが小太郎を殴った。

身体強化なしで小太郎には障壁あり。とはいえ、その手は確かに小太郎に当たる。

小太郎は勢いを殺さず後ろに大きく吹っ飛び階段にぶち当たる。  
勝利確定来たな。

「え？」

「何で？だってさっきは全く……」

「やってしまいましたね、ネギ君……取り押さえる」

「はいな！」

「な！は、放してください!!」

フェイトとつきーに取り押さえられるネギ。

「ネギ!!…どういふ事ですか!？」

「あすにゃん、よく考えろよ。ネギは東の特使だ。そのネギが西の総本山で、西の人間に手を出した。充分問題になり得ると思わん？」

「アンタもグルだったのね!？ちよつとはいい奴だと思ってたのに!!」

「今もいい奴だよ」

「覚えてなさいよ!!」

「申し訳ないがアスナ君、君の友人のお嬢さん方はここで捕虜として軟禁させてもらいますよ。私も西の人間が東の人間に手を出されたとあれば、さすがに庇い切れない。彼らを例の部屋に」

詠春

「さて、もう一仕事だ。皆さん、お願いします」

「お父様、見直したえ？」

「ハハ、これこれ」

「では長、私どもは祭壇に向かいます」

「ええ。恐らく東から何らかのアクションがあると思いますので注意してください」

「は。ありがたきお言葉」

「あっさりやの。小太郎さんめっちゃええ仕事してたやん」

「損な役回りやで。ってか隣の兄ちゃん随分関西弁上手いな？」

「せやな」

「では行くぞ、茶々丸。貴様らは残っておけ」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

「ええ、私も行きたいです」

「私も私も!!」

「わがまま言うな。一応ここからでも見えるはずだ」

「ほれ、双眼鏡。人数分あるけど見たくなけりゃ見なくてもいいぜ。かなり楽しいなモンが見えるからじつとしてる」

「はあ。いってらっしゃい、麟さん」

「……」

「ま、見れるならいつか」

「他の部屋は魔法で開かないようにしといたけど、あすにやんの部屋だけは普通に開くと思う。まあ作戦のうちだからそうなくてもほつといて」

「はいよ。気をつけてな」

「ちうたんはツンデレかわいい!!」

「ち、ちうたんって呼ぶんじゃねえ!!」



「もしもし、わしじやが……」

おお、何じゃ、ネギ君か！……なんじゃと！？決裂！？  
その上白波君も向こうに！？

何て事じゃ……

応援……うむ。タカミチに応援に行くように言うておく。  
くれぐれも白波君に直接関わるんじゃないぞ」

何て事じゃ……

ああ、いたいた。

損な役回りだよ。怨みますよ、学園長。

「と、どうやら追っ手のようだよ。随分早いね」

「止まってもらえるかな？」

「なんだ、タカミチじゃん。何しに来た？」

「協力要請だよ。僕も君とは戦いたくないんだが……」

「戒めの風矢」

「な!?!ちよ、ちよつと麟くん!?!話くらいは聞いてくれてもいいんじゃないかな?」

「後でな!」

「…………どうしよう」

まさかこんな事になるとは……

「あれ、タカミチ?」

「高畑先生!どうしたんですか!?!」

「ああ、麟くんに捕まっちゃってね、このざまよ」

「うーん、ダメだ、まったく抵抗が効かないや」

「何よ、この光ってるの!離れなさいよ!って取れた?」

「な、何だ、アスナ君!凄じじゃないか!」

「い、いえ、そんな…………」

まさか麟君の魔法まで無効化できるなんて…………さすがは…………っといけないいけない。

「で、どうしたんだい?」

「い、今はそれどころじゃ!」

「大丈夫だよ。いや、大丈夫じゃないけど、ああなったら隣くんはどうあっても止まらないからね。放っておくのが一番被害が少ないんだよ」

「でも……！」

「ひとまず落ち着いて。いいかい、前も言った通り、今回も隣くんに何かしら思う所があったはずなんだ。全部は解らないかもしれないが、それを知る事も大事じゃないかな」

「そ、そうですね。でも、私にも何がなんだか……」

「それなら、私たちからも説明しますえ」

「木乃香！？刹那さんも！」

「お願いできるかな？」

「ええ」

それから僕はネギ君、アスナ君とこのか君、刹那君の話をそれぞれ聞いた。

どちらが悪いかと聞かれれば、何とも答えられないけど……

「ネギ君……それはまずいぞ……」

「ええ。最早このまま西と東の和解というのはほぼ絶望的でしょう」

「せやなー」

「こ、木乃香！？あんたまさか……」

「いややわあ、アスナ。そんな、裏切ったの？なんて目で見んとい  
てや。ウチは元々、関西こっちの娘やで」

おお、このか君、黒いな！

「ええ。元々、和解などという手段は存在し得なかったのです。ど  
ちらが上でどちらが下か、などという関係はここで断ち切ります。  
ちなみに、麟先生からの伝言ですが、『東を見る』と」

「え？……な、何よアレ……」

「アレは……！！」

そちらには、とてつもない大鬼がいた。

高天の原に？留りまして云々とちーちゃんが祝詞のまつことってる。 (祝詞る…

動詞)

「んひいっいいいいい……！！」

「ちよ、えらい声上げんといてや……びっくりするわ……」

「ぬっほ ぐめえん」

んでなにやらクソでっかい岩からクソでっかい『エヴァンゲリオン  
新劇場版：ドM』みたいな感じの阿修羅マンが出てくる。

「さて、両面なんとかの神もいい具合に召還出来たっばいし、しばらく遊ばせとくか。あ、学園長室に遠見を繋げよう」

『イエー　じじい見てるー』

『な！？何を考えとるんじゃ、お主は！？』

『さて、なんでしょーか？正解者には麟ちゃん特製、味噌ラーメ  
ンの麵をくくりつけたストラップをあげちゃっ』

ブティ　と遠見を切る。

さて……ん？念話？

『どっしたんだよせった』

『あちらの応援です。龍宮、古菲、楓の三人ですが、抗戦しますか  
』？

『いや、行くわ。』

「ちょっと生徒を寝かし付けに」

「ん？気いつけてな」

「おつよ。』転移』」

「麟先生！」

「おお、行け。せつたん、このたん」

行つたな。どこにだ？

「麟先生？まさかあなたが？」

「何でこんなところに居るアルか？」

「麟先生、ここはどうやら危険らしいので帰っておいたほうがいいでござるよ？」

「ああ、大丈夫よ。ダイジョブダイジョブ」

「おい、二人とも、気をつけろ！麟先生はかなり強い」

「そうはとも見えないアルよ。武術をしている者の歩き方じゃないアル」

「あら、そつ？？」

「魔法使いでござるか？」

「まあ魔法も使えるけど、そんなに使わなくても充分つおい。ほら、

先制やるから来いよ。先生だけに」

「行くアルよ!.....へ?」

ああ、空飛んでいます。

いくら装甲強くても体重軽いもん。

「油断するな、古、楓!」

「そうそう。油断していいのは絶対的強者のみよ」

「何!??」

「全然効いてないアルか!??でも確かに手応えは!」

「無駄無駄無意味よ。ほれ、もう終わり?いくらでもい・い・の・  
よ?」

「クッ」

「ちょwww胸の谷間からマシンガンwwwあばばばばばばば  
ばばwwwwww」

「ちょ、龍宮!..やりすぎアル!..」

「そんな訳あるか!..」

RPG - 7 出すなwww

「あべしwwwwww」

「やったアルか!？」

さっきやりすぎって行ってたあなたはどこいったの? クーフォイ。

「煙で見えないでござる!」

「それはやってないフラグだ」

「ば、化け物……」

服ボロボロやん。

「キヤ エツツイ?」

「……」

「……」

「……」

指輪を服に変える。

「ま、そーいう訳よ。ここで諦めな。でもまだ俺と戦いつつて言っながら二歩前に歩け。そして、引くというなら一歩後ろへ下がれ」

「言われるまでもないアル!」

「やってやるっじゃないか」



「ニンニン」

二歩前に進んだ三人を元居た場所から一歩分下がらせる。

「ふ、そうか。ならば俺はもう行こう」

「何!?!」

「あ…ありのまま 今 起こった事を話すアル!

『私は麟先生の前まで進んでいたと思ったらしいのまにか戻っていた』

催眠術だとか超スピードだとか そんなチャチなもんじゃあ 断じてないアル

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったアルよ……」

「これは奇怪な!」

「色々面倒になってきた。『強制転移』」

宿に帰した。

「クツ!してやられたか!?!」

「結局全くダメージは与えられなかったアル」

「とんでもない人でござるな……」

「お前らもな。こんな時間にそんな格好で何処へ行くんだ？」

「に、新田アル!？」

「全員ロビーで正座!!!」

麟先生……怨むよ……

「フウハハハ!!祭りじゃああああああ!!!!!!」

「やあ、おかえり。どうだった？」

「帰ってもらった」

「おかえり、お兄ちゃん!」

「おかえりなさいませ、麟様」

「お帰りな、麟くん」

「おかえりなさい、麟先生」

「ただいま んで今は何やってんの？」

「ひとまず起こしてみたんやけど、まだ眠いらしくて……」

「どちらの顔が仰向けに寝るかで争ってるらしいよ」

「なんてクソくだらない戦いなんだ……」。

東からのアクションは？」

「今のところ何もありません。腰抜かしてるんちゃいますー？」

「はあん。んじゃ一旦屋敷に戻るか。こいつは置いていて」

「そうでんな。どうせ東の応援くらいやったらコイツを倒せる訳もあらへんし」

「一応結界張つとくかわこれで半径200m以上に被害も出ない安心設計。」

なんとかの神は出れないけど他の奴なら出れるし入れる」

「ほな帰ろ。俺もう眠いねん」

「ふふ、小太郎はまだ10歳やもんな」

「子ども扱いすんなやあ」

「ふふはっはは。」

さて、どう出るかね？」

062 世界最速、鬼神召還。(後書き)

ネギ虐め回続編。

次こそ無双回にしたいんだ!!

キャラが多くて誰が居てるか完全に忘れる。そんな62話です。

黒詠春……いいな!

あの裏表無さそうかつ人畜無害そんな笑顔であんなド下種い事いう  
中年も大好きです。

絵を描くにしろ文を書くにしろ、おっさんは楽しい。

そう思っています。

関係のない話なのですが、先日、9/4日に私の誕生日だったので  
すが、21にして抜け毛が気になります。

年齢なんて……いらなかった!!

063 世界最速、納涼！お前も恐怖のスンドロに叩き落としてくれるわ！（前

無双してません。前はウソつきました。

063 世界最速、納涼！お前も恐怖のズンドコに叩き落としてくれるわ！

もど麟。

「たっだいま」

「おいおい、何だよありゃよ」

「紅マグロの誕生日にお呼ばれしたい」

「意味がわからん。意味がわからん」

「二回言うほど大事な事なのか……」

「双眼鏡渡されたけどんなモンなくても充分見えるじゃねえか」

「ごめんね、ちうたん……眼鏡かけてんに双眼鏡とかわたして、  
「ごめんねっ、ごめんね」

「い、いやいや、伊達だから大丈夫だよ！な？結構視力いいんだか  
ら！」

「知ってる」

「死ね！」

「ってか麟さん、アレホントに何なの？」

「農耕の神様」

「神さ……マジ？」

「うん。マジ。危なくないから安心して。アイツ顔とか二つあって悪そうに見えるけどホントはいい奴だから」

「そ、そうなの？」

「いや、知らんねんけどな。危なくないのは本当。んじゃ俺政治の話とかあるからちよつと詠春とこ行ってくる」

「いつてらっじゃい」

「ああ、おかえり、麟。関東から連絡が入りっぱなしですよ」

「どうしてんだ？」

「あなた方に弁明しなければならぬ事実は一切無い。と言ってあげます」

「ふうん。どう出るかね。勝手に討伐隊でも送ってくれればやりやすいんだけど」

「そこはお義父さんの手腕に期待ですね」

「なかなかウエットの効いたブラック¥ジョーク」

「ハハハ」

さて、関東から増援が来た場合の対応ですが……」

「そこは当初の予定通りでいいんじゃないかな。

僕としては、ネギ・スプリングフィールドはもうどうでもいいから大きくは動かないし」

「そつやな。

ほな本家（じやい）に抗議に来るようなら高圧的にあしらって、先に手を出すならフェイトはんの石化で。

両面宿難（あつち）に戦闘に行くなら放置。

いずれにしろ、後々関東への交渉材料になる」

「ウチはどうしますん？斬ったらあかん？」

「抗議に来た関東のモンを取り押さえる戦闘はしてもらっけど、殺すんはマズいな」

「はあい」

「俺はどないしたらええんや？」

「寝ろ」「寝とき」

「ん。おやすみ〜。ふあ〜」

「じゃあ最終作戦は午前3時。それまでメンコでもおはじきでもベ  
ーゴマでも好きな事やっとして。」



作戦に参加しない奴は寝てろ」

「はい。アスナ、大丈夫やるか？」

「流石に生徒だから危なくなれば助けるけどな」

「ありがとうな」

「んじゃ解散。何かあったら念話な」

「」「はい」「」

「待ってるだけってのも暇だし、せっかくの修学旅行だから起きてるメンバーは怖い話とかしようぜー！」

「わ、わわ私は怖い話とか苦手なんですう」

「ええーそうなの？しょんぼりん」

「と思いましたけど私元幽霊だから大丈夫です！」

「聞くだけならいいけど話す事なんかねえぞ？」

「かまわん。というかお兄ちゃん怖い話とかできたんだ」

「とっておきがある」

「それは楽しみやなあ。麟さんの怖い話いつのも興味深いわ」

「ふふ、じゃあ先手は俺がもらうんだぜ。」

あれはまだ梅雨も明け切らない7月頭の雨の日の事だ……」

とっておきのウイスピーーパーボイスだぜ。

「きゃあああああああああ！……！」

「おい、うるさいぞ、さよ……！」

「まだ何も言つてへんやないか……！」

「いっ、いっ、いっ、いっ、いっ、いっ、いっ……！」

「続けるぞ。」

当然その日も俺はバイクに乗る訳だ。

ポケットからチャリ……と鍵を出し、梅雨の間は長らく乗っていたな  
かったNS250Rに差し込んだ……」

「ひっ……ひっ……ひっ……」

「声のせいで無意味に怖いじゃねえか……」

「車庫からバイクを押して、家の前まで出る。」

何だかシャリシャリ言うなあと思いつながらもキックスターターを踏み込んでエンジンを掛けたその時!!」

「っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「マフラーから黒い煙が一気に上がる!

不審に思った俺は、アクセルを一度思いっきり回した。そしたら!

「!

ゴクリ……

「マフラーから出てきたんだよ……大量のゴキブリがなあ!!!!!!!!!!

「!」

「キヤアアアアアアアアア!!!!!きゃああああああああ!

!!!!!ひ、ひいいい、ひっ、ひっ!!!!!」

「っておい!!こわいつちゃ怖いけど怖さの向きが違つだろ!!」

「い、今の隣さんの話し方は評価するべきだと思うよ。いや、話し声かな」

「な、なあ、あんさんら、この子気絶してるみたいやけど大丈夫なん?」

「寝かしといたつてな。怖いの手やねん。なあ、せつちゃん?」

「わ、わわ私はこのちゃんを守るためなら、ゆゆゆ、ゆ、ゆ幽霊くらゐ!!!!!」

「んふふ、じゃあ次は私が行くよ。報道部の真髓を見せてあげるんだから」

報道部と怪談ってどう関係あるんだろうか？

「ある女の子…… Aさんが夜道を歩いていたので。

後ろから足音がする。振り返ったら誰も居ない。

気のせいかな？とまた歩き出す……

でも足音はする…… もう一度振り返っても、誰も居ない。

気味悪く思った Aさんは駆け出した。

その足音はさっきと同じリズムで聞こえてくる。

でも離れない。すぐに真後ろで足音が歩くようなリズムで聞こえてくる。

Aさんは走りながらカーブミラーを見たの。

そしたら自分のすぐ後ろに白い何かがついてきてる。

一目散に自分の家に駆け込んだ。

そしたら足音も消えて、今のは何だったんだろう？と思いつつも  
一安心。

化粧を落とすために洗面台の前に立つと、鏡に映る自分の後ろに真っ白な服を着た女の人と目が合ったの

「あかん！せつちゃんに漏らしてもうた！！」

「ひっ！み、みないてくださいい……」

「ほら、立って」

「こ、このちゃん！やめて、ウチがやるから！」

「せつちゃんはお風呂入ってき。あ、怖いか。ほな掃除したらウチも行くから」

「おい、カメラ止める！黄金水ペロペロ（^ ^）」

「もう、お兄ちゃん！意地汚いよ！！」

「隣様つたら……」

「いや、最早それどころやないように見えるねんけど……」

「気を取り直して、もう一回俺か。ちびるなよ？」

「もうちびりません！！」

「この前、授業中に雑談で「変な人にいたずらされたりしないよう気をつけるよ」

という話をした。

「いたずらつてえっちなことでしょ？」と聞かれたのでそうだと答えた。

「えっちつておっぱいもんだりするんですよ」

「双子のぺちやぱいなんて揉むところないじゃん。つまんないじゃん」

と言つてきたまき絵に対して、

双子たちが「つまらないなんて失礼！」と怒り出して教室が騒然となった。

そこですかさず「いや、先生はつまらなくないと思うよ」と答えた。

次の日学園長室に呼ばれたその時

「そこまでだ」

聞いたことのある声が聞こえた  
寺生まれで霊感の強いＴさんだ

じいじによって今にも首にされそうな俺の前に来ると、

自前のチヨークを振り回し「破あ！！」と叫ぶ

するとチヨークの先が眩く光り、

振り回したチヨークが剣のように次々とじいじを引き裂いてゆく！  
ある程度じいじを振り払うと、Ｔさんの呪文によって周りには光が走り、

アツと言つ間にじいじは消滅した。

「Ｔさんもセクハラですか？」

そう尋ねるとＴさんは俺を指差し

「まあな、随分と危ない橋を渡っちまったがな・・・」

帰り道で聞いた話によると

あそこはセクハラ妖怪の部屋でぬらりひょんがセクハラを呼ぶ恐怖の地雷らしい。

「すっかり日も傾いちゃったな、どれ、通学路で女の子でセクハラしに行くか」

そう言つて窓から飛び乗り爽やかに墜落してみせるTさんを見て

寺生まれはスゴイ、俺はいろんな意味で思った。」

「先生！茶々丸さんが息してません！！」

「ｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「始めからしてねえよ」

「Tさんって誰やねんな！！」

「寺生まれ」

「ウチ神社生まれで良かったわあ」

「このちゃん、そういう話ではないですよ……」

「ない“です”よ？」

「あ、あらへんよ……／＼／」

神社生まれはスゴイ、俺は改めてそう思った。

「関東魔法協会だ！開ける！！」

「開ける！！だって。お断りします（。。（）」

「バカにするな！！早く開ける！！どいうつもりなんだ！！」

「この声……：ガングロフィーニか！？ここは危険だ！おまえにもかぞくはいるんだろう　くにに　かえるんだな」

「麟先生！？何をやってるんだ！？」

「さあて、何やと思います？」

「関西弁！？まさか……！！」

『まさか』って何やねん。

「そうや。俺は関西の協力者や。つー訳でわざわざ来てもろて悪いねんけどまた明日にして」



「そういう訳にもいかない！アレは何なんだ！？」

「リヨウメンスクナノカミ」

「は？」

「リヤンメンナントカミ」

「な、な、何だって！？あの18年前にかのサウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドが当時はまだ長ではなかった青山詠春と協力しても倒すことはできずに封印したというあのリヨウメンスクナノカミか！？」

「説明御苦労。ウオッチングくらいならしてもいいから早く向こう行って」

「いや、ダメだ。入れさせてもらおう！」

ガングロフィーニは扉を越えて中に入った。

「あー、しまったあー。ぬけられたー。どうすればいいんだー。わからない、ぼくにはわからないー（迫真）」

「止まってもらえませんかー？」

「ナイスアシストつきー」。

「何だ君は！？」

「あんさんこそ何ですのん？ここは『関西呪術協会の総本山』です

え〜」

「そんな事を言っている場合じゃないだろう！君にはアレが見えないのか!？」

「リヨウメンスクナノカミですな〜」

「クソ！君でも話にならん！君達の長は居ないのか!？」

「おっと、止まってください〜。こつから先には許可の無いお人を通す訳にはいかんのです〜。」

どうしても進む言っんやったら、少し手荒な真似もさせてもらいますえ〜」

「クッ！ならば仕方ない!！」

うん。当然のようにつつきーの勝ちだよ。

ガンダロさんは伸びてる。

「さて、ほなとどめを……」

「待て待て！月詠はん！！殺すな言ってるやろ!！」

「そうですね。別にこのくらいの相手、手に掛けるのもアホらしいわ〜」

「隣さん、お願いできますか?。」

「『治癒』んじゃとりあえず地下牢に放り込んどくわ」

くく地下牢くく

地下牢と言えども、あくまで捕虜の接待用なので、ソファアールやカウチや座椅子、ロッキングチェアやリクライニングビジネスチェアにベンチ、パイプ椅子、アームチェア、スツールやキャンピングチェア、マッサージチェアに安楽椅子、果ては洋式便所やおまるまである豪華な部屋だ。

ちなみに便所もあるにはあるが、こちらは和式。

「はっ……！ここは？」

「おはようございます、ランボルギーニ先生」

「ガンドルフィーニだ！何故こんな事をするんだ！！」

「うん」

「うんじゃない……！」

「うんこ」

「ふざけないでくれ……！」

息が荒いよ。

「お飲み」

「ああ、ありがとう……」

とりあえずコップにマックスコーヒーを入れたやつを渡して落ち着いてもらう。

「なぜこんな事を？」

「貴様の“正義”を問おう」

「うざい！」

落ち着いた様子の黒男ブラックジャックが悪い顔色で聞いてきたので、今回の千草の動機とそこに至るまでの心情やら、この後の対処方法も話した。

「私はなんということを……」

暑苦しい。

「田んぼルギーニ先生……」

「ランボルギーニだ。違う、ガンドルフィーニだ。わかった。立場的に私も協力するとは言えないが、捕虜として適切な扱いを受けたとだけ言っておこう。現場には、上手くいっていれば何人かの魔法先生がいるはずだ。

あと何だったんだい、さっきのコーヒーは？えげつなく喉が渴くん  
だが」

「コーヒー（裏声）ですよ。どうぞ、お茶です」



お前らのために動いてるとは口が裂けても言えぬではないか。

063 世界最速、納涼！お前も恐怖のズンドコに叩き落としてくれるわ！（後

秘境奈良県一のソロ充、100mが25秒、紅の豚野郎ですこんにちは。

僕の恐怖体験ですが、中学生の時に僕が勧めたネギま！経由でオタクになった友人に、普通に美人の彼女が出来てました。そして何より恐怖したことが、それに対して全然羨ましくも妬ましくもなかった事ですね。

リア充を妬む事も無いほどにバイクに没頭通り越して埋没する自分に対し、「これがソロ充か……」と呟きました。

さて、今回は無双回だ！！と喜び勇んで書き始めたはいいものの、やっぱりそこは天に向かって吐いた唾を華麗なバックステップウでかわす僕です。

886

はい、言い訳はしません。

踏んでください。

さあ！

早く！！

もっと強く！！

064 世界最速、パワーインフレ。(前書き)

今回の矢はちよつとばかり多いぜ？

「黙っている神楽坂明日菜。貴様も下がっている、タカミチ」

を下がっているに修正しました。

何で既に下がってんねんタカミチエ……

もみじさん、いつもありがとございます。







僕は魔法先生じゃなくて魔法を使えるだけの普通の先生なのに！！  
退路を確保しようとして後ろを見たら、一台の巨大なバイクが迫ってきた。

颯爽と突っ込んでバイクを指輪に戻す。

「ホラホラ、どいて！！ここ関西だよ！！東の奴らは何しに来てるの？」

「り、麟くん！！！」

「おお、何だタカミチ？トレードマークのマルボロは無しか？俺のピースやるからさっさと端っこ寄って見てろ」

『ちーちゃん、一発空に向かって』

『はい！』

「何しにきたのよ！！！」

「うつせえ！下がって見てな！！！」

スクナ（長いから縮めた）が口を開いてビームを出す。

「な！？あちらは関東の方角！？」

「マズイ！至急連絡を！！」

「いや、要らない」

そのスクナビームは俺の張った超イケイケな結界に阻まれ霧散する。

「な！？なんて強度の結界だ！！」

「結界はワシが育てた。」

さあて諸君！！ショータイムだ！！トイレは済ませたか！？チビつても知らんぞ！！ケガさせてやるつもりはねえが死にたきゃ奴の線に入っとけよ？」

「ちょっとあんた、何するつも……」

「黙っている神楽坂明日菜。貴様も下がっている、タカミチ」

「ああ、そうさせてもらっつよ」

「タ、タカミチ！？」

「ネギ君、君も下がって。きっと凄いものが見れるぞ」

「じゃあ始めるぞ！エヴァ！下がってるクソどもに結界！」

「うん、お兄ちゃん！」

エヴァが後ろにいる関係者数名、瀬流ピコ、タカミチ、神多羅木先生、ネギ、あすにゃん、カモ、そしてエヴァ自身を結界の中に入れる。

ちなみに刀子さんはハワイに居るので来れない。

「プラクテ ビギナル……」

「始動キー？でも何で初心者用の？」

「お兄ちゃんは極度の面倒臭がりだから自分の始動キーを考えていないだけだ」

「そんな事ってあるんですか？」

「あるんです。」

「『火の精霊 1000003人。集い来たりて……』」

「ちよー！！」

「そ、そんなバカな話が！？」

「え？何？何なの？？」

「『魔法の射手』」

「アスナさん……僕らが喰らったアレが……30011本の光の矢です。それでも異常な数なのに……アレは」

「『連弾』」

「百万三本です」

「……は？」

「『火の1000003矢』」

1000003柱。

こんなバカな話聞いた事が無い……

いや、詠唱自体は誰でも出来るんだろうけど、普通はそれが形になることはまず無い。

世界中の魔法使いの魔力を集めたとしても、圧倒的に魔力が足りない。

そんなバカな話、笑い話にすらならない。

それでも僕の前には、圧倒的と思うのさえおこがましい程の魔力の奔流と、視界一面を埋め尽くすほどの、最早“矢”とはとても呼べないような炎の塊が浮いている。

「マズイ！！みんな、エヴァの結界に重ねがけを！！」

「え！？は、はい！……」

かなり後ろに居るし、当たらないのはわかっているのに、それでも防がないと絶対に死ぬと思わせるほどの力が

『火の10000003矢』

放たれた。

視界一面を埋め尽くすその波は、最早音とも呼べないような衝撃と、結界越しにも伝わる焼けるような熱をこちらにも放ってきた。

あの大鬼の攻撃にビクともしなかった結界が、薄紙のように破ける。

その攻撃は、水を、地を巻き上げながら3分間続いた。

水煙が、土埃が晴れた先に見えたのは、腰から先の無い大鬼、大きく貫かれた雲、そして半分ほど水の干上がった湖に、結界のすぐ手前まで削られた僕らの居る棧橋だった。

「こ……これが隣くんの本気……」

「は？何を言っているんだ、タカミチ？お兄ちゃんが本気だったなら今頃日本が無事なわけあるか」

「は、はは、ははは……」

今でも湖は沸騰を続けている。

流石に僕も、笑っしかなかった。

タカミチはすごいものって言ってたけど、凄いなんでもんじゃなかった。

あんな人に喧嘩を売ってたなんて……

ちなみにあれでも本気じゃないらしい。

もう怖いとか怖くないとかそんな次元の話じゃない。

地球を殴って壊すとかそんな話だ。

立ち向かうような相手なんかじゃない……。

凄すぎるよ、麟先生……。



064 世界最速、パワーインフレ。(後書き)

HONDA ゴールドウイング  
1,832cc

水冷4ストロークOHV水平対向6気筒エンジン  
80KW「109PS」/5,500rpm  
前後ディスクブレーキの憎い奴です。  
なんとその重量400kg越え。

重い!!

少し欲しい!!!

ちなみに走る玉座という名前を定着させたいです。  
杉ちゃん様にアイティアをいただきました。  
ありがとうございます。

この日、空に上っていく流れ星が観測されて、ムーの来月号を賑わ  
せました。

原作宿難乃神は突っ立ってただけでしたね。  
こちらの方はビームを出します。

短めなのは仕様です。

すいません、キリの良さそうな所だったんです。 この後の展開も  
考えてない

実は前話を投稿したら5分後くらいにパソコンの電源のコンデンサが  
破裂して、コンデンサ取り寄せてるうちに二日ほど経ってました。  
その間、携帯で人の小説を読む日々です。  
パソコンじゃないと投稿できない!

では、今回もありがとうございます。

NSR250R買おうかなあ……

065 世界最速、おはよう。(前書き)

挨拶はDAIJIですね。  
僕はしません。

065 世界最速、おはよう。

服が千切れ飛んだ。(腕が千切れ飛んだ。に見えた。)

指輪は無事だった。すごい。

大昔1000ドラクマで買った魔力隠蔽用のネックレスも無事だった。すごい。

ちなみにすーちゃん(スクナだと愛想が無いから呼んでみた)はなんか光る風になって消えていった。アレを追い越したら君にきつと会えるね。

流石に全裸で颯爽と出て行くのは興奮するから指輪をワイシャツに変える。

裸ワイシャツだ。

えろの化身、麟です。

「ぬははwww見たか、東の阿呆どもめ!!!」

「えろっ！お兄ちゃんえろっ！」

「という訳で、茶番は終了!!!東との交渉は決裂だ。帰りに俺が西から東への降伏勧告書類を持って帰るからお前らもさっさと麻帆良に帰れよ」

「ちょ、ちょっと待ってください!どうしてそんな……」

「わかってないのか？ここは西。で、お前は西の人間に手を出しちやっただけよ」

「それはアンタたちが挑発してきたからでしょうが！！それに子供のやった事でしょ！？」

「『強制転移』」

「ちょー！！まちなさ……」

ネギ、あすにゃん退場。

「麟くん、ネギ君とアスナ君をどうしたんだ？」

「詠春の屋敷の牢屋（ガンドルフィーニと相部屋？）に返した。お前もさっさと帰れよ。おい瀬流彦は帰る準備すんなよ。引率だろうが。先に嵐山に戻ってる。『強制転移』」。

とにかく今日の事は一般人に悟られないようにするからお前らも気をつける。ガングロ先生はいつしよに帰るわ」

瀬流ピコの顔がやや青白いのがかわいそかわいそなのですが、結局戻ってもらえないのですよ。

「そ、そうかい？東にあんまり無茶な要求をしないでほしいんだけど……」

「さてな？それは保障できないぜ？何たってこの俺が西に居るんだからな」

「胃が痛くなってきたよ。じゃあ僕は帰るけど学園長に伝えておく

事はあるかな？」

「頭部が人並みに整形されなくなかったら良く考えておけよ、と。あと金の準備もしとけて」

「ああ、わかった。これから帰ると思うと憂鬱だよ……」

「じゃあ送ってやるよ。『強制転移』」

「ちょ、心の準……」

タカミチ退場。

「じゃ、じゃあ僕もこの辺で……」

「『強制転移』」

瀬流彦退場。

「……」

「……『強制転移』」

ヒゲグラ退場。

「じゃあ俺らも帰るか」

「うん、そつだねー！」

「アレは……何じゃ!？」

憂い、関西の方向を見ておつたら光の柱が空へ昇っていき、その数十秒後、かつて感じたことも無いような魔力が到達した。

まさか白波君が？

まさかあちら側に付かれるとは……考えが甘かったのかのう……。

にしても、タカミチ達は無事じゃろうか……。

正直リヨウメンスクナノカミに4人は無理じゃろうと思っておるが。

「ああ、最悪だ……学園長!？」

「お、おお、タカミチ!こんな早く帰ってこれたという事は白波君の強制転移か。どうじゃった?」

「い、いえ、その……」頭部が人並みに整形されなくなかつたら良く考えておけよ。あと金の準備もしとけこの妖怪ぬらりひよんが!逆行まぶしいんだよハゲ!!その髪何だよ!何でそこに生えて他全部ハゲなんだよ!意味わかんねえ!!」と麟くんが……」

「ひどい!!あちらの状況はどうなっておるんじゃ?」

「それが……、ネギ君が西の者に攻撃してしまったようで、こちら

の立場はかなり弱いですね。

更に詳しい話を聞けば聞くほどこちらが悪いとしか思えませんよ。

一連の流れで言えば、徴兵された者の遺族が不満を持って謀反を起  
こそうとしたところを麟くんが阻止、

尋問の結果、東に非がある<sup>「ひたひた」</sup>と判断した麟君が一部の関係者にその事  
を話し、事実確認、

その話をあちらの長にした所、詠春さんも東への対抗を決意、とい  
った感じですね」

「むう………」

「………」

神多羅木君も飛ばされてきたようじゃ。

「ちなみに、その一部関係者にはこのか君も含まれています」

「な、なんと!?!」

「こ、この世の終わりじゃ………」

「ってな事になってる筈なんだよ」

「では作戦は粗方成功ですね」



詠春が腕を組んでタバコの煙を吐く。  
やだ、ジェントルメン……。

「後は向こうの対応を見るだけやな……お父さん、お母さん……」

「天国のご両親も、今のちーちゃんの姿を見たら喜んでくれるさ……な？」

「ひぐ、う……うわああああん！……」

ちーちゃんの頭に手を乗せてそれっぽい事言ったら何かいけた。  
でも俺ロリコンなんだよな。  
年上もいけるけど。

そしてよく考えたら俺の方がかなり年上だった。

「僕はここに居てもいいんだ！……」

「急にどうしたんだい、麟？」

「では、お願いしますよ」

そう言って茶封筒を渡すA春。

「まかせな。約束を守ると決めたらズエッターに守ります」

「お願いしますね（ずえってー？）」

「つーかもう夜明けじゃん。日本の夜明けじゃん。みんな起きたら俺も行くわ」

「おや、そうですか」

「近いうちにまた来る。今は先生だから引率する」

「では私もお嬢さん方に準備をするように伝えておきます」

「T A N O M U（ビガッビガッ）」

「昨日のアレって結局何なのよ！エグいなんてもんじゃないわよ！」  
「！」

「ぼ、僕もまさか魔法の射手であんな大惨事になるなんて思いもしませんでしたよ」

「規格外にもほどがあるぜ……何だよ百万本って……」

「……ハア……」

兄貴たち、そうとうへこんでるな。  
でも俺たちも全く出番がなくて結構へこんでるんだが、言わねえのが華か。

なんて考えてたら悩みの元凶、麟の旦那がやってきた。

「起きろー！起きてんな。おはようございます。30分後出発だから準備しろよこのクソヤロー！」

「え！？あ、はい。おはようございます」

いい挨拶だな、兄貴。

「おはようツス。いやあ、昨日は凄かったツスねえ」

「そうであろう。もっと褒めたってい・い・の・よ」

「ってアンタ！よく私たちの前に顔出せたわね！！」

「おはようは？」

「挨拶してる場合じゃないでしょうが！！」

姉さん！！オチ担当に命を掛けるのはそろそろやめてくれ！！！！

「う……挨拶しないとダメって……いつてるのに……ぐすっ……  
うう、うああああああああああん！！！！！！」

な、何て豪快な泣きっぷりだよ、旦那……。  
姉さんがえげつなくバツの悪そうな顔してるじゃねえか。

兄貴は完全に固まってるじよ……。

「えー!?!?!あ、あのその……ごめん、おはよう」

「ケツ、はじめっからそう言っときゃ良かったんだよ。じゃあ準備したら一旦旅館に戻るからな!」

どう見てもマジ泣きにしか見えなかったのに

「ちょ、待ちなさいよ!」

「」

「せめて何か言えー!」

「午後からナギの隠れ家兼俺の書庫に行くから。あと昨日の事はじじいが何とかするから深く気にしなくても大丈夫。じゃな」

あ、行っちゃった。

「オーーーーーッス よく眠れたか?」

「あ、麟先生、おはようです」

「おはよう。ゆえはいい子だなあ」

あいさつするまえにされたから頭をなでる。

「な、ななな……」

「はわー……」

「こ、これは……ラブ臭!？」

「うるせー!カリフラワーぶっけんぞ。お前らもおはよう」

「おはようございますー」

「おはようー」

「あ、30分後に旅館戻るから準備しとけよ」

「は、はいです」

「おーっす、おるかー?」

「ちょ、着替え中だよー!」

「おはようー!」

「強行するなー!」

「おはようございます、隣様」

「おはよ、麟さん」

「いいから出てけ……！」

「……」

「エヴァとさよは寝てんのか。まあいいや。茶々丸、二人の荷物纏めとして」

「畏まりました」

「30分後に出発な」

「あ、せつたん、このたん、おはよう」

「おはよー」

「おはようございます……！」

「なにやってるん……？」

「いえ……麟先生も見ていってください」

そう言つと征服の背中あたりをまくりだした。

「せつたん制服脱ぐん……？」

「静かに見ててください!」

「ぶわさあ!」!!!

「わあきれい。とびつきりでつかい奴だよ!」

なんか横幅2mくらいの白い羽がもりつと出てきた。

「その……実は私、鳥族で……今まで黙ってたんですけど……」

「ええなー、天使みたいやん」

「うちにウイングなんたらゼロカスタムってプラモがあつて、大昔に買ったのにまだ作ってなかったんだよ。帰ったら作る」

「そ、その……、一族の掟でこの姿を見られたら立ち去らねばならないのですが……」

「ですが?」

「所詮私を捨てる程度の一族です。従つてやる義理なんてありませんので、このちゃんさえ良ければこれからも護衛をさせてください」

「嫌や」

「こ、このちゃん……」

「護衛しかせんせつちゃんなんか必要ない。ちゃんと友達してくれなあかんえ」







065 世界最速、おはよう。(後書き)

最新話上げるまでタバコを吸わない楔を自分に打ち込んだ豚野郎です。

もうすぐ休学期間も終わり本格的に忙しくなるといふのにその前から既にそこそこの忙しさです。勉強してる暇がねえ！

そして、そうなってしまえばさらに投稿速度が落ちるのは確実！！

自分への甘さが露呈しまくってます。

さて、今回は何をしたかった話なんでしょうか。  
挨拶ですね。

では、ありがとうございました。

066 世界最速、速攻魔法発動!! (前書き)

バーサーカーソウル!!

066 世界最速、速攻魔法発動！！

午前中は勝てないオセロに身を費やしたかわいそうな麟だよ。

「やあ、皆さん。休めましたか？」

「どうもー、長さん！」

ぞろぞろとついてきやがって。

ネギ、あすにゃん、ゆえ、俺、のどっち、ハルナ、俺、このちゃん  
&せっちゃん夫婦、俺、かずみん、エヴァ、茶々丸、俺、俺という  
11人の大所帯だ。

「タバコあかんー」などこのちゃんが詠春から取り上げたタバコ  
を俺がさらに取り上げて吸ってみた。

「マズっ！何コレ！？パラメント？ブルジョワが！ゴールデンバ  
ットでも吸ってる！」

「いやいや、これはこれでいい物ですよ」

信じられるか？まだだいたい紙タバコ270円なんだけ？

「長さん、昨日の事は……」

「ああ、気にしないでください。様式美という奴ですよ。お義父さ  
んが何とかしてくれますよ。っと、ここです。」

10年の間に草木が茂ってしまいましたでしたが中はキレイなですよ。  
どうぞ、ネギ君」

3階建て吹き抜け式住居(?)の全然隠れてないナギの隠れ家、もとい俺の本棚京都分署だ。

「この一角がバイクの本ばっかりです……」

「ここ3列は俺の本棚だからな」

「なんと!?!」

「お嬢様方、故人のものもありますからあまり手荒には扱わないでくださいね!」

「ちょwwwwwwエヴァwwwwww」

「どうしたの、お兄ちゃ……ブツwww」

「え?なにになに?……英語?」

「俺の昔のノートwww」

ジェットエンジンと前後ホイールにリニアモーターを搭載した不思議バイクの図面、『ぼくの考えた世界最速のバイク』があった。

「お兄ちゃんwwwジェットエンジンにリニアモーターってwww」

「いや、絶対いけるってwww帰ったら超 鈴に見てもらおうしwww時速1000km/h越えだしwww」

「麟様www」

「つてか麟先生、英語できるんだねー」

「あれ？俺授業とかしてるよな？普通に8ヶ国語くらいは話せるけど」

レベルアップしました。

「す、すごいです…！」

「せやろ？」

「あの……長さん、父さんのこと聞いていいですか？」

「ふむ、そうですね。」

このか、刹那君、明日菜君も、あなた達にも色々話しておいた方がいいでしょう」

これは……確実につまらない話になる気配……！

「じゃあ俺らはソファーでも破って待っとくわ」

「勘弁してください、麟」

「じゃあ俺はかつての自分の黒歴史でも漁っとくかな」

「私も行くよ、お兄ちゃん！」

「……この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友たち……黒い服が私です」

「戦友？」

「ええ。20年前の写真です」

「わひゃー、これ父様？おでこ狭ーい？」

「グハア！……！」

「……父さん」

「へー、どれどれ？」

「この人やて、ええ男やー」

「へえー、なんだ、若いわね。……?」

「どないしたん?」

「え!?!ううん、何も!」

「?……?」

「あ、お兄ちゃん!」

「なんや?」

「これこれ!」

「うわっ、懐かしー」

俺がジムカーナ出た時に取材されたバイクライフが出てきたらしい。

「何なに、隣さん、どーしたの?」

「ああ、俺が出た雑誌」

「へー……あれ?これお父さん?」

「うん。この時からの付き合い」



「正直麟さん全然老けないから実感なかったけど、かなり昔から乗ってたんだねー。うわ、カラー印刷に迷いがある」

麟様  
「こちらにはWGP2001で優勝した時の記事がありましたよ、麟様」

「さすがは俺の本棚だな」

「へー、見せて見せて……あれ？この写真麟さんこけてない？」

「いや、そんならい倒せんだろ」

「いやいや、完全に膝閉じてるのに地面に当たってるじゃん！」

「正直この時バンクセンサー完全に飛んでかなり焦ったwww」

かずみんながぺらぺらとページを捲っていくが、唐突に顔を赤くした。

「どづしたん？」

「え！？いやいや、何でも！大丈夫！！」

「何が？」

「どれどれ？ああ、この時の」

「何さ？」

エヴァが見せたページには表彰台の上で俺がエヴァと濃厚なンディ

「プキッシン してる写真が載ってた。」

「全世界に発信してたよな」

「というか和美、お前思っていたよりかなり初心だな」

「ほ、ほつといてよぉ……、そっだ！もうそろそろ小難しい話も終わってるでしょ！記念撮影行こー！」

「……逃げたな」

「皆さん！修学旅行楽しかったですかー」

「」「はい！」「」

……

……

……

「やれやれ、あれほど騒がしかったらーAが、静かなも……」



066 世界最速、速攻魔法発動！！（後書き）

キヨナラ編完！

とおもいきやまだお土産がのこってるんですけどね。  
いみわかんねえフラグ立てるなよな、俺。

しかし随分な難産っぷりでしたね。

ちなみにネギはちゃんと詠春に例の地図をもらってます。  
やったネ！

では、今回もありがとうございました。

067 世界最速、あそいで温めてる弁当俺のなんすよww(前書き)

コンビニで弁当温めても大丈夫な問題があるよ。



ぬるーんと地面から登場

「!?!」

「何だよじい、そんな豆が鳩鉄砲喰らったような顔して」

豆ガ鳩鉄砲ヲ喰ラフノ図

；y|| 二三 鳩

ノクルツポー、 豆

コンコンとノックの音が響く。

「失礼します」

「あ、フィーニ先生」

「ガンダロフィーニだ。違う。ガンドルフィーニだ。君も呼ばれていたのか。そりゃそうだ」

「お主ら……何があったか詳しく話してくれんか」

「あ…ありのまま 京都で起こった事を話すぜ！

「おれは 少しくらいはネギに協力してやろうと思ったら いつのまにか東に敵対していた」

な… 何を言っているのか わからねーと思うが

おれは 何をしようとしたのか わかっていた

頭が後ろに伸びそうだった… お菓子取られたとかつまみ食いされたとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もっと恐ろしい親殺しの片鱗を 味わったぜ…」

「……ガンドルフィーニ君、頼めるかの？」

「私はこれまで大戦について……あまりに知らなさ過ぎたのです。当時子供だった私の知る大戦は、英雄が活躍するだけの話でした。当然私も英雄に憧れ、立派な魔法使いになろうと努力もしてきました。」

しかし、大戦というほどだったのですから、数人の英雄とその他の悪だけで回るはずがなかった。

私も何故今まで全く気付かなかったのか……。

天ヶ崎という名をご存知でしょうか？」

「……」

「知らないのですね」

「むむ」



「大戦当時、あなたが西に徴兵令を出し、そのまま帰って来なかった者です。」

その娘が起こした事件が今回の事の発端でした」

なんかシリアスって慣れないんだよなあ。

殴ってなんとかならない相手とは話したくない。

なんか一生懸命シリアス顔で話してるみたいだし俺はハナクソほじってていいよな。

うわｗｗｗｗでつけえハナクソｗｗｗｗ俺の体積の半分くらいあるｗｗｗｗ

んなわけあるかいｗｗｗｗ

「そつだね、麟君！」

「え？う、うん。その通りです」

「うむ……して、要求は？」

……マズイ……何の話だ！？

一言も聞き漏らさないようにしていたのに、どこに穴があった？

何故聞き漏らした？

は……はやく何とか言わなければ……！！

「白波君？」

「だらしねえという 戒めの心

歪みねえという 贅美の心

仕方ないという 許容の心  
それが大切だね」

「違うよ、麟君。西側の主張だよ」

「何だよ、初めからそう言っとけよ……ゲフンゲフン」

「取り返しがつかない所まで言ってたね」

「これが西からの手紙だ。危うく忘れる所だったぜ（リアル話）」

「ふむ、すまんの……うむ……」

「帰っていいですか？」

「ダメじゃ」

窓の外を指差してガンドルフィーニ先生に

「あのコンビニで温めてる弁当俺のなんすよww」

と自慢した。

「そ……そうなのかい」

といわれた。

「ふむ……」

「どんな内容だったんですか？」

「今後一切の西への不干渉、正式な場での謝罪、慰謝料12億円の要求……」

「で、何がそんな渋い面しなきゃならねえ原因よ？」

「うむ……、ワシも西には申し訳ないことをしたと思っておったし、不干渉も謝罪も賠償も吝かではないんじゃないが……上がのう」

「メガロメセンブリア元老院……ですか」

「うむ。この関東魔法協会はその参加じゃからのう。他に弱みを作る訳にはいかんのじゃよ」

「MMダブルマンの連中、そんな事までうるさいのか。ちょっと脅しとくかな」

「な！麟君、待ってくれ！いくら君が強いとはいえ、個人が国家に適うわけが無い！」

「そうじゃ。上にはワシから話を通す。だから落ち着いてくれんか」

「そこまで言うんやったら相手が要求を呑まなかった時に行くやんか」

「そうしてくれると助かる。じゃあ今日は悪かったの。もう戻っても大丈夫じゃぞ」

「わあい！」

コンビニでお弁当あったためにもらってる間後ろの人に『あそこで温

めてる弁当俺のなんすよww』って自慢した。

「……という訳だから、MMに話が通らなかった時は攻め込むわ」

『ちよ、麟！！いくらなんでも無茶ですよ！』

『そつや！国家に戦争売るなんて正気やないで！』

「あれ？フェイトは？」

『傭兵やから帰った……ってそつやなくて！』

『ウチはいますえ〜』

「ああ、だいじょうびだいじょうび。万一戦争になっても絶対勝てるから。俺の上位魔法ってマジ大陸一つくらい消し飛ばせるから」  
『それはそれで大問題のような気もしますが……』

「気合よ、気合。誰もが恐れてた『邪神』再来なるか！」

『ならないように祈りますよ……』

『ウチも今回ばかりは腰が引けてきたわ』

「『家族への侮辱は自分への侮辱より重い』。ウチの家訓だ。今作った」

『規格外ですね』

「ちーちゃんとおつきーもウチ来いよ」

『え？い、いや、急にそんな言われても……そのう』

『いーんですか？ほなウチもこの件が終わったら行きますわ』

『ちよ、月詠はん！あんたそんな軽々と』

『よろしくな』

「まってるぜ！ちーちゃんもな」

『う、ウチは何も言つとらへんやん！』

『説得しときますえ』

「頼んだぜ」

「お兄ちゃん！DVD見ようよ！」

「えー、もう4988回目じゃんそのDVD」

「ですが何度見ても感動しますよ」

「まるまるロボのお前が言うほどなんだから相当なんだろうな」

「実は私も見たこと無いんだよねえ」

「じゃあ見るぞ！いいよね、お兄ちゃん？」

「うむ。良かろう」

『第11セクションを難なくクリア！おっと、今13番 白波選手の車体に、9番のユーノ選手の車体が接触しましたね！。と、すぐに姿勢を立て直したが順位は下がってしまいました』

「あの野郎、叩き殺してやろうか……」

「エヴァ毎回言ってるな」

『今回プライベートで初参戦、しかしこれまでの戦績は正に無敗。車体の差はありますが体躯とテクニクで埋めていきます』

「ってか麟さんえげつなく速いね」

「ああ。プロだとは聞いてたけどここまで速いとは思わなかったな」

「そりゃもう最速だからな。俺から速さ取ったらかわいさしか残らねえよ」

「もう少し残るだろ」

『さて、最終ラップです。』

現在の順位は

1位 アプリリア マーテヒス・エンシユード選手

2位 プライベート 白波・A・R・麟選手

3位 ホンダ 道下正樹選手

となっております』

『日本人プライベーターが本戦出場の上ここまで健闘したことがかつてあったでしょうか。もしかしたら歴史が塗り変わる瞬間を見れるかもしれませんよ』

「この時のポテンシャルは世界最強だったからな」

「ねー」

『ここで白波選手抜かすか！？抜かしたー！！スリップストリームからの猛加速です！そして綺麗にコーナーをクリア！』

『これで1位が置き換わりました』

「このスリップストリームって何だ？」

「前の車体のすぐ後ろにつくとそこは風の抵抗が他より少ないからその分パワーを温存できるんだよ」

「へえ、大したもんだねー」

『おっとここで何か飛びましたね？』

『あれは……バンクセンサーですね。幸いなのはここが最後の右コーナーリングという事でしょうか』

『ここでも綺麗なコーナーリングです。コレだけドリフトされると何の大会かわからなくなってきましたね』

『しかしこのままゴールでしょう！チェッカーフラグが下ろされました！！日本人ドライバー初の快挙！！やりました！！』

「やああああああああああ！！！！！！！！！！」

「おちつけ、エヴァ」

「っしやああああああああ！！！！！！！！！！」

「落ち着け茶々丸」

「いやあ……………」

「なに震えてんだよ」

「そついうちうちゃんだって……………」

「はは、……………すげえな」



くくその頃のネギきゅんくく

「弟子入りします!」

「はあ?」

「何言つてんだ、兄貴? 沸いたか?」

067 世界最速、あそこで温めてる弁当俺のなんすよww(後書き)

エヴァのアーティファクトはごっついですよ。

さて、うかつにもバイトが決まって死にたい豚野郎です。

そろそろ本気でNSR250Rを買おうと思って決意しました。

バイトに至るまでの経緯は僕が別に書いている『紅に何とか』って小説に書いてあります(宣伝)

明日初バイトか……。

せめてもの救いはガソリンスタンドという事……

いや、救いじゃないね。

救いは無いんですか？

<無いね

ああん、ひどい！

道下正樹について

ごめんなさい

ネギについて

そんなフラグ回収してる場合じゃないんだよ。後にしろ。

では、今回もありがとうございました。

068 世界最速の花屋さん。(前書き)

エヴァのアーティファクトだし損ねた。  
次回は出したいけどまだわかんない。  
多分そのまた次に出ます。

## 068 世界最速の花屋さん。

「ヤバイ。白波ヤバイ。まじでヤバイよ、マジヤバイ。白波ヤバイ。」

まず強い。もう強いなんてもんじゃない。超強い。強いととっても

「紅き翼20隊ぶんくらい？」  
とか、もう、そういうレベルじゃない。

何しろ無限。スゲー！なんか単位とか無いの。何kgとか何rpmとかを超越してる。無限だし超強い。

しかも強化してるらしい。ヤバイよ、強化だよ。

だって普通はヤムチャとか強化しないじゃん。だって昔から近所の犬に吠えられたら死んでたじゃん。クリリンに勝ったら困るっしょ。

成長して、一年目のときは小学生に泣かされてたのに、三年目のときはフリーザに勝つとか泣くっしょ。

だからヤムチャとか強化しない。話のわかるヤツだ。

けど白波はヤバイ。そんなの気にしない。強化しまくり。最後まで入ったちうたんとか観測してもよくわかんないくらい強い。ヤバすぎ。

無限っていたけど、もしかしたら有限かもしんない。でも有限って事になると

「じゃあ、麟より強い奴って誰よ？」

って事になるし、それは誰もわからない。ヤバイ。誰にも分からないなんて凄すぎる。

あと超かわいい。約1京カワイン。あずにやんで言うつと272ペロペロ。ヤバイ。かわいすぎ。男ですら見とれる。怖い。

それに超何でもある。超ごちゃごちゃ。それに超速い。0.0001秒とか平気で出てくる。0.0001秒で。小学生でも言わね

えよ、最近。

なんつっても白波は回転数が凄い。MOTO GPとか平気だし。おまえらなんて無限とかたかだか敵に出てきただけで上手く扱えないから有限にしたり、fと置いてみたり、英雄使ったりするのに、白波は全然平気。無限を無限のまま扱ってる。凄い。ヤバイ。

とにかく貴様ら、白波のヤバさをもっと知るべきだと思います。

そんなヤバイ白波に喧嘩売ったMMとか超キチガイ。もっとがんばれ。超がんばれ。」

じじいが「MMは条件を飲まんかったんじゃ」とか言っちゃうもんだから、ついやっちゃうんだ。

ハンバーガー14個分くらいの隣だよ。

「どうしても行くというのかの?」

「正直もうひっこみつかない所まできてるんだよ」

「ふむ……仕方ないのかの……」

「ちなみにシラナミも全員連れて行くから、俺は学園長の忌引扱いにでもしとけ」

「なにそのいやがらせせつない」

そう言ってて学園長室を出た。

僕と学園長だけが学園長室に残る。  
死にたい。  
なるべく同じ空間に居たくない。

「悪い顔してますよ」

「ふおおお、そうかの、タカミチ？」

食べないじじいだ。

「出陣じゃあああああ！！！！」

「って待て待て！何だ？私も行くのか！？」

「そりゃそうだよ、ちうたん。今回は新婚旅行も含めての魔法世界大凱旋なんだから。」

それに伴い、まだ未契約の子は式場で契約するぜ」

無意味なガッツポーズを出しまくる。出しまくりながら

「時に麟さん、今の契約者は？」

「エヴァ、茶々丸の二人だ」

「あの時はガイノイドの私も死ぬかと思いました」

「な……何をしたんだよ……」

「フレンチキス」

「……」

「ちなみにフレンチキスは、互いの舌を相手の口腔内に……」

「知ってるわ!!」

「契約方法がキスなんだよ。どっちにしる式場でするんだから今のうちに腹くくるべき」

「いや、まあその……」

「こんな赤いちうちゃん中々見れないよー。記念に一枚」

「と、撮るなあー!」

「ご安心ください。私のHDD容量にはまだ多分の余量があります」

「何やってんだよう!」

「ぬははははwwwあれ?さよは?」

「もういい時間だから寝たよ」

「あ、マジ?じゃあ出陣は明日にするか」

「なんだそのノリ」

「その場の勢いって大事だと思うんね」

とつるるるるる

ガチャリコング！

『もしもし？』

「ヘイチーちゃん、明日魔法世界に力チコミじゃああああー！」

『ほ、ホンマにやんねんな』

「つたりめえだろ！つーわけで迎えに行くから準備終わったらすぐに言つて。すぐに」

『わかったわ。何を用意していったらええん？』

「んー……エヴァ、何いったっけ？」

「着替えと婚姻届だよ」

「着替えと婚姻届」

『ちょ、そんなもんすぐに用意できるわけあらへんやんー！』

「マジ？着替えないとかかわいそうなんだけど……」

『婚姻届のほうやー！』



「エヴァ、婚姻届無いってー」

「正直あつちの国のルールミューニでやるんだから別にそんなの無くても結婚できるんだけどね」

「そんなん無くても結婚できるんだ!」

『その、どうしても結婚するん?』

「え?.....いやなの?」

『い、嫌やないねんで。でも、心の準備とか、その.....』

『隣さん、千草はん、まだ告白されてないから迷ってんねんで。私も告白されてへんけど、迷わへんでん』

「んっふふwwちよっとまっとれよ」

ガシャリコ

「そうだ、京都市行こう」

「どうしたの?」

「女ひっかけにな」

「いつてらっしや〜い」

「いや、いいのか妹!?!」

「いいんだ。愛は奪うものではない」

「つつーわけよ。じゃねー。『転移』」

〃〃ショッピングモールのおはなやさん〃〃

「ごめんください……どなたか……いませんか……」

「目の前に私がおりますが、花をお探しでしょうか？」

「逆に鼻を捜したい気分ではあるんだが、その薔薇を20本づつ纏めてラッピングしてください。プレゼント用でち」

「かしこまりましたーお待たせいたしましたー」

「速い！！負けるかもしれない！でも負けない！！」

「ありがとうございます7600円ですございますです」

「安い！！ありがとうございます！ありがとうございます！！」

「女だろ？……頑張ってきたな」

「姉さん……」

誰だよこのババア……イケメンちゃん……

〓京都・ちーちゃんHOUSE〓

カンコーン

「はいはい、どなたですかー？」

狙われる身なのにこんなあっさり出てくるなんて凄すぎると思わんのかね。

「花束を、君に。結婚しようぜ」

「り、隣さん！？なんでこんなとこに？ってかこんな……その……」

「あ、ええなあ。私にはあらへんの？」

「ほれ。当然、あんだろつがYO」

「わあー？ありがとう。ほら、千草はんももう諦めていっしょに隣さんのお嫁さんになるや」

「お、お嫁……さん……」

「強いしかわいいしお金持ちやし愛してもらえるし、ええことばっ



068 世界最速の花屋さん。(後書き)

21にもなつてうんこで大笑いする残念な豚野郎です。

友人に猛烈にカラオケに誘われるのですが、カラオケに着て行く服がない。

さて、さいきん更新がめつきり減っていますですがそんななんどうでもいいや。

近況報告ですが、受かったバイトを一日で辞める羽目になりました。マジリア充

と、こんなクソみたいなあとがきを書いている間にもおさそいが来たので、いつそパンツ一丁で出てやります。本当に服がねえつつつてんだろ。

では今回もありがとございました。

愛してるぜ!!

069 世界最速、結婚式。(前書き)

後輩の揉め事に巻き込まれてました。

何で僕が東大阪まで行かなきゃならないんだ……。

「う、うーん……」

「あ、おはよう、ちーちゃん」

「おはよー」

目をこじこじするちーちゃん萌えの隣です。

「んー……めがねどこお？」

「ハアハアハア」

「とりあえずエヴァ、その荒い息をなんとかするんだ。そしてはい、メガネ」

「おーきに……ふあ〜……おやしゅみー」

「かわいいだろ？これ、28歳なんだぜ……」

「千草はん、起きてーなー」

ゆっさゆっさあ

「というかメガネかけたまま寝るなんてとんでもねえスイートスイートグラスベビー(?)だぜ」

「あんー、……ん」

「抱きつかれた。抱き枕麟です。関係ないけど俺布団よりベッド派なんだよな」

「すー、すー……」

「ぐーー！ぐーー！」

「お兄ちゃん、表現が古いね」

「FC世代だから」

「んう、何い？」

「おはよう、二度目だぜ、ちーちゃん」

「お母ちゃん……」

「……もう少し寝かしてあげようよ」

「仕方ないね」

ポタタタッ……

「茶々丸に鼻血出す機能付けた奴、怒らないから静かに手を上げなさい。ほら、みんな机に伏せて」



くくいちじかん」……

「よくこの寝起きの悪さでテロとか起こそうと思ったもんだぜ」

「んー……ふあ……」

「おはやつ（）3度目である事を悟られないようにする紳士な気遣いもモテる秘訣だ」

「え？……なんでえ？」

「何がさ」

「ウチ家で寝ててんでー」

「その記憶は捏造されてるから。さて、皆用意できてるからとりあえず放してえ……！」

「な……なんでウチのお布団で寝てるんよ!!」

「俺のベッドですしやすしー」

「ここどこやねんな！ってか何でウチはこんなところにおるん!？」

「そろそろ起きられましたか？朝食の準備が整っておりますので下に降りてきてください」

「うん。茶々丸、説明を丸投げた」

「丸投げられた、隣様」

「え？何？何で？」

「「「「いただきます」「」「」

みんなが合掌する。

「い、いただきます」

ちーちゃんもいただきますする。

「いいいいいいアアアああああああああいいいいいい  
いただきます」

俺もいただきます。

そしていろいろ食べて

「「「ちそうさまでした」「（エヴァ）

「「「ちそーさまでした」「（みんな）

「じつっあんです!」（俺がデブっぽい声で）

壁を叩いてひっくり返しホワイトボードを出す。

「さて、作戦会議だ」

ボードに大きく丸を描く。

「まず一日目、結婚式だ。王都シラナミで行う」

「ちょ、ちょっと待ってな!」

「意見があるときは服を脱げ!」

「結婚式ってホンマにやるんですか?」

「ホンマにやるんです」

「王都シラナミって……もしかして隣はんの……?」

「うん。俺の王国。一国一城の主なんだぜ」

「でもお兄ちゃんお城解体してサーキットにしたよね」

「後悔も反省もしてない」

「あの魔法世界最強の中立武装農国ですやんねー」

「そっなん、エヴァ?」



くく魔法世界・王都シラナミくく

シラナミの門に転移したらでっかい横断幕がかかったた。

『王妃様方 シラナミにようこそ!』

『王様は帰ってもいいよ。帰らなくてもいいよ。(居ても居なくても同じという確固たる意志のあらわれ)』

の2枚がある。  
とりあえず下の方を破った。

「お、王妃様って……」

「私も王妃だぞ。この国は誰とでも結婚が赦されているんだ。妹だろつと親だろつと」

「な、何か凄い国やねんなあ」

「この国はワシが育てた」

「おい、王様!大嘘こいてんじゃねえよ!こつちだ。早く乗れやクソボケ!

王妃様方もぜひこちらに。パレードの準備をさせていただいております」

ちなみに声をかけてきたのは農民Aさんだ。  
嘘です。国民の面とかいちいち覚えてるかつつの。  
ちなみに現在のメンバーは

俺、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ、さよ、かずみん、ちつたん、  
ちーちゃん、つつきー

大所帯だ。

「この扱いの差……俺は泣いていいんだ!」

「早く乗れつつつてんだろ!」

「つかパレードとかやるんだ」

「王様のためじゃねえよ。新王妃様の為だ」

「なあ、千草はん、ウチら王妃様やつて」

「……」

「千草はん？」

「うふふふー」

「あかん、旅立ってるわ」

「情けないわねえ。ねえ、ちつちゃん」

「えへへへー」

「……」

「おっよめさん？おっよめさん」

「なにそのうたふしぎ」

どぶん！どぶん！と空砲の音が響き、俺たちを乗せた不思議な車が国（小さい）を凱旋する。

「結婚オメデトー！！」

「お幸せにー！！」

「税金下げてくれー！！」

「ちょっと待て！一円も取ってへんやろつが！セコい評判下げすんなやー！！」

「今月はこれ以上出せないんです！来月必ず払いますから、今月だけは！」

「何の話だー！！！！」

「この紙ちぎったやつってどのタイミングで投げるのが正解なの？」

「ブーケこっちに投げて下さいねー！」

「キヤー！！王様カワイー！！！」

「おめでとーございますー！ー！」

色々よくわかんない事も言われてるけど基本的には祝福してるみたいで一安心。

一方車内は

「ど、どどどないしょ、緊張してったわ……」

「お、おおおちつきなよ千草さん。わ、わわ私なんて溢れるきき記者魂でここの落ち着きようだよ！？」

「なんかお前ら見てると逆に落ちいてきた」

「うふふ、皆さんこんなにお祝いしてくれるなんてうれしいです」

「さ、さよちゃん大者だね……」

「みんなかわええですなあ〜？」

なんかすこい。



みんなウェディングドレスすごく似合ってるよ！  
ちなみに式場は王城跡地のサーキット兼みんなの広場だ。  
催し物とかは基本的にここでやるらしい。

「えー邪神……じゃねえや、白波・A・R・麟は死のうが死ぬまい  
が彼女達を愛し続けると誓いますか？」

「当然であろうっ！」

「相坂さよ、あなたは、その健やかなるときも、病めるときも、喜  
びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これ  
を愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、  
真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

「朝倉和美、あなたは、その健やかなるときも、病めるときも、喜  
びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これ  
を愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、  
真心を尽くすことを誓いますか？」

「ちっ、誓います！」

と、このように教会式に誓いの言葉を述べつつ重婚するのはどうな  
んだろうか。

「……とを、誓いますか？」

「ちかいますえ〜?」

「天ヶ崎千草、あなたは、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか?」

「ち、ちきやいまひゅーましゅー!」

「よろしい。では誓いのキスを。そーれキース!キース!」

「キース!キース!」

なんぞこれ。

全員とキスを交わし、仮契約もする。

それぞれのカードだが

さよは背景いっぱい背の低い飛行機がある。あとオプションの<sup>魂</sup>。

かずみんは記者っぽい格好にカメラを持ってる。

茶々丸は今出した訳じゃないけど、ネコミミ?っぽい何かをつけたピチピチな服。えろい。特に何も持ってない。

ちうたんはノートパソコン?なんか小さい。服はウルトラファンシ

ー!。  
ちーちゃんは和服に薄手の本を持ってる。

つきーはよくわかんない剣。西洋剣っぽい。でゴスロリ。

そしてもう一回街を凱旋。

「末永くお幸せになー!」

「ステキー！」

「ちくわ大明神！」

「誰だ今のー！」

「税金を……」

「もうええっちゅーねんー！」

「MMに攻め込むんだろ？ここに結界張ってから行けよ」

「はい」

「この前雨漏りしたから直してください」

「自分で直せー！」

「「「「さよーならー！また遊びに来てねー！」」」」

「あれ？俺の国だよな？」

「街を追い出された」

「よろしくね、隣さん。いや、旦那様って呼ぶべきかな？」

「いや、今まで通りで良いだろ、和美」

「だよー。って、か、かずみって今!？」

「ん?どうしたよ、かずみん」

「い、いや!何でもないよ!は、はは」

「自分で振つといて振り返されるとことん弱いんだな」

「そんなの何されても弱いちうちゃんに言われたくないよ」

「な!お前誤解を招く物言いするんじゃない!」

「なるほど、千雨。貴様は全身が性感帯か」

「絶対先生から来ると思ってたセクハラが妹の方から来た!！」

「もういいからそんな。MM行くぞ。戦争じゃ!カチコミじゃ!

「!」

「さて、行くにしても何で行くんや?」

「転移か?」

「千草さんもちうちゃんも真っ赤だよ?」

「そつ言つ和美はんも真っ赤ですえ?」

「エヴァ、頼めるか？」

「うん、お兄ちゃん？」

「何するんですか？」

「まあ見てな、さよ」

「良いか、貴様等。そのカードの使い方を教えてやる。

まず主人との通信、転移が可能になる。カードを額に当てて「テレパティア」で念話が出るぞ。別にいらんだろつが」

「へえー」

「ウチは知つとるんやけどな」

「黙って聞け。

で、アデアットと唱えるとアーティファクトを出す事が可能だ。これは契約者の格にもよるが、お兄ちゃんと契約したんだから当然出来る。でもまだ出すなよ」

「何でですか？」

「見てる。おい、茶々丸」

「はい、アデアット」

茶々丸が唱えると、その背後に全長25mほどの、銃器がびっしりと搭載された平たい戦車とトラックを合わせたような物が現れる。

「な……何やコレ!？」

「と、このような事もあるから狭い場所ですしたり人が密集する所で出したりするのはそれほど良くないんだよ」

「いやいや、無いだろ。流石にそれは無いだろ。だって魔法って感じじゃねえじゃねえか。明らかに科学の結晶じゃん」

「ええ。これは恐らく超が作ったモノでしょう。その名も

( 2130シキ チャオパオジー フィクセド ボンバーデイス )  
二二三〇式超包子 巨大移動砲台 ( Fixed bombardi  
s ) 『空』<sup>ウツク</sup> 『空』<sup>マ</sup>

これでも私のアーティファクトです」

「じゃ、じゃあさ、別に普通の道具だって出るんだよね？」

「貴様のカードには何が描いてある？」

……これは……いいモノを拾ったな」

「だ、出して大丈夫？」

「いいぞ。

ほら、お前らも見せてみる」

「ってか何だよこの格好はよ!」

「知るか!

ふん……千雨、千草、月詠も出して良いぞ?」

「アデアット！」

……何コレ？」

「それはトートグラフィティと言って、そうだな……それをカメラのレンズにつけてぼつやがセクハラされてると思いながらシャッターを押してみる」

「？」

ま、いいか」

そう言つてシャッターを押すと、シャワー室にあすにゃんとまき絵とネギが一緒に入つてる写真が出てきた。

「な、なにこれ？」

「真実を写す者、トートグラフィティは、その名の通り真実を写すための道具だ。

どこで何が起こっているか、薄っすらでも予測してそれが僅かにかする程度でも当たつていればその場で起こっている事が写される。ちなみに何も考えずに写せば幽霊が写るらしいぞ？」

「へえー、これってビデオにも使えるのかなあ？」

「知るか。じゃあ千雨もやってみる」

「アデアット」

ノートパソコン？」

「流石に知らんな。何か説明書みたいな物が入ってないか？」

「無いな。とりあえず開けてみるか」

ちつたんがノートパソコンを開くと、画面に

『使う機械を背面のカメラから表示させてください。何も使わない場合は「ENTER」を押してください』  
と表示された。

ちなみに下画面は普通のキーボードだ。テンキー付きの。

「何だこれ？」

「さあ、わからんな。機械など、家で『ちつのホームページ』を見るのくらいにし……」

「ちょっとまってー!!」

「何やそれ？」

「いいから！いいから!!」

と勢い良く手を振り回し、指がEnterに当たった。  
ピロン というファンシー&キャッチーな音とともに  
『使うOSを選択してください』  
と書かれ、その下に大量のOSの名前が書かれている。

「とりあえずコレかなあ」

『Windows 2000』と書かれたところにカーソルを合わせ  
エンターを押すと『OverClockSupporter  
Windows 2000 mode』という表示が一瞬出てすぐに



消え、ウィンドウズ2kたんが立ち上がった。この間約2秒！！現在の価値に換算しようが2秒である！

「うわ、速えな！えーっと、『OCSによっこそ！このOCSは機械を強制的にオーバークロックさせその性能を最大200%させることの出来る補助装置です！』？」

「なんかよくわかんないけど凄いですね」

「ん？ああ、そうなのか？」

「私にも全くわからん。なんとか頑張つて使え。で、千草、貴様は？」

「ん。アデアット……本と手甲？」

「これは『鬼さんこちら』だな。

鬼や悪魔を無条件で召還、使役できるようにする。試しに何か出してみる」

「ど、どうすんの？」

「1ページ目を開くと表紙裏に使い方が書いてあるだろ？」

「へえ……」

『書籍型召還術式『鬼さんこちら』腕輪型召喚媒体『手のなる方へ』』

一、当書は『手のなる方へ』と併用する

一、当書は、鬼を召還する為の術式が組み込まれたものである

一、当初に鬼の名を書き、その頁を開いた状態で二度手を叩けば召還可能である。ただしその鬼の数、及び負担魔力は使用者に依存するが、無制限に使役可能

一、帰るように言うか魔力を遮断すれば鬼は帰還される

一、言語は日本語のみである』

「はあー……ってウチ別に魔力量はそれほど多ないで？」

「それでも何か1体くらいは可能だろう」

「んー……」

パンパン

「もほ」

何故か付いていた筆で名前を書いて二回手を鳴らすと、片角で顔に札が貼られた鬼が召還された。

「ほう、中々のもんじゃないか」

「ほなお帰りやす」

そう言うと下に現れた魔方陣に吸い込まれていった。

何故かサムズアップしてたけど、ターミネーターのつもりか。

「中々のものじゃないか」

「いや、あのくらいなら普通にお札で召還できるけど」

「まあ、後々わかるぞ。

月詠、貴様は？」

「はい。あであつとー？」

と、何やら禍々しい西洋剣が出てくる。

「ん〜、こんな剣見たこともおまへんわ〜」

「復讐の剣、『魔剣アヴェンジャー』だな。封印しとけ」

「ええ！？そんなマズイもんなの？」

「マズイというか、アーティファクトの中でもかなりエグい部類だ。使用者がこれまでの人生で受けてきた全ての痛みを相手に与える。どんな人生を歩んでいようが、相手はほぼ確実に死ぬだろう」

「うわっ、エグいな」

「へ〜、切れ味はどんなもんですの？」

「半紙も切れんらしいぞ」

「え〜、ほなそんなに使いませんわ〜」

「何だそれは」

「斬るのが楽しいんですやん」

「ケケ、ワカッテンジャネエカ」

「あ、いたんだ」

「ビドイナ!？」

「ねえねえエヴァさん、私は？私は!？」

「さよ……そうだな、あちらを向け」

そう言って誰も居ない方を指差すエヴァ。

「はい」

「出せ」

「はい」

「いや、はいじゃなくて」

「あ、アデアット!」

そう言った瞬間、飛行機の軍隊が現れた。

「……す、すごい!」

「っていやいや、やりすぎだろ!？」

うち一台が縦に浮上し、そのままゆっくり動き始める。

「ふん、なるほど、無人機か。これなら私のアーティファクトと併

用できるな」

「へえ、凄いんですねー」

「いや、さよちゃんのアーティファクトでしょ」

「あ、そうでした」

「できるだけ速く動かしてみる」

「はい。できるかなあ……それー！」

そういつて、何やら気合を込めるっぽい動作をさせるとパァン！という音と共に飛行機が物凄い速度で飛んでいった。

「あれ？消えた？」

「わー、凄い速さですー！」

「えー？さよちゃんわかるの！？」

「あ、はい。何かわかります」

「ど、どう見ても消えたようにしか見えんだわ」

「ふん……戻せるか？」

「はい、んんんん」

キーンという音を出しながら戻ってきた飛行機が上空でピタッと止

まった。

「ほう、ん？コレは名前か？」

確かに、見ると機体にUCAVと書いてあるけど

「いや、これは無人戦闘航空機の略だよ」

「へー、お兄ちゃん物知りだね。ちょっとアーティファクト辞書見  
てみるね」

と、どこからともなく辞書を出して調べだす。

「なるほど、これは『S - 40』といって、まあ名前の通りだ。  
全部で41機あるらしい。

どうやら使用者の思う通りに動く上に効果範囲は無限、おまけに人  
も乗れるそうだ。

最高速度は時速3220km……3220!？」

「速いんですねー」

「なんか世界最速が持っていたのかれた」

「地上ではお兄ちゃんが一番速いよー!」

「せやろ」

「で、そういうエヴァのアーティファクトは何なんだよ？」

「あ、ソレ私も気になる」

「ふん、まあ良いだろう。それに『乗って』行くだからな」

「乗って？って事は乗りもんなん？」

「いえ、マスターのは乗り物などと生易しいものではありません」

「ケケケ、見テ腰抜カスンジヤネエゾ」

「おい、さよ。アーティファクトをしまえ。アベアットで消える」

「あ、はい。アベアット！」

飛行機41機をしまい、エヴァがその方向を向く。

「ククク、では見てろよ？」

……アデアット」

069 世界最速、結婚式。(後書き)

いやあ、(自主)文字数制限で妙な引きを作っちゃいましたよ。

今回はアーティファクト紹介でしたね。

エヴァのは無駄に引きましたが。

さて、実を言うと豚野郎は二次創作で独自設定を入れるのは実はそれほど好きではありません。

いえ、読むのは好きなんですよ。

でも書くと自分でも纏めきれない。

でも書く。

そのうち設定だけの話とかも載せます。

エヴァのアーティファクト、今回出すつもりだったんですが、出遅れました。

では、遅くなって申し訳ありませんでした。

今回もありがとございます。



070 超巨大航空母艦『しらなみ』（前書き）

設定資料集付きです。

## 070 超巨大航空母艦『しらなみ』

エヴァはアーティファクトを出す。

だがそれは全ての始まりに過ぎなかった。

無敵艦から逃げ惑うメセンブリーナ。

元老院議員の傲慢は、自分達が俺に勝てると思いきませる。

次回 「見知らぬ、母艦」

この次も サービス サービスう！

「という感じになる訳だな」

「いやもう、なんか突っ込むのも面倒くさい」

エヴァのアーティファクト、それは全長約11km、前幅役4km、56階層という、イカレた規模の航空母艦、

「水空両用超大型航空母艦 『しらなみ』」だ。

もう山にすら見えないほどの巨大なサイズである。

ちなみに、1キロ動かすのに、普通の魔法使い100人が人生で使う全ての魔力を使うほどの燃費の良さだ。

俺から鬼のように魔力を吸い上げてる。

余裕だけどな。

「さて、乗るぞ」

棧橋を降ろし船体に乗る込む。

「ってかアレだな、規格外にも程があるな。まあ規格なんか知りもしないんだけど」

「あながち間違いでも無いな。私の魔力でもこの艦は10cmも動かん。お兄ちゃんからの魔力供給があるからこそこんな巨大な船を動かせるんだ」

「いや、わかつちやいたがどついう事だよ」

「どついうことなの!」

「いいから、乗るぞ」

「『しらなみ』艦内」

「しかしこれだけでかいと操縦も艦内の移動も大変だろ、と思ったそこのちーちゃん!」

「な、なんだよ……?」

「なんとこの艦には自動操縦機能がある。更に至る所に転移陣が展開しており、想像しただけでそこまで一発だ。まあ慣れるまではわからんだろつし、とりあえず私に着いて来い」

「はいよー!」

「ちなみに艦内はバイクや自動車での移動も可能だZ E」

「へえ、便利なもんですなあ」

「せやろ?」

「何でエヴァのアーティファクトなのに先生が偉そうなんだ? マスターだからか。そりゃそうだ」

「おい、早くしろ。ここに立って全員で手を繋げ」

「俺ちゃんこ出していい?」

「もうお兄ちゃんは自分の足でコックピットまで行って」

「これが反抗期か……」

「年中倫理に反抗しまくってる麟さんが言っただ」

「じゃあ行くぞ」

そう言っただ転移していく。転移にかかるタイムラグは0.1秒、俺の全力疾走で、ここから約8.6kmのコックピットまで0.02秒  
全・力・疾・走!!!

「遅かったな」

「何でもう居るんだよ!!!しかも全裸で!!!」

「全力疾走してきたんですね、麟様」

「うん。服が焼け飛んだ」

「そんなアホな話が……」

「とりあえず服を出さざるを得ない」

指輪でつつきーの服っぽいのを作る。

「似合う?似合う?」

「似合ってるよ、お兄ちゃんかわいい!!」

「ここまでかわいいと悔しくもならねえな。仕込むか?」

「コスプレを?」

「そうだな。素材は限りなく良い。生かすも殺すも役次第だ……つて何言わせんだよ朝倉!」

「やだなあ、朝倉じゃなくって白波だよ?ちうちゃん?」

「か……和美……」

「クツ、いかん、ちうちゃんに欲情しちまう所だったぜ」

「ふん、まだまだだな和美。私は欲情しきってるぞ」

「もうやだこの家族」

「さて、目的地をメガロメセンブリアに設定、到着は明朝9時でいいかな？」

「うむ」

「じゃあこれからメッセージを送るけど、どんな風にする？」

「そつだなあ……」

「ゲーデル総督！議員全員に対し緊急通信です！！」

「誰です？」

最近雇った少年が急いで入ってくる。

「それが……」



申し出た所、どうやら元老院議員のどなたかが謝罪はすると言ったそうじゃないか、ひどい話だ。

いいか？貴様らの身内の誰かが人のツラにクソこすりつけた拳句「これからも俺の命令は聞き続けるよ？」とのたまう、それこそクソにも劣る下劣な精神の持ち主だ。こいつは赦せないよなあ？  
で、要求だが、いいか？

さっさとそのクズ野郎をこっちに引き渡せ。見つけないにしろ探す努力はしろ。時間は明朝。

何、殺しはしないさ。少しOHANASHIさせてもらうだけだ。了解なら3分以内に上空に向かって見えやすい魔法を放て。了解しない場合は10分後に、そうだなあ………」

「マズイ！目が合った！！すぐに逃げますよ！！」

「な、何なんですか、あの人！？」

「史上最悪の大災害です！」

『その建物の上半分を消し飛ばそう。では、いい返事を期待してるよっ。』

「今絶対気付いてた！私を見てここに決めただんだけ！！」

「ど、どうするんですか？背景から見て恐らく場所は『王都シラナミ』だと思われませんが、あの距離からだ、いや、どんな至近距離からでもここが壊されるような事なんて無いと思えますが………」

「そんな常識が通用するわけじゃないでしょう！いいから荷物を纏めませー！」



「は、はい!!」

私はすぐに荷物を纏め部屋から飛び出した。  
すると、なぜかニヤニヤした麟がそこにいて……

「ウエールカーム！久しぶりだな、ベンデル！」

「……ゲーデルです。部屋ごと転移ですか、考え付きもしませんでした。というか普通は不可能なんですが」

「え！？ええ!?!」

「誰だてめえ？まあいいや、茶々丸、部屋にお通ししろ。丁重にな  
？」

「はい、麟様。どうぞ、こちらです」

私は、少年と共に外側から鍵の掛けれる豪華な部屋に入れられてしまった。

「では、ごゆつくり。失礼いたします」

茶々丸と呼ばれた……ネギ・スプリングフィールド、そして麟の生徒の一人であり、あの『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・M・シラナミの従者である絡繰・S・茶々丸は一礼し、鍵をかけて行った。

「な、何故抵抗しなかったのですか！？刀だつてここにあるのに……」

「無駄です。彼の一家に勝てる者は居ません」

「彼？」

「あの中継のゴスロリ、白波・A・R・麟は男です。そして世界最強の『邪神』とも。恐らくあの茶々丸さんには勝てたと思いますが、彼の家族に傷でもつけようものなら、魔法世界は終わります」

「お、終わるんですか？」

その時、壁に映像が映し出され、腹立たしくなるほどの笑顔で麟が言った言葉は「お前いい仲間持つてるな」。

好きでつるんでいる訳では無いのに。

そして間もなく総督府に画面が切り替わり麟の声が聞こえる。

『ああ、実に残念だよ。じゃあ警告どおり、その建物とはOSSAR ABAだ。よく目に焼き付けて置けよ？まだ人が居るならさっさと避難しろ。カウントダウン、5分30秒。と、ここで先ほど人質にとつたクルト総督からのありがたいお言葉だ』

そう言つて切り替わつた画面には私が映っていました。

「は、早く逃げてください！！そして明朝までに必ず麟の言つていた議員を……！！」

『はい終了！という訳で準備だ、茶々丸』

『はい、麟様。アデアット』

彼女が出したアーティファクトは、恐らく『暴力そのもの』なんですよ。

車輪のついた25メートルほどの車の上に、黒く光る旧世界の兵器が所狭しと並べられています。

「さて、出来る事はやりました。久々に休憩しますか……」

「総督……」

『茶々丸、第三門、1号、2号起動』

『1号起動完了、2号起動完了』

『照準の調整』

麟が言うと、横を向いていた直径50cmはあるつかという前方二つの筒がメセンブリーナの方角を指す。

『調整完了』

『残念だよ、諸君、私の「お願い」を聞いてくれないなんて。発射』

『ファイア  
発射』

最早音と呼ぶべき音量ではなく、それは体を芯から砕くような衝撃となつて壁伝いに部屋を揺らす。

そして、乱れた映像が戻る頃には、私の働いていた建物の上半分が、

ものの見事に綺麗に消えていた。

『さて、全員逃げれたかな？まさか巻き込まれちゃったおバカさんはいないよね？』

これでこちらの本気を知ってもらえたと思う。ああ、抵抗はしないほうがいいよ。ムカつくから。じゃあね』

「私は……」

「は、はい」

「私は、全ての案件が片付いたら、どこか静かな村で畑仕事をして暮らしたいんですよ」

「そ、総督！帰ってきてください！」

『あ、そうそう、ヘーデル』

「だれが出しますか！ゲーデルです！！」

『ああ、それぞれ。悪いな、新婚旅行中だからあんまかまってやれねえのよ。今回の事がカタ付くまでそのフロア好きに使っていいから』

「……はい？」

『一応不自由しないように施設はしっかりしてるから。あと二回手を叩いたらメイドが来るから、要るもんがあればそれに言って。じゃあな』

同時に鍵の開く音がする。恐らくこの部屋の。

「い、いや、待ってくださいー!!新婚旅行のついでにメセンブリーナを潰しに来たんですか!?!」

『家族の敵討ちだ。じゃあな』

「……イチゴは5分で育つんですよ」

「な、何の話なんですか!?!」

あのファミコン（ファミリコンプレックス）の麟の家族に攻撃しやがったゲロブタ野郎はどいつだ!?!

「さあて、じゃあ凱旋行こうずwwww」

「ってか好き放題だな……」

「先程の第三門砲撃は一門につき1分間に6回砲撃可能です。全てで6門ございますので、2秒弱に1発撃つ事が可能です」

「何やそれ……イカレてるやん」

「ちなみに主砲である最終門は麟様の大魔法クラスの砲撃が可能で、おそらくコレを放てば問答無用でオスティア程度なら跡形も残しま

せん」

「撃つなよ、絶対に撃つなよ」

「任せてください、千雨さん。フリですよね」

「ふるかあー!!」

「おい、何をしゃいてるっさっさと船室に引っ込むぞ。さよ、お前のアーティファクトも展開しておけ」

「はい」

「予定では明日の朝9時にはあちらに到着します。滞在期間は長くても2日となりますので観光の際はご注意ください」

「はい？」

「いや、観光とかすんのか？」

「やめとけ。もしどっかのバカが暴走して私たちに攻撃してきたらお兄ちゃんが魔法世界を滅ぼすぞ」

「いや、むしろやりかねないね、隣さんなら」

「俺を何だと思ってるの。やるけど」

「やんのか」

「そらやるわ、この愛妻どもが!」

「ややなあゝ、照れますわ〜?」

「くっ、不覚にも……」

「ちうちちゃん……私、見た目こんな小さい麟さんにドキドキしてる自分がおかしいのかと思ってたけど、ちうちちゃんもなんだね」

「安心し。ウチもや」

「そろそろ暗くなってきましたね」

「うむ。明かりをつけるか」

「っしや、鬼の新婚初夜、始まるよー!」

「しっ、新婚初夜……」

「わかるぞ、和美。緊張するだろう、愛した人と結ばれるのは」

「マスターがこれまで麟様意外に向けたことの無いようなやさしい笑みを!」

「まあエヴァのアレは逆レイプだったけどな。痛い痛いって泣きながら襲ってくる時は狂気を感じた」

「やだお兄ちゃん、そんな昔の事……」

「ダメです!千草さん、千雨さん両名が倒れました!」

「??？」

「さよは何のことかわからんか。まあこれからだろ」

「え？ はいー」

「わ、私もブルっっちゃってるかな」

「そんな怖い事じゃねえよ。さ、行くか」

行きました。



070 超巨大航空母艦『しらなみ』（後書き）

ふう……

え？

あ、ああ、こんにちは。

みんなの希望、豚野郎です。嘘です。  
ちなみに童貞なのでフルカットです。

どんだけシリアス書かせる気だよ。

ええ。全く書いてませんね、シリアス。

あとがきにみんなの設定です。

本編より長いので是非読み飛ばしてください。

微妙なネタバレ含みます。

シラナミ

白波麟が率いる過激派ネオニート集団。

別名白波ハーレム。

全員女に見えるが麟の性別は『秀吉』。

本拠地は一応『王都シラナミ』という事になっている。

みんな麟の嫁、麟はみんなの嫁。

## 王都シラナミ

帝国の端っこにある中立武装農耕国家。

麟は力の象徴、エヴァは慈愛の象徴。

慈愛！？

ちなみに常に国王不在。

法律は

- 1 ・好きにしろ
- 2 ・でも好きにしすぎたら殺す
- 3 ・移民には優しく
- 4 ・でも我が物顔をしだしたら殺す
- 5 ・国王様はえらい

非常にアバウトである。

法律以外にもいろんな決まりごとはあるらしい。そりゃそうだ。ちなみに偉い国王様は激しく敬われていない。

一度他国に襲われたが、その時は国民が総出でブチ切れてその軍隊を殲滅した後、麟がポテトチップスをつまみながらその国を滅ぼした。

レーサー

見た目10歳ほど。

速い。

強い。

変たい。

身長140cm

体重35kg

視力6.6

魔力無限

バイクをこよなく愛する。

王都シラナミの国王で国民からはこよなく愛され、その扱いは際限なく低い。

RR、SS、カフェレーサー、ネイキッド、アメリカン、スクーターなんでもいけるよ！

ちなみに乗車スキルは生前からの物で、実際死ぬ前もかなり速かった。

でもそんな事もう覚えていない。

酒を飲むとリバーズカード『リバーズ』をリバーズする。

人が真剣に何かをしようとしても平然とバカにするクス野郎。

基本的にロリコンだが、それ以外でもOK。人外でも余裕。すごい。

始動キーは「あば・ばば あ・ばばば あばばば」ではない。

アーティファクト

ねえから!!

便利なアイテム

?指輪?

何の装飾もないシルバーリング。

素材やら製法やらを知ってるもの何にでもなる  
しかも絶対壊れない。

でもバイクにしてキャブレターから水流し込んだら走らなくなる。  
あくまで作ってるのはバイクであって、火を作ってる訳じゃ無いから、水入ったらそら走らんわな。

ガソリンはなくならない。うらやましい。

?魔力隠蔽用ネックレス?

革紐に分厚いドッグタグみたいなネックレス。

魔力を隠蔽する

丈夫

かなり長い間持つてる

1000ドラクマで露天商から買った

エヴァとおそろい。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・シラナミ

ベタデレ

見た目10歳ほど。

miniライダーとして目覚めつつある。

ジムカーナでもBクラス程度の腕前。

麟がやることなら何だろうと無条件でいい事と思う。

物凄まじい箱入りっぷりだが強い。

魔力はこのかと同じくらい。

微レズで、麟のハーレムをつまみ喰う。

麟に対してはDMからDSまで何だっていけるんだ！！いけるんだ！！

アーティファクト

水空両用超大型航空母艦 『しらなみ』

全長 11.4 km

前幅 3.7 km

56階層

最大速度：200ノット以上（370 km/hほど）

排水量：満載 6,030,666トン

魔法障壁、物理障壁や移動するためのエネルギーも契約者の魔力に依存する。

つまり絶対負けない。

水空両用だが地上に置くと要塞にもなる。

主な武装は

艦対地ミサイル

空対地ミサイル

艦対空ミサイル

空対空ミサイル

地对空ミサイル

ミサイルは対潜以外全て通常弾頭か無弾頭

対潜ミサイル

焼夷弾

徹甲弾

武装では無いが

照明弾  
発煙弾

更には打ち上げ花火などもある。  
きたねえ花火だ。  
きれいな花火もある。

弾丸全てが魔法で出来ており、対物理、対魔法共に優れている。  
茶々丸の『空』、さよの『S - 40』と組み合わせれば無敵じゃないかね？

絡繰・S・茶々丸

メカデレ

200kg（白波の不思議な魔法で40kgに<sup>サットリン</sup>）  
視覚、嗅覚、味覚、触覚、聴覚の五感があるんだ。

麟の超魔法『カナリヒール（適当）』で28.7GHzという恐ろしいクロック数を誇る軟体CPUを搭載。

アレ用の機能も備えてる。  
何を勘違いしてるんだ。オセロの機能だよ。

砲丸を握りつぶすほどの握力があるけど使いどころはない。

## アーティファクト

二二三〇式超包子 巨大移動砲台 (Fixed bombardi  
s) 『空<sup>ウツク</sup>』

(2130シキ チャオパオジー フィクセド ボンバーデイス)

全長25m、幅3.7mの長方形の土台に複数の重火器が搭載されている。

背の低い戦車にトラックをつけたような形。

中央にコックピットがあり、茶々丸とは電子的な同期<sup>リンク</sup>が取れる。  
多分超が作った。そしてワシが育てた。

最高移動速度：50km/h

総重量：32トン

12000発/分で厚さ50cmのコンクリートの壁を貫く程度の魔法の弾を発射する機関砲『第一門』 8機

30発/分で20cmの鉄板を引き裂く程度の魔法の弾を発射する固定ライフル『第二門』 8挺

6発/分で100m四方が軒並み消滅する程度の魔法の弾を発射する大砲『第三門』 6門

2発/分で隣の大魔法クラスの砲撃を発射する巨大砲『最終門』  
1門

呼び方は第三門の場合、右前方から

前

2号—1号



4号—3号  
6号—5号

後

となる。

弾丸の数は茶々丸の魔力、あるいは契約者の魔力分放てる。

隣に依存せずに放った場合は最大まで魔力を充填した状態で機関砲の第一門1機を2分動かせる程度。

被弾しなければ絶対勝てる。

ちなみに空砲も撃てるし実弾も射出可能。

有効射程距離はだいたい第一門が5km。第二門が50km、三門は1100km、最終門は制限無し。

対物理攻撃は超高いが魔法装甲はペラッペラ。というか無い。

発射中の音は物凄い。

便利なアイテム

マリアージュ・チャチャマル

Marriageの特に良い指輪。

結婚してる事がわかる。

『空』用に音を抑える術式が組み込んである。

白波チャチャゼロ

デレてない

小っさかわいい殺戮人形。  
砂糖を吐く。  
麟にやや狙われている。

武器

出刃包丁  
刺身包丁  
菜切包丁  
中華包丁  
マグロ包丁  
麵切包丁

武器じゃない

万能包丁  
刀削麵用L字包丁

見た目的には麵切が一番エグそう。  
でマグロ包丁がいちばん強そう。  
でも一番強いのは中華包丁。  
チャチャゼロの刀削麵には定評があり、一月に一回くらい、ゲリラ的に超包子で販売される。

便利なアイテム

金のネックレス

麟にもらったが人間用なサイズのために、勘違い系B・BOYファッションっぽくなる。  
家に置きっぱなしにしている。

白波さよ（相坂さよ）

デレデレ

元地縛霊、今浮遊霊

学園長の同級生だった。

今は等身大自分（超&ハカセ作）に取り憑いて、騒霊現象に魔力の補助で動かしている。  
任意で抜け出せる。

お嫁に行けません〜とか抜かしてたから麟がお嫁にした。  
その前まで、特に恨んでる訳でもない相手に「恨めしや」と言っ  
て回るという、ヤクザまがいの事を趣味にしていた。

麟がオカルト板のオフ会で知り合った大学生に寺生まれの先輩、T  
さんを紹介してもらって、そのTさんからイタコさんを紹介して  
もらって、そのイタコさんに師匠とか呼ばれてる大学生を紹介して

らって、大学生に凄腕の霊能力者を紹介してもらってその霊能力者に霊媒のロープをもらったものを脊髄あたりに詰め込んでいる。

#### アーティファクト

無人戦闘航空機（UCAV） 『S - 40』

S - 000は40まである、全41機の無人戦闘航空機。

コックピットが有り、無人より有人の方が綿密な作業を行える。でもだいたいスピードに思考と行動が追いつかないので、無人の方が大雑把に速く動ける。

ちなみに、自動運転と手動運転は即座に切り替え可能。

これを縦に120%伸ばしたような形

最高時速：4,220 km/h

最大航続距離：86,900 km

乗員0～2人

全長：22.30 m

全高：5.62 m

翼幅：13.56 m

#### 機関銃

空対空ミサイル

空対地ミサイル

空対艦ミサイル

が搭載されている。  
弾倉が の形になっているらしい。  
どんな意味があるのかまでは知らぬう！！

すてきなアイテム

すてきなネックレス

高そうかつシンプルなネックレス。  
アメジストが入っている。  
魔法効果は特に無い。

すてきな指輪

高そうかつ高いアメジストの指輪。  
魔法効果は何も無いが霊媒として使える。  
霊能力が使いやすくなるが、元々使えない人が持つても何も起こらない。

横島とかいう霊能力者に2億で作ってもらった。

さよの身体のみみつ

超&ハカセ&横島とかいう霊能力者が間接的に協力して作った科学と医学とオカルトと魔法のハイブリッド。  
魔法も使えるはずだが霊能力（超能力）が便利で、魔法は使った事がない。

白波千雨（長谷川・S・千雨）

ツンデレ

ちうのホームページを隣に視姦されまくってる

うさぎのコスチュームが似合う

たまにデレると吐血喀血レベルのかわいさに、さすがの隣さんもたじたじやでえ。

かわいさのあまりネットアイドルNo.1の座に居座り続ける

わっしょい

いつも急に出てきて急に突っ込む

いないと寂しい。というか突っ込み不在になる

よくHPを更新してると思われがちだけど、それほどでもない

押しに弱く、心優しい。

視力はいい。

アーティファクト

オーバークロック  
サブタイパー  
強制高速処理外部補助装置

15センチ四方、厚さ2センチ程度のノートPCのような見た目で  
重さは500g程度。

耐衝撃、耐水、耐埃性がかなり高く、鈍器としても使う。釘とか打てる。

電子機器の能力を強制的に2倍最大200%まで上昇させる  
これ自体がコンピューターとしても使え、どこからでもネットに接  
続可能

魔力 電力のコンバートも可能  
仮想電子空間に入り込める

#### 便利なアイテム

指輪型魔法発動体『マリアージュ・チサメ』

大魔法5回分ほどの魔力の吸収、貯蓄。

魔法の抵抗。

オート戦いの旋律。

結婚式の日に着たん用にフォーマットされた。

いざという時、すごい効果を発するらしい。(考えてない)

白波和美(朝倉和美)

#### へたレデレ

下ネタを振つときながら下ネタで返されると真っ赤になる。  
麟の取材をした朝倉さんの娘。

いざという時にヘタれる。

ずっと昔から麟が好きだった。

でもバイクにはそれほど興味ない。

幼女スタイルがかなりかわいい。

かなりなんてもんじゃない。宇宙がヤバいレベル。

### アーティファクト

トトグラフィティ  
真実を写す者

カメラのレンズの前につけるような形状をしていて、伸縮自在。

何処で何が起こっているのか漠然とわかればそれがどれだけ遠距離だろうとはつきりと写せる。

ちなみにビデオカメラにつけるとライブ映像が見れるから事実永遠に追跡可能。

メガネにつけても何も見れない。

何が起こってるかさっぱりわからない、見当違いの事が起こっている、そもそも特に何が起こってもかまわない、という状態の時にシャッターを下ろせば普通に向こう側の風景が写るが、幽霊もよく写る。

### 便利なアイテム

指輪型魔法発動体『マリアージュ・カズミ』



大魔法5回分ほどの魔力の吸収、貯蓄。  
魔法の抵抗。

視力、聴力を任意である程度上げれる。

結婚式場で渡された。

白波千草（天ヶ崎千草）

京テレ（京テレとは関係ない）

月詠に説得されて半ば成り行きで結婚した。  
ワオー

涙もろく人情話に弱い。

和美と気が合う。

（何をとは言わないが）旦那さんにあげるねん！と過ごしいつの間  
にか28。  
やるじゃん。

アーティファクト

鬼さんこちら（書籍型召還術式）  
手のなる方へ（腕輪型召喚媒体）

腕輪型つて名前なのに見た目は左右一対の黒い手甲。  
あと薄い本。同人誌ではない。

『鬼さんこちら』に鬼の名前を書き、そのページを開いた状態で二  
回手を鳴らして鬼とか悪魔とかを魔力で呼び出す。

召還したら鬼とか悪魔とかの名前は消える。

魔力のあるだけ使役でき、当然のように隣からの魔力供給があるた  
め実質無限に使用可能。

リョウメンスクナノカミでもあつさり出せる。

倒されて帰った鬼をすぐに呼び出すと小言を言われる。

### 白波月詠（月詠）

ただしイケメンに限る

名字が名前に対してミスマッチでも気にしない強い子。

絶妙にアホ。

京都弁を操り数々の京都斬撃衝を飛ばす事ができるかどうかまでは  
知らない。

### アーティファクト



ガンドルフィーニ

色黒。多分日焼けサロンとか行ってる。

かなり強いんじゃないかなと思ってます。  
飛んでくる銃弾に銃弾当てるとか正気じゃない。

色んな事を知って苦悩してる。

結構いい人で、話せばわかるタイプ。

銃刀法がある日本で、普通に袖口から銃を出す当たり、多分クラックとかガン決まってる。

アルベール・カモミール

オコジヨ。

妹思いでシルク生地が好き。  
意外と博識。

当作ではかなりいい奴。

近衛近右衛門

まぎらわしい名前しやがってこのじじい！

後頭部の長さもさることながら、頭頂部の高さも注目すべきだと思う。

性格は悪くないが、根性は悪い。

大物ぶって油断してボコボコになる。

口癖は「変態という名の紳士だよ！」「ではない。

ネギ・スプリングフィールド

我が家を貰って、ものすごいテンション高い。  
給料はけっこう貰ってる。

アホ。

ハーレムをいっぱい奪われつつあるが大丈夫か？  
何とかなるか。

071 世界最速V・S・MM兵団、第一幕！（前書き）

タイトル考えるのがホント面倒です。

071 世界最速V・S・MM兵団、第一幕！

「立てない……」

目が覚めたらもう朝だった。

昨日倒れたちうちちゃんと千草さんはそのまま他の部屋に運ばれたみたいだけど、さよちゃん、つきー（こう呼んでと言われた）、私はあのまま隣さんと……

「ウチも立てへんわ」

「うん……すー、すー」

「おはよう。」

さよちゃん、昨日凄かったよね」

「大きさがどうって訳やなかったんやけどな」

「ホント、私も初めてだったのに、まさかあんだけとは」

「ウチかてそうです」

「おい、起きたか、貴様等。」

さよはまだか。起こして二つ隣の部屋に來い。朝食の準備が出來て  
いるぞ」

「何でエヴァちゃんが言いに来たの？」

「ふふ、貴様らの事後を眺めにな」

い、今気付いたらあたしら全裸じゃん！  
は、恥ずかしい……

「フッフ、お兄ちゃんは凄かろう？立てぬならそこで待って……」

「行く！いくよー！」

「そうか、待ってるぞ？ははは」

男気を感じる……

ってか今さらだけど初めてが4Pってどうなの？

〳〵その頃のクルトン〳〵

「誰がスープやシーザーサラダに入れる香辛料などで匂い付けをしたサイコロ状の固くなったパンだ！！」

「ど、どうしたんですか、総督！？」

「いや、なんでもありません。悪い夢でした……」

昨日捕まってしまったんだっとな。

さて、どうしたものか……

そう言えば隣が、二回手を叩くとメイドが来ると言ってたな。

私は大丈夫だがこの子はまだ育ち盛りだ。そろそろ朝食の時間だろ



うし、食事が出るならもらっておいたほうがいいだろう。

と、二回手を叩く。

「お呼びでしょうか」

「うわぁー！」

急に後ろにメイド姿の人、いや……人形が現れた。

「呼んでおいて驚くなんて、ひどいですわ」

銀髪の彼女は表情豊かな無表情でぼやく。

「呼んだのは私ですが驚いたのは私ではないですよ」

「ま、どうでもいいです。何の御用でしょうか？」

「ああ、食事は出してもらえるのかと思ってね」

「ご用意させていただきました。こちらへどうぞ」

彼女に廊下を案内され一つの部屋にたどり着いた。

そこもかなり豪華だ。食卓にはフルコースが用意されている。

「至れり尽くせりじゃないですか」

「客人のもてなしをするように伺っておりますので。では、何か御用がございましたらお呼びください」

彼女はそういつとまた音も無く消えてしまった。どうなっているんでしょうか……

くくそのころの葱くく

カンコーン

「あれ？いないのかなあ？」

「そうみたいだな。出直しましょうぜ」

「このかも居ないし、どうなってんだろ？」

「このかさんなら朝から刹那さんの部屋に行きましたよ？」

「ああ……」

「ありゃ目に毒だぜ」

「え？」

二人とも何の話をしてるんだろ？

「にしても何で急に弟子入りなんか」

「僕は修学旅行の件で思い知らされたんです。

もっと強くないと。そしてもっと多くを知らないといけない……

僕は舞い上がってました。魔法学校では天才ともてはやされて、なまじ勉強も出来たから何でも出来るんだって思い込んで……でもそれは違ってたんです。僕はあまりに弱い。何も知らない。だからこそ、僕、あの人に弟子入りしたいんです」

「な、何よ、かつこいい事言っちゃって」

「兄貴……俺っちあ、俺っちあよお!!」

「カモ君!!」

でもホントにどこに行ったんだろ？」

~~~~お船~~~~

昨日、その、アレの3人がフラフラしながら食堂に来た。私は何か早めに寝たから昨日じゃなかったらしいが、記憶は無い。気付いたら起きてた。

「うゝ、おはよー」

「まだフラフラします」

「お、お前らやっぱり……やったのか？」

「や、やだなあちうちちゃん!!このムッツリ!!」

「い、いやあ、あはは」

「zzz.....」

「おい、足元がおぼついてないぞ、三人とも。とうかさよはさつさと起きろ」

「そらぶらつきもしますわ。昨日かてあんな激しく.....ぽっ」

「っ、月詠はん.....階段を昇ったんやな」

「千草はんより先に昇ってもうたわ？」

「え？千草さん、アンタまだだったのか？」

「悪いか！28で処女やと悪いんか!？」

「ほらほら、悪くないからさつさと座れ。ちなみに私は60の誕生日の日だったぞ」

「ってか麟さんは？」

「もうすぐ来るから席につけ」

そうエヴァが言ったと同時に、天井の一部が開いて上から底辺臭漂うキャラクターもの灰色スウェットの先生が落ちてきた。んでかなり綺麗に椅子に座った。

いや、最早この程度のことじゃ動じないよ。魔法よりよっぽどフアンタジーだったの。

「おっはよー……………!!」

「わひゃ!?!お、おはようございます!」

「ん?何だかすみん?顔伏せて」

「て、照れてるんだよ!」

自分で言うのか。

「からのいただきまっしゅ」

「……………いただきます……………」

「ごちそうさまさ」

「麟さん食べんの早いどすな。ってか皿ちっさ。大丈夫ですの?なんか普通の人の1000倍くらいカロリー使ってそうやけど」

「大昔から少食なんだよ。実は今の量だけでホントは1月持つけど、食おつと思えばいくらでも食える。」

ちなみに今食ってたのホントはプラスチック製の偽者だぜ」

「嘘だろ先生」

「なぜわかった」

「逆にわからねえ方がまずいだろ。ごちそーさん」

「家族つてええなあ……………」

「千草はん……………」

『目標まで残り30分です』

「だそうだ。さて、腹ごなしでもするか。みんなはもうしばらくメシ食ってる」

「はい」

「お願いしますね、麟様」

「ちょっと待って、私も行くよ、お兄ちゃん」

「字余り」

「いや、そんな話じゃねえだろ」

「ごちそーさまーいこ、お兄ちゃん。」

お前らも、この部屋出て右隣の部屋に甲板に出れる魔方陣を用意したから来たければ来てもいいぞ」

「ほいさあ！』転移』」

甲板に出たらミীদের執務室が置きっ放しだった。

片付け忘れてた（ ・ ・ ・ ）

「中身だけでも今の部屋に送っというてやるか。『転移』」

「お兄ちゃん優しいね」

「せやろ？外側要るんかな？」

「聞いてみる？」

「せやの。おい、執務室要る？」

『中のあるほうがいいです』

「中はさっきの部屋に送った。外は？」

『好きにお使ください』

「はいよ」

「あ、お兄ちゃん、アレ」

「MM兵か？だいたい5000万人くらいだな」

「どう見ても万は居ないよ」

「500人くらいだな」

「5000人くらいがこっちに杖向けてるけど？」

「ほっとけ。障害にもならんぜ」

「それもそうだね」

「じゃあパラソルとチェアーでも出すか」

指輪をパラソルとチェアーに変えたら服が消えた。

「忘れてた」

パラソルとチェアーと服を出しなおす。

「うむ、コレでよし」

「そうだね、お兄ちゃん」

俺とエヴァは、向かってくる兵团を横目に二人でパラソルの下、寝転がって談笑をする。

「な、何だ……あの艦は……!?!」



「わかりません！かなりの速度で近付いています！！」

「くっ、絶対に進入を許すな！正義は我らにある！！」

「くっはい！！」

「では第1隊、詠唱開始」

我らがMM兵団が大人数による大魔法をあの新ナミが居ると思われる艦に放つ。

しかしその攻撃も虚しく、全くダメージを与えた様子は無い。

「怯むな！！第2隊、詠唱開始！！」

「ドンドンいやがってうっせえなあ。『転移』」

「第3隊、詠唱開始！」

「た、隊長！！」

「どろした!」

「上空から何かが!」

見ると、そこには部屋が落ちてきていた。

「まずい、避ける!」

しかし、この声も虚しく、20人ほどが落下に巻き込まれた。

「衛生班!」

「「「はっ!」」」

「引き続き第3班、詠唱!」

「あ、防音すればええねんやん。エヴァ」

「はいはい」

エヴァが透明のパネルを展開し、結界に防音の効果も加える。

「ついでに対空ミサイルもくれてやれよ」

「はい。ドーン」

飛んでいったミサイル10発が兵団の中央に飛び込み爆発する。

「きたねえ花火だ」

「クソ！何だあの攻撃は！？」

「被害状況40%、このままでは……」

「衛生班！！」

「……はっ！！」

「くそっ、バカにしゃがって！！」

「目標、現地点への到達まで残り約1分30秒！」

「乗り込んで殲滅してやる。我らが兵団に敗北は許されん！！」

「……はっ！！」

「行けー！！」

「……おおー！！！！」

「あべしー！！」

「ひでぶー！」

「たわばー！」

「ちにゃー！」

「ぬぐー！」

「おーおー、頑張るねえ。乗り込んでくる気が。うわ、結界にぶつかって落ちまくってるよ。」

重さ600万トン、幅3.7km、高さ120mの塊が時速160kmってかなり洒落にならない。そら避けられんわ。

「網戸に弾かれる羽虫……か」

『目標まで10分です』

かわいそかわいそなのです

071 世界最速V・S・MM兵団、第一幕！（後書き）

さて、とうとう71話という全くキリの良くない数字に到達いたしました。

これも皆さんの応援があつてこそです。

隣のチン子さんは普通の小6程度のサイズですよ。何の話だ。

ここからが正念場ですね。

正直オチ考えてない。

バイクも出てない……。

一度に出てくる人数を増やしすぎました。子分けます。

では、今回もありがとうございました。

072 世界最速「前回のサブタイに『第一幕』と書いたが、ありゃウソだ」

死ぬほど腰が痛い……

バイク不足のせいです。

そして前回『第一幕』とか書いてたのに一回で終わる出オチっぷり。

072 世界最速「前回のサブタイに『第一幕』と書いたが、ありゃウソだ」

「関西呪術協会は、MMに宣戦布告します。今更ケツまくっても遅  
えから。絶対許さないよ。メモったからな、3日後100倍だから  
な」

「肩赤」

「繊細すぎる…」

「キミキスさん遅いなさん遅いなさん遅いな」

「まおか乙」

「おや、麟様にマスター、どうなさったんですか？」

「A春に電話かけた。戦争するっていった」

「うん」

「所でこれ、誰がどれを喋ってるのでしょうか」

麟です。どれが誰かわかるかな？俺にはわからん。

「俺がMMたんをボコボコにしてる同人誌のアップロードを希望し  
ます！！」

「アップロード依頼をしたものは、殺す」

「お前たち、もう寝なさい」

「誰」のじじい」

「ほ陸新子w」

「いよいよやな……」

「と言うわけで着きました。おーい！ちゃんと用意したかー？」

『誰が賞金首などに屈するか！貴様の賞金は復活だ！！』

「茶々丸」

「はい」

「掃射」

「『空』第一門、全機照準調整完了、発射します」

ゴーーーーー

と、勢い良くドラムが回転し、途切れない銃声が鳴り続ける。

弾が当たった箇所は例外なく半径2.8cmの穴が開き、その隣にも同径の穴が開く。穴と穴が繋がり線になって、その線は建物を一本斬り落とした。すごいやろ。



「な？悪いこと言わんからさ、出せよ」

「そつだそつだー！」

『八、汚らわしい吸血鬼が！貴様の賞金も復活させたからな』

「は？てめえ今エヴァに何て言ったよ？」

「まずい、千草さん、離れてください」

「え？な、何で？」

「早く！」

『何度でも言ってるさ！汚らわしい吸血鬼が！！』

「まずい、千草さん、離れてください」

茶々丸はんが、柄にも無く焦ってウチを引っ張る。

ある程度麟さんから離れて前を向きなおすと、妹さんが結界を張った。

『汚らわしい吸血鬼が！！』

「『燃える天空』『術式固定』『掌握』」

呪文を言った瞬間、結界の上からでもわかるほどの熱と魔力が隣さんから出る。

そのまま隣さんは、艦の結界を突き破って外に飛び出して言った。

「あゝあ、汚らわしいとか言っただけじゃなかったらもう少しくらい長生きできていたものを」

「な、何なん、今の？」

「お兄ちゃんは家族がバカにされたらブチ切れるんだよ。茶々丸の時も二人ほど死にかけていたな。まあ今回は助からんだろ。」

ちなみにアレは私のオリジナル魔法だ。凄かるう」

妹さんが何か自慢してるけど、その後ろで隣さんが一騎当千してる。というか強力な魔法装甲を持つはずのMM兵が、隣さんが横を通るだけで倒れていってる。

「ああ、アレはな、お兄ちゃんに全くあの魔法の素質がないから暴走してるんだよ。」

結果漏れ出した熱が敵の防御を突き破り、あふれ出した炎が酸素を奪っていくって訳だ」

「そんなん、隣さん大丈夫なん!？」

「ああ、全く問題ない。お兄ちゃんが酸素無かったり熱かったりするくらいで死ぬわけなかるう」

「いや、それもどうなんよ……」

「邪神が乗り込んできます!!」

「慌てるな! そう易々と入れるわけ無かるう!」

「それをフラグつつーんだよ。死亡フラグな」

「な、邪神!？」

「警備兵はどうした!？」

「死んだ死んだ。で、さっきエヴァに向かって汚らわしいだのクズだの死ねがの言ったゲロブタ野郎はてめえだな？」

「な、そこまで言ってな……」

「死ね」

邪神が腕を振りぬいた瞬間、その議員の上半身は赤い霧になっていた。

「魔力だけだと思ったか？」

「ば……化け物め!!」

「ふはははははははは! 恐れよ!! 跪け!! 3分間だけ待ってやる!!」







『こちらアリアドネー報道部です！大変な事になってしまいました！！』

なんと、15年前の賞金首、「邪神」白波麟様……あ、いつけね。シラナミリンがメガロメセンブリア元老院議員、全員を攫っていきました！！

この直前にシラナミの賞金は復活、捕獲した方には賞金32億ドラクマ以上が渡されます！！』

「お、おいトサカの兄貴、32億って……」

「一生遊べる金額なんてもんじゃないツスよ！」

「ハ、やめとけ。敵う相手じゃねえよ」

『さらにその妹、「闇の福音」エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・シラナミを捕獲した方にも963万ドラクマ以上が！』

「兄貴！？」

「だからやめとけつつつてんだろ！！麟さんナメてんのかコラ！？」

「り、麟さんって……」

「兄貴……」

「な、何だよ……」

『各人の写真はこちらになります！キヤー！！麟さまあ！！！！』

「……………」

「……………」

「……………平和だな」

『失礼致しました。新情報です！全貌が見えないほど巨大な戦艦ですが、どうやら船体に書かれている文字は旧世界の日本語で、『しらなみ』と書いてあるそうです！私も欲しい！！』

「いや、どこに置くんだよ」

『おっと、動きがあったようです！『しらなみ』船体下部に映像が写されました！！』

『いえー 見てるー？今から議員達のJINGMONG（尋問）を始めま〜す』

『犯行声明でしょうか！？はたして議員はどうなってしまふのか！？と、今回エグニ・プリンティン議員が殉職されたそうです。黙禱……………。何故シラナミは議員を殺害したのか！？』

『そりゃアレだよ。エヴァをバカにしたから』

『見事なシスコンです！！というか返事を返された！？』

『俺に不可能はねえ』



「ジャック・ラカンさんと同じ事言ってるッスね」

「鬼のシスコンっぷりだな……」

『じゃあ一人目はクルトンです 応援してね』

「」「」  
「おぉー！」「」

「うわ！？何だこいつら！？」

「ファンククラブ  
同志の奴らだ」

「俺あの議員いけ好なくて嫌いなんスよ」

『私たちには見守る事しかできません！！では映像を切り替えます』

『オーツス、元気？ちなみにこの尋問は船の下にモニターを出して  
ライフ生中継されますが議員の皆さんには知らせません』

『何故そういう事を私の居る部屋で言うんですか』

『だってヘーデルさん』

『ゲーデルです！』

『ヘンゼルさん』

『グレーテルさんは何処へ！？』

く……いいですか？私のような、議員というのは国民に嫌われる事

も仕事のうちですが、正直今の議員には黒い者が多すぎます

。上がここまで腐っている事を国民に知らせるのは早計ですよ！一人づつ順に挿げ替えていかなば、国が機能しなくなってしまうです』

『国民の事が第一ですかそつですか。』

ちなみにもうライブは始まつてるから。いえー 国民のみんな見てるー？』

『な、ちよ、麟！！』

『コルト・ワーゲンさんでしたー』

『クルト・ゲーデルだ！！』

『ちなみに彼がVIP待遇なのは完全に白とわかつたからだよ。他の奴は知らない』

『なんと！！あの普段から真つ黒そつなゲーデル議員が今回の事について実は真つ白だったあー！！』

そして彼の証言では他に真つ黒な議員がいるとも……メセンブリーナはどうなつてしまつたのでしょうか！？』

『今の立場になるまでは大分無茶をしたそつだからな。どんな無茶かは私は知らんが』

『全知全能の俺も知らんわ。全知つてのは嘘だけど』

『流石は麟様、ちゃっかりと全能アピールをしますね』

『せやる？』

「入れるー！！」

「議員を帰せー！！」

「うつせえ！！バーカバーカ！！」

外から結界を叩いてるバカが40匹ほど。

「MM兵をなめるな！！」

「そつだそつだー！！」

「ハナクソでも食ってる！市ね！！髪の毛が抜け切って金輪際生えてこない呪いをかけるぞ！！」

「ヤメロオ！！」

「悪魔！！邪神！！」

「俺の髪を返せ！！」

「いや、まだ何もしてないから。泣くなよ、ハゲ」

「ハ、ハハハ、ハ、ハゲちゃうわ!!!!!!!!!!」

「チクシヨウ……チクシヨウ……!!」

「おのれ、邪神め!!よくも隊長の若きトラウマを抉ったな!!」

「黙れゲロども!!お前らが予想を兆倍下回るザコさだったせいで  
第一幕だけで簡潔したじゃねえか!!v・s・s・兵団じゃなくてv・  
s・MMにしときゃよかつたわこのクズ!!」

「何を言っているんだ!？」

「訳のわからんことを!!」

「うっせ!!散れ!!」エターナル俺ファイバー!!!!!!!!!!」

「ぎゃー!!」

「わー!!」

全身からビーム的なアレを出して兵士を吹っ飛ばすだけの簡単なお  
仕事です。

「ワレハメシアナリ!!」

「ハッハッハ!!」

「お兄ちゃん、エックスみたいになってるよ!？」

「ヒッフッハ!!」

お オ  
ベ マ  
ん エ  
と の  
う た  
つ め  
く に  
っ は  
て や  
き お  
た き  
ん し  
だ て

072 世界最速「前回のサブタイに『第一幕』と書いたが、ありゃウソだ」

いえー！！意味わかんねー！！

ロックマンゼロのゼロがかっこ良すぎるんじゃないですか!?

伏線は蒔く物であって回収するものではない。

そう、あの東方仗助が憧れた学ランリーゼントが誰かは最後までわからなかったように……！！

というわけで、今回です。

随分時間が空いてしまいましたが、そりゃもうパソコンをどうこうしたりしなかったりと凄絶な2、3日を送っていたんですよ。

嘘ですけど。

医者バイクに乗るなどか言われた腹いせに7500円で買った中古の自転車に乗りまくってました。

では、今回もありがとございました！

073 世界最速、暴く。(前書き)

お久しぶりWRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY  
YYYYY!!!!!!

髪全部抜けたら攻守交代だから。

髪全部抜けたら攻守交代だから。  
修正しました。

いつもありがとうございます、もみじさん。

073 世界最速、暴く。

「フリーーリアー！！フリーイイイイイイイイリアー！！！！」

「うわぁー！！邪神！！」

「あなたを、犯人です。」

お前が関西をバカにしとんのかコラぁ！！

さぁ、貴様のコレまでやってきた悪事を吐け。さすれば開放すると誓いましょう」

「誰が貴様などに屈するか！」

「茶々丸、砲丸」

「はい、麟様」

茶々丸がメコオ！と砲丸を握りつぶした。

「これはお願いじゃないんだよ。言え。な？」

「わ、私じゃないし誰が担当かも知らん！！本当だ！第一旧世界の地名などユナイテッドキングダム以外聞いた事もない！！」

「麟様、本当のようです」

「すごいウソ発見器でつね。じゃあ最後にお名前を」

「ニグレット・ヒューストーンだ」





「来たな邪神め!!」

「じゃあ新芽？何言ってるのこいつ、シャブやってんの？」

「ぐぬぬ」

「率直に伺いますが、旧世界からの謝罪許可の申し入れを断ったのはあなたですか？」

「違う！」

「では誰が断ったのですか？」

「そんなもん知らん！」

「ウソですね」

「おち んちんびろーん W W W W W W W W W W」

「ほ、本当だ!!何を根拠に!?!」

「息遣い、心拍数、発汗量、視線の向き、脳波などを測定しました。

私の前でウソをつけると思わないほうがいいですよ」

「そつだそつだー!!」

「く……クレイン議員だ」

「本当です」

「おちんち……、よくやった、茶々丸」

「いえ、当然のことです」

「そして当然のように私がここに居るのは何でだ？帰らせるよ」

「はあい。』 転移』」

あ、そうそう、お名前は？」

「ドレング・オツピアだ」

「ではオツパイドリンクさんでしたー。じゃね」

「誰がオスティア最高のおっぱいソムリエだー！」

「言っていない、そんな事（倒置法）」

「何だ、入ってくるなりー！」

「お名前は？」

「何故貴様に言わねばならん」

「言わないとこるす」

「隣様、面倒になってきてますね」

「そりゃなるっつーの。名前は？」

「ピアジオだ」

「はい。じゃあね。しばらくしたら開放するから。あ、そっそっ、  
今までやってきた悪い事は？つまみ食い？」

「だれがするか！そんなこと！！」

「ウソです」

「その年でつまみ食いしておかあちゃんに怒られてんの？」

「してない！怒られてない！！」

「ウソです」

「ウソだとしてもお前らには何も関係ないだろ！！」

「ソウです」

「じゃあ帰れよ！...」

「じゃあね」

「いけ、ピカチュウ！ウサイン・ボルトだ！」

「あなたはクレイン議員ですか？」

「違う」

「ではあなたが議員の間にやってきた悪事はなんですか？」

「俺が議員になったばかりの時、議会で横に寝ている奴が居たから起こしたが、そいつはいけなかつたらしい」

「あなたが議員になって得をした事は何ですか？」

「タバコと酒を買う金が増えたな」

「では議員になって損をした事は？」

「タバコを吸う時間も酒を飲む時間も無い」

「悪事を働いている議員を教えてください」

「ジエスト、ゲーデル、ステイン、ソーゴ、クレイン、ウエンツ、ゼン、レーノ辺りに良くない噂を聞くが、生憎俺は自分の周りだけで精一杯だ。他を見てる時間なんか無い」

「そうですか、ありがとございました。あなたのお名前は？」

「ジョン・スミスだ」

「ありふれた名だ。忘れた」

「おいおい」

「失敬!!」

「うわぁ、出た!!」

「あなたのお名前なんですか!？」

「フィード・ゼンだ!か、金ならいくらでも出すから助けてくれ!!」

「だから殺しもし無ければ拷問もしないって言ってんじゃん。あれ?言っただけじゃなかったっけ?まあいいや。今のは俺の質問に答えたらっという前提条件があるから。で、議員になっただけから今までどんな悪事を働いてきた?」

「わ、私は悪事など」

とりあえず机を蹴り割る。

「ひ、ひい!？」

「どんな悪事を働いてきた？」

「賄賂や職権乱用です」

「それで全部？」

「は、はい」

「茶々丸？」

「ウソです」

「はあくん……おいハゲ、俺にウソついていいと思ってるの？霧にすんぞ？」

「じ、じいごめんなさい!！」

「ごめんはいいんだよ、何やったんだ？」

「は、はい、あの、その、賄賂とかを、受け取ったり？」

「ほお、賄賂!いくらほど？」

「その、5万ドラクマほど」

「はあ、安いねえ。誰から？」

「クレインから」

「名前はクレインなのに賄賂はアゲインってか？やかましいわWW  
WW」

「おっしやる通りで」

「ああ、あと半日もしたら解放するからまってな」

「あ、ありがとうございます！」

こくみんのみなさんへ、対処はまかせた。

「貴様あああああ！！！！」

「出やがったな邪神め！！わしを誰だと思っている！！！！」

「知るか！ぶつ殺してやる！！！！」

「高校・大学と成績は一番で卒業した。

大学では魔法芸術部のキャプテンをつとめ

社会に出ても みんなから慕われ

尊敬されたからこそ政治家になれた…

旧世界に1000坪の別荘も持っている…

25歳年下の美人モデルを妻にした…



税金だつて、他人の50倍は払っている！  
どんな敵だろうとわしはぶちのめしてきた…  
いずれオスティアの支配者にもなれる！  
わしは…

ウィルソン・ジエスト元老院議員だぞー………ッ

「で、賄収はいくらほどで？」

「な、なななんのことだ？ まったたたくわかわからんなあ

「CD飛んでんぞ、デブ」

「賄賂などとクソ汚らわしい事わしがする訳がないじゃないか」

「そっか、賄賂はしないよな。するわけないもんな。でも兵団に渡してたあの封筒は何だったのか」

「き、貴様！ なぜわしが不正を働いてそれをもみ消すために第8部隊の兵長に12万ドラクマを手渡した事を知っているのだ！！」

「ふっふっふ、俺にわからないことなど無い……」

「じゃ、じゃあわしが支持を得るために愚民どもに金を配り歩いた事も……」

「ふふはははふひひwww」

「悪魔と契約して気に入らん議員を襲わせたことも……」

「んびゅひゅいｗｗ」

「8歳の頃から今まで魔法を使って覗きをしていた事も……全部知っているというのか！……！」

「……強く生きなさい」

生放送しという言葉事じゃないけど。

とまあこんな調子で議員からかい巡りの旅を満喫していた訳だが、とうとう最後の部屋になった。

そして都合の良い事に、この部屋にいるのがクレイン議員だ。やったNE

『衝撃です！！なんとあの似非雰囲気イケメン議員のゼン議員がかつらだったとは！！むせび泣くその姿を見てはどうも責められません！！そして遂に邪神の本命、クレイン議員の部屋の前に今到着したようです！！その心境を伺ってみたいのですが、どうにも画面越しだと伝わっているのかわかりません！』

「ニュースなのか実況なのかわかんないよね。やあやあメセンブリ

「ナの諸君、なんか残念な議員がいつぱいいたよね？うふふ。まあがんばって？」

『ああ！！麟様！！サイン下さい！！じゃねえわ、いっけね。今の心境を！！』

「んー、別に今回椅子にふんぞり返って出兵させるつつった議員がクレインって訳じゃねえから特に何もしないよ？ただ、日本をなめるなど伝えたい一心です。『転移』」

『なるほど、日本というのは旧世界の地名ですか？あとコレサインですよー！！ありがとうございます！！ヤッホー！！』

「旧世界の国の一つだよ。俺の本拠地でもある。そのサイン、大事にしるよ？一年ごとにデザインが微妙に変わってるから」

『ありがとうございます！！私は麟様を応援しますよ！！』

「サンキュー！チュイッ！」

『キヤー！！（）チュイッ？』

「田のモー！！と扉を首領トタコス」

「お、おおそかったじゃないか！おじけじけづいたのかと思ったぞ！」

「勇ましいな。じゃあさっそく質問だ。右の小指と左の小指、どちらの方が無くなったら困る？」

「へ？」

「せやから落とすんやったらどっちにするか聞いとるんじゃろつがワレえ！！！それとも手首からいつたるかクソが！！！」

「ひ、ひいいいい！！！ご勘弁を！！ご勘弁を」

「というのは冗だ……何だその星！！！」

「遊び心です！すみません！すみません！」

「なめやがって。両手の親指行くわ」

「ひいいいい！！！」

「で、何でじじいが謝ってもいいよね？って聞いたらダメって言ったの？」

「そ、そんな事言ってな……」

「ウンです」

「アウトー！！！」

ブチブチイ！！

「ぎゃあああああ！！！！」

いや、別にグロい要素は何もないぜ？髪を1/3ほど抜いただけ。

「髪全部抜けたら攻守交代だから。あ、わかってる？今そっちが守備ね。んで、何で謝ったらダメなの？」

「そ、それは、その、覚えてないで……」

「ウソです」

ブチリチチイ！！

「じゅべんばらびやびゅい！！」

「あと一掴みの命だけど、もう一回だけ聞いわ。何で謝らないの？バカなの？死ぬの？」

「麟様、「何故謝るなど言った？」から「何故謝らないのか？」になつてます」

「いつしよだよ。いつしよ。で、何で？」

「ぜー、はー……きゅ、旧世界人ごときに頭を下げるのが癪だったからからです」

「で？今そんな旧世界人に頭下げてるけどどんな気持ち？歯牙にもかけないような相手に見下されてどんな気持ち？ねえねえ、どおん

なきいもちいゝゝゝ？？？？？？」

「は、はい、当然のことです……」

「はーん、ふうーん……」

「デデーン『クレイン、アウトー』」

「えー！？ちよ、ちよっと待ってや！おかしいやん！！今笑ってへんだやんー！！」

ブチチリンチー！！

「ずべつづなああつあああんー！！」

「あ、そうそう、ツル・ペカリーナさん、出兵命令出した奴誰か知らない？」

「ひー、ひいー」

「おい、ハゲ」

「だ、誰のせいだとー！！」

「え？俺のせいって言いたいの？……心外」

「え！？ええ！？」

「そんな事いいから、大戦で旧世界に出兵命令出したの誰よ。耳なし芳一にすんぞ」



は無かった)」

『ええ！？本当ですか！！AD判！アンタビューアーを連れてきて下さい！』

『アリアドネーパパラッチ軍ですね！了解です！！』

「うわぁ……。ファイト。あと10分くらいで送るから」

『了解です！！』

「ちーちゃん、親御さんの敵、もう死んでるってさ」

「そうなんや……。いや、もうかまへんねん。ありがとうな、麟さん」

「今くらいは、泣いていいんだぜ？」

「いや、別にそんな空気でもないしな。まあ気が向いたら胸貸してや」

「おじよー！」

「麟様、そろそろ10分です」

「あ、マジで？『強制転移』」



とにかく議員の皆さんを転移で押しだす。

「おーおー、集ってる集ってる。すっげ、砂糖に群がる蟻が如し」

「これは……これは……」

「あ、いっけね、クルトントンだけ置きっぱなしやん。『転移』」

「隣様ったらおちゃめなんですから」

「てへっ」

「あ、半分ほどの議員が連行されとるで」

「なんか1人だけ凄惨な自爆してたからなあ」

「他は隣さんと茶々丸はんが八チの巢にしとったけどな」

「やめてや、鼻が伸びるwww」

「いや、全力で褒めてない。天狗になる必要全くあらへん」

「いらぬ家具捨てたら部屋に変なスペース出来る現象みたいなんが起こつて大混乱したらおもろいよな。」

073 世界最速、暴く。(後書き)

見直しは投げ捨てるもの……

泣きながら積みゲーと化していた東方神霊廟をクリアした紅の豚野郎です。

何か半年くらい書いてない気分でした。うふふ。

それはそうと、いつも通り強引な終わらせ方で安心しました。と言いつつも、実はこれはまだ駆けだしに過ぎなく、新婚旅行は始まったばかりです。

時速300km以上で飛ぶ訳だし、ネタバレでも何でもないけどちうたんのアーティファクトと併用したら時速500kmほども可能なんで回る順番とかどうでもいいかな。

では、今回もありがとございました！

074 世界最速、メメタア！（前書き）

モニターがほしい。



「ちょっと隣！何てことしてくれましたか！！」

「にゃーん」

「隣！！」

「なんだようっせえなあ！！どうやって乗ってきたんだよ！ギャグだからって結界通り抜けるな！！！」

「いや、なんかそんなさういうアレは今はいいんですよ！何してくれたんですか！！！」

「いいじゃん、半分以上残ってたんだから。腐ったミカン率低くてさ」

「ああ、私の計画が……」

「あ、やっべ、こいつ頼んでも無いのに過去語りだすつもりだぜ。追い出せ追い出せ」

「下衆いなあ、先生」

「惚れた弱みか？弱みなのか！？」

「なんでエヴァが嬉しそうなんだよ」

「あれは私がまだ「赤い羽根共同募k……じゃない、「紅き翼」と共に旅をして……」

「泣いた。『転移』」

「ぬわーっっ!!」

ティウンティウンティウンティウン……

「さて、どこ行こうか。と言ってもことシラナミ以外はオステイアとアリアドネーくらいしか知らんのよ。もしオステイアで戦闘になったら確実に最後の一枚も落っこちるし、アリアドネーでいいか」

「ってか私ら一応学生だけど、いいの？」

「あ、俺も先生だから良くないわ。ちょっとゲート閉じるか」

「ええ!? ホンマに言ってる!?!」

「うん。時間の流れが違うらしくな。接続を切ったら同期が切れるってさ。詳しい事はしらん。」

「そんな個人的な理由で国を傾けるのってお兄ちゃんくらいだと思っよ。素敵!」

「特におかしいと思わない私がおかしいのか？」

「いや、そんなもんでっしやる」

「つーわけで、『俺スーパーシャットアウト!』」

視覚効果的な意味でめっちゃ光ってみたり各地のゲートに雷を落としたりしたけど、効果はいたってシンプル。地球と魔法世界が行き来出来なくなるだけ。

でも何か時間の進みがどうとかで、あっちこっちの時間がずれ…  
…もう原作嫁。

さーて、アリアドネー行くか。

ゴウン……ゴウン……

とかいう音はしないけど、気持ち的にね。

「時は飛ばさず、もう夕食時です」

「誰に話しているのでしょうか？」

「男には、わからずとも話さねばならぬ時があるのよ。あと、俺は完全に忘れてたが、俺って男の娘だったんだよな。あまりに生かせないからそんな設定あったのも忘れてたわ」

「メタの匂いがするなあ……」

「さて、晩御飯作るか」

「私が作りますよ?」

「いいから休んでおきなさい。というか、正直薄味の和食はもう食べれないんです。さっきポテトチップス食べちゃったから」

「じゃあお願いしますね」

「任せな」

おにくを やきます。

じゅーじゅー……

おにくが、やけました。

「資源は無限に無いけれど、お金はほぼ無限。だから食事も豪華なんです。今日の食事は森で拾ったどんぐりを砕いて煮た奴を窓から捨てて肉を焼いてみました」

「そのどんぐりの件くだりって必要あったのか?」

「おお、ちうたん。待ち切れなかったか?」

「いや、千草さんを探しててな」

「ああ、見てないわ。見てない。何の話?」



「（何で2回言ったんだ？）いや、まあいいじゃねえか。頑張って食事作ってくれよ」

「今晚の事か？」

「ゴブウア！！！！おま、わかってても言うなよ！！！！」

「え？え？なんだ、俺の勘も大したもんだじえ！」

「っ！！！！っ！！！！」

バトム！

扉を閉めた音

ん？

「ん？」

晩飯のネタくらいで何であんな騒ぎ立てるんだ？

というのは白々しすぎますかねえ、ソフフ。

「いただきますーす」

「あれ？麟さんとエヴァちゃんのご飯、量少くない？」

「見た目相応にしか食わないからな」

「昨日もしなかったっけ、こんな話」

「記憶にございますん」

「あるかないんか……」

「無いアルヨ！」

「どっちだ！？」

「鉄板だなあ……」

「あ、食事時ですが、今しがた電波が来たのでお伝えしますが、アリアドネ には明朝には着くそうです」

「おお、でかした茶々丸」

「いや、エヴァはんの船やおまへんの？」

「実は茶々丸とレーダーの同期が取れるようになってるんだ」

「何その後付け設定」

「いや、ホント始めっから考えてたし！！今考えたわけちゃうし！

「！」

設定資料集には書いてないけど考えてたし！嘘だし！！

「それはそうと同期が取れるのは事実ですのでご安心ください」

「わあい！！食事くらい静かに出来んのか貴様等！！」

「いや、麟さんが一番やかましいですよん」

「そやでー。麟さん食事くらい静かにしたらどうですか？」

「お前らどっちがどっちかわからんわ！！つきーは語尾に『だっふんだ』をつけなくてもいいや」

「いいのか」

「いいんだよ。ごちそーさまあああ！！」

「いつのまに食い終わってんだよ先生、凄すぎだろ」

「世界最速は伊達じゃないぜ。最近世界最速ってサブタイでしか出てなかったからな」

「もう堪忍して……」

「エヴァ、甲板でバイク走らせる」

「うん、お兄ちゃん」

「ぶるるーん！ぶるるーん！！」

走り回った。

「な、なあ、千草さん、やっぱり今晚、その……するんだよね？」

「そ、そうおすなあ……やるん、ちやうやるか」

食事の後、千草さんと会談する。  
議題はその、アレだ。

「ど、どんな感じなんだよ」

「そんなんウチが聞きたいわ！」

「え？何々？そんな気になる？」

「そりや気になるだろ。だってお前、その、初めてなんだからさ……」

「そうやで。ウチだって結婚するまではちゃんと取っとくって決めとったから……」

「いやあく、青いねえー。つつつても、私も昨日までは処女だったんだけど」

……朝く……和美!?

「「何でいる!?!」」

「おお、純京都人でさえ標準語になるほどの衝撃!?!そりゃ居るで  
しよ。ねえ、さよちゃん」

「いやあ、えへへー」

さよもか……!

「ま、こんな幸せそうな顔する程には良いって事だよ」

「い、良い……」

「う、ウチやっぱりまた今度でも……」

「ちよ、千草さん!ズルいぞ、アンタも一緒に来いよ!」

「そつどすえー。千草はんも、もう覚悟決めたらどうおすか?聞い  
とつたほど大きくもあらへんし、思てたより痛ないどす」

「んなこと言つたかて……月詠はん!?!」

「俺モ居ルンダガ、モウイイカナ……」

「ホント思い出した頃に出てくるね、ゼロちゃん」

居たのか。存在感が薄くも無ければ目立たないキャラでもないのに

……

「ウツセエ。勝手ニシヤガレ」

「こつなるとエヴァにゃんと茶々丸さんが居ないのがむしろ不自然な気さえしてくるよね」

「あのお三方はバイクに乗って暴れてますよー」

「あ、ホント？」

「ってかお前ら、出て行け!!」

「やあん!」

「ジャアナ」

「ニヒヒ、がんばってね」

「ほな失礼しますえー？」

「じゃあ健闘を祈りますえ」

「いや、千草さん、アンタは待て。残れ!」

「うう……」

「嫌なのか？」

「別に嫌やなんて……」

「じゃあもう覚悟を決めるしかないだろ」

「せやな。……うん」

ちなみに、この後先生の部屋に行ったらエヴァが居て何か毒気を抜かれた。

074 世界最速、メメター！（後書き）

いやあ……いやあ

やっぱり童貞なのでフルカットです。

どうやったたらシリアスになるのか。こればかりは生まれもったもの  
だと思えます。

シリアスな体験をしたことがありませんからね。

いかなる状況もギャグにしか思えない。

そんな豚野郎です。

では、今回もありがとうございました！



075 世界最速、幕に乗りたがるもやっぱり幕よりバイクのほうがすぎ。(前

あれ？昨日の夜投稿したつもりになってたデータが残ってたよ？  
不思議だね。

075 世界最速、箒に乗りたがるもやっぱり箒よりバイクのほうがすぎ。

「あー、なんつーか、その、アンタ昨日凄かったぜ」

「千雨さんかて」

「は、恥ずかしー」「

「あ、おっはよ、ちうちゃん、千草さん！」

「おー？お、おお」

「お、おはよー！ごいませすぞす」

「まるで似非京都弁だよ？あ、はーん、そーいう事かあ？」

「う、うっせー」

「なんだか今日はダイジェスト風味な日だな」

そんな、いまいち意味のわからない事を呟く俺は白波・A・R・麟。ハーフなんだか何なんだかよくわからないし、自分が日本人かもわかっていない。

ま、一応人間のつもりだ。

で、この文体は心持ラノベ調のつもりだ。

「なっがいモノログだな。どうせだれもこんなの求めて無いんだからいらんだよ。実際擬音で『ドグチャ!』とか言っても、読める人には何が起こってるかわからんだろうが、俺にだって何が起こってるかわからんし」

「誰と話しているのですか？」

「これも定番だな」

「お約束かと思ひまして」

「いや、その心遣いは良いと思ひます」

「ありがとうございます」

「全員いるね。じゃあ今日は、誰がしゃべってるのかわかるように名札を付けてもらう」

「名札？」

「茶々丸」

「はい。どうぞ、皆さん」

「あ、ありがとう」

「これどうすんの？」

麟「名札だから付けるんだよ。誰だお前」

和美「なるほど、こういうことね」

茶々丸「お兄ちゃん大好き？」

エヴァ「おいこら」

茶々丸「やってみたかったです」

エヴァ「おい千雨、何故何もしゃべらん」

「いや、これどういうシステムなんだよ」

エヴァ「バカ、お前こんな所で常識人を気取るな。こんなもん付いたと思った時点で付いてるんだよ」

ちう「 どういう事だ……」

かずみん「うお！逆に分かりにくい！！」

麟之助「おい、統一しろよ」

千雨「そついうお前が誰だよ」

霖之助「ながあめのすけ」

帰れ白髪「エヴァ」

麟「逆、逆」

千草「これどんな意味があるん？対面しとるし、名前も皆覚えとるさかい何の意味もあらへんような……」

月詠「何かしら考えあつての事やと思うんやけど、どないですのん？」

麟「さて、何だろつな。強いて言う事があるなら、別に何かに影響されてこうなつたとかそういうアレじゃない」

チャチャゼロ「ソウナノカ」

エヴァ「お前、名前がカタカナ表記で無駄に長いんだから早くタンスの上に戻つとけ」

チャチャゼロ「ヒデエ」

「貴様ら、シラナミだな！？」



チャチャゼロ「イヤ、帰レヨ」

「とにかく、観光で来たんなら帰っていただけませんか？」

麟「おい、誰が名札外していいって言ったよ？」

千草「まだ続いてたんか……」

セラス「お待ちなさい」

レミイ「セラス総長！？」

セラス「その人たちの指名手配はもう解除されているわ」

千雨「そんな事より、既に名札を作ってきてる用意周到さがどうなんだ」

和美「ってか誰よ？」

セラス「挨拶が遅れたわね。私はセラス。アリアドネー魔法騎士団候補学校の総長よ。ここ、アリアドネーは学ぶ意志や意欲のある者はだれでも歓迎するわ。邪神だろつと、吸血鬼だろつとね」

麟「いや、僕別に学ぶ意志とか意欲とかそういうアレはなくて、ってか別に学ぶ事によって得るアレとか今さら無い感じだし、その、ぶっちゃけ勉強嫌い」

月詠「いや、麟さん先生ですよ。生徒の前で勉強否定とかええん？」

千雨「普通にダメだろ」

麟「いや、ぶっちゃけお前ら勝手に勉強すんだろ。したい奴はしろよ。俺はもういいや。まあそういう訳なんで」

エヴァ「お兄ちゃんが担任じゃなかったら誓って勉強しないよ」

千雨「あれ？先生って担任だっけ？なんかもう一個ちびっこいのが居たと思ったんだが。……？」

朝倉「ほら、ネギ君、ネギ君」

エヴァ「ん？ああ、そういうのも居たな」

一同「H A H H A H A !」

千雨「いや、“一同”って何だよ!？」

月詠「……」

千草「どないしはったん、月詠はん？」

月詠「いや、そういえばウチ、学校って行った事無いなあ思てまし





「確かに、ウチでは筭の乗り方も教えているわね」

ちなみにレミイは帰った。

「俺も乗ってみたいんですが」

「ってどうか乗れないの？」

「むしろ筭に乗るとかどこ出展だよWWWとか思ってた」

「なら入学しなさいな、シラナミ・リン」

「え？いや、ちょっと乗るだけでええんや。そんな入学とかいらんし」

「ああ、そう？ コレットさん！」

「ええっ！？セラス総長！？ わ、私なんぞに何のご用でしょうか！？」

「少し筭を貸していただけないかしら」

「はい、喜んで！」

「暑苦しいメスガキだなあ」

「うわあ……、初対面の子にひどい事言われたあ」

「どうぞ、乗り方はご存知無いわよね？」

「え？いや、知ってるけど。何でか」

「ああ、そうなの？」

「うむ。『飛行！浮遊！箒よ飛べ！』」

ふわ……

ふわ……

「え？浮いてるの？」

「足元、足元」

「あ、浮いてる。1cmくらい」

「あなた、ひよっとして箒乗った事あるんじゃないの？」

「ない。『超加速』」

ぱひゅん！

うわ、この人こんだけしか飛べないんだ。  
これは私よりも落ちこぼれじゃないかね？

「あなた、ひよっとして箒乗った事あるんじゃないの？」

え？何この反応！？ひょっとしてスゴイの？

「『超加速』」

パン！！

「うわぁ！？」

「え、ええ！？」

ってセラス総長！？アンタも驚くんかい！？

「速いなあ、お兄ちゃん」

「え！？男の子なの！？」

「ん？ああ、そうだが？ついでに言つと、ここに居る奴は皆お兄ちゃん  
の嫁だ」

「というかコレットさん、あの人知らないの？」

「え！？もしかして超有名なお方だったりするんですか！？」

「まあ有名って言えば有名ね。なんたって彼は、あの『邪神』なんだから」

「『邪心』？」

「『邪神』」

「いやいや、無いでしょ。だって見るからに普通の女の子ですし」  
でもセラス総長が出てくるくらいだしなあ。なんかVIP待遇だし。  
とか言ったら、帰ってきた。

「あら、おかえりなさい。どうでした？」

「いらね。やっぱり俺は地面這って走るわ。何だ、メスガキ？あ、幕  
ありがとうございました」

「いえいえ、ご丁寧に。もしかして、邪神だったりしらっしやいま  
す？」

「しらっしやいますって何だろう。そしてそう、俺こそかの有名な  
ビッグアイドル、『白波・A・R・麟』だじえ。凄かろう。サイン  
をやるっ」

「いや別にありがとうございました……うわ、絵上手いなあ！」

「コレットさん！あなた授業中に何……を……」

「げ、委員長！」

「り、りりりり麟様！？」

「あれ？委員長知り合い？」

「黙らっしやい！……このお方をどなたと心得てますの！？かの超魔



075 世界最速、幕に乗りたがるもやっぱり幕よりバイクのほつがすぎ。(後

なんて中途半端な終わり方なんだ(驚愕)

新キャラの皆さんへ、

もう出てこないでください、お願いします。お願いします。

今だけで何人出てきてると思ってるんだよ。

何回チャチャゼロとつきーの出番削ぐんだよ。

そんな日常です。

ここ最近、半二トの分際で物凄く忙しいので更新は遅れ気味です。そのくせ稼ぎは無茶苦茶少ない。

せめて一日丸ごと休めればいいんだけど。

もしくはモニターがあと一基あればいいんだけど。

今はパソコンの引き上げ時に備えてお客のモニターを狙っています。

あ、パソコン修理とか改造とか教室とかホームページ作成とかやってるんです。

でもパソコン屋にバイクは無縁も無縁。趣味ですら乗る時間が無いです。

では、今回もありがとうございました。

076 世界最速、山なし才なし意味なし。(前書き)

やおい



076 世界最速、山なし才なし意味なし。

「勝負です、麟さん」

「なんだ棒から藪に」

「凄い絵面ですね!？」

「ちょっとコレットさん!あなたのような落ちこぼれが麟様に勝負だなんて……」

「委員長?」

「な、何ですか麟さま」

「俺、同級生の事落ちこぼれなんて言う子は嫌いだな……」

「っー!ごめんなさい、コレットさん……」

「え!?!あ、う、うん、いいよ。あんまり色んなこと出来ないのも本当だし」

「ちゃんと謝れる子は好きだぞ」

「り、麟様あ?」

ちょっと背伸びびして頭を撫でたら倒れた。

いいかお前ら、これが撫でポらしいぞ。

ちなみに、今日こんなジゴロなのは、昨日HDD整理してたら戦国

ランスが出てきたからだ。多分だ。

「で、何の勝負だったってんだよこのメスブタ」

「……」

「気にするな。お兄ちゃんの発作みたいなもんだ」

「箒で競争です！」

「え？勝てると思ってるの？バカじゃないの？そんなんだから落ちこぼれて言われるんだよクズ」

「……ぐすっ」

「うわああああああああん！！」

「何で麟さんが泣くんですかあ！？」

「泣かれたらウザいから……ごめん。それはそうと、かなり絶望的に勝てる見込みないけど、本当にそういう、箒で飛んだりする勝負するの？俺かなりバイク乗りたい気分なんだけど」

ちなみに今この場に居るのは

俺、エヴァ、コレット、委員長（肌の黒い方）の4人だ。

セラス女史は多忙らしくどっかいった。

あの一番組がそう。

「バイク？単車の事ですか！？そんなん尚更勝てるわけないじゃないですか！！」

「いや、何やるーがお前の負けは揺るがないから。俺の勝つ可能性  
199655680%くらいあるから」

「レプレキア使ってバーストゲージ5時間くらい溜めないと見れな  
いほどのパーセンテージだ！……！」

やったことあんのかよ……

「何言ってるかわかんないですけど、とにかく絶対に勝てない。俺  
に勝つとか無いから。ことスピードに関して、そんな奴居ない。嫁  
ほったらかしてやる事でもない。はい論破」

「始めて論破厨凄いと思った」

「嫁エエエええええええ！？り、りり麟様、よ、嫁ってまさか、り、  
麟様のお嫁さんですか！？」

「うん。四捨五入して10人ほどで新婚旅行中なんだよ」

「つきいい……！！わ、私もお嫁さんにしてください！！」

「キャラつかめきれてないから、もう少し巻数出てからな」

「????？」

「何の話、お兄ちゃん？」

「え？いや、よくわからん」

「とにかく、もう少し時間がたてばお嫁さんにしてくれるんですか  
!?!」

「あー、わからん。嫁にさせるさせないじゃなく、俺に惚れさせて  
みる」

「隣様……、はい!」

「いい子だな」

よっしよっしと頭をなでるとまた気絶した。

「ちよろいもんだぜ」

「その綺麗な顔を吹っ飛ばしてやる!」

「?」  
「ちよろいもんだぜ」

「」

「こんな体勢で撃つんだろ!?!」

「だからそのユニコードでしか表示できない文字を使うのをやめな  
いさい!」

「うーうー!」

「だめだ、この兄妹凄すぎてわけがわかんない……」

「コメット!!」

「コレットです」

「このカス！クズ！お前が意味の分からん事を言ったせいで、この行で111行目だよ！大当たりでも狙ってんのか!!」

「いや、もうなんかすんません」

「ま、許さんけどな。でも仕方ないから競争はしてやるよ。ハンデとして、俺は魔法詠唱一切無し、さらに生身で10トンの重りを背負ってやるわ」

「いや、そんなバカな……」

「指輪さん指輪さん、最近ナチュラルに思い出したときすらあえて書かれない、さよより出番の少ない指輪さん、10トンのベストになあれ」

最近、よくわからない物にもなります、この指輪。  
10トンで普通に着れるサイズってどういう事。  
初期設定ガン無視か。

「よいせ」

「どう見ても軽々着てるじゃないですか。10トンも無いんでしょ

「あれ？身長縮みました？」

「もうわかって聞いてるとしか思えないけど足が埋まってるんだよ。なにここ、底なし沼？怖い」

「いや、さすがにそれは……無しでしょ」

「そういうしてるうちに足首まで埋まってるんだけど。俺のちんこが埋まるまでにスタートしないと不戦敗にみなす」

「ええ！？じゃああの校舎まで競争です！！いきますよ！」

「いらんいらん。勝手にスタートしろ。もいつこハンデだ」

「ぐぬぬー！」

そういうとすっ飛んでいった。

「お兄ちゃん？」

「うん」

無詠唱で転移した。

いつも『転移』って言ってるのは、言っとかないと何やったかわからないだろ。

「とーちゃくー」

「わわ！？誰ですかあなたたち！？」

「そうです、私がお変なおじさんです。あ変なおじさん」

「っしやーついた！！」

「あら、ようこそコメントさん」

「な、ななんであな達が先に居るんですか！？」

「目にも止まらぬスピードで駆け抜けてきた。あ、指輪よ戻れ」

「いやいやいや、ないでしょ！？それは無い！！」

「転移してきた」

「わー！！！！ズルじゃないですか！！」

「やかましい！移動方法なんて指定してなかっただろーが！」

「いや、でも魔法使ってるじゃないですか！？」

「無詠唱だ。しかも走ってくるつったっけ？ん？」

「ぐぬぬー！..」

べろべろべーwwwwwwwwww

とかやってたら女生徒に声をかけられた。

あれ？女生徒しか……いない!？

「あ、あの、隣さんですよね？」

「そうだよ。でも人との絡みが面倒になってきたから行くね。」  
『転移』

「ああ、そんなんっ!」

「よしね」

「おおあ!?!おい、急に目の前に出てくるなよ!」

「ごめんちづたん、ちゅー一回で許されてやるっ」

「許したからちゅーはいらねえ」

「ああん？

あれ？他の皆の者は？」

「ああ、何か買い物だったよ」



「ふうん。まあすぐ見つけれるし、いいけど」

「そんな事より、サブウーファーにアンプ繋いだらパソコン落ちて、作業が戻っちゃうんだけどかなり衝撃的じゃない？」

「だからパソコンの箱は開放するなって言っておいたんだよ。埃溜まりまくってるんじゃないか？」

「もうフィンなのか毛玉なのかわからないレベル」

「あるあるww」

「ウチら王妃やねんなあ」

「そう言えばそうですねー」

「そつどすなあ〜」

「あべしー!」

「さよちゃん何やってんの?」

「壁を通り抜けようと思って」

「幽霊の時の癖ですか」

「いやあ〜、と言つても、今も幽霊なんですけどね」

なんて、お嫁さん、sでウィンドウショッピング（別名冷やかし）してると、急に月詠さんが立ち止まった。

「？ どつたの、月詠さん？」

「……ウチらに何か御用ですか、お兄さんがた？」

月詠さんに合わせて振り返ってみると、ガラの悪そうな男達が4人。一人は大柄でハゲ、その後ろに3人の男が控えていた。

「アンタら、白波麟の嫁さん達だよな？」

ハゲが口を開いた。

「side 俺」

「何言つてんだ先生？」

「いや、ホラ、そういう気分だったんだよ」

「？」

「なんかこっちの方にみんなが居るような気がする」

路地をつろつろつろんとしていると、何やら人だかりが出来て騒がしい。

「頼むよ。このためにわざわざオスティアから休暇貰ってアリアドネーまで来たんだぜ」

「そんな、困ります……」

ペロ……この声は……青酸カリ!?

いや、このアーモンド臭……間違いない、かずみんだ!

「おうおう、どうしやがったためえら! ちょ、どいて。身長低くてイマイチ見えにくいのは仕方ないけど」

と人を押しのけて騒ぎの中心に躍り出た。

「セイフォー サタデー ナイトファイバー!!」

左手は腰、右手は天を貫くドリルだ。

「あ、麟さん! 丁度良かった!!」

「おう、かずみん。どうしたんでい」

「し、白波麟!」

「本物だよな!?!」

「だれこのギニュー特戦隊。ギニュー何処いったんだよ」

「リクーム！」

「リクーム！」

「ザーボン！」

「リクーム！」

「ワイリー」

「……！！！」

「リクーム！」

「M字ハゲ！」

「リクーム！」

「クリーム！」

「えなりか ずき！」

「完成したところ初めて見た」

「いや、どこだよ。どこで完成してんだよ。完成してねえよ。ワイリーって誰だよ。ザーボンはギニュー特戦隊じゃないだろ。そもそも特戦隊リクームしか出てないだろ。リクーム何回出てくるつもりだよ。M字ハゲって本名ですらないじゃないか。このメンバーにも特戦隊にもM字ハゲの奴なんかいないねえだろ。フサフサとモヒカンとハゲだけじゃねえか。あと一回クリームって言ったよな。クリーム

つて、ソニックに出てくるあのウサギの隣で浮いてるちっさい奴だよな。何しに来た。それにえなり ずきって最早実在の人物じゃねえか。せめてフィクションの中から出せよ、訴えられるぞ。だいたい、その で名前の所隠せてないし。どついう意味があつたんだ、その

「うわ、こんな長い突っ込み初めて見た」

「私もこんな長い突っ込み初めてしたわ」

「ちつたんは普段ボケ要因だしね」

「いや、ねえ。ねえわ」

「白波麟!!」

あ、忘れてた。

「いや、白波麟さん!!」

「さん？」

ハゲにも慕われる俺って凄くない？

肛門が

にならないように頑張るしかないんだよな。

「サインください!!」

「俺も頼んます！」

「え？ ああ、ファンの人か。どこに書く？」

「お、俺は色紙持ってきました！！」

「新品のＴシャツ持ってきました！！」

「子分のトサカを持ってきました！！」

「子分のチンとピラを持ってきました！！」

「」「」「わあい……！」「」「」

「じゅん、どこに書くって？」

「俺はこの色紙に……」

「ほいさっせ」

懐からペンを出しておらおらおらと書いてあげる。

「じゅん、ほい！ーありがとじゅん、げえますwwwwありがとじゅん、げえ  
ますwwwwww」

「お、俺はこのＴシャツにお願いします！」

「よかるじゅん」

ぬるぬるとマーカーでサインを書く。

ついでに水墨画っぽい竹の絵も描いておく。  
紳士。

「イヤッホーウー!!」

逸見真理夫か。

「おい、ピラ!超オシャレじゃねえか!!」

「へへへ」

「じゃあ俺はこのヘルメットに頼みます!!」

「よいせ」

「旧世界のヘルメットじゃねえか!どうしたんだ!」

「へへ、骨董屋でな」

「ほれ、書いた」

「ざっすー!」

「(ざっす?ざっす?の友達か?ざっくって誰だ?)うん。……うん。  
そこのハゲは?」

「ハゲ……俺は別にアンタのファンじゃねえけど、ママに頼まれた  
からこの色紙にサインくれよ」

「へいほ。』白波麟 ママへ』どや」

「すまねえな」

「いいって事よ。これからも白波をよろしくね。ママには白波ワッペンもあげよう」

「ありがとうございますー！」

「応援してやすー!」

「いや、凄いナンパだったな」

「いや、ナンパやあらへんだやん」

「さようか」

「さようすー」

「呼びましたー?」

「お後が宜しいようで」

「……よろしいのか?」



076 世界最速、山なしオチなし意味なし。(後書き)

ねんがんのモニターを手に入れたぞ!!

と言うわけで、モニターが入ってきたので、少し更新速度が上がる  
かもしれません。

あるいは、あがるといいなと思っています。

最近めつきり更新速度が落ちたからなあ。

では、今回もありがとございました。

豚野郎でした。

077 世界最速の嫁さんとバイクに乗りたい。(前書き)

耳の裏にニキビが出来てました。  
もう意味がわからない。

ちなみにバイクにライドしてる場所は甲板です。

077 世界最速の嫁さんとバイクに乗りたい。

「為せば成る、何事も」

「何か抜けてるけど急にどうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもあるかつつの！俺らアレよ！？新婚旅行よ！？もつと嬉し恥ずかしな素敵イベントが事あることにゴロゴロしとるべきやん？それが何？この、何？」

「いや、何がだよ」

「だから、こついうのどかな山村とかいらねえんだよ！俺はじつとしてるのが嫌いなんだよ！！」

「ADHDか。ADHDなんだな」

「なんだけどな」

「麟さん、これどうやって運転するんですかー？」

「ロータリー式つつつて踏んだら変速するわ！エヴァに聞け！！」

「ロータ式？」

「いや、確かにロリコンだけど、でも俺も見た目ロリっ子じゃん。だからなんっか、その、そういうアレじゃないんだよ」

「いや、それこそ暇なら教えて来いよ」

「……せやな」

「わははははー！」

「ワオ！アブナイ！」

「お兄ちゃんファービーみたいな声出してどうしたの？」

「モルスア」

「ウチ、一回でええからファービーを電子レンジに入れてみたかったんどす〜？」

コツカドウルd『ヴォオオオオン（電子レンジとファービーが反応しあって発火した時のなんか凄い音）』プスプス……

「ようつーべを見ておきなさい」

「はあい」

「さて……」

と、ポケットからタバコを取り出して火をつける。  
ちなみにこのタバコ、多分前回この船を出した時（昔まだ魔法世界で遊んでいた頃だからかなり前）に落としてた奴だ。お得。

「臭マズッ!!」

光速で捨てた。

「麟ちゃんにバイクの乗り方を教えてもらいたい奴はどいつだ!？」

「はいはい!麟さん!私乗りたいです!」

「じゃあそのカブから降りて」

「はい」

カブを指輪に戻してもう一回、5台バイクを出す。

おなじみNSR80、APE50、NS250R、リード90に、  
今回新顔のドラッグスター400さんの登場だ。

「エヴァはNSR、さよはAPE、つつきはNS、茶々丸はドラ  
スタ(ドライバーズスタンド)、俺はリードだ」

「「「はい」」」

「えいぶってどれですか?」

「それ」

「えぬえすつてどれですか?」

「あれ」

「ドラッグスターってどれでしょうか」

「それは消去法でわかるだろ」

「NSRってどれー？」

「あの太陽がNSRだ」

「リード」言わせねえよ」「」

「じゃあ自由に乗ったりして。つっきーとさよはリターン式は乗った事無いからこっちゃんこい」

「はい」

008の時みたいにさよとつっきーに乗り方を教えて、実践してもらった。

ちなみに、練習の時は二人ともエイプを使ったよ。いきなりNSに乗せるとか正気じゃない。

つっきーもさよも、けっこうな速さで上達した。

んで、さよがNSを気に入って放さない。

「あはははははー！」

パアアアアン！パアアアアン！！

「ああ、さよさん、そんなに飛ばすと危ないですよ」

トトトトトトトトトトトトトトトト



白波式単車の鉄の掟

1・ヘルメット、長袖、長ズボン、グローブは絶対。フルフェイス推奨

2・公道では道路交通法優先。緊急時は緊急度合いによって。

豆腐の掟

1・わからないことがあつたら聞く

2・転んでも泣かない

3・公道で膝を擦ろうとしない

とかこんな感じ。投げやり。

「オイ、ニイサン」

「ああ？何だよクソ人形」

「御主人ガ呼ンデタゼ」



「本当ですか！？ありがとうございます、チャチャゼ口様」

「アア、構ワネエヨ」

「調子に乗んなよ」

「ニイサン躁病ダロ」

「呼んだかい、MY suite little sister」

「sweetじゃないんだ。晩御飯どうする？」

「あれ？もうそんな時間？」

「魔法世界は見るものが全く違ってくらい無いからね。四日目にしてみんな飽きが来てるよ」

「俺はむしろ4日も経ってた事におどろきが鬼なった」

「で、晩御飯は？」

「茶々丸に任せた」

「負かされました」

「??？」

「任されました」

「うん」

晩御飯はみその鯖煮でした。  
間違えた。  
鮭の塩焼きでした。

077 世界最速の嫁さんとバイクに乗りたい。(後書き)

水麗様にリクエストいただきました。

Y A M A H A ドラッグスター400

399cc

V2

30PS/7,500rpm

正直に言うと、Y A M A H A は完全に射程圏外でした。

いえ、乗った事はあるんですが、僕の友人が熱心なY A M A H A 信者で、尚且ついつもジムカーナにしろサーキットにしろ妙にタイムが近く、良く言えばライバル、悪く言えば邪魔者、本心は目の上のたんこぶのような野郎で、僕のヤマハ離れは確実にそいつのせいです。

僕がN S Rを買ったらY S Rを買うし(いや、T Z RかR Z買えよと思いましたが)、リードを買った時も、何のアピールか知らないけどJ O Gなんか買ってきてボアアップやらビックキャブやらで速度に差を出してどや顔してくるもんだから90エンジンに積み替えてポート加工したのもいい思い出です。無駄金使わせやがって。

とはいえ、ドラッグスターですが、疲労感の少ないライディングポジションに、公道走行に支障の無い巡航速度(400ccで支障があつたら悲劇ですが)、アメリカンにしては高いコーナリング性能を併せ持つ、ナイスバイクです。

問題といたら、地味に乗りにくいタンデムシートでしょうか。あんまり2人乗り向けじゃない感じですが。タンデムステップを探しました。

本来はあとがきを書くつもりだったんですが、そのYAMAHA乗りのバカから、唐突にアポイントメント無しで「今からいくわ」とか連絡があったので少しだけそのことを書きます。ちなみに言ったらすぐに電話を切りやがりました。びっくりだわ。

その、大たn……ゲフンゲフン、仮にOとしますが、熱心なYAMAHA信者であると同時に、とてつもない下ネタ製造機で、歩く下半身とすら呼ばれていました。（僕が呼んでいます）

生まれてから今まで金に困った事が無いのか、前はレクサスE3に今はプリウスに乗っています。即金一回払いです。死ぬばいいのに、しかもイケメンです。削れたらいいのに。

さらに若干ホモです。らめえ!!

さて、あとがきですね。うん、あとがき。

ぶっちゃけ、別にそこまでバイクの知識があるわけでもないし、バイクだけで書くことってそれほど無かったんです。

せめてもう少しバイクに詳しくなってから書くべきだったと思わなくもないです。

それはそうと、生活リズムが終わってます。

朝日が昇れば眠くなる。

人はヲニヤトト呼ブ。

人並みの 生活環境 希<sup>こいねが</sup>う 夕方起きて 明け方眠る

そんな感じです。

とはいっても、ガチニートではなく、かといってネオニートでもないんですが。

では、別におっぱいよりちっぱい派の僕の生活環境なんて下水を食用油に転用する技術と衛生基準の1京倍どうでもいいことのはずなんでここいらで切り上げます。

今回もありがとうございました。

078 世界最遅の更新速度。(前書き)

モニター買ったくらいで更新速度上がるかつつの。  
大阪プロレスはごくまれに見るくらいです。

078 世界最遅の更新速度。

「俺は気付いてしまったんだ！」

「……なんだって……」

MMR（マンガとマンドラゴラの部屋 Magazine & amp; p; Mandrake's Room）からこんにちは。こちらは地上28mの船室です。

「お前らの誰かが金持ちなら俺はヒモだったんだろっな」

「……」

「そっやるっね」

「……私一応元貴族だけど」

「シラナミ達です」

「何が？」

「……っつかお前ら仲がいいのはいい事だけど一気に出てくるなよ。誰だどれかわかなくなるだろ。また名札付けさせるぞ。めっちゃ楽やってんぞ」

「いや、知らんがな」

「明日あたり帰る」

「そうだねー」

実はもう2週間ほど魔法世界にいたんだ。でも特筆する事なんて何もなかった。しばらく来ないわ。

「何かイマイチだったよなあ」

「ホストがそんなんでいいのかよ」

「良くないから帰ったらデートに行きます。当然一人づつな。ちなみに順番はテキトーに決める。別に呼ばれた順番が遅かったからってどうこう言わないようにっつってんだろーが喧嘩すんなお前ら」

「いや、誰もしとらへんよ」

「私ら結構仲良いしね」

「そつどすな〜」

「チャチャゼロさんに包丁投げを教えてくださいましたー」

「チャチャゼロエ……」



「教エタゼ」フンス！

「うわ、誇らしげー！ウザるー！」

「うぎぬぬっ！」

「うぎぬぬっ！」

「うぎぬぬー！！」

「うぎぬぬー！」

「惜しいー！！」

「うぎぬぬー！」

「ベクトルが違うー！！」

「うぎぬぬー！」

「ハイ正解ー！！」

「射命丸！／＼射命丸！／＼射命丸！／

「クイズじゃないよ！クイズじゃないんですよー！！」

「じゃあ帰りまーす！そして帰るにあたって、封鎖したままだったゲートを開放します。『ゲート開放の魔法！ティティンパイパイ！』」

ティウンティウンティウン……

「……開放できんのか、今ので」

「倒置法」

「今の魔法でゲートは開放される。一方、ロシアでは今の魔法が解放されるてもゲートは封鎖されている」

「ロシア式倒置法！？」

「意味がわからない」

「深読みできなくもないな」

「でも何も考えてないんだろ？」

「めっちゃ考えたし！」

「何を？」

「ぬらりひよんにする無断欠勤の言い訳」

「生徒に手を出したことについては？」

「……何を今さら」「」

やっぱり俺、エヴァ、茶々丸の息の合いつぶりは不動だな。

「いや、出されとて言うのもアレだけど、いやいやいや」

「麟さんは永久不変の象徴だね」

「ぶれない男」 俺

「白波」 茶々丸

「麟」 エヴァ

「……」

いや、分けて喋る必要ねえだろ」

もう帰るっつーから船室で適当にだべっていると、朝倉が先生に質問した。

「結局、麟さんってどんくらい強いのか？」

「オウフwwwいわゆるストレートな質問キタコレですねwww  
おっとっとwww拙者『キタコレ』などといネット用語がww  
w

まあ拙者の場合強いとは言っても、いわゆる技術としての強さでなく

基礎能力の高さが強いちょっと変わり者ですのでwwwパワーの影響がですねwww

ドプフォwwwつい非常識な強さが出てしまいましたwwwいや失敬失敬www

まあ強さの頂点としてのナギは純粹によく出来てるなと賞賛できますがwww

私みたいに千歩上に行く見方をするとですねwww武術使いのメタファーと

魔法使い至上主義のキツチュさを引き継いだ人物としてのですねwww

ナギ・スプリングフィールドの方向性はですねwww

フォカヌポウwww拙者これではまるでナギファンみたいwww拙者はナギファンではござらんのでwwwコポオ」

「いや、結局麟さんはどんくらい強いのよ」

「無茶苦茶強い。世界最強」

いや、世界最強は言いすぎじゃねえの？

「えべっさんより？」

「そらもっ」

「くいしんぼう仮面より？」

「うむ」

「ヨーネル・サンダースより？」

「何で例えが全部大阪プロレスやねん！！お前ら見た事あらへんやろーが！」

「でも千草はんタコヤキータのファンやで〜」

「うわ、絶妙」

「ほ、ほっといてんかー！」

「……………」

ビリーケン・キッドのファンってバレたくないな。

「俺はビリーケン・キッドのファンだけどな」

「……………」

「どっしたんだよ、ちうたん」

「え、い、いや、何でもねえよ」

……………顔ニヤけてねえかな？

078 世界最遅の更新速度。(後書き)

ソロ充代表、豚野郎ですこんには。

まず、更新が遅れた言い訳をします。

プライマリディスプレイの縦画面化に伴い、

真・東方縦画面化ツールというファッキンググレイトなツールを導入した結果画面が見やすくなり、神霊廟EXをノーミスでクリアできてしまい、あまりの興奮に聖蓮船と地霊殿のEXも狂ったようにプレイしていました。

いかにクソなモニターを使っていたのかなりありアリーヴェデルチとわかってしまう話ですね。

次は話が短い言い訳をします。

ピグライフにハマってしまいました。

鬼のようにすいかを収穫してます。

ええ、どっちもウソのような話なんですが、信じるか信じないかはあなた次第です。

さて、大阪プロレスの話でしたっけ？

ああ、いや、ホント特筆するようなことは何もありませんね。

今日は8時まで残業コースなんで勝手にパソコンに入れたoperaで鬼のブラウジングです。

あと、昨日気付いたんですが、アクセス解析とかあるんですね。びっくりしすぎです。

ほかの人の小説とか読んでた時、あとがきにPVとか書いてあって、何でプロモーションビデオの話が出るんだ？とか思ってたんですが、

これでしたか。

どうやら110万アクセスもしていただいでるようで、ありがとうございます。

あと、ランキングも貼り付けてみたのですが、最速の順位が分からなくてスクロールしてたらけっこう上の方にあってびっくるしました。

これも誤字を修正せず、見直しもせずにあっぷしても読んでくださる皆様のおかげです。

一位を取ってやるうなんて意欲は欠片もないです。

では、今回もありがとうございます。

079 世界最速、ホラーテスト。(前書き)

いただいた感想は最新話掲載前後に返事させていただきます。



079 世界最速、ホラーテスト。

「ソロモンよ！私は帰ってきた！！」

「おお、久々の超無駄スキル「完全声真似」ですね」

波乱万丈とは程遠い新婚旅行、MMを解体し2週間滞在した魔法世界、しかし旧世界では3日ほどしか経っていなかった。

疲労困憊なんてことはなく、平時と変わらない俺たちのポテンシャル、

そんな中、麻帆良に戻ってきた俺たちを待ち構えていたものとは！？

次回、第80話『よしあきのあだ名がサナダムシになった』 Y o u ' r e r e a l s o n o f a b i t c h ! ! ! 『

バイクと魔法が交差したところで始まる物語は痴れている！

「おお、白波君！ちょうど良かった、MMからの使者が我が物顔で居座っておるんじゃ。なんとかしてくれんか？」

なにこのじじい。人が気持ちよく次回予告してたら。

「おい、聞いておるのか？」

「??? a h h , s o r r y t e a b r e a k , a n d ? ( あ、ごめん、お茶飲んだ。で? ) 」

「じゃからMMの使者が……」

「ok, okay, okay and good! so what? (あゝハイハイ、すごいすごい! だから?)」

「むきよおおお!!」

うわ、このじいさん死ぬんじゃない?

「あはは、その辺にしてやってくれないか?」

「あれ? タカミチミチは出張に行っていないんだ」

ヒゲメガネ大佐のお出ました。

「みんなが思ってるほど出張には行ってないんだよ」

「じゃあもう一回担任やれよクズ。それともクラス最ケツ記録更新しすぎて担任降ろされたか?」

「グボウア!!」

「……マジ?」

「マジじゃ。勉強に秀でたものが教えるのにも秀でているかという  
と、そうでもなかった例じゃ」

「ゲボブウエア!!」

「おい、ヒゲメガネが完全にビジュアル的にアウトなんだけど。あ

すにゃんとかに絶対見せれない感じになってるんだけど!」

半ゲル状なんだけど!!

「やっと戻ってきましたか、近衛この……え……もん？」

学園町室に入ると30代半ばっぽい奴がふんぞり返って座ってた。

「いいや、残念だったな!俺は白波麟だ。で?元MMの方が何しに俺の縄張り(シマ)に?」

「近衛!こ、これはどういう事だ!?!」

「ひょ?いやいや、白波君はウチの教員じゃが?」

「バカな!?!邪神だぞ!正気か!?!」

「おいおい無視か、寂しいねえ? ホラ、あっちでちよつとOHANASHIしようや、な?」

「おい、やめ、引き摺るな!おい!おかあちゃあああああん!?!」

「……………」



更新速度的な意味で。

「せんせーひさしぶりー！」

「うむ」

「おにいちゃーん！ー！！！」

「うるせえ！！ディープにもほどがあるフレンチキスすんぞー！！」

「アホです……」

「アホって言ったゆえのほーはアホですー！このアホー！！」

「白波先生！ネギ先生は！？ネギ先生はいずこに！？」

「知るか！！と言いたいところだが、職員室に居る。まあすぐ解る」

などと、朝礼から1時間目の英語まで突貫のHRホムランで雑談しつつ場を濁し茶を濁すこと数分、ネギのアンチクショーが来た。

「みなさん、おはようございますー！」

「「「おはようございますー！！」「」」

「みなさん元気ですねー」

よかった、長い間出て来てないが故にキャラがバグったりしなくて本当に良かった。

「今日は転校生を紹介しまーす！」

「えー誰ー！？」

「俺だ」

「お兄ちゃんだったか」

「暇を持って余した」

「神々の」

「「ヤイサホー………！！！！！！」」

「「「ずじー………」」」

「いや遊べよ」

「とまあ、俺のウルトラセンス溢れるスーパージョークはこの辺にして、入っただい」

「もつきとりますえー」

「つつきーだ」

「どつも〜。月詠言います。よろしゅ」

「席はあのへん。エヴァのところへん」

「はいな〜?」

とことこと後ろの方にかけていくつつきー。

「あ、朝倉あー!!」

「ん?何さ?」

「な、何さつて、朝倉が出張らない……だと!??」

「ホラ見な朝倉! ゆーなが押し付けがましい劇画タッチで衝撃を受けてるよ!?!」

「つつつても、別に私ら初対面でもないしねえ?」

「そつどすなあ。私ら二人とも麟はんのお嫁さんですし〜」

「お……」

「お嫁……」

「だと……!??」

「」「麟先生!??」

「あ?」

「本当なんですか!??」

「本当です。この淫行教師!?!」

「何てこつたい……」

「何かホント今さらだなあ」

「あ、千雨はーん？」

「おいこつち見んじゃねえよ！私まで変人一味みたいに思われるだろつが。今まで通り教室の対角同士、和美と喋ってるよ」

「あれ？千雨ちゃん、今朝倉の事名前です？」

「い、言ってた！確かに言ってたよ！？」

「そら千雨はんも私らとおなうわっぶ！！」

「おい、言つな！……言つな！！」

「最早その反応だけで充分手遅れじゃないの？」

「うるせー！！！」

「はあ、じゃあ質問したけりゃすりゃいいよ」



ちなみに俺は解説に徹するよ。

「はい先生!!」

「パルスイ」

「誰!? 月詠さんはどこの出身なの? 京都!? 京都で引っ掛けてきたの!?!」

「引っかけられました」

引っ掛けられる:引っ掛けられる事

「はいはい!」

「ほい佐々木マツキ」

「このかとは知り合い?」

「お嬢様とは斬っても切れへん仲どすなあ」

斬っても切れない:多分ギャグ。地の果てみたいなギャグセンスだな。

「おい、貴様まだ諦めてなかったのか!?!」

「あ、センパイ? 安心してくださいな。ウチは剣技ならセンパイ一筋ですえ〜?」

ですえ:です。『どすえ』という場合もあるが、実は京都の人

「つてそこまで『どす』とか言わない。」

「せ、センパイ?」

「同じ流派のセンパイなんどす。なあセンパイ?」

同じ流派：多分、新興宗教ホンジャマカ教とかの同門。

「あ、ああ」

「せんせー」

「へいこのちゃん!」

「私もつつきーって呼んでええ?」

「お好きに呼んでください、お嬢様?」

お嬢様：メイド喫茶に女性が行くところと言われるらしい。

「あまりにナチュラルに言うもんだからスルーしてたけど、お嬢様  
つてのは?」

「ウチ、ホンマはめっちゃええとこの出やねん。せやから京都にい  
っぱいお手伝いさんとかがおって、そこの家系なんやね」

ええとこの出：生まれが良い事。

家系：先祖代々とかそんなん。主に火の車になるのは家計。火車  
は火焰猫。

「へえー、そう言えばそうだったわね」

あすにゃん：神楽 坂明日菜。あれ？切るトコ間違えた？

「このかすげえ！！」

「パネエ！」

「ハイハイー！！」

「クーフオイ」

「穢れた血め！ってそうじゃないアル！月詠は強いアルか！？」

「うふふ、そらもう？」

そらもう：そらもう強いぞ と続く。控えめかつ嫌味に肯定する時とかに使う。

「刃傷沙汰までは許すけど殺生沙汰は禁止な」

「当然アル」

「ええー、殺したらあきませんか？」

殺したらあきませんか？：生身で出しっぱなしの刀をカチンカチンしてる。狂気。

「怖っ！！」

「目がマジじゃん!」

「むむ、強者の目アル!」

「いや、狂者の目だろ」

キーンコーンカーンコーン

チャイムってめっちゃ便利やなあ。

「じゃあお前らつっきーの事頼んだぞ。特に俺の嫁達。じゃあな。行くぞ、ネギ先生」

「あ、はい!」

「お前すっごい空気だったよな W W W W W W」

「ひゅっ!」

終礼

「きりーっ! あばよクソども!」

「「「さよーならー!」「」」

「あークソ疲れたあ〜」

どうにも昼休みに菲がつつきーに仕掛けたらしく、見事な返り討ちにあっていた。

ワロスｗｗｗｗ

とはいかず、回復魔法をかけたなり、おもっくそ切り傷入ってるのにとや顔で「峰打ちどす〜」とかほざいてるつつきーを褒めたりして大変だった。

「麟先生!!」

「あ!?!んだコラ!!」

「ひい!!」

「なんだネギか」

「だ、誰だと思ったんですか!?!」

「あれ?お前知らないの?」

「何をですか?」

「ちょうど今くらいの、夕暮れ時、子供のような声で後ろから声を掛けられるんだよ。」

『すみません……』

でも振り返ると誰も居ない。気のせいか？そう思いまた歩き出す。

『すみません……』

やっぱり、誰もいない……」

「あ、あの……」

「気味が悪くなった彼は少し駆け足になる。後ろを振り返っても、誰も居ない。」

あれは自分の恐怖心が生んだ思い込みなんだ。あんな子供の声、はじめてっからしなかった。

そう心の中で念じて、走る。

やがて自分の寮の前にたどり着く。いくつかの明かりはつき、賑やかな話し声も聞こえる。

子供の声は、もう、聞こえない。

あれは自分の思い込みだったんだ。と、彼は自らの恐怖心を振り払う意味も込めてもう一度、最後に振り返った。



子供は、横断歩道で友人に挨拶しようとしたところで、車に轢かれて死んだらしい。

それ以来、この話を聞いた奴の所に一週間以内に現れる」

「やだあああああ！！！な、何とか！！何とかしてくださいよ  
！……！」

「お、おおお俺つちのと、ととと所にも来やがるつもりなんすかね  
！？？どうなんすか！？」

「ま、嘘なんだけどな」

「ああああああ……え？」

「う……嘘？」

「それはまあ、一週間以内にわかる事だ。で、何の用？」

「う、嘘なんですよね！！来ないんですよね！！？」

「さあて、どーかなー」

「うわあああああ！！！おしまいだあああああ！！！」

「ぬははははwwwwww」

とか言っつてネギをからかって遊んでた。



そしたら後ろの方からなにやらものすごい足音が聞こえる。削岩機  
みたいな音。

「アンタ何ネギをいじめてんのよ!」

「うわ、出た! モンスターペアレント!」

「誰がよ!」

「うわああああん、アスナさああああん!」

「姉さああああああん!」

「ちょ、どうしたのよ! つかどうすればこんな事になんのよ!」

「いやあ、実はな……」

と、あすにゃんにもさっきの話をしてやる。

「な、なな何よ、ああああんたそんなんでビビってた訳?」

「ひひひひひひ!」

「あねさああああああん!」

「な、その程度だろ?」

「そ、そうね。で、どどどどどつすればそのガキが来なくなるわけ？」

「え？」

「だからどうしたらその子供がなくなるのか聞いてんのよ……！」

「なんでビビってないあすにゃんがどうして解呪方法を聞くのは何で？」

「その喋り方はくどいわよ。で、い、一応ネギがビビっちゃって話にならないから私が対策を聞いてあげようって言うてんのよ……！」

「はあん、じゃあネギにだけ教えるわ。耳かしな」

「は、はい……！」

「お、俺っちも……俺っちもお願いしやす……！」

「おう。実はな……！」

「ちよ、ちよつとお……！」

「何だよ？」

「わ、私にも教えなさいよお……！」

「何で」

「な、何でって……」

「実はな……」

「ふ……ふええええええええええええええええん！！！！」

「え！？ど、どうしたんですか、アスナさん！？」

「あねさん！？」

「あすにゃんｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗどうしたっぺよｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「怖かったから！！怖かったから私にも教えてよお！！」

「あ、何だ、そーいうこと。いいよ。実はな、今の話は全部俺が今さっき考えた話だから、そんな子供出て来ないのよ」

「……へ？」

「出て……」

「こない？」

「全部作り話」

「そ、そうならそうと早く言いなさいよおおおおおおおおおお  
おおおおお……！！！！」 ドゥプリラー効果

なんか走って帰っちゃった。

「し、心臓に悪いですよー」

「俺っちも、もう駄目かと思っただぜ……」

「ふははwww俺はやはり天才だったようだな。で、結局何の用だったんだよ？」

「あ、そうでした、麟先生、僕を弟子にしてくださいー!!」

「は？弟子？」

「はい!」

こいつはまだ10歳……あれ？9歳だけ？まあいくつでもいいや。この年から鍛えればあるいは……

「ふん。よかろう。弟子にしてやるんじゃねえの」

「ほ、本当ですか!？」

「本当じゃねえの」

「やったな兄貴！師匠が増えるぜ!」

「ヤメロオ!!」

「??」

「じゃあ今日は遅いから、修行は明日からな。放課後また来い」

「はい！」

さっそくアスナさんに報告しないと！」

腕が鳴るぜ！

くくよふけくく

「ちよつとネギ」

「はい、何ですか、アスナさん？」

「あんたこつちで寝なさいよ！」

「え？でもいつもは……」

「今日だけなんだから！ほら、早く！」

「は、はい。おやすみなさい」

「ふん……」

二人とも仲ええなあ。

アスナが帰ってきたとき半泣きで抱きついてきたんと関係あるんや  
るか？

079 世界最速、ホラーテイスト。(後書き)

そんな怖くなかったよな。

まあ話の中では怖いってことで。

紅の豚野郎です。

挿絵無しでホラー書ける人は尊敬するわ。読んだこと無いけど。

さて、ここ最近の更新がこんな落ち込んでいる理由はですね、  
神霊廟プレイ 他のもプレイしてみよう 紅魔郷から全部一通りプ  
レイ やっぱ東方はおもしろいな。 そうだ、東方の小説読もう！  
にじファン うむ。面白かった。あ、最速書かなきゃ うーっ、よし、  
じゃあ次の東方SSを…… うむ。面白かった。あ、最速書かなき  
や ループ

というわけで、東方が悪い。

いや、悪くない。東方に罪はない。

悪いのは全部この豚野郎だあああああああああ……！！！！  
！！！！

今回もありがとございました。悪い豚野郎でした。

080 世界最速、弟子を取る。(前書き)

弟子取り合戦はありません。



080 世界最速、弟子を取る。

「やあやあよーこそ、ネギ」

「麟先生！？ってことは……」

「よろしく願います、師匠！！」

「うむ」

「ええー！？」

うっせえなあ

「まあ来い」

とりあえず家に入れてやる。

「あの、いったいどんな特訓を？」

「ってかアンタコイツに弟子入りとか正気なの！？」

「もー、何だよさっきからこのメスガキ。呼んでないんだから文句あるなら帰れよー」

「なっ！ 無いわよ！文句！」

「じゃあ黙って。デリケートなんだから」

「何がよ？」

「アレ。さて、改めてよく来たな、ネギ。俺のスーパーハウスだ」

「わー！大きいですねー！」

「あたぼうよ！」

とりあえずリビングにでも待機させとくかな。

「んー？何だ、客……か……？ すまん、勘違いだった」

「ちょ、ちょちょちょっと、何やってんのよ長谷川さん！？」

あ、いたんだちうたん。

一瞬なんともいえない顔になると、テーブルにあった布巾で顔を隠した。

「私は長谷川さんなんかじゃない。愛と正義の使者、ハセガワンだ  
(裏声)」

ヨコシマンみたいだな。

「あ、千雨さん！千雨さんですよね！！どうしたんですか、こんなとこで」

こんなところで悪かったなクソガキ

「てめえ空気読めよクソガキ！！知らないフリしてたんだから通せよ！！」

「ええ！？ご、ごめんなさい！でもやっぱり千雨さんだ。こんにちは」

「違っつっつてんだろっがブツ殺すぞ！！」

「ひいいい！？」

「んー、何なにー？あ、アスナじゃん。ネギ先生も。どーしたの？」

「俺に弟子入り」

「はーん。ま、頑張ってねー」

「うわ、投げやり」

「っつか何でアンタこんなところにいるのよ！？」

こんなところで悪かったなメスガキ

「だってここ私の家でもあるし」

「私の家でもありますえ〜？」

「？ 何や、あん時の嬢ちゃんか」

京都二人衆も参戦。

「あーっ！？あなたも居たんですか！？」

「何だ、やかましいな。ああ、お前らか」

「エヴァちゃんが普通っぽくてココロの癒しに……」

「やかましい！！」

「ネギ先生にアスナさん。ようこそお越しくださいました。すぐにお茶漬けを出しますね」

別名ぶぶ漬け。

「なにここの怖い」

「ただいま戻りましたー！」

「おかえり、さよ」

「ただいま、麟さん？」

おかえりのちゅーをする。

「あ、あわわ」

「あ、そうそうお前ら、俺らで今から魔法球行くけど来る？」

「やめとくー」

「ウチも今日はいいですわ」

「ウチもー」

「私はどうしようっかなあ……エヴァさん、どーします?」

「私は行くぞ」

「私も失礼します」

「じゃあ私も!さよも参加です!」

「んじゃエヴァ、茶々丸、さよにネギ、あすにゃんはついてこい」

「はい!」

返事してるのネギだけとか……

B - 1 5 0 + F - 1 4 9 階  
B - 1 階。

「な、何ですかコレ!?!」

「ジオラマ魔法球」

「ダイオラマ魔法球」

「ダライラマ魔法球」

「ダイナ魔球」

「……どれだ!?!」

「知るか……!?!」

「まあどうでもいいけど。さて、ならばこの魔方陣に乗るが良い」

「はい!」

a 01)  
デイオラマ魔法球 S-D1 (Shiranami-Dioram

これは、元々あった(エヴァの)城の周りに本気の道路整備を組み  
合わせ、開放感溢れるサーキットにしたステキステージだ。

めっちゃ綺麗なニユルブルクリンクっぽい感じ。

全長は8.966kmで、S-D3ステージ(雪山)とかS-D5

ステージ（ジャングル）とかの歴代ステージと組み合わせまくった  
ら全長約50kmにもなるイカレコースだ。  
もはやサーキットとは呼ばん。

「わぁ……………」

「綺麗ですねー」

「せやる」

レースのテレビゲームで見たようなサーキットが一面に広がる世界。  
こんなすごい物を作るなんて、やっぱり麟さんは凄い魔法使いなん  
だなあ。

僕も立派な魔法使いになるために頑張らなきゃ！

「じゃあまずは……………」

麟さんがそう言うと、目の前にバイクが3台出てきた。  
これも魔法なのかな？魔力は全然感じなかったけど……………。

「ネギはバイクの乗り方は知ってる？」

「い、いえ。知らないです」

「あすにゃんは？」

「知ってるわけ無いじゃない」

「あつそう。じゃあまずはそこからか。着いて来い」

そういつて歩いていつてしまった。  
でも何で魔法にバイク？

「ねえネギ、ちょっとおかしくない？」

「でも、麟さんもきつと考えあつてのことですよ」

「そっかなあ？」

真意はわからないけど、これもきつと必要な事なんだ。  
そう思つて着いていくと、倉庫みたいな所につれて行かれた。

「「」は？」

「あすにゃんはここで自分と同じサイズの防具を探して。見つけたら着て、さっきの所に。わかんない事は茶々丸にでも聞けば？」

「え？私もやるの！？」

「いや、やらないならいいけど、多分暇だぞ。一日経つまで出れないし。ちなみにここでの一日が外での一時間だ。魔法つてすごい」  
「そ、そうなの？じゃあわかったわよ」



「わからない事があつたらそのメイドに聞いて」

「どうも、モブ人形です。マスターにこの部屋の管理を任されています」

「は、はあ、よろしく」

「で、ネギはこっち」

「はい。でも防具つて要るんですか？」

「漬れたトマトみたいになりたいなら別にいらないけど」

「大事ですよ、防具つて！」

「どんな修行なんだろう……早まったかな？」

「さて、ネギはだいたい身長も体格も俺とそんな変わんねえし、ここから好きな防具を選べよ」

「はい！」

見ると、色とりどりのぴっちりとした、上下一体の分厚い服がいくつか掛けられてる。壁際にはヘルメットや靴や手袋も。この中から選ぶのかあ。  
じゃあ……

「これにします……うわあ！……どうしてここで着替えるんですか！

「？」

「え？何が？」

「見られても平気なんですか！？」

「平気も何も、どっちも男だし」

「あ、そっか」

アーニヤよりかわいいから、ついつい女の子だと思っちゃったよね。  
びっくりしたあ。

「着方わかる？」

「多分大丈夫だと思います」

「いや、全然大丈夫じゃねえよ。何でスーツの上から革ツナギ着ようとしてんだよ、びっくりだわ」

「違うんですか？」

「ツナギの下に着るのはその箆笥の中に入ってるから、ぱんつ以外全部脱いでその上から着るんだよ」

「へえー」

ためになるなあ。

「んしょ、んしょー！」

「んじゃ背中のファスナー上げるぞ」

「お願いしますー」

その革ツナギを着ると、すこし背中が曲がる。

「これ、少し小さくないですか？」

「いや、そんなもんだろ。ほら、靴」

「あ、すみません」

「それ履いたらメット持って外出るぞ」

「まだ着ないんですか？」

「焦るな」

「はい」

外に出ると、もうアスナさんが居た。

「遅いわよ」

「うっせバーカ」

「何でいちいち突っかかってくるのよ!!」

「バーカバーカ」

「つきー!!」

ん？なんだろ？後ろの方から音が……

パアアアアアン!!

と、3台のバイクが凄い速度で走り抜けていった。

「え？」

「ああ、あれはキニスンナヨ。今日一日でああなる事はまず無いから」

「アレってもしかして……」

「うん。エヴァ、茶々丸、さよの3人」

「凄……」

「ちなみに、みんな魔力は凄いよ」

「!!」

やっぱりバイクと魔法は関係あるんだ!!  
頑張らないと!

「さて、バイクの乗り方だが、昔の話を読んで勉強して。このバイクはそこに書いてあるのと同じNSR50だから」

そう言つて『008』と書かれた紙を渡された。  
僕たちもおおよそその通りにしてなんとか乗れるようになった頃にはもう夜だった。

「お疲れさん。じゃあ着替えたら戻ってきて」

「はい」

「疲れたー。ってか暑いわねー」

でも有意義な時間の過ごし方だったなあ。

「ちなみにこの後は座学もあるよ」

「ええー!?!?」

アスナさんは勉強が嫌いだからなあ。

その頃の俺っち……

「忘れて行かれました……」

「マア飲メヨ」

「すまねえな」

「ナアニ、似夕者同士、仲良クヤロウヤ」

泣けてきちまったぜ……

080 世界最速、弟子を取る。(後書き)

最終的にシラナミ加入者は全員不老不死カスタムされるんで、今までほとんど出番の無かったチオラマ魔法球。

別にこのくらいだとネタバレでも何でもないよね？

というわけで、紅のです。

麟、ネギ、あすにゃん：NSR50

エヴァ、茶々丸、さよ：NS250R

ちなみに、魔法球内にもバイクのストックが200台くらいあるという設定です。今考えた。

本編内では全く語られていませんでしたが、結構魔法球内も活用されてます。今考えた。

ちなみに、本小説にはIBTシステム(行き当たりばったりシステム)を採用しています。

では、今回もありがとうございました。

081 世界最速、インタビューがどうとか。(前書き)

長くなりました。

ネギの壊れっぷりとフルコースには突っ込まないで。

もしくは突っ込んで。



081 世界最速、インタビューがどうとか。

「白波鉄の掟！」

「ヘルメット、長袖、長ズボン、グローブは絶対！フルフェイス推奨！」

「公道では道路交通法優先！緊急時は緊急度合いによって！！」

「エヴァと茶々丸に言ってもらったこの二つが絶対に守ってもらったことだ。」

ちなみに自分で言おうと思ったのにセリフ取られた」

台詞の取られた白波麟です。

「はい！」

「セリフ取られた云々のくだりはいらなんでしょう」

「ちなみにこの鉄の掟、実は例外もある」

「え！？」

「パフォーマンズ走行時の服装は好きに。被害は自己責任で。だね、お兄ちゃん」

「うむ。まあ俺ほどのプロフェッショナルだとどんな服装でも最高のパフォーマンスが出来るんだが、やっぱり俺の背中を目指す奴と  
かいるやん？そんな奴に、『こいつ実はノーヘルでタイムアタック

しちゃう奴なんだ。俺もそうしよつと』とか思われて真似された拳句味噌飛び散られるのも寝覚めの悪い話じゃん」

「エグい話ね。ってかあなたの背中目指すような奴っているの？」

「殺すぞ神楽坂明日菜」

「この兄妹えげつなく沸点低いわね……」

「プチ殺しますよ、神楽坂明日菜さん」

「帰りたい……」

「嘘だと思つたらコレを見てみる」

「ん？なに？」

そういつてエヴァが取り出したのは月間バイクライフだいたい100冊（別冊バイクライフ『世界最速のプライベーター・白波麟特集』含む）。

「な……何コレ」

「お兄ちゃんの出た雑誌だ。今日の座学はそれを読んでろ」

なんでエヴァが決めるんだよ……ステキ！

「ちなみにお兄ちゃんの勇姿が見れるのは付箋の貼ってあるページだ」

ちなみにこの妹、『白波』と書いてある雑誌なら、脅威のサーチ能力で全部5冊ほど買ってくる。

おかげで『SYOHEI EX006-S 白波レプリカヘルメット』とし書かれてない雑誌を何回買ってきたか。

サーチ能力は高いのにフィルタリング能力はえげつなく低い。

「え？ あ、ああ、そう言えばレーザーだったのよね。すっかり忘れてたわ」

「ぼ、僕もです！」

「どんだけ馴染むんだよ、俺」

「ほら、読め！ホラ早く！！そしてお兄ちゃんの勇姿を目に焼き付けまくれ。寝ても覚めてもお兄ちゃんとF5キーの事しか考えられなくなれ！」

「何を更新させる気よ。ハア、読むわよ。読めばいいんですよ」

「ちなみに読み終わったら簡単な問題を作るから、それなりの覚悟をしておけよ」

「ゲッ！」

「はい！」

ネギさつきから はい！ しか言ってなくね？

編「よろしくお願いします。編集の朝倉です」

麟「よろしくお願ひします。レーサーの白波麟です」

編「とは言つても、結構頻繁に合ってますよね」

麟「たしかに。(笑)前が先週でしたっけ？」

編「そうですね。丁度GP優勝直後でしたか。あの時は凄かったですよ。編集部も『あの白波がレースをやめる!』って(笑)」

麟「思い立ったら即実行の男ですからね」

編「それが若さと速さの秘訣ですか。でもあの時は本当に凄かったですよ。社長に『おい、朝倉!お前行って白波選手の引退宣言取り下げて来い』とか言われて(笑)」

麟「アハハハ」

編「笑い事じゃないですよ(泣)」

麟「というか今さらだけど、朝倉さん編集になったの?」

編「いえ、小さな会社なので……と言ったら社長に怒られますが(笑)フリーの記者から会社お付きの記者兼編集といった所ですかね」

麟「はあー」

編「とはいっても、やっている事は今までと変わらないんですが」

### 読者からの質問

編「編集部が抽選で選んだ質問です。ちなみに、編集は一切内容を

見てません」

麟「ドンと来い！」

広島県・サンちゃん さん「麟さんはもうバイクに乗らないんですか？」

麟「むしろ毎日乗ってますね。埼玉に来ると稀に見れるかも」

編「埼玉県の人口が増えますね」

麟「まさか（笑）まあ、とりあえずレースはまだするのかな？気が向いたららって事で」

編「また戻ってきてくださいよー」

麟「草レースとかならそのうちね。まあその時は連絡しますよ」

編「お願いします！じゃあ次の質問です」

岡山県・やつ さん「EX006・Sの値段をさげてください！」

麟「アハハハハハ（笑）」

編「ははは（笑）」

麟「これはね、ショーヘイに言つて！」

編「006・S以外も006シリーズは全部同じ値段ですからねー」

麟「そうなんだ」

編「麟さん、普段何かぶってるんですか？」

麟「ネコかぶってるかな」

編「知ってます（笑）ヘルメットは？」

麟「スオーミーとかシンプソンとか……ショーエイとかアライとかショーヘイとか」

編「いっぱい持つてるんですねー」

麟「メーカーから送られてくるのもあるんですけどね。いくらヘルメットあっても頭は一つしかないんだから（笑）」

編「かぶり心地はどれが一番ですか？」

麟「一番はアライかなあ。一番悪いのはネコですね」  
編「あはは。では次は」

埼玉県・むいむい さん「此間金髪の女の子手を繋いで歩いてましたよね!？」

編「では次の質問に……」

麟「あ、見られちゃってました?アレ俺の妹なんですよ。GPの中継でも写ってたでしょ!めっちゃかわいいでしょ!天使でしょ!マジ天使!!お姫様!!この前もちよつと半日ほど家を空けるくらいで、『どこいくの?』『いつかえってくるの?』で、帰ったら『知らない女のおいがする』とか『誰と会ってたの?』とか言っ!もう逐一俺のする事が気になって仕方ないんですよ!いやあ、参ったなあ。実は今まで一日以上会わなかった事が無いんですよ。だいたい16時間を過ぎた辺りから血色が悪くなってきて20時間ごろには息も絶え絶えといった所でしょうか?とは言っても、よく考えたら12時間以上離れた事ありませんでした。恐らく1日離れたら本当に死んじゃいますね、俺。そもそもエヴァが俺にこんなべつたりになつたのは今から……」

《編集部独断でカットしました》

大阪府・R・T さん「麟さんみたいに速くなるにはどうしたらいいんですか?」

編「コレを待ってたんですよ!」

麟「うーん……練習かな?」

編「何で疑問系なんですか?」

麟「速くならなきゃいけない!タイムを縮めなきゃいけない!っていつて走るでしょ?」

編「はい」

麟「疲れるじゃないですか」

編「そうですねー」

麟「生活が『妹：バイク：その他』だと『7：2：1』くらい」

編「それはそれは」

麟「ちなみに妹なんですけどね」

《編集部の独断でカットしました》

麟「で、バイクは楽しんで乗ってるんですよ。その結果がアレ（優勝）ですね」

編「なるほど、究極の趣味ですね。趣味の究極ですかね」

麟「謙遜しませんが、実際僕はかなり速いですからね。速さが楽しさなんですよ。まあゆっくり走るのはそれはそれで好きですよ。自分に合った走り方が速さだったんですかね」

編「なるほど。ためになります。では次です」

北海道・猫さん『我輩は猫である』

麟「名前はまだない」

ドイツ・Kaifさん『わたしとあなたは速いでしょう。どちらが』

麟「努力は認める」

編「原文そのままです。どっちが速いか聞いてるんでしょうね」

麟「僕です」

編「世界最速の男ですからね」

東京都・PEEPING TOMさん『僕は田園調布に住んでま

すが、麟選手はバイクに乗る時髪は邪魔じゃないんですか？』

麟「妹が僕と同じ髪の長さにしてるんですよ。で、妹は髪が長いのがえげつなく似合ってるんで一切きりません。前散髪しようとしたら本気泣きされました」

編「しかし改めてみると、どう見ても年齢一桁の女の子ですよ、麟さん」

麟「リンです？ って言ったら100%男と思われませんか」

編「逆に、言う機会がある事にびっくりです」

麟「實際レーサーってそこまで日の当たる職じゃ無いですからね。」

しかも僕は職ですらない訳ですから。無職ですよ（笑）」

編「そう言えばそうでしたね（笑）では、これからも色々とコーナーを用意してしますので、」

麟「ドンと来い！」

「……………え？」

「いや、そのページじゃない。次のページだ」

「そうなの？」



『麟選手の直接指導コーナー』

抽選で選ばれた沢山の人の中から運よくその栄光を掴み取った5人のライダーが麟選手から直接指導してもらえるスペシャルコーナーだ！

ちなみに、この本を販売するひと月前に発表したにも関わらず今回の応募は、前回の麟選手の直筆サイン抽選を超える人数だったため、3人だった枠を5人に拡大したのだ！

応募はがきの数はなんと9000枚！

これにより編集部の方井君他数名が重度の寝不足に襲われたぞ。

そして、その9000人のうち選ばれた事によって一生分の運を使い果たした可哀想なグッドラック野郎の五人はこちら！

鳥取県・縁 さん『麟さんのファンクラブ会員？3桁です』

山梨県・N・Y くん『また三菱がバイクを作りますように』

奈良県・紅 豚野郎『あれ？なんで敬称が蔑称みたいになっただの？興奮するんだけど』

大阪府・高梨 さん『明日になんかならなきゃいいのに』

群馬県・ぴろし くん『“くん”って年でもない』

「9000枚？」

「そつだ。凄いだろう。まだ信用ならんか」

「いや、信用するわよ。流石に」

「そつか、信用ならんか！ならばもっと凄いものを見せてやる。来い！」

「いや、だから信用するって、ねえ、ちょ、ひき、引き摺らないでよ！！テストは！？テストはいいの！？」

「これも一環だ！」

……ガンバ あすにゃん！

一時間後くらい

「麟さんってすごいんですね！」

「そりゃそつだ。何せ生まれた瞬間から最速を約束された存在だからな」

「わあー！」

などと橋にも棒にもかからない会話を楽しんでいる（そして茶々丸とさよは本を黙々と読んでる）と、エヴァがあすにゃんを伴って帰

ってきた。

「ただいま、お兄ちゃん！」

「おかえり」

「ただいま戻りました、麟様」

「え？誰？」

「明日菜です、麟様」

「え？え？」

「お兄ちゃん、教育済みだよ！」

「それは洗脳と言うんだよ。だからあれだけマンティスと戦う時はコントローラーを2Pの所に挿せて言っただのに……」

きつと1Pの所に挿したまんま戦って負けたんだろうな。

ちなみに一番好きなのは意外や意外、2なのだよ、この俺は。スケボーめっちゃおもしろいね。

でも1のグレイフオックスも超かっこいいね。

「じゃあ簡単な問題だ。各自に配ったボタンを押して返答してもらおう早押しと、ホワイトボードに書き込む回答の二種類。」

ちなみに、一番点数の低かった者は今晚のおかず一品抜き、点数の高かった者はお兄ちゃんに一つお願い事ができる」

聞くか、叶えるかまでは俺が決めます。

「という訳で、出題者のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・シラナミだ」

「司会、進行の白波・A・R・麟だぴよん」

「頑張ります、絡繰・S・茶々丸です。ちなみに、ミドルネームのようになってる『S』が姓です。麟様の事をもっと知りたい2歳児です」

「お嫁さんとして、いい所を見せたい、白波さよです。旧姓は相坂でした。麟さんといつまでも一緒にいたい60歳児くらいです」

「麟様親衛隊として、神楽坂明日菜、行きま……あれ？何でこんな事言ってるんだろ？ってちよつとエヴァちゃん！？私を洗脳してたでしょ！？」

「おい、次、小僧だぞ」

「あ、は、はい！ネギ・スプリングフィールド、麟さんの弟子として、頑張ります！」

「ちよ、無視するんじゃないわよ！！」

「やかましい！！」

「明日菜さん、空気を読んでいただけませんか？」

「はしゃぎたいのはわかるんですが、その、少し落ち着いてください……」

「アスナさんってば、そんな慌てなくても」

「あれ？おかしいの私？私が悪いの！？」

「では一問目、ボードクイズ」「でーでん！」「白波・A・R・麟  
の『A・R』は何だ」

『ピコーン！』

「さよ、早押しじゃない」

「あ、はい、すみません」

「早漏さんめ」

全員手元のボードに書き始める。

あすにゃんも止まらず書いているのは、解けたとはいえ洗脳の効果  
ですね。

睡眠学習法ですね！！

「時間だ、答えを聞こう」

「バルス」

「目が、目があああああああ！！」

俺の光の魔法に間髪入れず茶々丸が目を押さえて呻きだした。

「茶々丸に2点加点だ」

「な、何で!？」

「ノリの良さはシラナミで生きていくには不可欠だからな。ではポイントを立てろ。」

ふむ、サービスしすぎたか……？

茶々丸『アタナシア・レーサー』

さよ『あたなしあれえさあ』

ぼつや『Athanasia Racer』

神楽坂明日菜『アタナシア・レーサー』

全員正解、各5点ずつ加点」

「当然です」

「次も頑張るぞ!」

「このテストの目的って何よ？」

「では第二問、早押しクイズだ。」「デデン!」「バイクの後輪を駆動させるためのギアの名前は」

『ピコーン』

「神楽坂明日菜!」

「バックギア!」

「1点やる。死ね」

バックしてどうする

『ピコーン』

「茶々丸！」

「バックスプロケット！」

被せて来た！？

「ナイスボケだ。2点やろっ」

『ピコーン』

「さよー！」

「バンバンジーー！」

何が何だか

「ボケ！1点！」

『ピコーン』

「ぼっやー！」

「バンバンバンバンジーーー！」

「1点！」

で、正解は！？

「「「ドリブン スプロケット」「」」

「全員5点！」

なんぞこれ……

「三問目、ボードクイズ」「デデンデンデン！」「お兄ちゃんの必殺技は？」

『ピコーン……』

「それはもうさよがやった！」

「つてか必殺技つて何？俺そんなん無いんだけど？」

「という可哀想な思いに反してみんなさらさらと書いていく。何で俺のこと俺より知ってるの？」

「よし、書けたな。」

茶々丸『トンファークック』 3点

さよ『すごいパンチ』 3点

明日菜『サイキックソーサー』 4点

ぼうや『ベンティアドショットヘーゼルナッツキャラメルエキス  
ト  
ラホイップキャラメルソースモカソースランバチップチョコレート  
クリームフラペチーノ』 うーん…… 5点

なにそれ怖い……

ネギのすごい怖い。



「最終問題！早押しだ！」「ジョインジョイントキイ」「お兄ちゃ  
んが優勝したロードレース世界選手権優勝年度とクラス、及び優勝  
時に乗っていたバイクの名前は？」

『ぴんぽーんぬ！』『ぴんぽーんぬ！』

さよと茶々丸がほぼ同時だけど、

「今のはさよだな」

「頑張りました！」

「では回答をどーじょ」

「はい、2001年度、250ccクラス優勝で車体はHONDA  
のRS250Rです！」

「正解！5点だ！」

「わーい！」

「結果発表だゴルア！！」

「ふむ、中々面白い結果になったな。

茶々丸 42・195点」

「今ならフルマラソンも走り切れそうです」

「さよ 40点」

「うー、負けちゃいましたー」

「神楽坂明日菜 45点。ボケとナイスボケで地道に稼いでたな」

「やっぱり勉強はあんま得意じゃないからね」

「ぼづや 35点。死ね」

「ふがないです……」

「という訳で、優勝は神楽坂明日菜、貴様だ」

「やった!」

「個人的にはあんな中途半端な点を取れた茶々丸も何らかの商品をあげたい気持ちでおっぱいっばい、キス甘酸っばい、オナラの臭いが部屋いっぱい」

「なんて綺麗な韻の踏み方……」

「いえ、私は敗者です。でも商品を頂けるなら今度のデートはパソコンのパーツ屋さんに行きたいです」

「MAKASERO!」

「で、神楽坂明日菜。貴様は?」

「うーん、エヴァちゃん、神楽坂明日菜じゃなくて普通に『明日菜』って呼んでくれない？」

「いや、お兄ちゃんに対するお願いだからな」

「じゃあ麟先生、エヴァちゃんに、これから私を明日菜って呼ぶように言ってみよ」

「エヴァ、呼んでよ」

「はい、お兄ちゃん？  
明日菜。これでいいか？」

「うん」

「では食事にするか。今日は私が作ってやるっ」

「黙って座ってる。俺が作る。ヤメロー！シニタクナーイ！」

「はい」

お兄ちゃんが走って調理場に行っちゃった。

「エヴァちゃんって料理下手なの？」

「ふん、そう思うか？」

「マスターは、昔はうどんに墨汁を入れていましたが」

「うどんに墨汁!？」

「食べれるんですか!？」

「お兄ちゃんはまずいって言いながら食べてたぞ」

どんなにまずいのか気になって少し食べたけど、アレには『吸血殺し』の名をつけた。

「愛の為せる技ですね。」

最近水性絵の具を使うようになりました」

こっちは不死殺した。

「……………」

「原因……原因は何なんですか？」

「お兄ちゃんの愛だ」

「麟様が輝かしいばかりの溺愛っぷりで、最近のコーラばかり飲んで甘やかされて育ってきたガチユピンの1000倍ほど甘やかされていたので、全く料理が出来ないんです」

「もっと甘やかされていたぞ！」

「憤慨するところそこなんだ」

「アスナさん、憤慨なんて言葉使えたんですね!？」

「ブン殴るわよ、クソガキ！」

「つてかエヴァちゃんはまずいつて気付かなかったの？」

「殴つてから言わないでくださいよう……」

「はあ? いや、普通にマズイぞ。食べたもんじゃない」

「じゃあ何で作るのよ!？」

「むしろあの材料の何が悪いのかわからんな」

「無駄ですよ、明日菜さん。マスターは食材がどう加工されて食事になるのか全く知りません。カレー以外は」

「カレーはわかるんだ……」

「麟先生はご飯作れるの?」

「洋食はプロ顔負けです。以前、皆さんが図書館島に潜っている間、クラスメイトの皆さんに振舞っていました」

「あの時は全員かなり満足していたぞ。『イギリス料理が美味いとは思わなかった』そうだ」

「む……」

「何だ、ぼつや？イギリス料理が不味くないとでも言いたげだな」

「いえ、美味しい料理もあります！」

「その美味しい料理だけ出したんだよ」

「くっ……」

「ねえ、茶々丸さん、イギリス料理ってそんなマズイの？」

「そうですね。視覚から攻めてくるタイプの食事です。どうぞ、これはつなぎゼリーの写真ですが……」

「どれど……うげえ……」

「懐かしいなあ……」

「ネギ、ひょっとしてコレ、おいしいの？」

「いいえ、えげつなくマズイですよ。あの冷え固まった微妙に硬くて、味も薄いゼリーに、中途半端に硬いうなぎの身がまた合わないんですよ。それに塩コショウなんてかけるもんだから」

「いい。もういい。アンタはそれ食べて生きてたから気にならないだろうけど、その食文化って私からしたら虫食ってる民族と大差無いわよ」

「ええ！？そんなですか！？」

「そんなだ。刺身を生魚だと聞いた時一歩引いただろ」

「た、確かに……でも食べてみたら美味しかったですよ」

このぼうやも大概わからん奴だな……。

「いや、イギリス料理は食べてみたら美味しくないだろ。何で調味料やら香辛料をつける事が前提の食いもんばかりなんだよ」

「お兄ちゃん！」

「メシできたぞーいほーいほれほーい」

「じゃあ運ばせるね」

「うむ」

場内にいる人形に食事を運ばせる。

「はいお待たせー。今日の晩御飯はまさかのフルコースよ」

「別にそんな気を使ってもらわなくても良かったのに」

「いや、結構毎晩フルコース」

「じよ、上流階級だ！！」

「そして最下位だったネギこんにゃろーには残念ながら食前酒は抜きだ。ぶどうジュースでも飲んでろ」

「麟さん……」

「私も未成年なんだけど……」

「いけんだろ」

「……いただきます」「……」

「い、いただきます」

「ん？何だ、かぐ……明日菜？」

「いや、私こんな上品な料理の食べ方なんて知らないわよ」

「好きに食ったらええねん！！！！！！貪れ！！！！」

「いや、流石にそれは無しでしょ……見よう見まねだけど。ん、お……美味しい！！」

「そうだろう！お兄ちゃんが作ったからな！！」

「麟さんが作りましたからね！！」

「麟様が作ったのですから、当然です」

「師匠が作ったんですから」

「あ、ネギも乗るんだ」



うん、今日も美味しい！

081 世界最速、インタビューがどうか。(後書き)

こんな事するつもりじゃなかったのに、気付いたらこうなってたしかし、元々何をしようとしていたかは全く覚えていないが故にこの話は初めからこうするつもりだったんだらうか、僕は

などと考えております。

一切代謝の無い体になって死ぬまで寝ていたい紅の豚野郎でございます。

最近柄にも無くシリアスを書いていたもので、反動にギャグを書いています。すいません。

読む分にはギャグもシリアスも好きなんですが。

とはいえ、半年ぶり、話数で言うと744話ぶりにギャグを書きましたが、やはり腕が鈍っていますね。

あの頃と比べてキレがありません。

この衰えた腕を元に戻す意味も込めて、しばらくギャグコメディを書こうと思います。

間違つてシリアスが入ってしまったら「あーあ、やつちやつたねww俺あ知らねえよwwww豚野郎だよwwww」と冷笑に伏してやってください。

では、今回もありがとうございました。

082 世界最速、(前書き)

頑張りが足りない。  
サブタイも足りてなかった。

「おっぱあああああああああああああああああああああ  
……………」

「おはようございます、麟さんっ」

「おはよー、お兄ちゃん！」

「うむ」

「おはようございます、麟様」

「うむ、今日の俺は紳士的だ。茶々丸、朝飯は？」

何故なら豚野郎が親知らずを抜いたからだ。

「はい、今日は玉子焼きですよ」

「わーい！わーいわーい！」

「あらあら、麟様ったら、まだまだ子供ねえ」

などとベッドの上をゾンビが如く駆けずり回っていた。  
一部屋丸ごと余す事無くベッドって本気やる。

「何この茶番……」

扉を開けるとあすにゃんが一人いた。

2、3人いたら一人くらい欲しかったけど、一人しかいないならいらない。

「おお、おはよう、あすにゃん。タッチ」

「ひゃああー!!やめなさいよ!!」

「お兄ちゃんったらセクハラ教師」

「もう、隣さんったらあ」

「そんなおまいらにも タツ……無い……だと!?!」

エヴァの胸を触りながら劇画調に呟く。

「ほら、行くよ、お兄ちゃん」

「うむ」

「「「「「いただきまーす」「」「」

「「「「「ただああああんあああああんなあああああなあな  
ななん」

「「師匠、師匠!?!」

「玉子焼き砂糖入れすぎじゃね？朝から胃にくる」

「マスターが甘いもの好きなので」

「俺のほづが好きだし」

「そういう話じゃない」

「師匠！！」

「茶々丸の作るミツソープは絶品だな」

「ありがとうございます」

「師匠」

「え？俺？」

「そつですよ」

「何」

「今日は何をするんですか？」

「うまい！」「テーレツテレーノ」

「うう……」

「あ、ごめん、聞いてなかったわ。何？」

「いえ、今日は「バイク乗って外に出る」……はい」

「ごちそうさまスカンク!!」

「何そのスカンク」

「ごちそうさまスタング!？」

「言っていない」

「さあ乗れ! 跨れ!!」

「はい!」

「エンジン始動!」

「はい!」

「キルスイッチ!」

「ない!」

「ですよー」





寂しい。

おっとネギよ、今後ろを見てふらついたな。死ねばいいのに。

つてか平均速度45km/hの上に50ccでウィリー縛りとか難しすぎて泣けるんだけど。

などと一周走り、ピットに戻る。

「えー、まずネギ。それなりに乗れてる。二日目にしたらいしたもんね。

でも曲がる時の速度と車体を倒す角度が一致してない。あんな倒さなくても大丈夫」

「はい！」

「で、あすにゃん。本気で鍛えたらレースに出れるね。でも直進でもコーナリングでも二ーグリップ。基本的にタンクから膝は離さない」

「はい」

「あとは二人ともそれなりに走りこめばすぐ速くなるから、これから20周さっきのコース行こうか」

「はい！」

「ええ！？私も！？」

「え？嫌ならいいけど？」

「行くわよー！」

何怒ってんのこいつ？

「まあ焦らず走りなさい。怪我したらぶっ飛ばすぞ」

「余計怪我するわよ」

「バイクこかしても怪我すんなよ。まあ死なない限りすぐ治せるけど」

「はい！」

「行ってこい」

ぷおーんぷろろーぬと走り出す二人を見送って20秒、エヴァ、茶々丸、さよの3人がピットイン。

「お前ら何勘違いしてるのかしらないけど、俺ピットクルーじゃないからな。あ、さよ、もう乗らないならNSかして」

「はい」

「じゃあ俺もちょっと行ってくるわ」

「いってらっしゃいませ」

「いってらー」

「あーばよ・とっつぁ〜）　v i b（ん」

「32周送れただけど泣くなよ。排気量がちがうんだから」

「いや、別に気にもしてないけど」

「あつ、そう。ちなみに、あと30分で出れるようになるから準備しておきなさい」

「はい！」

「じゃあ今回はこの辺で」

「何言ってるの？」

次回！

最速の戦艦

ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ

ボコにする映画

最速の要塞

ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ

- ボコにする映画  
最速の断崖  
ボコにする映画  
最速の陰謀  
ボコにする映画  
最速のテロリスト  
コにする映画  
最速の標的  
ボコにする映画  
最速の聖戦  
ボコにする映画  
最速の追撃  
ボコにする映画  
最速の脱獄  
ボコにする映画  
最速の傭兵  
ボコにする映画  
最速の奪還  
ボコにする映画  
最速のステルス・  
ボコにする映画  
最速の激突  
ボコにする映画  
最速の報復  
ボコにする映画
- ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ  
ある日偶然遭遇したテロリストを隣がボコ

やらないよ!!

おはこんばんちわ豚野郎です。

ええ、ここまで更新が遅れた事に対する言い訳の時間です。

? 警告 ?

ここから先の文には、残酷ではないものかなり痛い描写が含まれています。

ご注意ください

僕には一本の親知らずが生えていました。

歯並びがともいい僕は、こいつにどうこうされることは無いと思っていたのです。

しかし、現実是非情でした。

21にもなって日々成長を見せる親知らず。

それに比例してどんどん噛まれる僕のほっぺの内側の肉。

悲しみのあまり体重が8kg減って、真剣にHNの変更を悩んだほどでした。

言い過ぎました。

それでも強く生きていきたい僕は、このアンノウンペアレンツ(親知らず)を抜く事を決意しました。いや、それだと知らない親になるだろうなどは微塵も考えなかったのです。

それにあたり、いくらくらいかかるのだろう?と『親知らず 抜歯』で検索したのです。

そると数々の反応が。

曰く「歯を砕いて、破片を歯茎から掻き出し2、3針縫っておしまい」「3日は生きる気がしない、一週間は食べる気がしない、一月は日常生活すら困難、半年でやっと正常に活動できるようになる」と、僕の決意を大いに鈍らせる話のオンパレードですよぶざげやが

って。

僕は、部屋に籠って泣いていました。

ここで勘違いして欲しくないのが、決して痛いのが怖くて泣いていたんじゃない。

この年になつて、今さら親知らずの生えてくる自分の不甲斐無さに泣いていたんです。

更に言うと、小学校の時予防注射も、注射なんかに頼らないと病気も防げない自分の不甲斐無さに泣きましたし、生まれてきた瞬間もこれから親のスネをかじらないと生きていけないという不甲斐無さに泣いていました。  
今もスネをかじっています。

それはそうと、とにかく無意味に検索してしまったのが運の付き、僕は布団に包まって『自分の不甲斐無さに』涙を流す日々が続いたのです。

それ故に更新できなかつたんです。

ああ、歯は普通に抜いてもらいました。

砕いたりとかなかった。代わりに僕が砕きに砕いて近所のドブに捨てました。

歯ごときがびびらせやがって。

それはそうと、僕基準で最速も軌道に乗って来たので、もうひと作品手を出そうと思います。

ロックマンゼロとゼロの使い魔のクロスでも、と。

もし興味があるなら一度覗いてみてください。

では、今回もありがとうございました。

083 世界最速の弟子のペットは携帯のプリセットデータで例えるなら真っ

前回サブタイが飛んでいたので今回は長めにしました。





「はい！」

「はい！じゃねーよボコゲ！！」

言いながらガムシロップを投げつける。

「す、すいません……」

「ちよっと、何もそんな言う事ないんじゃない？」

「保護者の方も現場に行き過ぎた要求するとモンスターペアレントとして教員に煙たがられますんで。っつか俺が煙たがるんで。マジ自重してほしいっつーか、教師の話なのになんで居るの？まあいいや」

「誰が保護者よー！？」

「いや、どうみても保護者じゃねえか。所でメシ食ってくださる？」

ふんもつふー！と怒るあすにゃんにライトツッコミしつつ食事が要るか聞いているちうたんマジ天使

「いいの？つてか、もう隠さなくてもいいんだ、千雨ちゃん」

「かまわねえよ。つてか諦めた。クラスの奴らに言うなよ」

「寮出た時点でみんな知ってる気がするけど……」

あ、そうだ、木乃香に連絡しないと」

携帯を取り出すあすにゃん。

「所で気付いてる？上のほうで三点リーダーがちゃんと変換されなくて半角中点六つ並んでる所が何箇所かあるんだけど」

「いや、修正しろよ」

「めんどい」

「そ」

「で、朝礼でやる事！」

「は、はい…」

「話を聞く、話をする、瀬流ピコに『あーん、またやつちやったあ私ったらドジなんだからあ』と言いながらコーヒーあるいは紅茶をかける」

「瀬流彦先生……」

「体育教師でもないのに朝からジャージ着てたのは……。つてか木乃香と刹那さんも来て大丈夫？」

「ねー、このちゃんとせつちゃんの分もー！！」

「で、何で話聞いてないの？俺が知ってるっつーことはお前も知ってるはずんだけど？」

「い、ごめんなさい、聞きこぼしです」

「あ、そう？じゃ次から気をつけてね。ねーちうたーん！！ごはんまだー！？」

「今日は千草さんの日だよ！！！」

「え？そんな制度あつたんだ……」

「作りたい奴が作ればいいんだよ」

「後にシラナミ制と名づけられる」

「何がだ」

「もう出来ますえー」

「さよか」

カンコーンコロローンと呼び鈴が鳴った。いや、むしろ呼び隣が鳴った。

「うち新聞はデイリー取ってますんでー！！！」

「何でスポーツ新聞なんだよ、見たことねえわ」

「「お邪魔しますー」」

「おお、せつたーよ、死んでしまつとは情けない」

「……？」

「ドラクエやね」

「略すなよ。フルネームでドラ息子クエイクと呼んでやって」

「何それ？」

「「「「いただきます！」「」「」

「からし菜漬けうまい」

「そつどですか？」

「山葵漬けもうまい」

「腕を上げたな、千草」

「そらもう、麟さんの為に」

「奈良漬食べれない。あげる」

「そつどしたか？」

「めっぼう酒に弱い」

「妹のエヴァはんはお酒強おすのに」

「えー！？ エヴァさんお酒飲むんですか！？ 中学生なのに！」

「600歳だけどな」

「俺の分も飲む」

「お兄ちゃん分も飲む」

「ってか昨日も飲んでただろ」

「前のこと過ぎて忘れてました」

「老化早っ！」

「じっつぁんです」

「相変わらず食べるの早いね」

「絶対量が少ない」

「千草はん料理上手いねんなあ」

「ややわ、お嬢様ったら」

仲よさげでなにより。

「お邪魔しましたー」

「私、全く会話ありませんでしたね」

「俺っちよりマシさ」

「あ、居たんだ」

「ひでえ!?!」

「アンタってプリセットで携帯についてくるとしたら真っ先に消す  
ポジションよ」

「俺っちもそこまで言われると逆にスッキリしまさめ」

「ほなまた明日の」

「はい!」

「さいならー」

ネギのフェイバリットスペルは「はい!」だな。

「あれ？明日って学校休みだっけ？」

「A：そうだよ、お兄ちゃん：学校は休み。何かイベントがあるかも」

「B：はい、明日は登校日です：学校に行くとか何かいい事があるかもしれません」

「うーん……どっちにすべきか……」

「どっちも何も明日は普通に金曜だから授業あるだろ」

「えー」

「えーじゃねえよ。教師が学校休みたがるな」

「千雨はんったら、麟はんがおらな学校行きたくもないって駄々こねて」

「こねてねえよ」

「私もお兄ちゃんが居ないがっこうなぞ行きたくも無いぞ！！」

「「じらすなややこしい！！」」

「私もそうです」

「……私もそれでいいよ、もう」

「ええ落としどころどすなあ〜」

「っ!! っ!!!!」

べんべんとつきーを叩くちうたんを見て、ずっとこんな平穩が続くんだろうなと思っていたんだ。  
その頃はまだ、思っていた。

「二回目な気がするけど、やっぱり言ってみただけなんだ。」



なにも考えず適当にキーボード打ってたらこんな出ました。  
作業用BGMは石川さゆりと美空ひばりのメドレーです。

仕事の関係でお年寄りとカラオケに行く事になったのですが、棚から演歌のCDを引っ張り出して聴いてみたら予想外にハマリ直してしまつて天城越えを鼻ずさみながら書いています。

みなさん、お年寄り受けのいい演歌とかあつたら教えてください。

しかし、山口百恵やらかぐや姫やらあみんやらと、21歳らしいCDつてのが極端に少ないですね。

水樹奈々のScarlet KnightのCDの横に近藤奈々のつがざくらがあるのには友人も戦慄していました。

ともあれ、なんとか弟子入りっぽいものは書けたので次からの修行はかなりさらつと書くつもりです。

では、今回もありがとございました。

084 世界最速、セクハラはセクシャルハラオウンの略ではない。(前書き)

でもストライカーズの友人の嫁はセクシャル。

084 世界最速、セクハラはセクシャルハラオウンの略ではない。

「あー、授業めどいわー。お前ら別に俺が教えなくても出来る子だろ？俺信じてるもん、お前らのこと。つつかAクラスの英語担当ネギ先生だろ。どこ行ったんだよあのゲロカス」

「学園長に呼ばれてました」

「マジかよあのじじい。授業中に呼ぶなっつ。今月の俺の給料1割り増しにしと」

「何権乱用なんだソレ」

「俺様特権活用」

「じゃあこの単語の発音だが……あこりん」

「え！？う、ウチ？んーと、あーすほーる？」

「声が小さいよ！もっと大きい声で！」

「……あーすほーる！」

「ぜんっぜん気持ち伝わってこない！もう1回！」

「アースホール!!」

「違う!!」

「えー、正解何なん?」

「アスホール。ルは気持ち分発音。アツソーウくらいの気持ちでアスホール」

「おい、中学生に何教えてるんだよ先生!!」

「え?ちうたんわかるの?」

「ネットゲームでしか聞かねえような単語を」

「結構使うけどな」

「使っな!!」

「ねえ千雨ちゃん、どついう意味なの?」

「私にきくな!!」

「おいコラじじい!!」

扉を蹴り開けて突入する。  
何故なら天才だから。

「そんな雑な二段論法聞いたこと無いわい!!」

「どーでもいいんだよオ!!!!!!てめえ何ウチの担任に公式ボイ  
コットさせてんだよクソが! おかげで俺が全クラスの英語やる羽  
目になるわズボンの股のところ破れるわで散々だわ!!」

「いやの、図書館島の最深部への行き方をのう……」

「ソレ本当に授業中にしなきゃいけないかったの?」

「う、うむ。いけなかったのじゃ」

「じゃあしゃーねーか。あ、今月の給料一割り増しな」

「ぐっ、ま、マジか?」

「折衷案を聞こう」

「面倒じゃから一割り増しで」

「」

「せめて何か言わんか!!」

「」

職員室戻ろう。

「あ、居たです！ せんせー！」

「おい、先生、呼んでるぞ」

「いや、麟先生しか居ないです」

「人違いじゃなかつかと思ふ心ありけり」

「中途半端な古語ですね」

「で、何だよ」

「修学旅行の時に確信しましたが、先生は……魔法使い、ですね？」

「え？うん。そうだけど。それよりさんぽ部ののぼり作ったんだよ。見てみて。逆からみると『ちんぽ部』としか読めない。日本語の、ふっしぎー」

「いや、それはさすがにさんぽ部の面々も嫌がるかと……」

「あ、そう？ あ、甲賀忍法帖！！」

「甲賀？忍法？さて、何の話でござるかな？」

「さんぽ部ののぼり作ったからあげる」

「おお、かたじけないでござる」

「じゃねー」

「あいあい」

「じゃあ、ゆえもばいばい」

「あ、はい。失礼するで……いや、しないですよ!？」

「え?まだ何かあったの?」

「だ、だって先生魔法使いなんですよね!？」

「そうだったってんだろ。で、なんだよ」

「そんなあつさり言ってもいいんですか?」

「え?そんだけ?良いだろ。別に隠してないし。

あ、ネギー!」

「あ、師匠!何ですか?」

「魔法つて一般人に言ったらまずいの?」

「し、師匠、オコジヨにされちゃいますよ!!!」

「まずかったらしいぜ」

「らしいって……ネギ先生も魔法使いだっただですか」

「やっっちゃったZE」

「ど、どどどつするんですか!？」

「うるたえるな。為せば成る。そんな事より、たかだかメセンブリアのアホ魔法使い、略して阿呆使い如きに俺がどうこうされる訳も無かるう。むしろオコジョになって女どもに愛でられる生活も悪くないと思ったりもした」

「なんてアホなんですか……」

「アホだなんてとんでもない。バレたから開き直っちゃいますけど、隣さんはとても凄い人なんですよ。魔法世界最恐と言われるエヴァンジェリンさんの兄にして、そのエヴァンジェリンさんの何十倍も強い、生きる伝説なんですから!」

「ね、ネギ君、さすがに天下の往来でその話はまずいぞ」

「あーっ!タカミチ!」

「高畑先生……」

「アッー!…タカミチィ!…アッー!…」

「……。まあ知ってしまったものはしかたないか。あんまり広めないでくれよ」

「わかったな。ホラ行け。シッシ!」

「うっ……」



「伝説の魔法使い……ですか」

「あがめよ」

「すみません、とてもそんな気分じゃないです」

「あ、そう？」

「魔法使いの事はのどかと話しました。なぜ魔法使いの事を秘密にしなければならぬのか……今の先生の反応からしても全くわかりませんが、まず会話から察するに、エヴァンジェリンさんも明らかに過ぎるくらい魔法使いですね」

「え？ごめん、聞いてなかった。何？」

「……わざと話を逸らそうとしているのですか？」

「いや、さつまいもって分厚く切れば切るほど不味くなるんだけど、コレって要するにさつまいもが不味いって事でいいんだよね？」

「私は結構さつまいもが好きなんで、その質問に的確に答える事は恐らく不可能ですがそれは、隣先生がさつまいもが嫌いという事じゃないでしょうか」

「心当たりが無い訳じゃない」

「それはそうと、何で今まで気にもしなかったのかわかりませんが、あの巨大な世界樹や図書館島下の動く石像、更にはある程度不自然な事でも自然に溶け込んでしまう土壌……これらも含め、ひよつとしたらこの学園はあなた達魔法使いが作ったと考えれば、非常に納得がいくのです」

「へー」

「い、いや、へーって」

「ふん、中々面白い推察だな」

「エヴァンジェリンさん！」

なんか忙しそうだからこっそりパンツのぞいとう。具体的にと、何故か肩幅くらいまで開いてる足の間に寝転がって下から覗こう。

「紐パン大使！」

「な、何で知って……ひゃわあ!? な、ななな何でそんな事してるですか!?!」

「乙女のスカートには秘密がいっぱい」

「で、その事を知ってどうしようと言っただ、綾瀬夕映?」

「いつまで覗いてるですか!?!というか覗きなんですかそれは!?!? そんな豪快に下に潜り込まないでほしいです!?!」

「俺はゆえが紐パンである事を知り、更なる高みへ臨むつもりだ。何で紐パンなの？」

「ど、どうでもいいでしょうー!」

「それもそうだ」

「もう、お兄ちゃん、私のカリスマタイムもって行かないでよ!」

「すまぬ……すまぬ……」

「何なんですか、この状況……」

「仕切りなおしたZ E」

「その事を知ってどうしようと言っただ？」

「私はただ知識が欲しいんです。知識を得る為には実践が一番です」

「ノーレッジの称号をくれてやるっ」

「少し嬉しいです。ありがとうございます」

「とりあえず聞いては見たけどどうする？魔法教える？」

「良からう。この俺様自ら教えてくれよう」

「本当ですか！ありがとうございます！！」

「ただし楽な事ではないZ E。わかってるんだZ E？」

「気に入ったですか、ソレ」

「気に入っちゃったんだZ E」

「と言う訳で、今日からゆえも参加することになった」

「結局そうなったんですね」

「これにあたり、ネギと保護者の方はまた走り回っておいで。ただし、今日は倉庫にあるバイクから自分で選んでね」

「はい」

「誰が保護者よー！」

「はよ行けやクソボケ！ さて、ゆえよ、着替えてきたな」

「はあ、まあ着替えましたが、これと魔法にいったいどんな関係が？」

「どんな関係つて、そりゃアンタ、箒とか乗るやる？で、箒乗った時に速度に耐えれなかったり「おまたこすれて変な気持ちなのお」とか、そんなんなったら大変やん」

「そ、そ、そんな事いう教師が居ることの方がた、たた大変です！」

「は？何がよ？ まあいいや。そうならないように特訓するんだから。実際魔法つてそんな遅い動きな訳じゃないから動体視力は要るんだよ。ちよつと必死になつたくらいで魔法の矢が見えるかつつの俺は見えただけだな」

「何て無茶な……」

「という訳で、バイクに乗ってもらいます。

あ、おーい、ネギ！！それ無茶苦茶速いから気をつけるよ！！」

「はーい！」

「じゃあ乗り方だけど、手取り乳繰り教えてやるっ」

「見事なクズっぷりですね。よろしくです」



「え？もつと速く！？欲張りさんめ！！」

「パアアン！！パアン！！パアアアアアアアアア！！！！」

「と、止めて！止めてくださいです！！」

「うん！！」

必殺ジャックナイフ

/

このくらいの角度で停止する。

「お、降ろして、降ろしてくださいです」

「うう」

ガシユンと後輪を地面につける。

賀春で思い出したけど、もう年賀状の季節ですね。

俺は出す相手がいません。

「うう、ひ、ひどいです」

「このくらいで根を上げるようじゃ箒には乗れんぞ。ま、ウソだけ  
ど」

「そんなウソいらないます！！」

「箒に乗る時も防具はつけてほしいなって」

「こんな怖い思いしたら装備しないわけないでしょ!!」

「……その言葉が聞きたかった」

「先生！」

そりゃ違う人だ。





085 世界最速「おしっこペロペロする話だから気をつける！」（前書き）

いろんな人の小説読んでたら妙な電波をキャッチしたのでそっちに手をつけていました。

まだ何に手をつけていたかは話せませんが、そのうち発表します。

「も、もうダメ……もるです……」

「うわぁぁぁー……！」

草葉の陰からこんにちは。りんです。  
大変です。

ゆえがもるらしいです。

「こ、これどうやって脱ぐですか……」

「背中ofチャックだ！」

「こ、この際仕方ない。脱がせてくださいです」

「うん。転移」

「ひゃ！寒……あ……」

おしよんしよんタイムだZE

「い、いや、見ないでくださいです……」

「あばあばば、転移」

とりあえず風呂場に非難するぜ！

「ぐすっ、ひぐっ……滑稽ですよ。私が紐パンを穿いているのはトイレが近いからなんです。パンツを穿いてるとおしっこもできないんです。だからすぐに脱げる紐パンを穿いていたですよ。さあ、笑ってください！」

「うふふ」

「笑わないでください！何がおかしいですか！  
うう、うわああああ……」

どういふ事なの

「落ち着きたまえ。急いで仕事を仕損じるぞ」

「もう仕損じた後ですよ。人に……しかも先生に漏らしてるところを見られるなんて。」

こんな女なんて誰も好きにならないです。もう私の人生も終わったようなもんです」

「すっげえ興奮した」

「……は？」

「ゆえが漏らしてるの見てオラすっげえ興奮したぞ」

「そ、そんなウソ要らないです！人前で粗相する小汚い女なんです  
！！」

「ハア！？小汚くねえわ！舐めるぞ！！」

「ええどうぞ！本当に舐めれるなら舐めてみればいいです！！」

っしゃああああああ！！！！！！

「ペロ……これは、テトラクロロジベンゾパラジオキシン！？ペロ  
ペロペロペロペロｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「ひゃあああああ！？な、なぜ青酸カリとして幅広い世代に知ら  
れるシアン化カリウムの数万倍の致死性を持つ最凶のダイオキシン  
類の名前を言いながら舐めるですか！？」

「うわあ、ゆえのおしょんしょんあつたかいナリい……」

「さ、最悪です！人として最低です！！」

「まさかそんな褒められるとは思ってなかったの。あれ？昨日『ハ  
イエンスメントコーラ・無炭酸』飲んだ？」

「死んでください！！！！」

「そんな事より皆さん見てください！！ボクはさっきまで蒸し暑い  
ライディング用革ツナギを着ていた上に今は下着しか着ていない少  
女のおしっこを舐めているんです！！蒸れた少女臭がたまらんち  
ｗｗｗｗｗｗ」

「お、お嫁にいけないです！！」

「っしゃ新シラナミゲットオオオオオオオ！！！！」

「お背中流しに来ました」

「おっす茶々丸」

「ひゃわああああ！?????な、な、な、なんで!?!」

「私も夕映さんのお小水をペロペロしに着ました」

「さ、サイテーの一家です!!」

あ、パン一で走って逃げた。

そのまま魔方陣の上乗って出て行った。  
もうパン一で一日経ってたんか。

「おっすゆえー」

「話しかけないでください!!」

「ウワアアアアアアアアン!!」

「ゆえ、麟先生泣いて行っちゃったよ。何かあったの?」

「それが……」



あの場には茶々丸さんも来てました。  
それに、わざわざ密室に連れて行ったのがタチ悪いです。

あれ？でもあの時茶々丸さん、着替えを持ってたような……

「ゆえつちー」

「寄らないでくださいー！」

「おべんでべるんべろぼろつえあいおつえあいおー！」

「あれは最早泣いてると言っているのかしら？」

「どうでもいいですー！！あんなへん……」

「ん？あんな何？」

「な、な、なんでもないですー！！」

「……」



「何読んでんのー？」

「これはあー……何でもいいでしょう」

「うっ……ぐすっ……ズビビズバボビビッシュ！！（鼻をすする音）

「ふんー！！」

何で話しかけるですか？

ずっとあんな態度で対応してるのに！

それに、すぐに言いふらされると思ったのに誰も気にした風も無いです。

あの場にいた茶々丸さんでさえ……。

いや、茶々丸さんはロボットっぽいのでまだ良いとしましょう。

でもあの時、他に誰か……

あ、明日菜さんとネギ先生！？

確かあのサーキットではあの二人も居たはずです！！

うう、顔合わせづらいです……

「あ、夕映ちゃん」

「ひゃわい！？あ、あ、明日菜サン！？」

「な、何よ？」

「い、いえ、どうしたですか？」

「？ いや、もう4日ほどあそこ来てないからどうしたのかな

って思つて」

「き、聞いてないんですか？」

「え？もしかしてまだ体調悪いの？じゃあこれない訳ね」

体調が悪い……？

「誰に聞いたですか？」

「え？<sup>アイツ</sup>麟先生だけど、どうして？」

「い、いえ、なんでもないです……」

「ふうん、お大事にね」

言つてない？

明日菜さんはバカだから嘘を隠すのは苦手です……

じゃああの時茶々丸さんは場を和ませようと冗談を？

いや、しかし麟先生は本当にな、な、舐めていたです！

でも飲尿研究法という民間療法も……しかしそれだと……

休日だから先生には会わずに済むです。

「ゆえゆえ、どーしたの？」

「あ、い、いえ、何でもないです！」

「最近変だよー？」

「うぐうぐ……」

これというのも、麟先生があんな事するから……！！

今日麟先生は大阪に出かけるらしく、休みです。  
何故昨日のうちに行かなかったんでしょうか。  
まあ、声をかけられなくて清々します！

「ゆえ、どうしたの？機嫌わるそうだけど……」

「別に悪くないです！」

「そ、そう？」

「あ、ゆえー。本読んで歩いてると危ないよー」

「あ、すいませんのど……麟先生」

「何読んでるの？」

「ハア……。ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの『精神現象学』です」

また飽きもせず声をかけてきて……  
少しからかってやるです。

「思想家の？」

「し、知ってるですか!？」

「有名人だからな。ドイツ観念論哲学だけじゃなく普通に哲学の話でも出るレベル」

「今まで会った人の中で知ってる人は居ませんでした」

まさか、見るからにアホっぽい麟先生が知っているとは思っていませんでした。

「哲学とか根暗な中二病疾患の男子高校生でも興味ない分野だろ。そら女子中学生が知る訳無いわ」

「私がいげつなく根暗で手遅れなレベルの中二病患者だと?」

「いや。綾瀬泰造って言ったら超有名やん。『眼鏡』『煙草』『東

大』で誰連想するって言ったら綾瀬泰造やん」

「ほ、本当ですか!？」

「うん。『メガネ』と『単車』を入れ替えたら俺になるそう。東大紛争の時の用心棒についてたし」

「ほ、他には!？先生から見てどんな人でしたか!？」

「温和でおおらかなひねくれ者って感じかな。……ああ、なんか手紙によく『愛を知らぬ者が本当の強さを……』なんだっけ？」

「『愛を知らぬものが本当の強さを手にすることは永遠にないだろう』……おじい様の座右の銘です」

「ソレだ。なんかGP優勝した時に送ってきた手紙にも書いてあったわ」

「そうなんですか。もう少し詳しく聞いても？」

「ああ。なんか『世界一気持ちのいい変人』とか言われてんきつぼぢいいいい!！」

「じゃあ、おじい様の言ってた『人間特急』というのは」

「時間がないとき便利に使われてた悲しい男やね」

「他にはどんな事があつたですか？」

「アレは学生運動も終盤の時だけ……」

「そ、それでその後どうなったですか!？」

「『思想も思考も人により違う。お前の見てる赤は俺から見たら青だ』とか言うから、『じゃあお前も青を赤と認識してるならそこに見え方の違いがあっても考え方の違いは無い』って」

「ですが、その違いがある可能性を認識する事によって考え方にも違いが生じてくるのでは？」

「同じ事言ってたわ。だから『何色を赤と見ようが、それがそいつの赤である限り、緑も青も赤なんだよ』って言って」

「また思考放棄ですか」

「頭はそれほどいい方じゃないんだよ。で、あんま覚えてないけど信号の話になった」

「青というか緑というかですか？」

「いや、左から青・黄・赤に並んでるように見えて、実は全然違う色じゃねえのかって話。違っても感じ方も役目も一緒だからもういいじゃんって言ったら良くないらしい」

「考えるのをやめたら哲学は終わります」

「だから次回持越しになったんだけど、次回は無しか。残念だった  
り、残念じゃなかったりする」

「おじい様は帰らぬ人となりましたから……」

「宗教的な意図はないけど、今頃転生して楽しくやってるわ」

「お心遣い、ありがとうございます」

「そういうアレは無いけどな」

「話してたら元気になったです」

「さよで。あ、職員会議すっぱかしてた。んじゃ行くわ」

「はい、また」

「ん。あ、そうそう、セパレートタイプのツナギ買ったからまた来  
いよ〜」

セパレート？分離されたツナギ？

ツナギって言うところの間の……

っ！！

わ、私とした事が、おじい様の話に夢中で完全に忘れてたです！！  
でも、気にかけていてくれたですか……

考えれば、麟先生は600年を生きる大魔法使い。

あまりに長い時を生きただために、考え方もスレてしまったのかもし  
れません。

でも、純粹に好意で取ってくれた行動だとしたら、私はなんて失礼な態度を取っていたのでしょうか……。  
思想も思考も人によって違う……。ですか。

「のどか……」

「どーしたの？」

「私は……麟先生が好きなんですか？」

「ブーッ!!」

「な、な、何で毒霧攻撃を!？」

「も、もしかして、ここ一週間ほどゆえの調子がおかしかったのも!？」

「はい。実は、麟先生の事を考えていたのです……」

顔を拭きながら言うべきなんですか……。  
いえ、のどかは親友です。恥ずかしい話ではありますがここは意を決して言うべきですね。



「実は……」

私はあの日の事、そして今日までの事や思ったことをのどかに話しました。

のどかは、終始啞然としていましたが。

そりゃ、私だっておかしいと思います。

何でおしっこ舐められてそこから好きになったのか。いや、まだ好きと決まった訳ではないのですが！

「な、なんかすごいね……」

「我が事ながら、私もそう思ってます」

「でも、ゆえが隣せんせーの事好きなんだつたら私も応援するよ」

「その気持ちはありがたいのですが、私もまだ隣先生のが好きかどうかわかっていないんです」

「そっなの？」

「今の話を聞いていて、どう思ったですか？」

「私は……いいなあって思ったよ。私はネギ先生に話しかける勇気もないし、先生から話しかけてくれることも滅多に無いもん」

「そうですね……。って、そうではなくて、私が隣先生の事を好きなのかどうかという話ですよー！」

「え？違うの？」

「わからないんです。本当に好きなのか」

「でも、その……お、お、お……こを、な、舐められても嫌いじゃないなら、好きなんじゃないかなあ」

「そこを伏せるなです」

「へ？ あ、あ、いや、そういう事じゃなくてね、その、うまく言えないけど、そんな事をされても嫌いにならないんだったら、やっぱり好きなんだよ。それに、さっきの麟先生の事を話してる時のゆえの顔って、なんていうか、幸せそうだったし」

「そ、そんな幸せそうな訳ないじゃないですか！ 何を根拠に！！」

「こ、根拠って」

「……すいません、取り乱しました。そうですね、まだ結果を望むのは早すぎました。もう少し様子を見ましょう」

「でも私、麟先生って素敵だと思うよ。妹にしたいもん」

「見事にハーレム囲ってる男ですけどね」

「そ、それはホラ、甲斐性があるって事で……って何で私がフオロしてるのー」

「ふふ、ありがとうございます、のどか。まだこの気持ちはよくわかりませんが、少し前に進めそうです。のどかも頑張るですよ」

「え！？わ、わたしはまだいいよお」

のどかは女の私から見ても魅力的なので、ネギ先生ももう少ししたら放っておかなくなるでしょう。

私も、久々に先生の家に行ってみようと思ったです。

幼児を困ってる主人公が

「俺は口リじゃねえ！」

と言っのを読むたび

「んなもん見りゃわかるわ」

と思う紅の豚野郎です。

こういさんが遅れてたけお、いろんあ人のしょうせちをよんでま  
s  
t  
s

<http://ncode.syosetu.com/n49570/>

こんな面白い小説を作りたいので僕は読みますごめんなさい

他の人も早く読むべき死にたくないなら読むべき

ごめんなさいリアル時間ロストしたくないんです

ここ数日間は色々してました。

アルトネリコ3のクソフレ様等身大タオルが届いたり、幼な妻等身大タオルタオルが届いたり、近くの店でルカフィギュアが売っていただけお金が足りなかったり、演歌の練習したり、ココナの等身大タオルが届いたり、あの夢に手が届かなかったり、ティリアの等身大タオルが届いたり、アカネの等身大タオルは注文してなかったり。

ちなみに、夕映のおじいちゃんの話ですが、『アンサイクロペディア』から引っ張ってきました。

妙に信憑性を持たせる書き方で戦慄したので、ぜひ皆様も『綾瀬泰造』でググってみてください。結構上のほうに來ます。

では、今回もありがとうございました。

086 世界最速もバイクから落ちる。(前書き)

転倒：転がれ

スリップ：滑れ

追突：祈れ

086 世界最速もバイクから落ちる。

「おいすーゆえー」

「まつ、ママ、またお世話になるですー!」

「何急に話しかけてきてるわけ？」

「え……あ……そうですね、すみません。舞い上がったみたい  
です」

「おい綾瀬夕映、一々気にするな。お兄ちゃんの発作だ。ほら見ろ、  
うれしそうだろ」

「珍しく無表情です」

「うれしいです」

「本人もこう言ってる」

「言ってます」

「じゃあよろしくお願いするです」

「何急に話しかけてきてるわけ？」

「おい、その辺にしとけよ、先生」

「hai!」

「今日は私も走る。で、お前用の着替えだが、コレだ」

「なるほど。これがセパレートタイプのツナギですか。ですが、セパレートの名の通り分離されている時点で繋がっていないのでツナギという表現は間違っているのではないかと思います」

「別に表現方法としてそう言ってるだけで、実際はバンクセンサー付きレザーパンツとパッド入りレザージャケットなんだがな」

「なるほど」

「ちなみに今週の月曜お兄ちゃんが休んでいたのは、大阪までソレを受け取りに行ったからだ」

「受け取り？」

「配送だと日が遅れるから直接受け取りに行ってた。ちなみに、オーダーメイド品だ。」

大阪府大東市の大阪産 大学裏に本店を構えるバイクショップ。ウェアもパーツも本体も揃う『RSタイチ』をよろしく」

「な、何を言っているのかはわかりませんがオーダーメイドという事は結構お金もかかったんでしょっか」

「さあな。金なら幾らでもある。でも品質は一級品だ」

「そうですか……」

ツナギを見てみると、黒の基本色に赤と黄色の線が入ったデザインです。

「このデザインはどこかで見た事があるです……」

「ふん、わかるか。お兄ちゃんのバイクやツナギと同じデザインだ。そこにもあるだろ。セパレートじゃない市販のツナギはSHIRANAMI REPLICIAとして一着25万で売られているぞ」

「に、にじゅうごまん!？」

「まあ、そこそこのツナギだとそんなもんだろ。そこらに掛けてあるツナギもそんなもんだ。ホラ、さっさと着替える。あんまりお兄ちゃんを待たせるな」

「は、はいです!」



「じゃあ今日もコースを流すけど、何かあったら道の脇に停まっ  
いて。路から出れそうになかったら発炎筒をカウルの裏につけたか  
らそれに火つけて。それすら無理そうなら祈れ」

「「「はい!」「」」

「行け」

おちんちんびろろーん……

「俺は何を考えているんだろっ……宇宙の真理ですね。  
おい茶々丸」

「はい、ピット要員の茶々丸です」

「何かあったらインカムで連絡。俺も走る」

「いつてらっしやいませ、隣様」

「うむ」

倉庫から高速巡回仕様、規制ガン無視のGSX-1300R、つま  
り隼を引っ張り出す。

1分ほど巡回走行しているとNSR80に乗った夕映が居た。

「ヤエー!」

とかほざきながらピースサイン。

さらにしばらく巡回走行するも、NS250Rに乗ったネギ・あすにゃんペアが見えない。  
見えないまま一周しちゃった。

「茶々丸、ネギ・あすにゃんとの距離は？」

『45秒です』

「エヴァは？」

『1:36秒です』

「オーライ」

ちよつと本気出す。

出しすぎた。  
5分で全員追い抜いた。(綺麗な5・7・5だと感心するがどこもおかしくないな)

まあバイクの差はデカいな。

ピットで休憩しているとみんな入ってきた。

「止まった瞬間暑いー」

「それが青春よ……」

「とりあえず、ゆえはもう少し好きに走つといて。」

「はいです」

「ネギとあすにゃんはこっち来い」

「「はい」」

「お前ら二人は思ってたよりだいぶ筋がいい。ぶっちゃけ天才だ」

「ええ！？そ、そうなんですか？」

「ホントに!？」

「ああ。間違いなく天才。魔法使いやめてプロレーサーにならね？  
ああ、そう。ならない。まあ考えといて。  
それはそうと、お前らまだこけた事ないよね」

「はい!」

「無いわね」

「じゃあこけてもらおう」

「何でこけなきゃならないのよ？」

「何でって、お前これから移動手段としても使う可能性があるのに  
こけた事無かったらいざこけた時大怪我すんぞ」

「確かに……」

「つつーわけでちょっと派手にこけるから見といて」

ピットの入り口まで戻って思いつきり加速する。で、出口あたりで急転回。

グリップが死んでタイヤが空転するけど、それを制御せずに滑りっぱなしにさせとく。

急にグリップが戻って逆側に吹っ飛ばされる。これをハイサイドといいます。

200km/hほど出してたからバイクは吹っ飛んで、俺は軽いながらもっと吹っ飛ばす。

空中で体を丸めてそのまま着地。

20mくらい転がって止まる。

「と、こんな風に」

「だ、大丈夫ですか!？」

「かなり吹っ飛んでたけど」

「これは最強最弱関係なくダメージを受けない転がり方だから。ちやんと見てた?」

「いえ、バイクの挙動ばかり気になって……」

「ヴォケツ!こけかた見ろつつってんだろーが」

「うう………すみません」

「まあいいわ。ヘルメットかぶってグローブつけてから体丸めて」  
「はい、こうですか？」

ネギ形態変化 モード：アルマジロ に変形する。  
そのままネギを持ち上げる。

「え！？ちょ、ちょ、師匠！？」

「いいから。絶対その体勢を崩すなよ」

「ちょ、アンタ何するつもりよ！？」

「うるせえ！！これでもくらえ！！」

ネギをあすにやんの横に時速120kmくらいで投げる。  
ネギはそのまま転がって20mほどしたら止まった。

「ねえ、ネギ動かないんだけど大丈夫よね」

「いけんだろ。もういいぞー！」

「し、死ぬかと思いました！！」

立ち上がって言うネギ。

「で、どっか痛い？」

「体中が……あれ？痛くない？」

「ホント？大丈夫なの？」

「お母さん、過保護はいいんですけどお子さんもこう言ってる事ですから」

「だれがお母さんよ！！」

ネギは体を動かして不調なところは無いか確認してる。

「今のこけかただと体に行くダメージはかなり少なくなる。と言っても、その装備があつて初めての話だから。Tシャツとかでも同じ防御力があると思つたら大間違いだから。じゃあ次、あすにゃん」

「ええ！？わ、私はいいわよ……」

「良くない。嫌ならそのまま投げるけど」

「わ、わかつたわよ！」

「神楽坂アルマジロ、いつきまーす！  
そおい！！」

「ぐるぐるろろ……」

「痛くない！！」

「だからそう言ってるだろーが！！！じゃあ次はスリップした時の対処法な」

氷の矢で地面を凍らせてその上を走る。  
前輪も後輪もグリップが無くなってそのまま車体が落ち込むから体を丸めてそのまま横向きに滑る。  
しばらくして止まった。

止まったんだぜ！

「こんな風に、スリップの時は転がるうとせずに滑るようにしなさい」

「はい！」

「とは言っても、今お前らが痛くなかったのは装備と俺のサポートがあったからこそであって、いきなりできるなんて上手い話あるわけないから肝にめいじておいてクダサーイ！」

「はい！」

「じゃあもう18回走ってきて。いつもより20km/h増しで」

「ええ！？そんな曲がれないわよ！」

「だからそれが目的だつってんだろーが！！こけて首折れても死んでなかったら治すから行ってこい！！」

「はい！」

「ホントに治すんでしょうね？」

「じゃあ治さないから行ってこい。な？」

「な？ じゃないわよ！！治しなさいよね！！」

ふはは、アホどもめ。いつの間にか走る走らないから治す治さないの話に変わってる事に気付きもしないとは。  
うふはは！

「ああー、100回はこけましたー」

「ちなみに二人のこけた回数はネギが60回ですにゃんが72回な」

「うぐっ！」

「で、即死レベルの怪我は二人とも0回。まあ単独でそんな怪我しようと思ってもできないけど。ほったらかしといたら死ぬレベルの重体がネギ2回、あすにゃん4回。重傷は二人とも1回。全治2週間以内の軽傷は30回ほど。まあだいたい半分くらいは上手く転倒できてるわ。

ちなみに、重要なのはここからだけど、20km/h以下でコーナ



リングした回数、ネギ16回、あずにゃん14回。死ぬ」

「し、死ねって」

「だってお前らアレだよ。いつもより20km/h速く走れつつつてんのに20km/h以下って、お前らマイナスキロメートル毎時で転回してんのか。ビビり杉だっつ」

「そんなの回れる訳無いじゃない!!」

「お前ら二人とも16km/hまで落としてた14コーナー、あこ60kmでも余裕で回れるから。ちよつとバイク寄せ。茶々丸！モニター！スピードメータータコメーター付き！」

『はい、このまま出番なしかと思っていました。各計器異常なしです。カメラ位置は？』

「俯瞰で」

『はい。俯瞰視点に設定完了。いつでも大丈夫です』

「なんかどんどん茶々丸さんが何でも出来るわね……」

「見とけよ。コーナーのRもそうだけど、角度も頭の中に入れて走っておけば最強。まあお前らにここまでなれとは言わないけど、それなりに走ってもらわないとね」

で、出発。

ちなみにゆえはピットに誘導しておいた。

「と、まあコーナリングごとに時速60km/hぴったりで一々カメラにピースしながら走ってたけど、別に危なくも無い挙動だっただろ」

「凄いです、師匠!! やっぱり映像で見るより生で見たほうがずっと迫力があります!」

「まあカメラ越しだけだな。要するに、ちゃんと考えて走ったらあのくらい余裕なのよ。まあ今日はもついいや。明日からがんばれ。ゆえ、道交法は?」

「ほぼ完璧です」

「じゃあ明日の朝から夕方まで(ダイオラマタイムだから外では一瞬の時間)は座学な」

「はい!」

「ええー!」

「ええーじゃねえんだよ! じじいに言ってお前らも学園都市内だったらバイク移動許可させてやるうにも法律わかってねえとそんな事もできねえの。おめえ新聞配達、バイクだったら超効率化できるか

ら。以上、異論は受け付けない、晩飯！」

「「「はーい」「」」

翌日、ネギは天才だからすぐに覚えただけどあすにゃんは1週間くらいかかる。

ゆえは変態だからもう覚えてた。大したもんだぜ……。

086 世界最速もバイクから落ちる。(後書き)

転ける話でした。

さて、バイクに乗る人、特にサーキットなんか行ったりジムカーナする人だと、かなりこけ慣れていると思います。

かくいう僕ももう冗談抜きで4桁はこけてると思います。

でも、やはり大怪我するのは一般道で。

皆さんも気をつけてください。僕はもう一個無くしたら透析です。

友人達には「お前なら血管にタバコのフィルターつけといたらいける」という根拠の無い不死身伝説を押し付けられています。

それはそうと、前はつちやけすぎたので今回はかなりおとなしい話になってしまいました。

不本意です。

次は何書こうかな。

そろそろデートか。

では、今回もありがとございました。

豚野郎でした。

087 みなさんのおかげで1000コメ到達しました！（前書き）

記念すべき1000件目のコメントはもみじさんです。

今日はそんなもみじさんのリクエストを極限まで曲解して書きました。

オチが弱いなあ

087 みなさんのおかげで1000コメ到達しました！

Shirananami-Diorama 08

オンロード3・600kmとオフロード2・055kmの二つのステージが合わさって最強に見えるコース。

オンロードの方はほとんどストレートだから難易度ゼロだけどオフロードの方は山というか崖の上を走るタイプのDMなステージだ。ちなみにガイドロープもないから落ちたら終わり。

「ここをはしってもらいまうまう」

「む、むむ無理ですよー!!」

「そ、そうよ!ここ、幅2mくらいしか無いじゃない!!」

「いや、少なく見積もっても3mはあるから。ま、実際走れるのは1mほどだけ」

ちなみに。この坂を下ってそのままあつちに抜ける。で、その後右に少し平らな所あんだろ?あそこが終点な」

「無理です!!無理です!!!!」

「いいか、ネギ。やるかからないかじゃない。やれ」

「で、でM」やれ」

「ちょ、わ、私はいいのよね?」

「何で一人だけ助かる話になってんだよ。やれよ。エヴァ、手本」

「うん、お兄ちゃん！」

エヴァがCR80に跨ってエンジンをかける。

「いいか。ここは下り坂だから2速発進な」

エヴァがスタートして崖を渡る。その間も加速してる。

「で、ここからあの間で4速まで上げる。そのまま前に進もうとする慣性をつかって壁を走ってあっちがわまで渡りきる。おーけー？」

あっちがわでエヴァが手を振ってる。

「おーけーじゃないわよ！！できる訳ないじゃない！」

「あつそ。じゃああすにゃんはいいよ。で、ネギはどーする？」

「えー！？あ、あう……や、やりますー！！」

「ええ！？わ、私もやるわよー！！」

「その言葉が聞きたかった」

「先生！」

「ま、落ちそうになったら助けてあげるから。心置きなく落ちろ」

「落ちませんよ！」

「じゃあ行つて鯉」

すかさず念話で茶々丸に連絡。

『撮れてる？』

『腰の引けてる所からバツチリです』

「行きますよ！」

「おう」

「それじゃあスタートします」

「おお」

「走りま」はよいけや！」「

「うう」

やっとエンジンを始動させるチキンマン。

「スピード落としたら死ぬからな」

「はいいいいいい！」

「ほれ、池」

めっちゃアクセルひねったせいで若干ケツがスライドしてるけど難



なくクリアしやがった。  
ツマンネ。

「ほれ、ネギも普通に行けてたたる。行けよ」

「わ、わかってるわよ!!」

何だよこの謎のツンデレ具合は。  
神楽坂・アスナ・ラングレーか。

エンジンをかけて  
うわ、めっちゃ吹かしてる。

何の意味もあらへんのにめっちゃ吹かしてからの急にクラッチ離し  
たからバイク吹っ飛んでいったWWW  
さらばCR80WWW

くガシャーン

「……………」

「……………やめない?」

「……………従者(笑)」

「くうっ!もう一回!」

CRを指輪に戻してからもう一回出す。

「ほれ(笑)」

「見てなさいよー!!」

今回はスムーズに行つたけどお姉さん、そこは右に行くところであつて山登る所じゃない。

ああ、登りきつた。どんだけアホやねん。

「どつよー!!」

「そこちゃうわボケー!!」

「え？ あーっ!!」

『あつはつはつはWWW』

「念話越しに笑うなWWW」

「死ぬかと思いましたよー」

「生きてる証拠だ。有り難味を噛み締めろ」

「つてか何であんな事する必要があつたのよ？」

「さーて、次の撮影は茶々丸でいいかなー」

「はぐらかさないでよ！つてか撮影！？」

「え？何？聞いてなかった。そんな事より茶々丸？」

「はい、ストッピーでマスターと並走しようと思っています」

「もうそんな事できんのかよ」

「ええ。どんぶりを2mの高さまで両手に積んでハイヒールをはいた状態で足を引つ掛けられても転ばない（どんぶりは落ちる）オートバランスシステムが搭載されていますので」

「ねえ、そのすとっぴん？つて何よ？」

「ストッピーつてのはジャックナイフした状態で動く技術の事な。後輪を浮かせたままま走らせるの。かなり難しい。ちなみに牽引トラックと荷台の連結部分がVの字に折れ曲がるジャックナイフ現象とは何の関係も無い」

「……？」

「つつか見りゃわかんだろーがファツキン」

「お兄ちゃん、見ててねー」

「言われんでも穴あくまで見続けるっちゅーねん」

「行きます」

二人がNSRに乗って加速する。

同時に前ブレーキをかけて後輪を浮かせたままバイクを走らせた。

「おおっ!!!!」

「凄っ!!!!」

そのまま10mほど走って同時に前輪をロックさせる。  
で180度ターンしてからウィリーで戻ってきてジャックナイフで  
停まる。

「スゲー!!!角度がスゲー!!!

どこまでー

どこまで俺をー」

「「「魅了するんだーい?」「「「

「ところで隣様、さよさんは何をされるんですか?」

「え?」

「さよさん」「え?」

「さよさ」

「自分それ何変なカチューシャつけてんの？」

「これはカチューシャじゃなくて外部機器電波送受信用アンテナですよ」

「で何やったけ？」

「あーだから、さよさんは何を……麟様？麟さま？」

「え？」

「さよさんは何をするのか聞いてるんですよ」

「自分何で変なカチューシャそれつけてんの？」

「ですから、これはカチューシャじゃなくて外部機器電波送受信用アンテナですって」

「え？」

「外部機器……」

「さよー！さよ何すんのー？」

「タイムアタックです！」

「今のやりとり必要だったの？」

「長く生きるとつまらん事でも逆に面白くなってくるんだよ」

「少ししか生きてないので何でも面白いです」

「ああ、そう」

実はさよってかなりロードレースが速い。  
実はシラナミでは2番目に速い。

俺>さよ>エヴァ>茶々丸

でもロード以外ならエヴァの方が速い。

オンロードドリフト走行はこいつらにはまだ早いつて訳さ。

「後ろから撮影するのでさよはいつも通り走るがよろしい」

「はい」

「行け！走れ！！」

「はい！」

ちなみに車輛は二人ともHONDA RS500Rだ。  
むっちゃ速いで。

まあこれも滞りなく終了。

「さよめっちゃん速いな。」

正直プライベーターで表彰台乗るレベル。  
何でこんな速いねん」

「愛……ですかね」

「お兄ちゃんは何やるの？」

「何しよっかなあ」

「ひどいですー」

「何でも出来るからエクストリームフリーライディングでもしよう  
かな」

「何それ」

「SD-O」

しらなみだいおらま零とは

あのスケボーとかが走ってそつな市街地風の、謎の斜面とか明らか  
に無意味な手すりや階段とか意味不明な噴水に加え路面電が走って

るマジモンのジオラマ街だ。  
ワシが育てた。

「今日の俺は世紀のトリックスターだ！」

「お兄ちゃんカッコカワイイ宣言ー!!」

「目が離れすぎな気がする」

以下音声のみでお送りします。

「ま、まさかあの構えは!?!」

「隣様……あの技を!?!」

「で、出たアーー!!!リジェネレーション・オフ・スピンドー!!!」

「空中で華麗なターンを決めて真下に下ろす高等技術ですね……!!」

「いきなりあの技を出すなんて……お兄ちゃん本気なの!?!」

「まさかその返す刃でジャグリング・トラピーズを出すとは……!!  
隣様……恐ろしい子ー!!」

「手すりからのスライドを利用して路面電車に乗った!?!」



「アレが見れるというんですか……!!」

「そのまま電線の上を走って……インフィニティ・ロールだ!!」

「めっちゃ回ってる!!お兄ちゃんめっちゃ回ってるで!!」

「フィニッシュはウィリーサークルからの……」

「アレは伝説のストリングプレイスパイダーベイビー!!」

「これは歴史に残る名パフォーマンスでしたね……」

以上音声のみでお送りしました。

まさかバイクの上でヨーヨーやったらあんなに沸くとは思わなかった。

みなもBANDAIのハイパーヨーヨーをよろしく

「麟様、動画をYouTubeにアップロードしましたよ」

「ぱつちり二重で丸顔幼女にしか見えない俺に隙は無かった」

「フルフェイスでしたけどね」

「まさかそんな盲点があったとは！！」

「ふふふ、一週間後が楽しみですね」

「臨む所だあ……ハア……」

#### 一週間後

「お前らに集まってもらったのは他でもある」

「あるんですか」

「無い。」

先週、全員バイクで一見無意味に思えるかもしれない無茶をしてもらったのは記憶に新しいだろう」

「アレのせいでネギ三日ほど杖で飛べなかったらしいわよ」

「どうでもいい。」

それをごーぐるのようつーべにアップロードして、その再生数を競うという何の意味も無いことのお前らには無茶してもらったんだが」

「ちょ、何の意味も無かったんですか！？ 自分の恐怖に打ち勝つとか！！」

「え？何意味のわかんない事いつてんの？死ぬの？

で、当然のように俺の動画が一位になるのはわかってたから、俺の動画を覗いたお前らで一番の奴にKEIHINをと………景品をやるうという訳だ」

「何で言い直したの？」

「キャブみたいだからだろーが。

ちなみに俺の動画再生数は、えー120355。評価の高いコメントは

『コイツ白波麟だろ』

『バイク動画じゃなくね？ってかヨーヨー動画じゃん』

『CRAZY!!! XD』

ネームバリューの一人勝ちだ」

「別に威張る事でもないよね」

「では（俺を除いた）第1位！！はちょっと急ぎすぎだな。最ケツ！さよー！！」

「ええー！！そんなんですか！？」

「そうなのよ。」

あの凄さがパンピーには伝わらない。

ちなみに評価の高いコメント

『プロだろ』

『イタリアのロレンツォオートサイクルの者ですが、あなたをスカウトしたいです』

『どっこいっ』

こんな感じ」

「で、第二位！！と第一位、結局3組しかなかったね！

二位がエヴァ、茶々丸

一位がその他だ！」

「ちょっと、何で一位なのに余り物扱いなのよ！！」

「あんな死にそうになったのに……」

「黙れ小僧！！お前にサンが救えるか！！

エヴァと茶々丸の方のコメント

『これはジャックナイフじゃなくてストップピーですよ』

『NSRでウィリーとか正気じゃないな』

『SHE IS MY WIFE！！』

ちなみに一番下のコメントしたアメリカ人は、わざわざあっちまで

行ってOHANASHIしてきました」

「うわぁ」

「そいつのリアルワイフにもチクリました」

「流石麟様」

「で一位のお前ら

『かわいいそうに』

『彼らはこの後スタッフがおいしくいただきました』

『これ2年くらい前に流行ったよね。2年くらい前に見たわー』

と、こんな感じ。再生数はだいたい二万。

商品は俺の血液配合ドリンクだ」

「ええ！？」

「要らないわよ、そんなの！！」

「ハア！？じゃあ私が貰うぞ！！」

「待て待て、ネギよ。魔力は生まれつき鍛えよつの無いものだと言っているな」

「え？はい。そう教えられています」

「でも俺の血を飲んだら魔力が増えるとしたら？」

「ええ！？ほ、本当なんですか！？」

「ああ、本当だ。私もお兄ちゃんの血を飲んで魔力が元の100倍以上だ」

「という訳で、持っておいても損は無いぜ。売れば億はくだらない」

「お、億！？」

「いや、でもその話が本当ならそのくらいは……」

「いいから持つとけ。お兄ちゃんも尺が伸びすぎて困ってるんだよ」

「お前ら勝手にメタさえ」た奴の気持ち考えたことありますか？

マジでぶん殴りたくなるほどむかつくんで

止めてもらえませんかね・・・？

事前にメ多発げんされるとわかっていれば反抗も出来ませんが

わからない場合手の打ち様が遅れるんですわ？お？

人の意見に流される糞ばかりなので本人の意見が遅れると捏造で

好き放題叩かれまくられてマジで殺す。

ちよとSYレならんしよこれは・・・？メタはるげんは豚野郎に断つてやれよ。

これからはそれが出来ないやつが悪者でFA！それくらいも出来ない卑怯者はマジでかなぐり捨てンぞ？」

「うわ、今日一番の難文ね」

「これが普通にわかるようになればお前らも手遅れだ」

「私とマスターは完全に理解できます」

「何て言ってたんですか？」

「『おなかすいた』」

「今日は遅いからもう帰りなさいつつつてんだよ。」

ちなみに魔力が切れた時に飲むと、限界値は増えないけど魔力が回復するという素敵な特性もあるから24本あげよう」

「ええ！？こ、こんな貴重なものを！？あ、ありがとうございます  
！！」

「かまわん。じゃあな。気をつけて帰れよ。寮の前まで絶対に振り向くなよ」

「な、何ですか！？」

「」

「せめて何か言いなさいよ！！」

「絶対振り向くなよ」

「は、はひ、わかりました……」

「り、理由を言いなさいよ！！」

「……本当に言ってもいいのか？」

「じゃ、じゃあいいわよ。ネギ、はやく行きましょ！！」

「へ？ は、はい」

「じゃあねー」

「お休みなさい、アスナさん、ネギ先生」

「あ、は……」「振り向くな……」「はいいいい……」

走って帰って行きやがった。

振り向くなって言った理由？

何となく。

「ね、ねねねネギ……き、今日もいつしよの布団でいいわよ……」

「はい、あすなさん」

「仲ええなあー」



087 みなさんのおかげで1000コメ到達しました！（後書き）

HONDA RS500R（1986年型）

2st499cc

V型3気筒

125ps/11,000rpm

8.14kgm/11,000rpm

前後ディスクブレーキ

始動方式 - 押しがけ

499cc125馬力の化け物市販車。

なんと650万円。

NS500の市販型バイクでむっちゃ速いそうです。

僕なんか見た事ありません。

元モデルのNSは、かのフレディ・スペンサーも乗っていました。関係ない話ですが、後輩にHという野郎がいらっしやるのですが、そいつが「スペンサーっていくらくらいで買えますかね？」とか言ってくるので「年間契約2億も出しゃ、時代が時代ならいけたやろ」というとどうやら「スペーサー」と言っていたらしく、僕が聞き間違えた事をいرونな人に言っけて回るも、そもそもフレディ・スペンサーって誰よ？という冷やかな反応で返されたそうです。どうでもいいですね。

さて、今回の話、タイトルやまえがきでも説明した通りコメント100件達成記念に書いたものです。

その割にいつも何も代わり映えしない文章でしたね。

記念すべき100件目のコメントは『もみじ』さんに頂いたので、そのアイディアももみじさんにねだりました。

曰く

http://slot-r.com/game/dougascience.php?screen=metacafe&movieid=1049986/amazing|run|bike

これをリン・・・いや、ネギかアスナにやってもらいたい

との事でしたので二人にやらせてみたのですが、予想外に短く、かつ面白みもクソも無い文が書きあがってしまったので後ろに色々付け足した結果収集がなくなっただのもご愛嬌です。

携帯の人は断崖絶壁を走ってる様を思い浮かべてください。

さて、今までコメントについてはあとがきで何一つとして書いてきませんでしたが、みなさんから頂いているコメントにはいつも大きな勇気とほんの少しのシナモン、大匙一杯の砂糖と生姜の粉をロイヤルミルクティーに入れたものはチャイと呼ばれ、インドでは親しまれています。

もうすぐ初投稿から100話目ですね。

その時も何かしらいかした企画をしようと思っていなくも無いので、みなさんアイディアをください。

あと、歯医者に行っても折れない強靱な心もください。

ほっといてくれて言った歯石を無理やり引っぺがされたせいで歯の裏側がめっちゃザラザラしてる豚野郎でした。

088 世界最速とデータに行こう！ちつたん編（前書き）

パソコンインストラクターなのに締め切りあるって何よ。

088 世界最速とデートに行こう！ちうたん編

30000円で国買ってきた 第一話「お前らもバザーには  
気をつける」

「へえ、近くでバザーやんのか……行ってみるかな、暇だし」

今朝の新聞を回収した時に、間に挟まった広告を眺めながら呟いた無職26歳。

高校の時に株で4000万稼いで「一生遊んで暮らせるぜエ！」などと茹っていたのも淡く苦しい思い出だ。

何を血迷ったか家なんか買っちゃって、残金2000万円。で、細々と暮らして8年間。残金500万円。

全然細々としてねえ!?

一年間に約200万使うニートって何だよ！ネオニートにもほどがあんぞ!!

と1人頭を抱えてみるも、一度上がった生活水準を落とすのは難しく、結局は今までと何ら変わりのない贅沢な生活（三食カップラーメン）だ。

主に豪華になったのは寝室周りだったりする。寝てれば満足だからね。

あとはパソコンくらいか。箱の中の板の辺りでなんかゴチャゴチャした所が凄い性能を叩きだしている。このなんかゴチャゴチャした所で物凄い計算をしているというのだから驚きだ。

と、なんかゴチャゴチャした所の話もそこそこに、バザーに到着した。

いつまで経っても中古品とか好きなんだよ。

モノよりも前に持ってた人の想いつていうのか、そんながね。後は、他では見れない珍しい物とかも見つかるし。

って訳でバザーをうろついていたが、物凄い存在感がある紙が売ってた。

サインペンかなんかで『国王』って書いてあるノートの切れ端だ。スーツ着たイケメンが如何でしょうかとか言ってる。ぶっ飛ばすぞイケメン。

でも、何かこのシユール感は結構嫌いじゃない。

幸い、あと2年は遊んで暮らせる金もあるし、無駄な買い物も好物だ。

これも何かの巡りあわせだろ。買っとくか。

「幾らですか？」

「はい、3000円でいけます」

「え？」

「3000円でいけます」

ああ、アレね。何かよくわかんないゴミみたいなもんを現代アートって呼ぶ風潮があるんだろ？ 田舎もんだと思って舐めたら駄目だぜイケメンさん。

と思いつながらクールに3000円を差し出す俺。こんな紙に3000円出す俺かっけえ！

「確かにお預かりいたしました。では、これからよろしくお願いいたします、国王様」

「え？ 何？ これからって何？」

「ええ。今の契約印紙をご購入いただいた事により、これからあなたには私どもの王として我が国に君臨していただきます」

「……………ありがとうございました」

なんかわからんが、この人はきつとアレな人だ。どこか遠い世界で幸せになってもらおう。

と、逃げるようにイケメンの言葉を無視して家に帰るとそこには……………！！

「おい……………おい！！」

世界最速の魔法使いだと思って来た奴に何て言い訳するつもりだっつてか「そこには……………！！」何やねん！！どーせお前また「さつき別れたはずのイケメンがいたんだー！！たんだー たんだー……………（エコー）」とかそんな流れなんだろうーがチエケラ！！」

「何だよ先生、ラノベなんか握りしめて」

「冒頭からやる気なくなってるんだよ。誰だよラブコメならラノベとか言った奴。少女マンガと同じくらい何の参考にもならんわ」

「いや、そりゃそうだろうよ」

「時にちうたり、今日暇？」

「ああ。特に予定もないな」

「っじゃ、デート行こうぜえ」

「デート？今からか？」

「ダメ？」

「いや、私の知ってるデートってのはせめて事前に連絡くらいしくモンだからな」

「で、「どるーん 待ったあ？……待ったあ？って言うてんでしようが無視すんなやゴルア！」とか言いながらタツクルしたり「どこ行きたい？」って聞かれたら「あなたとならどこでもいい……ぽっ」っていうアレがやりたかったんやろ。めっちゃ乙女やん。ちうたんったらおっとめー」

「やかましい。で、どこ行くんだよ」

「せやのー。ちうたんのPC、OSは？」

説明しよう！OSとは、オペレーションシステムか何かの略で、それをパソコンに入れる事によってビールの空き缶とかを握りつぶす事ができるほどの握力を手に入れるのだ！！

「2k」

説明しよう！2kとは、ウィンドウズ2000の略で、それをパソコンに入れる事によってなんとコーヒーの空き缶を少しへこませる

事ができるほどの握力を手に入れるのだ！

「ほなXPのパソコン買ったげる」

説明しよう！パソコンとは。パーティクル・ソーラン節・コンプレックスの略で、人妖入り乱れてソーラン節を踊りたくて仕方なくなる症状だ！一説では精神病では？と囁かれている珍しいものだぞ！そしてXPについては説明しないでおこう！強いて言うなら紙も折りたためない程度の握力になる！！

「え？いや、くれるなら貰うけど別に今でも困ってないしなあ。  
オーバークロック サポーター  
強制高速処理外部補助装置もあるし」

オーバークロックサポーターって漢字といっしょに書く物凄い文字数になる。

「ほーん。じゃあもつと凄いのあげる。ちょいとまっつてな」

「あ？ ああ」

ケータイで例のアレに電話する。

「もしもし？アタシよ、アタシ。ええ。此間作ったアレね、一セツト欲しいのよ。ええ。んもう、わかってるわよ。また作るから。え？もうあるの？じゃあ今から取りに行くわね

ほないこが」

「……突っ込まないぞ」



「突っ込まれる側だもんな」

めっちゃ背中叩かれた。

「オツスオツス」

「アレ？ここ麻帆良大の工学部だよな」

「ああ、先生、コレですよ。どござ

「こござーも」

と、四方40cm、高さ20cmほどのダンボールを受け取る。

「外部機器も最新鋭のものを同期させてますので、規格が変わるまでコレで戦えますよ」

「ってか何だよソレ」

「ふ、ふふふ、よくぞ聞いてくれました!!」

コレこそ魔法と科学の超結晶体、その名も『16CORE CO  
です!!」

「シックスティーンコアシーゼロ?」



「じゃあ持っとけつて。実際ソレの性能を一番生かせるのがちうたんな訳だし、オーバークロックサポーターと併用してサーバー機として使ってくれたら最強に見える」

「いや、いいのか？でもなあ……………」

「何？」

「その……………」

「生きててよかった」

「いやいやいや……………」

顔を赤くして手をぶんぶりぶんと振り回すちうたんはかわええのう。

「じゃあデート行ってきまーす」

「いつてらっしゃーい」

「次はどこ行くんだよ？」

「まだ顔赤いで」

めっちゃ背中叩かれた（セカンドインパクト）

「デートの定番ってったら喫茶店、映画館、公園からのレストランと相場はきまっちゃおうね」

「どつち語だよ」

「でもここであえてのゲーセンを選ぶセンスはなかなかだとおもう」

「まあいいけどな」「先生といけるなら、私はどこでも……」

「いや、言ってねえよ」

「思ってるくせにー」

また叩かれた。今日はめっちゃ叩かれる日やの。

「UFOキャッチャーはほにゃらら社の商標登録だから、ここはあえてのクレーンゲームと呼ぼうじゃないか」

「どつちでもいいけどな」

「ちなみに、俺は欲しい景品より取れそうな景品を選ぶタイプのポケモンだよ」

「何を言ってるんだ」

「アレ取れそう」

「うわっ、いらねえ」

なんかi-DOPとか書いてあるMP3プレイヤー（SDカード式）  
が取りやすそうだった。

アレは200円で取れる。

「確かに要らないけど取れそうなものなら取っとクオリティ」

「何を言ってるんだ」

「とりあえずいっとけ俺」

クレーンゲームを操作して景品を落とす。

穴の脇にあるから端っこを押して落とすとやりやすいよ。  
ちなみに押す力が弱い筐体もあるから気をつけるんだ！

「取れた」

「取れたな」

「ちうたんクレーンゲーム上手いの？」

「いや、全然。」

あ、パンチングマシンあるじゃん。先生やってけよ」

「おつよ任せな！」

パンチングマシンを叩きまくってほしいらしい。

「……届かない」

「なんかごめん」

身長エヴァと同じくらいだから。  
140cmだから。

「低いと便利な事もあるけど不便利な事もあるよね」

「でも電車子供料金で乗れるだろ」

「電車死ぬほど嫌い」

「へー。あ、キックマシンならいけるだろ」

「おつよ任せな！」

キックマシンを蹴りまくってほしいらしい。

「……ちうたん、お金入れて」

「え？届かねえの？」

「届かねえの。お願いします」

「ほれ」

お金を入れるちうたん。  
いや、流石に俺が出すよ。

「今日のトップは520kgか、余裕だね」

「思いつきりやってくれ」

「え？壊れると思うんだけど……」

「いけんだろ。仮にも蹴る為の機械だぞ」

ちうたんは俺にどうなって欲しいのか……。

とりあえず上がってきた蹴る部分を思いつきり蹴飛ばす。

パパン！ゴガツ！！

折れたサンドバッグが壁に激突した音

脚がサンドバッグに当たった音

脚が音速を超えた音

ガシャン……

崩れた壁が外に落ちた音

「……なんかごめん、先生」

「うわー！ー！！店員さアアアアアアアああああん……！……」  
「め  
エエエエエえええええん……！！」

「どっどっなさいまし……ギェェー！！！」

「ピッピｗｗｗｗｗｗｗｗココロの方のピッピｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「先生ｗｗｗｗ笑ってる場合じゃねえｗｗｗｗ」

ちうたんもいい具合に壊れてきてるな。

「な、何があつたんですか！？」

とか店員が聞くもんだから、俺も劇画調の顔になって説明する。

「あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『おれはキックマシーンを蹴っていたと思ったらいつのまにか壁が無くなっていた』

な… 何を言ってるのか わからねーと思うがおれが何をしたのかはわかっていた…

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もっと恐ろしい怪力の片鱗を味わったぜ…」

「ああ、この人こう見えて物凄い力強いんですよ。だからキックマシーンが壊れたしそのまま壁もブチ抜きます」

「そ、そうだったんですか！。でも困ったなあ……」

「お客さん……おや、これは麗しいリトルレディがお二方ですな。



君、麻帆良大建築部に連絡して」

「は、はい！」

「誰このおヒゲのジェントルメン」

「私、当ゲームセンター『おワン子クラブ』のオーナーである須田・コサン・太郎でございます。お見知りおきを」

このクソ暑い中ロングコートにヒゲ、シルクハットというイケイケ白髪のおじさまだ。何かタカミチよりジェントル。

「ああ、そう。よろしく、酢だこさん太郎」

「当ゲームセンターの設備が弱かったためにお客様にご迷惑をかけたしまった事をお詫びいたします。つきましてはお二人に、当系列のレストランへご招待いたしたいと申し出たのですが」

「いや、別に先生が蹴ったからああなった訳で、そっちの店は何も悪くないっつーか、ゲーセンの名前とかアンタの名前と違ってなんなんだよと思わなくも無い」

「偽名でございます」

「偽名つてのは偽る為にあるんであって、あからさますぎて最早芸名だろと思わなくも無いけど……」

「ふむ……ではこういたしましょう。

麗しいお嬢様方に私からのプレゼントという事で、これを受け取ってはいただけませんか」

なんか『株主優待券』とか書いた紙をもらった。

「よかるう」

「いやいや、いいのか先生」

「もらえるんだ。もらっつけ」

「ありがとうございます。店はセントラルホテルビルディングの最上階でございます。では、良い時間を」

「テンキュー」

「何であんな良くしてくれるんだろうな？」

「ロリコンじゃねえの？」

「いや、どうだろうな」

「まあいいや。いい時間だから行くっぜ」

「そうだな」

麻帆良セントラルホテル前

「今まで言っでなかつたけど実は今日車だったんだよ」

「何言っでんだ？」

「べつに」

「いらっしやいませ、お客様。お車をお預かりいたします」

「よろしゅう」

車の鍵を渡したら走っでいった。

「あんなカギ渡したらホテルマンが車乗っでいくとか、テレビで見したこと無かつたよ」

「俺は上流階級だからけっここうあつたかな」

「一応世界の有名人だったな。そう考えるとすげえな」

「まあね」

ちなみにセントラルホテルとか言っでるけど結構端の方にある。ビルも世界樹よりだいで低い。

「いらっしやいませ、お客様。白波様でしょうか」

「ええ、そうゼンス」

「誰だよ」

「お話はオーナーより伺っております。こちらへどうぞ」

「4畳半くらいのエレベーターに押し込まれた」

「嫌な事されたみたいな言い方だな」

「わあい！！わあい！！！！」

「いや誰だよ……誰だよ」

ちーン

こゝこれは下半身を出したんじゃないなくてエレベーターが最上階に着いた音なんだからね！勘違いしないでよねっ！！

「いらつしやいませ。『レストラン蒲焼三太郎』へようこそおいで  
くださいました」

「訴えられるぞ」

「お席を用意させていただいております。こちらへどうぞ」

なんかレースのかかった素敵なテーブルクロスが敷いてある卓に座  
らされた。

なんかバラとか置いてあるけどこれ食っていいの？

「食前酒は赤ワイン、白ワイン、ロゼから選んでいただけます。」

「私は中学生だ」

「俺はレーサーです」

「そうじゃないだろ」

「教師です」

「おい……おい！」

「純愛なんです……！」

「この人車だからお酒飲めないです」

「俺は車じゃない」

「知ってる」

「車じゃなくても飲めない」

「うるさい」

「かしこまりました。ではジュースをお持ちいたします」

「え？ジュースはお餅なんですか？」

「え？」

「え？」

「お持ち致しますね」

「致すんですか……お餅」

「すみません、この人ほつといてください」

「ああん、ひどおい」

待つこと15秒

早い！

＼テレーツテレー！／

ワイングラスに遠慮の量程度に注がれたぶどうジュースがやってきた。  
飲んでみたら甘さは抑えられてるのに味はしっかりとした。多分高い。

さらに待つこと20秒

早 (ry)

＼テレー (ry)

トマトとキュウリのサラダが出てきた。

ちなみに今日は出先だから二人とも全く音を立てずに食べてるよ。  
なんと訓練された夫婦。

で、嘘みたいに上品に食べると、コーンスープとクロワッサンが出てきた

(ry)

＼ (ry)

生クリームを使った口当たりのいいコーンスープで、上に刻んだパセリとか乗ってる。ちょうしのりやがって。

全く会話が無くってこっちは暇なんだよ。

でもちうたんのより俺の方の量が少ないのは評価します。

クロワッサンも千切って投げたりしないで普通に食べた。

で、次はスモークサーモンのマリネですよ。

本気じゃん、この店。

六枚切りのうつつい鮭が綺麗に並べられています。

正直な話をすると、俺の作る料理のほうが一番上手い。  
でも雰囲気って大事だよな。

窓から麻帆良やらその先が一望できるシステム。

まあ山くらいしか無いんだけど。

全く喋ってないちうたんも心なしか上機嫌に見える。

で、次に出てきたシャーベットも食べ終えてしばらくどうでもいい話とかする。

ちなみにこのシャーベット、口直しが目的であって、出ない店もある。

店による。

何で二回言ったんだらう。

そのまま床を這ってる（アレをソレしてる時を表す比喻表現で、実際に這ってた訳じゃない）と、薄めのレアステーキが出された。

俺はレア好きだけどちうたんはそうでもないよなと思いきや、ちうたんのステーキはミディアムと、これまたエスパーク、もしくはエスパーク伊藤が居るとしか思えない。

どういう事なの

ちなみに神戸和牛でした。

牛さんごめんよ。

鮭さんは別にいいや。

うそです。ありがとうございます。

で、果物とかスイーツ（笑）とか食べてコーヒーも出てきたからちうたんと談笑してたらさっきの焼肉三太郎が出てきた。

「気に入っていただけましたか？」



「おつよ」

「ああ。店のレイアウトも良いし料理もサービスも申し分ない。でも一つ気になる事があるな」

なんか今日のちうたんはいつにも増して攻撃的だな。  
女の子の日（爆）じゃない筈なのにな。

「はい、気になること……ですか？」

「アンタがここまでする理由だよ。先生が何の躊躇いも無くここま  
で来たから私も着いてきたが、話が良いすぎるっつーか、ただの中学  
生にここまでするモンか？

それに……私たちはアンタに名前を教えても無いのにロビーで先生  
の名前を呼ばれたし、私の好みや先生の食事も言った覚えが無い  
のに私に出たメインディッシュのステーキはミディアム、先生のは  
レア。全体の量も先生のほうが少なくなってたな」

「当然、麟様は有名人ですから。それに、性格や体格から適切な量  
や好みを判別するのはウェイターの仕事、その指示通りに作るのが  
シェフの仕事ですよ。」

ただ、ここまでする理由ですか。……感謝ですね。『私達』はとて  
も義理堅い“生き物”なのですよ、長谷川……いえ、白波千雨様。  
ただ、害意は一切ございません。それだけ解って頂ければ幸いです。  
では、良い時間をお過ごしください。ごゆっくり」

そう言つとクソ暑い中、やっぱり黒のロングコートのおっさん、略  
してこっさん（ぼっさんとは一切関係ない）は出ていかはった。

「……先生あのおっさんに何かしたのか？」

「さあ？ 孫にサインやったとか？」

「ってか私たちのその……けっ、けっこんって……公開されてないよな？」

「いや、魔法世界の常識じゃん」

「だれがそんなファイナルファンタジーワールドの話しろったよ」

「もう、存在するんだからファンタジーじゃなくてリアルじゃん。驚きの無茶スルーだよ」

「っせ」

これは多分「うるせえ」が訛ったアレだよ。

さて、帰るか。

「ご馳走様でした」

「ありがとうございます」

そ、その……僭越ですが、白波麟様……」

「何？」

何コイツもじもじしちゃって。また尻か。

俺のケツどんだけ魅力的なんだよ。

もうエヴァに指の第二関節までいかれたわ。

あの時は泣きそうになった。

「サイン、いただいてもいいでしょうか？」

なんだそんなことが。

ケツ締めて後悔したわ。

で、渡された色紙とサインペンを持って、サインペンを折ってからレジ横のゴミ箱に投げ入れて、ポケットから筆ペン出して筆ペンでサインを書く。

で、サインと筆ペンを渡す。

「あ、ありがとうございますー!!」

「いいって事よ」

下に降りたらホテルラブ……じゃない。ホテルマンが車出してた。

「ありがとうございます。お気をつけてお帰りください」

「まかせろ」

「先生何でサイン書きたびに人のペン折ってんだよ」

「何か昔やってから喜ばれちゃって、朝倉さんにも特集組まれちゃうし、仕方なくやってんだよ。筆ペンだってタダじゃねえんだよ」  
みんな喜んで俺にペン折らせるんだから。

「この間大量に『Konozama』から筆ペンが届いてたのソレかよ。エヴァが何の躊躇いも無く80万円分の筆ペン代立て替えるの見たときは戦慄したわ！ってかサイン書きすぎだろ！一日一枚書いてるとしたらアレ100年分はあつたぞ！！」

「ヒーローだからペンも折るし妹に金だって立て替えさせる。で、実はアレそんな使わないのよ。向こう数百年分買つといた」

「最低のヒーローだよな」

「ちうたんは最高のヒロインだな」

「っ！！」

運転中に背中を叩くな。

「ってかエヴァの事エヴァって呼ぶんだ。本人の前ではエヴァンジェリンなのにwww」

「う、うるせー！たまたまだよ！！」

「エヴァに言っちゃおー」

「やめろー！！」



088 世界最速とデートに行こう！ちうたん編（後書き）

まだ100話目の特別企画募集中の豚野郎です。

今回のフラグはちうたんがすごいパソコンを手に入れたことと別に要らなさそうなMP3プレイヤー入手、あとは正体がわかり易すぎる老紳士の登場ですか。

回収するかしないかは別だけどな！

さて、ちうたんとエヴァがグチヨグチヨしたところで、次は誰とデートしようかな。

それとも、そろそろ夕映を引き込むべきか。

まだフラグが足りんね。

では、今回もありがとうございました。

089 世界最速とデートに行こう！エウア編（前書き）

今回は歴代でダントツにホント読む価値無い

「トウトウトウマシエリーマーシエリー」

「トウトウトウマシエリーマーシエリー」

「トウトウトウマシエリーマーシエリー」

「うわっ！餃子でかつー！」

「日本くらいあるわ」

「じゃあね尊土さんそうだ」「ポア」「その子」

「こつちでええんかな」「お、にいや」

「じゃ彼は？」

「知らん彼やだわ」

「……二人とも、僕を指さして何をしてるんだい？」

「じゃ彼は？」

「知らん彼やだわ」

うそです。タカミチです。

「お兄ちゃん、こんなヒゲほっといて早く行こうよ」

「じゃあな、ヒゲ」

「……気をつけて行っておいで」

「毎日がエブリデイー……！」



「毎日はエブリデイー!!」

「今日はどこ行くのうか」

「パーツ屋さん!!」

「よしこーい!!ぶるるん ぶるるん!!」

「閉まって……いる……」

「ドライバーズスタンドエ……」

何故か全然違う店になってしまったドライバーズスタンドの前で膝をつく俺達兄妹。

こうなったら必殺ロータリーサウンドを響かせて大阪まで長距離遠征せざるを得ない。

「エヴァ、日を跨ぐぞ!!」

「どんと来いだよお兄ちゃん!!」

M A Z D Aの素敵サウンドを唸らせながら高速を走ってたらず、名古屋あたりでもものすごい車が居た。

平日の真昼間だから車が少ないのは頷ける話だけど、なんかその少ない車もみんな120km/hくらい出してるのにそこから更に100km/hくらいぶっ飛んでる赤いRX-8だ。

俺の超視力で見ても車内が見えない。フロントもサイドもリアもフルスモークのかわいそうな奴だ。

さらに、外装は全部カーボンらしい。ガボンガボン言ってる。

「何アイツ。チャレンジャー？」

「さあ？」

「追っかけてみるか」

「4点式フルバケットの底力を見せてやってよ！」

「上等だコンナローー！！」

と、ギアを一段落としアクセルを踏み切る。

でも全然追いつけない。

何アレ、絶対300km/h出てる。無しだろ。あんなバケモン公道に放つとか警察の野郎イカレてやがる。

「お兄ちゃんの最速伝説はまだ始まったばかりだ。一つくらい思い通りに行かない事がある方が面白い」

「お兄ちゃん……」

「今日の俺は紳士的だ……エヴァ、運転交代」

「がんばってね！」

「MAKASERO！」

エヴァを運転席に座らせて俺は助手席に回る。

で、指輪をお馴染『GSX-1300R 隼（ターボ仕様）』に変えて飛び乗った。

「っしやったるでええええええええええい！！！」

と、意気込んで走り出す俺、デュエリスト決闘者。

でも奴はもつと速度が乗ってるのか、なかなか追いつかない。

ケツは見えてるんだけどなあ。

とかほざきつつ、大きめのカーブに差し掛かる。

「ふへっ、野郎、あの速度で突っ込んだら一発でコーナーのシミだぜ」

うん。素通りフラグだよな。

俺わかってたよ。天才だもん。

なんか嘘みたいなグリップで、若干方輪浮かしながら曲がっていた。何だよアレ。プロかよ。

でも少しづつ縮まってる。なんか行けそう。そんな気がしまっーうー。

とか言ってるのもつかの間。あと5秒で並べたのに刈谷パーキングエリアに入っていきやがった。

「エヴァ、刈谷P.Aで」

『了解、お兄ちゃん』

念話でエヴァに連絡して俺もP.Aに入っていく。

「いやあー、兄さん速いつすねえ」

例のRX-8の前でタバコを吸ってるバカっぽい白髪ロン毛（めっちゃ長い。俺の身長より髪長い。）に、バイクを指輪に戻してから声をかける。

うわ、こいつ右目に眼帯してやがる。危ない野郎だな。

「ああ？んだてめえ？」

「おめえが何だよ。法定速度って聞いた事ねえのかロン毛」

「俺がそんなだけ出したって知ってるてめえもたいがいの速度出してたんじゃねえのかよ」

「すいまえんでした……」

論破されちゃったZE

だってコイツ身長半端ねえもん。めっちゃ見上げないと話せないレ

ベル。

多分こいつがしゃがんだら同じくらいの高さ。

「なんだよお前、髪も長けりゃ背も長いからって調子乗りやがって

……チクシヨウ……神よ、何故私を見捨てたのですか」

「なんだこのガキ、すごいめんどくさい」

「大体何やねん、その車！何やったらそんな速いねん！！」

「あ？お前もしかして後ろから追っかけてたブサか」

「ブサです」

正確にはハヤブサです。

「ハッ、ブサじゃ俺のエイトにや辿りつかねえよ」

「言ってくれるじゃねえの。俺これでも世界最速だからね」

「同じ条件下だと車より速く走れるバイクってのは存在しねえんだ  
「よ」

「上等じゃねえの、表出るよ」

「お前目腐ってんのか？上見てみるよ。天井に見えたか」

「もつやだこいつ」

地面（コンクリート張り）をスコップで掘ってたらエヴァの乗った

RX - 8 に撥ねられた。

「あ、お兄ちゃんごめん！」

「いってことよ」

「で、誰この白髪、めちゃくちゃ人相悪いね」

「ほっとけガキ」

「お兄ちゃん、ガキって言われた」

「敬意を込めておガキ様って呼べや白髪」

「こりゃ失礼、おクソガキ様におガキ様」

「エヴァ、おクソガキ様だつてよ」

「いや、お兄ちゃんですよ」

「寝たい。あと親指シフトのキーボードほしい」

「買いなよ」

「ってかお前何お前公道でスリックタイヤとかお前頭イカしてんじやねえのお前」

「雨の日はスリップタイヤだけだな」

「あ、エヴァ！ー！ゴーカートあるじゃん！乗ろうぜ！ー！」

「うん、お兄ちゃん」

「自由過ぎだろこの兄妹」

「遅くてビビった」

「踏みっぱなしでもコースアウトしないような速度に設定されてるしね」

「つつか何だったよ、さっきの白髪」

「さあ？あ、お兄ちゃん、観覧車も乗ろうよ！」

「いいとも！！」

などとほざきつつ観覧車に乗りこむ俺たち。

「なんか遅くね？」

「速かったらびっくりするよ」

「……乗ってから気づいたけど、今さら観覧車で甘酸っぱい雰囲気になるような仲でもないよな」





これこそがビッグバンを起こす原因となった超時空圧縮と呼ばれる  
ものです（死ぬほど適当）

「すまぬ……すまぬ……」

「お兄ちゃん、早く行こっよ」

「うわー……い……！ うわー……い……！

今日の俺はドリキンにすら勝てる

と……いっつのは嘘でしょ」

「あの白髪、もう行ったのかな？」

見ると奴の気色悪いRX-8はもう無かった。

「……奴はいつでも居るさ。俺たちの、心の中にな……」

「……」

さて、エヴァの反抗期ならぬ犯行期が到来する前にさっさとTAAI  
CHIEに行くぜ。

「なんかバイクの部品買ったついたらとにかくTAICHIに来る病気にかかっているんだよな」

「転移でくるっていう選択肢は？」

「転移で帰るのはいいけど、転移で来るのは……いいな。次からそうしよう。」

「逆になぜ今まで気づかなかったのか……」

「真、この世は不思議に溢れているのう」

「誰？」

「新キャラだと思ったか！エヴァンジェリンだよ！」

「ひゃっはあああああああ！……！」

と雄叫びながら店内に入る。

「いらっしゃいま……うわあああ！……！」

「PE24の115番ってある？」

「ないです」

「ああ……そう……」

「お兄ちゃん、最強ロック買おうよ……！」



「ないです」

「ああ……そう……」

「もういいや。ブリヂストンのタイヤ買ったし」

「私のエイプそろそろ溝なくなってきたよ」

「あれ？タイヤもうない？」

「あつたのは全部使ったよ」

「全俺が泣いた」

店員さん、12インチのBT92、20本くだち」

「はい、BT92が20本でー……20本!？」

「20本で」

「か、かしこまりました」「かしこー」

「すみません、在庫がありませんでしたので配送で大丈夫でしょうか？」

「はい、はい」

「ではこちらに名前、住所、電話番号をご記入ください」

「破あ！！」

「寺生まれって凄い。私は改めてそう思った」

「なんとということ（をしてくれたの）でしょう。三流建築士の匠（Tさん）が手をかざすと、閑散とした用紙に氏名、住所、電話番号が」

「ありがとうございます。料金はこちらになります」

「カードで」

「はい」

「あとNSR250Rのパーツって何かありますか？」

「チェーンとキャリパーくらいですかね」

「うぼあ！！2stは死ねってかい……」

「NSRminiのパーツなら」

「いらない！」

「エヴァ何かいるものある？」

「別に無いかな」

「じゃあそんだけで。おながいします」

「かしこまりました」

「っじゃエヴマ、行「じうぜー」

「わーいー!」

「よる彦ー!」

「ありがとうございました」

「BANGご飯何にしようかしら」

「何でもいいよー」

「ウツホホイ!じゃあすき家で」

「わーいー!」

すき家で喜ぶとか普段ほうれん草しか食わしてねえみたいじゃん  
……。

「サウザンドチーズ牛丼並くだち……」

「同じのだ」

「サウザンドチーズ牛丼の並盛りが二つですね。少々お待ちください  
いお待たせしました」

「速い!!」

「もつきたのか」

「じゅっくりどうぞー」

「ちうたんとはなんかよくわからんホテルの最上階にあるレストラ  
ンに行った。麻帆良セントラルホテルだったっけな」

「ああ、あそこ?」

「知ってるの?」

「あの店の経営者って王都シラナミ出身だよ」

「まじか。それは知らなかった」

「世の中は知らない事だらけだったね」

「うん。所で強盗とか入ってこないかな」

「昼だしさすがにないでしょ」

フラグかと思っ たけど本当に何も無かった。

「じゅっあんです!」

「ありがとうございます。760Yenになります」

「ドルでいいですか?」

「困りますー」

「ルピーでいいか?」

「困りますー」

「図書券でいい?」

「困りますー」

「宝くじで」

「困りますー」

「カードで」

「こまりますんー」



「どっちだ!?!」

「ありがとうございます」

「うふえー。もう6時かー」

「まだ6時とも言つよ」

「どこいくー?」

「帰ろっ」

「そうだな。」

俺たちの……家に!」(何かよくわからない決意を秘めた目で)

「うん!」(とりあえず乗った)

「ただいまー君」

「マー君ってだれだ!?!」

「マー坊」

「“待”つてたぜエ！！この“瞬間”をよオ！！」ギヤギヤリギヤリギヤリ

「“事故”る奴は・・・ “不運”と踊”つちまつたんだよ・・・」

「何故か 踊 の二重引用符に始点がない系の不具合まで再生するとは……茶々丸……恐ろしい子！」

「結局どつちもマー坊じゃないしな」

「なんでちうたんはどうしてそんな事を知ってるのは何で？」

「読んでたからだよ」

「連載1991年からだろ。2歳の時からだよ」

「親が単行本波なんだよ！」

「あ、そういえばちうたんの親御さんに会った事ないじゃん、俺。今度挨拶行こつと」

「く、来るな！！」

「なぜ」

「そりゃ、恥ずかしいだろ……」

「ウチは親公認だけどねー」

「まじか、かずみん。知らんかった（リアル話）」

「わ、私も親公認ですよ！！！」

「……それは知ってる」「……」

「天国にいてはるウチの両親も許してくれます……」

「シリアスになりえない雰囲気だな」

「さーて、明日は何すっかなー」

「平日はデートって訳にもいきませんからね」

「ってか学校行けよ」

みんなでわーわー言ってたら家になんともなくつけてた電話が鳴った。これ電話番号とかあったんか。

「もすもーす」

『あ、どもー。麻帆良大建築工学部のモンっすけどー』

「あーできた？」

『つつす。完璧パーフェクトつつすよ』

「何それ流行ってんの？」

『ま、一回見に来てっせーつつすよ』



S  
E  
E  
  
Y  
A  
!



090 世界最速のRX-8は速いっっちゃ速いけど特に何の改造もしてない普通

一昨日もみじさんに「明日には投稿する」とか何とか言ってた覚えのある豚野郎でしたが、所詮はブタ。

結局日を跨ぎました。

さあ、ののしれ!!

090 世界最速のRX-8は速いっっちゃ速いけど特に何の改造もしてない普通

「おい、ネギ。放課後校舎裏な。絶対一人で来いよ？ああ、そのアルベールはいいよ」

「どうしたんですか？」

「その時話す」

そう言つて職員室から出る麟先生。

一体何なんだろう。

……？カモ君が振動してる。

「カモ君？」

「あ、ああああ兄貴、ややバイツスよ！これはもしや日本の裏社会に古くから伝わるYOBIDASHIってヤツじゃないっすか！？」

「YOBIDASHI？」

「いいか兄貴、呼び出したのはだなあ……」

詳しい話を聞けば、どうやら後輩が何か失敗した時に校舎裏に呼び出し、そこでOHANASHIをする文化らしい……。つてカモ君が言ってた……。

「ど、どどどどーしょーカモ君！！」



「あ、兄貴何かやらかしちまったんですかい!？」

「いや、そんな記憶は……もしかしてアレかな……NSRに勝手に  
ロリータエンジン  
REって書いたからかな……」

「兄貴？」

「それともヘルメットの後ろのところにREロリータエンジンって書いたから？」

「いや、いやいやいやいや、何意味のわかんねえ事やってんだよア  
ニキいいいいい!?!?」

「ひょつとしたら魔法球サーキットコースの壁に勝手にREロリータエンジンの横断  
幕を下げたからかな……?」

「いや兄貴、ロリータはLoiitaだから頭文字は『L』だぜ」

「何このオコジヨきもい」

「兄貴イイイイイイイイ!!?!?!?」

「とにかく、そのくらいで怒られるとも思えないし……」

「何で兄貴はそこまでして怒られるとこれっぽっちも思わないんだ  
!?!?」

ほうかご！

「今日の俺はローギアだ！」

「トップギアじゃないんですね」

「バカお前トップギアだったら最高速を乗せるときに使うギアであつて『最初からトップギアだぜエー！』とか言ってる奴はどんだけナイーブな発進するつもりだよって思うやん。エンジンの危機と隣り合わせなわりに何のメリットも存在せんやん」

「ローギアよりトップギアの方が聞こえがいいとはいえ、確かに……」

「で、今日俺がローギアな理由だが……」

「兄貴……やっぱりそこかしこにRE（電子メールやネットニュースの「返信」を意味する語である。Wikipedia参照）って書いたのがまずかつたんだぜ……」

「つてか兄貴、ちょっと見ないうちに自由すぎるだろ……」。

「そんなもんはどうでもいい」

「あ、いいんすか」

「うん」

「じゃあ一体何で？」

「いいから俺についてこい」

そう言っただけで歩き出すお二人。

しばらく歩くと駐車場についた。

「乗れ」

と言った隣の旦那が指した車を見て兄貴が固まってる。

「こ……コレは……」

「兄貴？」

「カモ君、コレはMAZDAが販売してる現状最後のロータリーエンジンを搭載したRX-8っていう車だね」

「は……はあ……」

「4ドア4シーターなのにも関わらず、前身と呼ばれるRX-7、通称FDとは重量差が20kgしかない凄い車なんだよ！

それに、名前やロータリーという特性からもFDの後継と思われるはいるけど、その実デザインは一新されてる。

さらにこのエンジン、ただのロータリーじゃないよ。最新のRE、RENEISSは無粋なターボチャージャーを取り払った事でスムーズなレブリミットまでの回転を実現して、さらに排気をサイドポートにする事でオーバーラップゼロ、圧縮比も格段に上がって低回転トルクの安定性も従来とは比べ物にならないし燃費も計測値12km/1?を出したんだよ。それだけでも凄いのにその重量は今ま

でより10kgも落としたんだ！

その上フロントミッドシップをさらに改良したアドバンスドフロントミッドシップを採用して前後50:50のパーフェクトな重量配分にも成功、エンジンの搭載位置を低くした事による慣性モーメントの5%低減を実現して、まさに最強のコーナリングマシンになったんだ！！」

「へえ……」

「凄いのはエンジンや重量配分だけじゃないよ！

この芸術的なコックピット！！

色んなところにおにぎり型のレイアウトが施されてさりげなくREをアピールするおちゃめな遊び心もわすれず、それでも走りに妥協しないハンドル位置やサイドブレーキ、シフトノブのポジション。

さらにこのType-RSは走りに妥協しない、ビルシユタインのバンパーやレカロと共同開発したバケットシートが標準装備されたノーマルでも最高の性能が出せる仕様なんだ！

そのデザインは数多くの人々を魅了して、おおかたどんな車にも辛口のコメントをする某キャスターにも褒めちぎられたまさに最高を実現させるための車！！！！

その性能から子持ちのお父さんの「ホラ、コレなんかいいじゃないか。4ドア4シーターだからチャイルドシートも載せれるし、買い物だってこの開き方のドアならお手軽だろ？なに、リッター12リットルくらいは当たり前さ。むしろいいくらいだよ。な？いいだろ？」という趣味と実益を兼ねた説得の材料としても申し分ない車だよ！

おまけに日本の警視庁にも採用されるほどの信頼性の高さ。滑らせようと思えば滑って走らせようと思ったら走り曲がるうと思ったら曲がる。車界の優等生……いや、車界の天才だよ！！」

「兄貴、乗らないんすか？」

「乗るよ！…ここで乗らないと僕の一生は後悔に塗りつぶされるだろうね！！」

ああ、楽しみだなあ。僕も将来絶対にこれを買っぞー！！」

「わかってんじゃん」

「これがRX-8のコックピット……うっ、鼻血が」

「どんだけだよ兄貴！！」

「そうだよね、カモ君。この走る芸術を僕の鼻血なんかで汚していいわけないからね！！」

ああ！…このシートに包み込まれる感じが……！！！」

この兄貴はもうダメだ……

「ほら、着いたぞ」

「え！？僕まだ乗ってから1分くらいしか経ってませんよ！？」

「いや兄貴、20分は経ったぞ。どんだけだよ。いや、マジで」

「ここは……ホームセンター？」

「ああ。ついてこい」

「いい車だなあ」

「早くしろよこの変態……！」

「何をするんですか？」

「いいから おれに ついてこい」

「……さくせん」

「みたいになってますよ」

「すんまへん、予約してた白波でげす」

「はい、かしこまりました。ではこちらにおながいしまっしよいま  
っしよい」

「ここにまともな人間はいねえのか……」

ネギは自分に差し出された半紙と筆を見る。

「名前を書くのだ」

「た……縦書きですか!？」

「横」

「はい……頑張るぞー!」

『わぎ すふ りん くふいーるど』

「別にアルファベットで書いてもいいのよ……」

「いえ、もう一回やります!」

『ねぞ すぶりんぐふいるど』

「惜しい」

『ねぎ すぶりんぐ ふいるど』

「こつ書くんだよ」

『春野 葱』

「おお……おお! マキシマムかっこいい!」

「芸術だぜ……」

行書体の迫力に飲まれたな……ガキどもが。

「じゃあコレでおねがいんぐ」

「かしこまりもっごり。30分かかるさかい適当に何かしといて」

「わっせー」

「所で、さっきのは何だったんですか？」

「お前そりやお前これからのお前楽しみにお前取っつけよお前」

「何回お前って言うんすか旦那」

「5回」

「別にそういう事を聞きたいんじゃないんですね!!」

「じゃあいいじゃん。何だよお前、ドラマ版でワッペン化してるくせによ」

「ドラマ版なんか無かったっんすよ!!」

「とてつもない下火感を演出してたよな」

どうしてこうなったを地で行ってた。



「あ、中国産の謎バッテリー安いやん。買つとこ」

「今なら水素ガスが通常の3倍!!とか書いてありますよ」

「ガス爆発一直線やの」

「所で麟さんって関西の人なんですか？」

「ちゃう」

「いえ、よく関西弁で話すから……」

「俺は関西弁で話してないやで」(後ろにやでをつけたら何でも関西弁になると思ってる)

「話してるじゃないですかー!!」

「そついうネギも少しくらい話せるんだろ」

「えー……ワイ学校で教師をやとるまんねん」

「じゃあかあしやんだら。おどれなに人舐め腐ってケツかんねん。しゃーきやつたおつぞツレえ」

「プロの関西弁だ……」

「ちなみにここまで崩れるとホント大阪でも泉州クラスじゃないとマジで何言ってるかわからないから気をつける。

京都の人間にはまず通じない。毛唐がtheをdaと言つのはレベルが違うのだよ」

でも何故か兵庫だと通じる。不思議！

「勉強になります！」

「ならへんわ。ってかな勉強いらんわ」

「やっとれらんね」

「どこで十津川弁覚えてきやがったこの変態」

僻地過ぎて言語が独自変化を遂げ、関西弁ですらない十津川弁ですね。

「今の十津川弁だったんですか。所で十津川って何ですか？」

「僻地オブ僻地。人口が限りなく少なく土地は限りなく広い。ちなみに北海道にある『新十津川町』は、その昔、大災害からの難を逃れた元十津川村民が作ったといわれている。」

さらに木曜日には更新すると言っておきながら結局日を跨いでこの小説をアップロードしてるゴミクス以下のゲロブタ野郎の出身高校も十津川だったりする」

「最後のくだりはクソどうでもいいですね」

「あ、そろそろ出来てるんじゃないかしら。まだ5分くらいしか経ってないけど気持ち的にはもう8時間経ってるし」

「僕もやまだかつてない疲労感に襲われています」

「じゃあサービスカウンターまで競争な。よーいドン」

「わわっ！」

さっさと走っていったネギ。めっちゃ迷惑やん。

「店内走り回るとか自分どんだけバイオレンスよ」

「いっ、いっめんなさい」

「まあええわ」

とは言ってもソレを決めるのは店員さんだけどね。

「いいドリフトだったぜ、坊主」

「誰だよ」

「ご注文いただいた品はこちらでございましてーす」

そう言っただ大理石のプレートに行書体で『春野 葱』と彫られたモノを渡される。

「うむ。大儀であった」

「殿下……」

「それはそうと行くこうぜ。真打だ」

「楽しみです！」

あつと驚けと言いたい所だが尺の都合で次回持ち越したコンニャロ  
ー！

こんばんは。

もしくはこんにちは。

あるいはおはやう。

ボクの小説を読んでくださっている全国2億人の方々にはいくら感謝の意を表明しても足りないくらいです。

今度正式に会見を開きますのでぜひ地上波4990998チャンネルをごらんください。

さて、色々と詰め込みませんでした、僕はMAZDAのRX-8が死ぬほど好きです。

将来絶対に買うと誓った車でもあります。

免許が無いときからMAZDAのディーラーに再三にわたりカタログを請求して、何故か一回RX-8ではなくアテンザのカタログが届いた事もありました。アテンザも嫌いじゃないけど要らないの。

僕とRX-8の出会いには正に衝撃的かつドラマチックなものだったのですが、ここに書くには余白が足りないので省かせていただきます。

しかし、とうとう生産終了が決定されてしまいましたね。

後継車の設定は出来ているらしいですが、あの車がもう新車で買えなくなると思うと涙がちよちよぎれる思いです。

さて、今回もここまで読んでいただきありがとうございました。

RX-8と結婚したい豚野郎でした。

091 世界最速の弟子、家をもらう。(前書き)

僕も車15台ほどしまえる家付きのガレージがほしいです。

091 世界最速の弟子、家をもらう。

葱「師匠、師匠！ドリフトはしないんですか！？」

俺「しねえよボウゲ。お前それサバンナでも同じ事言えんの？」

葱「それっておかしくねえ？だって、ここ日本じゃん」

俺「お前ってアレだよ…… サバンナじゃ真っ先に死ぬタイプだよな」

俺「そんなこと言われてもうち百獣の王やし」

俺「サヒヒWWWフーセンWWW」

俺「お前の意見は正しい サバンナ以外ではな」

葱「師匠どうしたんですか？」

「もう着くんだよ。はいこー」

なんとという事でしょう！

閑静な住宅街の中央に、新築の一軒家があるではありませんか！

この門に着いている完璧に無意味なディテールも二階のベランダに貼り付けてある『私はいつでもウェルカムよ』と書かれた横断幕も不要な匠の遊び心。

否、匠の悪匠（上手い事言った）

「この家は？」

「お前の家」

「へ？」

表札を埋め込む穴に防水コンクリートを塗りつけてさっきの表札を貼り付ける。

「だってお前教師なのに三人部屋じゃん。」

あのじじいもいつまで経っても新しい住居用意する気無いみたいだから、修学旅行に行く前に麻帆良大の建築科に作るように言っといたんだよ。

弟子入り記念だ。端金で作れた事だしくれてやるよ」

「うう……ししょー」

「ええい抱きつくなくなうつとおしい！……！」

「隣の旦那……アンタ男……いや、漢だよ……！むしろ侠おとこだ……！」

「お前にも妹が居るんだろう。もし来れるならこっちに呼んでやればいい」

「旦那アアアアアアアアアア……！」

「ええいしがみつくなうつとおしい……！……！とにかく中に入るぞ」

「はい……！」



「まず玄関。

知らないわけ無いと思うけど靴を脱いで入れ」

「はい！」

「で、左がリビングとダイニングキッチンだ。

簡単な料理本、冷蔵庫やその他必要な家財道具、生活家電一式は揃えてあるけど必要なものがあつたら給料で買え。

ちなみに40インチのテレビとDVDレコーダーも置いてあるから使うなら説明書を読んで使いなさい。

で、右が風呂と洗面所とトイレ。絶対に一日一回風呂に入らないと殺す。

右奥が寝室。好きに寝ろ。ちなみに目覚まし時計は20個置いてある。全部連動してるけどランダムで5個だけ正解だからその5個を押すまで鳴り止まない鬼仕様だから。遅刻したら死ぬ。

で、二回に5部屋あるけど2部屋が和室で2部屋が洋室、あとは図書室。全部6畳。

ちなみにリビングの本棚にはバイクレースのDVDがあるけど暇な時にでも見れば。まあ俺は自分のレースしか見た事ないけど。

こんな感じ。質問は？」

「い、いいんですか？こんなにさせていただいて……」

「あつはつは、何言ってるの？俺これでも一応一国の王だから。税金全く無いけど。

まあ無いなりに金持ちだから。

銀行に2000億ほど預けてたら毎年数十億貯まるから実際俺の富がかなり無限大。

利子が振り込んでる」

「だ……誰ですか、それ？」

「利子を擬人化した萌えないキャラクターの『銀行利子』かなゆきとし  
32歳独身、鉄壁の処女

何かあったら金を預けさせようとする恐ろしい女で、好きなタイプは福沢諭吉。

口癖は「金は金なり」

座右の銘は『無くても絞ればまだ取れる。無いところからも引きずり出せ』」

「こ、怖い人なんですね……」

「迂闊に金を借りたら即死な。

ちなみに水道代は一月一律3000円で電気代はまあ知れてんだろ。お前の給料から引き落とされるシステム。

じいその他には俺から話を通しとくから引越す準備が出来たら勝手に引越して。はい、鍵」

「あ、ありがとうございます……」

「ほう、ネギ君に家をな……」

「だってじーちゃんいつまでもあの別に広くも無い部屋に男女3人も押し込めて。」

多感な少年時代を過ごしたが故に後の人生に虚しさがこみ上げた結果世を儚んでいくえ不明になるのは確定的に明らか」

「むづ……」

「それに、別に教員全員が寮に住んでる訳でもないし、部屋の空きもないなら家の一軒くらい用意してやるのも師匠として不自然じゃない」

「確かに教員寮には空きが……って師匠？お主、ネギ君の魔法の師匠に？」

「いや、何で俺が魔法なんか教えるよ。不老不死なんだから後世に残す必要も無いのに。」

俺が教えてるのはバイクの事と教師の事くらいでう。  
ああ、所得税くらいは俺が払っとくから安心なさい」

「バイクの師匠のう……まあそれもまた一つの経験じゃろう。  
これからもネギ君をよろしく頼んだぞ」

「今回だけやで」

などという寒気を催す茶番を広げ、ついでにご両親にも挨拶。

「ハア！？ネギが一人暮らし？ そんなん認められる訳ないじゃない……」

「また始まったよ（笑）」

「何よその顔は！！ 私はネギが朝起きれなかったりご飯食べられなかったりするんじゃないのって言ってるのよ！」

「せやなー。確かにネギ君朝弱いもんなー」

「そんな親御さんにも安心、完全同期型目覚まし時計『ミスターウエイクアップ』がネギの不快な朝を演出。否応無くたたき起こす事を保証します。さらに、冷蔵庫にはある程度の食材、料理の本も取り揃えてるため俺ほどじゃないにしろ天才の名を欲しいままにしてる奴さんの生活は思うがまま」

「だからって、ネギはまだ10歳なのよ！」

「まあまあお母さん」

「誰がお母さんよ！！」

「そろそろ子離れしてもいいんじゃない？お子さんももつする年齢が二桁になる事ですし」

「そつやなー。ネギ君もいつまでも守られてるばかりじゃあかんもんなー」

「このか！アンタはいいの！？」

「別に会えへんようになるわけでも無いし、ネギ君もそれでええって言うてんねんやろ？」

テストの採点とかしてる時も生徒わたしらと同じ部屋やから気い張ってるみたいやし、一人になりたい時もあるって」

「うう、でも……」

「ほら、お父さんはちゃんと理解を示してくださいさってますし。ね、お母さん」

「だからお母さんじゃないって!」

「ウチら夫婦かー。恥ずかしいなあー」

「お嬢様!?!」

「おい、どっから出てきたストーカー侍」

「ややなあ、冗談やって、せつちゃん。ウチはせつちゃんのモンやし、」

「せつちゃんは、ウチのモンやで？」

「ああっ、お嬢様あ……」

「お嬢様？」

「じいこのちゃん……」

このちゃんが急に出てきたストーカー侍、せつちゃんのほつぺたを両手でおさえてから抱きかかえた。

まだ日は高いつてのに、びっくりのドレスっぶりやでえ……。

「なあ、あすにゃん。この二人のアレはどういうソレなの？」

「最近この部屋で刹那さんが急に出てきてこのかといチャイチャする現象が起きてるのよ」

「局地的なレス現象が人目を憚らず発生するとか教育に悪い部屋やな」

「いや、それでもアンタの家よりはだいぶマシよ……」

「ああ、別にネギの家に行きたかったらネギが良ければ行ったらいいし泊まってもいいんじゃない？」

「誰がつー!!」

「ちなみに引越しの予定はネギが決めるから詳しい事はネギに聞いて。じゃあね」

「せんせー、またなー」

「あぁっ……このちゃん……」

「アンタらやかましいわー!」

「ししょー!」

「麟の旦那!」

「なんやおどれら。今日から住むとか流石に荷物も運び入れてへんから無理やぞ」

「いえ、そうじゃなくって」

「妹に電話したら来るって言ってやした!俺っちも一度は離れ離れになった妹と再会できるなんて……これも全部旦那のおかげでさあ!」

「アンジェリーナちゃんが日本に来るとき一緒に、ロンドンに研修に行った僕の幼馴染と僕の従兄弟も日本に来る事になったんです。三人とも元気にしてるかなあ!」

「何?アンジェリーナちゃん?」

「俺っちの妹でさあ。何かあったら俺っちにくっついてくるかわいらしいヤツなんすよ」

「下着ドロのアレは怒ってないの?」

「いやいや、そもそも俺っち妖精とはいえオコジョっすよ?人間の下着にや防寒以外の意味はねえし同族は常に全裸だし」

「結果溜まったフラストレーションが全裸よりエロいものを求めさまよう悲しみのセクハラ妖精として生まれ変わったって寸法だ」

「何でソレを僕に言うんですか」

「ともあれ、俺は世界中の妹と妹思いの兄の味方だから最高のシルク生地を使った最高のベッドを用意してやるよ」

「旦那アアアアアアアアアア！」

「しがみつくな。返す」

「うぎゅ」

ひつついてきた力毛をネギのポケットに押し込む。

「じゃあ、また引越す時にでも言えよ。手伝うから」

「何から何まで、ありがとっございます」

「ふっ」

とここで颯爽と転移。

出てきた先はおうちの風呂場。  
ちうたんがいてた。

「誘ってんのか」

「しるわい」



殴られた。

091 世界最速の弟子、家をもらう。(後書き)

主人公以外のオリキャラがレギュラー化しないように気を張ってる豚野郎です。

ましてやカモの妹が人化した拳句ハーレムの仲間入りとかフラグでも何でもなくありえません。

ああ、あと9話で100話になっちまう……。

みんな恥ずかしながら俺に100話用特別企画のアイデアを！  
なるべく面白おかしく！

では、今回もありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4001v/>

---

世界最速の魔法使い

2011年12月10日01時55分発行